

昭和四十六年十二月八日刊行
広島原爆戦災誌 第五巻資料編
広島市

例言

一、本巻は広島市原爆戦災誌全五巻のうち、「第五巻資料編」である。すなわち本論の裏づけとなった多数資料から、特に重要と思われる十三編を収録した。なお、本論に於てその一部を使用したものがあるが、重要な事項が含まれているので、重複をいわず全文をここに掲載した。

一、本巻に収録した資料のうち、本誌編集にあたって提出された体験記・覚書、及び日誌などの一部のものは、活字印刷としたが、その他は、なるべく原形のまま写真によって収録するようにつとめた。

ただし、紙幅の関係から、寸法は原形どおりではない。

一、本巻に収録した資料のうち、(県政)雑記帖は、記録者本人に依頼して、内容の各事項につき、補訂を行い「註」を加えていただき、理解しやすいようにした。

一、本誌編集にあたり、各位から提供された体験記その他関係資料は、本誌刊行後に、それぞれ整備して、広島市が永久に保存するものである。

一、本巻に収録した資料の選択、配列は小堺吉光がおこなった。

一、各巻の監修は、今堀誠二・後藤陽一・四竈一郎がおこなった。

一、各巻の背文字は、広島市長山田節男の揮毫になる。

一、各巻の編集にあたり、資料の貸与、提供など、諸種のご協力を受けた各位に対し、深く感謝の意を表する。

以上

昭和四十六年十二月八日

一、(イ) 広島市永年防空計画…1

(ロ) 昭和十六年度広島市防空計画…99

当時、焼夷弾やTNT爆弾の攻撃に対しては、完璧に近い防空態勢と言われていた軍都広島市の防空計画書である。昭和十六年 広島市発行

二、広島県下に於ける空襲被害状況表…321

広島県警察部新畑十力警部補(当時)により作成されたもので昭和十九年二月二日午前十時十五分ごろ、B29 一機が御調郡原田村山林中に、焼夷弾一二発を投下したのを最初とし、昭和二十年八月十四日午後八時四十分ごろ、B29 一機が、呉市中心に飛来し、宣伝ビラ約二万枚を撒布したことまでを、その被害程度と共に記述した一覧表である。昭和二十二年頃 広島県警察部発行

三、防空日誌…341

昭和二十年一月一日から同年八月十五日までの警戒警報・空襲警報及び解除時刻などを、克明に記録した帳簿で、矢賀警防分団(山田隆夫)に保管されていたものである。当時の連日にわたる頻繁な警報発令状況と警防団の活動を知ることができる。

四、炎のなかに…379

当時・動員学徒として・第二総軍及び中国軍管司令部に出動して被爆した生存者の「原爆で逝った級友の二十五回忌によせて」作られた体験記集で、猛火迫る司令部の地下壕指揮連絡室から、広島全滅の第一報を九州の第十六方面軍(福岡)など、三か所に、電話報告したことなど、貴重な証言が多く、また炸裂下、軍の中枢機関の惨状を如実に伝えている。一九六九年八月六日 旧比治山高女第五期生の会発行

五、被爆者救援活動の手記集(暁部隊)…419

被爆直後の暁部隊の活動記録で、本誌刊行にあたり提供された当時の将兵三十九人の体験記集である。猛火狂う被爆当日、いち早く救援隊として進入した広島市の凄惨な光景が、なまなましく記録されている。

六、(県政)雑記帖…567

被爆直後、豊田郡地方事務局長から広島県人事課長(食糧対策委員)に就任し、県の被爆救援対策・復旧対策などににあたった竹内喜三郎の事務覚書で、八月七日から九月二十一日まで、大混乱時における食糧対策を中心とした県行政の克明な記録である。

七、比治山国民学校迷子収容所・五日市戦災児育成所…633

被爆直後、家や両親を失い、路頭に迷っていた幼少年を収容した記録で、心にしみる保育活動が綴られている。当時、収容所の教師として活躍した斗樹訓導の手記である。

八、広島原子爆弾被害調査報告(気象関係)…687

(付)終戦年の広島地方気象台(北黥記)…723

原子爆弾被害調査委員会(学術研究会議)の行なった気象部門の調査記録で、昭和二十年八月から十二月までに収集した資料に基づいて、取りまとめられた気象関係の報告書である。広島管区気象台の発行

九、原子爆弾に依る電気工作物の被害調査…733

昭和二十年十一月下旬から年末までの間、電気工作物の被害について、実地調査した記録で、原子爆弾の激甚な破壊力が、多くの写真とともに解説されている。中国配電株式会社広島支店の作成。なお、本書は、連合軍総司令部経済科学局工業課電気ガス係長心得ハワード・エヤース砲兵大佐の要請により、昭和二十六年四月二日、英訳して総司令部に提出した。

十、8・10 広島陸軍兵器補給部二於テ新型爆弾二関シ研究会…795

仁科博士一行その他調査団、及び広島市の陸海軍の調査結果に基き、投下爆弾が「原子爆弾」であるという結論を得た研究会に出席し、落下傘付無線装置について陳述した呉海軍工廠電気部無線工場主任大野茂海軍技術中佐のメモ(電気部設計係・見取帳)で、原子爆弾の確認に至る各員の陳述が記録されている。この研究会の結論が大本営に報告されて、終戦の大きな要因となった。なお、大野中佐の陳述内容は、別項に記載されており本誌の第一巻六六ページにその全文が浄書して収録されている。

十一、軍関係災害調査報告文書集…803

被爆当時、呉海軍鎮守府及び中国軍管区司令部の発行した災害調査報告書で、原子爆弾を確認するに至る経緯、及び被爆症状の究明、防護対策などを示した記録である。全文書を実物の写真により掲載したかったが、紙質が粗悪なうえ、タイプ活字の摩滅により写真では判読の難しいものがあり、一部は浄書して活字印刷とした。ここに収録した文献は、広島平和記念資料館が所蔵するもの、或いは、中国管区軍医部・衛生速報(井街譲提供)のように本誌編集に当り、広島市に提供されたもの、及び、個人所有のものを複写または浄書した。

(一) 中野探照灯台広島爆撃目撃状況(呉海軍警備隊)

(二) 八月六日広島空襲被害状況並に対策(第二報呉鎮守府衛生部)

(三) 八月六日広島市空襲戦訓(第三報呉鎮守府衛生部)

- (四) 八月六日広島市空襲戦訓(第四報呉鎮守府衛生部)
- (五) 陸、海軍合同特殊爆弾研究会決定事項(要項撃卒呉鎮守府衛生部)
- (六) 八月六日広島空襲二対スル研究会議事概要(呉工廠)
- (七) 八・六広島市被害状況(中国軍管区司令部)
- (八) 広島市二於ケル原子爆弾二関スル調査(一般調査呉鎮守府衛生部)
- (九) 衛生速報(第二号・第三号・第四号・第五号・第六号・第九号中国軍管区衛生部)

十二、原子爆弾傷研究綴(広島第一陸軍病院)…935

被爆当時、多数の負傷者を救護した広島陸軍病院関係の各軍医が提出した報告書の一部で、ここには広島第一陸軍病院江波分院、及び櫛ヶ浜分院からのものを写真で収録した。なお、紙面が汚損のため、写真に撮れないものは割愛した。また、「傍線」は、原典の複写に、後人が加筆したもの。国立柳井療養所所蔵

- (一) 八月六日広島市戦災二関スル経験並所感(江波分院)
- (二) 原子爆弾症報告(江波分院)
- (三) 原子爆弾症報告(江波分院)
- (四) 原子爆弾傷二就テ(櫛ヶ浜分院)

十三、被爆広島の写真記録者たち…971

未曾有の惨禍の中で、学術調査団の随員として、あるいは個人的に被爆の実情を撮影した人々について、調査できた範囲で、本誌の刊行に際し、川西恒夫が取りまとめたもの。

編集後記…1003

刊行の経過…1007

(一)

秘

○秘

廣島市永年防空計畫

目次

第一編	總則	……七
第二編	防空方針	……九
第三編	防空實施	……九
第一章	防空の實施ノ開始又ハ終止	……九
第二章	防空実施機關	……一〇
第二節	通則	……一〇
第二節	警防隊	……一〇
第三節	特設自衛隊	……一一
第四節	家庭防衛隣保班	……一一
第五節	其ノ他	……一二
第三章	防空監視	……一二
第一節	任務	……一二
第二節	編成任免及服務	……一三
第三節	開始及終止	……一三
第四節	海上防空監視	……一三
第四章	防空通信	……一四
第二節	通則	……一四
第三節	警報通信	……一六
第四節	指揮連絡報通信	……一七
第五章	防空警報	……一七
第六章	燈火管制	……一八
第一節	通則	……二五
第二節	屋外燈類	……二六
第三節	屋内燈類	……二八
第四節	自動車前照燈携帯燈火招類	……三一
第五節	漁業用燈類	……三二
第七章	音響及交通管制並ニ交通整理	……三二
第八章	防護監査及防護警報	……三五
第一節	防護監視	……三五
第二節	防護警報	……三六
第九章	消防	……三七
第一節	通則	……三七
第二節	家庭（船舶）消防処置	……三八
第三節	警察機關及消防隊ノ消防	……三九
第四節	調査	……三九
第十章	防毒	……四一
第一節	通則	……四一
第二節	消防機關	……四一
第三節	一般人ノ措置	……四三
第四節	調査	……四四

第十一章 救護……四四

第一節 通則……四四

第二節 警防隊……四五

第三節 救護所……四六

第四節 特設救護所……四七

第五節 調査……四七

第十二章 退去避難及待避……四八

第一節 通則……四八

第二節 退去及避難……四八

第三節 待避……五一

第十三章 配給……五三

第十四章 工作……五三

第十四章 偽装店……五四

第四編 營造物ノ防護……五五

第五編 設備及資材ノ整備……五五

第一章 總則……五五

第二章 防空監視……五六

第三章 防空通信……五六

第四章 防空警報……五六

第五章 燈火管制……五六

第六章 防護監視……五七

第七章 消防……五八

第八章 防毒及救護……五八

第九章 避難及待避……五九

第十章 其他……五九

別紙

別紙第一號 広島市家庭防衛隣保班組織要領……六一

別紙第二號 漁舟群監視ニ関スル件……六七

別紙第三號 主ナル漁業場調査表……六七

別紙第四號 和文通話表……六八

別紙第五號 西部軍司令官（広島師團長）防空警報伝達系統表……六九

別紙第六號 全 海上……七〇

別紙第七號 防空通信特定各語……七一

別紙第八號 指揮連絡報項末一件様式……七二

別紙第九號 広島地区、呉地区一覽表……七二

別紙第十號 掲燈（吹流）信號燈設置計画表……七四

別紙第十一號 防空警報受領書様式……七四

別紙第十一號ノニ 同……七五

別紙第十二號 日没 日出時刻標準表……七六

別紙第十三號 漁業用燈火類ノ燈火ノ指定告示……七七

別紙第十三號ノニ 漁業用燈火管制参考圖……七八

別紙第十四號 空襲管制実施及訓練ノ時ニ於ケル自動車及自転車ニ用ユル燈火ノ告示……八一

別紙第十五號 防火改修構築区域表……八三

別紙第十五號 附圖……

別紙第十六號 防空救護組織要項……八三

別紙第十七號 防空建築規則抜粋……八六

別紙第十八號 防空壕構築要領……八八

別紙第十九號 要偽装物調査表……九五

第一編 總則

第一條 本計画ハ広島県防空計画ニ準據シ広島市ニ於ケル防空ノ実施並ニ之ニ関シ必要ナル人的要素及資材ノ整備ニ付永年ニ亙ル事項ヲ設定ス

第二條 市長ノ擔當スベキ防空業務左ノ如シ

一 市ノ為ス防空ノ実施ニ必要ナル人員ノ召集。配置、構成、勤務及補充ニ関スル事項

ニ 防空監視哨会ノ設置準備、呼集等ニ関スル事項ニシテ本計画ニ定ムルモノ

三 海上防空ニ関スル事項ニシテ本計画ニ定ムルモノ

四 市長ノ為ス防空ノ実施ニ必要ナル通信ニ関スル事項

五 市内ノ警報伝達ニ関スル事項

六 燈火管制及消防ニ関スル事項ニシテ本計画ニ定ムルモノ

七 防毒、救護、退去、避難及待避ニ関スル事項但シ実施上警察ニ関スルモノヲ除ク

八 配給、工作、及偽装ニ関スル事項

九 市営造物ノ防護ニ関スル事項

十 防空ノ実施ニ関シ必要ナル人的要素設備又ハ資材ニ整備ニ関スル事項

十一 其ノ他知事又ハ市長ニ於テ必要ト認ムル事項

第三條 市長ハ防空計画ノ設定ニ當リテハ必要ナル事項ニ付警察署長ト連絡協議スルト共ニ関係官公衛、関係事業者団体等ト連絡ヲ密ニシ計画ニ遺憾ナキヲ期スルモノトス

第四條 市長ハ毎年度市防空委員會ノ意見ヲ催シ左ノ事項及知事ヨリ特ニ示シタル事項ニ付年度防空計画ヲ設定シ知事ノ認可ヲ受クルモノトス

一 本計画ニ於テ年度毎ニ定ムヘキコトヲ示シタル事項

ニ 知事ヨリ年度毎ニ定ムヘキコトヲ示シタル事項

三 本計画ノ定ムル所ニ依リ難キ事項

四 當該年度ニ整備スヘキ設備又ハ資資ニ関スル事項

五 特ニ當該年度ニ限リ必要ナル事項

六 其ノ他市長ニ於テ必要ナリト認メタル事項

第五條 市長ハ前條ニ依リ防空計画ヲ設定シタルトキハ必要ナル事項ヲ本市警防団及必要部分ハ市民一般ニ指示シ置クモノトス

第六條 市長ノ指定シタル市営造物ノ所屬長ハ所轄警察署長ト協議シ本計画ニ準據シ防空警報ノ受領並ニ伝達、通信連絡燈火官制、消防、其ノ他ノ防護ニ関シ具体的防護計画ヲ作成シ市長ニ報告スルモノトス

第七條 警察署長、市長ト協力シ左ニ掲クルモノノ管理者又ハ之ニ準スヘキ者ニ對シ広島県防空計画ニ準據シ防空計画ヲ作成セシメ警察署長ヲ經由シ知事ニ報告セシムルモノトス但シ国ニ於テ管理スルモノ及特別防空計画設定者ヲ除ク

一 百名以上ノ従業員ヲ有スル工場、事業場、會社、銀行、商店（百貨店ヲ除ク）

二 病床五十以上ヲ有スル病院

三 定員五百名以上ノ興行場及集會場

四 五百名以上ノ学生、生徒、児童ヲ有スル学校

五 其ノ他前各號ニ準スルモノ

第二編 防空本針

第八條 広島県ノ防空方針ハ沿海州及太平洋方面ヨリスル敵ノ空襲ニ對シ主トシテ瀬戸内海ノ諸要地特ニ広島、呉、及其ノ附近ヲ掩護スルニ在ツモノトス

第九條 前條ノ方針ニ基ク本市ノ防空事項ハ防空全般特ニ防護ニ重点ヲ置クモノナルモ緩急順序概ネ左ノ如シ

一 消防、救護

ニ 工作

三 防空監視、情報通信

四 防空警報ノ伝達、燈火管制

五 防毒、避難（待避）、配給

第三編 防空実施

第一章 防空ノ実施ニ開始又ハ終止

第十條 市長知事ヨリ防空実施ノ開始命令ヲ受ケタルトキハ監視及之ニ伴フ通信ニ関シテハ直ニ之ヲ実施シ其ノ他ノ事項ニ関シテハ何時ニテモ防空警報ニ即応シ得ル如ク其ノ準備ヲ為シ適宜之ヲ実施シ防空警報ヲ受ケタルトキハ之ニ応シテ通信、警報伝達、燈火管制ヲ実施シ且防護準備ヲ補強シ敵機ノ空襲ヲ受ケタルトキ、全力ヲ挙ケテ防空活動ヲ行フモノトス

第十一條 市長知事ヨリ防空実施ノ開始又ハ終止ノ命令ヲ文書又文、電話ニ依リ受領シタルトキハ直ニ文書、口頭、又ハ電話等ニ依リ町内会長ヲ經テ管内一般ニ伝達スルモノトス但シ揭示其ノ他ノ方法ニ依リテハ公示セス

第二章 防空実施機関

第一節 通則

第十二條 市長ハ防空実施ノ際當該業務ヲ担任シ本市役所ニ防空本部ヲ設置スルモノトス但シ防空実施中状況ニ依リ之ヲ設置セサルコトアルベシ。

本部ノ組織、編成、業務分掌ハ年度防空計画ニ之ヲ定ム

第十三條 警察署長ハ市長ト協力シ本計画第七條ニ掲クル施設ノ管理者又ハ之ニ準スヘキ者ニ對シ防空ノ実施ニ従事セシムル為且、自衛防護ノ目的ヲ以テ特設自衛隊ヲ組織セシムルモノトス

第十四條 市長ハ警察署長ト協力シ一般市民ヲシテ自家防衛及隣保共助ノ目的ヲ以テ防空ノ実施ニ従事セシムル家庭防衛班ヲ組織セシムルモノトス

第二節 警防団

第十五條 市長ハ警防団ノ組織、編成及担任業務ヲ年度防空計画ニ之ヲ定ムルモノトス

第十六條 警防団ノ出勤計画ニ定ムヘキ事項ハ概ネ左ノ如シ

一 団員ノ召集方法

二 命令ノ伝達及通信連絡方法

三 団員ノ配置分担、交替及補勤

四 設備資材ノ配備

五 其ノ他配備及行動ニ必要ナル事項

前項ノ出勤計画ニ際シテハ特ニ長期ニ堪ユル如ク交代制ヲ報リ空襲警報発令中ハ全員部署ニ着ク如ク定ムルモノトス

第十七條 警防団ハ警察部長又ハ警察署長ノ指揮ニ従ヒ行動ス但シ緊急已ムヲ得サル場合ニ於テハ市長又ハ団長ノ指揮ニ従ヒ行動スルモノトス

市長ハ其ノ担当スル防空業務ニ付警察署長ニ協議シ警防団ニ指示スルコトヲ得ルモノトス

第三節 特設自衛団

第十八條 本計画第十三條ニ依ル特設自衛団ハ工場、鉱山、事業場、会社、銀行、商店、病院與行場、集会場、学校及之ニ準スルモノノ名称ヲ冠シ自衛団ト称スルモノトス

第十九條 特設自衛団ハ平時ノ消防並ニ防空ニ必要ナル設備資材ヲ整備スルモノトス

第二十條 市長及警察署長ハ其ノ年度防空計画ニ特設自衛団ノ名称、組織、編成並ニ設備資材等ヲ明カルニスルモノトス

第四節 家庭防衛隣保班

第二十一條 市長及警察署長ハ協力シ防空ノ実施ニ従事セシムル為町内会隣組ヲ以テ家庭防衛隣保班ヲ組織セシムルモノトス（別紙第一號家庭防衛隣保班要領参照）

第二十二條 隣保班ハ隣保共助ノ精神ニ基キ空襲ニ因リ生スヘキ危害ヲ防止シ又ハ之ニ因ル被害ヲ軽減スルタメ応急的ニ自家防衛ヲ為スト共ニ班内ニ於ケル警報伝達、燈火管制、消防、其ノ他ノ防護ノ共助ヲ任務トシ状況ニ依リ隣保班間ニ於ケル消防其ノ他ノ防護ニ付共助スルモノトス

前項ノ隣保班ノ任務ハ特ニ防火ニ重点ヲ置クモノトス

第二十三條 隣保班ハ隣保協力ニ便ナル十戸内外（海上生活者ニ在リテハ十隻内外）ヲ以テシ班長ハ隣組長ヲ充テ班長事故アルトキハ月番之ヲ代理シ池ニ後員ヲ設ケサルモノトス

第二十四條 隣保班ト警察署、市、警防団トノ連絡機関ハ町内会長又ハ隣組長ヲ以テ之ニ充ツ

第二十五條 隣保班ノ育成、主トシテ市長ノ行動ノ指揮統制ハ警察署長及其ノ指揮ニ従ヒ警防団長ニ之ニ任スルモノトス但シ市長ハ其ノ担当スル防空業務ニ付警察署長ト協議シ指示スルコトヲ得

第二十六條 市長ハ年度防空計画ニ隣保班ノ組織、編成及資材ヲ明カニシ置クモノトス

第五節 其ノ他

第二十七條 市長及警察署長ハ関係業者ト協力シ防空ノ実施中使用スベキ各種自動車（自動自転車ヲ含ム）ノ動員系統車輛数等ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第三章 防空監視

第一節 任務

第二十八條 防空監視ノ主要ナル任務ハ航空機又航空機ヲ搭載シ若ハ其ノ搭載ノ疑ヒアル敵艦艇（敵ノ疑ヒアルモノヲ含ム）ヲ監視シ之ニ関シ得タル情報ヲ確實且迅速ニ報告スルニ在ルモノトス

第二節 編成任免及服装

第二十九條 防空監視署消長ハ概ネ在郷軍人タル資格ヲ有スル者又ハ在郷軍人タル資格ヲ有シタル者ヨリ防空監視消員ハ青年学校生徒、青年団員等ニシテ身体強健、視力及聴力健全ナル者ヨリ之ヲ任命シ監視隊本部員ハ思想現実ニシテ通信ノ技術ヲ有スル者ヨリ之ヲ任命スルモノトス

第三〇條 市長、在郷軍人分会長、青年学校長、青年團長ハ防空監視消員ノ詮衡、呼集配置及防空監視消ノ建築等ニ関シ警察署長ノ要求ニ応シ之ニ協力援助スルモノトス

第三節 開始及終止

第三十一條 市長、警察署長ヨリ防空監視隊員ノ呼集配置ニ関シ委嘱ヲ受ケタルトキハ年度防空計画ニ定ムル時間内ニ配置ヲ完了シ又ハ応急監視ノ処置ヲ講シタルトキノ直ニ其ノ旨警察署長ニ報告スルモノトス

第三十二條 市長ハ警察署長ノ行フ防空監視隊員ノ服装点検及訓授ニ立会スルモノトス

第三十三條 市長ハ防空監視隊消員名簿ヲ備ヘ異動ヲ明カニスルト共ニ呼集位呼集方法ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第四節 海上防空監視

第三十四條 漁業見積所ノ見張従事者ハ防空監視ノ任務ニ當ニ適當且速カナル方法ニ依リ漁業（水産）組合又ハ最寄ノ警防団若ハ警察官速報セシムルモノトス

第三十五條 警防団及漁業（水産）組合前條ノ情報ヲ受ケタルトキ、最寄ノ警察官署ニ通報スルモノトス

第三十六條 航行中ノ一般船舶ハ防空監視ニ任シ其ノ情報ヲ最寄海岸局、漁業無線局ヲ經テ呉鎮守府ニ報告スルモノトス

第三十七條 集団漁労ニ従事スル漁舟ハ一群ノ漁舟ニ對シ群長船及當番舟（別紙第二號参照）ヲ定メ輪番對空監視、情報通信、（警報伝達ヲ含む）ノ任務ニ従事シ情報ハ漁業（水産）組合又ハ最寄ノ警防分団若ハ警察官署ニ報告スルモノトス

第三十八條 警察署長ハ市長、漁業（水産）組合長ト協力シ集団漁労ニ従事スル漁舟及其ノ他ノ魚舟ノ調査ヲ毎年十二月一日現在ニテ之ヲ行フト共ニ群長船及當番舟ノ状況及専務監視員ヲ毎年十二月二十日迄ニ知事ニ報告スルモノトス（主ナル漁業場調査ハ別紙第三號参照）

警察署長及市長ハ漁業（水産）組合長ト協力シ前條ノ漁舟ト陸上トノ情報通信ニ関シ其ノ方法系統及実施ノ責任者ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第三十九條 群長船及當番舟ハ標識、眼鏡「ラチオ」「ノロシ」花火、手廻「サイレン」等ヲ準備シ出漁スルモノトス

第四章 防空通信

第一節 通則

第四十條 防空通信トハ防空ノ実施ニ直接必要ナル通信ニシテ関係陸海軍官憲、関係官公署及之等ノ命ヲ受ケ防空ノ実施ニ従事スル若相互間ニ発受スルモノヲ謂フ

第四十一條 防空通信ヲ分チ左ノ三種トス

一 警報

二 情報

三 指揮連絡報

第四十二條 防空通信ハ通信電話（電報）ニ依ル場合ハ防空通信規則（昭和十三年一月廿八日通信省令第九號別紙第六號参照）及防空通信取扱規程（昭和十三年一月廿九日公達第百二十五號）警察電話ニ依ル場合ハ広島県警察電話防空通信取扱規程（昭和十三年二月十五日訓防第一〇八號別紙第七號参照）鉄道電話又ハ其ノ他ノ電話ニ依ル場合ハ其ノ定ムル所ニ依ルモノトス。

第四十三條 防空通信ノ順位ハ左ニ依ルモノトス

一 警報ハ最先順位ヲ以テ取扱フコト

二 情報ハ警報ニ次ク先順位ヲ以テ取扱フコト

三 指揮連絡報ハ通信電話ニアリテハ至急通話（電報ノ場合ハ至急官報）ト同一順位ヲ以テ之ヲ取扱ヒ警察電話ニアリテハ警察上特に緊急ヲ要スル通信ヲ除クノ外一般通信ニ優先シテ取扱フコト

第四十四條 防空通話ノ請求ニ方リテハ左ノ如ケ申込ヲ為スモノトス（訓練ノ場合ハ「訓練」ナル語ヲ冠ス）

一 優先取扱ヲ受クヘキ通信電話ノ場合

指導連絡報 中局五三一五番

第四十五條 年度防空計画ニ定メタル主系統及副系統ノ電話使用不能ノ場合ニ於チ指揮連絡ヲ為サントスルトキハ電令ニ依ルモノトス

第四十六條 防空通信ノ通話ノ際意味通セサルトキ、別紙第四號和文通話表ニ依ルモノトス

第四十七條 市長、特別警報受領者（官公衛、学校、会江工場、其ノ他ニシテ通信電話ニ依リ直接警報ノ伝達ヲ受クルモノヲ謂フ）ハ防空実施ノ開始命令アリタルトキハ晝夜ニネ拘電話受発ノ責任者ヲ配置スルモノトス

第四十八條 無線電信ノ有セサル船舶（概ネ汽艇以上トシ電燈設備ヲ有スルモノヲ基準トス）ニハ「ラヂオ」受信機ヲ整備シ當直一名ヲ在船セシムルモノトス

第四十九條 防空通信施設ノ破壊又ハ故障ニ際シテハ概ネ左ノ配置ヲ講スルモノトス。

- 一 第二次第三次通信連絡線ノ使用
- ニ 他ノ通信線ノ利用
- 三 鳩通信、自動車、伝令ノ使用
- 四 祖覚通信ノ使用
- 五 工作修理ノ派遣
- 六 警察署長ニ援助協力
- 七 警察署又ハ隣接市町村ト連絡

第二節 警報通信

第五十條 警報通信トハ西部軍司令官又ハ広島師団長並ニ呉鎮守府司令長官又ハ其ノ指定シタル者発シタル防空警報ニ市内全般ニ伝達スル通信ヲ謂フ

第五十一條 西部軍司令官又ハ広島師団長ノ発令スル防空警報ノ伝達系統ハ別紙第五號ノ通トス

第五十二條 呉鎮守府司令長官ノ発令スル防空警報ノ伝達系統ハ別紙第六號ノ通トス

第五十三條 前二條ノ防空警報発令伝達ニ際シ電話使用不能ノ場合ニ於テハ別紙第七號ノ防空通信特定略語ニ依ルコトアルベシ

第五十四條 防空警報ノ発令ハ概ネ左ノ通トス

- 一 警報地区名
- ニ 警報ノ種類
- 三 發令官

第五十五條 市長、特別警報受領者、指定警報受領者ニ對スル警報伝達系統ハ年度防空計画ニ之ヲ之ヲ定ム

第三節 情報通信

第五十六條 情報トハ防空監視ノ事務ニ従事スル昔ヨリ航空機ヲ搭載シ若ハ其ノ搭載ノ疑ヒアル敵艦艇（敵ノ疑ヒアルモノヲ含ム）ノ行動ヲ報告スル通信ヲ謂フ

第四節 指揮連絡報通信

第五十七條 指揮連絡報トハ防空機関相互間ニ於ケル防空ノ実施上必要ナル燈火官制、防空監視、消防、消毒、救護等ニ関シ指揮又ハ之カ借置報告等ニシテ緊急ヲ毒スル通信ヲ謂フ

第五十八條 防空通信規則ニ依リ無料取扱ヲ受クヘキ指揮連絡報ノ区間ハ左ノ通トス但シ之カ電話番号ハ年度防空計画ニ之ヲ定ム

- 一 広島県庁ト市役所間
- ニ 警察署ト市役所間

第五十九條 市長ハ防空機関、指揮連絡報ヲ行ヒタルトキハ別紙第八號ノ様式ニ依之カ願末を明カスルモノトス

第五章 防空警報

第六十條 防空警報ハ警戒警報、警戒警報解除、空襲警報、空襲警報解除ニ分ケ之カ警報發令官及警報地区名並ニ其ノ区域ハ左ノ如シ

發令官	警報地區名	區 域
西部軍司令官	西部軍艦區全地區	海軍擔任區域ヲ除ク西部軍管區ノ全區域
	西中国地區	海軍擔任區域ヲ除ク広島師團管下ノ全區域
	広島地區	広島縣一圓但シ呉海軍擔任區域タル呉地区ヲ除ク
呉鎮守府司令長官	呉地區	海軍擔任區域（但シ徳山地區ト同時ニ發令セラルルコトアリ）
	内海西部海面	広島縣ノ属スル海面
	瀬戸内海	他縣ニ属スル内海頭部海面ト内海西部海面トヲ合シタルモノ
	呉鎮守府海上區	呉鎮守府管下ノ全海面
	呉鎮陸上擔任区域及海上區	呉鎮守府管下ノ陸海全地區

備考 一 西中國地區 広島地區ニ對シテハ広島縣師團長ヨリ空襲警報ヲ發令セラルルコトアリ

二 広島地區 呉地區ニ付テハ別紙第九號参照

第六十一條 市民ニ對スル防空警報ノ傳達ハ迅速確實ニ之ヲ徹底スルヲ主眼トシテ一斉操作ヲ為シ得ル警報器ノ充實ヲ圖ルト共ニ海上ニ對シテハ其ノ重要性ニ鑑ミ掲燈（吹流）信號燈ヲ整備スル如ク措置スルモノトス

第六十二條 防空警報ノ傳達區分及責任者ハ左ノ各號ニ依ル

- 一 市長

イ 通信當局ヨリ通信デンワニ依リ警報ヲ受領シタルトキハ直チニ本市設置ノ「サイレン」又ハ電話、傳令等ニ依リ町内會長又ハ警防分團ヲ經テ市内一般ニ傳達スルモノトス

ロ 海上ニ於ケル警防傳達ハ警察署長ト協力 之ヲ傳達スルモノトス

ハ 警報ノ受領及傳達ノ擔當責任者ヲ定メ置クモノトス

二 特別警報受領者

イ 通信電話又ハ副系ニ依リ警報ヲ受領シタルトキハ 各其ノ定ムル所ニ依リ部内及一般ニ傳達スルモノトス

ロ 警報ノ受領及傳達ノ責任者ヲ定メ置クモノトス

第六十三條 空襲警報解除セラレタルトキハ警戒警報ノ体勢ニ移ルモノトス

第六十四條 本市及特別警報受領者ニ對スル警報傳達系統ノ主系統、副々系統ハ年度防空計画ニ之ヲ定ム

第六十五條 各警報受領者ハ其ノ計画セル各方面ヨリ防空警報ノ受領ニ遲速アルトキハ最先ニ受領セルモノニ依リ所定ノ傳達ヲ爲スモノトス但シ警報解除ノ傳達ハ主系統ヨリ受領ヲ持チテ之ヲ行フモノトスル

前項ノ警報ノ受領者主系統又ハ副系統ニ依リ受領シタル警報ニシテ相違アル場合ハ警察署長ト協議シテ適當ナル處置ヲ講スルモノトス

第六十六條 市長ハ市内全般ニ對スル警戒警報及空襲警報ノ傳達所要時間ヲ年度防空計画ニ定メ之ヲ短縮スル如ク計画スルト共ニ特ニ島嶼部漁舟航路標識（通信省並ニ海軍省管理ノモノヲ除ク）ニ對スル警報傳達ノ方法及之カ責任者ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス（航路標識ハ廣島縣永年防空計画別紙第十四號参照）

第六十七條 防空警報ノ信號ハ左ニ依ルモノトス

區分	「サイレン」又ハ汽笛	警鐘	電燈点滅	煙火	掲燈（吹流）信號	其他
警戒警報	—	—	—	—	夜間赤燈三個連掲	口頭又揭示
警戒警報解除	—	—	—	—	夜間消燈	
空襲警報	三秒ヲ間シ六秒宛十回（急発休止ノ装置アル「サイレン」） ----- 断続吹鳴十回（急発休止ノ装置ナキ「サイレン」）	○ ○—○—○—○ 一点ト四点ト班打繰返十回	数秒ヲ間シ 点滅五回以上	打上 四爆音	晝間ハ吹流一旗掲揚 夜間ハ赤燈三個二分間点滅行ヒタル後消燈	口頭又揭示
空襲警報解除		○ ○—○ ○ ○—○ 一点ト二点ト班打繰返十回	行ハス	—	晝間ハ吹流降下 夜間ハ赤燈三個点燈	口頭又揭示
備考	一 警戒警報ノ發令ナク直ニ空襲警報ヲ發令セラレルコトアリ 二 離島又ハ交通不便ノ土地ヲ除クノ外ハ「ラヂオ」ハ概ネ副受信用トシテ設置スルコト 三 訓練ノ場合ニ於ケル防空警報ノ呼稱ハ「訓練」ノ語ヲ冠スルコト 四 訓練ノ場合ニ於ケル掲燈信號ノ最下端赤色信號燈ノ下部ニ白色信號燈ヲ一個ヲ附加シ点滅信號ハ警報ニ應シ赤色信號ト同様ニ行フコト					

第六十八條 市長ハ警察署長及「サイレン」（汽笛ヲ含ム以下同シ）管理者ト協議シ管理者ニ對スル警報傳達方法、吹鳴責任者ヲ年度防空計画ニ定ムルモノトス

第六十九條 市長ハ設置セル「サイレン」ノ無響到達訓練セサル範圍又ハ「サイレン」ノ使用不能ノ場合ニ於テハ手廻「サイレン」ニ依リ傳達スル順路又ハ吹鳴場所並ニ防空警報ノ傳達用ニ使用スル警鐘ノ位置管理者、警報ノ傳達方法及打鐘責任者ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十條 市長ハ電燈点滅可能區域ヲ調査シ之ヲ年度防空計畫ニ定メ一般ニ周知セシメ置クモノトス

第七十一條 市長ハ警察署長ト協議シ燈火打上場所ニ使用スル筒、煙火ノ保管場所、打上責任者及之ニ對スル警報傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十二條 掲燈（吹流）信號ハ別紙第十號掲燈（吹流）信號燈計畫表ニ市長、警察署長ト協議シ之カ位置ヲ選定シ左ニ依リ施設スルモノトス

- 一 信號燈ハ等間隔ヲ以テ垂直ニ配置ス
- 二 燈火ノ間隔ハ三米ヲ標準トス
- 三 信號燈ノ高サハ施設地ノ状況ニ依リヘキモノナルモ概ネ最下端ノモノヲ地上又ハ施設場所ヨリ三米以上トス
- 四 燈火ハ上空ニ對シ光源ヨリ直接發スル射光カ十五度以上ノ上空ニ向カハサルコト
- 五 電球ノ大サハ一〇〇ワツト程度ヲ標準トス

前項ニ基ク設計參考圖ハ廣島縣永年計畫別紙第二圖ノ通トス

第七十三條 掲燈（吹流）信號燈ハ左ノ事項ニ付注意スルモノトス

- 一 信號燈ノ設置位置ハ海上ヨリ見易キ箇所ヲ選フコト
- 二 警戒警報解除サレタル場合カ空襲警報未ダ解除サレザル場合ト誤解サルル虞アルヲ以テ警戒警報解除ニ際シ赤色燈ノ消燈ハ附近陸上ノ燈火ノ概ネ点燈ヲ了シタル後行フコト
- 三 信號燈ハ上空ヨリノ發見ヲ困難ナラシムル為一箇所ニ多数集中ヲ適當ナル間隔ヲ置き設置スルコト

第七十四條 市長ハ掲燈（吹流）信號燈ノ責任者及之ニ對スル警報傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十五條 市長ハ警察署長ト協議シ警報傳達ノ困難ナル地域又ハ海上ニ對シテハ警戒警報發令アリタルトキハ（空襲警報解除アリタルトキ亦同シ）ヲ掲出シ警報傳達ノ万全ヲ期スモノトス

前項ノ規定ハ漁場見張ニ従事中防空警報ノ發令アリタルトキニ之ヲ適用ス但シ之カ掲出責任者ハ所属漁業（水産）組合長トス

市長ハ前二項ノ提出場所提出責任者及之ニ對スル警報傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十六條 口頭又ハ揭示ニ以テ防空警報ヲ傳達スル場合ハ左ニ依ルモノトス

一 警報地区名及警報ノ種類

二 夜間口頭ヲ以テ傳達スル場合空襲警報解除ノ際ハ「今ヨリ警戒管制」ナル語ヲ附加ス

第七十七條 市長ハ防空警報ヲ傳達スルニ際シ口頭ニ依ル場合ハ擔任區域順路及従事人員ヲ揭示ニ依ル場合ハ揭示場所及揭示責任者ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第七十八條 市長ハ防空警報副受信ノ目的ヲ以テ「ラヂオ」ヲ聴取スル箇所ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス但シ離島又交通不便ノ土地ニシテ主受信トスルノ必要アル箇所ハ警察署長ト協議シ副系統ト共ニ之ヲ定ムルモノトス

第七十九條 放送局ノ刑法放送ハ左ノ要領ニヨリ實施スルモノトス（訓練ノ場合ニハ警報ノ種類ノ前ニ「訓練」ナル語ヲ附ス）

警報、警戒、警報（三回）

何々司令（長）官（廣島縣團長）發令只今何々地區ニ對シ警戒（空襲）警報（解除）カ發令サレマシタ（二回） 夜間空襲警報解除ヲ傳達スル場合ニ在リテハ「今ヨリ警戒管制」ナル語ヲ附加スルモノトス

第八十條 各汽船會社（支店、代理店、出張所ヲ含ム）ハ防空警報ノ發令中ノ區域ニ入ル豫定ノ船舶ニ對シテハ其ノ旨傳達スルモノトス

第八十一條 市長ハ警察署長ト協力シ前條ノ汽船會社ヲ調査シ之ニ對スル防空計畫ノ傳達方法ヲ年度防空計畫ニ定メ且全會社ヲシテ防空警報ノ發令又ハ解除ノ傳達責任者及傳達方法ヲ定メシテ所属船舶名ヲ適當ニ定メシメ附属船舶名ヲ適當ナル場所ニ明示セシメ置クモノトス

第八十二條 第三十七條所定ノ群長船掲燈（吹流）信號之ハ陸上ヨリ第七十五條ノ方法ニ依リ若ハ「ラヂオ」等ニ依リ防空警報ヲ受領シタルトキハ當番舟ニ傳達セシムルモノトス

當番舟前項ノ方法ニ依リ防空警報ヲ受領シタルトキ亦同シ

第八十三條 集團魚労ニ従事セサル漁舟ハ掲燈（吹流）信號ノ手旗又ハ「ラヂオ」等ニ依リ防空警報ヲ受領スルモノトス

第八十四條 群長船（當番舟）又ハ掲燈（吹流）信號ニ依リ防空警報ヲ受領シ得ザル水面ニ出漁シ且漁舟群ニ加入シ得サル漁舟ハ「ラヂオ」受信器ヲ備ヘ防空警報ヲ受領スルモノトス

第八十五條 本計畫ニ依リ防空警報ヲ受領スルモノハ警報受領（傳達）責任者ヲ定メ別紙第十一號ニ依リ防空警報ノ受領ヲ明カニスルモノトス

第六章 燈火管制

第一節 通則

第八十六條 燈火管制ハ準備管制（燈火管制規則第四條ノ規定ニ基ク燈火管制）警戒管制及空襲管制ニ分チ日没ヨリ日出迄ノ間之ヲ行フモノトス之カ標準ハ別紙第十二號ノ通トス

第八十七條 準備管制ハ國民ノ日常生活上ノ必要比較の少キモノ及防空警報ニ應シ迅速ニ處置シ得サル一般屋外燈（廣告、看板裝飾燈類、門軒燈類、特別屋外燈類）ヲ秘匿シ都市ノ暈光ヲ減ズルト共ニ警戒管制ヘノ移行ヲ速クナラシムルニ在リモノトス

前項ノ準備管制ハ知事之ガ燈火ヲ指定シ期間ヲ定ムルモノトス

第八十八條 警戒管制ハ敵機來襲ノ虞アル場合行フモノニシテ暈光ヲ消滅シ敵機ニ對シ航行上ノ目標ヲ與ヘズ且空襲管制ヘノ移行ヲ容易ナラシムルニ在ルモノトス

警戒管制ハ空襲判断及地理的關係等ニ依リ其ノ秘匿程度ヲ甲乙ニ分ツ

第八十九條 空襲管制、敵機來襲ノ危険アル場合行フモノニシテ敵機ニ對シ航行上ノ目標及攻撃目標ノ認知並ニ攻撃實施ヲ困難ナラシムルニ在ルモノトス

第九十條 警戒管制及空襲管制ハ防空警報ノ發令ニ基キ一斉ニ若ハ別ニ定ムル警戒地域（第六十條參照）ニ之ヲ實施スルモノトス

第九十一條 沿岸水域（陸岸ヨリ資格通信可能範圍トシ距岸概不三浬ヲ標準）ノ燈火管制ハ警報發令官ノ如何ニ關ラズ最モ速カニ到達セル警報ニ依リ之ヲ為シ解除ノ遅キ方ニ依ルモノトス

第九十二條 速ニ空襲管制ヲ行フコト困難ナル場合並ニ空襲警報ノ受領困難又ハ著シク遲延スル場合ニハ燈火ハ警戒管制ト氣ヨリ豫メ空襲警報ノ處置ヲ為シ置クモノトス但シ之ガ為燈火管制施設及警報傳達施設ヲ忽セラセサルモノトス

第九十三條 知事ハ空襲管制時ニ於テ情況ニ依リ陸海軍並ニ通信局及電気事業者ト協議ノ上縣下一斉ニ若ハ地域ヲ指定シ停電セシスルコトアルモノトス

第二節 屋外燈類

第九十四條 警察署長ハ市長ト協力シ標識燈類中重要ナルモノニ對シテハ電源停止ノ場合ニ備ヘ豫備光源ヲ計畫シ置クモノトス

第九十五條 標識燈ノ標識記號ハ左ノ通トス

種 類	記號	種 類	記號
火災報知機燈	火	消防官署標識燈	Y
非常報知機燈	非	消火栓標識燈	*
避難所防護室標識燈	ヒ	警防團標識燈	★
救護所標識燈	+	障礙注意燈	赤色
警察官署標識燈	示		

第九十六條 交通保安上必要ナル箇所ニハ警戒管制時街路燈類ニ代用スル門軒燈ヲ残置スルモノトス

第九十七條 残地區ノ設備ニ付テハ左ノ事項ニ留意スルモノトス

- 一 一定地域内ノ残地燈ヲ統一ノ二管制ヲ行フ設置ナキモノハ各別ニ適當ナル黙滅裝置（防水型プールのスイッチ等）ヲ附スルコト
- 二 遮光具ハ内面白色ニシテ大ナルモノヲ有利トシ取付ケニ當リテハ路面ヲ成ヘク廣ク有効ニ照明スル為幅員大ナル箇所ニハ長キ枕木又ハ張線等ニ燈器ヲ懸吊スルコト

第九十八條 警戒管製乙程度又ハ甲程度ノ場合ニ於ケル残置燈ノ燈火ノ間隔又ハ燈器ノ高サ等ニ付テハ左ノ事項ヲ参照整備スルモノトス

- 一 警戒管製乙程度ノ場合街路ノ幅員ト残置シ得ル燈火ノ間隔トノ關係

路幅米(A)		3	45	5	6	9	10	11	15	18	20	22	25	30	35	36	40	44	73
街路燈ノ 最小(B) 米間隔	三燭光	67	45	40	33	22	20	18	13	11	10	9	8	67	57	55	50	45	27
	八燭光	178	118	107	89	59	53	49	36	30	27	24	21	18	15	15	13	12	7
	一六燭光	355	237	214	178	118	107	97	71	59	53	49	43	36	30	30	27	24	15

- 二 警戒管制甲ノ場合ニ残置スル街路燈ノ光源ト燈器ノ高サトノ關係

電燈燭光数	一燭	二燭	五燭	八燭	一〇燭
電燈ノ高サ	2.6 米	3.6 米	5.8 米	7.3 米	8.2 米

備考 燈器ニ依ル光ノ反射ハナキモノトス

第九十九條 本市内ノ街路ノ燈類管制ハ一定地域内ノモノヲ統一ノ二行フ如ク整備計畫スルモノニシテ之カ設備ナキモノハ個々ノ燈火ニ付管制方法管制責任者ヲ定ムルモノトス

警戒管制乙ノ地域ニ於テ統一ノ二減光又ハ消燈シ得ル街路燈類ハ燈火管制規則第五條第二號及第十條ノ規定ニ依リ遮光ノ省略又ハ緩和スルコトヲ得

- 一 三燭光以下ニ減光シタル場合遮光ヲ省略スルコトヲ得
- 二 三燭光以下ニセル場合ハ光源ヨリ直接發スル射光ガ水平以上ニ向ハサル程度迄遮光条件ヲ緩和スルコトヲ得

第百條 交通標識燈中障礙注意燈ハ管制下ニ於ケル障害ヲ防止スル為必要ナル燈火ナルヲ以テ必要ナル位置ニハ必ず設置スルモノトス

第三節 屋内燈類

第百一條 一般住宅ニ在リテハ生ヘク適當ナル方法ヲ講シ日常生活上特ニ必要ナル室ハ之ヲ隱蔽スルモノトス

第百二條 左ノ如キ場合ニ於テハ成ヘク適當ナル隱蔽施設ヲ整備セシムルモノトス

- 一 業務上高照度ヲ必要トスルモノ
- 二 空襲管制下ニ於テ特ニ作業ノ繼續ヲ必要トスルモノ
- 三 速カニ作業中止ノ困難ナルモノ又ハ消燈ヲ不利トスルモノ

第百三條 隱蔽ヲ行フニ當リテハ左ノ事項ニ付留意スルモノトス

- 一 既設ノ扉、雨戸ノ類ヲ成ルヘク利用スルコト

但シ節穴、割れ目、合せ目等ヨリノ漏光ナカラシムル様十分注意スルコト

- 二 開口部ハ之ヨリ多少大ナル材料ヲ用ヒ隱蔽スルコト

- 三 出入口ハ前號ニ依ル外二重ニ隱蔽設備ヲ為シ出入ニ際シ光ノ漏レサル用留意スルコト

- 四 換氣通風ニ留意スルコト

第百四條 隱蔽材料ハ光源ノ光度ニ應シ成ヘク光ノ透過率ノ小ナルモノヲ使用スルコトヲ要スルモノトス（左表参照）

工場等ニ於テハ火氣ノ危険アル箇所ニハ金属板ノ如キ耐火性ノモノヲ又ハ破損ヲ受ケ易キ箇所ニハ簾、木版、木綿、等ヲ使用スルヲ適當トスルモノトス
尚隱蔽材料ハ成ルヘク對価處理シタルモノヲ用ユルヲ可トス

隱蔽材料		所要重枚数	一枚透過率
種別	名 称		
金属木板類	金属板、木板	1	0
布類	黒洋繻子、両面ゴム引布、黒帆、木綿	1	0
	黒ガス、毛繻子	2	0.0002
	人絹黒繻子	2	0.0003
	黒繻子	2	0.0005
	黒新モス、黒天竺木綿	4	0.005
紙類	馬糞紙、黒ラシヤ紙	1	0
	両面黒塗新聞紙	2	0.0001

	両面刷新新聞紙	5	0.14
--	---------	---	------

備考 本表ハ大体ノ標準ヲ示シタルモノニ過キス

第百五條 普通屋内燈ノ反射光ニ對シテハ別段ノ制限ナキモ鏡面等ニ反射シ屋外ニ強キ光ノ漏ルルコトナキ様注意スルモノトス

第百六條 遮光具ニ付テハ左ノ事項ニ留意スルモノトス

一 遮光具ノ材料ハ透過率ノ可及的少ナルヲ可トスルモ大体ノ標準ハ○.○○三以下即チ紙ナラバ両面印刷新聞紙三枚ヲ重ネ合セタル程度又ハ布ナラバ黒繻子一枚、黒木綿又ハ黒新モス二枚重ネ合シタル程度以上タルコト

二 遮光具ノ材料ニハ成ヘク耐火性ノモノ又ハ耐火處理シタルモノヲ用ユルヲ可トスルコト セルロイドノ如ク燃エ易キ材料ノモノ密閉型ノモノ或ハ極メテ小型ノモノ等ハ火災ノ危険アルヲ以テ不適當ナルコト

三 遮光具ノ内面ハ白色、銀色等ノ如ク反射率ノ良好ナルモノガ適當ナルコト

四 使用ニ當リテ遮光條件ニ反セザル限り必要ナル範囲ヲ廣ク照明スル様燈具ノ位置及深サヲ加減スルコト

第百七條 減光且ツ遮光ノ廣サト許容シ得ル電燈ノ燭数及最大光度トノ關係ヲ示セバ左ノ如シ

※	屋ノ廣サ		台数	1	2	3	4.5	6	8	10	12
			平方米	1.5	3	4.5	6.75	9	12	15	18
乙	(イ)	50	5	10	15	22.5	30	40	50	(60)	
	(ロ)	5	0.5	1	1.5	2.3	3	4	5	(6)	
甲	2		0.25	0.5	0.75	1.1	1.5	2	(2.5)	(3)	

※警戒管制別 燈ノ最大燭光数

〔備考〕 標柱括弧セルハ許容量最大燭光ヲ超過スルヲ以テ二燈以上ヲ使用スベキモノトス

例ヘバ乙(イ)ノ場合五十燭光ト十燭光又ハ三十燭光二燈等又乙(ロ)ノ場合五燭光ト一燭光等

第四節 自動車前照燈携帯燈火焰類

第百八條 自動車前照燈ノ減光方法ヲ示セバ概ネ左ノ如シ但シ警戒官制甲ノ場合ハ遮光具ヲ必要トスルモノトス

警戒管制程度ノ區別	前照燈ノ光度	減光方法
警戒官制乙ノ場合	一萬独光以下	遮光率○.○○三ノ材料(例、金巾新モス、天竺、シルカ等ノ黒布一枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト
	一萬独光以上	遮光率○.○○一ノ材料(例、ガスモス等ノ中手黒布一枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト
警戒官制甲ノ場合	一萬独光以下	遮光率○.○○七ノ材料(例、黒雲才等ノ中手黒布一枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト
	一萬独光以上	遮光率○.○○二ノ材料(例、薄キ黒繻子一枚又ハガスモス等ノ中手黒布二枚)ヲ用ヒ燈器ノ前面ヲ覆フコト

第百九條 携帯燈ヲ使用スル場合ニハ直射光ヲ上空ニ向ハシメサル様注意スルモノトス

第百十條 火焰ヲ發スル工場等ニテ空襲官制時ニモ作業ノ繼續ヲ必要トスルモノ又ハ速ニ作業中断ノ困難ナルモノハ火焰ノ隠蔽設備ヲ整備スルモノトス之ガ隠蔽設備ニ関シテハ左ノ事項ニ就キ注意スルコト

- 一 隠蔽材料及遮光材料ハ必要ニ應シ耐熱耐酸等ノモノヲ用フルコト
- 二 建物内ノ換氣通風ヲ計ルコト

第五節 漁業用燈類

第百十一條 漁業用燈類ハ防空警報ニ應シ速ニ消燈又ハ減光且遮光シ得ル様遮光具ヲ備ヘ電氣集魚燈ニ在リテハ切替装置等ノ設備ヲ為シ「アセチレン」反射集魚燈及石油集魚燈ニ在リテハ「アセチレン」瓦斯及石油ノ供給ヲ調節シ得ル調節弁等ヲ取付クルモノトス尚「アセチレン」瓦斯集魚燈及石油集魚燈ハ成ベク前項ノ如キ電氣集魚燈ニ轉換セシムルモノトス

前項ノ漁業用燈類ノ管制(昭和十五年三月二十二日廣島縣告示第百八十五條)ハ別紙第十三號之ガ管制參考圖ハ別紙附圖ノ通トス

第百十二條 流網延縄定置網其他之ニ類スルモノノ標識燈ノ燈具及遮光具ハ特ニ風波ニ耐ヘ得ル堅牢ナルモノトシ且燈器水平ヲ保ツ構造トスルモノトス

第七章 音響及交通管制並ニ交通整理

第百十三條 防空實施ノ開始命令アリタルトキ又ハ之カ終止命令アリタルトキト雖モ別命ナキ限り正午ノ時報其他ノ報告用「サイレン」汽笛ニシテ三十秒以内連續吹鳴スルモノヲ除クノ外防空警報類似ノ音響ハ之ヲ使用スルコトヲ得ザルモノトス但シ必要ニ依リ此等音響ノ管制ヲ行フコトアルベシ

第百十四條 燈火管制規則第四條ヲ適用スル期間該地域内ニ在リテ保安上特ニ必要ナル場合及一斉吹鳴装置アルモノヲ除クノ外「サイレン」汽笛及之ニ類似ノ音響ノ使用ヲ警戒警報又ハ空襲警報ノ發令ヨリ警戒警報解除ニ至ル迄ノ期間ニ互テハ警報トシテ使用スル場合及保安上特ニ必要ナル場合ノ外「サイレン」汽笛警鐘等之ニ類似ノ音響及航空機類似ノ爆音ハ一切之ヲ禁止セラルルモノトス(昭和十三年七月十九日廣島縣例題二十九號音響使用取締規則参照)

第百十五條 空襲警報發令中ハ必要ニ應シ陸上一般ノ交通ヲ制限シ又ハ交通機關ノ速力ヲ減ゼシメ海上ニ在リテハ必要ニ依リ航行及就漁ヲ停止セシメラルルコトアルモノトス

第百十七條 燈火管制中ノ道路ニ於ケル各種車輪ノ運行ハ左ノ制限ニ依ル(知事指定シタル車輪ハ此ノ限りニ非ズ)但シ電車ニ對シテハ待避ヲ行フ場合ノ外空襲官制時ニ於テ停止セシムルコトアルモノトス

種 別	警戒管制時	空襲管制時
-----	-------	-------

電車	最高速度毎時十軒	最高速度毎時五軒
自動車（自動自轉車ヲ含ム）	最高速度毎時二十軒	停止
自轉車	平常ノ儘	下車歩行
牛馬車及其他ノ車	平常ノ儘	停止
乳母車	平常ノ儘	平常ノ儘

第百十八條 官公衛其他ノ車輪ニシテ防空上緊急已ムヲ得サル用務ニ依リ使用スル車輪ハ燈火管制規則第十五條ニ基キ特別ノ事情ニ依リ知事ノ指定スルモノ並ニ道規則第六條第二號ニ基キ特別ノ必要ニ依リ警察署長ノ許可シタル車輪ハ前條ノ運行制限ニ依ルヲ要セス尚空襲管制時ニ於テハ別ニ定ムル程度（別紙第十四號自動車、自轉車ニ用ユル燈火ノ告示）ノ燈火ヲ以テ運行スルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ車輪ノ前後ニ左ノ様式ノ標識ヲ附スルモノトス

警察署用	示	尚海軍ノ車輪ノ標識ハ左ノ通トス	
縣廳市役所用	公	陸軍用	Λ Λ
警防團用	★	海軍用	[碇マーク]
逓信官署用	〒		
鐵道官署用	工		
放送局用	放		
救急用	+		
電氣工作用	電		
瓦斯工作用	瓦		
警察署ノ許可シタルモノ	急		

第百十九條 防空陣地（高射砲、照空燈、聴音器陣地等）ノ配備中及防空監視哨ノ立哨中ハ之ヲ中心ニシテ五百米以内ノ區域ニ於テハ電車各種自動車及發動機船等ハ音響ヲ停止シ徐行スルモノトス尚之等ノ任務ヲ妨害スル音響及航空機類似ノ爆音ヲ管制スルモノトス

第八章 防空監視及防護警報

第一節 防護監視

第百二十條 防護監視トハ住居又ハ施設付近ニ襲來スル敵機ノ行動特ニ其ノ投下彈ノ落下位置及之ニ因ル被害状況等ヲ監視シ速ニ之ニ當該防護機関（分團長、團長、警察署長）ニ報告シ以テ防護ヲ迅速適確ナラシムルヲ以テ目的トス

第二百一十一條 防護監視ノ為メ（通常空襲警報發令ヨリ同解除ニ至ル迄）防護監視所ヲ配置スルモノトス但シ状況ニ依リ警戒警報發令間モ隨時配置スルモノトス

特別防空計畫設定者並ニ本計畫第七條ノ施設其他ノ施設ノ管理者又ハ之ニ準スベキ者ハ各其ノ適當ノ場所ニ防護監視所ヲ配置スルモノトス

第二百二十三條 防護監視所ノ位置ハ擔当區域全般を通視シ得ル高所ニシテ且ツ成ベク通信機関ヲ利用シ得ル場所ヲ選定スルモノトス

第二百二十四條 防護監視所ハ通常長以下七名ヲ以テ服務シ立哨ハ常時二名トス其ノ勤務方法等ハ年度防空計畫ニ之ヲ定ム

第二百五十五條 防護監視所ハ概ネ左ノ事項ヲ當該防空機関ニ簡明ニ報告スルモノトス

- 敵適航空機ノ発見、飛去、特ニ敵航空機ノ擔任區域ニ入り又ハ去リタル状況
- 投下彈ノ落下状況
- 投下彈ニ依ル被害状況

第二百二十六條 警察署長ハ市長ト協力シ防護監視所ノ警報等ニ之ガ連絡方法ヲ其年度防空計畫ニ定ムルモノトス特ニ広島瓦斯電軌株式会社ニアリテハ電車及乗合自動車ノ待避等ニツキ防護監視所トノ報告連絡關係ヲ具体的計画ニ樹立スルモノトス

第二節 防護警報

第二百二十七條 防護警報トハ火災ノ發生又ハ毒瓦斯攻撃ヲ受ケタルコトヲヲ局地住民ニ報告シ防護ヲ實施セシムル為メノ警報ヲ謂フ

第二百二十八條 防護警報ヲ分チテ火災警報、火災警報解除、毒瓦斯警報及毒瓦斯警報解除ノ四種トシ左ニ掲クルモノコレヲ發ス

一 火災警報及火災警報解除

警察署長又ハソノ指定シタルモノ但シ緊急ノ場合ハ火災ヲ発見シタル者其ノ附近ニ對シ火災信號ヲ發スルコトヲ得

二 毒瓦斯警報及毒瓦斯警報解除

警察署長又ハ其ノ指定シタル者但シ毒瓦斯ナルコトヲ確實ニ認知シ緊急ノ場合ニ於テハ認知者ソノ附近ニ對シ毒瓦斯警報ヲ發スルコトヲ得前項ノ指定標準等ニ關シテハ年度防空計畫ニ之ヲ定ム

第二百二十九條 防護警報ハ左ノ方法ニヨリコレヲ傳達スルモノトス

一 火災警報及ビ火災警報解除

平時ノ於ケル出火又ハ鎮火ノ報知法ニ依ル但シ前条第一號但書ノ場合ニ於イテハ空罐、金属製器具ヲ連打シ「焼夷彈」又ハ「火事」ト連呼スルモノトス

二 瓦斯警報

太鼓又ハ拍子木ヲ連打シツツ「毒瓦斯」（一時性、持久性ノ區別判明セサルトキ）又ハ「一時性瓦斯」「持久性瓦斯」ト口頭ニテ連呼ス

三 瓦斯警報解除

口頭ニテ「毒ナシ」又ハ「毒瓦斯ナシ」ト連呼ス

第九章 消防

第一節 通則

第三百三十條 空襲時惹起スル火災ハ同時多發ノ特異性ヲ有スルヲ以テ木造家屋ノ密集セル現狀ニ於テハ特ニ防火第一主義ヲ徹底スルモノトス

第三百三十一條 自家防護ノ信念ヲ堅持スルト共ニ隣保共助ノ精神ヲ涵養強化シ火災發生ノ初期ニ於イテ家庭及ヒ隣保班ノ総力ヲ以テ沈着勇敢且ツ機敏ニ防火ニ従事シ以テ自衛防火ノ徹底ヲ圖ルモノトス

第三百三十二條 焼夷彈攻撃ト共ニ毒瓦斯攻撃ヲ受クルコトアルトキモ凡ユル手段ヲ講ジテ消防作業ヲ繼續シ常ニ火災防御ニ重点ヲ置クモノトス

第三百三十三條 知事空襲警報發令中消防上必要アリト認ムル時ハ瓦斯又ハ電気事業者ニ対シ瓦斯又ハ電気ノ供給ヲ一時停止セシムルコトアルモノトス

前項ノ措置ハ緊急ヲ要スルトキハ警察署長之ヲ行ウコトヲ得

第三百三十四條 警鐘ニ依ル火災警報ノ信號ハ左ニ依ルモノトス

品 別	信 號
近火信號	○—○—○—○—○—○ 連点打
區域内火災信號	○—○—○—○—○—○ 三点打
區域外火災應援出動信號	○—○—○—○—○—○ 二点打
鎮火信號	○ ○—○ ○—○—○ 一点ト二点班打
備考	火災警報中近火信號區域内火災信號及區域外火災負應援出動信號ハ凡ソ五分間繼續打鐘シ鎮火ノ見透シアリタルトキハ其ノ時間内ト雖モ直ニ停止スルモノトス 鎮火信號ハ適宜打鐘スルモノトス

第二節 家庭（船舶）消防處置

第三百三十五條 警戒警報發令アリタルトキハ各戸ノ適當ナル箇所ニ放火用水、防火器具其ノ他ヲ整備シ且ツ發火及延焼防止ノ為メ並ニ消防活動ヲ妨害セル為メ引火性危険物品ヲ所定ノ場所ニ収蔵スルト共ニ建物内外ノ可燃物其他ヲ整頓スルモノトス

警戒警報ノ發令ナク空襲警報ノ發令アリタルトキモ亦同ジ

第三百三十六條 空襲警報發令アリタルトキハ炭火、石油、電熱器其他ノ火ヲ始末シ瓦斯ハ主要栓ヲ閉止スルト共ニ隣家ニ近接シタル雨戸硝子戸等ハ鍵又は錠ハカゲズシテ全部閉塞シ防空従事者ハ直ニ防護用服装ニ改メ更ニ屋内其他ヲ見回ルモノトス

第三百三十七條 所謂家庭防空ノ従事者（家庭防空隣保班参照）ハ他ノ隣保班ニ應援セザルヲ原則トシ但シ隣接ノ隣保班ニ焼夷彈落下シ応援ヲ必要トスル場合又ハ他ノ隣保班内ニ火災發生シテ未タ警防團ノ來着ナキ場合ニ於テ所属班ノ警戒ノ要ナキトキハ之ニ應援スルモノトス

第三百三十八條 家庭防空従事者ハ其ノ長ノ命ニ依リ警防團來着シ消防作業ヲ開始シタルトキハ直ニ消防作業ヲ之ニ委ネ其ノ要求ニ依リ之ヲ援助スルモノトス

第三百三十九條 港内ニ在泊スル船舶ハ火災發生（沈没ノ場合ヲ含ム）ノ火災ニ必要ナル消防器具ヲ整備スルモノトス

第三節 警察機關及警防團ノ消防

第四百十條 火災現場ニ於ケル消防従事者ノ行動ハ最モ敏活且勇敢ヲ旨トシ一舉ニ鎮滅ヲ期シ其狀況畧鎮火ニ至ラバ迅速ナル引揚又ハ移動ヲ為シ残火ハ一部ノ消防團及家庭防衛隣保班ヲシテ處置セシムルモノトス

第四百十一條 警防團員不發又ハ未發ノ投下彈ヲ發見シタルトキハ標識ヲ立テ人ノ触レサル要周囲ニ縄張ヲ行ヒ警察署長又ハ警防團長（分團長）ニ報告スルモノトス

前項ノ投下彈ヲ發見シタル者ハ直ニ警察署長又ハ警防團（分團）ニ報告スルモノトス

第四節 調査

第四百十二條 警察署長及市長ハ特設自衛團體並ニ會社、工場、倉庫及店舗又ハ規模大ナル建築物等ノ消防用具ヲ整備セル者ノ名稱、所在地及消防用器具ヲ年度防衛計畫ニ定ムルモノトス若シ整備不十分ナルモノニ對シテハ應急處置ヲ講セシムルモノトス

第四百十三條 警察署長ハ市長ト協議シ消防車其他ノ消防器具防火用砂溜及防火用水池（槽）其他消防設備資材ノ位置及保管責任者ヲ年度防空計畫ニ定ムルト共ニ左ノ標識ヲ設置シ應援隊ノ水利部署ニ便ナラシムルモノトス尚井戸ハ飲用及消火用ノ區別ヲ明ラカニシ引用ハ白地ニ「井」ヲ消火用ハ赤字ニ「井」ヲ表示スルモノトス

一 地色ハ白、文字ハ黒、縁ハ水色トシ、縁ノ幅ハ四五耗トス

二 記號ハ左ノ例ニ依ルコト



掘抜ポンプ・・・掘抜

井戸・・・・・・井

河川・・・・・・川

池沼・・・・・・池

泉川・・・・・・泉

貯水槽・・・・・・・・槽

防火栓・・・・・・・・栓

三 板内適当ナル箇所ニ使用可能ポンプノ種類、台類等ヲ記載スルコトヲ得

第百四十四條 市長ハ警察署長ト協力シ消火栓ノ配置状況ヲ年度防空計畫ニ定ムルト共ニ之ガ位置ニハ「消火栓」ナル旨ヲ表示スルモノトス

第百四十五條 警察署長ハ市長ト協議シ警鐘ノ位置及之ガ打鐘責任者を年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第百四十六條 市長ハ防火の改修構築區域ニ関スル年度及區域ヲ永年計畫ニ定ムルト共ニ昭和十六年度ノ實施區域ハ年度防空計畫ニ明ニスルモノトス
(別紙第十五號)

第十章 防毒

第一節 通則

第百四十七條 防毒ハ主トシテ敵航空機ノ使用スル毒性ノ瓦斯、煙霧液体等（以下之等ヲ毒瓦斯ト稱ス）ニ對シ機宜ノ防護處置ヲ講シ以テ被害ヲ防止又ハ軽減スルニアルモノトス

第百四十八條 防毒ハ一般ニ對シ防毒知識ノ向上ヲ圖リ努メテ防毒面又ハ應急防毒具ヲ整備セシメ簡易ニ自衛ノ處置ヲ採ラシムルト共ニ防毒機關ヲ編成配備シ防毒設備資材ヲ整備シテ防毒業務ニ従事セシムルモノトス

第二節 防毒機關

第百四十九條 市長ハノ其所屬人員ヲ以テ直轄防毒機關ヲ編成シ被害大ナル地ノ防毒業務ニ従事セシムルト共ニ警防團ノ防毒業務ヲ援助セシムルモノトス

前項ノ組織編成ハ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第百五十條 警防團防毒部ノ編成管掌業務裝備ハ概ネ左ニ豫ルモノトス但シ編成人員ニ付テハ大体ノ基準ヲ定メタルモノニシテ被毒ノ程度ニヨリ適宜増減スルモノトス

	編 成	業 務	人 員		装 備
防 毒 部	総務係	班内ノ統制 防毒資材ノ整備 各部トノ連絡	部(班)長 一名	係長一名 係員二名	防毒面、防毒衣、防毒手袋、防毒靴、毒瓦斯検知資料、消毒材料 警報器材 被毒地域標示材料
	警戒係	毒瓦斯投下ノ警戒 毒瓦斯検知及被毒地域ノ表示 毒瓦斯警報ノ發令及傳達 毒瓦斯避難ノ誘導整理		係長一名 係員九名	
	消毒係	被毒セル地域及物件等ノ消毒		係長一名 係員五名	

第百五十一條 市長ハ防毒ノ為メ特殊技能者ノ派遣ヲ求ムル必要アリト認ムル時ハ警察署長ニ協議ノ上速カナル方法ニヨリ知事ニ申請スルモノトス

第百五十二條 防毒機關ハ毒瓦斯ノ検知、消毒、毒瓦斯警報ノ發令オヨビ解除被毒地域ノ交通規制被毒物件ノ使用制限等ノ防毒業務ニ當ルモノトス

第百五十三條 有害地帯及毒瓦斯警報發令地域ハ適宜交通制限ヲ行ヒ特ニ持久性毒瓦斯ノ被毒箇所ニ對シテハ警防團防毒部員縄張等ヲ以テ区劃シ赤旗又ハ青旗ヲ立テ之ヲ表示シ夜間ハ障害注意燈ヲ用ヒ立入りヲ禁止スルモノトス尚必要ニ依リ瓦斯ノ種類及適當ナル地点ニ迂回路ヲ明示スルモノトス

第百五十四條 防毒部員ハ關係機關ト協力シ毒瓦斯警報發令地域内ノ非難者ヲ誘導ニ當ルモノトス之ガ避難誘導ニ當リテハ風向、地勢建物等ヲ考慮シ方向ヲ定メ誘導スルモノトス

第百五十五條 本市ノ住民ニハ防毒面ヲ所持セシメ各自ニ防毒ノ方法ヲ採ラシムルヲ主眼トスルモノトス但シ防毒面ナキ場合ニ於イテハ已ムヲ得ス應急對策トシテ縱令完全ヲ期シ得ザルモ無キニ優ル意味ニ於テ主トシテ致命傷の傷害ヲ被リ易キ呼吸器ノ防護ニ着意シ應急処置ヲ講ゼシムルモノトス

第百五十六條 毒瓦斯ノ徴候ヲ知り又ハ毒瓦斯警報ヲ聞キタルトキハ左ノ如ク處置スルモノトス

一 防毒面ヲ有スル場合ニハ速カニ装着シ之ヲ有セザル場合ハ呼吸器等ニ對シ應急防護ヲ講ズルコト

二 速カニ風上等ノ無毒地帯ニ避クルガ又ハ防護室準防護室若クハ防毒設備ヲ施セル防空壕ニ避ケルコト上記ノ箇所ニ避ケ得ザル場合ハ防毒室ニ避クルコト

三 液状持久性毒瓦斯ナル場合ハ被毒地域ノ風下ニモ相當濃度ノ気状毒瓦斯ノ流動持續スルヲ以テ危険ナル範圍ノ者ハ防空機關ノ指示ニ從ヒ避難等ヲ處置ヲ講ズルコト

四 液状ノ持久性毒瓦斯ハソノ毒効力ガ永久持續スルヲ以テ已ムヲ得ズ被毒地域ヲ通過スルトキハ「ゴム」靴、高下駄、「ゴム」底履物等ヲ使用シ毒液ノ身体、被服等ニ附着セザル様注意スルコト

五 液状ノ持久性毒瓦斯ニ被毒セル箇所又ハ物ニ觸レル時ハ防毒手袋又ハ「ゴム」手袋ヲ使用シ已ムヲ得ザル場合ニ於テモ手袋ヲ用ヒ素手ニテ觸レザルコト

六 持久性毒瓦斯雨下ニ際シ屋外ニ在ル者ハ液状毒瓦斯ヲ避クル為メ直チニ屋蓋下若ハ適當ナル掩護下ニ避クルカ又傘「マント」外套、布片、紙（油紙、包装紙等ヲ可トス）等ニテ身体ヲ防護スルコト

第四節 調査

第百五十七條 市長ハ防毒ノ業務ニ従事スベキ醫師、齒科醫師、獸醫師、薬剤師、看護婦ヲ調査シ年度防空計畫ニ明カニスルモノトス
前項ノ者ニ對シテハ可成防毒用具ヲ整備セシメ之ガ整備ヲ明カニスルモノトス

第百五十八條 市長ハ警防團員ニ對スル防毒面及其ノ他ノ防毒用具ノ規存狀況及之ガ保管責任者ヲ年度防空計畫ニ明カニスルモノトス

第十一章 救護

第一節 通則

第百五十九條 本市ハ空襲ニヨル傷病者（毒瓦斯被毒者ヲ含ム以下之ニ同ジ）ヲ救護スル為メ左ノ機關ヲ設ケ救護ヲ實施スルモノトス

- 一 警防團救護部
- 二 救護所
- 三 特設（特別）救護班

第百六十條 各救護機關ノ組織編制擔任區域業務等ニ関シテ法令及別紙第十六號防空救護組織要綱ニ依ルノ外本防空計畫ノ定ムル所ニ依ルモノトス

第百六十一條 警察署長又ハ市長又ハ救護ノ為メ特殊技能者ノ派遣ヲ求ムル必要アリト認ムルトキハ協議ノ上速カナル方法ニ依リ知事ニ申請スルモノトス

第百六十二條 市長ハ警察署長ト協力シ警防団員並ビニ一般人ヲシテ左ノ家庭救急藥品ヲ整備セシムルモノトス

- 一 アルコール
- 二 稀ヨード丁幾
- 三 オキシドール又ハオキシフル
- 四 胡麻油
- 五 重炭酸ソーダ錠
- 六 クロラミン錠
- 七 石鹼（薬用石鹼）
- 八 繃帶
- 九 三角布
- 十 ガーゼ
- 十一 脱脂綿
- 十二 油紙
- 十三 薬瓶
- 十四 留針
- 十五 薬包紙

第百六十三條 市長ハ警察署長ト協議シ空襲時ニ發生スル傷病者ニ對スル應急處置ノ應急知識ヲ徹底セシメ置クモノトス

第二節 警防團

第百六十四條 本市警防團救護部ハ主トシテ空襲時現場ニ於ケル傷病者ノ救急救容等ノ應急救護業務ニ従事スルモノトス

第百六十五條 警防團救護部ハ必要ニ應ジ適宜應急處置所（救護所ニ収容スルニ先立チ應急處置ヲ施ス所）ヲ設クルモノトス

第百六十六條 警察署長及市長ハ警防團救護部ヲシテ常ニ救護所及特設（特別）救護班並ニ消防機關及防毒機關等ト連絡ヲ保持セシメ救護上潰漏ナキヲ期スルモノトス

第三節 救護所

第百六十七條 主トシテ傷病者ノ治療、収容ニ充ツル為メ救護所ヲ設クルモノトス

第百六十八條 救護所ハ成ベク既存ノ救護所防護室官公署ノ管理スル診療所、一般診療所及之ニ所属スル醫師、齒科醫師、獸醫師、薬剤師、看護婦等ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

尚一時ニ多数ノ患者ノ救護ヲ要スル場合アルベキヲ豫想シ学校、寺院其他適當ト認ムル場所ヲ救護所トシテ指定シ置クモノトス

第百六十九條 市長ハ關係官公署及關係醫師會、齒科醫師會又ハ薬剤師會ト協議シ適當ナル箇所ニ救護所ヲ開設シ区域内ノ醫師、齒科醫師、薬剤師、看護婦其他ノ者ヲシテ救護ニ従事セシムル計畫ヲ設定スルモノトス

前項ノ計畫ニ基キ官公立診療所ノ管理者ニ對シ救護所ノ開設ニ関シ協力ヲ求ムルモノトス

第百七十條 市長ハ前條ノ計畫ニ基キ看護婦、女学生、國民学校高等科高学年、女子青年團等ヲ以テ特別救護班ヲ組織シ空襲時救護ニ従事スルベキ者ノ出勤方法並ニ擔任救護所ヲ關係者ト協議ノ上年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第百七十一條 醫師會ト齒科醫師會ハ第百六十九條ノ計畫ニ基キ所属ノ醫師、齒科醫師ヲシテ救護所ノ開設セシメ救護業務ニ従事セシムルモノトス薬剤

師會ハ同條計畫ニ基キ薬剤師ヲシテ救護所ニ於テ調剤ノ業務ニ従事セシムルモノトス

第百七十二條 救護所ノ所有者又ハ管理者ハ警戒警報發令アリタルトキハ直チニ救護所ヲ開設シ何時ニデモ救護ヲ為シ得ル如ク設備資材其他諸般ノ準備ヲ為スモノトス

前項ノ準備完了シタルトキハ救護所ノ所在及入口ヲ著明ニ表示シ夜間ハ標識燈ヲ掲クルモノトス

第四節 特設救護班

第百七十三條 市長ハ其ノ所属ノ醫師、薬剤師、看護婦等（救護所ニ於テ救護ニ従事スルモノヲ除ク）ヲ以テ防空本部（年度防空計畫ニ定ムルモノ）ニ直属ノ救護班ヲ編成シ警防團救護部（班）又ハ救護所ノ應援ソノ他ノ救護業務ニ従事セシムルモノトス

第百七十四條 市長ハ特定ノ病院ヲ指定シ其ノ管理者ヲ以テ所属ノ醫師、薬剤師、看護婦等（警防團又ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スルモノヲ除ク）ヲ以テ特設救護班ヲ編成シ警防團救護部（班）又救護所ノ應援其他ノ救護業務ニ従事セシムルコトヲ得

第百七十五條 醫師會、歯科醫師會、薬剤師會ハ警察署長及市長ト協議シ本市区域内ノ醫師、歯科醫師、薬剤師（警防團又ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スルモノヲ除ク）ヲ以テ特設救護班ヲ編成シ警防團救護部（班）又ハ救護ノ應援ソノ他ノ救護業務ニ従事セシムルモノトス

第五節 調査

第百七十六條 市長ハ救護所ノ位置従事者ノ氏名収容範圍、收容人員之ニ整備シアル設備資材並ニ之ガ保管責任者及特設救護班ノ編成並ニ應急處置所ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第百七十七條 市長ハ救護用援急薬品ノ規存状態及之ガ保管責任者ヲ明ラカニスルモノトス尚救護薬品ノ缺欠シタル場合ヲ考慮シ之ガ購入ノ統計ヲ年度防空計畫ニ明ラカニシ置クモノトス

第十二章 退去避難及待避

第一節 通則

第百七十八條 空襲時ニ於イテハ一般住民ハ自衛防空ノ精神ニヨリ各々各自此ノ持ち場ヲ守リ防空其他ノ業務ニ従事スルヲ本則トスルモ特ニ認メタルモノハ退去又ハ非難セシムルコトヲ得ルモノトス

第百七十九條 退去又ハ避難（事前避難及緊急避難トニ分ツ）トハ危険ノ場所ヨリ退去シテ生命、身体等ニ對スル危険ヲ避クルヲ謂ヒ待避トハ自己ノ持ち場ヲ守リツツ生命、身体ニ對スル危険ヲ避クルヲ謂フモノトス

第百八十條 本市ハ退去避難及待避ニ付行ハルモノトス

第二節 退去及避難

第百八十一條 退去ハ特ニ認メラレタル者空襲ニヨル危険ヲ避クル為メ空襲危険區域（本縣指定市町村ハ勿論其他ノ廳府縣ノ指定市町村ヲ含ム）以外ノ地ニ退去セシムルモノトス（廳府縣ノ危険區域調ハ廣島縣永年防空計畫別紙第二十五號ノ通トス）

前項ノ退去場所ハ私人ニ於テ其ノ縁故等ニヨリ自ラ選定スルヲ本則トスルモ自ラ選定シ得ザル者ハ指定ノ場所ニ退去スルモノトス

第百八十二條 事前避難トハ特ニ認メラレタル者空襲ニヨル危険ヲ避クル為豫メ附近ノ防護室準防護室強固ナル建物地下室防空壕其他の之等ニ準ズルモノニ避難スルモノヲ謂フモノトス（別紙第十七號防空建築規則抜粋及別紙第十八號防空壕構築要領参照）

第百八十三條 緊急避難トハ空襲ニ因ル火災、毒瓦斯ノ被害發生ノ為メ已ムヲ得サル者主トシテ公園、運動場、緑地、其他ノ空地（事情ノ許ス限り前號ニ掲クル場所ヲ之ニ充ルツコト）ニ避難スルヲ謂フモノトス

第百八十四條 退去及事前非難ヲ認ムル者ハ左ノ各號ニ當スル者ニ限ルモノトス

- 一 老幼者（「老者」トハ概ネ六十五歳以上ノ者「幼者」トハ概ネ十四歳未満ノ者）病者不具者妊婦等ニシテ防空活動困難ナル者
- 二 前號ニ掲クル者ノ保護ノタメ必要ナル者（自衛防空ノ重要性ニ鑑ミ已ムヲ得サル者ニ限ル）

第百八十五條 退去ノ時期ハ知事之ヲ指示スルモノトス

事前非難ハ空襲警報ノ發令ト共ニ之ヲ開始シ空襲警報ノ解除マデ之ヲ行フモノトス

第百八十六條 退去ハ空襲時其他混乱ヲ惹起シ易キ時ヲ避クル等其ノ實施時期ノ選定ニ注意シツ逐次之ヲ行ヒ戰時重要ナル交通機關ノ活動ヲ妨害セサル如ク留意スルモノトス

第百八十七條 市長ハ関係警察署長ト協議シ左ノ事項ニ付毎年九月末現在ヲ以テ調査計畫ヲ樹テ年度防空計畫ヲ定メ置クト共ニ所要ノ退去又ハ避難ノ場所ヲ設置又ハ準備スルモノトス

- 一 退去者又ハ事前避難者ノ数
- 二 退去者又ハ避難ノ場所避難所ノ種類及収容能力
- 三 退去又ハ避難ノ場所ノ割當（自ラ退去先ノ選定シタルモノニ付テハ其ノ退去先）
- 四 退去又ハ避難ノ場所ノ管理
- 五 其他必要ナル事情

第百八十八條 市長ハ本市内ニ於テ適當ナル退去ノ場所ナキトキ或ハ退去者ノ収容困難ナル場合ニ於テ其他ノ市町村ヘ退去セシメントスルトキハ關係市

町村及関係警察署長ト豫メ協議シ適當ナル退去場所ヲ定ムルモノトス但シ他府縣内ヘ退去セシムル必要アルトキハ知事ニ之ヲ報告スルモノトス

第百八十九條 市長ハ退去者若ハ避難ノ場所ノ設置又ハ陣日ノ為メ必要アリト認ムル時ハ防空報第五條及同施行令第三條ノ規定ニ依ル措置ヲ知事ニ申請スルコトヲ得ルモノトス

第百九十條 退去者ハ避難ニ際シテハ左ノ事項ニ留意スルモノトス

- 一 誘導者ノ指示ニ従ヒ秩序整然ト行動スルト共ニ言動ヲ慎ミ他ニ迷惑ヲ興ヘサルコト
- 二 少量ノ重要物品及食料品ノ外他ノ物品ハ之ヲ携帯セザルコト

第百九十二條 市長ハ設置又ハ準備シタル退去場所ノ管理ハソノ市町村長ニ委任スルコトヲ得

前項ノ管理ハ當該市町村長警察署長ト協議シ警防團ニ指示シテ之ヲ為サシムルコトヲ得ルモノトス

第百九十三條 退去ハ避難ノ場所ニ充テラレタル施設ノ管理者又ハ所有者ハ防空實施ノ開始後何時ニテモ之ヲ使用シ得ル様諸般ノ準備ヲ為スモノトス

第百九十四條 市長ハ適時警察署長ト協力シ其ノ設置又ハ準備シクル退去又ハ避難ノ場所及所設備資材ノ準備状況ヲ点檢シ退去者ノ収容ニ遺憾ナキヲ期スルモノトス

第百九十五條 市長ハ防空實施ノ開始後直チニ避難場所ノ方向並ビニ避難ノ場所ニ其ノ出入口ヲ標示（夜間ハ之ヲ明瞭ナラシムル手段ヲ講ズ）ズルト共ニ避難者ノ見易キ場所ニ収容定員及注意事項ヲ掲出スルモノトス

第百九十六條 市長ハ必要ニ應シ退去者ニ給與スベキ物資ノ配給ニ付キ具体的計畫ヲ樹キテ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第三節 待避

第百九十七條 待避ハ敵航空機視界若ハ應音界ニ在リ間又ハ軍防空機關ノ戦闘中投下彈其他ニ因リ危難ヲ避クル為反防空機關ノ防護活動ヲ阻害セザル為之ヲ行フモノトス

第百九十八條 待避ハ一般國民ガ努メテ自発的ニ行フヲ本旨トシ且一時のニ之ヲ行フモノニシテ危険去リタルトキ又ハ燒夷彈ノ落下等アリタルトキハ直チニ出勤シテ自衛防空ニ仕ズルモノトス從ツテ防空期間ト雖モ任務ニ支障ナキ限り之ヲ行ヒ無益ノ損害ヲ避クルモノトス

第百九十九條 待避ノ場所ニハ最寄ノ防護室準防護室、堅固ナル建物、地下室、防空壕其他之等ニ準ズル施設ヲ以テ之ヲ充ツルモノニシテ之等ノ待避施設ナキトキト雖地形地物ヲ利用シ且努メテ低キ姿勢ヲ採リ被害ノ輕減ニ努ムルモノトス

第二百條 待避施設ハ各戸（家）ニ之ヲ設クルヲ原則トス但シ状況ニヨリテハ近隣共同（例ヘバ隣保班ニー箇又ハ二隣保ニー箇ノ如シ）シテ之ヲ設クルモ妨ケナキモノトス

第二百一條 市長ハ自家用待避施設ヲ設ケ得ザル者屋外通行者（電車、自動車、其他ノ車ニ乗車スル者ヲ含ム）等ノ待避ノ用ニ供スル為必要ナル公共防空壕其他ノ待避施設ヲ設クルモノトス

第二百二條 市長ハ待避場所ノ設置又ハ準備ノ為必要アリト認ムトキハ防空報第五條及同施行令第三條ノ規定ニ依リ待避ニ供用シ得ベキ施設ノ管理者又ハ所有者ニ對シ待避ニ必要ナル設備ハ資材ノ供用ニ関シ知事ニ申請スルコトヲ得ルモノトス

第二百三條 警察署長ハ市長ト協力シ電気、瓦斯水道ノ工作物、軌道工場、学校劇場、市場等ノ施設ノ管理者又ハ所有者ヲシテ従事者又ハ収容者ノ待避施設ヲ設ケシムルモノトス

前項ノ施設ヲ設ケタル者ニ付テハ之ガ所在及設備内容ヲ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第二百四條 市長ハ警察署長ト協力シ平時ヨリ一般ニ對シ永久的待避施設ノ整備奨励スルト共ニ戰時又ハ事變ニ際シ所要ノ待避施設ヲ完備シ得ルヨウ計畫準備セシムルモノトス

第二百五條 市長ハ防空實施ノ開始直後直チニ公共用待避施設ノ方向等ニ之ガ施設ノ出入口ヲ標示（夜間ハ之ヲ明瞭ナラシムル手段ヲ講ズ）スルト共ニ見易キ場所ニ収容定員及注意事項ヲ掲出スルモノトス

第二百六條 待避ハ防火ソノ他ノ積極的防護活動ニ便ナル様最寄ノ待避施設ニ之ヲ行フモノトス

第二百七條 屋外待避者ハ最寄ノ公共用待避施設又ハ其ノ待避施設（第百九十九條参照）ニ避難スルモノトス

第二百八條 車輛ニ乗車中ノモノハ通常下車シテ最寄ノ公共用待避施設又ハ其他ノ待避施設ニ避難スルモノトス 車輛ハ道路ノ交叉点、曲角、橋梁等ヲ避ケテ其ノ左端ニ通行ノ妨害トナラザル如ク疎開停止スルモノトス

第二百九條 防毒設備ナキ待避施設ニ入ルトキハ可成防毒面ヲ携帯スルモノトス

第二百十條 市長ハ警察署長ト協力シ待避施設（隣保班ノ防空壕ヲ含ム）又ハ待避ニ供用シ得ベキ施設ヲ調査シ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第十三章 配給

第二百十一條 市長ハ警察署長ト協力シ市内ニ於ケル防空ノ實施上必要ナル資材及罹災証明並ニ救護者等ニ給與スベキ物資ヲ調達シ警防團ニ指示シテ之ガ配給ヲナサシムルモノトス

第二百十二條 市長ハ警察署長ト協議シ罹災者及救護者ニ配給スベキ食料品及寢具等ノ所在、配給所、配給従事者、配給用ニ供スベキ車輛及其ノ所有者ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十三條 市長ハ罹災者及救護者等ニ配給スベキ食事ノ万全ヲ期スルタメ主要ナル工場、学校、飲料店、料理店、仕出店、其他ニ付炊事能力ノ状況

ヲ調査シテ之ヲ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第二百十四條 市長ハ配給品ノ缺乏シタルトキハ應急處置ヲ講シ得ル様關係者ト協議シ之ガ購入先及配給品名ノ種別ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十五條 市長ハ配給ニ従事スベキモノ不足ヲ生ジタルトキハ婦人團體中等學校以上ノ女學生其他ノ者ト協議シ應援團體名及召集連絡方法ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第十四章 工作

第二百十六條 市長ハ本市防空本部ニ直屬工作班ヲ編成シ且所要ノ資材ヲ準備シテ左ノ業務ヲ実施スルモノトス

- 一 市ノ管理スル重要施設ニ對スル偽装遮蔽防彈等ノ工作
- 二 市ノ管理スル道路、橋梁、河川、水道、下水道等ガ空襲ニヨリ被害ヲ被リタル場合ノ復舊工作

前項ノ所在ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十七條 市長ハ前條工作班ノ組織、編成、配置車輛及處置ニ要スル資材ノ所在ヲ年度防空計畫ニ定ムルモノトス

第二百十八條 前條ノ工作班ハ左腕其他ニ「廣島市」ノ工作班ナル旨ノ標示ヲ附スルモノトス

第二百十九條 電気瓦斯軌道等事業者ノ編成シタル工作班ノ組織、構成、配置、車輛及応急処置ニ要スベキ資材ノ所在ハ毎年十一月現在ニ依リ整備シ之ガ状況ヲ十二月二十日マデニ知事、警察署長及市長ニ報告スルモノトス

第十五章 偽装

第二百二十條 警察署長及市長ハ協力シ高層又ハ重要建築物、主要ナル工場、發電所、橋梁、水源地、貯水其他ノ他ニ對シ別ニ定ムル所ニヨリ偽装ヲ行フモノトス

（要偽装建物調査票ハ別紙第九號参照）

第二百二十一條 警察署長及市長ハ協力シ主要ナル石油貯藏槽（タンク）及ガス溜槽（タンク）等ノ所有者又ハ管理者ヲシテ左ノ通り偽装セシムルモノトス（之ガ所在ハ前條参照）

- 一 石油貯藏槽（タンク）及瓦斯溜槽（タンク）ノ外部ハ周圍色ト近似ノ暗色ニ塗装シ周圍色不特定又ハ複雑ナル時ハ「ブターブルー」色（註鼠色ト空色ノ合シタ黒ズンダ色）ニ塗装スルモノトス
- 二 輕油ニシテ平素暗色塗装スルトキハ貯藏ノ目ハ違セラレサルカ如キ已ムヲ得ザルモノハ「ブターブルー」色ニ塗り替エ又ハ不燃（耐火）材料ニテ適切ナル掩覆偽装ヲ為シ得ル計畫準備アル場合ニ限り銀色塗料其他ノ明色塗料ニテ塗装スルコトヲ得
- 三 自己設置スルモノハ右ニ依リ整備スルコト

第四編 營造物ノ防護

第二百二十二條 市廳舎ノ防護方法及防空機關ノ編成配置ハ年度防空計畫ノ定ムル所ニ依ル

第二百二十三條 市長ノ指定シ足ル市營造物ノ所屬長ハ關係警察署長ト協議シ防空警報ノ受領並ニ傳達、通信連絡燈火管制消防其他ノ防護ニ關シ防空計畫ヲ定ムルモノトスル

第二百二十四條 市長ハ前條ニ順次其ノ所管ニ屬スル造営物ニ付防空計畫ヲ設定セシムルモノトス

第五編 設備及資材ノ整備

第二百二十五條 市長ハ防空全般特ニ防護ニ重点ヲ置キ之ガ設備及資材ヲ整備スルモノトス

第二百二十六條 官公庁又ハ堅及氏ノ管理スル營造物並ニ特設自衛團ヲ設置スベキ工場、會社、銀行、商店、病院興行場、事業場、集會場、學校及之ニ準ズルモノハ前條ニ準シ防空實施ニ必要ナル設備、及資材ヲ整備スルモノトス

第二百二十七條 市長ハ市内ニ於ケル防空ニ必要ナル設備材料ノ製造業者ヲ年度防空計畫ニ明ラカニスルモノトス

第二章 防空監視

第二百二十八條 群長及當番舟ハ標識眼鏡「ラヂオ」「ノロシ」花火手廻「サイレン」等ヲ整備スルモノトス

第三章 防空通信

第二百二十九條 無線電信ヲ有セザル船舶（概ネ汽船以上トシ電燈設備ヲ有スルモノヲ基準トス）ニハ「ラヂオ」受信機ヲ整備スルモノトス

第四章 防空警報

第二百三十條 市長ハ速ニ一斉操作ヲ為シ得ル警報機ヲ整備スルモノトス

第二百三十一條 市長ハ「サイレン」使用不能ノ場合ヲ考慮シテ手廻「サイレン」及警報傳達要具ヲ整備スルモノトス

第二百三十二條 市長ハ島嶼部ニ對スル警報傳達ノ万全ヲ期スル為メ適當ナル資材ヲ整備スルモノトス

第二百三十三條 市長ハ速ニ掲燈（吹旗）信號燈ヲ整備スルモノトス

第五章 燈火管制

第二百三十四條 市長ハ警察署長ト協力シ街路燈類（公共用燈火一般屋外等ヲ含ム）ノ管制ハ一定地域内ノモノヲ統一のニ行フ様整備スルモノトス

第二百三十五條 市長ハ警察署長ト協力シ準備管制時又ハ警戒管制時ニ於テ点燈シアル主要ナル屋外燈類ヲ空襲管制時ニ於テ統一のニ消燈シ得ベキ設備ヲ整備スルモノトス

第二百三十六條 警察署長ハ市長ト協力シ各家庭ヲシテ燈火管制ノ資材ヲ整備セシムルモノトス

第二百三十七條 警察署長ハ市長其他ト協力シ航路標識燈及氣象特報暴風警報用信號等ノ管制設備ヲ整備スルモノトス

第二百三十八條 警察署長ハ市長及關係業者ト協力シ漁業用燈類ノ管制設備又ハ資材ヲ整備スルモノトス

第二百三十九條 規模大ナル建築物工場等ニ在リテハ電燈配線ハ可及的統一の管制ニ為シ得ル如ク整備スルモノトス

第二百四十條 警戒警報發令後直チニ管制シ得ザル工場火焰類ハ工業ノ管理者又ハ之ニ準ズルモノニテ速ニ之ガ管制設備ヲ整備スルモノトス

第六章 防護監視

第二百四十一條 市長ハ警察署長ト協力シ防護監視ノ位置ヲ選定シ之ガ哨舎並ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス

第二百四十二條 防護監視ニハ概ネ左ノ資材ヲ整備スルモノトス

- 一 双眼鏡
- 二 航空機識別圖
- 三 投下彈識別圖
- 四 報告用具

第二百四十三條 前二条ノ規定ハ防護監視ヲ立哨セシムルモノノ管理者又ハ之ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

第七章 消防

第二百四十四條 市長ハ警察署長ト協議シ自然水ノ利用施設ヲ為スト共ニ消防機械器具貯藏槽（池）消火栓其他消防ニ関スル器具ヲ整備シ之ニ第四十三條ニ定ムル標識ヲ付スルモノトス

第二百四十五條 警察署長ハ市長ト協力シ特設自衛團體ヲ設置スル工場、鉱山事業場、會者、銀行商店、病院、興行場、集會所、学校及其他ヲシテ消防用器具ヲ整備セシムルモノトス

第二百四十六條 警察署長ハ市長ト協力シ會社、工場、倉庫及店舗（引火シ易キモノ特ニ各種油其他危險物貯藏所、火薬貯藏所、ガソリンスタント瓦斯溶接所セルロイド製造所等）又ハ規模大ナル建築物ノ所有者又ハ管理者ヲシテ消防用器具ヲ整備セシムルモノトス

第二百四十七條 警戒警報發令アリタルトキハ各戸又ハ隣保班ノ適當ナル箇所ニ防火用水、防火用砂其他防火用器具ヲ整備スルモノトス

第二百四十八條 構内ニ在泊スル船舶ハ火災ニ必要ナル消防危惧ヲ整備スルモノトス

第八章 防毒及防護

第二百四十九條 市長ハ警察署長ト協議シ、空ノ要務ニ従事スベキモノノ防毒面、防毒衣其他防毒又ハ消毒用資材ヲ整備スルモノトス

第二百五十條 醫師、齒科醫師、薬剤師、看護婦其他特別技能者ハ速ニ防毒面防毒衣其他ノ資材ヲ整備スルモノトス

第二百五十一條 市長ハ警防團其他ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス

第二百五十二條 本市内各家庭ニ救急薬品ノ整備ヲ為サシムルモノトス

第九章 避難及待避

第二百五十三條 市長ハ警察署長ト協力シ先ニ必要ナ場所並ニ避難ニ必要ナル防護室準防護室公共防空壕又ハ公共用待避施設ヲ整備スルモノトス

第二百五十四條 市長ハ都市計画上定メアルモノノ外公園緑地ヲ整備スルモノトス特ニ防空緑地計畫ニヨリ繼續事業トシテ整備スルモノトス

第二百五十五條 電気、瓦斯、水道ノ工作物軌道、工場、学校、劇場、市場等ノ施設ノ管理者又ハ所有者ハ従事者又ハ収容者ノ待避施設ヲ整備スルモノトス

第二百五十六條 防空壕ハ各戸毎ニ又ハ隣保班毎ニ之ヲ構築整備スルモノトス

第十章 其他

第二百五十七條 市長ハ工作ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス

第二百五十八條 市長ハ警察署長ト協議シ本編ニ掲クル防空各般ニ必要ナル資材ヲ整備スルモノトス

第二百五十九條 本市ニ對スル國庫補助ニヨル整備スベキ設備資材ハ年度防空計畫ニ定ムル所ニ依ル

別紙第一號

廣島市家庭防衛隣保班組織要領

第一 組織並目的

- 一 廣島市町内會愛隣組ヲ以テ家庭防衛隣保班（以下單ニ隣保班ト称ス）ヲ組織スルモノトス
- 二 隣保班ハ隣保相扶ノ精神ヲ基調トシ空襲ニヨリ生ズベキ危害ヲ防止シ又ハ之ニ因ル被害ヲ軽減スルタメ警報傳達、燈火管制、消防其他ノ防護ニ共助スルモノトス

三 隣保班ハ警防團ノ一翼トシテ常ニ緊密ナル連絡ヲ保持シ相互一帯ノ精神ヲ以テ行動スルモノトス

第二 役員

隣保班ニ左ノ役員ヲ置ク

一 隣保班長 一名

隣組長ヲ以テ之ニ充ツ

班長ハ班内ニ於ケル防衛業務一切ヲ指導統括スル

班長事故アルトキハ月番之ヲ代理スルモノトス

第三 指導連絡

一 隣保班ノ育成指導ハ主トシテ市長行動ノ指揮統制ハ所管警察署長及其ノ指揮ニ從ヒ警防團長（警防分團長）之ニ當ルモノトス

ニ 町内会長ハ隣保班ノ統括指揮、設備機材、整備対策及警防團（警防分團）其他トノ連絡ヲ圖ルモノトス

第四 任務

一 隣保班ハ応急的自衛行動ヲ原則トスルヲ以テ消防其他ノ防衛ニ付警防団員來着シタルトキハ之ニ讓ルモノナルモ要求アリタルトキハ應援スルモノトス

二 隣保班ハ隣組内ニ於テノミ行動スルモノトス但シ隣接隣班ト共同シ若ハ他ノ隣保班ニ對シ自班警戒ノ要ナキトキハ之ニ應援スルコトヲ得

三 隣保班ハ豫メ班員ノ防火、防毒、非難、救護、傳令等各係ニ定メ置クモノトス

四 隣保班ハ平素在宅スル者ヲ以テ各家庭防衛擔任者ヲ定メ置クモノトス

五 隣保班ハ防衛上必要ナル設備機材ノ整備ニ努ムルモノトス

六 隣保班ハ避難該當者ニシテ防衛活動困難ナル者ヲ調査シ明ラカニ置クモノトス

七 隣保班ハ訓練上左ノ点ニ留意スルモノトス

（一）滅私奉公、國土防衛ノ精神強化ニ重点ヲ置クモノトス

（二）老幼病者、妊婦其他已ムヲ得サル事情アル過程ヨリ強イテ出勤セシメサルコト

（三）可成夜間ノ任務ニ婦人ヲ出勤セシメサルコト

（四）婦人ヲシテ梯子登、火先等ノ如キ危険ナル作業ニ従事セシメサルコト

参考 （廣島縣縣指示要項）

家庭防衛隣保班要項

一 家庭防衛隣保班（以下單ニ隣保班ト称ス）ハ隣保共助ニ基ツキ航空機ノ來襲ニ因リ生ズベキ危害ヲ防止又ハ之ニ因ル被害ヲ軽減スル為メ応急的ニ自家防衛ヲ為スト共ニ平素ニ於ケル火災警防防犯、防諜防疫等ノ自治防衛ヲ為スヲ以テ目的トス

二 隣保班ハ隣保班内ニ於ケル消防、燈火管制、警防傳達、防犯、防疫其他防護ノ共助ヲ任務トス隣保班ニ於イテハ状況ニヨリ消防其他ノ防護ニ付共助ヲ為スモノトス

三 隣保班ハ警察署長及市町村長ノ協議ニヨル指示ニ基キ概ネ左記ニヨリ町内會又ハ部落會ノ隣保組織ニ準據シテ之ヲ組織シ隣保班内ノ活動トシテ之ヲ行フモノトス

（一）隣保共助ニ便ナル區域ニ於テ陸上ニ於テハ概ネ十戸内外ヲ水上生活者ニ於テハ概ネ十隻内外ヲ以テ組織ス

（二）世帯主、主婦、其他活動能力アル者ニシテ平素住宅（在船）スル者ヲ以テ其家庭ノ防衛担任者トス

（三）隣保班ニ班長及副班長各位地名ヲ置キ班ノ指導統制ニ任ズ概ネ班長ハ町内會又ハ部落會ノ隣保班長ヲ以テ之ニ充テ副班長ハ班内各戸ノ推薦ニヨリ之ヲ定ム

四 隣保班ニ警察署、市町村、警防團トノ連絡機關ニハ町内會長又ハ部落會長ヲ以テ之ニ充ツ

五 警察署長ハ隣保班ヲ指導監督ス警防團長（分團長）ハ警察署長ノ命ヲ受ケ隣保班ヲ指導ス

六 市町村長ハ隣保班ヲ育成スルト共ニ其擔當スル防空業務ニ付之ヲ指導ス

七 隣保班員ハ防空上必要ナル設備資材ヲ整備スルノ外班ニ於テ必要ナル設備資材ハ共同ニテ之ヲ整備スルモノトス（別紙参照）

八 隣保班ハ隨時訓練ヲ實施シ防空其他ノ警防ニ関スル必要ナル研究ヲ為スモノトス

九 隣保班員中井戸、梯子ノ所有者ハ表入口ノ見易キ箇所（井、[梯子印]）ヲ表示スルモノトス

十 隣保班ニ関スル經費ハ班員ノ負擔トスルヲ原則トス 但シ必要ニ依リ市町村費又ハ部落協議員ヨリ之ヲ支出シ又ハ補助スルコトヲ得

十一 隣保班ハ別記第一號様式ニヨリ編成表ヲ作成シ町常會長又ハ部落會長ニ報告スルト共ニ班内ニオケル防護計畫ヲ樹立シ置クモノトス

十二 町常會長又ハ部落會長ハ別記第二號様式ニヨリ其編成表ヲ作成シ警防團長（分團長）ニ提出スルモノトス

第一號様式

何町〇〇家庭防衛隣保班編成表																
世帯主氏名	職業別	家庭数	隣保員数	防衛担当者氏名	家庭防衛器具其他											摘要
					消火器	バケツ	浴槽	屋外貯水槽	水道ホース	井戸	砂箱	防毒面	シヤベル	梯子	何々	
備考	一、本表ハ町内會長又ハ部落會長ノ許ニ備付ケ移動アル毎ニ整理スルモノトス															

第二號様式

昭和 年 月 日		町内會長（部落會長）			何 某							
何長家庭防衛町内會（部落會）編成表												
町内會長 （部落會長）	組 合 内 戸 数	組合内 組合員数	組 合 ノ 施 設 器 具 其 ノ 他							摘 要		
			消火器	貯水池	井戸	梯子	消火栓	警報用具	何々			

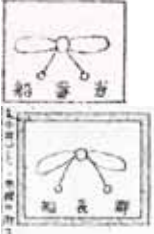
別表

要項七ノ規定ニヨル班員並ニ町内會（部落會）ニ整備スベキ設備資材ハ概ネ左ノ標準ニヨルコト但シ地方ノ状況ニヨリ之ヲ変更スルコトヲ得

各戸ニ整備スベキモノ			各戸ニ整備スベキモノ		
種 別	員 数	摘 要	種 別	員 数	摘 要
防火水	一〇〇立以上 (五斗五升)	二階以上ハ各階ニ設備ヲ要ス	防火水	一立方米以上 (五石五斗)	井戸、池、流水等ヲ利用スルモ可
バケツ	一箇以上	要領八立(四章)程度ノモノ	二人押輕便ポンプ	一台以上	長サー一五米ノホース二本以上ヲ備フルモノ
ホース	若干	水道線井戸ポンプニ取付ケ得ルモノニシテ屋根ニ放水シ得ル程度	綱	若干	非常線用
防火砂	約五〇立以上 (二斗五升)		シヤベル	若干	
古筵	若干		梯子	若干	
火叩	若干		燈火管制用具	若干	残置燈ニ用フルモノ
水柄杓	若干		防空壕	若干	
消防作業被服	所要数	可成活動ノ便ナルモノヲ設備スルコト	警報用具	若干	振鈴ノ如キモノ
燈火管制用具	所要数		メガホン	若干	
懷中電灯、ローソクマッチ	若干		泡沫消火器	一以上	油類ノ火災ニ用フルモノ
防毒面	所要数		防護又ハ監視所	一	
防毒蚊帳	所要数	防毒室を以テ代フルコト得			
手拭	各自二枚平均				
救急剤	若干				
警報旗	二 (赤白、各一)	横三〇センチ縦一五センチノ三角旗(風位ヲ知ル)			

別紙第二號

漁船群監視ニ関スル件

群長船 當番船 配備標準	表示・旗	監視法其他	實施ノ責任者	記事
當番船 一、漁舟一〇隻以内ニ付一隻 二、漁舟五隻ヲ増ス毎ニ一隻 群長・船 一、當番船二隻以外付一隻 二、當番船二隻ヲ増ス毎ニ一隻 三、當番船ノー隻ハ群長船ヲ兼スルコトヲ得		一、當番船ハ漁撈ニ従事スル者ノ外最小限一名ノ事務監視員ヲ乗船セシムルモノトス 二、群長船(當番船)ニハ無線又ハ「ラヂオ」受信機ヲ装備スルモノトス 三、群長船(當番船)及之ニ連絡スル海岸見張所ニ情報通信ニ必要ナル花火(ノロシ)等ニ準備ヲ為シ置クモノトス	水産組合(漁業組合)及之ニ準スル組合	群長船(當番船)ト連絡スル見張ヲ出シ置クモノトス(本件ハ附近監視哨又は漁業組合事務所ヲ利用スルハ好都合ナルベシ) 通信上必要なる規約ヲ定メ置クベシ

別紙第三號

主ナル漁業場調査票					
漁業種類	漁 期	出漁見込漁船数	主要漁場	漁獲物	摘要
(沿岸漁業)					
(1) 打瀬網	周年自六月 盛期至十一月	三〇〇隻	備後灘、安藝灘、廣島湾	エビ	夜間操業スル関係上航海燈兼作業燈使用ス
(2) 鰯流網	自五月 至六月 自九月 至十一月	五〇隻	縣下全海面	サワラ	夜間操業スル関係上作業燈使用ス

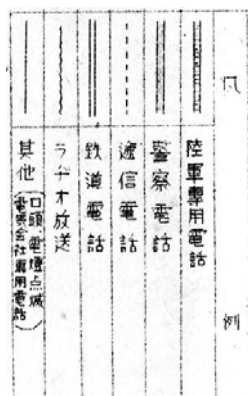
(3) 鯧船曳網	自四月 至十二月	二〇隻	広島湾、安藝灘、備後灘	イワシ	夕方漁獲セル鯧ヲ製造スル際ニ火焰ヲ生ズ
(4) 火カヲ用フル鉾突	自十月 至五月	一五〇隻	縣下前沿岸	チヌ、タナゴ等	カーバイトヲ点シテ集魚シ漁獲ス
(5) 鰻延網	自六月 至十一月	二〇〇隻	同	ハモ	夜間操業スル關係上作業燈ヲ使用ス
(6) あなご延網	自十一月 至四月	一五〇隻	同	アナゴ、ホゴ	同
(7) 牡蠣養殖	自十月 至三月	五〇〇人	縣下干潟海面	カキ	夜間干潮時作業スル關係上作業等ヲ使用シ
(8) 海苔養殖	自十二月 至四月	三〇〇人	広島湾干潟	ノリ	同
(9) 餌虫堀	自十一月 至四月	二〇〇人	広島湾	餌虫	同

別表第四號

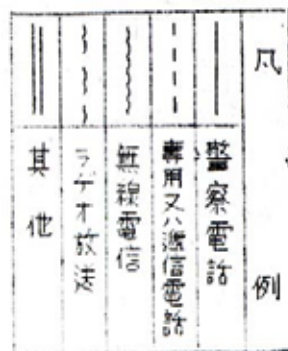
和文通話表

文 字	ア 朝日ノ ア	イ イロハノ イ	ウ 上野ノ ウ	エ 英語ノ エ	オ オノ オ
	カ 為替ノ カ	キ 切手ノ キ	ク 車ノ ク	ケ 景色ノ ケ	コ 子供ノ コ
	サ 櫻ノ サ	シ 新聞ノ シ	ス 雀ノ ス	セ 世界ノ セ	ソ 算盤ノ ソ
	タ 煙草ノ タ	チ 千鳥ノ チ	ツ 鶴亀ノ ツ	テ 手紙ノ テ	ト 富山ノ ト
	ナ 名古屋ノ ナ	ニ 日本ノ ニ	ヌ 沼津ノ ヌ	ネ 鼠ノ ネ	ノ 野原ノ ノ
	ハ 葉書ノ ハ	ヒ 飛行機ノ ヒ	フ 富士山ノ フ	ヘ 平和ノ ヘ	ホ 保険ノ ホ
	マ 燐寸ノ マ	ミ 蜜柑ノ ミ	ム 無線ノ ム	メ 明治ノ メ	モ 紅葉ノ モ
	ヤ 大和ノ ヤ		ユ 弓矢ノ ユ		ヨ 吉野ノ ヨ
	ラ ラヂオノ ラ	リ 林檎ノ リ	ル 留守居ノ ル	レ 蓮華ノ レ	ロ ローマノ ロ
	ワ 蕨ノ ワ	ヰ 井戸ノ ヰ		エ 釣ノアル エ	ヲ 尾張ノ ヲ
数 字	一 数字ノ ヒトツ	二 数字ノ ニ	三 数字ノ 三	四 数字ノ 四	五 数字ノ 五
	六 数字ノ ロク	七 数字ノ ナナ	八 数字ノ ハチ	九 数字ノ 九	〇 数字ノ マル
記 號	ー 長音	ゝ 區切点	L 段落	(下向括弧	) 上向括弧

西部軍司令官（廣島市団長）防空警報傳達系統表



海上



〔備考〕一般船舶二對
スル警報ハ無線電信ヲ
有スルモノニ對シテハ
直接沿岸局漁業無線局
ヲ經テ呉鎮守府司令長
官之ヲ令セラル、モノ
トス

別表第七號

防空通信特定略語

呉鎮守府	クレチン	内海西部海面	ナイセ
西部軍司令部	セイボ	西部軍管区全地区	セセ
広島師團司令部	ヒロ	西中國地区	セチ
呉鎮陸上担任区域及海上区	クレゼン	広島地区	セヒ
呉地区徳山地区	クレトク	警戒警報	ケハ
呉地区	クレ	警戒警報解除	ケカ
呉鎮守府海上区	クゼン	空襲警報	クハ
瀬戸内海	ナイ	空襲警報解除	クカ

別表第八號

指揮連絡報頭末一件様式

通信月日	通信先	通信ノ概要	開始時	終了時	受信者	発信者	受発信者印

〔備考〕 防空ニ関スル指揮又ハ之ガ指揮ヲ受ケタルトキハ朱書キニテ之ガ措置報告ヲ為シタルトキハ墨書ニテ記載スルモノトス

別表第九號

広島地区呉地区一覧表

一 広島地区

広島市、尾道市、福山市、安佐郡、山縣郡、高田郡、豊田郡、御調郡、世羅郡、深安郡

安藝郡ノ内

海田市町、矢野町、熊野町、船越町、府中町、奥海田村、温品村、瀬野村、戸坂村、畑賀村、中野村、坂村、中山村

佐伯郡ノ内

廿日市町、巖島町、五日市長、玖波町、大竹町、津田町、地御前村、原村、宮内村、井口村、石内村、井口村、八幡村、観音村、平良村、大野村、玖島村、木野村、浅原村、吉和村、小方村、栗谷村、砂谷村、水内村、上水内村、友和村、四和村

賀茂郡ノ内

西條町、竹原町、三津町、西高屋村、東高屋村、賀永村、莊野村、早田原村、吉川村、熊野跡村、志和堀村、原村、郷田村、川上村、西志和村、造賀村、下野村、東野村、上黒瀬村、板城村、下三永村

二 呉地区

呉市

安藝郡ノ内

音戸町、大屋村、昭和村、倉橋島村、江田島村、上蒲刈島村、下蒲刈島村

賀茂郡ノ内

内海町、三津口町、野路村中切村組合、川尻町、安登村、郷原村、下黒瀬村、中黒瀬村、乃美尾村

佐伯郡ノ内

飛渡瀬村、中村、高田村、鹿川村、三高村、沖村、大柿町、深江村

別紙第十號

掲燈（吹流）信號燈設置計畫表			
番號	管轄警察署名	設置計画箇所	設置見込年次
1	西警察署	広島市草津町	昭和十六年度以降
2		同 江波町	同
3		同 南観音町	同
4	宇品警察署	同 元宇品町	同
5		同 似島町	同

別紙第十一號

防空警報受領書様式

警報通信用紙 (陸軍関係)	月 日
	西部軍管区全地区
	西中國地区
	広島地区
	(訓練) 空襲警報
	(訓練) 警戒警報
	(訓練) 空襲警報解除
	(訓練) 警戒警報解除

	西部軍司令官發令				
	廣島師團長發令				
	受領時刻	時 分	當務者	發信	
				受信	
	備 考	警報地区防空警報發令官ニハ〇印ヲ付スルコト			

別紙第十一號ノ二

警報通信用紙 (海軍関係)	月 日				
	(訓練) 警報呉鎮守府發令				
	呉鎮陸上担任区域及海上区				
	呉地区及徳山地区				
	呉地区				
	呉鎮守府海上区				
	瀬戸内海				
	内海西部海面				
	(訓練) 空襲警報			(訓練) 空襲警報解除	
	(訓練) 警戒警報			(訓練) 警戒警報解除	
	受領時刻	時 分	當務者	發信	
				受信	
	備 考	警報地区防空警報發令官ニハ〇印ヲ付スルコト			

別紙第十二號

日没日出時刻標準表												
日別 月別	一日				十一日				二十一日			
	日没		日出		日没		日出		日没		日出	
	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分	時	分
四月	5	30	5	58	6	38	5	45	6	47	5	32
五月	6	54	5	21	7	01	5	11	7	09	5	04
六月	7	17	5	00	7	21	4	57	7	26	4	58
七月	7	27	5	00	7	25	5	07	7	21	5	12
八月	7	13	5	19	7	03	5	27	6	52	5	35
九月	6	38	5	43	6	23	5	50	6	09	5	58
十月	5	55	6	05	5	43	6	12	5	30	6	20
十一月	5	18	6	26	5	09	6	39	5	03	6	49
十二月	5	00	6	58	5	01	7	06	5	04	7	13
昭和十七年一月	5	10	7	17	5	18	7	17	5	28	7	15
二月	5	39	7	09	5	49	7	01	5	58	6	51
三月	6	06	6	40	6	14	6	27	6	22	6	14

別表第十三號

漁業用燈火類ノ燈火ノ指定告示（昭和一五. 三. 二二 廣島縣告示一八五號）					
種 類		警戒官制		空襲管制	遮光條件
		乙	甲		
漁 業 用 燈 類	水中集魚燈類	消燈 減光且遮光一隻合計二〇〇燭 以下トスルコト	消燈 減光且遮光一隻 合計一〇〇燭以 下トスルコト	消燈 但シ訓練ノ場合ニ於 テハ一隻合計五〇燭 以下ニ減光且遮光シ テ残置スルコトヲ得	光源ノ下端ヨリ遮光具ノ下端ニ引キタル線ガ光線ノ下方ニ向ヒ且水面ト二十度以上ノ角ヲ為スコト
	水上集魚燈類				光源ヨリ發スル直遮光及水面ヨリノ反射光ガ上空ニ向ハザルコト
	流網延定置網其他之ニ類スルモノノ標識燈	消燈 減光且ツ遮光漁具ノ長サ一〇〇〇米ニ付一燈トシー燈二燭以下トスルコト	消燈	消燈	燈器水平ノトキ光源ノ下端ヨリ遮光具ノ下端ニ引キタル線ガ三十度以上ノ上空ニ向ハザルコト
	作業燈	消燈 減光且ツ遮光一燃五燈トシー一隻合計三〇燭以下トスルコト	消燈	消燈	直遮光ガ舷外及上空ニ向ハザルコト

別紙第十三號ノ二

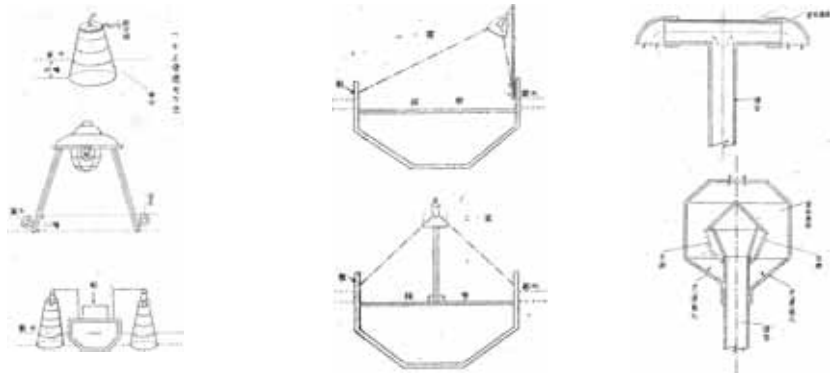
漁業用燈火管制參考圖

一、水上燈遮光方法

二、作業燈遮光方法

舷外及上空遮光ノ状態

鰯乾燥用煙突火焰完成參考圖



一隻二燈以上ヲ使用スル場合ハ之ヲ一ヶ所ニ集中セザルコト

別紙第十四號

空襲管制實施及訓練ノ時ニ於ケル自動車及車輛ニ用ユル燈火ノ告示

一、空襲管制實施及訓練ノ時ニ於テ自動車ニ用フル光

(1) 自動車ノ種類

(イ) 防空ニ従事スルタメ縣廳、警察署、警防團、市役所、町村役場及放送局ニ於テ使用スル自動車但シ市役所、町村役場及放送局ニ於テ使用スル自動車ハ所轄警察署長ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ル

(ロ) 警防團用自動車

(ハ) 防空上必要ナル鉄道及通信官署ノ自動車

(ニ) 緊急已ムヲ得ザル場合ニ使用する鉄道及通信官署ノ業務用自動車

(ホ) 救急用自動車

(2) 光の秘匿ノ程度

透視距離二百米以下ニシテ (3) 項ノ様式ニヨリ標識ヲ車輛ノ前後二各一個宛附シタル場合ハ前照燈及側燈ハ合計二燈以下トシ角燈ノ燃器ヨリ十米ノ地点ニ於テ光軸ニ垂直ナル面ニ於ケル最大照度〇. 七「ルクス」以下ニ減光シ且遮光スルコト

遮光條件ハ自動車水平ノトキ燈器ヨリ直接發スル遮光ハ十五度以上ノ上空ニ向ハザルコト但シ鉄道及通信官署ノ自動車ニシテ其廳ニ於テ別ニ定メアルモノハ之ニ從フコトヲ得

(3) 車輛ノ前後ニ附スベキ標識ノ様式

警察署用	示
縣廳、市役所、町村役場用	公
警防團用	★
鉄道官署用	工
通信官署用	〒
放送局用	放
救急用	+

二、空襲管制實施及訓練ノ時ニ於テ自轉車ニ用ユル光

(1) 自轉車ノ種類

(イ) 防空ニ従事スルタメ縣廳、警察署、警防團、市役所、町村役場及放送局ニ於テ使用スル自轉車但シ市役所、町村役場ニ於テ使用スル自轉車ハ所轄警察署長ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ル

(ハ) 防空上必要ナル鉄道及通信官署ノ自轉車

(ニ) 緊急已ムヲ得ザル場合ニ使用する鉄道及通信官署ノ業務用自轉車

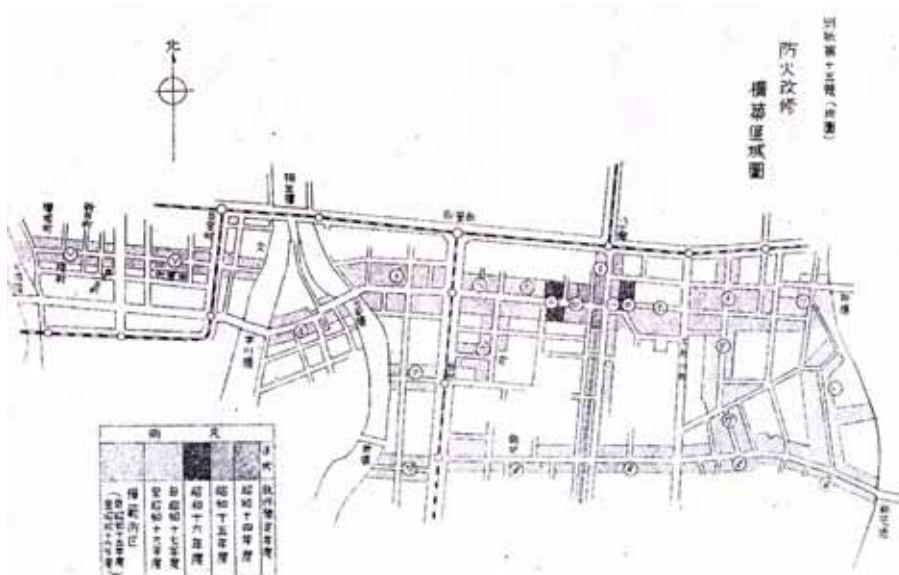
(2) 光の秘匿ノ程度

一燭以下トシ燈器水平ノトキ其光源ヲ地表上三百米以上ノ何レノ点ヨリモ認メ得ザルヨウ遮光スルコト但シ鉄道及通信官署ノ自轉車ニシテ其廳ニ於テ別ニ定メアルモノハ之ニ從フコトヲ得

(3) 車輛等ニ附スベキ標識ノ様式ハ前項自動車ノ標識ニ準ス

別紙第十五號 (附図)

防火改修構築區域圖



別紙第十三號

防火改修構築区域表

執行豫定年度	區域（府圖参照）	改修壁面積(坪)00
昭和十四年度	イ	5,000 00
昭和十五年度	ロ ハ 及東魚屋町(模範街区)ノ一部	3,000 00
昭和十六年度	ニ 及東魚屋町(模範街区)ノ一部	4,783 00
自 昭和十七年度 至 昭和十九年度	ホ ヘ ト ナ リ ス ル オ ワ カ ヨ タ レ ソ	868,702 50
計		81,485 50

別紙第十六號

防空救護組織要綱

第一 總則

一、空襲ニヨル傷病者(毒瓦斯患者ヲ含ム以下之ニ同ジ)ノ救護ハ左ノ救護機関ニ於テ之ヲ行フコト

(一) 警防團救護部(班)

(二) 救護所

(三) 特設救護班

二、書ク救護機関ノ組織、編成、擔任區域、業務等ニ関シテハ法令及本要綱ニ依ルノ外廣島縣防空計画市町村防空計画ノ定ムル所ニ依ルコト

三、本要綱ハ原則トシテ防空法第二條ノ規定ニヨル指定市町村ノ區域ニ之ヲ適用スルモノナルコト

四、前項以外ノ町村ニ在リテハ本要綱ニ準據シ救護所ヲ指定シ且特設救護班ヲ設ケ置クコト

第二 警防團救護部(班)

一、警防團救護部(班)ハ空襲時現場ニオケル傷病者、救急處置、收容等ノ應急救護業務ニ従事スルコト

二、警防團救護部(班)ハ必要ニ應ジ其区域内ニ應急處置所ヲ設置スルコト

三、警防團救護部(班)ハ常ニ救護所、特設救護班等ト緊密ナル連絡ヲ保持シ傷病者ノ救護上遺漏ナキヲ期スルコト

四、警防團救護部(班)ハ消防機関、防毒機関ト特ニ緊密ナル連絡ヲ保持スルコト

五、警察署長ハ医師会ト協議シ警防團救護部(班)ノ部(班)長等ニハ成ルベク医師ヲ以テ之ヲ充ツルコト

第三 救護所

一、救護所ハ主トシテ空襲ニヨル傷病者ノ治療、收容ヲ擔當スル

二、救護所ハナルベク既存ノ救護所防護室、官公署ノ管理スル診療所、一般診療所及之ニ属スル医師、歯科医師、薬剤師、看護婦等ヲ以テ之ニ充ツルコト

尚一時ニ多数患者ノ救護ヲ要スル場合アルベキヲ豫想シ学校寺院其他適當ト認ムル場所ヲ救護所トシテ指定シ置クコト

三、救護所ハ敏速ニ救護ノ処置ヲ講ジ得ル様成ルベク多数之ヲ配置スルコト

四、警察署長及市町村長ハ協力シ廣島縣防空計畫又ハ知事ノ指示ニ基キ関係官公署及醫師會、歯科医師會又ハ薬剤師會ト協議シ當該市町村ノ区域内適當ナル箇所ニ救護所ヲ開設シ区域内ノ醫師、歯科医師、薬剤師、看護婦、女学生、國民学校高等科女子上級生、女子青年団員及其他ノ者ヲシテ救護ニ従事セシムル計畫ヲ設定スルコト

- 五、警察署長及市町村長ハ前項ノ計畫ニ基キ看護婦會、女子青年団、学校當局等ト空襲時救護ニ従事スベキ者ノ出勤等ニ関シ豫メ協議ヲ為シ置クコト
- 六、醫師會、歯科醫師會ハ第四項ノ計畫ニ基キ所属ノ醫師、歯科医師ヲシテ救護所開設セシメ救護業務ニ従事セシムルコト
- 薬剤師會ハ第四項ノ計畫ニ基キ所属ノ薬剤師ヲシテ救護所ニ於テ調剤ノ業務セシムルコト
- 七、救護所ノ所有者又ハ管理者ハ警戒警報發令アリタルトキハ直チニ救護所ヲ開設シ何時ニテモ救護ヲ為シ得ル如ク設備資材其他諸般ノ準備ヲ為スコト
- 第四 特設救護班
- 一、知事及市町村長ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スル者以外ノ所属ノ現有機関ヲ以テ直屬救護班ヲ設ケ知事警察署長又ハ市町村長ノ支持ヲ受ケ警防團救護部(班)又ハ救護所ノ應援ニ従事セシムルコト
- 二、醫師會、歯科醫師會ハ警防團救護部(班)又ハ救護所ニ於テ救護ニ従事スル者以外ノ所属ノ醫師、歯科醫師ヲ以テ適宜救護班ヲ設ケ知事、警察署長又ハ市町村長ノ指示ヲ受ケ他ノ救護機関ノ應援其他救護業務ニ従事セシムルコト

別紙第十七號

防空建築規則抜粋(昭和十四年二月十七日内務省令第五號)

第一條 市街地建築物法第十二條ノ規定ニヨル建築物ノ構造設備又ハ敷地ニ関シ防空上必要ナル事項ハ本例ノ定ムル所ニ依ル

第二條 本令ハ内務大臣ノ指定スル区域ニ之ヲ適用スル

第三條 本令ニ於ケル用語ハ左ノ例ニヨル

- 一、耐火木材トハ耐火液ヲ注入シタル木材ニシテ内務大臣ノ定ムル規格ニ適合シタルモノヲ謂フ
- 二、床又ハ屋根ノ耐弾構造トハ鉄筋「コンクリート」造(鉄骨鉄筋「コンクリート」造ヲ含ム以下之ニ同ジ)ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ謂フ
- (イ) 板ノ厚サハ四十センチメートル以上ニシテ各部分ニオケル鉄ト「コンクリート」トノ容積比ハ〇.〇四以上且複筋及繫筋ヲ配置シ主筋ノ間隔ハ十五センチメートル以下ト為シ上下ノ鉄筋ハ千鳥ニ配シ適當ニ溶接シタルモノ
- (ロ) 版ノ圧特ニ大ナルモノ等ニシテ地方長官(東京府ニ在リテハ警視總監以下之ニ同ジ)前號ト同等以上ノ耐弾力在リト認ムモノ
- 三、防護扉トハ左ノ各號ノ位置ニ該當スルモノヲ謂フ
- (イ) 鉄製ニシテ鉄板ノ厚ノ合計三ミリメートル以上且防毒上有効ナル構造ヲ有スルモノ
- (ロ) 木造ニシテ厚六センチメートル以上且防毒上有効ナル構造ヲ有スルモノ
- (ハ) 其他地方長官前各號ニ準ズト認ムルモノ

第十四條 防護室ノ構造設備ハ左ノ規定ニ依ルベシ

- 一、收容室ト前室トニ区畫シ又ハ臨時區畫ノ設備ヲ為スコト但シ地方長官防護室ノ位置其他ノ状況ニヨリ支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニアラズ
- 二、收容室ノ床面積ハ百平方米メートルヲ超エザルコト但シ地方長官建物ノ用途其他ノ状況ニヨリ已ムヲ得ズト認メ又ハ支障ナシト認ムル時ハコノ限リニアラズ
- 三、上部ノ床又ハ屋根ノ耐弾構造ト為スコト但シ防護室ノ上部ニ二以上ノ版アル場合ニ於テ地方長官支障ナキト認ムルトキハ耐弾構造ノ條件ヲ輕減スルコトヲ得
- 四、周壁ハ鉄筋「コンクリート」造ト為スコト但シ建物ノ外壁ニ接シ且第一階以下ノ階ニ防護室ヲ設クル場合ニハ其部分ノ周壁ハ特ニ堅固ナル構造ト為スベシ
- 五、防護ニ際シ使用スル出入口ニハ防護扉ヲ設クルコト
- 六、外壁ニ設クル開口ハ其面積ヲ三平方メートル以下ト為シ且第二階以上ノ階ニ在ルモノニ付テハ防護扉ノ類ヲ設ケ又ハ之ニ代ル臨時設備ヲナシ得ルモノト為スコト
- 七、外壁ニ非ザル周壁ノ開口ニシテ面積四平方メートルヲ超ユルモノニハ防護又ハ扉ノ類ヲ設クルコト
- 八、出入口一ナル場合ニ於テハ適當ナル位置ニ非常脱出口ヲ設クルコト
- 九、防毒上有効ナル構造トナスコト

別紙第十八號

防空壕構築要領

第一 總則

- 一、防空壕ハ投下彈ノ破裂ニ基ヅク彈片、爆風等ニ因ル危害サラニ出来得レバ毒瓦斯ニ因ル危害ヲ防止スルコトニ留意シテ構築スルコト
- 二、防空壕ハ応急の定費施設ナルモ防護活動ニ便ナル如ク其位置、規模、構造等ヲ決定スルコト
- 三、防空壕ハ成ルベク各戸ニ其敷地内空地ニ設クルヲ原則トスルコト但シ敷地ノ状況ニヨリテハ近隣共同シテ設クルモ妨ゲナキコト
- 四、防空壕ハ成ルベク小規模ノモノヲ分散シテ設クルコト大規模ノモノニアリテモ二十人程度ヲ限度トスルコト

五、小型防空壕ト稱スルハ一般家庭ノ用ニ供スベキ収容人員五人程度ノモノヲ大型防空壕ト稱スルハ作業場集合住宅等ノ用ニ供スベキ人員二十人程度ノモノヲ謂フ

第二 位置

- 一、防火ソノ他ノ積極的防護活動ニ便ナルト共ニ家屋ノ崩壊、火災等ノ場合速ニ安全地帯ニ脱出シ得ル位置ニ設ク
- 二、成ルベク分散シテ配置資格防空壕間ノ間隔ハ大型防空壕ニ在リテハ一〇米（五間五分）以上小型防空壕ニ在リテハ五米（二間八部）以上ト為スコト
- 三、危険物貯蔵庫瓦斯「タンク」石油「タンク」等ノ附近ヲ避クルコト
- 四、石造、煉瓦造等、崩壊ノ虞アル建造物塀其他ノ工作物ノ附近ヲ避クルコト、已ムヲ得ズ之等ニ近接シテ構築スル場合ニ在リテハ崩壊ニ因ル危害ノ防止ニ留意スルコト

第三 型式及規模

一、防空壕ハ成ルベク掩蔽型ト為シ已ムヲ得ザル場合ニハ開放型ト為スコト妨ゲザルコトニ、防空壕ハ地下式ヲ原則トスルコト湧水其他特別ノ事情アル場合ニ於テモ成ルベク半地下式ト為シ已ムヲ得ザル場合ニ限リ地上式ト為スコト

三、大型防空壕ハ成ルベク両側席ト為スコト

四、収容室ノ内法寸法ハ左ノ標準ニ依ルコト

種 類		幅	高	長
小型	片側席	七〇糎(約二尺三寸)	一四〇糎(約四尺六寸)	腰掛長一人當四五糎(約一尺五寸)ヲ標準トシテ決定スルコト
防空壕	両側席	一〇〇糎(約三尺三寸)		
大型	片側席	八〇糎(約二尺六寸)	一五〇糎(約五尺)	
防空壕	両側席	一一〇糎(約四尺)		

防空壕ヲ防毒敵構造ト為ス場合ハ収容室ノ空氣容積ヲ一人當〇. 六五立方米（約二三立方尺）以上ト為スヲ要スルヲ以テ概ネ左ノ標準ニ依ルコト

種類	幅	高	長
片側席	八〇糎(約二尺六寸)	一五〇糎(約五尺)	腰掛長一人當五〇糎(約一尺七寸)ヲ標準トシテ決定スルコト
両側席	一四〇糎(約四尺六寸)	一六〇糎(約五尺三寸)	同 五五糎(約一尺八寸)ヲ標準トシテ決定スルコト

五、腰掛ハ奥行三十糎（約一尺）高サ三十六糎（約一尺二寸）ヲ標準ト為スコト

六、出入口ノ幅ハ六〇糎（約二尺）ヲ標準ト為スコト

七、防空壕ノ敷地面積ハ概ネ一人當一五平方米（約〇. 四五坪）ヲ標準トシテ決定スルコト

第四 構造

収容人員	敷地面積
五人	七. 五平方米（約二. 三坪）
二十人	三〇. 平方米（約九坪）

第四 構造

一、地下式防空壕ノ構造ハ左ニ依ルコト

（イ）壁体

地質軟弱ナル場合ニハ土留壁ヲ設クルコト土留壁ノ杭ニハ丸太又ハ角材ヲ用ヒ土留板ニハ板波型鉄板（生子板）等ヲ用フルコト

（ロ）掩蓋

（一）掩蓋ハ梁及板ニテ天井ヲ設ケ其上部モ厚五〇糎（一尺七寸）程度ノ土砂ヲ盛り又ハ厚三〇糎（約一尺）程度ノ土囊ヲ積ムコト但シ土囊、土砂ノ厚ヲ不必要ニ増加セザルコト

（二）天井板ニハ成ルベク勾配ヲ附シ防水紙布類ヲ敷キ雨水ノ浸入ヲ防グコト

（三）土留板及天井板ノ厚及杭梁ノ大サ間隔ハ左ノ標準ニ依ルコト

板ノ厚(正味)	杭梁ノ間隔	杭梁用 丸太ノ直径(正味) 角材ノ辺長(正味)
一二糎(約四分)	三六糎(約一尺二寸)	七. 五糎(約二寸五分)
一八糎(約六分)	五四糎(約一尺八寸)	七. 五糎(約二寸五分)
二四糎(約八分)	七二糎(約二尺四寸)	九糎(約三寸)

（ハ）床面

床面ニハ排水溝及溜枿ヲ設ケ必要ニ應ジ板、砂利、藁等ヲ敷クコト

（ニ）出入口

（一）出入口ハ成ルベク二箇所ヲ設クルコト

出入口一箇所ナル場合ハ之ト距リタル位置ニ非常ロヲ設ケルコト

（二）収容室ニ弾片、破片、爆風等ノ直接侵入セザル如ク出入通路ヲ屈折シテ設クルカ又ハ防護塀ヲ設クルコト

（三）出入通路ハ斜路又ハ階段ト為シ雨水ノ流入セザル如ク防水ロヲ昂上シ又ハ溝ヲ設クルコト

(ホ) 非常口

非常口、梯子、足掛り等ヲ設ケ脱出ニ便ナル構造ト為スコト

二、地上式防空壕ノ構造ハ左ニ依ルコト

(イ) 壁体

壁体ハ内側ニ板壁、支柱等ヲ設ケ衝撃、振動ニヨリ崩壊セザル如ク左ノ何レカニ依リ堅固ニ構築スルコト

(一) 外側ニ土砂ヲ盛上ゲタルモノ

厚一〇〇糎（三尺三寸）以上

(二) 外側ニ土砂ヲ充填セル箱又ハ土囊ヲ組積トスルモノ

厚 七〇糎（約二尺三寸）以上

(三) 二重壁ノ間ニ土砂ヲ充填セルモノ

厚 七〇糎（約二尺三寸）以上

(四) 二重壁ノ間ニ煉瓦及石等ヲ充填セルモノ

厚 五〇糎（約一尺七寸）以上

(ロ) 掩蓋其他

地下式防空壕ノ場合ニ準ズルコト

三、半地下式防空壕ノ構造ハ地下式及地上式防空壕ニ準ズルコト

四、防護塙ノ構造ハ地上式防空壕ノ壁体ニ準ズルコト

第五 防毒の構造

一、出入口、非常口ニ氣密扉ヲ取付且ツ成ルベク其後方一米（三尺三寸）以上ノ處ニサラニ氣密扉又ハ防毒幕ノ類ヲ設クルコト

氣密扉ハ爆風ノ直接当ラザル如ク出入通路ヲ屈折シテ設クルコト

(イ) 氣密扉

氣密扉、救戸ニ薄鉄板（トタン板）又ハ不滲透性紙布ノ類ヲ貼付ケタルモノトシ其取付ハ梓木ニ切込ヲ設ケ摺合セニハ羅紗（フェルト）ノ類ヲ用フルコト

(ロ) 防毒幕

(一) 排開式

排開式防毒幕ハ不滲透性ノ布ヲ左右二枚用ヒ中央二十糎（約七寸）以上重ネ合ワセタルモノトシ其取付ハ出入リシ得ル程度ニ於テ棧木ヲ以テ梓木ニ充分打附クルコト

巻クノ裾ニハ砂等ノ錘ヲ附シ床ト密着スルヤウ工夫スルコト

(二) 捲上式

捲上式防毒幕ハ不滲透性ノ布ニ棧木ノ横骨ヲ附シタルモノトシ傾斜セル梓木ニ沿ヒ捲キ揚ゲ得ルヨウ取付クルコト

二、天井、板壁ノ隙間ハ不滲透性ノ紙布ノ類ヲ用ヒテ目張りスルカ又ハ「パテ」粘土等ヲ用ヒテ充填シ氣密ニスルコト

三、不滲透性ノ紙片ニハ「ゴム」引布、防水布、毛布、厚織布「セロファン」紙「バラフィン」紙「ハトロシ」紙等ヲ用ヒ毛布、厚織布等ハ使用ニ際シ水又ハ油ヲ以テ濕スコト

四、換氣及採光ノ為ノ開口又ハ監視孔等ヲ設クル場合ハ隨時之ヲ閉室シ得ル構造ト為スコト

第六 施工

一、防空壕ノ構造ニ當リテハ概ネ左ノ順序方法ニテ施工スルコト

(イ) 収容人員形式、位置及大サヲ決定スルコト

(ロ) 堀ヲ行ヒ其土砂ヲ施工ノ支障トナラザル位置マデ運搬シ置クコト

(ハ) 杭ヲ打ち込ミ支柱ヲ組立ツル等骨組ヲ成スコト

(ニ) 板ヲ張り土ヲ盛り又ハ土ヲ充填スル等周壁及掩蓋ヲ設クルコト

(ホ) 腰掛等ノ設備ヲナスコト

(ヘ) 盛上又ハ充填土ハ二十糎（約七寸）ノ各層毎ニ充分搗キ固メテ盛上クルコト

二、防空壕ノ構築ニ要スル材料及器具ハ成ベク平素ヨリ之ヲ準備シ置クコト

別紙第十九號

要偽装物調査表（昭和十五年十一月末現在）

番號	名 稱	用 途	所在地	備考
1	大日本紡績株式會社廣島人絹工場	人造絹糸製造	廣島宇品町	
2	日本製鋼所廣島製作所	機械製造	全 仁保町	
3	東洋紡績廣島工場	綿糸紡績	全 西蟹屋町	
4	ライジングサン石油株式會社 石油タンク	石油タンク	全 横川町	
5	広島瓦斯電軌皆實工場	瓦斯タンク	廣島市皆実町	
6	日本製鋼所内爆発物貯蔵及火工製造所	爆薬及火工品製造貯蔵	全 仁保町	
7	國道二號線	軍用及物資輸送用	自 岡山縣界 至 山口縣界	主要經過地 廣島市
8	府縣道 廣島松江線	同	自 廣島市 至 双三郡布野村	主要經過地 可部、吉田、三次町
9	同 廣島宇品線	軍用	廣島市	国道二號線ト宇品軍港連絡
10	宇品港市営棧橋 宇品港公共荷揚場	貨客乗降 貨物積卸	同 宇品町	
11	廣島市水源池	上水道浄水及貯水	同 牛田町	

別紙第 號

和文通話表		

○秘

昭和十六年度廣島市防空計畫

目次

第二編 總則……五

第二編 防空方針……五

第三編 防空實施……六

第一章 防空実施ノ開始及終止……六

第二章 防空實施機關……六

第三章 防空監視……六

第四章 防空通信……七

第五章 防空警報……七

第六章 燈火管制……九

第七章 防護監査及防護警報……九

第八章 消防……一〇

第九章 防毒及救護……一一

第十章 避難及退避……一一

第十一章 配給工作及偽裝……一二

第四編 營造物ノ防護……一三

第五編 設備及資材ノ整備……一三

別紙第一號 廣島市防空本部規程……一五

別紙第二號 各種車輛及船舶現在調査表……二二

別紙第三號 廣島市警防團組織編成表……二二

別紙第四號 廣島市警防團出動計画……二七

別紙第五號 特設自衛團組織編成表……三〇

別紙第六號 自動車動員調査表……七一

別紙第七號 防空監視哨要員服務順位呼集方法……七一

別紙第八號 出漁船舶調査表……七二

別紙第九號 漁舟ト陸上トノ情報通信方法系統表……七二

別紙第十號 防空警報傳達系統……七三

別紙第十一號 指揮連絡報指定番號表……七六

別紙第十二號 「サイレン」(汽笛ヲ含ム)所有者及管理者ニ對スル警報傳達……七六

別紙第十三號 防空傳達用警鐘打鐘責任者表……七九

別紙第十四號 警防團警報傳達計畫表……七九

別紙第十五號 島嶼部ニ對スル連絡調査表……九三

別紙第十六號 電燈點滅可能区域表……九七

別紙第十七號 燈火打揚ゲ責任者表……九七

別紙第十八號 島嶼部及漁舟ニ對スル警報傳達方法並ニ責任者表……九八

別紙第十八號ノ一 群長船(當番船)等ニ依ル警報傳達不可能漁舟ニ對スル警報傳達方法責任者表……九八

別紙第十九號 防空警報傳達揭示場所及責任者表……九九

別紙第二十號 ラヂオ聴取場所表……一一〇

別紙第二十一號 汽船會社(支店、代理店出張所ヲ含ム)所屬船舶ニ對スル防空警報傳達方法調査表……一一一

別紙第二十二號 火焰ヲ發スル工場等調査表……一一二

別紙第二十三號 燈火管制狀況檢視場所……一一三

別紙第二十四號 警防分團防護監視所位置表……一一五

別紙第二十五號 主ナル危險物調査表……一一六

別紙第二十六號	消防車其ノ他消防用設備器材配置表……一八
別紙第二十七號	消火栓配置表……二五
別紙第二十八號	消防改修構築区域表……二八
別紙第二十九號	自然水利用区域表……二八
別紙第三十號	防毒業務ニ従事スベキ医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、看護婦表……一六二
別紙第三十一號	防毒用部及救護用
別紙第三十二號	特設救護班員表（医師）……一六五
	同（薬剤師）……一六八
	特別救護班組織編成表……一七一
別紙第三十三號ノ一	廣島市私立病院医院診療所救護所調査表……一七三
別紙第三十三號ノ二	學校救護所調査表……一七七
別紙第三十四號	救護薬品購入系統……一七八
別紙第三十五號	三層以上（地下アルモノハ二階）ノ鉄骨鉄筋コンクリート造ノ建築物調査表……一七九
別紙第三十六號	火災及耐火防毒ノ避難場所調査表……一八一
別紙第三十七號	退避防空壕調……一八九
別紙第三十八號	工作班ヲ編成シムベキ事業者表……一九一
別紙第三十九號	米穀類配給所一覽表……一九二
同	ノ二 寝具ノ種類数量所在地調査表……一九六
同	ノ三 配給ノ用ニ供スベキ車輛及所有者調……二〇四
別紙第四十號	罹災者及救護者ニ配給スベキ食事ノ炊事能力調査表……二〇五
別紙第四十一號	食糧品購入先調査表……二一五
別紙第四十二號	配給従事者應援団体調……二一六
別紙第四十三號	市長ノ指定シタル營造物調査表……二一七
別紙第四十四號	防毒資材ノ製造一覽表……二一八
別紙特第一號	防空監視隊長副隊長哨長一覽表……二二〇

昭和十六年度廣島市防空計畫

第一編 總則

第一條 本計畫ハ昭和十六年廣島縣防空計畫ニ準拠シ廣島市ニ於ケル防空ノ實施並ニ之ニ監視必要ナル設備資材ノ整備ニ関スル事項ヲ規定ス

防空實施ニ関シテハ本計畫ニ定ムルモノヲ除クノ外廣島市永年防空計畫ノ定ムル所ニ依ル

第二條 市長、警察署長、及其他ノ者ニシテ防空計畫ヲ設定スル者ハ昭和十六年三月末迄ニ永年防空計畫ト共ニ設定スルモノトス但シ工場學校ノ防空計畫ハ年度防空計畫ニ全部ヲ計畫スルモノトス

第二編 防空方針

第三條 本年度廣島市ノ防空方針ハ永年防空計畫ニ示シタル方針具現ノタメ特ニ左ノ事項ニ重点ヲ置ク

- 一 消防及防毒ノ施設ヲ增強ス
- 二 避難施設ヲ充實整備ス
- 三 工作班ヲ充實強強化ス
- 四 家庭防衛磷保班ノ防火訓練ノ徹底
- 五 防空監視及情報通信ノ人的組織ヲ三十二班ニ充實整備ス
- 六 空襲管制ヲ空襲警報発令后遅クトモ二分以内ニ短縮ス
- 七 警報傳達（警報、空襲警報）所要時間ヲ短縮ス

第三編 防空實施

第一章 防空実施ノ開始及終止

第四條 市長ハ知事ヨリ防空実施ノ開始又ハ終止令ヲ受領シタルトキハ文書、口頭、又ハ電話ニヨリ警防團及町内會會長ヲ通シ市内全般ニ傳達スルモノトス

第二章 防空實施機關

第五條 廣島市防空本部ノ組織、編成、業務分担等ハ別紙第一號ノ如シ

第六條 本市ニ於ケル各種自動車（自動自轉車ヲ含ム）ノ現存状況ハ別紙第二號ノ如シ

第七條 本市警防團ノ組織、編成及担任業務等ハ別紙第三號ノ如シ

第八條 本市警防團ノ出勤計画ハ別紙第四號ノ如シ

第九條 特設自衛団ノ名稱、組織、編成、並ニ設備資材等ハ別紙第五號ノ如シ

第十條 家庭防衛隣保班ノ組織、編成ハ本市永年計画別紙第一號家庭防衛隣保班組織要領ニ依リ各町内會隣組ヲ以テ組織シ其ノ数六千四百四十三班トス

第十一條 防空実施中使用スヘキ自動車ノ動員系統車輛数ハ別紙第六號ノ如シ

第三章 防空監視

第十二條 廣島市防空監視哨ノ位置ハ廣島市役所廳舎屋上トス

第十三條 防空監視体ノ配置ハ知事ヨリ配置命令ヲ發シタルトキヨリ遅クトモ四時間以内ニ之ガ整備ヲ完了スルモノトス已ムヲ得ザル事由ニ依リ所定ノ時刻ニ配置ニ就キ難キトキハ警察署長又ハ市長ハ応急の監視ノ方法ヲ講ズルモノトス

第十四條 市長ハ警察署長ヨリ知事ノ任命シタル防空監視員ヨリ翌月分ノ勤務日割ノ指示ヲ受ケタルトキハ直チニ之ヲ各本人ニ告知シ置クモノトス

第十五條 防空監視隊長、副隊長及監視哨長等ハ別紙特第一號ノ如シ

第十六條 防空監視対象員ノ呼集順位及呼集方法ハ別紙第七號ノ如シ

第十七條 群長船及當番舟ノ海上ニ於ケル防空監視ノ終始ハ呉鎮守府指令官長ノ通知ニヨル但シ特ニ通知ナキ場合ハ警戒警戒警報發令ヨリ同解除迄ノ間ニ従事スルモノトス

第十八條 本市海面ニ於ケル出漁船舟ノ現存状況ハ別紙第八號ノ如シ

第十九條 漁舟ト陸上トノ情報通信ニ関スル方法系統及実施責任者ハ別紙第九號ノ如シ

第四章 防空通信

第二十條 警察署長市町村長、特別警察受領者、指定警報受領者ニ對スル防空警報傳達系統ノ主系統副系統副々系統ハ別紙第十號ノ如シ

第二十一條 指揮連絡報ノ指定電話番号ハ別紙第十一號ノ如シ

第五章 防空警報

第二十二條 警察署、市、特別警察受領者指定警報受領者ニ對スル警報傳達系統ハ別紙第十號ニ依ル

第二十三條 市内ニ於ケル「サイレン」（汽笛ヲ含ム以下同ジ）所有者又ハ管理者ニ對スル警報傳達方法及吹鳴責任者ハ別紙第十二號ノ如シ

第二十四條 「サイレン」ノ音響到達範囲外ノ地域又ハ「サイレン」使用不能ノ場合ニ於ケル防空警報伝達用ノ警鐘ノ位置管理者伝達方法打鐘責任者者等ハ別紙第一三號ノ如シ

第二十五條 口頭ニ依リ防空警報ヲ傳達スル場合各分團ノ末端責任区域順路従事人員等ハ別紙第十四號ノ如シ

第二十六條 市長ハ防空方針ニ基キ市内ニ對スル防空警報ノ傳達所要時間ヲ短縮スル如ク傳達方法ヲ具体的ニ定ムルモノトス

特ニ島嶼部漁舟ニ對シテハ永年計画ニ定ムル所ニ依リ迅速徹底ヲ期スルモノトス（島嶼部ニ對スル連絡調ハ別紙第十五號参照）

第二十七條 本紙ニ於ケル空襲ニ際シー斉ニ若ハ地域ヲ指定シテ停電セシムル可能区域ハ別紙第十六號ノ如シ

第二十八條 燈火打揚場所ニ使用スル筒煙火保存場所打揚責任者等ハ別紙第十七號ノ如シ

第二十九條 警報傳達困難ナル地域又ハ海上ニ對スル警戒警報（空襲警報アリタルトキ亦同ジ）掲出場所、掲出責任者傳達方法等ハ別紙第十八號ノ如シ

第三十條 一般ニ對シ防空警報ヲ傳達スル場合ノ揭示場所揭示責任者ハ別紙第十九號ノ如シ

第三十一條 防空警報副受信ノ目的ヲ以テ「ラヂオ」ヲ聴取スル箇所ハ別紙第二十號ノ如シ

第三十二條 各汽船會社（支店、代理店出張所ヲ含ム）所屬ノ船舶ニ對スル防空警報傳達方法ハ別紙第二十一號ノ如シ

第六章 燈火管制

第三十三條 本市ノ警戒管制ハ乙程度トス

第三十四條 燈火管制ニ相当ノ時間ヲ要スル燈火ノ内誘蛾燈ノ点在状況及特殊火焰類調査表ハ別紙第二十二號ノ如シ

第三十五條 本市ニ於ケル燈火管制ノ檢視場所ハ別紙第二十三號ノ如シ

第七章 防護監視及防護警戒

第三十六條 本市警防團同分團ノ防空監視所ノ位置別紙第二十四號ノ如シ

第三十七條 防空監視所ノ勤務ハ左ニ依ルモノト任ス

- 一 所長ハ所員ヲ指揮シ航空機及被害状況ノ監視報告ニ任ス
- 二 所長ハ通常所員ヲ監視員二名連絡員一名及控員三名ニ分チ監視中一名ハ航空機ノ監視ヲ他ノ一名ハ被害状況ノ監視ニ當ラシメ連絡員ハ監視員ノ得タル情況ノ報告其他ノ連絡ニ服セシメ控員ハ休憩セシムルモノトス
- 三 所長ハ監視員及連絡員ヲ通常三十分乃至一時間毎ニ在員ト交換セシムルモノトス

隣保班ノ防護監視従事者ハ概ネ三十分毎ニ交代セシムルモノトス

第三十八條 防護警報発令者ハ概ネ左ニ掲クル者ヲ指定セラルルモノトス

一 火災警報及火災警報解除

警察官吏、警防團長、同副團長、同分團長、同副分團長、同消防部（班）長同部員

二 毒瓦斯警戒警報及毒瓦斯警報解除

警察官吏、警防團長、同副團長、同分團長、同副分團長、同消防部（班）長同部員

第八章 消防

第三十九條 警察署長及市長ハ防空実施開始セラレタルトキハ速ニ左ノ事項ヲ点検指導シテ消防ノ万全ヲ期スルモノトス

一 各戸ニ付防火準備ヲ点検シ貯水其他ノ防火資材ノ準備ヲ行動セシムルモノトス

二 警防團ノ消防機械器具ヲ点検シ故障アラバ速ニ修理シ置クコト

三 市内ノ給水設備ヲ点検シ不十分ト認ムルトキハ努メテ応急的ニ貯水鑿井ノ處置ヲ成スコト

四 廣島縣永年防空計画第二百一条第二百二条ノ主要ナル工場、事業上等ノ消防施設ヲ應急急的ニ整備セシムルト共ニ瓦斯及電気工作危険物大量貯蔵所等ノ處置ヲ点検指導スルコト

第四十條 本市ニ於ケル消防活動上危害ヲ及ホス虞アル危険物ノ所在ハ別紙第二十五號ノ如シ

第四十一條 本市ニ於ケル消防車其他消防用設備器材ノ配置状況ハ別紙第二十六號ノ如シ

第四十二條 本市ニ於ケル消火栓ノ配置状況ハ別紙第二十七號ノ如シ

第四十三條 昭和十六年度実施スル防火改修構築区域ハ別紙第二十八號ノ如シ

第四十四條 本市ニ於ケル自然水利用区域ハ別紙第二十九號ノ如シ

第九章 防毒及救護

第四十五條 廣島市防空本部直轄防毒及救護ニ関スル組織、編成業務分掌等ハ別紙第一號廣島市防空本部規定ニヨル

第四十六條 本市ノ防毒及救護ニ従事スベキ医師歯科医師、獣医師、薬剤師、看護婦等ハ別紙第三十號ノ如シ

第四十七條 本市警防團員ニ對スル防毒面及其他ノ防毒用具の現存状況ハ別紙第三十一號ノ如シ

第四十八條 本市ハ左ノ病院ヲ指定シ其管理者ヲシテ所属ノ医師、薬剤師、看護婦等ヲ以テ特設救護班ヲ編成シ警防團救護部又ハ救護所ノ應援其ノ他ノ救護業務ニ従事セシムルモノトス

一 廣島市舟入病院

第四十九條 本市ニ於ケル救護用藥品ハ速ニ整備スルモノトス

第五十條 本市警防團ニ属セザル医師、歯科医師、薬剤師、獣医師、看護婦等ヲ以テ組織スル特設救護班並ニ女学生國民学校高等科生徒、女子青年団員等ヲ以テ組織スル特別救護班ハ別紙第三十二號ノ如シ

第五十一條 本市ニ於ケル私立病院診療所又ハ開業医ニシテ病床アルモノノ学校寺院等ニシテ適當ナルモノヲ救護所所ニ指定シ之ガ収容範圍人員等ハ別紙第三十三號ノ如シ

第五十二條 救護用ノ救急藥品ノ購入系統ハ別紙第三十四號ノ如シ

第十章 避難及退避

第五十三條 市長ハ防空実施ノ開始命令アリタルトキハ警察署長ト協力シ其計画ニ依ル避難所及諸資材ノ準備状況ヲ点検シ避難者ノ収容ニ遺憾ナキヲ期スルモノトス

第五十四條 一般家庭及街路ニ於ケル退避ノ應急的施設ハ防空実施開始セラレタルトキ之ヲ設ケシムルモノトス但シ状況ニ依リ防空実施ノ開始前豫メ準備ヲ命ズルコトアルモノトス

第五十五條 退去ノ時期ハ知事ノ指示ヲ受クルモノト

第五十六條 本市ニ於ケル防護室並ニ準防護室ニ充ツヘキ三層以上ノ鉄骨及鉄筋「コンクリート」造ノ建築物ハ別紙第三十五號ノ如シ

第五十七條 本市ニ於ケル緊急避難場所ハ別紙第三十六號ノ如シ

第五十八條 本市ノ待避施設（隣保班ノ防空壕ヲ含ム）又ハ退避ニ共用シ得ヘキ施設ハ別紙第三十七號ノ如シ

第十一章 配給工作及偽装

第五十九條 市長ハ警察署長ト協議シ七月一日現在ヲ以テ配給ヲ要スル主要物資及運搬材料ヲ調査シ置クト共ニ其状況ヲ其月末迄ニ知事ニ報告スルモノトス

第六十條 本市防空本部直轄工作部ノ組織編成業務分掌ハ別紙第一號ノ廣島市防空本部規定ノ定ムル所ニ依ル

第六十一條 本市永年防空計画第二百十六条ノ整備復舊工作ハ廣島市防空本部規定ノ定ムル所ニ依ル

第六十二條 知事ニ於テ工作班ヲ編成シセムヘキ事業者ハ別紙第三十八號ノ如シ

第六十三條 本市ノ罹災者及救護者ニ配給スベキ食料品及寢具等ノ所在、配給所、配給従者、配給用車輛並ニ其所有者等ハ別紙第三十九號ノ如シ

第六十四條 罹災者及救護者等ニ配給スヘキ食事ノ炊事能力状況ハ別紙第四十號ノ如シ

第六十五條 配給品缺乏シタル場合ニ於ケル購入先及配給品名等ハ別紙第四十一號ノ如シ

第六十六條 配給従事者ニ不足ヲ生シタル場合ニオケル應援団体名等ハ別紙第四十二號ノ如シ

第四編 營造物ノ防護

第六十七條 本市廳舎ノ防護方法及防護機關ノ編成配置ハ別紙第一號ノ如シ

第六十八條 市長ノ指定シタル市營像物ノ所屬長ハ官益警察署長ト協議シ防空報告ノ受領並ニ傳達通信連絡、燈火管制、消防其ノ他防護ニ関シ防空計画ヲ定ムルモノトスル

第七十條 市長ノ指定シタル市營造物ハ別紙第四十三號ノ如シ

第五編 設備及資材ノ整備

第七十一條 本市ハ永年防空計画ニ定ムル設備資材ノ外防空緑地地下道及左ノ資材ヲ整備セントス

設備資材	數量	備考
貯水槽	一五	基本額ハ別ニ指示スルトコロニ依ル
大型消防ポンプ	七	同
小型消防ポンプ	一〇	同
腕用ポンプ	五〇	同
防毒面	六〇〇	同
防毒衣	八〇	同
木造建物防火改修費補助	四,〇〇〇坪	同

第七十二條 市長ハ廣島縣永年防空計画ノ基キ設備及資材ヲ整備スルモノトス

第七十三條 本縣下ニ於ケル防空ニ関スル資材ノ製造販売業者ハ別紙第四十四號ノ如シ

第七十四條 國庫補助ニヨリ本市ニ整備スベキ設備資材ハ別紙第七十一條ノ如シ

別紙第一號

廣島市防空本部規程

第一條 本規程ハ警戒警報又ハ空襲警報ノ発令アリタル時ヨリ警戒警報解除迄ノ間之ヲ適用ス

第二條 廣島市防空本部（以下單ニ防空本部ト稱ス）ハ防空ノ實施業務並ニ防空實施ニ關聯シテ發生シ又ハ發生ノ虞アル各種ノ事態ニ則應シ關係方面ト緊密ナル連絡ヲ圖リ迅速且適切ナル手段方法ヲ講シ以テ之カ完璧ヲ期スルヲ以テ目的トス

第三條 防空本部ハ廣島市役所内ニ之ヲ置ク

第四條 防空本部ハ市長及其ノ指名シタル職員ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 防空本部ニ左ノ部及班ヲ置ク

一 總務部

庶務班

二 情報部

庶務班、警報班、情報班

三 經理部

財務班、會計班

四 水道部

庶務班、工作班

五 土木部

庶務班、土木班、下水道班、營繕班

六 食料部

庶務班、調達班、配給班

七 防毒部

監察班、防毒班

八 救護班

調査班、救護班

九 援護部

庶務班、退去班、避難班、救済班

第六條 各部ノ所營業務概ネ左ノ如シ

一 庶務部

- (一) 部内令達ニ関スル事項
- (二) 防空本部内連絡ニ関スル事項
- (三) 記録ニ関スル事項
- (四) 部員ニ関スル事項
- (五) 他部ニ属セザル事項

二 情報部

一 庶務班

- (一) 部内庶務班並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項
- (二) 隣保班ノ指導ニ関スル事項

二 警報班

- (一) 警報ノ受領及傳達ニ関スル事項
- (二) 軍及関係官廳ヨリノ式命令ニ関スル事項
- (三) 官公衙等トノ通信連絡ニ関スルコト

三 經理部

一 財務班

- (一) 豫算編成ニ関スル事項
- (二) 豫算經理ニ関スル事項
- (三) 市會市參事會並ニ市長專決ニ関スル事項
- (四) 土地家屋物件使用収容補償ニ関スル事項
- (五) 其ノ他財務ニ関スル事項
- (六) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 會計班

- (一) 物品其ノ他ノ調達ニ関スル事項
- (二) 經費支拂ニ関スル事項
- (三) 防空本部員給食ニ関スル事項
- (四) 其ノ他會計ニ関スル事項

四 水道部

一 庶務班

- (一) 配給本支管ノ警備ニ関スル事項
- (二) 防護修理其ノ他ニ要スル資材整備ニ関スル事項
- (三) 勞力資材ノ徴用ニ関スル事項
- (四) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 工作班

- (一) 配水本支管及水管橋ノ防護並ニ應急處置ニ関スル事項
- (二) 水道施設破損ノ復旧工事ニ関スル事項
- (三) 取水場淨水場ノ防護並ニ應急處置ニ関スル事項
- (四) 取水管送水管及送電線ノ防護並ニ應急処置ニ関スル事項
- (五) 上水防毒及消毒ニ関スル事項
- (六) 上水ノ衛生的應急處置ニ関スル事項

五 土木部

一 庶務班

- (一) 防護修理其ノ他ニ要スル資材整備ニ関スル事項
- (二) 勞力資材ノ徴用ニ関スル事項

(三) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 土木班

(一) 道路橋梁堤防及渡船場ニ関スル應急處置ニ関スル事項

三 下水道班

(一) 下水道抽水所及溝渠各種樋門破損ノ應急處置ニ関スル事項

四 營繕班

(一) 偽装及遮蔽ニ関スル事項

(二) 避難所、配給所等ノ建設ニ関スル事項

六 食料部

一 庶務班

(一) 内部業務企画ニ関スル事項

(二) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 調達班

(一) 食料ノ調達ニ関スル事項

(二) 食料ノ保管並ニ関スル事項

三 配給班

(一) 配給実施計画ニ関スル事項

(二) 配給実施ニ関スル事項

七 防毒部

一 監察班

(一) 被害地監察ニ関スル事項

(二) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 防毒班

(一) 防毒業務ニ関スル事項

八 救護班

一 調査班

(一) 要救護者調査ニ関スル事項

(二) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 救護班

(一) 救護業務ニ関スル事項

九 援護部

一 庶務班

(一) 部内庶務並ニ部外トノ連絡ニ関スル事項

二 退去班

(一) 退去者ノ集合及整理ニ関スル事項

(二) 退去者ノ誘導援助ニ関スル事項

三 避難班

(一) 避難場所収容人員及要救護事項等ニ関スル事項

四 救済班

(一) 避難場所ニ於ケル焚出ニ関スル事項

(二) 被服寝具等給與ニ関スル事項

第七條 防空本部長ハ市長自ラ之ニ當リ次長ハ助役ヲ以テ之ニ充ツ、部ニ部長、各班ニ班長ヲ置き市長ハ之ヲ任免ス

必要アルトキハ部ニ副部長班ニ副班長ヲ置き市長ハ之ヲ任免ス

第八條 防空本部長ハ本部ニ屬スル一切ノ業務ヲ指揮統轄スル

本部長及次長故障アル場合ハ本部長ノ指名シタル職員ヲシテ其業務ヲ代行セシムルモノトス

第九條 警戒警報發令アリタルトキハ情報部長ハ直チニ部員ト共ニ所定ノ部署ニ就キ其他ノ部員ハ本部長ノ命ヲ受ケ行動スルモノトス

第十條 空襲警報発令アリタルトキハ本部長ハ直チニ所定ノ部署ニ就クモノトス

第十一條 警戒警報及空襲警報発令中ニ於ケル重要事項ニ付イテハ各部長ハ之ヲ本部長ニ報告スルモノトス

別紙第二號

各種車輛及船舶現在調査票 (昭和十六年二月一日現在)

名稱別市名		廣島市
貨物自動車	二、五噸車以上	103
	二噸車以上	176
	噸半車以上	26
	小型車	143
	三輪車	524
荷車	馬車	468
	牛車	114
	手輓車	1,599
自轉車		33,146
自転車用后車		2,378
自動車運転者	普通	1,462
	小型	1,443
自動車人夫		900
荷車用人夫		762
船舶	発動機船	286
	帆船	116
	小舟	319
	漁舟	531

別紙第三號

廣島市警防団組織編制表

本団 団長 一 副団長 三 常備消防部 部長 一 班長 三 警防員六〇															
分団名	団員 総数	分団 長	副分 団長	消防部			警備部			防毒部			救護部		
				部長	班長	警防 員	部長	班長	警防 員	部長	班長	警防 員	部長	班長	警防 員
青崎分団	110	1	1	1	2	20	1	3	30	1	－	10	1	2	15
矢賀	70	1	1	1	2	20	1	4	40	－	－	－	－	－	－
尾長	150	1	1	1	3	30	1	5	50	1	－	10	1	2	22
荒神	160	1	1	1	3	30	1	4	40	1	2	20	1	2	20
牛田	110	1	1	1	2	20	1	3	30	1	－	10	1	2	15
白島	140	1	1	1	3	30	1	4	40	1	2	15	1	2	16
幟町	190	1	1	1	4	36	1	5	50	1	2	20	1	3	30
竹屋	270	1	1	1	6	60	1	9	90	1	2	20	1	3	30
段原	250	1	1	1	6	60	1	8	80	1	2	20	1	3	30
比治山	210	1	1	1	4	40	1	7	70	1	2	20	1	3	24
仁保	130	1	1	1	3	30	1	4	40	1	－	12	1	－	12
楠那	110	1	1	1	2	28	1	2	20	1	2	13	1	－	10
大河	130	1	1	1	3	27	1	3	33	1	2	16	1	2	16
皆実	140	1	1	1	3	30	1	3	36	1	2	18	1	2	18
宇品	230	1	1	1	4	40	1	4	56	1	3	27	1	3	27
似島	110	1	1	1	2	28	1	2	18	1	－	10	1	－	10
千田	170	1	1	1	3	39	1	3	48	1	2	18	1	2	18
大手	160	1	1	1	3	32	1	4	43	1	2	18	1	2	18
袋町	170	1	1	1	4	36	1	5	47	1	2	18	1	2	18
中島	190	1	1	1	4	41	1	6	56	1	2	18	1	2	23
廣瀬	130	1	1	1	3	37	1	4	38	1	2	13	1	2	13
本川	140	1	1	1	3	32	1	4	43	1	2	13	1	2	13
神崎	210	1	1	1	5	50	1	7	65	1	2	18	1	2	23
舟入	120	1	1	1	2	23	1	3	34	1	2	13	1	2	13
江波	110	1	1	1	2	23	1	3	34	1	－	10	1	－	10
観音	210	1	1	1	5	50	1	7	65	1	2	18	1	2	23
天満	170	1	1	1	4	36	1	5	47	1	2	18	1	2	18
福島	110	1	1	1	2	23	1	3	34	1	－	10	1	－	10
三篠	310	1	1	1	7	73	1	10	20	1	3	117	1	3	29
己斐	150	1	1	1	4	36	1	5	47	1	2	13	1	2	13
古田	118	1	1	1	2	28	1	3	36	1	2	12	1	2	10
草津	172	1	1	1	4	38	1	6	57	1	2	14	1	2	16

合計	5,150	32	32	32	109	1,116	32	148	1,527	31	50	492	31	60	566
----	-------	----	----	----	-----	-------	----	-----	-------	----	----	-----	----	----	-----

分団名	配給部			工作部			海上部			計			摘 要	
	部長	班長	警防員	部長	班長	警防員	部長	班長	警防員	部長	班長	警防員	整備部中一ヶ班海上班 兼務トス	
青崎分団	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	7	95	整備部中一ヶ班海上班 兼務トス	
矢賀	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	6	60		
尾長	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	10	132		
荒神	1	2	14	1	2	13	－	－	－	6	15	157		
牛田	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	7	95		
白島	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	11	122		
幟町	1	2	14	1	2	14	－	－	－	6	18	164		
竹屋	1	2	20	1	2	18	－	－	－	6	24	238		
段原	1	2	15	1	2	14	－	－	－	6	23	219		
比治山	1	2	14	1	2	14	－	－	－	6	20	182		
仁保	1	－	10	1	－	11	－	－	－	6	7	115	整備部中一ヶ班海上班 兼務トス	
楠那	1	－	10	－	－	－	－	－	－	6	8	94	海上部ハ整備部ノ兼務 トス	
大河	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	10	112		
皆実	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	10	122		
宇品	1	2	16	1	2	16	1	2	19	7	20	201		
似島	1	－	10	1	－	10	1	－	11	7	4	97		
千田	1	2	13	1	2	12	－	－	－	6	14	148		
大手	1	2	13	1	2	13	－	－	－	6	15	137		
袋町	1	2	13	1	2	13	－	－	－	6	17	145		
中島	1	2	13	1	2	13	－	－	－	6	18	164	海上部ハ整備部ノ兼務 トス	
廣瀬	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	11	111		
本川	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	11	121		
神崎	1	2	13	1	2	13	－	－	－	6	20	182		
舟入	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	9	103		
江波	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	5	97		
観音	1	2	13	1	2	13	－	－	－	6	20	182	海上部ハ整備部ノ兼務 トス	
天満	1	2	18	1	2	13	－	－	－	6	17	145		
福島	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	5	97		
三篠	1	2	18	1	2	18	－	－	－	6	27	275		
己斐	1	－	10	1	－	10	－	－	－	6	13	139		
古田	1	－	7	1	－	8	－	－	－	6	9	101	海上部ハ整備部ノ兼務 トス	
草津	1	－	13	1	－	12	－	－	－	6	14	150	海上部ハ整備部ノ兼務 トス	
合計	31	50	372	31	28	368	2	2	30	190	435	4,471		

別紙第三號ノ二

廣島市警防團担任區域表

分團名	担 任 區 域
青崎分團	仁保町ノ内打越部落及向洋部落
矢賀分團	矢賀町
尾長分團	尾長町、東蟹屋町、愛宕町、若草町
荒神分團	西蟹屋町、荒神町、猿猴橋町、松原町、大須賀町
牛田分團	牛田町
白島分團	二葉ノ里、東白島町、白島九軒町、白島東中町、白島中町、白島西中町、西白島町、白島北町
幟町分團	上柳町、橋本町、幟町、上流川長、鉄砲町、八丁堀、下柳町、石見屋町、山口町、銀山町、東胡町、斜屋町、胡町、弥生町、堀川町
竹屋分團	薬研堀、下流川町、三川町、平塚町、田中町、竹屋町、鶴見町、宝町、富士見町、昭和町
段原分團	台屋町、京橋町、的場町、金屋町、比治山町、松川町、稲荷町、土手町、段原大畑町、桐木町、段原町、段原末広町、段原東浦町、比治山公園、比治山本町
比治山分團	大洲町、南蟹屋町、段原新町、段原日出町、段原山崎町、段原中町、南段原町、東雲町
仁保分團	仁保町ノ内本浦部落及湊崎部落
楠那分團	仁保町ノ内宇那部落及丹那部落
大河分團	霞町、出汐町、旭町、仁保町ノ内大河部落
皆実分團	皆実町一丁目、皆実町二丁目、皆実町三丁目、翠町
宇品分團	宇品町、元宇品町
似島分團	似島

千田分團	東千田町、千田町一丁目、千田町二丁目、千田町三丁目、南千田町、平野町、東竹屋町
大手分團	國泰寺町、雑魚場町、大手町六丁目、大手町七丁目、大手町八丁目、大手町九丁目
袋町分團	基町、東魚屋町、立町、研屋町、紙屋町、平田屋町、播磨屋町、革屋町、鉄砲屋町、新川場町、中町、下中町、袋町、西魚屋町、小町、塩屋町、尾道町、猿楽町、細工町、横町、鳥屋町、大手町一丁目、大手町二丁目、大手町三丁目、大手町四丁目、大手町五丁目
中島分團	中島本町、天神町、材木町、木挽町、元柳町、中島新町、水主町、吉島長、吉島羽衣町、吉島本町
廣瀬分團	寺町、西引御堂町、廣瀬北町、廣瀬元町、錦町、西九軒町
本川分團	空鞘町、鷹匠町、左官町、十日市町、鍛冶屋町、油屋町、猫屋町、堺町一丁目、堺町二丁目、塚本町
神崎分團	西新町、西地方町、小網町、舟入町、河原町、舟入仲町、舟入本町
舟入分團	舟入幸町、舟入川口町
江波分團	江波町
観音分團	東観音町一丁目、東観音町二丁目、観音本町、西観音町一丁目、西観音町二丁目、南観音町
天満分團	堺町三丁目、堺町四丁目、西大工町、榎町、横堀町、新市町、北榎町、天満町、西天満町、上天満町
福島分團	福島町
三篠分團	楠木町一丁目、楠木町三丁目、楠木町四丁目、大芝町、横川町二丁目、横川町三丁目、三篠本町二丁目、三篠本町三丁目、三篠本町四丁目、新庄町、三滝町、打越町、山手町、中廣町、南三篠町
己斐分團	己斐町
古田分團	古田町
草津分團	草津東町、草津本町、草津浜町、草津南町、庚午町

別紙第四號

廣島市警防團出動計畫

總則

第一條 廣島市警防團本部ハ廣島市役所内ニ置ク

第二條 分團長ハ豫メ分團事務所ノ位置警報命令ノ受領方法及分團員ノ集合場所ヲ定メ團長ニ報告スヘシ

召集方法

第三條 團員ノ召集ハ電話又ハ傳令ヲ以テ之ヲ行フ

第四條 分團長ハ團員ノ召集計畫ヲ樹立シ團長ニ報告スヘシ其ノ変更アリタルトキ亦同ジ

第五條 警報並ニ命令ノ傳達又ハ通信連絡ハ電話マタハ傳令ヲ以テ之ヲ為ス

第六條 分團長ハ警報又ハ命令傳達ノタメ相当数ノ傳令ヲ任命シ置クヘシ

第七條 分団長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ所轄巡查派出所又ハ駐在所ニ傳令ヲ出シ爾後命令受領ニ遺憾ナキヲ期スヘシ

第八條 分團長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ分團事務所ノ電話ニ專任者ヲ附シ受信上過誤ナキヲ期スヘシ

第九條 分團長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ管内所官衙工場其ノ他一般ニ對シ迅速且確實ニ之カ伝達ヲ為スヘシ

第十條 分團長警報ヲ受領シタルトキハ速カニ管内家庭防衛隣保班長ニ連絡ヲ採リ即應シタル活動ヲ促スヘシ

第十一條 海岸其ノ他ニシテ警報傳達通信連絡上不便ナル地域ヲ管轄スル分團長ハ豫メ之ニ備フル專任傳令ヲ定メ置クヘシ

第十二條 分團長豫報ナクシテ「サイレン」「ラヂオ」等ニヨリ警報ノ發令ヲ知り足ルトキハ命ヲ俟タスシテ第七條乃至前條ノ手配ヲ為スヘシ

第十三條 分團長第七條乃至第十二條ニヨリ手配ヲ終了シタル時ハ其ノ旨團長ニ報告スルト共ニ管内ヲ視察シ特異ノ狀況アリタルトキハ都度之ヲ團長ニ報告スヘシ

團員業務分担交代及補助

第十四條 團員ノ業務分担左ノ如シ

(一) 消防部

平時ニ於ケル水火其ノ他ノ災害警防業務ハ分団区域内ニアリテハ直チニ出動シ他ノ区域ハ命令ヲ以テ出勤スヘシ所防空実施ニ當リテハ警防業務ニ服ス

(二) 警備部

平時ニ於ケル災害ノ場合ハ命令ヲ以テ出動シ交通整理警護等ノ業務ニ任シ防空実施ニ際シテハ警報傳達、燈火管制、交通整理警護其他ノ業務ニ服ス

(三) 防毒部

平時ニアリテハ特ニ命令アリタル業務ニ服シ防空実施ニ當リ投下瓦斯彈ノ性能檢知並ニ防毒業務ニ服ス

(四) 救護部（避難所管理ヲ含ム）

平時ニ於ケル災害ノ場合ハ命令ニヨリ防空実施ノ場合ハ直チニ出動シ死傷者ノ救護避難者ノ誘導及避難所管理ニ服ス

(五) 配給部

平時ニ於イテハ命令ヲ待チ防空実施ニ際シテハ直チニ出動シ必要ナル資材及狀況ニ依リ食料其ノ他ノ整備配給ニ服ス

(六) 工作部

平時ニ於イテハ命令ヲ待チ防空実施ニ當リテハ直チニ出動シ土木其ノ他ノ必要ナル工作業務ニ服ス

本團ニ直屬シ專ラ水火警防ニ任シ之カ服務要領ハ別ニ之ヲ定ム

前項ノ交代補勤々務ヲ命シタルトキハ其ノ方法及要領ヲ團長ニ報告スヘシ

第十六條 分團員ニ於ケル設備資材ノ配備ハ別ニ定ムル所ニ依ル

其ノ他

前項ノ計画ヲ樹立シ又ハ之ヲ変更シタルトキハ速カニ團長ニ報告スヘシ

第二十條 警防上特別ノ必要アル場合ハ本計画ニ依ラサルコトヲ得

特設自衛團體組織編成表

[illegible][illegible][illegible]

分團名	團長	副團長	警備班	防火班	救護班	工作配給班	設備器材
袋町分團	1	2	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	防毒服 5、防毒面 20、担架 2、團服 70 防火用ホース 31、防火服 2
			班員 16	班員 8	班員 16	班員 11	

[illegible][illegible][illegible][illegible]

			外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名	外若干名
設備機材	消火栓 21/2 3、消火栓 11/2 3、21/2 ホース 60 尺 5、11/4 ホース 50 尺 6、11/4 ホース 30 尺 2、ゼットパイプ 21/2 2 ゼットパイプ 11/4 3、21/2 両口スタンド 2、瓦斯消火ポンプ 2、消火弾 2、用水桶 2、水嚢 30、水曹車 1、器具運搬車 2、 梯子 2、斧 2、担架 3、提灯 5、ロツプ 3、防毒衣 1、防毒マスク 9、薬囊 1、検知剤収容囊 1、ゴム手袋 3、ゴム長靴 3、 ゴ○長靴 5、メガホン 2、信号器 3、消防用ヘルメット 2									

本場関戸蚊帳株式會社特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	警備部	設備器材
広瀬分團	-	-	部長 以下若干名	部長 以下若干名	部長 以下若干名	消火弾 5、バケツ 40、器具運搬車 3、梯子 2、2 ホース 30、 1 ホース 30、消火器 15、消火栓 2

砲弾唧筒機械製作所特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	警備部	設備器材
広瀬分團	-	-	部長 以下若干名	部長 以下若干名	部長 以下若干名	消火栓 3、消火弾 35、ホース 5、バケツ 25、鳶口 5、梯子 7、 提灯 10、用水桶 3

桐原容器工業所特設自衛團

分團名	團長	副團長	救護部	配給部	管制部	工作部	避難部	防毒部	庶務部	警備部
舟入分團	1	1	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名
設備機材	消火栓 5、スタンド 4、ホース 26、ノーズル 6、梯子 2、スツバナ 12、鳶口 15、先手頭刀 10、用水樽 23、バケツ 122、 担架 3、電話機 1									

第一印刷株式會社特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務部	警備部	消防部	救護部	配給部	管制部	工作部	避難管理部	防毒部
古田分團	1	1	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名
設備機材	消火栓 1、ホース 60 尺 3、セツトパイプ 1、両口スタンド 1、消火弾 10、手鳶 5、六尺鳶 2、担架 1、提灯 22、 瓦斯消火ポンプ(一斗五升入) 1、梯子 1、バケツ 10、アツトウ式消火器(一ガロン入) 2										

昭和印刷製罐工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	警備部	消防部	救護部	配給部	管制部	工作部	避難管理部	防毒部
古田分團	1	1	附 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名
設備機材	消火栓 11/4 2、11/4 ゴム 20 尺 2、11/4 布 30 尺 2、消火銃 10、消火液 23、消爆式消火器 15、消水桶 2、砂囊 40 器具運搬車 3、バケツ 15、鳶口 2、梯子 2、筒橋 2、斧 2、ロツプ 3、担架 1、提灯 10											

田村工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警備班	消防班	救護班	防毒班	避難管理班	管制班	工作班
三篠分團	1	1	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名
設備機材	消火栓二吋 5、消火栓 11/2 1、二吋ホース 60 尺 8、11/2 ホース 20 尺 1、二吋ゼットパイプ 5、11/2 ゼットパイプ 1 用水桶 14、水囊 10、バケツ 15、鳶口 2、斧 2、ロツプ 30 尺 3、担架 2、提灯 10、梯子 3、鶴嘴 2、掛矢 2									

三次製紙所廣島工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務部	警備部	消防部	管制部	工作部	救護部	避難管理部	防毒部	
三篠分團	1	1	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	部長以下 若干名	總計 45 名
設備機材	消火栓二吋 2、消火栓一吋二分 2、二吋ホース 71 尺 2、一吋二分 93 尺 1、一吋二分 111 尺 1、二吋ゼットパイプ 1、 一吋二分ゼットパイプ 2、用水桶 3、水入籠 18、消光器 3、瓦斯消火ポンプ 1、鳶口 2、梯子 1、担架 1、鶴嘴 2、 掛矢 1、斧 1、ロツプ 20 尺 2、提灯 10										

山陽木材防腐株式會社廣島工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	庶務部	消防部	工作部	
舟入分團	1	1	若干名	部長以下若干名	59	若干名	總計 120 名
設備器材	消火栓 3 1、3 ホース 50 尺 2、3 ホース 40 尺 3、3 ゼットパイプ 1、両口スタンド 1、消火銃 2、消火弾 4、水囊 10、 鳶口 10、梯子 1、鶴嘴 2、掛矢 2						

広島電氣特設自衛團

分團名	團長	副團長	本部	警報班	警護班	消防班	燈火管制班	救護班	配給班	
袋町分團	1	1	若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	總計 120 名
設備機材	消火栓 21/2 6、消火栓 3 2、21/2 消火栓 49 尺 6、3 消火栓 60 尺 2、消火器 9、消火銃 3、消火弾 4、用水桶 1、 小砂箱 6、梯子 2、ロツプ 2、提灯 6、バケツ 10、メガホン 5、スコツプ 10、警報用鈴 1									

廣島市商業学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務	警護班	警報班	防火班	防毒班	搬出班	避難管理班	救護班	總計
観音分團	1	1	若干名	部長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	班長以下 若干名	職員 45 名、 生徒 115 名
設備機材	防火栓室内 8、屋外 2、給水栓 11、給水装置(吸上ポンプ) 2、防毒面 18、防表衣 3										

広島縣立第一中学特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護係	總務係	防火係	防毒係	警備係	避難係	救護係	救護班	設備機材
-----	----	-----	--------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

袋町分團	1	1	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	
------	---	---	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--

大手町国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警衛班	警備班	防火班	避難誘導班	交通整理班	救護班	設備機材
大手分團	職員使丁等ヲ以テ組織ス									

袋町国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務	御真影奉護係	警備係	避難係	防火係	救護係	報知係	設備機材
袋町分團	1	1	1	職員使丁高学年ヲ以テ組織ス						

天満国民學校特設自衛團

分團名	團長	御真影奉護係	總務	防火係	警備係	避難係	救護係	設備機材
天満分團	1	職員使丁看護婦等ヲ以テ組織ス						

本川国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報係	燈火係	警衛係	警備係	防火係	防毒係	避難誘導係	救護配給係	設備機材
本川分團	1	1	教職員高学年児童ヲ以テ組織ス								

三篠国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	設備機材
三篠分團			教職員児童ヲ以テ組織ス バケツ 100、校庭ポンプ 1、廊下設付ポンプ 4、メガホン 3、縄 50 本

廣瀬国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報應急班	警護奉遷班	災害防止班	避難管理班	救護接待班	設備機材
廣瀬分團	教職員児童ヲ以テ組織ス							

中島国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班
中島分團	教職員児童ヲ以テ組織ス									
設備機材	ホース校庭水道線 1、ホース校庭廊下備付 7、拡声器 44、サイレンー馬力 1、鐘 1、担架 1、寝台 1、救急薬品箱 1									

神崎国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班	設備機材
神崎分團	教職員児童ヲ以テ組織ス	1												

崇徳中学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	情報通信班	庶務班	御真影奉護班	報知班	防空監視班	消火班	防毒班	警護班	運搬班	救護班	燈火管制班	救護配給班	設備機材
三篠分團	教職員生徒ヲ以テ組織ス	1														防毒衣 1 防毒面 35 バケツ 60

舟入国民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務	御真影奉護係	避難係	防火係	警備係	救護係	設備機材
舟入分團	教職員児童ヲ以テ組織ス								

壽座特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
神崎分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス						

新明映画劇場特設自衛團

分團名	團長	副團長	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
神崎分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス					

榮座警報班座特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
神崎分團	1	従業員若干名ヲ以テ組織ス						

廣島市高等女學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護班	總務班	防火班	警備班	避難班	救護班	設備機材
舟入分團	職員並ニ上級生徒ヲ以テ組織ス								

廣島縣立廣島第二中学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	御真影奉護班	總務班	防火班	警備班	避難班	救護班	設備機材
観音分團	職員並ニ上級生徒ヲ以テ組織ス								

江波国民學校特設自衛團

	テープ縄 11、擔架 1、リヤカー 2、救急箱 2、脱脂綿 2、繃帯ガーゼ各 4
--	--

山陽中・商業学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	顧問	庶務班	防護班	消防班	防毒救護班	避難班	工作班	予備班
竹屋分團	1			班長以下 16名	班長以下 49名	班長以下 46名	班長以下 23名	班長以下 23名	班長以下 23名	班長以下 64名
設備機材	防火栓スタンド、パイプ、水管、管鎗、貯水槽(三石入) 1、貯水槽(五斗入) 1、湯釜(三石入) 1、バケツ 36、湿筵、砂袋、布桶、明礬末、擔棒 1、斧、鉄槌、防毒面 15、縄テープ、表示用柱代用、標的、晒粉(カルキ)、表示旗(赤白)、表示板 5、監視所 1、梯子 1、双眼鏡 1、擔架、救急約、繃帯用具、目張用品									

白島國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班	設備機材
白島分團	1	1	班長以下 7名	班長以下 7名	班長以下 76名	班長以下 12名	班長以下 7名	班長以下 7名	班長以下 40名	班長以下 12名	班長以下 13名	班長以下 7名	

第一國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	消防班	防毒救護班	避難班	予備班
比治山分團	1	1	班長以下4名	班長以下2名	班長以下6名	班長以下3名	班長以下3名	班長以下6名	班長以下2名
設備機材	表示板 2、晒粉、救急箱 4、小旗 3								

廣島女子商業学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備消防班	避難班	防毒救護班	特別救護班	設備機材
比治山分團	1	2	班長以下5	班長以下10	班長以下25	班長以下10	班長以下10	班長以下55	

荒神國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	配給班	設備機材
荒神分團	1	1	班長以下 11	班長以下 11	班長以下 11	班長以下 12	班長以下 23	班長以下 23	班長以下 13	班長以下 12	班長以下 22	班長以下 21	

松本商業学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	消防班	防毒救護班	避難班	予備班
尾長分團	1	1	班長以下71	班長以下71	班長以下71	班長以下71	班長以下71	班長以下451	班長以下51
設備機材	防毒面 70、眼鏡 2、バケツ 40、吸上ポンプ 3、救急薬材料 1揃、手旗 50、笛 4								

尾長國民學校特設自衛團

分團名	團長	總務	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護班	連絡班
尾長分團	1	班長1 班員5	班長1 班員5	班長1 班員5	班長1 班員5	班長1 班員5	班長1 班員12	班長1 班員11	班長1 班員6	班長1 班員5	班長1 班員6	班長1 班員5
設備機材	防火用水槽、防火砂箱、シャベル											

矢賀國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班
矢賀分團	1		班長1 班員4	班長1 班員2	班長1 班員2	班長1 班員7	班長1 班員15	班長1 班員6	班長1 班員6	班長1 班員6	班長1 班員8	班長1 班員4
設備機材	バケツ、砂袋、シャベル											

牛田國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班
牛田分團	1	1	班長1 班員1	班長1 班員1	班長1 班員1	班長1 班員13	班長1 班員6	班長1 班員5	班長1 班員10	班長1 班員10	班長1 班員6	班長1 班員3
設備機材	用水桶、バケツ、シャベル、防火砂											

比治山國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	防毒班	避難誘導班	交通整理班	救護配給班	連絡班
比治山分團	1		班長1 班員若干名	班長1 班員若干名	班長1 班員3	班長1 班員若干名	班長1 班員若干名	班長1 班員若干名	班長1 班員若干名	班長1 班員若干名	班長1 班員若干名	班長1 班員若干名
設備機材	吸上ポンプ 9、防火栓 6、貯水池 1、梯子 1、バケツ 34、防火砂 7											

藤川工業合資会社特設自衛團

分團名	團長	副團長	企画部	指導部	事業部	監視班	警報班	燈火管制班	消防班	防毒班	救護班	避難班	工作班	設備機材
-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----	------

比治山分團	1	1	1	1	1	班長 1 班員 7	班長 1 班員 4	班長 1 班員 5	班長 1 班員 10	班長 1 班員 8	班長 1 班員 7	班長 1 班員 7	班長 1 班員 5	
-------	---	---	---	---	---	--------------	--------------	--------------	---------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--

安田学園特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警護班	防火班	交通整理班	燈火管制班	防毒班	工作班	配給班	設備機材
白島分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	
			副班長 2	副班長 3	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	
			班員 10	班員 12	班員 12	班員 10	班員 5	班員 10	班員 5	班員 5	

東洋紡廣島工場特設自衛團

分團名	團長	消防部長	燈火管 制班	防火 班	工作 班	總務部 長	情報 班	警備 班	保護 班	配給 班	救護隊 長	救護 班	防毒 班
荒神分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	部長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	1	班長 1	班長 1
	傳令 1	傳令 1	班員 4	班員 20	班員 4	傳令 1	班員 4	班員 3	班員 3	班員 4	傳令 1	班員 5	班員 4
設備機材	スプリング装置ヘラー 一式、ハードランド装置放水栓 24、ホース 24、ノズル 12、ピストル消火器 4、電管用消火器 5、消火用携帯手押ポンプ 51、バケツ 514、用水桶 11、ガソリンポンプ(25馬力) 1、手斧 1、クリツパー 1、大鋸 1、鳶口 10、ヘルメット帽 10、提灯 20、ガスマスク 5、貯水囊 1、消火玉 29、防毒マスク 3、擔架 1、消火栓水道連接用スタント及ホース 1組												

東洋工業特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警備班	燈火管制班	消防班	防毒救護班	待避班	工作班	設備機材
青崎分團	1	若干名	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	
			班員若干名	班員若干名	副班長 26 班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	

竹屋國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警報班	警衛班	警備班	消防班	防毒救護班	待避班	予備班
竹屋分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	部長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1
			班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名
設備機材	ポンプ 1、用水桶、バケツ、防火砂、擔架 2、莫塵、薬品 一揃、シャベル、梯子、消火栓、ガーゼ、繃帯、脱脂綿									

新天座特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
竹屋分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火彈 7、梯子 1、バケツ 20、鳶口 8、救命袋 1、消火栓 3、スピーカー1
	傳令 1		班員 6	班員 13	班員 8	班員 10	班員 2	

帝國座特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
竹屋分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 1、消火彈 4、梯子 2、バケツ 10、鳶口 5、救命袋 1、救助縄 5、消火栓 2、スピーカー1
	傳令 1	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	

花月特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
竹屋分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火彈 6、梯子 2、バケツ 10、鳶口 5、救命袋 1、消火栓 2、スピーカー 1
	傳令 1	班員 3	班員 13	班員 3	班員 6	班員 3	

廣島東宝劇場特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	燈火管制班	防毒班	設備機材
幟町分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 4、消火彈 5、梯子 2、バケツ 10、鳶口 6、消火栓 3、スピーカー 1
	傳令 1	班員 4	班員 10	班員 6	班員 18	班員 9	

太陽館特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
幟町分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 9、消火彈 1、梯子 2、バケツ 10、鳶口 5、救命袋 1、消火栓 2、スピーカー 1
	傳令 1	班員若干名	班員 15	班員 11	班員 4	班員 3	

東洋座特設自衛團

分團名	團長	警報班	防火班	避難班	防毒班	燈火管制班	設備機材
幟町分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火器 3、消火彈 5、梯子 3、バケツ 10、鳶口 7、救命袋 1、消火栓 3、スピーカー 2
	傳令 2	班員 1	班員 6	班員 6	班員 3	班員 2	

幟町國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	警報班	警備班	警衛班	消防班	防毒救護班	避難班	予備班
幟町分團	1	1	班長 1	班長 1	班長 1	部長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1
			班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名	班員若干名
設備機材	用水桶、唧筒、送水管、消火栓、梯子									

廣島女学院特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警護班	消火班	消毒班	救護班	避難班	設備機材
-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

幟町分團	1	2	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	消火栓 3、吸上ポンプ 3、 ホース(十五間) 3、バケツ 30、擔架 5
			副班長 1	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	副班長 2	
			班員 10	班員 22	班員 28	班員 22	班員 24	班員 24	

段原國民學校特設自衛團

[illegible]

仁保國民學校特設自衛團

分團名	團長	警報班	燈火管制班	警衛班	警備班	防火班	救護配給班	避難誘導班	交通整理班	設備機材
仁保分團	1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	班長 1	用水桶 若干、バケツ 若干、 防火用水 若干、シャベル 若干
		班員 12	班員 2	班員 6	班員 27	班員 59	班員 22	班員 18	班員 32	

青崎國民學校特設自衛團

[illegible]

廣島瓦斯電動株式會社特設自衛團

[illegible]

帝國人造絹糸株式會社廣島工場特設自衛團

[illegible]

大和紡績廣島工場特設自衛團

[illegible]

宇品造船特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	會計班	連絡班	防護班	警報班
	1	1	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
	燈火管制班	消防班	防毒班	救護班	避難待避班	工作班	圖書班
	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名	若干名
設備機材	防毒面 6、防毒衣 3、擔架 2、晒粉 若干、防毒靴 3、救急箱 1、ガソリンポンプ 1、消火栓 4、井戸 1、 消火彈 各工場各1、輕便消防器 7、瓦斯消火器 2、濡蓆 5、砂 若干、梯子 1						

小川工場特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	配給班	傳令班	警衛班
大河分團	1	1	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス
	遮光班	工作班	消防班	警護班	防毒班	避難班
	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス
設備機材	防空壕 2、消火栓 2、消火器 1、消火彈 50、井戸 1、バケツ 10、擔架 2、防毒面 10、防毒衣 5、救急箱 1、砂火叩 若干					

廣島文理科大学校特設自衛團

分團名	總指令	監視哨班	警報班	警備班	避難指導班	救護班	配給班	防火班	防毒班
千田分團	1	班長班員ヲ 以テ組織ス	班長班員ヲ 以テ組織ス	班長班員ヲ 以テ組織ス	班長班員ヲ 以テ組織ス	班長班員ヲ 以テ組織ス	班長班員ヲ 以テ組織ス	班長班員ヲ 以テ組織ス	班長班員ヲ 以テ組織ス
設備機材	水管車ホース	300 尺、吸上自動ポンプ、梯子、鳶口、麻縄、荷棒、非常持出袋、消火栓					9、消火器各室		

廣島高等工業學校特設自衛團

分團名	團長	警報班	消防班	防毒班	避難指導班	救護班	工作班				
千田分團	1	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス	班長職員ヲ以テ組織ス				
設備機材	防毒面	173、ゴム手袋	5、自轉車	4、バケツ	110、提灯	16、毛布	20、疊	10、如露	11、瓦斯検知器	2、噴霧器	6、

昭和高等女学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警備班	消防班	防毒救護班	生徒監護班	設備機材
大河分團	1	1	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	防空壕 1、バケツ 30、防火砂 若干

大河國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	防護監視班	警衛班	警備班	防火班	避難指導班	交通整理班	救護班
大河分團	1	1	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名	班長 1 班員若干名
設備機材	ホース 7									

山中高等女学校特設自衛團

分團名	團長	副團長	總務班	警衛班	通信連絡班	防護班	搬出班	避難班	救護班
千田分團	1	1	各班長以下 325 名ヲ以テ組織ス						

楠那國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警報班	警衛班	警備班	防火班	救護班	連絡班	非難指導班
楠那分團	1	1	班長 1 班員 3	班長 1 班員 5	班長 1 班員 10	班長 1 班員 10	班長 1 班員 14	班長 1 班員 1	班長 1 班員 12
設備機材	井戸 2、ホース 4、バケツ 30、ビツト 1								

似島國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	庶務班	防護監視班	警備班	防火班	防毒班	救護避難班	団員
似島分團	1	1	班長 1 係長 1	班長 1 係長 1	班長 1 係長 1	班長 1 係長 1	班長 1 係長 1	班長 1 係長 1	78 名
設備機材	貯水槽 1、防空壕 1、梯子 1、縄梯子 2、バケツ 20、晒粉 2、救急箱 1、繃帶脱脂綿ガーゼ 若干								

皆実國民學校特設自衛團

分團名	團長	副團長	警備班	消防班	非常持出班	防毒救護班	避難班	豫備班
皆実分團	1	1	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名	班長以下若干名
設備機材	防空壕 1、消火栓 6、消火彈 10、バケツ 各室2、防火砂 若干							

廣島中央放送局自衛團

分團名	團長	副團長	班長			先駆班	第一班	第二班			
幟町分團	1	1	9			実動員 7 人 豫備員 15 人	実動員 7 人 豫備員 15 人	実動員 7 人 豫備員 15 人			
	第三班	第四班	第五班			第六班	緩急班	特務班			
	実動員 7 人 豫備員 15 人	実動員 7 人 豫備員 15 人	実動員 7 人 豫備員 15 人			実動員 7 人 豫備員 18 人	実動員 7 人 豫備員 24 人	実動員 7 人 豫備員 9 人			
	品名局所		本局	分室	放送所	計	品名局所	本局	分室	放送所	計
	移動ポンプ		2	1	1	4	シヤベル		15	5	10
自轉車		1	1	1	3	木桶		1	1	1	3
消火栓 (20 間ホース付)		2	-	1	3	鶴嘴		5	2	2	9
消火器		4	7	5	16	鋏		5	5	10	20
貯水槽		4	-	1	5	擔架		2	2	2	6
貯水桶		4	-	3	7	藁蓑		2	2	2	6
竹梯子		3	-	1	4	擔棒		3	4	3	10
バケツ		20	20	20	60	麻縄		2	2	2	6
バツト		4	2	2	8	提灯		3	3	3	9
蓑		20	20	20	60	メガホン		13	3	2	18
手斧		5	5	5	15	呼子		5	2	2	9

別紙第六號

自動車動員調査表

分團名	種別	自動車所有者	電話番号	動員車輛数
廣瀬分團	乗用	廣島交通株式會社	西 二一七八	10
千田分團	貨物用	廣島貨物運送株式會社	中 四九一、二四六三	20

別紙第七號

防空監視哨要員服務順位呼集方法 (九月以降)

順位	班名	呼称方法	順位	班名	呼称方法	順位	班名	呼称方法
1	牛田班	電話又ハ特使	12	草津班	電話又ハ特使	23	白島班	電話又ハ特使
2	荒神班	電話又ハ特使	13	天満班	電話又ハ特使	24	宇品班	電話又ハ特使
3	袋町班	電話又ハ特使	14	神崎班	電話又ハ特使	25	福島班	電話又ハ特使
4	舟入班	電話又ハ特使	15	似島班	電話又ハ特使	26	矢賀班	電話又ハ特使
5	尾長班	電話又ハ特使	16	竹屋班	電話又ハ特使	27	段原班	電話又ハ特使
6	青崎班	電話又ハ特使	17	幟町班	電話又ハ特使	28	江波班	電話又ハ特使

7	仁保班	電話又ハ特使	18	千田班	電話又ハ特使	29	古田班	電話又ハ特使
8	大河班	電話又ハ特使	19	皆実班	電話又ハ特使	30	本川班	電話又ハ特使
9	中島班	電話又ハ特使	20	三篠班	電話又ハ特使	31	楠那班	電話又ハ特使
10	大手班	電話又ハ特使	21	己斐班	電話又ハ特使	32	観音班	電話又ハ特使
11	廣瀬班	電話又ハ特使	22	比治山班	電話又ハ特使	33	大芝班	電話又ハ特使

別紙第八號

出漁船舟調査

管轄署名	出漁舟数（一日ノ出漁船舟）
東署	53
西署	100
宇品署	114

別紙第九號

漁舟ト陸上トノ情報通信方法系統表

沿岸分團名	連絡場所	情報通信報告先	情報通信方法	実施責任者
似島分團	似島漁業組合	宇品警察署	傳馬船ニよる依ル傳令又ハ手旗「メガホン」等ニ依ル口頭、電燈、提灯点滅信號ニ依ル	組合長 島名 宗吾
草津分團	草津漁業組合	西警察署		組合長 中西 静生
江波分團	江波漁業組合	西警察署		組合長 米田 米一
宇品分團	宇品警防分團	宇品警察署		宇品警防分團長
楠那分團	丹那漁業組合	宇品警察署		組合長 馬本 庄一
楠那分團	日宇那漁業組合	宇品警察署		組合長 沖田 一信
青崎分團	青崎警防分團	東警察署		青崎警防分團長

別紙第十號

防空警報傳達系統

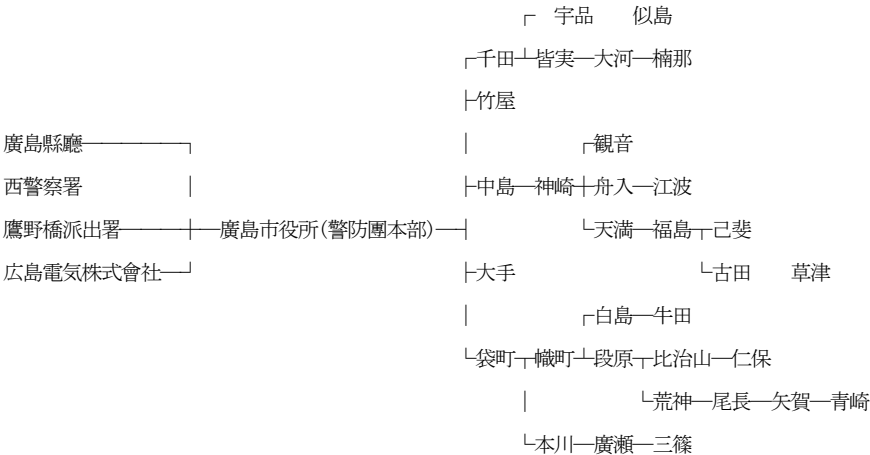
- 備考 一、(通)ハ通信電話ノ署
- 二、(警)ハ警察電話ノ署
- 三、(鉄電)ハ鉄道電話ノ署
- 四、(広電)ハ広島電氣株式會社電話ノ署

傳達先	主系圖	副系統	副々系統
廣島市役所 (廣島市警防團)	(通) 廣島 中 五三一四番 五三一五番	(警) 高野橋派出所特使一丁半	(廣電) 本社特使三丁
廣島市青崎分團	(通) 廣島 中 九七五番	(警) 青崎派出所特使二丁	(廣電) 府中散宿所特使六丁
廣島市矢賀分團	(通) 廣島 中 四〇〇九番	(警) 尾長派出所特使十丁	副系統ニ同ジ
廣島市尾長分團	(通) 廣島 中 二〇一八番	(警) 尾長派出所特使四丁	東署特使十三丁
廣島市荒神分團	(通) 廣島 中 二〇一九番	(警) 愛宕町派出所特使六丁	(廣電) 東支店特使七丁
廣島市牛田分團	(通) 廣島 中 五七九八番	(警) 牛田駐在所特使五丁	副系統ニ同ジ
廣島市白島分團	(通) 廣島 中 二〇二一番	(警) 東白島派出所特使三丁	東署特使十三丁
廣島市幟町分團	(通) 廣島 中 二〇二二番	(警) 幟町派出所特使三丁	東署特使七丁
廣島市竹屋分團	(通) 廣島 中 二〇二三番	(警) 下柳町派出所特使四丁	東署特使十八丁
廣島市段原分團	(通) 廣島 中 二〇二〇番	(警) 段原東派出所特使四丁	(廣電) 東支店特使六丁
廣島市比治山分團	(通) 廣島 中 六九九三番	(警) 兵器廠前派出所特使五丁	(廣電) 東支店特使十二丁
廣島市仁保分團	(通) 廣島 中 三五〇八番	(警) 本浦駐在所特使五丁	東署特使一里
廣島市大手分團	(通) 廣島 中 二〇二五番	(警) 鷹野橋派出所特使丁	(廣電) 大手町変電所特使二丁
廣島市袋町分團	(通) 廣島 中 二九二八番	(警) 平田屋町派出所特使三丁	(廣電) 本社特使三丁
廣島市中島分團	(通) 廣島 中 二二三五番	(警) 水主町派出所特使一丁半	(廣電) 大手町変電所特使七丁
廣島市神崎分團	(通) 廣島 西 二二三一番	(警) 舟入町派出所特使二丁	(廣電) 西部出張所特使五丁
廣島市本川分團	(通) 廣島 西 二〇二六番	(警) 左官町派出所特使五十間	(瓦電) 櫓下変電所特使三丁
廣島市廣瀬分團	(通) 廣島 西 二〇二七番	(警) 寺町派出所特使一丁	(廣電) 北部出張所特使六丁
廣島市観音分團	(通) 廣島 西 七五二番	(警) 観音町派出所特使一丁	(廣電) 西部出張所特使三丁
廣島市舟入分團	(通) 廣島 西 一七八七番	(警) 舟入町派出所特使八丁	(廣電) 舟入散宿所特使二丁
廣島市江波分團	(通) 廣島 西 二五五〇番	(警) 江波駐在所特使三十間	(廣電) 舟入散宿所特使四丁
廣島市天満分團	(通) 廣島 西 二二三二番	(警) 天満町派出所特使二丁	(廣電) 三篠変電所特使七丁
廣島市福島分團	(通) 廣島 西 二八八二番	(警) 福島町派出所特使二丁	(鉄電) 己斐駅特使八丁
廣島市三篠分團	(通) 廣島 西 三二一〇番	(警) 横川町派出所特使一丁	(鉄電) 横川駅〇〇〇特使二丁
廣島市己斐分團	(通) 廣島 西 一六七三番	(警) 己斐町派出所特使一丁	(鉄電) 己斐駅特使五丁
廣島市古田分團	(通) 廣島 草津 一一五番	(警) 古田町駐在所特使二丁	(廣電) 草津散宿所特使十丁
廣島市草津分團	(通) 廣島 草津 一〇七番	(警) 草津東駐在所特使一丁半	(廣電) 草津散宿所特使一丁
廣島市宇品分團	(通) 廣島 中 二〇三〇番	(警) 本通派出所特使二丁	副系統ニ同ジ
廣島市皆実分團	(通) 廣島 中 二六〇五番	(警) 皆実町派出所特使六丁	副系統ニ同ジ
廣島市千田分團	(通) 廣島 中 二一六四番	(警) 千田町派出所特使五丁	副系統ニ同ジ
廣島市大河分團	(通) 廣島 中 二二八九番	(警) 皆実町派出所特使三十丁	副系統ニ同ジ
廣島市楠那分團	(通) 廣島 中 八六五番	(警) 大河派出所特使一里十五丁	副系統ニ同ジ
廣島市似島分團	(通) 廣島 中 七五四番	(警) 宇品署特使三哩	似島駐在所特使一丁半

広島電気株式會社	(通) 広島 中 四五〇〇番	(警) 大手町四丁目派出所特使二丁	副系統ニ同ジ
----------	----------------	-------------------	--------

別紙第十號ノニ

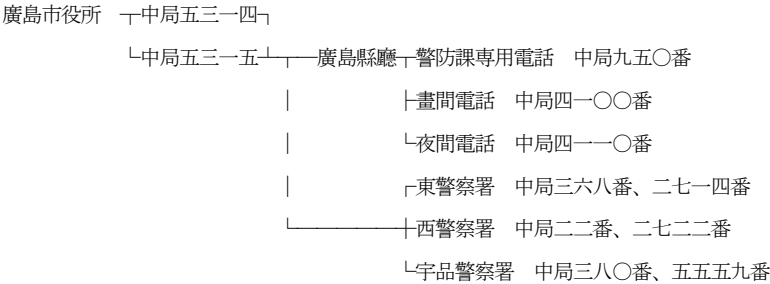
広島市防空警報傳達副系統



備考 本表ニ依リ各警防分團ハ下段ヨリ順次通傳系統ニヨリ自轉車ヲ乗用シ得ル傳令ヲ派シ置クモノトス

別紙第十一號

指揮連絡報指定電話番号表



「指揮連絡報中局五三一五番」ト申込ムモノトス (訓練ノ場合ハ何レモ訓練ナル語ヲ冠ス)

別紙第十二號

「サイレン」(汽笛ヲ含ム)所有者及管理者ニ對スル警報電達方法、吹鳴責任者表

分團名	警報傳達方法	「サイレン」又ハ汽笛ノ設置場所	電話番号	管理者又ハ所有者	吹鳴責任者
青崎分團	○	青崎国民学校	中局 九七五	廣島市長	澤田 良知
青崎分團		日本製鋼所廣島工場	中局 四〇一〇	前川 清	前川 清
青崎分團		東洋工業株式會社	中局 五二五〇	松田 重次郎	松田 重次郎
尾長分團	○	尾長国民学校	中局 二〇一八	廣島市長	大原 良宅
尾長分團		藤野製綿株式會社	中局 五三〇	藤野 七藏	藤野 七藏
荒神分團	○	荒神国民学校	中局 二〇六九	廣島市長	奥本 鉄漢
荒神分團		東洋紡績株式會社廣島工場	中局 一三六	丹羽 慶二	丹羽 慶二
段原分團		廣島女子商業学校	中局 一一〇七	笹野 雄太郎	中井 萬藏
比治山分團	○	第一国民学校	中局 六六三	廣島市長	野口 進
仁保分團	○	仁保国民学校	中局 三五〇八	廣島市長	木村 益相
大河分團	○	大河国民学校	中局 二二八九	廣島市長	三宅 峯吉
楠那分團	○	楠那国民学校	中局 八六五	廣島市長	馬本 庄一
皆実分團	○	廣島地方專賣局	中局 七九〇〇	廣島地方專賣局長	尾上 忠雄
宇品分團	○	宇品国民学校	中局 二〇三〇	廣島市長	飯田 興津吉
宇品分團		大和人絹株式會社	中局 六六〇〇	藤田 効一	藤田 効一
宇品分團		宇品造船所	中局 四四三	俵 彦三郎	俵 彦三郎
宇品分團		廣島女子専門学校	中局 五〇四〇	清水 芳徳	飯田 奨津吉
宇品分團		西井製作所	中局 一八一五	西井 伊久馬	岡田 昇一
宇品分團		廣島通信講習所	中局 三六八〇	水野 喜代松	山形 恭太
白島分團		廣島工業試験場	中局 一八二八	金丸 寛一	尾川 伊六
幟町分團		廣島株式取引所	中局 一〇五〇	吉本 正太郎	丸岡 才吉
幟町分團		中國新聞社印刷工場	中局 五〇〇一	山本 実一	山本 実一
幟町分團		幟町国民学校	中局 二〇二一	廣島市長	丸岡 才吉
竹屋分團		山陽中学校	中局 二七〇七	石田 賢一	香川 菊三

竹屋分團	○	竹屋國民学校	中局 二〇二三	廣島市長	香川 菊三
袋町分團		縣立第一高等女学校	中局 四三一	岡 猪眞二	藤重 彦一
袋町分團		袋町國民学校	中局 二〇二四	廣島市長	藤重 彦一
大手分團		廣島市役所	中局 五三一四 五三一五	廣島市長	小川 朋一
大手分團		大手國民学校	中局 二〇二五	廣島市長	高橋 道之助
中島分團		中島國民学校	中局 二〇二六	廣島市長	朝田 良一
廣瀬分團		廣瀬國民学校	西局 二〇二七	廣島市長	小宇羅 讚一
本川分團		本川國民学校	西局 二〇二六	廣島市長	佐伯 辰二郎
舟入分團		長谷川護謨製作所	西局 一四五	長谷川 幸作	長谷川 幸作
舟入分團		山陽木材防腐株式會社	西局 一六二	田中 好一	田中 好一
三篠分團		中田製針工場	西局 一六四九	中田 太一	中田 太一
三篠分團		三篠國民学校	西局 八二四	廣島市長	日原 範一
三篠分團		田村工業株式會社	西局 一〇〇一	田村 秀太郎	田村 秀太郎
三篠分團		住野工業株式會社	西局 九四	住野 重太郎	住野 重太郎
三篠分團		大芝國民学校	西局 八六一	廣島市長	中田 収蔵
天満分團		東洋製罐株式會社	西局 三一五一	和田 義一	和田 義一
觀音分團		廣島市商業学校	西局 二二三二	廣島市長	前濱 百太郎
神崎分團		神崎國民学校	西局 二二三一	廣島市長	西村 幸蔵
福島分團		福島町一致協會	西局 二八八二	福島町一致協會	菊崎 正行
己斐分團		己斐國民学校	西局 三五二〇	廣島市長	上垣内 勝太郎
古田分團		古田國民学校	草津 一一五	廣島市長	刀田 周一
草津分團		草津國民学校	草津 一〇七	廣島市長	蘭 福蔵
矢賀分團		矢賀國民学校	中局 四〇〇九	廣島市長	穴戸 義太郎
江波分團		江波國民学校	西局 二〇二九	廣島市長	小林 奎太郎

備考 警報傳達方法欄中○印ハ通信電話ニヨリ直接警報ヲ受領ス 其他ニアリテハ「ラヂオ」又ハ本市内「サイレン」汽笛ニ呼應シ及本市ヨリノ電
話傳達ニ依リ吹鳴スルモノトス

別紙第十三號

防空警報傳達用警鐘打鐘責任者表

一、「サイレン」ノ音響到達範圍外ノ地域

警鐘ノ位置	管理者	警報傳達ノ方法	打鐘責任者
東白島消防車庫隣	廣島市警防團長 古川 正彦	白島分團ヨリ特使派遣	細田 義親
江波	廣島市警防團長 古川 正彦	江波分團ヨリ特使派遣	小林 奎太郎
己斐町上町官有地	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	上垣内 善徳
庚午町二三一	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	打越 茂
古田町字田方	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	前田 辰一
廣島町字田方	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	浅川 福一
古田町字田方	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	丸山 甫
古田町字古江	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	湯尻 伊得
草津町南町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	綱岡 伊三郎
草津町東町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	山口 貞吉
宇品町海岸通	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	萬谷 交次郎
仁保町字本浦	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	中野 得惣
仁保町字大河	廣島市警防團長 古川 正彦	大河分團ヨリ特使派遣	山本 昇

二、「サイレン」使用不能ノ場合

警鐘ノ位置	管理者	警報傳達ノ方法	打鐘責任者
尾長町消防車庫隣	廣島市警防團長 古川 正彦	尾長分團ヨリ特使派遣	藤田 嘉太郎
愛宕町	廣島市警防團長 古川 正彦	尾長分團ヨリ特使派遣	山本 平次郎
段原末広町	廣島市警防團長 古川 正彦	段原分團ヨリ特使派遣	古川 信一
東白島町	廣島市警防團長 古川 正彦	白島分團ヨリ特使派遣	細田 義親
薬研堀	廣島市警防團長 古川 正彦	竹屋分團ヨリ特使派遣	三宅 四郎
大手町四丁目	廣島市警防團長 古川 正彦	袋町分團ヨリ特使派遣	木本 重太郎
大手町九丁目	廣島市警防團長 古川 正彦	大手分團ヨリ特使派遣	落合 幸一
水主町	廣島市警防團長 古川 正彦	中島分團ヨリ特使派遣	武田 忠一
基町	廣島市警防團長 古川 正彦	幟町分團ヨリ特使派遣	高田 嘉一
西地方町	廣島市警防團長 古川 正彦	神崎分團ヨリ特使派遣	湯蓋 久太郎
江波町	廣島市警防團長 古川 正彦	江波分團ヨリ特使派遣	小林 奎太郎
寺町	廣島市警防團長 古川 正彦	廣瀬分團ヨリ特使派遣	湊 亀太郎
天満町	廣島市警防團長 古川 正彦	天満分團ヨリ特使派遣	新山 繁一
福島町	廣島市警防團長 古川 正彦	福島分團ヨリ特使派遣	谷口 明
己斐町本町	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	福本 調二
己斐町上町	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	土井 卯一
己斐町上町官有地	廣島市警防團長 古川 正彦	己斐分團ヨリ特使派遣	上垣内 善徳

庚午町二三一	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	打越 茂
古田町字高須	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	田原 恭
古田町字田方一二三七	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	前田 辰一
古田町字田方一二一〇	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	浅川 福一
古田町字田方官有地	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	丸山 甫
土手町消防車庫隣	廣島市警防團長 古川 正彦	段原分團ヨリ特使派遣	井上 利助
東警察署前	廣島市警防團長 古川 正彦	東警察署ヨリ特使派遣	藤倉 秀一
牛田國民学校前	廣島市警防團長 古川 正彦	牛田分團ヨリ特使派遣	増岡 健一
矢賀町消防車庫	廣島市警防團長 古川 正彦	矢賀分團ヨリ特使派遣	山縣 啓一
西警察署	廣島市警防團長 古川 正彦	西警察署ヨリ口頭	湯尻 伊得
古田町字古江四七二	廣島市警防團長 古川 正彦	古田分團ヨリ特使派遣	綱岡 伊三郎
草津南町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	山口 貞吉
草津東町	廣島市警防團長 古川 正彦	草津分團ヨリ特使派遣	萬谷 交次郎
宇品海岸通	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	高畑 品次郎
御幸通八丁目	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	山中 正一
御幸通千田銅像前	廣島市警防團長 古川 正彦	宇品分團ヨリ特使派遣	中野 得惣
仁保町字本浦	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	中尾 順造
仁保町上大町	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	荒木 若人
仁保町字柞木	廣島市警防團長 古川 正彦	仁保分團ヨリ特使派遣	戸野 九一
仁保町字日宇那	廣島市警防團長 古川 正彦	楠那分團ヨリ特使派遣	和田 徳造
仁保町字大河	廣島市警防團長 古川 正彦	楠那分團ヨリ特使派遣	山本 昇
似島字家下	廣島市警防團長 古川 正彦	大河分團ヨリ特使派遣	矢野 勇
仁保町字青崎	廣島市警防團長 古川 正彦	青崎分團ヨリ特使派遣	澤田 良知
仁保町字向洋	廣島市警防團長 古川 正彦	青崎分團ヨリ特使派遣	澤田 良知
仁保町字堀越	廣島市警防團長 古川 正彦	青崎分團ヨリ特使派遣	大和 貞雄
南観音町二丁目	山本 哲治	観音分團ヨリ特使派遣	山本 哲治
南三篠町説教場	高橋 辰蔵	三篠分團ヨリ特使派遣	高橋 辰蔵
中廣町説教場	藤本 昇観	三篠分團ヨリ特使派遣	藤本 昇観
横川町薬師堂	蠣田 明光	三篠分團ヨリ特使派遣	蠣田 明光
打越町(横川駅踏切)	古田 昇	三篠分團ヨリ特使派遣	古田 昇
楠木町二丁目監視台	品川 邦莊	三篠分團ヨリ特使派遣	品川 邦莊
三篠本町二丁目光隆寺	光寺 湊瀧	三篠分團ヨリ特使派遣	光寺 湊瀧
三篠本町三丁目西薬寺	沖重 吾六	三篠分團ヨリ特使派遣	沖重 吾六
横川町三丁目説教場	渡辺 實成	三篠分團ヨリ特使派遣	渡辺 實成

別紙第十四號

警防團警報傳達計畫表

分團名	方面	順 路	徒歩又ハ自 轉車ノ別	所要 時間	傳達責任者
青崎分團	第一方面	本部発青崎方面	自轉車	3 分	神崎 利喜夫
	第二方面	本部発堀越方面	自轉車	6 分	白井 勝
	第三方面	本部発向洋方面	自轉車	7 分	兒玉 隆二
矢賀分團	第一方面	本部発中組、市組、上組	自轉車	15 分	峠本 正人
	第二方面	本部発下組、岩鼻、南組	自轉車	25 分	大久保 二一
尾長分團	第一方面	本部発山根町	自轉車	2 分	山下 健次
	第二方面	本部発一若草町一愛宕町	自轉車	5 分	新見 三代三
	第三方面	本部発一東蟹屋町一荒神町通	自轉車	5 分	上川 緑
	第四方面	本部発一三本松町一片河町一尾長町一岩鼻町	自轉車	7 分	山根 次六
荒神分團	第一方面	本部発一西蟹屋町	自轉車	2 分	警備部員
	第二方面	本部発一西蟹屋町一荒神町	自轉車	3 分	警備部員
	第三方面	本部発一西蟹屋町一荒神町一猿猴橋町	自轉車	4 分	警備部員
	第四方面	本部発一西蟹屋町一荒神町一猿猴橋町一松原町	自轉車	5 分	警備部員
	第五方面	本部発一西蟹屋町一荒神町一猿猴橋町一松原町一大須賀町	自轉車	8 分	警備部員
牛田分團	第一方面	本部発一神田区一丹土区一新町区	自轉車	18 分	橋本 又一 柿田 勘之助
	第二方面	本部発一本町区一旭町区一早稲田区	自轉車	13 分	品川 晴之 田中 成一
	第三方面	本部発一本町区一早稲田区一南町区	自轉車	15 分	日野 久吉 大島 庄吉
白島分團	第一方面	本部発一白島中町一白島北町	自轉車	10 分	兒玉 繁夫
	第二方面	本部発一西白島町一白島西中町一白島東中町	自轉車	20 分	室住 退三
	第三方面	本部発一白島東中町	自轉車	15 分	竹腰 和登
	第四方面	本部発一東白島町一白島九軒町	自轉車	30 分	湯浅 信男
	第五方面	本部発一東白島町一二葉ノ里	自轉車	20 分	下田 久雄
幟町分團	第一方面	本部発一上柳町一橋本町一下柳町一弥生町	自轉車	7 分	吉本 秀夫
	第二方面	本部発一山口町一銀山町一斜屋町一堀川町一胡町一東胡町	自轉車	7 分	上岡 喜代一
	第三方面	本部発一幟町下一石見屋町一幟町上	自轉車	4 分	村上 直喜
	第四方面	本部発一流川町下一鉄砲町下一鉄砲町中一鉄砲町上	自轉車	5 分	高野 又一

	第五方面	本部発－流川町中－流川町上－八丁堀上－八丁堀中－八丁堀下	自轉車	5分	田中 新八
竹屋分團	第一方面	本部発－北平塚町－東平塚町－平塚元町	自轉車	4分	沖中 春一
	第二方面	本部発－西平塚町－鶴見町－鶴見町南組	自轉車	3分	河村 光登
	第三方面	本部発－宝町東－宝町西－昭和町東－昭和町西－昭和町南	自轉車	4分	徳田 正守
	第四方面	本部発－田中町－竹屋町－三川町－下流川	自轉車	3分	市原 芳一
	第五方面	本部発－薬研堀－東新天地－新天地	自轉車	3分	横田 隆嘉
	第六方面	本部発－富士見町上組－富士見町下組－富士見町本通	自轉車	3分	大方 幸次郎
段原分團	第一方面	本部発－の場町－京橋町－台屋町－稻荷町西組	自轉車	7分	福島 周典
	第二方面	本部発－松川町－稻荷町東組－比治山町－金屋町上組	自轉車	7分	田頭 豊
	第三方面	本部発－桐木町－段原町－比治山本町－土手町	自轉車	7分	小林 猛
	第四方面	本部発－金屋町下組－段原東浦町－段原末廣町－段原大畑町	自轉車	7分	辻作 亮
比治山分團	第一方面	本部発－段原日出町－段原下組段原上組	自轉車	12分	東 信一
	第二方面	本部発－段原山崎町－南段原町一丁目－南段原町二丁目	自轉車	12分	杉山 信雄
	第三方面	本部発－東雲町上組－東雲町南組－南蟹屋町－大洲町	自轉車	13分	寺田 鶴渡
仁保分團	第一方面	本部発－本浦町一組－三十五組	自轉車	5分	小松 正
	第二方面	本部発－湊崎町一組－二十八組	自轉車	8分	大友 恭夫
	第三方面	本部発－柞木町一組－二十三組	自轉車	10分	亀島 浅一
楠那分團	第一方面	本部発－日宇那町	自轉車	2分	住田 實夫
	第二方面	本部発－丹那町	自轉車	2分	谷口 佐護一
大河分團	第一方面	本部発－旭町－大河	自轉車	15分	浜村 信之
	第二方面	本部発－旭町－大河	自轉車	15分	大竹 貫松
	第三方面	本部発－旭町	自轉車	7分	岩崎 為美
	第四方面	本部発－出汐町	自轉車	10分	岡本 啓
	第五方面	本部発－霞町	自轉車	15分	増田 勉
皆實分團	第一方面	本部発－皆実町一丁目	自轉車	5分	中井 哲夫
	第二方面	本部発－皆実町二丁目	自轉車	3分	河野 國雄
	第三方面	本部発－皆実町三丁目東	自轉車	10分	脇田 光雄
	第四方面	本部発－皆実町三丁目西	自轉車	10分	宮地 茂三郎
	第五方面	本部発－翠町	自轉車	15分	満居 良雄
字品分團	第一方面	本部発－御幸通五丁目－御幸通七丁目御幸通西浦	自轉車	6分	小林 一一
	第二方面	本部発－御幸通五丁目－春日通－住吉通	自轉車	6分	深瀬 進
	第三方面	本部発－御幸通五丁目－神田通ヲ南進シ四丁目ヨリ電車通	自轉車	6分	山下 辰夫
	第四方面	本部発－御幸通五丁目－神田通ヲ北進シ十七丁目	自轉車	6分	武市 圭介
	第五方面	本部発－御幸通五丁目西通－元字品町	自轉車	6分	大竹 勝
	第六方面	本部発－御幸通一丁目－昭和通－中通－北通	自轉車	6分	宮崎 忠
千田分團	第一方面	本部発－南千田町－三丁目西組－三丁目北組	自轉車	5分	古川 喜三太郎
	第二方面	本部発－千田町二丁目－千田町一丁目	自轉車	5分	中村 進
	第三方面	本部発－平野町－南竹屋町－東千田町	自轉車	7分	竹内 清
大手分團	第一方面	本部発－大手町六丁目－大手町七丁目	自轉車	3分	警備部員
	第二方面	本部発－大手町八丁目－大手町九丁目	自轉車	5分	警備部員
	第三方面	本部発－国泰寺町－雑魚場町	自轉車	5分	警備部員
袋町分團	第一方面	本部発－袋町－西魚屋町－紙屋町－革屋町－播磨屋町－研屋町	自轉車	7分	岩崎 栄助
	第二方面	本部発－中町－立町－東魚屋町－平田屋町－鉄砲屋町－新川場町－下中町	自轉車	9分	伊勢 慎一郎
	第三方面	本部発－大手町一丁目－猿楽町東－猿楽町西－細工町－横町－鳥屋町	自轉車	8分	櫻井 貞七
	第四方面	本部発－尾道町－塩屋町－大手町二丁目－大手町三丁目－大手町四丁目－大手町五丁目－小町	自轉車	9分	警備部員
中島分團	第一方面	本部発－上水主町－中島新町－木挽町	自轉車	6分	渡田 清志
	第二方面	本部発－天神町下組－天神町上組－材木町－元柳町	自轉車	8分	宮本 保
	第三方面	本部発－中水主町－下水主町	自轉車	3分	木本 勘二郎
	第四方面	本部発－吉島町－吉島羽衣町－吉島本町一丁目－吉島本町二丁目	自轉車	8分	澤井 馨
廣瀬分團	第一方面	本部発－寺町－廣瀬北町一丁目	自轉車	2分	友本 正登
	第二方面	本部発－廣瀬北町二丁目－廣瀬北町三丁目	自轉車	1分	宝迫 清馬
	第三方面	本部発－西引御堂	自轉車	2分	渡辺 市太郎
	第四方面	本部発－廣瀬元町－錦町	自轉車	2分	磨野 豊一
	第五方面	本部発－西九軒町	自轉車	2分	土井 正男
本川分團	第一方面	本部発－鷹匠町東部－空鞘町東部－空鞘町西部	自轉車	7分	大場 元平
	第二方面	本部発－鷹匠町西部－中組－下組	自轉車	4分	武田 太一
	第三方面	本部発－鍛冶屋町－十日市町－左官町	自轉車	4分	安田 政夫
	第四方面	本部発－塚本町－堺町一丁目－猫屋町	自轉車	7分	友竹 軍一
神崎分團	第一方面	本部発－舟入仲町東組－舟入町－河原町西組－河原町北組－西新町南組	自轉車	5分	警備部員
	第二方面	本部発－河原町東下組－河原町東上組－西地方町－西新町上組	自轉車	5分	警備部員
	第三方面	本部発－小網町小舟区－小網町新明区－小網町西組－小網町東組－小網町南組	自轉車	5分	警備部員
	第四方面	本部発－河原町神崎組－舟入本町東組－舟入本町西組－舟入仲町西組	自轉車	5分	警備部員
舟入分團	第一方面	本部発－舟入幸町中組－舟入幸町東組	自轉車	2分	道田 政雄
	第二方面	本部発－舟入川口町公園組－舟入川口町西組－舟入幸町西組	自轉車	3分	三上 芳一

	第三方面	本部発－舟入川口町中組－舟入川口町東組	自轉車	3分	栗根 重一
	第四方面	本部発－舟入川口町中組	自轉車	2分	戸林 和男
	第五方面	本部発－舟入川口町中組－舟入川口町南組	自轉車	4分	五石 一宝
江波分團	第一方面	本部発－江波港町	自轉車	2分	宮本 勇
	第二方面	本部発－江波東町	自轉車	2分	小松 徳次
	第三方面	本部発－江波本町	自轉車	2分	沖山 理行
	第四方面	本部発－江波南町	自轉車	2分	森田 正登
観音分團	第一方面	本部発－観音本町－東観音町一丁目北組－東観音町一丁目南組	自轉車	10分	警備部員
	第二方面	本部発－東観音町二丁目西組－東観音町二丁目北組－東観音町二丁目東組－東観音町二丁目中組－東観音町二丁目南組	自轉車	7分	警備部員
	第三方面	本部発－東観音町一丁目－西観音町一丁目	自轉車	10分	警備部員
	第四方面	本部発－西観音町二丁目中組－南観音町二丁目北組	自轉車	5分	警備部員
	第五方面	本部発－南観音町二丁目南組－南観音町三丁目	自轉車	15分	警備部員
観音分團	第一方面	本部発－堺町四、三丁目－西大工町－榎町	自轉車	7分	吉田 春彦
	第二方面	本部発－北榎町－横堀町－新市町	自轉車	6分	田村 一男
	第三方面	本部発－天満本町－天満南町－天満中町	自轉車	5分	賀口 勇
	第四方面	本部発－西天満町－上天満町－天満本町	自轉車	7分	寺内 敏雄
	第五方面	本部発－上天満町東通－上天満町北町	自轉車	6分	山中 一角
福島分團	第一方面	本部発－福島中町－本町－北町	自轉車	20分	角山 助夫 柿原 豊
	第二方面	本部発－福島中町－本町	自轉車	15分	正宝神 実人 八木 義夫
	第三方面	本部発－福島中町	自轉車	30分	梶川 睦夫 高曲 輝夫
	第四方面	本部発－福島南区西	自轉車	15分	今本 倉造 高木 峯義
	第五方面	本部発－福島南区東方面	自轉車	20分	眞砂 辰一 山本 茂
三篠分團	第一方面	本部発－三篠本町－中島町－南三篠町	自轉車	30分	坂本 幹一 瀬田 晋
	第二方面	本部発－横川町－楠木町下－打越町	自轉車	20分	安田 豊蔵 古田 卓一
	第三方面	本部発－横川本町－柳河内－三瀧町	自轉車	18分	田島 喬 太田 亀三
	第四方面	本部発－大芝町－楠木町上	自轉車	22分	澤村 卓吉 渡辺 稔
己斐分團	第一方面	本部発－上町区	自轉車	7分	近藤 里士
	第二方面	本部発－中町区東北部	自轉車	7分	西村 巧
	第三方面	本部発－中町中央部	自轉車	5分	西山 正夫
	第四方面	本部発－中町西部	自轉車	5分	山岡 勉
	第五方面	本部発－本町区國道筋	自轉車	7分	谷口 昌作
	第六方面	本部発－本町区裏通	自轉車	7分	田村 義登
古田分團	第一方面	本部発－古田町古江－高須－田方	自轉車	6分	幸田 末一
	第二方面	本部発－古田町古江－高須－田方	自轉車	15分	西山 繁夫
	第三方面	本部発－古田町古江－高須－田方	自轉車	18分	田中 稔雄
草津分團	第一方面	本部発－草津東町	自轉車	5分	橋本 啓次郎
	第二方面	本部発－草津本町	自轉車	7分	石田 惣一
	第三方面	本部発－草津南町	自轉車	10分	高木 八百太郎
	第四方面	本部発－草津浜町	自轉車	10分	濱本 徳松
	第五方面	本部発－庚午町	自轉車	20分	森原 弥平
似島分團	第一方面	本部発－家ノ下南部	徒歩	15分	中下 正則
	第二方面	本部発－家ノ下－大黃－東大谷－長谷	徒歩	20分	竹田 和助

別紙第十五號

島嶼部ニ對スル連絡調査表

島嶼部	所在地名	最寄電報配達局	同上距離	連絡便ノ種類
似島	廣島市仁保町	宇品郵便局	二十七丁	発動機船
辨天島	廣島市仁保町	宇品郵便局	一里五丁	発動機船
金輪島	廣島市仁保町	宇品郵便局	七丁	発動機船

別紙第十六號

電燈点滅可能區域表

町 名	戸数	町 名	戸数	町 名	戸数	町 名	戸数	町 名	戸数
平塚町	766	富士見町	216	薬研堀	131	大手町四丁目	10	木挽町	59
昭和町	289	富士見本町	62	猿楽町	32	大手町九丁目	154	荒神町	267
平野町	111	東胡町	10	細工町	17	塩屋町	21	鷹匠町	429
寶町	270	胡町	8	尾道町	48	紙屋町	9	空鞘町	294
鶴見町	328	八丁堀	76	平田屋町	5	堺町	38	西引御堂町	72

上流川町	70	大手町六丁目	40	播磨屋町	8	千田町一丁目	185	寺町	91
下流川町	108	大手町七丁目	133	革屋町	10	千田町二丁目	268	十日市町	32
鉄砲町	139	大手町八丁目	220	上天満町	516	千田町三丁目	277	横堀町	158
幟町	130	斜屋町	3	國泰寺町	137	大手町一丁目	32	廣瀬北町	421
三川町	120	銀山町	18	小町	97	大手町二丁目	7	錦町	139
田中町	143	榎町	75	南千田町	183	大手町三丁目	22	元柳町	16
堀川町	31	研屋町	16	鉄砲屋町	27	水主町	320	大手町五丁目	18
上柳町	72	立町	38	中町	43	天神町	110	新市町	87
左官町	32	東魚屋町	17	西魚屋町	28	材木町	117	油屋町	21
下柳町	159	石見屋町	25	新川場町	159	吉島本町	328	猫屋町	28
竹屋町	107	橋本町	7	雄魚場町	136	鳥屋町	6	塚本町	15
南竹屋町	237	山口町	5	袋町	46	中島本町	92	鍛冶屋町	19
西大工町	41	天満町	207	小網町	243	東雲町	137	京橋町	50
浜崎町	471	西天満町	206	楠木町	1,084	土手町	79	比治山本町	233
北榎町	193	中島新町	108	三篠本町	870	松原町	150	松川町	141
廣瀬元町	269	草津本町	154	段原末広町	233	白島東中町	119	向洋	739
船入仲町	298	草津南町	210	段原新町	383	段原町	63	尾長町	890
船入本町	373	草津浜町	241	段原中町	293	段原山崎町	46	南蟹屋町	310
中廣町	512	打越町	256	比治山町	51	段原東浦町	244	大洲町	344
吉島町	254	西白島町	180	稲荷町	105	段原大畑町	172	二葉ノ里	113
吉島羽衣町	350	白島中町	109	の場町	115	出汐町	122	大須賀町	302
河原町	581	東白島町	201	東観音町	790	皆実町一、二、三丁目	1,020	東蟹屋町	326
船入町	356	白島九軒町	187	西観音町	699	本浦町	254	旭町	121
南観音町	434	三滝町	163	観音本町	204	段原日ノ出町	130	御幸通 自 一丁目 至 十七丁目	1,351
福島町	757	横川町	584	古田町	136	宇品ノ土手ノ下	325	神田通	593
江波町	610	白島西中町	115	草津東町	244	日宇那	190	海岸通	77
己斐町	825	白島北町	26	牛田町	645	丹那町	164	元宇品町	236
庚午町	82	西九軒町	43	猿猴橋町	48	大河町	451	西蟹屋町	577
船入幸町	393	若草町	220	愛宕町	180	桐木町	108	翠町	148
船入川口町	484	西地方町	85	堀越町	283	金屋町	160	荒神町	567
南段原町	202	西新町	138	矢賀町	199	台屋町	121		

別紙第十七號

煙火打揚責任表

煙火打揚場所	煙火保管場所	傳達方法	打揚責任者
横川町一丁目空地	横川町一丁目火薬庫	電話西局一〇二六番又ハ傳令	横川町一丁目 牛田 源重
皆實町三丁目空地	皆實町三丁目火薬庫	電話中局五七二九番又ハ傳令	皆實町三丁目 牛尾 保之

別紙第十八號

島嶼部及漁舟ニ對スル警報傳達方法並ニ責任者表

島嶼又ハ漁業ニ従事スル場所	陸上トノ距離	警報傳達方法	傳達責任者	備 考
似島(島嶼)	宇品ヨリ 3,060 間	手旗又ハ提灯信号	宇品警防分団長	電話中七五四番似島陸軍検疫所
似島沖	似島ヨリ 100 間 宇品ヨリ 3,160 間	手旗又ハ提灯信号	似島漁業組合長 渡里利松	
草津沖	草津ヨリ 1,200 間	手旗又ハ提灯信号	草津漁業組合長 中西静生	
草津(入漁權内)	草津ヨリ 1,200 間	手旗又ハ提灯信号	草津漁業組合長 中西静生	
江波沖	江波ヨリ 1,000 間	手旗又ハ提灯信号	江波漁業組合長 中前政次郎	
吉島沖	吉島ヨリ 1,200 間	手旗又ハ提灯信号	江波漁業組合長 中前政次郎	
吉島沖	吉島ヨリ 1,760 間	手旗又ハ提灯信号	江波漁業組合長 中前政次郎	
宇品沖	宇品ヨリ 720 間	手旗又ハ提灯信号	宇品警防分団長	
丹那沖	丹那ヨリ 720 間	手旗又ハ提灯信号	丹那漁業組合長 馬本正一	
日宇那沖	日宇那ヨリ 720 間	手旗又ハ提灯信号	日宇那漁業組合長 沖田一信	
向洋沖	向洋ヨリ 800 間	手旗又ハ提灯信号	青崎警防分団長	

別紙第十八號ノ一

群長船(當番船)等ニ依ル警報傳達不可能漁舟ニ對スル警報傳達方法並ニ責任者表

傳達場所	傳達方法	傳達責任者
草津町海岸	提灯手旗	草津警防分團長 蘭 福蔵
観音町海岸	提灯手旗	観音警防分團長 前浜 百太郎
江波町海岸	提灯手旗	江波警防分團長 小林 奎太郎
千田町海岸	提灯手旗	千田警防分團長 上迫 猛一
宇品町海岸	提灯手旗	宇品警防分團長 飯田 興津吉
楠那町海岸	提灯手旗	楠那警防分團長 馬本 庄一
青崎町海岸	提灯手旗	青崎警防分團長 澤田 良知
吉島本町南海岸	提灯手旗	中島警防分團長 浅田 良一

別紙第十九號

防空警報傳達揭示場所責任者

分團名	揭示場所	揭示責任者	分團名	揭示場所	揭示責任者
牛田	牛田國民学校前	村上 勘一	尾長	尾長町三本松水坂宅前	今田 菊三郎
牛田	新町区日通寺前	牛尾 卷太郎	尾長	尾長町片河津村宅前	村上 源次郎
牛田	神田区神田橋東詰	田羅 賢一	尾長	尾長町山根酒店宅前	有野 前三郎
牛田	早稲田区早稲田神社前	中石 喜三郎	尾長	尾長東隣保館前	天本 基一
牛田	南区饒津神社裏	森田 勇	矢賀	矢賀町岩鼻	松谷 俊幸
荒神	松原町波田幸次郎宅前	波田 幸次郎	青崎	仁保町大原小松順吉宅前	沢田 良知
荒神	荒神町林政一宅前	林 政一	青崎	仁保町賀屋青年会會前	沢田 良知
荒神	旧荒神小学校四ツ角	中村 辨吉	青崎	仁保町大森向洋巡査駐在所前	沢田 良知
荒神	西蟹屋町八木範一宅前	八木 範一	青崎	仁保町向洋説教所前	山崎 末次
荒神	荒神國民学校前	佐々木 範一	青崎	仁保町洋堤青年会會前	岡田 憲三
荒神	猿猴橋町廣陵信用組合前	中村 政司	青崎	仁保町伊藤寛一宅前	岡田 憲三
荒神	大須賀町柴橋東詰	中村 庄一	青崎	仁保町青崎國民学校前	新井 早一
荒神	大須賀町田中政吉宅前	田中 政吉	青崎	仁保町宮本房吉宅前	新井 早一
尾長	東蟹屋町津島寅槌宅前	津島 寅槌	青崎	仁保町堀越消防車庫前	本多 静仁
尾長	愛宕町佐古代宅前	眞木 光藏	青崎	仁保町橋本徹郎宅前	本多 静仁
尾長	若草町修道院前	山高 審太郎	段原	桐木町坂井商店前	坂井 喜作
尾長	荒神通廣島育兒院前	金谷 数男	段原	稲荷町電車停留所附近	宮田 徳一
段原	稲荷町仁井見実一宅前	仁井見 実一	段原	稲荷町山田医院前	宮田 徳一
段原	段原大畑町住田木材店前	奥坊 生道	段原	段原北町速水宗十宅前	大和田 政夫
段原	段原東浦町坂本商店前	沖永 善次郎	段原	段原中町中央	小野 英雄
段原	段原町中田植木店前	田中 孟	比治山	段原日出町岩村木材店横	宮原 長治
段原	段原町長性院入口西角	村田 萬太郎	比治山	段原日出町安藤砂雄宅前	江川 三吉
段原	土手町佐伯久吉卓前	佐伯 久吉	比治山	南段原町広場前	栗原 祐一
段原	段原國民学校前	平井 信次	比治山	東雲町井上脳病院前	金井 源一
段原	金屋町専立寺南角	松原 笹一	比治山	段原山崎町杉山商店横	杉山 九平
段原	台屋町駅前橋通	野上 鶴松	比治山	東雲町北土手通	金井 源一
段原	台屋町専光寺裏川野潔宅前	川野 潔	比治山	仁保國民学校前	森本 兵之助
段原	の場町堀宅吉宅前	堀 宅吉	比治山	比治山國民学校裏	森本 兵之助
段原	の場町川崎源市宅前	川崎 源市	比治山	南蟹屋町打越貞一宅前	川本 勘三郎
段原	の場町山崎源助宅前	山崎 源助	比治山	南蟹屋町今中庄吉宅前	川本 勘三郎
段原	京橋町向井煙草店前	向井 一三	比治山	南蟹屋町三宅郡三宅前	川本 勘三郎
段原	京橋町大杉鉄吾宅前	大杉 鉄吾	比治山	南蟹屋町亀田多吉宅前	川本 勘三郎
段原	京橋町三宅齒科医院前	三宅 正男	比治山	東雲町菅藤卓二宅前	田中 一索
段原	松川町中央四ツ角池田亀太郎宅前	池田 亀太郎	皆実	皆実町一丁目電信隊正門前	瀬戸 政一
段原	比治山町電車通下東南	有池 秀松	皆実	皆実町一丁目電信隊通用門前	田口 佐太郎
段原	比治山町鶴見橋東詰	倉田 健治	皆実	皆実町一丁目旧縣師正門前	中井 哲夫
段原	比治山町大河通入口	星野 中佐ヱ門	皆実	皆実町一丁目瓦斯會社瓦斯溜前	宮崎 義人
段原	段原末広町坂田熊藏宅前	坂田 熊藏	皆実	皆実町三丁目	脇坂 國登
皆実	皆実町三丁目	古川 繁太郎	大河	大河漁業組合前	小西 友人
皆実	皆実町三丁目	田村 重次郎	大河	大河國民学校前	山村 筆松
皆実	皆実町三丁目	有間 茂	大河	大河三宅峯吉宅前	山村 筆松
皆実	皆実町二丁目説教所前	山下 俊雪	大河	大河岩倉飲料店三叉路	山村 筆松
皆実	皆実町凱旋記念碑前	田中 豊秋	大河	大河玉井助吉宅前	浜井 芳太郎
皆実	翠町一中寄宿舎前	福原 京槌	楠那	日宇那中西理髪店前	中西 義美
皆実	翠町池本浅吉宅前	西本 春登	楠那	日宇那説教場前	中西 義美
皆実	翠町杵原親照宅前	川本 重太郎	楠那	日宇那説教場通入口	和田 徳進
皆実	翠町山下信夫宅前	川本 重太郎	楠那	丹那消防倉庫前	谷口 佐護一
皆実	翠町佐々木孫市宅前	香川 景幹	楠那	丹那山根理髪店前	岡本 尚文
仁保	仁保町本浦説教所前	田岡 啓造	楠那	楠那國民学校前	秋岡 馨
仁保	仁保町久保清一郎宅前	田岡 啓造	宇品	宇品國民学校前	松本 治郎一
仁保	金中農園正門前	田岡 啓造	宇品	宇品御幸通八丁目十字路	重森 盛人
仁保	仁保町浜田増義宅前	田岡 啓造	宇品	宇品町十丁目十字路	畑井 信一
仁保	仁保町湊崎地方浜村直一宅前	大島 岩夫	宇品	宇品町十二丁目十字路	池田 次郎平
仁保	仁保町中洲々崎郵便局前	大島 岩夫	宇品	宇品町十四丁目十字路	木村 勝之助
仁保	仁保町柞木三保折藏宅前	静村 重市	宇品	宇品町十五丁目千田銅像前	中村 常一
仁保	仁保町中村大二郎宅前	三保 重市	宇品	宇品神田通十四丁目十字路	田坂 松太郎
仁保	仁保町單田元大河町役場前	三保 重市	宇品	宇品神田十一丁目十字路	加藤 純
宇品	宇品神田七丁目大和人絹会社前	堺 武兵衛	幟町	山口町本通	大浜 正三郎
宇品	宇品神田二丁目千應寺前	米本 五平	幟町	銀山町山口町通三二	篠崎 雷三
宇品	宇品海岸通御幸松前	塩本 廣一郎	幟町	弥生町山口町通一三二	島井 金松
宇品	宇品國民学校分教場前	松田 佐市	幟町	幟町カトリック教会前	山本 孫六
似島	似島國民学校運動場前	沖野 儀三郎	幟町	幟町下同上一六八	天野 悦胡
似島	似島城平ノ丘	堀口 信吉	幟町	斜屋町二一	佐々木 学
似島	似島西宇根ノ丘	岡本 品吉	幟町	上流川町同進社前	今岡 卓弥
似島	似島井出ノ上峠	松本 松吉	幟町	上流川町中	山王 徳次

白島	東白島巡查駐在所前	松村 憲一	幟町	上流川町下中國新聞社前	藤井 謹作
白島	白島九軒町神田館西詰	横山 重雄	幟町	東胡町四三	三津井 稲市
白島	白島東中町西村春三宅前	西村 春三	幟町	胡町胡神社前	小田 政次郎
白島	白島中町佐々木牛肉店横	大杉 三次	幟町	鉄砲町六一	今田 壽盛
白島	西白島町長壽園入口	村上 長次郎	幟町	鉄砲町甲三六	横田 喜太郎
白島	白島中町中央	山根 芳太郎	幟町	鉄砲町乙一二三	景山 佐市
白島	白島北町金谷富介宅前	金谷 富介	幟町	鉄砲町下飯田商店前	谷口 宇三郎
白島	双葉ノ里饒津公園入口	川手 武一	幟町	八丁堀二六	松田 義一郎
幟町	上柳町中央	斉藤 正雄	幟町	八丁堀中四〇	森 繁雄
幟町	石見屋町三〇	香川 乗九三	幟町	八丁堀下八四	島村 譲一
幟町	下柳町三五	三宅 四郎	幟町	堀川町一五二	高杉 保兵衛
袋町	立町あづまや鶏肉店西側	古林 都一	袋町	小網町電車通福德生命前	山藤 清一
袋町	立町熊谷孝兵衛宅前	熊谷 孝兵衛	袋町	尾道町内會事務所前	木原 八十吉
袋町	研屋町筒井商店前	吉田 幸一	袋町	下中町町揭示場	神田 彦一
袋町	平田屋町安田銀行前	杓木 勝吉	袋町	小町秋山医院前	秋山 實吉
袋町	平田屋町斉藤帯店前	杓木 勝吉	袋町	袋町浜井薫造宅前	藤重 彦一
袋町	平田屋町牛尾糸店前	杓木 勝吉	袋町	袋町山縣徳兵衛宅前	山縣 徳兵衛
袋町	平田屋町湯澤寝具店前	杓木 勝吉	袋町	革屋町明治堂前	山本 彌助
袋町	播磨屋町徴兵保険前	北村 茂	袋町	西魚屋町中本幸藏宅前	光保 熊次郎
袋町	播磨屋町ホテル前	北村 茂	袋町	紙屋町長崎屋町食料品店前	長崎 勝
袋町	播磨屋町金明堂前	北村 正	袋町	紙屋町森本義足店前	森元 虎三
袋町	鉄砲町地藏堂南二軒目	佐伯 光太郎	袋町	紙屋町松井用具店前	安井 文太郎
袋町	中町佐竹医院前	庵藤 文造	袋町	猿楽町東組片倉雜貨店前	片倉 彦太郎
袋町	中町森政平宅前	庵藤 文造	袋町	細工町斉藤眞一商店前	斉藤 眞一
袋町	新川場町内會事務所前	藤井 清	袋町	細工町廣島郵便局前	斉藤 眞一
袋町	革屋町安田生命前	松木 松一	袋町	大手町一丁目田頭喜一宅前	田頭 喜一
袋町	革屋町三井銀行前	坂部 佐一郎	袋町	鳥屋町々内會事務所前	中村 静彦
袋町	西魚屋町灰田正一郎宅前	光保 熊次郎	袋町	鳥屋町虎屋旅館前	先の 勝三
袋町	西魚屋町倉橋發造宅前	光保 熊次郎	袋町	大手町二丁目藤井両替店前	藤井 徳兵衛
袋町	大手町五丁目武家屋弥太郎宅前	吉岡 師頭	袋町	大手町五丁目町内會事務所前	吉岡 師頭
袋町	大手町三丁目町内會事務所前	石原 肇	袋町	大手町三丁目一七街路	岡田 幹三
袋町	大手町三丁目二六街路	武田 市太郎	竹屋	竹屋國民学校前	金澤 信夫
袋町	大手町三丁目二三街路	荊尾 梅太郎	竹屋	西平塚大通松原青物店前	小寺 禮三
袋町	大手町三丁目街路	井関 俊郎	竹屋	西平塚鶴見橋通平本糸店前	小寺 禮三
袋町	大手町三丁目街路	山田 幸之信	竹屋	東平塚町土手中程	増井 諒三
袋町	大手町三丁目三八街路	増山 亮三	竹屋	東平塚町金比羅通中程	増井 諒三
袋町	大手町三丁目三三街路	青木 松太郎	竹屋	薬研堀中央	森田 克巳
袋町	大手町三丁目日華生命保險会社前	石川 定吉	竹屋	薬研堀彈昌寺前	森田 克巳
袋町	大手町三丁目田所電文舎前	田所 繁一	竹屋	平塚町一ノ組団旗掲揚台前	吉本 芳太郎
袋町	大手町三丁目帝国生命保險会社前	藤原 好松	竹屋	東新天地東入口	杉山 浩二
袋町	大手町四丁目巡查派出所前	松島 彦太郎	竹屋	東新天地西入口	杉山 浩二
袋町	大手町四丁目日清生命保險会社前	渡辺 数太郎	竹屋	新天地劇場前	永井 克朋
袋町	大手町四丁目奥山五六宅前	奥山 五六	竹屋	田中町藤見湯前	岡本 秋松
袋町	塩屋町松島信吾宅前	松島 信悟	竹屋	新天地小田煙草店前	落藤 竹次郎
袋町	塩屋町杉本清吉宅前	杉本 清吉	竹屋	新天地棕田紙店前	棕田 九右兵衛
袋町	尾道町村雨商店前	大原 八十吉	竹屋	下流川町常林寺西北隅	小林 武雄
袋町	尾道町坪井八百屋前	大原 八十吉	竹屋	竹屋町巡查派出所前	井崎 末吉
袋町	大手町三丁目八街路	伊藤 小三郎	竹屋	三川町常休寺西北隅	三宅 万次郎
竹屋	鶴見町々會館前	山崎 稔	竹屋	實町岡本学宅前	細川 継次
竹屋	鶴見町有政正善宅前	有政 正善	千田	東千田町久保吉郎宅前	長藤 八次郎
竹屋	鶴見町今中小三郎宅前	今中 小三郎	千田	東千田町赤川忠利宅前	小浪 義美
竹屋	鶴見町秋友隆利宅前	秋友 隆利	千田	東千田町坂本松藏宅前	佐々木 勘一
竹屋	鶴見町高尾宅前	高橋 六太郎	千田	南竹屋町中央	近藤 民次郎
竹屋	富士見町中央	平川 作吉	中島	中島本町向井章一宅前	向井 章一
大手	國泰寺町市公会堂前	道管 貫一	中島	元柳町上田角吉宅前	上田 留吉
大手	大手町六丁目中村医院前	馬場 竹三	中島	材木町緑竹藏宅前	緑 竹藏
大手	雑魚場町荒神堂境前	岡田 作太郎	中島	天神町丸島出張所前	天城 慶一
大手	雑魚場町大谷商店前	長崎 千代三	中島	木挽町持明院前	光本 半次郎
大手	國泰寺町荒木楽器店前	荒木 正	中島	中島新町木村長次郎宅前	木村 長次郎
大手	國泰寺町田中薬店前	田中 近太郎	中島	水主町上組佐久間豊次郎宅前	佐久間 豊次郎
大手	國泰寺町青谷辨理士宅前	青谷 茂富	中島	中水主町朝田良一宅前	朝田 良一
大手	大手町九丁目中林金物店横	手原 鶴一	中島	下水主町伊藤順一宅前	伊藤 順一
千田	千田町一丁目福原医院前	尾山 徳一	中島	吉島町三村峰次郎宅前	三村 峰次郎
千田	千田町巡查派出所前	宮本 福松	中島	吉島羽衣町天下惣吉宅前	天下 惣吉
千田	南千田町修道中学校前	平田 亀三郎	中島	吉島本町川口学一宅前	川口 学一
千田	南千田町旭製材所前	大田 福松	中島	水主町中島國民学校前	朝田 良一
千田	南千田町宮本吾策前	宮本 吾策	廣瀬	西九軒町田淵謹一宅前	田淵 謹一
廣瀬	西引御堂中本壽右衛門宅前	中本 壽右衛門	廣瀬	西九軒町原前榮造宅前	横山 茂太郎

廣瀬	廣瀬町廣瀬神社前	莊川 徳一	神崎	小網町綿枝幾松宅前	綿枝 幾松
廣瀬	廣瀬北町土手久賀仙吉宅前	久賀 仙吉	神崎	小網町大田卯三郎宅前	綿枝 幾松
廣瀬	廣瀬北町前田政武宅前	貞森 阪雄	神崎	小網町揖野節宅前	田葉西 信吉
廣瀬	廣瀬北町平本勇次郎宅前	田部 行雄	神崎	小網町田葉西信吉宅前	田葉西 信吉
廣瀬	廣瀬北町沖田八百屋前	石村 初次	神崎	小網町巡查派出所前	田葉西 信吉
廣瀬	錦町太田富蔵宅前	太田 富蔵	神崎	小網町小舟地区遊郭事務所前	洞木 覚
廣瀬	錦町井隅浅吉宅前	井隅 浅吉	神崎	西地方町伊藤順茂宅前	藤巻 國平
廣瀬	錦町砂田健一宅前	砂田 健一	神崎	西新町八木昆布店前	土屋 史
廣瀬	廣瀬北町野村フサ宅前	平本 勇次	神崎	西地方町岡精米所前	大田 興
廣瀬	廣瀬北町木下八百屋前	石村 初次	神崎	西地方町宮本酒店前	大田 興
廣瀬	錦町福原吉太郎宅前	福原 吉太郎	神崎	河原町東上組港弥太郎宅前	港 弥太郎
廣瀬	錦町塩谷愛次郎宅前	塩谷 愛次郎	神崎	河原町八木常吉宅前	港 弥太郎
廣瀬	錦町田部良雄宅前	田部 良雄	神崎	河原町北組河原町集会所前	松島 正
廣瀬	錦町増田常吉宅前	増田 常吉	神崎	河原町松島正宅前	松島 正
廣瀬	錦町石本弥太郎宅前	石本 弥太郎	神崎	河原町西組佐々木倉一宅前	藤居 完一
廣瀬	錦町山田又右衛門宅前	山田 又右衛門	神崎	神崎組古田嘉一宅前	藤居 完一
廣瀬	錦町小字羅興一宅前	小字羅 興一	神崎	舟入町山根興蔵宅前	前田 一二
神崎	小網町三光寺前	瀬川 常吉	神崎	舟入町羽田別荘東門前	前田 一二
神崎	小網町倍川光蔵宅前	瀬川 常吉	神崎	舟入町東組杉村米太郎宅前	鈴木 才吉
神崎	舟入町清水定次郎宅前	鈴木 才吉	神崎	舟入町鈴木才吉宅前	鈴木 才吉
神崎	舟入町西組高木吾一宅前	森岡 平太郎	観音	東観音町一丁目村武寅吉宅前	吉村 秀吉
神崎	舟入町東組岡崎主税宅前	稲葉 春一	観音	西観音町一丁目田辺太郎宅前	港 義夫
神崎	舟入町西組舟入託児所前	藤田 俵三郎	観音	西観音町一丁目浜口罐詰会社前	岩崎 泰雄
舟入	舟入幸町東組通田製材所前	梶田 徳松	観音	東観音町三丁目観音院前	田頭 浅吉
舟入	舟入幸町河合箸箱店前	梶田 徳松	観音	東観音町三丁目観船橋西	島津 市太郎
舟入	舟入幸町中組千鳥湯前	山田 権太郎	観音	西観音町一丁目山田留吉宅前	山田 留吉
舟入	舟入幸町西組井澤英夫宅前	井澤 英夫	観音	西観音町一丁目河野直一宅前	梅田 辰次郎
舟入	舟入幸町炭本商店前	井澤 英夫	観音	西観音町二丁目記念会館前	小山 惣一
舟入	舟入川口町東組桑原文次郎宅前	桑原 文次郎	観音	第二中学校前	小山 惣一
舟入	舟入川口町高橋積宅前	桑原 文次郎	観音	観音本町観音橋東詰	前浜 百太郎
舟入	舟入川口町中組田中廣吉宅前	田中 五郎	観音	南観音町二中寄宿舎横	山本 鉄次
舟入	舟入川口町中組金光良純宅前	久保田 次郎	観音	南観音町市商運動場前	久藤 吉郎
舟入	舟入川口町松本勇宅前	久保田 次郎	観音	南観音町小方記念碑前	宮原 庄助
舟入	舟入川口町南組石原光一宅前	石原 光一	観音	南観音町大師堂前	山本 實太郎
舟入	舟入川口町吉村竹次郎宅前	石原 光一	観音	南観音町二丁目第二国民学校前	田中 数太
観音	観音国民学校前	藤井 正男	観音	南観音町三丁目坂本榮吉宅前	一本 一貫
観音	東観音町三丁目観音信用組合前	北山 雄三郎	福島	福島町南区菊崎貫一宅前	菊崎 正行
観音	東観音町一丁目山口罐詰工場前	山口 柳太郎	福島	福島町河野カヨ宅前	菊崎 正行
福島	福島町中区山崎行政宅前	高橋 直吉	福島	福島町昭和冷蔵庫前	菊崎 正行
福島	福島町南区山崎末次郎宅前	高橋 直吉	己斐	己斐上町区土屋雜貨店前	土屋 数男
福島	福島町南区高橋直吉宅前	高橋 直吉	古田	古田町高須郵便局前	西素 一郎
福島	福島町本通区杉本秀一宅前	杉本 秀一	古田	大島團一宅前	西素 一郎
福島	福島町本通区石川春一宅前	石川 春一	古田	古江石川多郎宅前	小川 三郎
福島	福島町北組岩井常吉宅前	岩井 常吉	古田	田方信用組合前	森田 宗一
三篠	三篠町小河内橋	坂本 幹一	草津	草津町電車草津駅前	小田 茂
三篠	楠木町三篠橋西詰	安田 富蔵	草津	草津国民学校前	柳坪 東一
三篠	横川橋北詰	武本 清太郎	草津	草津小川早苗宅前	小川 早苗
三篠	新庄橋南詰	沢村 常吉	草津	草津吉本青物店前	石田 總一
三篠	打越町中央橋	古田 卓一	草津	草津魚市場前	木谷 竹次郎
三篠	南三篠橋町己斐橋東詰	瀬田 晋	草津	草津矢島自轉車前	島原 廣次
己斐	己斐本町区西光菓子店前	西光 勘治	草津	草津浜町草津港角	橋本 唯七
己斐	己斐本町香月靴店前	兼品 耕造	草津	草津青年会館前	横山 政次
己斐	己斐本町坂口花店前	坂口 徳人	草津	草津産業組合前	野村 力松
己斐	己斐本町中区旭神社下森廣店前	森廣 誠一	草津	庚午町高須停留所横	久保田 勝美
己斐	己斐本町中区谷村宅前	竹本 常吉	本川	空鞆町空鞆神社前	武田 隆史
己斐	上町地区消防警鐘台前	土井 卯一	本川	空鞆町東部南組中通	迫原 登
己斐	己斐国民学校前	高村 佐一	本川	空鞆町西部道路中央部	三上 丹一
本川	鷹匠町表通中央	柏木 朔	本川	鷹匠町東土手南入口	岡田 斌
本川	鷹匠町中部北端	小林 宇佐一	天満	横堀町木村亮一宅前	木村 亮一
本川	鷹匠町中部中央	今村 一	天満	北榎町岩井大吉宅前	岩井 大吉
本川	鷹匠町中部南端	寄木 一二	天満	天満町巡查派出所	竹内 半之助
本川	岡本鉄工所前	寺尾 尚司	天満	西天満町道路入口藤川理髪店前	杉山 廣作
本川	鷹匠町勝行寺前	丸子 丈三	天満	上天満町山口壽一宅前	山口 壽一
本川	鷹匠町大和又吉宅前	岩崎 智祐	天満	上天満町橋本亀一宅前	橋本 亀一
本川	鷹匠町石場愛之助宅前	石場 愛之助	天満	上天満町新井庄次郎宅前	新井 庄次郎
本川	本川国民学校前	熊澤 實一	天満	上天満町長見利喜輔宅前	長見 利喜輔
本川	塚本町長谷病院前	白川 清次	天満	上天満町太田喜一宅前	太田 喜一
本川	油屋町本通筋石井薬局前	郷田 金太	天満	上天満町免出香作宅前	面出 香作

本川	油屋町中央	松村 悦二郎	天満	上天満町多田逸三郎宅前	多田 逸三郎
本川	左官町佐伯辰次郎宅前	佐伯 篤一	天満	上天満町河崎直太宅前	河崎 直太
本川	十日市町電車停留所北	井上 彦助	天満	上天満町山田寅藏宅前	山田 寅藏
本川	十日市町南側	木村 浅次郎	天満	榎町高橋剛宅前	高橋 剛
天満	堺町四丁目金口酒場前	塚脇 邦吉	天満	榎町木村寅吉宅前	平田 秀吉
天満	天満橋東詰	塚脇 邦吉	天満	天満町武内半之助宅前	武内 半之助
天満	西大工町信濃助次郎宅前	信濃 助次郎	江波	江波町山本文義宅前	沖山 隆司
天満	新市町稻荷神社前	秋山 一	江波	江波町田中正幸宅前	沖山 隆司
江波	江波町元市内バス終点車庫前	沖山 隆司	江波	江波町江波郵便局前	沖山 隆司
江波	江波町森中正行宅前	沖山 隆司	江波	江波町中田倉次宅前	松村 正晴
江波	江波町江波温泉場前	沖山 隆司	江波	江波国民学校前	松村 正晴
江波	江波町羽衣神社前	沖山 隆司	江波	江波町米田金槌宅前	米田 金槌
江波	江波町美村繁一宅前	松村 正晴	江波	江波町浅金群治宅前	松村 正晴
江波	江波町藤田倉司宅前	松村 正晴	江波	江波町中島光治宅前	木下 清一
江波	江波町中山甚一宅前	松村 正晴	江波	江波町笹木亀太郎宅前	木下 清一
江波	江波町中村観吉宅前	松村 正晴	江波	江波町木村神三郎宅前	木下 清一

別紙第二十號

「ラヂオ」聴取箇所表

警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名	警報受領團名
廣島市警防團本部	比治山分團	袋町分團	三篠分團	幟町分團	大手分團	福島分團
尾長分團	大河分團	廣瀬分團	古田分團	段原分團	中島分團	己斐分團
荒神分團	宇品分團	神崎分團	青崎分團	仁保分團	本川分團	草津分團
白島分團	似島分團	江波分團	矢賀分團	楠那分團	舟入分團	廣島市役所
竹屋分團	千田分團	天満分團	牛田分團	皆実分團	観音分團	廣島電気株式会社

別紙第二十一號

汽船會社（支店代理店出張所ヲ含ム）所属船舶ニ對スル防空警報傳達方法調表

分團名	所在地	會社名	警報傳達方法	通達責任者氏名	責任者ヨリ通達方法
宇品	宇品町	合資会社廣島郵船組	分団ヨリ電は又ハ特使	大石 長次郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	廣島湾汽船株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	仁田 竹一	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	合資会社尼ヶ崎汽船部廣島支店	分団ヨリ電は又ハ特使	時惣 節二	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	國際汽船株式会社廣島出張所	分団ヨリ電は又ハ特使	濱田 一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	瀬戸内海商船株式会社宇品出張所	分団ヨリ電は又ハ特使	塩本 廣一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	石崎汽船株式会社宇品支店	分団ヨリ電は又ハ特使	塩本 廣一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	檜山汽船部	分団ヨリ電は又ハ特使	塩本 廣一郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	加藤海運株式会社廣島市店	分団ヨリ電は又ハ特使	中山 忠一	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	廣島合同運送株式会社宇品支店	分団ヨリ電は又ハ特使	蜂谷 衡平	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	戸田海運合資会社	分団ヨリ電は又ハ特使	戸田 茂夫	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	株式会社松田商会	分団ヨリ電は又ハ特使	安井 藤造	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	廣急海上トラツク株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	大西 誠	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	合資会社廣島商船組	分団ヨリ電は又ハ特使	平川 潔	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	宇品海運運送株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	中村 藤太郎	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	合資会社宮歹本店	分団ヨリ電は又ハ特使	宮下 条吉	無線、手旗又ハ口頭
宇品	宇品町	興亜海運株式会社	分団ヨリ電は又ハ特使	吉山 梅吉	無線、手旗又ハ口頭

別紙第二十二號

火焰ヲ發スル工場等調査表

分團名	特殊火焰類ノ種類	位 置		管制責任者
矢賀	鑄物工場	矢賀町四五〇	宍戸製作所	宍戸 義太郎
比治山	電気製鋼工場	大洲町一七八	藤川工業合名会社	藤川 長市
比治山	鉄工場	大洲町一七八	児玉製作所	児玉 登九平
宇品	鑄物工場	元宇品町三〇〇	宇品鑄造所	俵積 穂
中島	合金製造工場	吉島本町六五三ノ一	梅野合金製造所	梅野 五郎
中島	鑄物工場	吉島町二〇三	平石鑄造所	平石 修二
舟入	鑄物工場	舟入川口町五七八	山中鑄造所	山中 悦治
舟入	鑄物工場	舟入川口町七四四	松本鑄造所	松本 佐
観音	鑄物工場	南観音町二四一一	観音鑄造所	田中 一郎
天満	鑄物工場	上天満町六〇四	益田鑄造所	益田 京一
天満	鑄物工場	上天満町四四一	大田鑄造所	大田 喜一
天満	鑄物工場	上天満町四四一	太田鑄造所	太田 政一
三篠	唧筒製造工場	中廣町九九八	津田式唧筒製作所	津田 喜次郎
三篠	鑄物工場	中廣町九九八	高橋鑄造所	高橋 等夫
三篠	鑄物工場	中廣町七八六	王吉鑄造所	王吉 喜太久
三篠	鑄物工場	中廣町四四ノ一	荒木鑄工所	荒木 豊司
三篠	鑄物工場	打越町一	廣島鑄工所	松井 繁太郎
三篠	鑄物工場	打越町一三ノ二	森田鑄造所	森田 竹三郎
三篠	鑄物工場	打越町二五六ノ二	三篠鑄工所	加藤 榮

三篠	鋳物工場	打越町二三ノ四	廣徳鋳造所	廣徳 忠男
三篠	鋳物工場	楠木町六一ノ一	石井鋳造所	石井 留一
三篠	鋳物工場	三篠本町一四八五	土井鋳造所	土井 重行
三篠	鋳物工場	新庄町一一一三	大田鋳造所	大田 忠
三篠	鋳物工場	打越町二六	石田鋳造所	石井 春蔵
三篠	鋳物工場	打越町二六	坂本鋳造所	坂本 金一
三篠	鋳物工場	打越町九	坂本鋳造所	坂本 亀吉
三篠	鋳物工場	打越町一二ノ一	堀田鋳造所	堀田 文作

別紙第二十三號

燈火管制状況検視場所

検視區域	検視場所	検視區域	検視場所
全市	廣島市役所屋上	青崎分團区域	仁保町青崎堤丘陵地
全市	八丁堀福屋百貨店屋上	矢賀分團区域	矢賀国民学校々庭
北西両方面	比治山公園御便殿附近	段原分團区域	段原国民学校々庭
牛田分團区域	牛田国民学校消防警鐘台上	比治山分團区域	東雲町廣島脳病静養院屋上
荒神分團区域	荒神国民学校屋上	皆実町一丁目一円	皆実町一丁目九七九ノ二番地屋上
尾長分團区域	尾長町片河丘陵地	千田町南部一円	廣島貯金支局屋上
皆実分團区域	比治山公園西南隅高地	中島本町一円	中島本町大正屋呉服店屋上
皆実町二丁目一円	皆実町二丁目一二九三番地屋上	水主町一円	中島国民学校屋上
皆実町三丁目一円	皆実町三丁目八三一番地屋上	吉島町一円	吉島本町聾学校屋上
皆実町三丁目一円	皆実町三丁目九七六番地屋上	廣瀬分團区域	廣瀬国民学校屋上
仁保分團区域	仁保町本浦説教場警鐘台上	本川分團区域	本川国民学校屋上
仁保町湊崎一円	仁保町大浜潮湯	舟入分團区域	舟入幸町長谷川護謨工場屋上
仁保町湊崎一円	仁保町皿山	江波分團区域	江波公園高地
大河分團区域	仁保町御茶ノ山丘陵地	天満分團区域	天満国民学校屋上
楠那分團区域	楠那国民学校屋上	廣瀬横堀町一円	横堀町木村亮一宅屋上
宇品分團区域	宇品学園屋上	観音分團区域	観音国民学校屋上
似島分團区域	似島国民学校屋上	福島分團区域	福島町一致協會屋上
白島分團区域	東白島町通信局本館屋上	三篠分團区域	三篠信用組合屋上
幟町分團区域	上流川町勸業銀行廣島支店屋上	古田分團区域	古田町天狗山頂上
袋町分團区域	袋町国民学校屋上	草津分團区域	草津町柳峠東一宅屋上
竹屋分團区域	竹屋国民学校屋上	己斐分團区域	旭山神社高地
大手分團区域	大手町八丁目藝ビル屋上	千田町北部一円	文理科大学屋上
翠町及附近一円	翠町一〇一〇番地屋上		

別紙第二十四號

警防分團防護監視所位置表

本團及分團名	立哨位置	所員数	本部又ハ分断トノ連絡	本團及分團名	立哨位置	所員数	本部又分團トノ連絡
警防團本部	廣島市役所屋上	6	傳令	福島警防分團	福島町一致協會屋上	6	口頭
牛田警防分團	牛田国民学校門前消防警鐘台上	6	口頭	仁保警防分團	仁保町皿山	4	傳令
荒神警防分團	荒神国民学校屋上	6	口頭	大河警防分團	仁保町御茶ノ山丘陵地	4	傳令
尾長警防分團	尾長町片河丘陵地	6	傳令	楠那警防分團	楠那国民学校屋上	4	口頭
青崎警防分團	仁保町青崎堤丘陵地	6	口頭	宇品警防分團	宇品学園屋上	6	口頭
矢賀警防分團	矢賀国民学校々庭	4	口頭	似島警防分團	似島国民学校屋上	6	口頭
段原警防分團	段原国民学校々庭	6	口頭	白島警防分團	東白島町通信局本館屋上	6	傳令
比治山警防分團	東雲町廣島脳病静養院屋上	6	傳令	幟町警防分團	上流川町勸業銀行廣島支店屋上	10	傳令
皆実警防分團	皆実町一丁目九七九ノ二番地屋上	4	傳令	袋町警防分團	袋町国民学校屋上	6	口頭
皆実警防分團	翠町一〇一〇番地屋上	4	傳令	竹屋警防分團	竹屋国民学校屋上	6	口頭
皆実警防分團	比治山公園西南隅高地	4	傳令又ハ手旗	大手警防分團	大手町八丁目藝ビル屋上	6	傳令
皆実警防分團	皆実町二丁目一二九三番地屋上	4	傳令	千田警防分團	文理科大学屋上	7	傳令
皆実警防分團	皆実町三丁目八三一番地屋上	4	傳令	千田警防分團	廣島貯金支局屋上	7	傳令
皆実警防分團	皆実町三丁目九七六番地屋上	4	傳令	中島警防分團	中島本町大正屋呉服店屋上	7	傳令
仁保警防分團	仁保町本浦説教場警鐘台上	4	傳令	中島警防分團	中島国民学校屋上	7	口頭
仁保警防分團	仁保町大浜潮湯	4	傳令	中島警防分團	吉島本町聾学校屋上	7	傳令
本川警防分團	本川国民学校屋上	6	口頭	廣瀬警防分團	廣瀬国民学校屋上	7	口頭
舟入警防分團	舟入幸町長谷川護謨工場屋上	5	傳令	三篠警防分團	三篠信用組合屋上	12	傳令
江波警防分團	江波公園高地	5	傳令	古田警防分團	古田町天狗山頂上	6	傳令
天満警防分團	天満国民学校屋上	6	口頭	草津警防分團	草津町柳峠東一宅屋上	9	傳令
天満警防分團	横堀町木村亮一宅屋上	6	傳令	己斐警防分團	旭山神社高地	2	手旗
観音警防分團	観音巡查派出所屋上	2	傳令	神崎警防分團	神崎国民学校屋上	4	口頭
観音警防分團	観音国民学校屋上	2	傳令	神崎警防分團	西遊郭京都樓屋上	4	傳令

別紙第二十五號

主ナル危険物調査表（昭和十五年十一月末現在）

署名	危険物ノ種類	場所	所有者名
----	--------	----	------

東	石油	大洲町一六二	常盤グリース製造所
	石油	大洲町一四五	大原ゴム工業所
宇品	火薬	皆実町三丁目	牛尾火薬店
	石油	宇品町	山戸太一
	石油	皆実三丁目	児島石油貯蔵所
	石油	千田町三丁目	廣島瓦斯電気株式会社
	瓦斯タンク	千田町三丁目	廣島瓦斯電気株式会社
	石油	千田町三丁目	村越郁之助
	石油	千田町三丁目	山音石油店
	石油	千田町二丁目五一二	本名政一
	石油	宇品町	尾崎汽船部広島支店
	石油	元宇品町	富士谷砥油店
	人絹用ニ硫化炭素	宇品町大河通	王子化工株式会社大和紡績株式会社広島人絹工場
	石油	似島町家下七五〇	沖野儀三郎
	石油	似島町	川崎利夫
	火薬	似島町	藤本丈吉
	火薬	似島町	似島浜本組
西	石油	広島市役所内	広島市長
	石油	尾道町七五	三浦義美
	石油	楠木町七一一ノ二	エルエッチ ラブリュー
	石油	三篠本町三丁目一四四七	村川三郎
	石油	楠木町三丁目三九七	田村秀太郎
	石油	吉島本町四一六	中國塗料株式会社
	石油	横川町三丁目七三九ノ一	ジョン チェスター グールド
	石油	舟入川口町五六七	中國石油株式会社
	石油	三篠本町三丁目九九三	亀井武
	石油	吉島羽衣町二〇六	谷川勝
	石油	新庄町一四四三ノ二	丸山市助
	石油	新市町三一六ノ一一	井口福市
	石油	吉島町六七六ノ一	清水亀次郎
	石油	東観音町二丁目九七	昭和製罐印刷株式会社
	石油	古田町大字古江二七八	八島秋二郎
	石油	堺町三丁目三〇	八島玄蔵
	石油	中島本町五四ノ三	伊藤藤吉
	石油	三篠本町三丁目一四五〇	ライジングサン山根石油会社三篠販売所
	石油	舟入川口町	日本理化工業株式会社広島支社
	火工品	三滝町二四八、二四九	藤田源重
	火薬	三滝町三五二	牛尾章一
	火薬	横川町三丁目八八二ノ一	牛尾章一
	火薬	天満町五三九	渡辺佐兵衛
	火薬	江波町字上山三二ノ二	渡辺佐兵衛
	火薬	古田町古江六八	田川伊三郎

別紙第二十六號

消防車其ノ他消防用設備機材配置表

分團又ハ部名	消防ニ関スル設備資材ノ種類	員数	位 置	保管責任者	備 考
東警察署	ハドゾンロータリ式自動車ポンプ	1	東警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 498
	ガソリン直立式タービン自動車ポンプ	1	東警察署	警防團長	
	ホース	12	東警察署	警防團長	
	スタンド	4	東警察署	警防團長	
	鳶	4	東警察署	警防團長	
段原分團	手輓水管車	2	土手町火防倉庫	警防團長	
	ホース	12	土手町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	2	土手町火防倉庫	警防團長	
	鳶	24	土手町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	土手町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	比治山火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	比治山火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	比治山火防倉庫	警防團長	
	鳶	23	比治山火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	比治山火防倉庫	警防團長	
比治山分團	手輓水管車	1	段原末広町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	段原末広町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	11	段原末広町火防倉庫	警防團長	
	鳶	27	段原末広町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	段原末広町火防倉庫	警防團長	
荒神分團	手輓水管車	1	荒神町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	荒神町火防倉庫	警防團長	

	スタンド	1	荒神町火防倉庫	警防團長	
	鳶	31	荒神町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	荒神町火防倉庫	警防團長	
白島分團	手輓水管車	1	東白島火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	東白島火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	東白島火防倉庫	警防團長	
	鳶	22	東白島火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	東白島火防倉庫	警防團長	
幟町分團	手輓水管車	1	弥生町火防倉庫	警防團長	
	ゼツトパイプ	1	弥生町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	弥生町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	弥生町火防倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	2	弥生町火防倉庫	警防團長	
	鳶	25	弥生町火防倉庫	警防團長	
	バケツ	2	弥生町火防倉庫	警防團長	
	自動車ポンプ	3	弥生町火防倉庫	警防團長	
	自動車ポンプ	1	八丁堀火防倉庫	分団長	
竹屋分團	手輓水管車	1	下流川町火防倉庫	分団長	
	ホース	6	下流川町火防倉庫	分団長	
	スタンド	1	下流川町火防倉庫	分団長	
	鳶	25	下流川町火防倉庫	分団長	
	シャベル	2	下流川町火防倉庫	分団長	
	手輓水管車	1	宝町火防倉庫	分団長	
	ホース	6	宝町火防倉庫	分団長	
	スタンド	1	宝町火防倉庫	分団長	
	鳶	26	宝町火防倉庫	分団長	
尾長分團	シャベル	1	宝町火防倉庫	分団長	
	手輓水管車	1	尾長町火防倉庫	分団長	
	ホース	7	尾長町火防倉庫	分団長	
	スタンド	1	尾長町火防倉庫	分団長	
	手輓ガソリンポンプ	1	尾長町火防倉庫	分団長	
	鳶	23	尾長町火防倉庫	分団長	
牛田分團	シャベル	3	尾長町火防倉庫	分団長	
	手輓水管車	4	牛田町火防倉庫	分団長	
	ホース	34	牛田町火防倉庫	分団長	
	スタンド	5	牛田町火防倉庫	分団長	
	自動車ポンプ	1	牛田町火防倉庫	分団長	
	腕用ポンプ	1	牛田町火防倉庫	分団長	
	鳶	31	牛田町火防倉庫	分団長	
矢賀分團	シャベル	3	牛田町火防倉庫	分団長	
	腕用ポンプ	2	矢賀町火防倉庫	分団長	
	ホース	25	矢賀町火防倉庫	分団長	
	梯子	1	矢賀町火防倉庫	分団長	
	運水用バケツ	20	矢賀町火防倉庫	分団長	
	手輓水管車	1	矢賀町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	矢賀町火防倉庫	警防團長	
	鳶	16	矢賀町火防倉庫	警防團長	
西警察署	シャベル	3	矢賀町火防倉庫	警防團長	
	ハドソンロータリー式自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 400 勺
	ハドソンロータリー式自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 500 勺
	レオタービン式自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 27.3、放水量 550 勺
	六気筒直立式バランスタービン梯子自動車ポンプ	1	西警察署	警防團長	馬力 29.7、放水量 593 勺
三篠分團	ドジー水管自動車	1	西警察署	警防團長	馬力 23.0
	フォードタービン自動車ポンプ	1	三篠分團倉庫	警防團長	馬力 30.0、放水量 500
	腕用ポンプ	1	三篠分團倉庫	警防團長	
	鳶	40	三篠分團倉庫	警防團長	
	シャベル	3	三篠分團倉庫	警防團長	
草津分團	腕用ポンプ	1	草津東町分團倉庫	警防團長	
	鳶	7	草津東町分團倉庫	警防團長	
	シャベル	1	草津東町分團倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	草津南町分團倉庫	警防團長	
	鳶	7	草津南町分團倉庫	警防團長	
	シャベル	1	草津南町分團倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	庚午町分團倉庫	警防團長	
	鳶	6	庚午町分團倉庫	警防團長	
	シャベル	1	庚午町分團倉庫	警防團長	
	クロハムロータリー自動車ポンプ	1	草津分團倉庫	警防團長	馬力 24.0、放水量 400

己斐分團	クロハムロータリー自動車ポンプ	1	己斐本町区分團倉庫	警防團長	馬力 24. 0、放水量 400
	腕用ポンプ	2	己斐上町車庫	警防團長	倉庫二ヶ所
	鳶	20	己斐上町車庫	警防團長	
	シャベル	3	己斐上町車庫	警防團長	
古田分團	フォードロータリー自動車ポンプ	1	古田分團倉庫	警防團長	馬力 24. 0、放水量 350
	腕用ポンプ	1	古田分團倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	古江火防倉庫	警防團長	
	鳶	6	古江火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	古江火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	田方火防倉庫	警防團長	
	鳶	6	田方火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	田方火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	高須火防倉庫	警防團長	
	鳶	6	高須火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	高須火防倉庫	警防團長	
江波分團	森田式ブランジヤ手輓ガソリンポンプ	1	江波町火防倉庫	警防團長	馬力 20. 0、放水量 200
	手輓水管車	1	江波町火防倉庫	警防團長	
	鳶	13	江波町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	江波町火防倉庫	警防團長	
中島分團	手輓水管車	1	中島新町火防倉庫	警防團長	
	鳶	7	中島新町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	中島新町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	上水主町火防倉庫	警防團長	
	鳶	8	上水主町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	上水主町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	下水主町火防倉庫	警防團長	
	鳶	8	下水主町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	下水主町火防倉庫	警防團長	
	フォード自動車ポンプ	1	下水主町火防倉庫	警防團長	馬力 35. 00
袋町分團	手輓水管車	1	新川場町火防倉庫	警防團長	
	鳶	10	新川場町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	新川場町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	大手町四丁目火防倉庫	警防團長	
	鳶	10	大手町四丁目火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	大手町四丁目火防倉庫	警防團長	
神崎分團	手輓水管車	1	西地方町火防倉庫	警防團長	
	鳶	28	西地方町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	西地方町火防倉庫	警防團長	
本川分團	手輓水管車	1	油屋町火防倉庫	警防團長	
	鳶	18	油屋町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	油屋町火防倉庫	警防團長	
大手分團	手輓水管車	1	大手町九丁目火防倉庫	警防團長	
	鳶	9	大手町九丁目火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	大手町九丁目火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	雑魚場町火防倉庫	警防團長	
	鳶	9	雑魚場町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	雑魚場町火防倉庫	警防團長	
廣瀬分團	手輓水管車	1	寺町火防倉庫	警防團長	
	鳶	15	寺町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	12	寺町火防倉庫	警防團長	
天満分團	手輓水管車	1	天満町火防倉庫	警防團長	
	スタンドパイプ	1	天満町火防倉庫	警防團長	
	ゼットパイプ	1	天満町火防倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	2	天満町火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	天満町火防倉庫	警防團長	
	鳶	27	天満町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	天満町火防倉庫	警防團長	
観音分團	手輓水管車	1	観音町火防倉庫	警防團長	
	鳶	14	観音町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	観音町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	西観音町火防倉庫	警防團長	
	鳶	14	西観音町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	西観音町火防倉庫	警防團長	
福島分團	手輓水管車	1	福島町火防倉庫	警防團長	
	鳶	13	福島町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	福島町火防倉庫	警防團長	
仁保分團	腕用ポンプ	2	本浦火防倉庫	警防團長	
	吸水管	6	本浦火防倉庫	警防團長	

	ゼットパイプ	2	本浦火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース	4	本浦火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース車	2	本浦火防倉庫	警防團長	
	鳶	12	本浦火防倉庫	警防團長	
	上水道用スタンド	1	本浦火防倉庫	警防團長	
	上水道用スタンドホース	3	本浦火防倉庫	警防團長	
	ゼット	1	本浦火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	本浦火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	湊崎火防倉庫	警防團長	
	ゼット	2	湊崎火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース	4	湊崎火防倉庫	警防團長	
	腕用ホース車	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	鳶	10	湊崎火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	3	湊崎火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	湊崎火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	柞木火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	柞木火防倉庫	警防團長	
	ゼット	2	柞木火防倉庫	警防團長	
	ホース	4	柞木火防倉庫	警防團長	
	ホース車	1	柞木火防倉庫	警防團長	
	鳶	12	柞木火防倉庫	警防團長	
	上水道用スタンド	2	柞木火防倉庫	警防團長	
	ゼット	2	柞木火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	6	柞木火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	柞木火防倉庫	警防團長	
楠那分團	腕用ポンプ	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	日宇那火防倉庫	警防團長	
	ゼット	3	日宇那火防倉庫	警防團長	
	ホース	6	日宇那火防倉庫	警防團長	
	ホース車	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	鳶	17	日宇那火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	3	日宇那火防倉庫	警防團長	
	シャベル	1	日宇那火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	丹那火防倉庫	警防團長	
	ゼット	3	丹那火防倉庫	警防團長	
	吸水管	3	丹那火防倉庫	警防團長	
	ホース	5	丹那火防倉庫	警防團長	
	ホース車	1	丹那火防倉庫	警防團長	
	鳶	15	丹那火防倉庫	警防團長	
	スタンド	1	丹那火防倉庫	警防團長	
	スタンドホース	3	丹那火防倉庫	警防團長	
	シャベル	2	丹那火防倉庫	警防團長	
宇品警察署	フォードロータリー自動車ポンプ	1	宇品警察署	警防團長	馬力 24. 0、放水量 250
	カーマスロータリー消防艇	1	宇品警察署	警防團長	馬力 24. 0、放水量 250 ㍥
	消防艇ホース	8	宇品警察署	警防團長	馬力 24. 0、放水量 250 ㍥
宇品分團	ガソリンポンプ	1	宇品町火防倉庫	警防團長	
	腕用ポンプ	1	宇品町火防倉庫	警防團長	
	手輓水管車	5	宇品町火防倉庫	警防團長	
	運搬車	1	宇品町火防倉庫	警防團長	
	ホース	73	宇品町火防倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	16	宇品町火防倉庫	警防團長	
	スタンド	9	宇品町火防倉庫	警防團長	
	ゼット	9	宇品町火防倉庫	警防團長	
	吸水管	6	宇品町火防倉庫	警防團長	
	鳶	37	宇品町火防倉庫	警防團長	
	シャベル	18	宇品町火防倉庫	警防團長	
青崎分團 (東署)	腕用ポンプ	3	青崎火防倉庫	警防團長	
	梯子	6	青崎火防倉庫	警防團長	
	鳶	17	青崎火防倉庫	警防團長	
	シャベル	3	青崎火防倉庫	警防團長	
千田分團	フォード水管自動車	1	千田分團倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	千田分團倉庫	警防團長	
	スタンド	2	千田分團倉庫	警防團長	
	ホース	12	千田分團倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	3	千田分團倉庫	警防團長	

	ゼット	1	千田分團倉庫	警防團長	
	鳶	38	千田分團倉庫	警防團長	
大河分團	手輓ガソリンポンプ	1	大河分團倉庫	警防團長	
	鳶	15	大河分團倉庫	警防團長	
	シャベル	3	大河分團倉庫	警防團長	
	手輓水管車	1	大河分團倉庫	警防團長	
	ホース	20	大河分團倉庫	警防團長	
	運搬車	1	大河分團倉庫	警防團長	
似島分團	腕用ポンプ	4	似島分團倉庫	警防團長	
	吸水管	10	似島分團倉庫	警防團長	
	ビットパイプ	8	似島分團倉庫	警防團長	
	ホース	16	似島分團倉庫	警防團長	
	鳶	31	似島分團倉庫	警防團長	
	シャベル	3	似島分團倉庫	警防團長	
皆実分團	手輓水管車	1	皆実町分團倉庫	警防團長	
	吸水管	4	皆実町分團倉庫	警防團長	
	スタンドパイプ	2	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ゼットパイプ	2	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ノーヅルゼット換口	5	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ホース	18	皆実町分團倉庫	警防團長	
	ホースハンドル	6	皆実町分團倉庫	警防團長	
	スツパナ	1	皆実町分團倉庫	警防團長	
	カツブリング	4	皆実町分團倉庫	警防團長	
	鳶	24	皆実町分團倉庫	警防團長	
舟入分團	シャベル	3	皆実町分團倉庫	警防團長	
	三輪自動車ポンプ	1		警防團長	馬力 16.00、放水量 100 ガロン

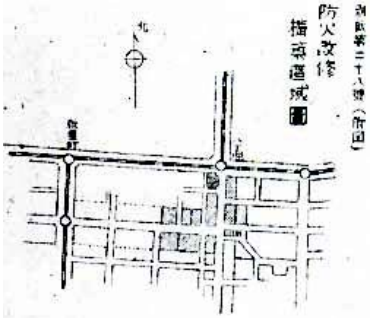
別紙第二十七號

消火栓配置表

分團名	位 置	員数
青崎	仁保町ノ内堀越部落及向洋部落一円	61
矢賀	矢賀町一円	10
尾長	尾長町、西蟹屋町、愛宕町、若草町一円	47
荒神	西蟹屋町、荒神町、猿猴橋町、松原町、大須賀町一円	44
牛田	牛田町一円	64
白島	二葉ノ里、東白島町、白島九軒町、白島東中町、白島中町、白島西中町、西白島町、白島北町一円	56
幟町	上柳町、橋本町、幟町、上流川町、鉄砲町、八丁堀、下柳町、石見屋町、山口町、銀山町、東胡町、斜屋長、胡町、弥生町、堀川町一円	68
竹屋	堀川町、下流川町、三川町、平塚町、田中町、竹屋町、鶴見町、宝町、富士見町、昭和町一円	94
段原	台屋町、京橋町、的場町、金屋町、比治山町、松川町、稲荷町、土手町、段原大畑町、桐木町、段原町、段原末広町、比治山公園、比治山本町、段原東浦一円	83
比治山	大洲町、南蟹屋町、段原新町、段原日出町、段原山崎町、段原中町、南段原町、東雲町一円	49
仁保	仁保町ノ内本浦部落及洩崎部落一円	34
楠那	仁保町ノ内日宇那部落及丹那部落	29
大河	霞町、出汐町、旭町、仁保町ノ内大河部落一円	41
皆実	皆実町一丁目、二丁目、三丁目、翠町一円	52
宇品	宇品町、元宇品町一円	84
似島	似島一円	
千田	東千田町、千田町一丁目、二丁目、三丁目、南千田町、平野町、南竹屋町一円	87
大手	國泰寺町、雑魚場町、大手町六丁目、七丁目、八丁目、九丁目	45
袋町	基町、東魚屋町、立町、研屋町、紙屋町、平田屋町、播磨屋町、革屋町、鉄砲屋町	58
中島	中島本町、天神町、材木町、木挽町、元柳町、中島新町、水主町、吉島町、吉島羽衣町、吉島本町一円	117
廣瀬	寺町、西引御堂町、廣瀬北町、廣瀬元町、錦町、西九軒町	30
本川	空鞘町、鷹匠町、左官町、十日市町、鍛冶屋町、油屋町、猫屋町、堺町一丁目、二丁目、塚本町一円	34
神崎	西新町、西地方町、小網町、舟入町、河原町、舟入仲町、舟入本町一円	64
舟入	舟入幸町、舟入川口町一円	54
江波	江波町一円	31
観音	東観音町一丁目、二丁目、観音本町、西観音町一丁目、二丁目、南観音町一円	95
天満	榎町三丁目、四丁目、西大工町、榎町、横堀町、新市町、北榎町、天満町、西天満町、上天満町	49
福島	福島町一円	28
三篠	楠木町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、大芝町、横川一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、新庄町、三滝町、打越町、山手町、中広町、南三篠町一円	152
己斐	己斐町一円	41
古田	古田町一円	21
草津	草津東町、草津本町、草津浜町、草津南町、庚午町一円	50

別紙第二十八號

防火改修ノ構築區域



区域（附圖参照）	改修面積		摘 要
平田屋町、胡町、堀川町ノ一部 東魚屋町（模範街区）ノ一部	坪		昭和十四年、五年度執行予定 区域ニシテ昭和十六年度へ繰越継続執行中
平田屋町、胡町、堀川町ノ一部 東魚屋町（模範街区）ノ一部	4,783	00	昭和十六年度執行予定

←別紙第二十八號（附図）

防火改修構築区域圖



別紙第二十九號

自然水利用區域表

分團名	区域	利用可能潮時
青崎	仁保町向洋三〇三三番地地々先＝同三五一〇番地地々先間猿猴川	満
	仁保町堀越三四二番地地々先＝同一六七五番地地々先間船越入川	満
矢賀	矢賀町大字大須三七六番地地々先府中川	満
荒神	大須賀町一一〇二番地地々先＝駅前橋間京橋川	満
	松原町一〇四八番地地々先＝猿猴橋間猿猴川	満、干
	荒神橋、猿猴橋、駅前橋、大正橋各橋下猿猴川	満、干
	栄橋々下京橋川	満、干
	西蟹屋町、東洋紡績株式会社広島工場内貯水池	満、干
牛田	工兵橋＝牛田町一番地々先間京橋川	満、干
	不動院境内貯水池	満、干
	牛田町字院内ヨリ大字大坪対重ヲ貫流セル小川	満
白島	饒津神社上手＝常盤橋間二葉ノ里側京橋川	満
	常盤橋橋々下京橋川	満、干
	白島九軒町二〇二地地々先＝常盤橋下手間京橋川	満
	工兵橋＝神田橋間京橋川	満
	白島北町長壽園＝下手鉄橋間太田川	満
	鶴羽神社境内内貯水槽	満、干
	三篠橋々下太田川	満
幟町	縮景園上手＝柳橋間京橋川西岸	満
	栄橋、京橋、柳橋、各橋下京橋川	満、干
竹屋	柳橋、鶴見橋、比治山橋、各下京橋川	満、干
	柳橋＝昭和町六三九地地々先間京橋川	満
	富士見橋附近竹屋川	満
	竹屋橋々下竹屋川	満
	竹屋町一番地地々先竹屋川	満
段原	駅前橋、猿猴橋、荒神橋、大正橋、各橋下猿猴側	満、干
	台屋町三四番地々先＝猿猴橋間猿猴川	満
	大正橋＝同下手鉄橋間猿猴川	満
	京橋、柳橋、比治山橋、各橋下京橋川	満、干
	台屋町八六番地地々先＝比治山橋間京橋川	満
比治山	省線大洲口駅地先＝大洲町四七八番地々先間猿猴川	満
	東雲町東部猿猴川沿岸一帯	満
	東大橋々下猿猴川	満、干
仁保	仁保町湊崎三六七番地々先猿猴川下流渡口	満
	仁保町字露霞渡九六六番地々先＝同字軍田一一一七番地々先間猿猴川下流	満
楠那	仁保町字東條二五番地々先附近海岸	満
	同町字浜新築地海岸一帯	満
	同町字菖蒲崎地区港内海岸	満

	同町字山城屋四番地々先海岸	満
大河	省線たんな橋駅附近入川海岸一帯	満
皆実	比治山橋、御幸橋各橋下京橋川	満、干
	皆実町一丁目二五〇番地々先＝同町三丁目三四二番地々先間京橋川	満
	高等学校内貯水池	満、干
宇品	宇品町十五丁目八七番地々先海岸	満、干
	同町八丁目四六番地々先海岸	満、干
	同町右場所＝同町一丁目三九番地々先間海岸	満
	同町一丁目三番地（御幸松）地先ヨリ眼鏡橋ヲ経テ元宇品町水ヶ谷三五七番地々先間海岸	満、干
	宇品町水ヶ谷西側海岸	満
	同町江村岡四〇〇番地々先＝同小中谷一九八番地々先間東側海岸	満、干
	同町小中谷二六五番地々先海岸	満
	宇品町市営棧橋通路	満
	大和紡績株式会社広島人絹工場内貯水池	満、干
	省線たんなばし駅附近入川	満
千田	竹屋川全流	満
	修道中学校内貯水池	満、干
	御幸橋々下京橋川	満、干
	千田町三丁目八二八番地々先京橋川	満
	御幸橋西詰＝南千田町一〇七五番地々先間京橋川	満
	南大橋東詰＝南千田町一五九番地々先元安川	満
	南千田町二五九番地々先＝同町二四九番地々先間元安川	満、干
大手	大手町九丁目二二五番地々先＝同二二四番地々先間元安川	満、干
	万代橋＝大手町八丁目五六番地々先間元安川	満
	明治橋＝大手町九丁目一九〇番地々先間元安川	満
袋町	縣立一中貯水池	満、干
	新橋元安橋各橋下元安川	満、干
	産業奨励館前＝元安橋間元安川	満、干
	相生橋下太田川	満
中島	相生橋Ｔ字橋本川橋新大橋各橋下太田川	満、干
	住吉神社前＝住吉橋間太田川	満
	吉島町六七四番地々先＝同刑務所前間太田川	満、干
	吉島本町七三五番地々先＝澹溜池ヲ経テ同町四九九番地々先間海岸	満
	南大橋西詰＝吉島羽衣町三九八番地々先間元安川	満、干
	水主町百五十六番地々先＝明治橋西詰間元安川	満、干
	万代橋、新橋、元安橋各橋下元安橋	満、干
	南大橋、明治橋各橋下元安橋	満
廣瀬	横川橋、横河新橋各橋下太田川	満、干
	北広瀬橋、廣瀬橋各橋下天満川	満
本川	相生橋、本川橋各橋下太田川	満、干
神崎	新大橋々下太田川	満、干
	住吉橋々下太田川	満
	河原町一六六番地々先＝同一七九番地々先間太田川	満、干
	小網町一七五番地々先天満川	満
	観船橋観音橋各橋下天満川	満
舟入	舟入幸町一〇〇〇番地々先＝舟入川口町一〇九〇番地々先間天満川	満
	舟入川口町五七八番地々先＝同六九一番地々先間太田川	満
	舟入川口町六九一番地々先＝同七一八番地々先間太田川	満、干
江波	江波町一番地々先＝同六〇番地々先間太田川海岸	満、干
	江波港内	満
	江波町一二三三番地々先＝澹溜池間天満川	満、干
	皿山下沿岸（天満川口）	満
観音	天満町電車停留所附近＝観船橋間天満川	満
	観音本町四三六番地々先＝観音橋館天満川	満
	同町一〇五八番地々先＝観音橋間天満川	満、干
	同町一〇五八番地々先＝南観音町六六八番地々先間天満川	満
	南観音町六六八番地々先八七二番地々先間天満川	満、干
	同町一九九〇番地々先ヨリ南方へ天満川一帯	満
	南観音町沖新開海岸一帯	満
	西観音町二丁目四四六番地々先＝西大橋ヲ越テ同町一〇〇六番地々先間	満
	縣立二中校内貯水池	満、干
天満	北広瀬橋広瀬橋各橋下天満川	満
	天満橋々下天満川	満、干
	天満小学校前＝天満橋間天満川	満

	小河内橋、福島橋各橋下福島川	満
福島	福島橋、西大橋、各橋下福島川	満
	福島町六八九番地々先＝同町六九九番地々先間福島川	満
	己斐橋、旭橋、各橋下山手川	満
三篠	大芝公園東側太田川	満
	三篠橋々下太田川	満
	横川橋、横川新橋各橋下太田川	満、干
	中央橋、小河内橋、福島橋下福島川	満
	金鑄橋、己斐橋各橋下山手川	満
己斐	己斐橋、旭橋各橋下山手川	満
草津	庚午町一五八二番地々先＝御幸川口間海岸	満
	御幸川口	満
	草津浜町一九九六番地々先＝草津南町一七五二番地地先間草津港内東北沿岸	満

別紙第三十號

防毒業務ニ従事スベキ醫師、齒科醫師、獸醫師、薬剤師、看護婦表

○印ハ警防團員

[K=慶應、A=安政、M=明治、T=大正]

分團名	職業別	住 所	氏 名	年 令	摘要	分團名	職業別	住 所	氏 名	年 令	摘要
青崎	医師	仁保町向洋1098	大橋年見	M26. 8. 6	○	尾長	薬剤師	愛宕町 190	原田實	M29. 1. 10	
青崎	医師	仁保町延命日本製鋼所内	大森孝男	M41. 2. 20		荒神	医師	荒神町	原田尚	M37. 3. 20	
青崎	医師	仁保町字伏蛸366	大橋良造	M16. 4. 4		荒神	医師	西蟹屋町	吉田博	M22. 4. 8	
青崎	医師	仁保町字伏蛸135-2	三戸玄三	M17. 10. 27		荒神	医師	荒神町 129	野村司馬之助	M18. 9. 4	○
青崎	歯科医師	仁保町青崎字洋 82	田村三平	M34. 5. 29		荒神	医師	西蟹屋町東洋紡廣島工場	山崎富士登	M22. 1. 1	
青崎	歯科医師	仁保町青崎字洋 135-2	有馬伸生	T5. 10. 13		荒神	薬剤師	大須賀町	三浦篤夫	M32. 4. 10	
青崎	薬剤師	仁保町向洋大森 1060	児玉恒造	M32. 11. 5		荒神	薬剤師	猿猴橋町	坂本重範		
矢賀	歯科医師	矢賀町官有 1	林倉一	M34. 7. 12		荒神	歯科医師	猿猴橋町 35	上田城久	M22. 8. 20	
尾長	医師	愛宕町 69	浅海政一	M25. 10. 5	○	荒神	歯科医師	荒神町 7	児玉ミネ	M33. 3. 3	
尾長	医師	愛宕町	植坪敏之			荒神	歯科医師	荒神町 134	重廣花	M29. 12. 27	
尾長	歯科医師	愛宕町 45	福岡貞爾	T3. 316		荒神	歯科医師	荒神町 189	歌野原静馬	M32. 7. 25	○
尾長	歯科医師	愛宕町 26	澤田克己	M23. 12. 5		荒神	歯科医師	松原町 631	木村ハルミ	M40. 2. 15	
尾長	歯科医師	尾長町三本松276	吉田高之	T5. 2. 25		荒神	獣医師	荒神町 203	河内格	T2. 3. 10	
尾長	薬剤師	尾長町 599	早澤鉄雄	M28. 1. 1	○	荒神	薬剤師	大 須 賀 町 352-1	橋本良輔	M19. 3. 1	
尾長	薬剤師	尾長町 315	角谷悟	M31. 8. 1		荒神	薬剤師	大須賀町 1073-2	橋本健一	T5. 7. 31	
荒神	薬剤師	大須賀町123-3	築田俊康	M43. 1. 3		白島	薬剤師	東白島町	河内一人	M28. 1. 15	
荒神	薬剤師	猿猴橋町 21	折田茂幸	T3. 5. 21	○	白島	医師	白島東中町29	小田亮	M19. 12. 30	
荒神	薬剤師	猿猴橋町 85	中本実	M25. 5. 19	○	白島	医師	白島東中町24	永山研吉郎	M31. 7. 31	○
荒神	薬剤師	荒神町土手161	植木俊夫	M43. 1. 25	○	白島	医師	白島東中町	永富一也	M17. 9. 9	
荒神	薬剤師	猿猴橋町 11	網本芳人	M40. 9. 8	○	白島	医師	白島九軒町官有56	國友國	M14. 7. 18	
牛田	歯科医師	牛田本町区	小林義尚	M14. 5. 2		白島	医師	白島中町 62	天野進作	M16. 6. 1	
牛田	薬剤師	牛田町	田渕善衛	M23. 12. 3		白島	医師	東白島町 164	三好義雪	M27. 2. 3	
牛田	薬剤師	牛田町	森田幹子	M42. 2. 10		白島	歯科医師	白島東中町52-1	高橋一三	M15. 1. 1	
牛田	歯科医師	牛田町 201	宮岡忠男	M41. 9. 2		白島	歯科医師	西白島町 135	中村隆	M36. 1. 25	
牛田	医師	牛田町 1270	太田穰	M10. 12. 2	○	白島	歯科医師	東白島町 227	藤井貞雄	M33. 3. 15	
牛田	医師	牛田町旭区1214	久保田五三美	M26. 12. 15	○	白島	歯科医師	東白島町 44	浅野亀	M29. 6. 1	
牛田	歯科医師	牛田町官有 16	田部フミ	M39. 2. 19	○	白島	歯科医師	東白島町 203	三宅一郎	M9. 9. 13	
牛田	歯科医師	牛田町 400	日盛篤一	M23. 9. 9	○	白島	獣医師	二葉ノ里 2	蜂須賀定根	M33. 9. 13	
牛田	獣医師	牛田町旭区979-1	森長盛人	M28. 12. 20		白島	薬剤師	二葉ノ里 74-3	吉田正遠	M33. 3. 15	
牛田	薬剤師	牛田町六島1266	森田秀樹	M39. 4. 1		白島	薬剤師	東白島町14-2	松本精	M36. 2. 25	○
白島	歯科医師	東白島町	宗像利三	M42. 12. 13		白島	薬剤師	白島東中町17-1	平野権之助	M7. 4. 22	
白島	薬剤師	東白島町	鎌谷信男	M42. 8. 4		幟町	医師	上流川町 67	西下正己	M31. 6. 28	
白島	医師	二葉ノ里吉田療養院	関三穀			幟町	歯科医師	石見屋町 40	正木史郎	M28. 5. 13	
幟町	歯科医師	上流川町 83	植木直忠	M22. 7. 5		幟町	医師	下柳町 35	串田光造	M19. 6. 10	
幟町	歯科医師	鉄砲町 132	佐々木博文	T2. 11. 26		幟町	八木看護婦会長	橋本町 29	村上マスエ	M36. 1. 20	
幟町	歯科医師	銀山町 3	東仁平	M41. 2. 29		幟町	看護婦	橋本町 29	高橋ハマエ	T2. 1. 2	
幟町	薬剤師	幟町	前田栄次郎	M30. 4. 26		幟町	看護婦	橋本町 29	段松定美	M41. 4. 10	
幟町	薬剤師	上柳町	安原泰蔵			幟町	看護婦	橋本町 29	黒河トシエ	T3. 10. 24	
幟町	医師	上柳町	田坂重実			幟町	看護婦	橋本町 29	沖田ハナノ	T2. 11. 20	
幟町	医師	上柳町	吉永福太郎	M13. 3. 1		幟町	看護婦	橋本町 29	甲藤ハル子	T3. 6. 6	

幟町	医師	上流川町	木谷祐寛	M18. 1. 18		幟町	看護婦	橋本町 29	大島節江	T6. 6. 1	
幟町	医師	山口町 16	遠山憲臣	M21. 10. 1	○	幟町	看護婦	橋本町 29	森本トシ子	T7. 9. 29	
幟町	医師	下柳町 31-3	藤堂一郎	M13. 2. 9		幟町	看護婦	橋本町 29	扇田マスコ	T9. 6. 21	
幟町	医師	上柳町 4	豊島義徳	M29. 12. 15		幟町	看護婦	橋本町 29	芳基文子	T5. 6. 30	
幟町	医師	上柳町	豊島中蔵	A6. 3. 28		幟町	看護婦	橋本町 29	早樋政枝	T2. 3. 31	
幟町	医師	幟町 63	神田薫	M31. 6. 1	○	幟町	看護婦	橋本町 29	早川マサヨ	T8. 4. 9	
幟町	医師	斜屋町 30	吉田寛一	M28. 6. 22		幟町	看護婦	橋本町 29	荻原キサ子	T5. 4. 23	
幟町	医師	堀川町 88-1	田中一郎	M20. 9. 20		幟町	看護婦	橋本町 29	竹支ユリコ	T2. 1. 6	
幟町	医師	堀川町 98	伊達昌二	M35. 9. 30		幟町	看護婦	橋本町 29	應儀タケコ	T2. 2. 1	
幟町	医師	上流川町	坪井賢次	M31. 11. 13		幟町	看護婦	橋本町 29	後田サイヨ	T2. 1. 7	
幟町	医師	上流川町 43 (縣病院勤務)	頼武夫	M37. 10. 27		幟町	看護婦	橋本町 29	山本重子	T6. 8. 25	
幟町	看護婦	橋本町 29	沖田ミツキ	T6. 2. 20		幟町	看護婦	橋本町 29	中島ユキエ	T11. 11. 17	
幟町	看護婦	橋本町 29	賀林都	T6. 10. 10		幟町	看護婦	橋本町 29	安藤シズ子	T11. 11. 30	
幟町	看護婦	橋本町 29	菅田千代子	T10. 9. 19		幟町	看護婦	橋本町 29	萩原弘子	T7. 3. 13	
幟町	看護婦	橋本町 29	宇野ツル子	M42. 10. 1		幟町	看護婦	橋本町 29	平山ミエ子	T10. 2. 13	
幟町	看護婦	橋本町 29	長谷川キクエ	T9. 9. 30		幟町	看護婦	橋本町 29	沖屋ホシエ	T14. 2. 27	
幟町	看護婦	橋本町 29	宮川豊み	T11. 4. 24		幟町	看護婦	橋本町 29	光久文子	T9. 10. 7	
幟町	看護婦	橋本町 29	斉藤アヤノ	T9. 5. 17		幟町	看護婦	橋本町 29	花本スベコ	T6. 9. 15	
幟町	看護婦	橋本町 29	松浦スエ子	T9. 9. 19		幟町	看護婦	橋本町 29	山口シズコ	T2. 3. 29	
幟町	看護婦	橋本町 29	松下ノブ	T9. 9. 3		幟町	看護婦	橋本町 29	前田マツヨ	T7. 5. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	山本正江	T9. 2. 20		幟町	看護婦	橋本町 29	守次秀子	T2. 2. 6	
幟町	看護婦	橋本町 29	福島康江	T10. 5. 13		幟町	看護婦	橋本町 29	熊谷京	M34. 3. 18	
幟町	看護婦	橋本町 29	西村シゲ子	T9. 9. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	西ロシズエ	T11. 8. 30	
幟町	看護婦	橋本町 29	竹内ヤス子	T9. 2. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	矢吹王代	T11. 9. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	原早苗	T8. 7. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	佐藤恵み子	T12. 1. 3	
幟町	看護婦	橋本町 29	向井オケイ	M45. 5. 27		幟町	看護婦	橋本町 29	岩崎コシマ	T12. 2. 21	
幟町	看護婦	橋本町 29	原本タミ	M16. 1. 16		幟町	看護婦	橋本町 29	佐川浪子	T11. 11. 18	
幟町	看護婦	橋本町 29	吉村貞子	T13. 1. 1		幟町	看護婦	橋本町 29	杉原みち子	T11. 11. 23	
幟町	看護婦	橋本町 29	植田一子	T10. 10. 21		幟町	看護婦	橋本町 29	川口文恵	T13. 2. 6	
幟町	看護婦	橋本町 29	山田カネ子	T12. 5. 18		幟町	看護婦	橋本町 29	横田ヒデ子	T13. 5. 20	
幟町	看護婦	橋本町 29	佐藤ヒラト	T12. 7. 18		幟町	看護婦	橋本町 29	板谷啓子	M44. 10. 26	
幟町	看護婦	橋本町 29	山崎一子	T13. 2. 5		幟町	看護婦	橋本町 29	甲越裕子	M41. 9. 8	
幟町	看護婦	橋本町 29	萩原チサコ	T11. 4. 1		幟町	看護婦	橋本町 29	間処豊乃	M11. 5. 23	
幟町	看護婦	橋本町 29	田形ミノヨ	T12. 4. 28		幟町	看護婦	橋本町 29	松岡シズ子	M44. 12. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	大本一子	T10. 10. 7		幟町	看護婦	橋本町 29	曾戸文子	T14. 3. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	込山みき子	T13. 4. 25		幟町	看護婦	橋本町 29	當宮タカ子	T14. 5. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	瀬尾恵み子	T11. 8. 10		幟町	看護婦	橋本町 29	清水一子	T13. 1. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	簀垣静子	T11. 11. 11		幟町	看護婦	橋本町 29	松岡ハル子	T14. 3. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	栄田シズエ	T12. 12. 23		幟町	看護婦	橋本町 29	板東ハル子	T13. 5. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	藤岡照子	T12. 11. 5		幟町	看護婦	橋本町 29	村岡ヤス子	M41. 3. 27	
幟町	看護婦	橋本町 29	窪田トミコ	T12. 11. 4		幟町	看護婦	橋本町 29	中村末恵	T8. 1. 10	
幟町	看護婦	橋本町 29	濱本イツコ	T12. 12. 16		幟町	看護婦	橋本町 29	中村ケイ子	M44. 1. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	横山モトコ	T13. 1. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	岡田経子	M30. 1. 1	
幟町	看護婦	橋本町 29	室坂ナツミ	T13. 9. 8		幟町	看護婦	橋本町 29	高山マツノ	M31. 7. 7	
幟町	看護婦	橋本町 29	田中キエ子	T14. 1. 10		幟町	壽看護婦会長	鉄砲町 136 壽看護婦会内	林ヒサ子	M45. 5. 8	
幟町	看護婦	橋本町 29	菅原シズキ	T13. 10. 10		幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	三好清子	T5. 1. 24	
幟町	看護婦	橋本町 29	竹安三重子	13. 11. 1		幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	大野トミエ	T3. 10. 21	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	相島幹子	T10. 1. 4		幟町	看護婦	鉄砲町 48	有光伸子	T12. 5. 16	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山近淳子	T10. 12. 11		竹屋	医師	下流川町 9	井樋義明	M34. 3. 1	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山川マツノ	T13. 3. 24		竹屋	医師	田中町 64	井倉訣	M28. 10. 10	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	江角美記枝	T6. 7. 7		竹屋	医師	平塚町 56	原田篤郎	M27. 3. 9	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山田多津子	T11. 4. 20		竹屋	医師	田中町 58	細川要	M12. 8. 22	○
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山根オトヨ	T11. 4. 10		竹屋	医師	昭和町 565	織田健太	M7. 9. 4	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	福場宮子	T13. 12. 5		竹屋	医師	三川町 40	香川卓子	M25. 12. 15	
幟町	看護婦	鉄砲町 136 壽看護婦会内	山根チエ子	T12. 6. 9		竹屋	医師	三川町 36	横山察道	M19. 1. 12	
幟町	明治看護	鉄砲町 48	谷キミ子	M43. 9. 11		竹屋	医師	田中町 54	竹本巖	M21. 8. 16	

	婦会長	明治看護婦会内									
幟町	看護婦	鉄砲町 48 明治看護婦会内	今岡アイヨ	M41. 9. 25		竹屋	医師	竹屋町 60	田坂三友	M33. 5. 20	○
幟町	看護婦	鉄砲町 48	奥迫綾子	T10. 9. 1		竹屋	医師	三川町 17	多田繁	M23. 4. 10	
幟町	看護婦	鉄砲町 48	保田テツヨ	T10. 2. 18		竹屋	医師	富士見町 202 (縣立病院)	長田一明	M39. 7. 16	
幟町	看護婦	鉄砲町 48	古益カヅ子	T11. 9		竹屋	医師	平塚町 22	山根栄興	M29. 2. 3	
幟町	看護婦	鉄砲町 48	西谷フサノ	T14		竹屋	医師	田中町 49-2	己斐言	M17. 8. 12	
幟町	看護婦	鉄砲町 48	田中ナカ	M11. 8. 19		竹屋	医師	下流川町 42	佐伯望	M27. 2. 8	○
幟町	看護婦	鉄砲町 48	大形シズヨ	T41. 2. 1		竹屋	医師	三川町 6-1	下田唯一	M13. 4. 28	
幟町	看護婦	鉄砲町 48	石名カズヨ	T1. 8. 11		竹屋	医師	竹屋町 71	白井潔	M18. 11. 25	
幟町	看護婦	鉄砲町 48	石原ヒサノ	M38. 5. 5		竹屋	医師	竹屋町 66	百谷三郎	M17. 2. 1	
竹屋	医師	富士見町15-19	森一夫	M15. 4. 27		竹屋	歯科医師	下流川町 9	槇原謙一	M21. 2. 28	
竹屋	医師	竹屋町 94	久保完二	M31. 7. 4		竹屋	薬剤師	三川町	小出松枝	T6. 7. 1	
竹屋	歯科医師	平塚町 39-6	青木一枝	M36. 2. 4		竹屋	薬剤師	鶴見町	深川馨	M42. 8. 11	
竹屋	歯科医師	鶴見町 510-1	森田順次	M31. 3. 30		竹屋	薬剤師	富士見町	井上小一	M36. 2. 30	
竹屋	歯科医師	宝町 423	森河内一長	M38. 4. 29		竹屋	獣医師	平塚町 51-1 友田方	垣内行雄	M31. 7. 1	
竹屋	歯科医師	三川町 17-1	後藤五郎	M30. 5. 14		竹屋	獣医師	南竹屋町 687	河原重信	M43. 2. 19	
竹屋	医師	田中町	遠山霞	M33. 4. 20		竹屋	獣医師	平塚町 256-1	池田春一	M15. 1. 5	
竹屋	医師	平塚町	中村一夫			竹屋	薬剤師	平塚町 51-1 友田八郎方	垣内行雄	M31. 7. 1	
竹屋	歯科医師	竹屋町 57	斉藤滝夫	M28. 5. 7		竹屋	薬剤師	田中町 1-3	友田憲司	M41. 1. 3	
竹屋	歯科医師	三川町 57	田中隆造	M34. 9. 15		竹屋	薬剤師	平塚町 174	岡本節郎	M31. 2. 19	
竹屋	歯科医師	薬研堀甲 7	武田正幸	T2. 2. 11		竹屋	薬剤師	富士見町三丁目 90	渡辺千枝子	T2. 3. 7	
竹屋	歯科医師	西平塚町 27	岸本豊人	M30. 6. 20		竹屋	薬剤師	富士見町三丁目 302	川村竹二郎	M34. 4. 15	
竹屋	歯科医師	富士見町	玉岡和子	M41. 11. 20		竹屋	薬剤師	宝町 415	加藤弘之	M44. 2. 5	
竹屋	歯科医師	田中町 10	木浦羊一	M40. 1. 9		竹屋	薬剤師	下流川町 1	伊達良法	M19. 1. 3	
竹屋	歯科医師	昭和町	神岡貞子	M33. 7. 25		竹屋	薬剤師	富士見町 201	谷口隼人	M23. 3. 25	○
竹屋	歯科医師	宝町 410	山田英雄	M33. 7. 22		竹屋	薬剤師	下流川町 9-4	野田巧	M24. 3. 29	○
竹屋	歯科医師	富士見町 201	中村篤一	M21. 4. 20		竹屋	薬剤師	田中町 61-1	山本淳二	M32. 2. 12	
竹屋	歯科医師	田中町 33	梶谷惣一	M25. 3. 9		竹屋	薬剤師	昭和町 3-1	坂本頼一	M28. 2. 8	
竹屋	中央看護婦会長	田中町 23 中央看護婦会内	朝川チヨノ	M36. 3. 29		竹屋	看護婦	竹屋町 13 至誠看護婦会	植田岩子	T3. 3. 28	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	木村初子	T11. 2. 26		竹屋	看護婦	竹屋町 13 至誠看護婦会	滝本一子	M38. 3. 1	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	川本サヽノ	T2. 5. 9		竹屋	第一看護婦会長	三川町 26 第一看護婦会	百々小昌	M32. 12. 12	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	林敏子	T9. 4. 26		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	梨川シヅノ	M38. 4. 27	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	金田八重香	T8. 10. 1		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	橋羽ミドリ	M39. 8. 28	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	市場トシエ	T11. 2. 1		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	桐山フミ子	M45. 4. 25	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	白根ヨシエ	T9. 2. 14		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	百々チエミ	T5. 2. 20	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	峠田須ナ子	T13. 9. 28		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	福永英代	T11. 7. 2	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	山光ナツエ	T12. 8. 5		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	内山信恵	T13. 2. 27	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	増田アキミ	T13. 3. 15		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	石田孝子	T11. 2. 27	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	日高英江	T12. 8. 15		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	上内員子	T11. 1. 17	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	横潮俊子	T3. 11. 14		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	栗栖竹子	T14. 3. 13	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	夏木千恵子	T11. 7. 20		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	面矢キヨミ	T13. 4. 22	
竹屋	看護婦	田中町 23 中央看護婦会内	藤田トシエ	T10. 8. 10		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	雨田伸枝	T13. 7. 3	
竹屋	至誠看護婦会長	竹屋町 13 至誠看護婦会	角田千枝子	M31. 1. 6		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	橘高壽満子	T12. 10. 30	
竹屋	看護婦	竹屋町 13 至誠看護婦会	平賀イサ子	M35		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	川口冬子	T13. 12. 10	
竹屋	看護婦	竹屋町 13 至誠看護婦会	倉田トシ子	M42. 9. 13		竹屋	看護婦	三川町 26 第一看護婦会	安信オヨシ	T6. 3. 30	
竹屋	看護婦	竹屋町 13	有本春子	T6. 3. 3		竹屋	回生看護	宝町 358-2	坂本キク	M22. 1. 5	

		至誠看護婦会					婦協会長	回生看護婦協会			
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	宮本政子	M44. 6. 1		段原	医師	段原大畑町	澤崎嘉衛		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	坂本ヨシ子	T3. 1. 8		段原	医師	的場町	高雄竜道		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	山本ミチ子	T5. 5. 23		段原	医師	的場町	高雄修		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	安部ミヤノ	T14. 4. 17		段原	医師	的場町	石田正城		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	玉野哲子	T12. 3. 26		段原	医師	京橋町	佐々木篤行		
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	田淵キミエ	T10. 10. 6		段原	薬剤師	比治山本町	堀博之	T3. 10. 14	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	水田ズズ子	T9. 7. 11		段原	薬剤師	段原大畑町	桧崎邦衛	M33. 6. 25	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	藤田コトミ	T8. 1. 16		段原	薬剤師	段原末広町	福原義景	M22. 1. 17	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	桐川栄子	T12. 5. 25		段原	薬剤師	的場町	木村和三一	M20. 5. 10	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	太田タメヨ	T8. 3. 30		段原	薬剤師	金屋町	大野木信一	M27. 5. 18	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	重藤政江	T12. 10. 12		段原	歯科医師	比 治 山 本 町 1151	本永智鶴子	T9. 3. 20	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	初治春子	T13. 5. 23		段原	薬剤師	京橋町	井出弘	M27. 8. 1	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	末永一江	T13. 8. 31		段原	薬剤師	金屋町	内海了二	M13. 5. 1	○
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	岡タヅ子	T13. 12. 25		段原	薬剤師	京橋町	土谷巖郎	M36. 2. 28	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	山平ミチエ	T14. 3. 20		段原	薬剤師	的場町 22-2	石田俊雄	M18. 2. 20	
竹屋	回生看護婦協会長	宝町 358-2 回生看護婦協会	河村ミツエ	T13. 8. 19		段原	薬剤師	京橋町 69	石川省三	M19. 12. 20	
段原	医師	金屋町 22	黒川吉郎	M31. 2. 22		段原	薬剤師	段 原 大 畑 町 108	長谷川正子	M39. 1. 19	
段原	医師	稲荷町	結城英夫			段原	薬剤師	比 治 山 本 町 1082	堤長次郎	M11. 9. 28	
段原	医師	的場町 77	月岡陽一	M20. 1. 3	○	段原	薬剤師	段原大畑町28	林衛	M30. 7. 26	
段原	医師	的場町	中西トシ	M40. 6. 10		段原	薬剤師	段 原 大 畑 町 62-1	原田静夫	M42. 2. 15	
段原	医師	比 治 山 本 町 1154-1	野坂実	M16. 12. 1		段原	薬剤師	京橋町 104	吉崎喜助	M27. 2. 10	
段原	医師	土手町 1	長壽人	M16. 3. 1		段原	薬剤師	京橋町 32	谷本芳樹	M41. 3. 2	○
段原	医師	京橋町 85	佐々木千左子	M40. 9. 10		段原	薬剤師	比治山町 33	坪田旗之助	M20. 9. 23	
段原	医師	稲荷町官 18	平岡忠美	M12. 1. 30		段原	薬剤師	比治山町 70	野田好子	M41. 7. 16	
段原	歯科医師	京橋町 37	橋本米一	M25. 8. 25		段原	薬剤師	比 治 山 本 町 1329	山崎盛太郎	M28. 7. 25	
段原	歯科医師	金屋町 99-1	花本満	T2. 3. 29		段原	薬剤師	段 原 東 浦 町 788-7	山本勉	M44. 10. 13	○
段原	歯科医師	的場町 99-3	野村熊雄	M33. 7. 4		段原	薬剤師	松川町 78	山下とく江	M34. 7. 23	
段原	歯科医師	稲荷町官 12	山田寛一	M24. 10. 15		段原	朝日看護婦会長	土手町 48 朝日看護婦会	有岡ソノヨ	M30. 9. 8	
段原	歯科医師	段 原 東 浦 町 818-4	松本正路	M40. 10. 4		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	有岡ヨシコ	M40. 3. 20	
段原	歯科医師	的場町 87	三戸要	M36. 9. 21		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	行友ヒデコ	M41. 9. 11	
段原	歯科医師	京橋町 20	三宅正雄	M33. 4. 25		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	蔵田ミサノ	M41. 2. 25	
段原	歯科医師	段 原 東 浦 町 821	徳田静二	M43. 2. 26		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	三浦スミコ	T7. 5. 7	
段原	歯科医師	桐木町 881	前野武央	T3. 4. 12		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	池田梅枝	T5. 4. 5	
段原	歯科医師	的場町 34	末永敏二	M43. 9. 16		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	中村重子	T8. 4. 2	
段原	獣医師	台屋町 45-2	吉岡要	M5. 12. 1		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	蜂須賀 トモ エ	T9. 1. 20	
段原	獣医師	稲荷町 25	井上清作	M2. 12. 2		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	北川朝子	T9. 9. 9	
段原	看護婦	土手町 48	望月光子	T10. 2. 1		段原	看護婦	土手町 48	井上勝子	T10. 4. 10	

		朝日看護婦会						朝日看護婦会			
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	山木戸シズ エ	T12. 8. 1		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	森永静江	T9. 1. 25	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	若宮ワカノ	T12. 2. 1		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	北浜カツ子	T2. 5. 4	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	角シデコ	M41. 1. 10		段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	泉芳江	T9. 1. 6	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	望月子色	T11. 3. 20		段原	法正看護 婦会長	松川町 1 法正看護婦会	泉原ヨシノ	M14. 6. 22	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	父田アヤコ	T7. 5. 9		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	佐々木敏子	T2. 1. 1	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	大江ササコ	T9. 9. 10		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	三上波子	T5. 3. 11	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	佐々木登美 子	T11. 2. 20		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	吉村笙子	T5. 7. 2	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	今田フタミ	T9. 9. 30		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	中島貞子	M41. 8. 26	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	土居キミエ	T9. 8. 19		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	槌本イチノ	T7. 8. 10	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	江種キミコ	T10. 9. 8		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	伊藤キヨミ	T8. 10. 16	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	中村安子	T10. 11. 15		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	伊藤ヤス子	T6. 8. 14	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	友田ミツル	T11. 7. 15		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	山内久子	T10. 12. 58	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	山口ヤエ子	T9. 10. 10		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	清尾キスオ	T11. 5. 31	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	石堂イトコ	T11. 8. 13		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	太郎スバ子	T8. 4. 27	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	正地博子	T12. 2. 10		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	清水三菊	T9. 10. 15	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	六郎万マス 子	T10. 3. 4		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	小野ライ	T3. 11. 22	
段原	看護婦	土手町 48 朝日看護婦会	中家澄枝	T7. 9. 29		段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	高橋一重	T7. 9. 30	
段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	澤野ハル子	T9. 7. 20		大河	歯科医師	旭町	能瀬茂	M32. 2. 11	○
段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	佐川ミツ子	T9. 2. 18		大河	獣医師	旭町 1298-5 (縣病勤務)	高田義定	M19. 12. 9	
段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	滝田キクミ	T10. 9. 15		大河	薬剤師	出汐町 706-3	山口久平	M43. 9. 5	○
段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	下木シズエ	T11. 2. 20		大河	薬剤師	旭町 1700-2	古前秀松	M26. 10. 1	
段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	藤田キミエ	T11. 11. 1		大河	薬剤師	旭町 1683-1	正田善吉	M32. 3. 5	
段原	看護婦	松川町 1 法正看護婦会	皆本文枝	T12. 1. 20		皆実	歯科医師	皆実町 945	河野剛吉	M32. 3. 4	
比治山	歯科医師	段原新町 365	井口守	M22. 7. 28		皆実	獣医師	翠町 1490-9	三佐尾元吾	T5. 3. 1	
比治山	医師	東雲町	益田霞	M37. 2. 1	○	皆実	薬剤師	皆実町三丁目	山下秀夫	M34. 4. 28	
比治山	医師	段原山崎町 598	河合純三	M33. 6. 3		皆実	歯科医師	皆実町福原医 院内	大屋清花		
比治山	医師	段原新町 370	高井禎造	M22. 2. 20	○	皆実	医師	皆実町二丁目 429	吉永三代人	M21. 12. 15	
比治山	医師	南段原町 668	三戸敬登	M15. 2. 9	○	皆実	医師	皆実町三丁目 竹田医院内	杉山家壽夫	M25. 10. 15	
比治山	獣医師	段原新町 366	戸川弘	M40. 3. 20		皆実	医師	皆実町三丁目 939	西村潔	M26. 2. 23	○
比治山	獣医師	南段原町 661	山田丹二	M30. 7. 8		皆実	医師	翠町	於保源作	M37. 10. 12	
比治山	薬剤師	仁保町本町 211	樽本正司	M42. 1. 12		皆実	医師	皆実町三丁目 967-13	川村北海	M15. 8. 17	
楠那	—	—	—	—		皆実	医師	皆実町三丁目 949-3	竹田璋一	M21. 3. 12	○
大河	薬剤師	旭町	溝口久治	M43. 4. 9	○	皆実	医師	皆実町三丁目 941-2	中村章	M12. 3. 15	
大河	医師	仁保町字浜	久保兼松	M15. 4. 10	○	皆実	医師	皆実町二丁目 531-2(縣病院 勤務)	上田美穂子	T6. 3. 24	
大河	医師	仁保町大河 201	佐伯益三	M24. 3. 19	○	皆実	医師	皆実町三丁目 975-1	福原躍	M25. 7. 20	

皆実	医師	皆実町三丁目 27	平野一	16. 3. 25M		宇品	医師	宇品町九丁目 川瀬医院内	佐藤秀夫	M43. 3. 1	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目 949	新田実能留	M33. 3. 2	○	宇品	歯科医師	宇品町 328	阿佐軍一	M23. 7. 20	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目 937-3	安原弘吉	M37. 6. 11		宇品	歯科医師	宇品町六丁目 327-20	須磨文武	M36. 8. 23	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目 350-1	佐々木博士	M15. 2. 7		宇品	薬剤師	宇品町 328	岡田経三	M21. 5. 1	
皆実	歯科医師	皆実町三丁目 943-3	三宅泰策	M18. 3. 8		宇品	薬剤師	宇品町 328	岡田新一	M43. 3. 10	○
皆実	獣医師	皆実町三丁目 949-7	北條徳全	M14. 4. 29		宇品	薬剤師	宇品町 679- 25, 26	米沢治郎平	A4. 正月	
皆実	獣医師	翠町 1788	関田茂男	M30. 7. 25		宇品	薬剤師	宇品町 11-8	山本繁	M21. 12. 8	
皆実	薬剤師	翠町 1555-2	山本茂	M41. 11. 20	○	宇品	薬剤師	宇品町 360	木島闇	M19. 12. 12	
皆実	薬剤師	皆実町二丁目	向井栄次郎	M20. 4. 3		宇品	安井看護 婦会長	宇品町 433-7 安井看護婦会	安井キク	M37. 10. 15	
宇品	歯科医師	宇品五丁目 170	大川市六			宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	越智トモ	T11. 6. 1	
宇品	医師	宇品神通五 丁目	川本重雄			宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	今井カヲル	T2. 5. 23	
宇品	医師	宇品町五丁目	福原嘉門			宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	山本美知子	T9. 7. 14	
宇品	医師	宇品町九丁目	田辺薫吉			宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	佐多賀ツヤ 子	T2. 4. 9	
宇品	医師	宇品町 327-1	加藤隆造	M12. 7. 12		宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	角田春子	T8. 3. 28	
宇品	医師	宇品御幸通 327-26	岡崎一郎	M28. 3. 14		宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	青野百合	T9. 8. 13	
宇品	医師	宇品町 13	高山肇	M26. 2. 18	○	宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	阿部キミ子	T10. 5. 11	
宇品	医師	宇品町 1100 人絹社宅	桑原亮造	M28. 5. 1		宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	阿部ツカ子	T11. 8. 3	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	久保君江	T10. 2. 6		千田	薬剤師	千田町	宮本正	M14. 12. 27	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	栗栖ヒサエ	T9. 7. 26		千田	医師	赤十字社支部	伊藤嘉夫		
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	川本小雪	T11. 12. 16		千田	医師	赤十字社支部	倉元巖		
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	白川ヒサノ	T11. 2. 10		千田	医師	赤十字社支部	高原滋夫		
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	越智スマ子	T8. 2. 20		千田	医師	東千田町 435-1	西川弘	M32. 3. 20	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	原田モヽヨ	T10. 3. 20		千田	医師	南竹屋町 252	東儀乾三	M20. 2. 10	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	木原富	T11. 11. 3		千田	医師	千田町三丁目 877-3(縣病院 勤務)	小山祐	M31. 2. 19	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	岩本梢津子	T10. 7. 17		千田	医師	東千田町 882	吉村喜作	M12. 5. 25	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	高原ミユキ	T12. 1. 1		千田	医師	南竹屋町 761	村上敬二	M10. 10. 15	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	阿原丁枝	M43. 11. 8		千田	医師	千田町二丁目 626-4	松林保太郎	M23. 9. 4	
宇品	看護婦	宇品町 433-7 安井看護婦会	江口ヨシ子	T7. 4. 20		千田	医師	千田町一丁目 509-1	福原泰蔵	M19. 11. 12	
宇品	看護婦	宇品町 433-7	西林ヤスエ	M34. 2. 3		千田	医師	東千田町 384	寺田正人	T2. 1. 16	
宇品	看護婦	宇品町 433-7	迫田ハルエ	T9. 4. 12		千田	医師	千田町一丁目 330	京極一久	M33. 4. 1	
似島	医師	似島字家下 603	杉江驥	A3. 11. 7		千田	医師	東千田町 399-1(縣病院 勤務)	金森芳松	M31. 12. 11	
千田	歯科医師	千田町三丁目 908	田中米蔵	M22. 9. 35		千田	歯科医師	十日市町一丁 目 527-1	土井図策	M19. 12. 23	
千田	歯科医師	南千田町 1035	中西東洋男	T2. 7. 17		千田	歯科医師	十日市町二丁 目 630	川北静三	M37. 2. 7	
千田	薬剤師	東千田町	江口太郎	T2. 3. 17		千田	歯科医師	十日市町二丁 目 779	青木重助	M17. 12. 10	
千田	薬剤師	千田町	澤井千万人	M27. 9. 5		千田	獣医師	千田町 708	反田慶一	M22. 5. 11	
千田	獣医師	南千田町	蔵保繁護	M24. 3. 10		千田	看護婦	千田町五丁目	永谷チズエ	T8. 2. 5	

		1072-1						中國看護婦会			
千田	獣医師	南千田町 1064 -20(縣廳勤務)	月藤義一	M17. 3. 10		千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	三田百合枝	T9. 7. 21	
千田	薬剤師	南竹屋町 270	吉田隣太郎	M17. 2. 18		千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	小川セキヨ	T11. 1. 4	
千田	薬剤師	南竹屋町 234	松本良一	M27. 3. 21	○	千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	管コスエ	T12. 6. 5	
千田	薬剤師	千田町二丁目 643	栗林フジ	M42. 10. 16		千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	管ミユキ	T12. 7. 10	
千田	薬剤師	千田町一丁目 571-5	光田満亀雄	M24. 3. 15		千田	看護婦	千田町三丁目 833-1	佐々木キミ エ	T12. 8. 17	
千田	中國看護 婦会長	千田町三丁目 852	幸野鈴子	M38. 8. 17		大手	薬剤師	大手町七丁目	河村要一	M23. 8. 2	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	一本木シゲ 子	T6. 3. 10		大手	薬剤師	大手町八丁目	香口静枝	T6. 7. 1	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	原田シズカ	T6. 12. 10		大手	医師	大手町八丁目	田村矯朗		
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	重永ヤス子	T6. 9. 17		大手	医師	堀田病院	高橋謙		
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	高間栄	T7. 5. 19		大手	医師	國泰寺町 愛國婦人会	平野サク		
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	川角ハツエ	T7. 3. 29		大手	医師	大手町六丁目	中村力	M31. 1. 1	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	上田愛子	T6. 7. 7		大手	医師	國泰寺町	窪田孝	M20. 10. 3	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	村上ヒフミ	T8. 3. 25		大手	医師	雑魚場町 329 (縣病院内)	石橋脩三	M24. 6. 20	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	井川チエ子	T7. 2. 10		大手	医師	國泰寺町 82	林哲雄	M35. 10. 19	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	高松フズ子	T6. 11. 20		大手	医師	大手町九丁目 121	西徹	M3. 10. 3	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	今永テル子	T5. 10. 20		大手	医師	大手町八丁目 202	堀田筈三	M2. 5. 13	
千田	看護婦	千田町五丁目 中國看護婦会	秋山ハルエ	T8. 3. 20		大手	医師	雑魚場町 319 (千田町赤十 字社内)	渡辺宏大	M40. 8. 26	
大手	医師	大手町八丁目 6-1	我部政法	M38. 4. 20		大手	歯科医師	雑魚場町	横山進	M39. 2. 25	
大手	医師	大手町七丁目 89-1(縣病院勤 務)	上田太郎	M39. 3. 28		大手	獣医師	大手町八丁目 7	柳沼省吾	M31. 1. 7	
大手	医師	大手町八丁目 110	黒川巖	M16. 7. 16		大手	獣医師	大手町八丁目 77-1(縣廳勤 務)	山崎耕治	M27. 4. 8	
大手	医師	大手町八丁目 143	正岡一薫	M25. 5. 16		大手	薬剤師	大手町七丁目 41-2	大草善儀	M30. 10. 4	○
大手	医師	大手町七丁目 87(縣病院勤 務)	松本操一	M27. 4. 19		大手	薬剤師	雑魚場町 371	名主守三	M19. 1. 22	○
大手	医師	雑魚場町 319	兒玉省吾	M37. 12. 3		大手	薬剤師	國泰寺町 31-1	内山順一	M30. 1. 15	
大手	医師	雑魚場町 123-2	相澤四郎	M7. 2. 17		大手	薬剤師	大手町八丁目 62	松岡裕	M29. 10. 9	
大手	医師	大手町八丁目 110	新井保重	M41. 12. 18		大手	薬剤師	大手町八丁目 125	三原彦三郎	M15. 1. 15	
大手	医師	大手町七丁目 37-1(縣病院勤 務)	比企野千代 四	M33. 9. 8		大手	太田看護 婦会長	大手町七丁目 65 太田看護婦会	太田秋子	M16. 9. 12	
大手	医師	大手町七丁目 89-5(赤十字社 勤務)	角井臻	M34. 3. 25		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	竹中ミサ子	M42. 2. 20	
大手	歯科医師	大手町八丁目 30	渡辺秀夫	M23. 4. 5		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	高畑ヨシ子	T2. 12. 4	
大手	歯科医師	大手町七丁目 4	若狭一雄	M36. 2. 3		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	藤本満代	M31. 4. 11	
大手	歯科医師	國泰寺町	藤田一士	M25. 10. 29		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	貴船清子	T8. 11. 26	
大手	歯科医師	國泰寺町 87	福地弘	M26. 1. 3		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	小西艶子	T8. 5. 2	
大手	歯科医師	國泰寺町 110	中村和子	M34. 1. 28		大手	看護婦	大手町七丁目 65	山内早子	T11. 3. 3	

								太田看護婦会			
大手	歯科医師	國泰寺町 85	木本利男	M37. 12. 18		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	本田由基子	T10. 3. 25	
大手	歯科医師	大手町九丁目 228	小山次郎	M33. 5. 7		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	光田ヨリエ	T10. 10. 27	
大手	歯科医師	大手町六丁目 14	志波竜子	M37. 6. 20		大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	矢野シヅヨ	M42. 3. 10	
大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	松江ミチエ	T8. 9. 5		袋町	薬剤師	立町	菅田輝彦	T3. 2. 20	
大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	大島アサノ	T11. 8. 7		袋町	薬剤師	猿楽町	横山秀吉	元治 1. 10. 2	
大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	山岡ヲマツ	T11. 8. 7		袋町	医師	中町	廣藤文造		
大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	南マシコ	T9. 5. 23		袋町	医師	中町	東三平		
大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	妹尾恒香	T7. 11. 14		袋町	医師	紙屋町	田中政治		
大手	看護婦	大手町七丁目 65 太田看護婦会	石田ツル	T12. 1. 2		袋町	医師	細工町	坂井久吉		
大手	林看護婦会長	大手町八丁目 54 林看護婦会	林ヒデ	M28. 3. 14		袋町	医師	堺町三丁目	森田俊市		
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	吉岡春子	T8. 7. 15		袋町	医師	中町	佐武伸生	M17. 2. 25	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	廣実満江	T13. 6. 10		袋町	医師	大手町二丁目 11	野津謙吉	M1. 2. 18	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	亀井ユキエ	T12. 1. 26		袋町	医師	袋町 29	恭時彦	M16. 7. 8	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	牧原スエ子	T12. 1. 9		袋町	医師	袋町 1	力石勇夫	M39. 1. 16	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	三上英子	T11. 8. 3		袋町	医師	尾道町 29	渡辺英吉造	M15. 8. 15	
大手	看護婦	大手町八丁目 54 林看護婦会	田村百合子	T12. 10. 19		袋町	医師	猿楽町 83-1	若井均	M31. 4. 5	
袋町	医師	尾道町	佐藤皋一	M31. 6. 18		袋町	医師	小町 30-1	香川三之助	M24. 7. 14	
袋町	歯科医師	中町 1-1	亀田馨	M21. 4. 6		袋町	医師	猿楽町 27	田丸要槌	M14. 6. 4	
袋町	歯科医師	東魚屋町	水野金二郎	M44. 2. 12		袋町	医師	大手町二丁目 25	田中百太郎	M31. 1. 15	
袋町	薬剤師	新川場町	河村忠雄	T6. 7. 19		袋町	医師	小町 61-2	常久哲	M27. 5. 9	
袋町	薬剤師	播磨屋町	末田惣一郎	M12. 3. 18		袋町	医師	立町 49	難波成喜	K2. 11. 23	
袋町	医師	大手町五丁目 63	中道吉良	M12. 7. 3		袋町	歯科医師	細工町 31	岡田正行	M42. 12. 15	
袋町	医師	立町 49	難波丈夫	M35. 4. 17	○	袋町	歯科医師	塩屋町 57	渡辺友一	M29. 5. 12	
袋町	医師	小町 17-2	生塩元	M27. 2. 5		袋町	歯科医師	鉄砲町	河村雅夫	M18. 11. 11	
袋町	医師	細工町 12	黒川節司	M23. 5. 15		袋町	歯科医師	下流川町 5	香川凱二	M43. 11. 1	
袋町	医師	西魚屋町 47	日下部旦三	M29. 7. 23		袋町	歯科医師	鉄砲屋町 62	河村行夫	T2. 6. 25	
袋町	医師	立町 26, 27	松江竜一	M42. 12. 25		袋町	歯科医師	紙屋町 57-2	中島栄三郎	M23. 11. 20	
袋町	医師	小町 55	秋山賢吉	M26. 1. 10	○	袋町	歯科医師	立町 31	仲間久人	M34. 4. 19	
袋町	医師	下中町 23	荒木次郎	M23. 7. 16		袋町	歯科医師	中町 35	深井繁雄	M32. 2. 25	
袋町	医師	西魚屋町 35 (舟入病院勤務)	天野勲	M25. 10. 11		袋町	歯科医師	新川場町 34	讃岐幸一	M21. 6. 19	
袋町	医師	細工町 19	佐波古直明	M16. 7. 16		袋町	歯科医師	猿楽町 101	森田正易	M32. 7. 28	
袋町	医師	塩屋町 28	阪田良一	M33. 3. 16		袋町	歯科医師	西魚屋町 49-1	森勝	M34. 10. 1	
袋町	医師	袋町 39	清水憲介	M23. 7. 13		袋町	獣医師	大手町五丁目 23, 24	坂本小助	M29. 10. 20	
袋町	医師	細工町 29-2	島薫	M30. 7. 2	○	袋町	薬剤師	大手町五丁目 26	池田利男	M34. 11. 18	○
袋町	医師	細工町 19	濱茂基	M15. 3. 16		袋町	薬剤師	中町 14	長谷川近正	M37. 3. 1	
袋町	医師	尾道町 47	杉本茂憲	M36. 11. 18		袋町	薬剤師	小町 24	花岡チヨ	T2. 3. 12	
袋町	歯科医師	大手町四丁目	石光美智恵	M40. 6. 10		袋町	薬剤師	新川場町 20	錦織正恵	M43. 5. 31	
袋町	歯科医師	袋町 57-1	外浪良助	M24. 11. 10		袋町	薬剤師	鉄砲屋町 10-1	小田勝	T4. 3. 17	
袋町	歯科医師	尾道町 53	岡本直一	M26. 10. 30		袋町	薬剤師	研屋町 36	横田善四郎	M19. 12. 22	
袋町	薬剤師	研屋町	横田一郎	T3. 11. 20		袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	野田雪枝	T5. 9. 17	
袋町	薬剤師	研屋町 14	永田清次郎	M36. 7. 9	○	袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	渡辺サミエ	T11. 7. 8	
袋町	薬剤師	尾道町 98	中津盛夫	T2. 8. 28		袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	小笠原モリノ	T10. 6. 7	
袋町	薬剤師	播磨屋町 9	野村嘉夫	文久 2. 8. 29		袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	西三四	T10. 8. 16	

袋町	薬剤師	大手町一丁目 3-1	山本宥太郎	M12. 4. 22		袋町	看護婦	塩屋町 39	大下亀代	T11. 2. 24	
袋町	薬剤師	大手町一丁目 3-1	山本達子	T2. 9. 28		袋町	看護婦	塩屋町 39	中田アヤコ	T13. 2. 15	
袋町	薬剤師	大手町一丁目 3-1	山本安次郎	M44. 7. 22		袋町	看護婦	塩屋町 39	前田秀子	T13. 5. 20	
袋町	薬剤師	播磨屋町 25, 26	赤松又四郎	K2. 10. 11		袋町	看護婦	塩屋町 39	三明スミエ	T14. 2. 13	
袋町	薬剤師	播磨屋町 25, 26	赤松幹一	M22. 8. 26		袋町	看護婦	塩屋町 39	桑原キミコ	T13. 1. 16	
袋町	薬剤師	紙屋町 8	佐伯アヤ子	T2. 5. 31		袋町	鯉城看護 婦会長	尾道町 44 鯉城看護婦会	西原コムラ	M36. 1. 31	
袋町	薬剤師	大手町五丁目 50	三原清兵衛	M35. 5. 5		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	中村イツヨ	T13. 9. 15	
袋町	薬剤師	紙屋町 28	水戸松太郎	T2. 4. 26		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	村本竹子	T11. 9. 10	
袋町	薬剤師	新川場町 18-1	林秀人	M39. 8. 25		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	山崎年子	T13. 2. 20	
袋町	厚生看護 婦会長	塩屋町 厚生看護婦会	藤原キクミ	M38. 5. 20		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	細谷コノブ	T11. 7. 23	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	猪キミヨ	T4. 5. 25		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	吉岡露子	T11. 10. 13	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	谷川ヤスコ	T6. 2. 25		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	新矢一枝	T13. 5. 11	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	盛川鶴枝	T5. 12. 16		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	藤原久枝	T9. 4. 28	
袋町	看護婦	塩屋町 厚生看護婦会	大久保冬子	T9. 2. 15		袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	三東澄江	T9. 11. 20	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	岡田鶴子	T11. 6. 6		中島	医師	天神町 111	築柴秀雄	M8. 2. 5	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	吉崎ヤス子	T9. 3. 11		中島	医師	中島新町 1	坪井義晴	M30. 11. 13	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	高木トミ子	T12. 11. 20		中島	医師	天神町 96	津田享平	M29. 11. 1	
袋町	看護婦	尾道町 44 鯉城看護婦会	山田ハヤノ	T14. 3. 20		中島	医師	天神町 38	植田秀嶺	M34. 10. 7	
中島	歯科医師	吉島羽衣町官 有 10	對馬恵	T4. 8. 14		中島	医師	天神町 40	藏元積	M32. 5. 28	
中島	医師	広島縣病院内	近藤良吉			中島	医師	中島本町 23-1	松井林太郎	M17. 6. 20	
中島	医師	天神町	酒井丈一			中島	医師	中島本町 91	小泉稲子	M27. 2. 4	
中島	医師	材木町浄円寺 内	林彦三郎			中島	医師	水主町 326	小先誠一	M26. 7. 28	
中島	医師	広島縣病院内	林諭喜夫			中島	医師	天神町 36	東恒一	M13. 5. 1	
中島	医師	広島縣病院内	世木田務			中島	医師	中島本町 21	阿戸源佐衛 門	M25. 10. 20	
中島	医師	広島縣病院内	松原恭			中島	医師	天神町 117	酒井文一	M18. 8. 1	
中島	医師	広島縣病院内	箕越中			中島	医師	木挽町 26	光本天造	M16. 11. 25	
中島	医師	元柳町 28	市川佐興吉	M19. 4. 5		中島	医師	水主町 38-1	三宅良一	M8. 10. 27	
中島	医師	中島本町 54-2	原田多良穂	M35. 6. 19		中島	医師	天神町 52	進藤哲郎	M29. 2. 24	
中島	医師	中島本町 54-2	原田弘道	M7. 6. 12		中島	歯科医師	水主町 375	矢谷二宗	M33. 10. 31	
中島	医師	水主町 131-1	大山宗一	M13. 12. 3		中島	歯科医師	水主町 27	吉田頼一	M24. 11. 30	
中島	医師	中島本町 53-2	越智シゲル	M26. 2. 10		中島	歯科医師	木材町 91	竹内清	M34. 1. 24	
中島	医師	水主町 33	谷野敬之	M20. 11. 11		中島	歯科医師	天神町 97	野坂昇	M14. 1. 20	
中島	歯科医師	上水主町 6	中山哲三郎	M38. 5. 5		中島	薬剤師	木挽町 22	正岡繁三	M40. 3. 8	
中島	歯科医師	中島本町 18	熊谷鉄之助	M6. 9. 4		中島	薬剤師	吉島羽衣町 305-1	正岡武士	M38. 9. 5	
中島	歯科医師	元柳町 24	山瀬優	M21. 1. 10		中島	薬剤師	中島本町 142-1	後藤三郎	M34. 10. 22	
中島	歯科医師	中島本町 33-2	山田守三	M17. 4. 1		中島	薬剤師	水主町 392	畔地俊造	M40. 2. 17	
中島	歯科医師	中島本町 4	合屋眞澄	M34. 4. 15		中島	薬剤師	中島本町 23-1	木原彌之助	M43. 2. 25	
中島	歯科医師	水主町 519	坂木秋夫	M41. 4. 1		中島	薬剤師	中島本町 27-1	三宅車作	M19. 2. 9	
中島	歯科医師	水主町 241	御堂美来男	M22. 8. 20		中島	薬剤師	中島本町 11	森本信一	M16. 2. 15	
中島	歯科医師	元柳町 33	光谷峰代	M29. 2. 21		中島	八千代看 護婦会長	天神町 78 八千代看護婦会内	兒玉ツル	M21. 11. 20	
中島	獣医師	水主町 14-1 原ヨシ方	大仲恭二	T9. 1. 12		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	藤田二三四	M41. 5	
中島	獣医師	中島本町 375	八重垣徳光	M43. 1. 15		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	迫本ヨシエ	M6. 1	
中島	獣医師	中島新町 43-4	野村武男	T3. 5. 18		中島	看護婦	天神町 78	馬場伊和	M5. 7	

								八千代看護婦会内			
中島	薬剤師	天神町 70	仁井谷松輔	M39. 11. 3	○	中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	津村登美恵	M8. 7	
中島	薬剤師	中島本町 16	岡本礼二	M15. 5. 10		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	鷲尾スベエ	M9. 1	
中島	薬剤師	中島本町 16	岡本浩一	M44. 11. 14		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	藤原春子	M5. 2	
中島	薬剤師	水主町 236	片島秀雄	M20. 2. 26		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	仁ノ木郁子	M9. 5	
中島	薬剤師	水主町官 103	吉川正子	T2. 2. 3		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	藤原フヂエ	M14. 9	
中島	薬剤師	水主町 6-3	中山美彌子	M43. 2. 15		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	横山ヒサヨ	M4. 7	
中島	薬剤師	水主町 533-2	永谷喜美代	T4. 4. 16		中島	看護婦	天神町 78 八千代看護婦会内	井川ミツエ	M10. 1	
中島	看護婦	天神町 78	山本幸江	T11. 6		本川	医師	塚本町	長谷信夫		
中島	看護婦	天神町 78	開前トミエ	M45. 7		本川	歯科医師	左官町 32	尾山顕一郎	M38. 3. 13	
中島	看護婦	天神町 78	安長幸枝	T6. 10		本川	薬剤師	堺町一丁目	國居道憲	M41. 8. 21	
中島	看護婦	天神町 78	土井シソ	M41. 4		本川	医師	猫屋町 66	今井蔵六	M28. 1. 1	
中島	看護婦	天神町 78	村井栞	M45. 3		本川	医師	猫屋町 15	今井卓治	M29. 11. 9	
中島	看護婦	天神町 78	早志ミドリ	M43. 9		本川	医師	鍛冶屋町 38-1	浜島秀治	M10. 11. 28	
中島	看護婦	天神町 78	林ユキ	M37. 2		本川	医師	堺町一丁目 11	山崎要	M34. 9. 5	
広瀬	医師	西寺町	植木良雄	M43. 2. 5		本川	医師	十日市町 17-1	松本易二	M20. 11. 2	
広瀬	歯科医師	廣瀬北町 43	小川好夫	M36. 9. 17		本川	医師	猫屋町 13	正岡旭	M35. 4. 25	
広瀬	医師	西引御堂町 8	高田敦二	M16. 12. 20	○	本川	医師	十日市町 45	松原千鶴	T6. 5. 27	
広瀬	医師	西引御堂町 32 (縣病院勤務)	小西菱子	M21. 2. 28		本川	医師	猫屋町 61	小東四郎	M21. 1. 4	
広瀬	歯科医師	廣瀬北町 114	高品保	M35. 7. 22	○	本川	医師	猫屋町 85	坂井次郎	M18. 10. 20	
広瀬	歯科医師	廣瀬元町 145-1	森文雄	T4. 3. 28		本川	医師	十日市町 11	斉藤禎之吉	K3. 10. 18	
広瀬	薬剤師	廣瀬北町 109	坪井徳一	M26. 8. 25	○	本川	医師	鍛冶屋町 71	斉木賢一	M25. 7. 20	
広瀬	薬剤師	西引御堂町 3	中村定助	M29. 7. 20	○	本川	医師	鷹匠町 99-1	三宅坦	M23. 1. 12	
広瀬	薬剤師	廣瀬元町 1456	住田道治	M42. 10. 3	○	本川	医師	鷹匠町 99-1	三宅綾子	M32. 3. 11	
広瀬	薬剤師	廣瀬北町 209-3	久賀仙吉	M4. 11. 17		本川	医師	十日市町 42	進藤憲	M22. 2. 28	
本川	医師	鷹匠町 橋本土俣方	土屋五三六			本川	医師	塚本町 52	森田親一郎	M17. 11. 11	○
本川	医師	空鞘町 78	森杉延吉	M19. 11. 1		本川	看護婦	猫屋町 1 川上看護婦會	大塚ヨシノ	T9. 11. 3	
本川	医師	塚本町 66	村越弘	M37. 8. 22		本川	看護婦	猫屋町 1 川上看護婦會	原久子	T9. 11. 3	
本川	歯科医師	左官町 32	尾山一彦	M43. 1. 10		神崎	歯科医師	河原町	古澤秀夫		
本川	歯科医師	猫屋町 55	沖田健吉	M10. 12. 5		神崎	医師	西新町	鉾村弘	M41. 4. 15	
本川	歯科医師	鷹匠町 618	中川高美	M33. 8. 5		神崎	獣医師	舟入本松 660 赤木内(縣病院勤務)	笹木幸	T4. 5. 12	
本川	歯科医師	鷹匠町 124-2	廣澤久男	M28. 9. 25	○	神崎	薬剤師	西新町	奥窪昌治	T6. 3. 11	
本川	歯科医師	十日市町 1	島津次郎	M33. 4. 2		神崎	薬剤師	河原町	盛生亮一		
本川	歯科医師	十日市町 1	中谷真	M38. 3. 5		神崎	医師	河原町	古川雄吉		
本川	薬剤師	猫屋町 47	石井安太郎	M23. 3. 23		神崎	医師	河原町	江下良彦		
本川	薬剤師	十日市町 4	池田武夫	M3. 10. 10		神崎	医師	西新町	田原紀之		
本川	薬剤師	左官町 21	細末嘉七	M32. 11. 21		神崎	医師	舟入仲町 96	板岡一雄	M28. 11. 13	
本川	薬剤師	鷹匠町 98	岡田斌	M39. 11. 14		神崎	医師	河原町 213-30	畠山恒三	M22. 10. 30	
本川	薬剤師	榎町二丁目 20	向井薫	M25. 1. 8		神崎	医師	舟入本町	香川景久	M29. 10. 6	
本川	薬剤師	塚本町 38	熊谷哲	M31. 9. 11		神崎	医師	西新町 126-1	樽屋五郎	M24. 10. 28	
本川	川上看護 婦会長	猫屋町 1 川上看護婦會	新田セツ	M20. 12. 15		神崎	医師	小網町 103 (縣病院勤務)	田中次郎	M39. 2. 26	
本川	看護婦	猫屋町 1 川上看護婦會	江口マス子	M42. 11. 20		神崎	医師	西新町 3-1	土谷剛治	M33. 9. 7	
本川	看護婦	猫屋町 1 川上看護婦會	服部アキ代	M36. 9. 26		神崎	医師	西新町	成川光吉	M18. 7. 25	
本川	看護婦	猫屋町 1 川上看護婦會	村本イサ子	T4. 2. 17		神崎	医師	西新町	長沼幸之助	M29. 3. 31	
神崎	医師	西新町 132	中村一枝	M34. 11. 28		神崎	薬剤師	西新町 32	藤谷國平	M15. 5. 7	
神崎	医師	河原町 174-2	松尾信吉	M30. 9. 11		神崎	薬剤師	小網町 103	寺島菊次郎	M32. 4. 17	
神崎	医師	西新町 113	笹岡操	M12. 5. 4		神崎	神田看護 婦会長	舟入仲町 111 神田看護婦會	林秀枝子	M35. 11. 25	
神崎	歯科医師	西新町 4-1	西川二郎	M43. 8. 1		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	神島貞代	T3. 5. 12	
神崎	歯科医師	西新町 4-1	西川幸子	M44. 9. 1		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	鈴木ウメ	T5. 7. 14	

神崎	歯科医師	西新町 123	曾田嘉將	M38. 1. 16		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	八重崎久子	T7. 9. 15	
神崎	歯科医師	小網町 103	熊谷力	M33. 5. 1		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	平田ミツエ	T12. 2. 9	
神崎	歯科医師	小網町 熊谷力方	岡野専一	M41. 11. 15		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	鷺尾コスエ	T11. 7. 20	
神崎	歯科医師	西新町 5-1	浅野廣見	M40. 2. 2		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	山田トモエ	T12. 9. 20	
神崎	歯科医師	河原町	青山巖	M36. 7. 18		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	亀井イワ子	T13. 3. 21	
神崎	歯科医師	小網町 107	三島貞次郎	M34. 11. 11		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	井上弥生	T13. 3. 13	
神崎	歯科医師	舟入仲町 158-2	重本虎一	M23. 1. 1		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	前野清代	T12. 9. 10	
神崎	歯科医師	河原町	清水義夫	M42. 5. 10		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	藤本登喜枝	T13. 1. 10	
神崎	薬剤師	河原町 225-1	折重將一	M29. 1. 2	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	幸野富士枝	T13. 1. 15	
神崎	獣医師	舟入仲町 183- 2(縣病院勤務)	多幾山右近	M13. 2. 3		神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	中本シゲ子	T12. 7. 5	
神崎	薬剤師	舟入仲町 128-11	總平孝一	M22. 5. 23	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	有田勝枝	T13. 3. 18	
神崎	薬剤師	舟入本町 214	紙田末男	M29. 11. 7	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	清水フジ子	T5. 4. 13	
神崎	薬剤師	河原町 42	松島正	M31. 7. 4	○	神崎	看護婦	舟入仲町 111 神田看護婦會	穴水アイ子	T12. 1. 12	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	須原千代子	T10. 11. 20		舟入	薬剤師	舟入川口町 570	岩田吉忠	M3. 6. 7	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	永安保子	T13. 3. 31		舟入	薬剤師	舟入川口町 485-7	上杉一二	M27. 7. 22	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	古河政子	T14. 8. 10		舟入	薬剤師	舟入川口町 570	栗山周作	M18. 9. 1	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	月明サツキ	T14. 5. 21		舟入	薬剤師	舟入川口町 570	池川晋四郎	M5. 8. 15	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	森本トメヨ	T14. 5. 15		江波	医師	江波町 1238-52	芳野セク	M21. 5. 21	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	藤井ヤエ	T15. 1. 1		江波	薬剤師	江波町 618-3	岩空世紀子	T7. 3. 1	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	竹下ヒロエ	T13. 6. 5		江波	薬剤師	江波町 1283	香口静枝	T6. 7. 1	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	木村トシ	M35. 6. 15		観音	獣医師	南観音町 1291 (縣廳勤務)	石川隆則	M45. 3. 18	
神崎	看護婦	舟入仲町 111	口村時子			観音	医師	南観音町 1291 西診療所	平野智慧徳	M17. 10. 2	
舟入	医師	舟入幸町(市立 新生試験所)	後藤文彦			観音	医師	南観音町 586 (舟入診療所内)	小篠浩	M18. 9. 1	
舟入	医師	舟入幸町 (舟入病院)	田中秀徳			観音	医師	南観音町 554-1	矢田耕造	M12. 3. 19	
舟入	薬剤師	舟入幸町	池田フミ子			観音	医師	東観音町二丁目 374-1	藤中正	M23. 11. 15	
舟入	医師	舟入幸町	眞鍋英一			観音	歯科医師	東観音町二丁目 371	山田不二雄	M29. 6. 13	○
舟入	医師	舟入幸町 (舟入病院)	福井孝道			観音	歯科医師	東観音町官有 59	木谷三郎	M43. 2. 25	
舟入	医師	舟入幸町 (縣病院勤務)	田中静香	T4. 11. 24		観音	歯科医師	西観音町一丁目 2239	荒木将徳	M37. 10. 11	
舟入	医師	舟入幸町 63	福本次郎三	M33. 4. 12		観音	歯科医師	南観音町 587	中邑房江	M40. 9. 10	
舟入	歯科医師	舟入川口町 124-1	大原乙彦	M41. 7. 5		観音	獣医師	南観音町 1091 (縣廳勤務)	多斐山城馨	M23. 12. 6	
舟入	歯科医師	舟入幸町 257	久留井一彦	M43. 5. 6		観音	獣医師	南観音町 1202 (縣廳勤務)	福原芳彦	T9. 9. 12	
観音	獣医師	南観音町 897 (縣廳勤務)	藤井政敏	M28. 12. 4		天満	医師	天満町 26-2	梶川重蔵	M41. 11. 1	
観音	獣医師	南観音町 583 (縣廳勤務)	吉田五十五	M19. 12. 1		天満	医師	天満町 57-1	玉垣作一	M18. 3. 4	
観音	獣医師	南観音町二丁目 711	藤本清	M33. 10. 10		天満	医師	横堀町 296-2 (縣病院勤務)	木幡華子	T8. 1. 7	
観音	獣医師	南観音 671 観 音アパート (縣廳勤務)	関毅一	M44. 7. 14		天満	医師	堺町四丁目 14	白井貞之	M36. 2. 7	
観音	獣医師	東観音町二丁	世良盛人	M23. 11. 29		天満	医師	西天満町	兒玉克巳	M27. 8. 9	○

		目 378-3									
観音	獣医師	東観音町二丁目 146(縣廳勤務)	西原良一	M24. 2. 2		天満	歯科医師	天満町 38-1	寄田数人	M24. 10. 12	
観音	獣医師	観音本町 1050(縣廳勤務)	入江菅一	M27. 2. 13		天満	歯科医師	榎町 1	古川潔水	M30. 9. 15	
観音	薬剤師	西観音町一丁目 2200	加藤安子	M41. 6. 6		天満	歯科医師	榎町 46-1	新谷衛	M31. 9. 6	
観音	薬剤師	西観音町二丁目 987	高橋好美	T4. 7. 22	○	天満	獣医師	上天満町 564	野村修一	M25. 9. 26	○
観音	薬剤師	西観音町二丁目 527-2	間宮静雄	M25. 8. 28		天満	薬剤師	堺町三丁目 39	新述修一	M23. 2. 7	○
観音	薬剤師	東観音町二丁目 148-1	中村菊枝	M44. 11. 25		天満	薬剤師	西 天 満 町 512-9	鬼武國男	M37. 9. 6	○
観音	薬剤師	西観音町一丁目 499-1	古内治夫	T4. 7. 6		天満	薬剤師	天満町 27-1	渡辺佐兵衛	M38. 5. 1	
観音	薬剤師	西観音町二丁目 373-8	榎本鐘一	M42. 4. 10		天満	薬剤師	堺町四丁目	高橋和	T4. 4. 23	
天満	医師	堺町四丁目 5	笠防博之	M24. 12. 1	○	天満	薬剤師	堺町四丁目	高橋剛	M20. 3. 2	○
天満	歯科医師	天満町 87	吉川貞人	M23. 3. 15		天満	薬剤師	堺町四丁目 7	松井武雄	M23. 2. 15	
天満	歯科医師	西天満町 410	前田哲雄	M40. 7. 3		天満	薬剤師	堺町四丁目 48	後藤吟蔵	M29. 7. 11	○
天満	歯科医師	天満町	藤井正毅	T1. 10. 4		天満	関西看護婦会長	上天満町 553 関西看護婦会	奥田ヨシ	M21. 12. 19	
天満	医師	堺町四丁目	伊藤醇造	M23. 9. 15		天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	來山久代	M32. 6. 16	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	佐々木婦美子	T8. 10. 10		天満	看護婦	上天満町 553	中村ミサエ	T10. 6. 16	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	飯山キクコ	M44. 4. 27		天満	看護婦	上天満町 553	佐々木登美子	T10. 8. 14	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	松中マサル	M42. 9. 20		天満	看護婦	上天満町 553	重年トシエ	T11. 1. 20	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	折出光子	T7. 6. 2		天満	看護婦	上天満町 553	平川八重美	T11. 4. 20	
天満	看護婦	上天満町 553 関西看護婦会	田村富士	T4. 12. 24		天満	看護婦	上天満町 553	高橋アサ子	T10. 10. 25	
天満	看護婦	上天満町 553	宮田アヤ子	T11. 4. 13		天満	看護婦	上天満町 553	立花マサト	T2. 9. 19	
天満	看護婦	上天満町 553	土井タカヨ	T9. 6. 25		天満	看護婦	上天満町 553	海部フミ子	T6. 11. 17	
天満	看護婦	上天満町 553	大畠鶴子	M41. 7. 15		天満	看護婦	上天満町 553	宮崎正子	T12. 1. 15	
天満	看護婦	上天満町 553	杉本ミス子	T8. 9. 10		天満	看護婦	上天満町 553	堀内貞枝	T10. 5. 26	
天満	看護婦	上天満町 553	木坂千代子	M35. 1. 24		天満	看護婦	上天満町 553	長見恒子	T12. 5. 2	
天満	看護婦	上天満町 553	松本ユキエ	T11. 9. 12		天満	看護婦	上天満町 553	漆谷多美子	T10. 11. 7	
天満	看護婦	上天満町 553	松永イツ	M32. 9. 27		天満	看護婦	上天満町 553	山岡松子	T13. 2. 7	
天満	看護婦	上天満町 553	富士川小重	M39. 1. 5		天満	看護婦	上天満町 553	石村千都枝	T7. 7. 25	
天満	看護婦	上天満町 553	長本シズヨ	T12. 4. 29		福島	—	—	—	—	
天満	看護婦	上天満町 553	福本シン子	T11. 5. 25		三篠	医師	中廣町	桑原寛		
天満	看護婦	上天満町 553	河野尚子	T12. 6. 12		三篠	歯科医師	楠木町二丁目 456	沖高澄子	T8. 1. 15	
天満	看護婦	上天満町 553	森本スミエ	T9. 1. 5		三篠	歯科医師	南三篠町	墨田壽子	M42. 10. 12	
天満	看護婦	上天満町 553	藤田ハルエ	T4. 2. 12		三篠	歯科医師	横川町三丁目 77	本地和市	T7. 12. 6	
三篠	獣医師	大芝町 2423(縣廳勤務)	川村利房	M42. 5. 23		三篠	歯科医師	三篠本町一丁目 580	片島キク	M34. 1. 1	
三篠	薬剤師	中廣町	太田得一	T3. 7. 16		三篠	歯科医師	横川町二丁目 638-6	竹腰要吾	M39. 5. 12	
三篠	医師	横川二丁目	亀井一郎	M18. 3. 19		三篠	歯科医師	横川町二丁目 628-6	角田達治	M25. 6. 5	
三篠	医師	三篠本町二丁目 1395	谷川亀太郎	M24. 3. 3	○	三篠	歯科医師	打越町 864	熊谷達吉	M14. 1. 1	
三篠	医師	横川町一丁目 1005	津田秀雄	M39. 7. 15		三篠	歯科医師	横 川 三 丁 目 738-1	斉木実	M38. 8. 6	
三篠	医師	三篠本町一丁目 821-2	長崎五郎	M17. 11. 29		三篠	歯科医師	横川町二丁目 621	宮崎速雄	M44. 2. 12	
三篠	医師	三篠本町二丁目 415-1	杓内一知	M21. 5. 20	○	三篠	歯科医師	三篠本町一丁目 820	森本盛夫	M27. 5. 2	
三篠	医師	三篠本町一丁目 825-2	後藤了	M32. 10. 21		三篠	獣医師	横川町二丁目 996-4	岡田斉	M28. 6. 12	
三篠	医師	三篠本町一丁目長崎病院内	北義彦	M22. 11. 14		三篠	獣医師	楠木町四丁目 125-2	金崎明治郎	M8. 12. 10	
三篠	医師	横川町二丁目	白上義男	M29. 9. 12		三篠	獣医師	大芝町 2433-3	牛尾克馬	M28. 10. 1	

		644-1						(縣廳勤務)			
三篠	医師	横川町二丁目 1020	泰泉寺尚	M32. 10. 27	○	三篠	獣医師	三篠本町一丁目 (縣廳勤務)	望月巖雄	M35. 10. 7	
三篠	医師	横川町三丁目 737	桧山俊次	M15. 9. 10	○	三篠	獣医師	三滝町 1251 (鉄道省勤務)	木下千代貞	M34. 5. 8	
三篠	医師	横川町一丁目 1057-2	平松武子	T3. 4. 15		三篠	薬剤師	横川町二丁目 644-1	井上政次	T4. 2. 3	
三篠	医師	楠木町二丁目 315-1	澄川準	M38. 12. 27		三篠	薬剤師	横川町一丁目 399-3	畑村利三郎	M20. 8. 3	○
三篠	医師	楠木町二丁目 315-1	澄川儀三郎	M8. 1		三篠	薬剤師	三篠本町二丁目 798	林出勝	M31. 4. 9	
三篠	歯科医師	楠木町二丁目 331	堀部義克	M35. 4. 25		三篠	薬剤師	横川町三丁目 797	沖本源太郎	M34. 2. 21	○
三篠	歯科医師	楠木町二丁目 333	大川重作	M23. 4. 26		三篠	薬剤師	横川町三丁目 212	小笠原重治	M19. 3. 3	
三篠	歯科医師	横川三丁目 767-4	和田稔	M36. 7. 2		三篠	薬剤師	横川町三丁目 626-2	川崎逸男	M32. 6. 1	○
三篠	薬剤師	楠木町一丁目 723-4	横山正治	M2. 3. 17		己斐	歯科医師	己斐町 343-13	勝田純一	M19. 6. 13	
三篠	薬剤師	楠木町二丁目 456-1	田辺拙爾	M40. 8. 21		己斐	獣医師	己斐町 2505-1	反木律雄	M23. 6. 3	
三篠	薬剤師	三篠本町一丁目 859-1	中村正	T3. 7. 19		己斐	薬剤師	己斐町 2532-4	岡田武三	M29. 11. 14	
三篠	薬剤師	三篠本町一丁目 816-3	清水英子	T5. 10. 25		己斐	薬剤師	己斐町 2546-1	塩谷憲光	M38. 7. 15	○
三篠	国際看護婦教会	横川一丁目 1037 国際看護婦会	大下百合乃	M44. 3. 23		己斐	歯科医師	己斐本町 2533	田中辰男	M37. 5. 20	
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	二岡トキエ	T6. 2. 24		古田	医師	古田町	永田悟朗		
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	滝本カメノ	M39. 10. 19		古田	医師	古田町	永田六朗		
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	小田ヒデ子	T4. 8. 20		古田	医師	古田町	森維次郎		
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	乃美アサノ	M36. 12. 15		古田	医師	古田町 古江 1163	永田熊太郎	M6. 4. 26	
三篠	看護婦	横川一丁目 1037 国際看護婦会	寺川秀子	T7. 12. 10		古田	薬剤師	古田町 古江 967-1	隠岐壽衛	M24. 2. 25	
己斐	歯科医師	己斐町 2533	田中辰男	M37. 5. 20		草津	医師	庚午町 530 (広島市役所勤務)	松林鎭三	M24. 4. 29	
己斐	薬剤師	己斐町	栗栖侗雄	M38. 7. 15		草津	医師	庚午町	小玉弘武		
己斐	医師	己斐町 27	津田哲三	M31. 5. 10		草津	医師	草津南町 633	佐藤健美	M31. 9. 27	
己斐	医師	己斐町 351-1	松本千々石	M28. 3. 14		草津	医師	庚午町 555-9	瀬尾哲男	M14. 6. 5	
己斐	医師	己斐町 142	児玉元蔵	K3. 9. 5		草津	歯科医師	草津本町 618	熊谷勝	M28. 2. 20	
己斐	歯科医師	己斐町 2514	長上豊子	M36. 8. 6		草津	薬剤師	草津本町 374	川本盛人	M23. 10. 15	

別紙第三十號ノ二

防毒用部類所有ノ醫師、歯科醫師、薬剤師、獣医師、看護婦表

○印ハ警防団員

[M=明治、T=大正]

分團名	職業別	住所	氏名	年令	摘要	防毒面	防毒衣	防毒靴	防毒手袋	其ノ他
尾長	薬剤師	尾長町 559	早澤鉄雄	M28. 1. 1	○	團要甲 1	1	1	1	救急箱一組
尾長	薬剤師	愛宕町 190	原田実	M29. 1. 10		團要甲 1	—	—	—	—
荒神	薬剤師	猿猴橋町 85	中本実	M25. 12. 19		團要乙 1	—	—	—	—
荒神	薬剤師	大須賀町 1073-2	橋本健一	T5. 7. 31		團要甲 1	—	—	—	—
荒神	薬剤師	猿猴橋町 21	折田茂幸	T2. 5. 21	○	團要甲 1	—	—	—	—
牛田	薬剤師	牛田町大島 1266	森田秀樹	M39. 4. 1		團要甲 1	—	—	—	—
白島	薬剤師	東白島町官有 14-2	松本精	M36. 2. 25	○	團要甲 1	—	—	—	—
幟町	薬剤師	東胡町甲 50	加藤恒一郎	M10. 1. 1		團要甲 1	—	—	—	—
幟町	薬剤師	幟町	前田常次郎	M30. 4. 26		團要甲 1 團要乙 2	—	—	—	—
幟町	薬剤師	堀川町 26-5	山下憲吾	M28. 7. 25	○	團要甲 1	—	—	—	—
竹屋	薬剤師	昭和町 553-1	坂本頼一	M28. 11. 8	○	團要甲 1	—	—	—	—
竹屋	薬剤師	下流川町 9-4	野田巧	M24. 3. 29	○	團要甲 1	—	—	—	—
皆実	薬剤師	翠町 1555-2	山本茂	M41. 11. 20	○	團要甲 2	—	—	—	—
千田	薬剤師	千田町一丁目 517-5	光田満亀雄	M24. 3. 25	○	團要甲 1	—	—	1	—
大手	薬剤師	大手町八丁目 62	松岡祐	M29. 10. 9		團要甲 1	—	—	—	—
袋町	薬剤師	大手町一丁目 21-1	山本有太郎	M12. 4. 22		團要甲 1	—	—	—	—
広瀬	薬剤師	西引御堂町 30	中村定助	M29. 7. 20	○	團要甲 1 團要乙 1	—	—	—	—
広瀬	薬剤師	広瀬北町 109	坪井徳市	M26. 8. 25	○	團要乙 1	—	—	—	—

本川	薬剤師	堺町二丁目 20	向井薫	M25. 1. 8		—	—	1	1	—
本川	薬剤師	鷹匠町 98	岡田斌	M39. 11. 14	○	團要甲 1 直結甲 2	1	1	1	探知機 1
神崎	薬剤師	舟入仲町 128-11	綿平孝一	M22. 5. 23	○	團要乙 1	—	—	—	—
神崎	薬剤師	河原町 225-1	折重將一	M29. 1. 2	○	團要甲 1 團要乙 1	—	—	—	—
天満	薬剤師	堺町四丁目 48	後藤吟蔵	M29. 7. 11	○	團要甲 5 團 要 乙 12	2	2	2	蚊帳 1、カルキ 撒布車 1、噴霧 器 2、カルキ
天満	薬剤師	西天満町 512-9	鬼武國男	M37. 9. 6	○	團要甲 1	—	—	—	—
三篠	薬剤師	三篠本町一丁目 212	小笠原重治	M19. 3. 3		團要乙 1	—	—	—	—

別表第三十一號

防毒用具及救護用救急薬品ノ現存状況表

部名又ハ 分團名	防毒用具ノ種類					員数	救護用救急薬品の種類		員数	現存位置	保管責任者
	消毒車	防毒面	防毒衣	防毒手套	防毒靴		救護箱	担架			
広島市防空本部	3	17	1	1	1	23	1	3	4	広島市役所	広島市長
青崎分團	—	13	—	—	—	13	1	1	2	分団事務所	澤田良知
矢賀分團	—	7	—	—	—	7	1	1	2	分団事務所	宍戸義太郎
尾長分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	大原良宅
荒神分團	—	17	—	—	—	17	1	1	2	分団事務所	奥本鉄漢
牛田分團	—	11	—	—	—	11	1	1	2	分団事務所	大田穰
白島分團	—	17	—	—	—	17	1	1	2	分団事務所	尾川伴六
幟町分團	—	22	—	—	—	22	1	1	2	分団事務所	丸岡才吉
竹屋分團	—	49	—	—	—	49	1	1	2	分団事務所	香川菊三
段原分團	—	20	—	—	—	20	1	1	2	分団事務所	中井萬蔵
比治山分團	—	27	—	—	—	27	1	1	2	分団事務所	野口進
仁保分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	木村益相
楠那分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	馬本庄一
大河分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	三宅峯吉
皆実分團	—	26	—	—	—	26	1	1	2	分団事務所	高橋浦太郎
宇品分團	—	26	—	—	—	26	1	1	2	分団事務所	飯田興津吉
似島分團	—	11	—	—	—	11	1	1	2	分団事務所	濱本友吉郎
千田分團	—	26	—	—	—	26	1	1	2	分団事務所	上迫猛一
大手分團	—	23	—	—	—	23	1	1	2	分団事務所	高橋直之助
袋町分團	—	42	—	—	—	42	1	1	2	分団事務所	藤重彦一
中島分團	—	18	—	—	—	18	1	1	2	分団事務所	朝田良一
廣瀬分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	小宇羅讃一
本川分團	—	25	—	—	—	25	1	1	2	分団事務所	佐伯辰次郎
神崎分團	—	38	—	—	—	38	1	1	2	分団事務所	西村幸蔵
舟入分團	—	19	—	—	—	19	1	1	2	分団事務所	佐々木強平
江波分團	—	12	—	—	—	12	1	1	2	分団事務所	小林奎太郎
観音分團	—	23	—	—	—	23	1	1	2	分団事務所	前浜百太郎
天満分團	—	19	—	—	—	19	1	1	2	分団事務所	高橋剛
福島分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	菊崎正行
三篠分團	—	34	—	—	—	34	1	1	2	分団事務所	中田収蔵
己斐分團	—	16	—	—	—	16	1	1	2	分団事務所	川本精一
古田分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	力田周一
草津分團	—	15	—	—	—	15	1	1	2	分団事務所	蘭福蔵
計	3	681	1	1	1		33	32	65		

別紙第三十二號

一、特設救護班員表（醫師）

氏名	科名	所属学区	住所	電話	備考	氏名	科名	所属学区	住所	電話	備考
太田 穰	内	牛田校	牛田	中 4627		野坂 貢	内	比治山校	比治山本	中 1654	
國友 國	内	牛田校	白島九軒町	中 1316		平野 一	耳	皆実校	皆実町三	中 6413	
野村 萬之助	肛	荒神校	荒神	中 5336		中村 亨	内	皆実校	皆実町三	中 3758	
佐々木 篤行	内	荒神校	京橋	中 3497		於保 源作	内	皆実校	翠	中 1317	
中西 トシ	内	荒神校	段原大畑	中 4966		三戸 玄三	内	仁保校	南段原		
関 三穀	肛	尾長校	二葉の里	中 4768		大橋 良造	内	仁保校	仁保	中 6514	
佐々木千佐子	眼	尾長校	京橋	中 1908		久保 兼松	内	大河校	仁保	中 5344	
月岡 陽一	内	矢賀校	的場	中 6480		佐伯 益三	内	楠那校	仁保	中 5344	
高橋 修	全	矢賀校	的場	中 2588		川本 重雄	耳	宇品校	宇品	中 6177	
石田 正城	小	段原校	的場	中 1710		高山 肇	全	宇品校	宇品	中 3286	
平岡 忠美	内	段原校	稻荷	中 2771		福原 嘉門	内	宇品校	宇品	中 7832	
長 壽人	小	段原校	土手	中 2257		岡崎 一郎	内	宇品校	宇品		
内海 了二	外	段原校	金屋	中 2125		永山研吉郎	内	白島校	白島中	中 4307	

黒川 吉郎	内	段原校	金屋	中 2096		小田 亮	内	白島校	白島東中	中 1364	
横坪 敏之	内	比治山校	段原東浦	中 4367		山田 トミ	小	白島校	白島西中		
高井 禎造	内	比治山校	段原新	中 2412		三次 義雲	内	白島校	東白島	中 2433	
豊島 義徳	内	幟町校	上柳	中 4692		細川 要	内	竹屋校	田中	中 1099	
斉藤 清	内	幟町校	上柳	中 1865		白井 潔	眼	竹屋校	竹屋	中 2855	
藤堂 一郎	眼	幟町校	下柳	中 1002		百谷 三郎	内	竹屋校	竹屋	中 1614	
木原 富子	婦	幟町校	下柳	中 1762		久保 完二	内	竹屋校	竹屋	中 3353	
遠山 憲臣	内	幟町校	山口	中 2015		児玉 省吾	眼	大手校	雑魚場	中 628	
三枝 助太郎	内	幟町校	石見屋	中 1231		高橋 謙	眼	大手校	大手八	中 6394	
平岡 確一	内	幟町校	上流川	中 4615		正岡 薫	内	大手校	大手八	中 4840	
下岡 圖南雄	皮	幟町校	東胡	中 1814		織田 健太	内	大手校	昭和	中 4672	
深川 喜久雄	眼	幟町校	鉄砲	中 3094		相澤 四郎	内	大手校	雑魚場	中 1328	
荒木 次郎	耳	袋町校	下中	中 877		東儀 乾三	内	千田校	南竹屋	中 5932	
泰 時彦	婦	袋町校	袋	中 2221		寺田 正人	内	千田校	東千田	中 1159	
清水 憲介	内	袋町校	袋	中 5143		福原 泰造	内	千田校	千田一	中 3613	
田丸 要槌	眼	袋町校	猿楽	中 5085		松林保太郎	内	千田校	千田二	中 3615	
若井 均	小	袋町校	紙屋	中 4482		村上 敬二	内	千田校	南竹屋	中 4621	
佐伯 望	皮	竹屋校	下流川	中 1952		松林 禎子	眼	千田校	千田二	中 3615	
下田 唯一	内	竹屋校	三川	中 6910		幸野 密二	外	中島校	中島本	中 1221	
原田 篤郎	内	竹屋校	平塚	中 7743		小泉 稲子	小	中島校	中島本	中 642	
中村 一夫	外	竹屋校	平塚	中 7743		阿戸源左エ門	内	中島校	中島本	中 944	
田代 登	皮	竹屋校	田中	中 5588		松井林太郎	内	中島校	中島本	中 5824	
小先 敬一	内	中島校	水主	中 3410		眞鍋 英一	小	舟入校	舟入幸	西 1517	
大山 宗一	内	中島校	水主	中 5282		芳野 セク	内	江波校	江波	西 188	
市川 佐與吉	内	中島校	元柳	中 401		古川 雄吉	内	江波校	河原	西 3203	
槌本 良雄	内	廣瀬校	寺	中 1351		森田 俊郎	小	天満校	堺三	西 1983	
森杉 延吉	内	廣瀬校	鷹匠	西 1321		玉垣 作一	内	天満校	天満	西 2019	
桑原 寛	皮	廣瀬校	中廣	西 2442		奥田 長人	内	天満校	横堀	西 2370	
森田 親一郎	内	本川校	塚本	西 1737		矢田 耕造		観音校	南観音		
村越 弘	内	本川校	塚本	西 2872		田中 次郎	皮	観音校	小網	西 58	
斉木 賢一	内	本川校	鍛冶屋	西 2395		藤中 正	内	福島校	東観音	西 2525	
三宅 綾子	内	本川校	鷹匠	西 2426		香内 一知	内	大芝校	三篠本二	西 1943	
上山 千鶴	内	本川校	十日市	西 1323		谷川亀太郎	耳	大芝校	三篠本二	西 526	
小東 四郎	内	本川校	猫屋	西 2405		黍泉 寺尚	内	三篠校	横川一	西 1397	
畠山 恒三	内	神崎校	河原	西 2286		平松 武子	内	三篠校	横川一	西 2217	
吉澤 秀夫	内	神崎校	河原	西 1779		亀井 一郎	全	三篠校	横川二	西 617	
中村 丹美	眼	神崎校	西新	西 2132		檜山 俊次	内	三篠校	横川三	西 3706	
笹岡 操	内	神崎校	西新	西 1682		澄川儀三郎	内	三篠校	楠木二	西 3546	
鉦村 弘	小	神崎校	西新	西 2325		松本千々石	外	己斐校	己斐	西 906	
水澤 貞二	内	舟入校	舟入本	西 1007		津田 哲三	内	己斐校	己斐	西 573	
板岡 一雄	婦	舟入校	舟入中	西 2073		児玉 元蔵	内	己斐校	己斐	西 2654	
永田 悟朗	婦	古田校	古田	草津 7		佐藤 健美	内	草津校	草津	草津 120	
森 鶏次郎	全	古田校	古田			尼子 俊子	内	草津校	草津	草津 55	
瀬尾 哲男	肛	草津校	庚午								

二、特設救護班員表（薬剤師）

担任所	担任セシメラレタキ 救護業務	業務別	電話	氏名
袋町分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 377	赤松 幹一
袋町分團	調剤（薬剤部員）			中澤 盛夫
袋町分團	調剤薬剤部員	病院勤務	中 1734	三原 清兵衛
袋町分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 641	山本 宥太郎
袋町分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 641	山本 安次郎
袋町分團	薬剤部員	薬局	中 4431	森 秀人
舟入分團	薬剤部員	中		栗山 周作
舟入分團	薬剤部員	薬局勤務		小林 義尚
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局	西 1564	石井 安太郎
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局		熊谷 哲
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局		細末 嘉七
本川分團	薬品衛生材料部員	薬局	西 1775	池田 武夫
本川分團	薬剤部員	勤務		國井 道憲
大手分團	薬剤部員	薬局勤務		河村 忠雄
大手分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 4713	松原 裕
大手分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 1841	三原 幾三郎
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局		岡本 節郎
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 3714	垣内 行雄
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 4653	友田 憲司
竹屋分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 4613	伊達 良三

幟町分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 1824	加藤 恒一郎
幟町分團	薬品衛生材料部員	薬局		加藤 貫一
神崎分團	薬剤部員	病院勤務		奥窪 昌治
神崎分團	薬品衛生材料部員	薬局		綿平 孝一
天満分團	薬品衛生材料部員	薬局		松井 武雄
中島分團	薬剤部員	病院勤務		正岡 武士
中島分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 2411	三宅 隼作
中島分團	薬品衛生材料部員	薬局		二井谷 松輔
中島分團	薬剤部員			永谷 喜美代
廣瀬分團	薬品衛生材料部員	薬局		久賀 仙吉
三篠分團	薬剤部員	病院勤務		小笠原 重治
三篠分團	薬品衛生材料部員	薬局		清水 英子
三篠分團	薬剤部員	病院勤務		中村 正
三篠分團	薬品衛生材料部員	薬局		西村 美代子
白島分團	薬品衛生材料部員	薬局		河内 一人
白島分團	薬剤部員	病院勤務		吉田 正遠
白島分團	薬品衛生材料部員	薬局		銭谷 信男
己斐分團	薬品衛生材料部員	薬局	西 610	岡田 武三
段原分團	薬剤部員	薬局		大野木 信一
段原分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 3160	坪田 旗之輔
段原分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 7349	原田 静夫
段原分團	薬品衛生材料部員	薬局		林 衛
段原分團	薬品衛生材料部員	薬局		山本 勉
段原分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 712	吉崎 吾助
段原分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 6748	木村 和三一
皆實分團	薬品衛生材料部員	薬局		山下 秀雄
千田分團	薬剤部員	病院勤務		江口 太郎
千田分團	薬剤部員	薬局		吉田 勝太郎
皆實分團	薬品衛生材料部員	薬局		山下 茂
宇品分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 7481	岡田 経三
宇品分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 2247	木島 聞
宇品分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 5111	山本 繁
荒神分團	薬剤部員			柴田 俊康
荒神分團	薬品衛生材料部員	薬局	中 2438	橋本 健一
尾長分團	薬品衛生材料部員	薬局		角谷 悟
牛田分團	薬品衛生材料部員	薬局		森田 幹子
江波分團	薬品衛生材料部員	薬局		岩空 世紀子
江波分團	薬剤部員	病院勤務		香口 静江
福島分團	薬品衛生材料部員	薬局		水間 歌子

三、特別救護班組織編成表(警防團ニ属セザル医師、歯科医師、薬剤師、看護婦、女子学生、女子青年団員等)

救護所名	担当者別	担当者ノ組織及人員
広島中央特別救護所	医師 松坂 義正	医師 36 人、薬剤師 12 人、歯科医師 12 人、看護婦 36 人、女子青年団員 50 人、j 高等女学校上級生 250 人
青崎国民学校特別救護所	女子青年団長 寺田 栄	庶務係 1 人、班長 2 人、看護婦 1 人、女子青年団員 26 人、高等科女生 36 人
矢賀国民学校特別救護所	女子青年団長 林 伍一	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、女子青年団員 40 人
尾長国民学校特別救護所	女子青年団長 西尾 静夫	庶務係 1 人、班長 1 人、女子青年団員 20 人
荒神国民学校特別救護所	女子青年団長 前田 曉	庶務係 1 人、班長 4 人、看護婦 2 人、女子青年団員 60 人
牛田国民学校特別救護所	女子青年団長 川崎 政信	庶務係 1 人、班長 2 人、看護婦 2 人、女子青年団員 67 人
白島国民学校特別救護所	女子青年団長 近藤 辰治	庶務係 1 人、班長 5 人、薬剤師 1 人、看護婦 3 人、女学生、女子青年団員 40 人
幟町国民学校特別救護所	女子青年団長 栗屋 信夫	庶務係 1 人、班長 5 人、薬剤師 2 人、看護婦 6 人、女子青年団員 36 人
竹屋国民学校特別救護所	女子青年団長 浜田惣右衛門	庶務係 1 人、班長 4 人、女学生 128 人、女子青年団員 20 人
段原国民学校特別救護所	女子青年団長 伊藤 幸	班長 5 人、班員 40 人
比治山国民学校特別救護所	女子青年団長 小林 宇一	班長 3 人、女子青年団員 100 人
仁保国民学校特別救護所	女子青年団長 宮武 千穎	庶務係 7 人、班長 2 人、産婆 2 人、高等科上級女生、女子青年団員 60 人
楠那国民学校特別救護所	女子青年団長 松田 常一	看護婦 4 人、高等科上級女生、女子青年団員 96 人
大河国民学校特別救護所	女子青年団長 林 鉄夫	庶務係 1 人、班長 1 人、薬剤師 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 10 人、女子青年団員 17 人
皆實国民学校特別救護所	女子青年団長 佐々木 哲	班長 4 人、薬剤師 4 人、女学生班員 59 人
宇品国民学校特別救護所	女子青年団長 有田 基武	庶務係 1 人、班長 1 人、薬剤師 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 180 人
似島説教場特別救護所	女子青年団長 伊藤 四郎	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 6 人、女子青年団員 40 人
千田国民学校特別救護所	女子青年団長 檜垣 兵市	班長 3 人、薬剤師 3 人、看護婦 3 人、班員女学生女子青年団員 137 人
大手国民学校特別救護所	女子青年団長 伊藤 一義	班長 8 人、医師 9 人、薬剤師 1 人、看護婦 8 人、高女生女子青年団員 173 人
袋町国民学校特別救護所	女子青年団長 間賀田 琢爾	庶務係 1 人、班長 4 人、薬剤師 4 人、看護婦 8 人、女学生女子青年団員 120 人
中島国民学校特別救護所	女子青年団長 松本 知	庶務係 1 人、班長 8 人、薬剤師 8 人、看護婦 8 人、女学生女子青年団員 165 人
廣瀬国民学校特別救護所	女子青年団長 香川 軍二	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、女子青年団員 20 人
本川国民学校特別救護所	女子青年団長 惣野 眞澄	庶務係 1 人、班長 5 人、看護婦 3 人、女学生高等科上級女生女子青年団員 134 人
神崎国民学校特別救護所	女子青年団長 戸津川 繁藏	庶務係 5 人、班長 2 人、薬剤師 1 人、看護婦 9 人、女学生高等科上級女生 57 人、

		女子青年団員 76 人
舟入国民学校特別救護所	女子青年団長 砂本 静一	庶務係 3 人、班長 3 人、女学生高等科上級女生女子青年団員 70 人
江波国民学校特別救護所	女子青年団長 高沖 駿	庶務係 4 人、班長 4 人、女子青年団員 75 人
観音国民学校特別救護所	女子青年団長 管尾 格郎	医師 2 人、薬剤師 1 人、歯科医師、1 人、看護婦 2 人、高等科上級女生 57 人、女子青年団員 76 人
天満国民学校特別救護所	女子青年団長 堀川 一眞	庶務係 1 人、班長 1 人、薬剤師 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生 57 人
福島国民学校特別救護所	女子青年団長 田辺 博人	庶務係 1 人、看護婦 2 人、女子青年団員 60 人
三篠国民学校特別救護所	女子青年団長 日原 範一	庶務係 1 人、班長 10 人、医師 5 人、薬剤師 10 人、看護婦 20 人、女子青年団員 76 人
己斐国民学校特別救護所	女子青年団長 中村 美之	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、女学生女子青年団員 70 人
古田国民学校特別救護所	女子青年団長 塩本 千代	庶務係 1 人、看護婦 1 人、女子青年団員 43 人
草津国民学校特別救護所	女子青年団長 原田 知	庶務係 1 人、班長 1 人、看護婦 1 人、高等科上級女生、女子青年団員 248 人

前項ノ特設救護班ヲ組織シタルモノハ之ガ人名ヲ明ラカニシ同時ニテモ出勤シ得ル如ク準備シ置クモノトス

別紙第三十三號

廣島市私立病院、医院、診療所、救護所調査表

氏名	科名	学区名	住所	電話	収容人数	氏名	科名	学区名	住所	電話	収容人数
久保田五三美	内	牛田校	牛田町	中 3658	30	益田 霞	婦	仁保校	東雲町	中 7348	
原田 尚	内	荒神校	荒神町	中 3485		三戸 玄三	内	仁保校	南段原町		
吉田 博	内	荒神校	西蟹屋町	中 1224		杉江 驥	内	似島校	似島町		20
浅海 政一	内・皮	尾長校	愛宕町	中 3635		加藤 隆造	内	宇品校	宇品町	中 4361	
大橋 年見	内	青崎校	仁保町向洋	中 1356		佐藤 秀夫	外	宇品校	宇品町	中 6123	
石川 省三	内	段原校	京橋町	中 3125		天野 進作	神	白島校	白島西中町	中 1257	200
井出 弘	耳	段原校	京橋町	中 4885		藤井 正和	外	幟町校	橋本町	中 3738	
土谷 巖郎	眼	段原校	京橋町	中 6587		町井 剛	内	幟町校	橋本町	中 4686	
石田 俊雄	内	段原校	的場町	中 1710		串田 光造	耳	幟町校	下柳町	中 2899	
結城 英夫	婦	段原校	稲荷町	中 6512	50	毛利 吟吉	耳	幟町校	下柳町	中 2126	
澤崎 嘉衛	婦	段原校	段原大畑町	中 1384		森 恒三	婦	幟町校	山口町	中 1309	
長谷川正子	婦	段原校	段原大畑町	中 7906		松坂 義正	皮	幟町校	石見屋町	中 1608	
堤 長二郎	内	皆実校	比治山本町	中 1192		田坂 重實	小	幟町校	上流川町	中 2570	
西村 潔	婦	皆実校	皆実町	中 6058		坪井 賢次	皮	幟町校	上流川町	中 4143	
福原 慧	内	皆実校	皆実町	中 1533		西下 正己	内	幟町校	上流川町	中 3177	
杉山家嘉夫	小	皆実校	皆実町	中 3487		吉田 寛一	内	幟町校	斜屋町	中 3384	
川村 北海	外	皆実校	皆実町	中 765		田中 一郎	小	幟町校	堀川町	中 458	
山縣 貞臣	内	幟町校	堀川町	中 7737		清茂 喜	皮	袋町校	細工町	中 1210	
伊藤 昌二	内	幟町校	堀川町	中 996		黒川 節司	内	袋町校	細工町	中 872	
難波 丈夫	外	袋町校	立町	中 887	50	島 薫	外	袋町校	細工町	中 156	
松江 竜一	内	袋町校	立町	中 4953	50	田中 政夫	耳	袋町校	紙屋町	中 806	
佐武 伸生	耳	袋町校	中町	中 1421		井槌 義明	婦	竹屋校	下流川町	中 5339	
廣藤 文造	外	袋町校	中町	中 1377	90	多田 繁	小	竹屋校	三川町	中 1207	
東 三平	外	袋町校	中町	中 1643	50	香川 卓二	皮	竹屋校	三川町	中 1437	
日下部旦三	外	袋町校	西魚屋町	中 2016		横山 寧道	耳	竹屋校	三川町	中 135	
生塩 元	眼	袋町校	小町	中 5529		山根 栄道	内	竹屋校	平塚町	中 4981	
香川三之助	婦	袋町校	小町	中 3013		己斐 言	内・呼	竹屋校	田中町	中 2972	
常久 哲	内	袋町校	小町	中 2154		井倉 詠	内	竹屋校	田中町	中 5140	
秋山 賢吉	婦	袋町校	小町	中 3614		竹本 巖	肛	竹屋校	田中町	中 171	
阪田 良一	外・皮	袋町校	塩屋町	中 3339		田坂 三友	外	竹屋校	竹屋町	中 4478	
渡辺英吉造	婦	袋町校	尾道町	中 307		窪田 孝	婦	大手校	國泰寺町	中 6022	400
佐藤 串一	外	袋町校	尾道町	中 5540		林 哲雄	外	大手校	國泰寺町	中 1586	
杉本 茂憲	眼	袋町校	尾道町	中 1197		中村 力	小	大手校	大手町六丁目	中 856	
田中百太郎	耳	袋町校	大手町二丁目	中 1054		堀田 筧三	眼	大手校	大手町八丁目	中 127	
中道 吉亮	耳	袋町校	大手町五丁目	中 3387		田村 矯郎	小	大手校	大手町八丁目	中 475	
佐波古直明	婦	袋町校	細工町	中 2667		黒川 巖	内	大手校	大手町八丁目	中 1130	500
吉村 喜作	内	千田校	東千田町	中 1159	100	三宅 坦	外	本川校	鷹匠町	西 2426	
京橋 一久	内	千田校	千田町一丁目	中 2053		進藤 憲	婦	本川校	十日市町	西 1289	
越智シゲル	内	中島校	中島本町	中 7619		松本 易二	婦	本川校	十日市町	西 2338	
原田 弘道	外	中島校	中島本町	中 1221	150	大内 五良	外	本川校	堺町一丁目	西 393	
坪井 義晴	婦	中島校	中島新町	中 4314	100	伊藤 驊造	婦	本川校	堺町一丁目	西 3465	
東 恒一	皮	中島校	天神町	中 1084		長沼孝之助	外	神崎校	西新町	西 3734	
植田 秀嶺	婦	中島校	天神町	中 978	150	樽屋 五郎	外	神崎校	西新町	西 306	
筑紫 秀雄	眼	中島校	天神町	中 1583		成川 光吉	皮	神崎校	西新町	西 1666	
蔵本 積	内	中島校	天神町	中 1288		土谷 剛治	外	神崎校	西新町	西 873	
津田 享平	婦	中島校	天神町	中 47		香川 景久	内	神崎校	舟入本町	西 994	
酒井 文一	内	中島校	天神町	中 4912		江下 良彦	外	神崎校	河原町	西 1074	
進藤 哲郎	小	中島校	天神町	中 97		松尾 信吉	外	神崎校	河原町	西 628	
光本 天造	耳	中島校	木挽町	中 2745	50	笠坊 博之	皮	天満校	堺町四丁目	西 2091	
三宅 良一	眼	中島校	水主町	中 3333	150	白井 貞之	外	天満校	堺町四丁目	西 510	

長谷 信夫	皮	本川校	塚本町	西 1698		兒玉 克己	内	天満校	西天満町	西 3796	
坪井 次郎	外	本川校	猫屋町	西 2405		高田 敦二	内	廣瀬校	西引御堂町	西 571	
今井 藏六	耳	本川校	猫屋町	西 553		網本次郎三	婦	舟入校	舟入幸町	西 821	
今川 卓治	内	本川校	猫屋町	西 2061		白上 義男	肛		横川町一丁目	西 3253	
正岡 旭	婦	本川校	猫屋町	西 3747		津田 秀雄	内		横川町二丁目	西 2156	
後藤 了	外		三篠本町一丁目	西 1485		日本製鉄所 広島製作所 医務局診療所	全		仁保町延命	中 4010	
長崎 五郎	内		三篠本町一丁目	西 2436		大和紡績広島 人絹工場 医務局診療所	全		宇品町	中 6600	
永田熊太郎	呼	古田校	古田町	草津 7		仁保の浦病院	内		仁保町楠那	中 317	
東洋紡績広島 工場医務局診療所	全		西蟹屋町	中 1205							

別紙第三十三號ノ二

学校救護所調査表

分団名	救護所名	担当者名	収容人員
	広島中央特設救護所	医師 松原 義正	1,000
青崎分団	青崎国民学校特別救護所	国民学校長 寺田 栄	1,000
矢賀分団	矢賀国民学校特別救護所	国民学校長 林 伍一	500
尾長分団	尾長国民学校特別救護所	国民学校長 西尾 静夫	1,000
荒神分団	荒神国民学校特別救護所	国民学校長 前田 暁	1,000
牛田分団	牛田国民学校特別救護所	国民学校長 川崎 政信	500
白島分団	白島国民学校特別救護所	国民学校長 小迫 一二三	1,000
幟町分団	幟町国民学校特別救護所	国民学校長 台 嘉治	2,000
竹屋分団	竹屋国民学校特別救護所	国民学校長 間賀田 琢爾	1,000
段原分団	段原国民学校特別救護所	国民学校長 香川 軍二	1,000
比治山分団	比治山国民学校特別救護所	国民学校長 小林 宇市	1,500
仁保分団	仁保国民学校特別救護所	国民学校長 宮武 千穎	3,000
楠那分団	楠那国民学校特別救護所	国民学校長 松田 常一	1,000
大河分団	大河国民学校特別救護所	国民学校長 林 哲夫	1,500
皆実分団	皆実国民学校特別救護所	国民学校長 佐々木 哲	800
宇品分団	宇品国民学校特別救護所	国民学校長 檜垣 兵市	2,000
似島分団	似島説教場	国民学校長 伊藤 四郎	300
千田分団	千田国民学校特別救護所	国民学校長 砂本 静一	500
大手分団	大手国民学校特別救護所	国民学校長 伊藤 幸	1,000
袋町分団	袋町国民学校特別救護所	国民学校長 玉木 知	1,000
中島分団	中島国民学校特別救護所	国民学校長 伊藤 一義	300
廣瀬分団	廣瀬国民学校特別救護所	国民学校長 小松 百合男	1,500
本川分団	本川国民学校特別救護所	国民学校長 惣野 眞澄	3,000
神崎分団	神崎国民学校特別救護所	国民学校長 戸津川 繁藏	1,500
舟入分団	舟入国民学校特別救護所	国民学校長 畠 耕造	500
江波分団	江波国民学校特別救護所	国民学校長 高沖 駿	500
観音分団	観音国民学校特別救護所	国民学校長 菅尾 格郎	1,000
天満分団	天満国民学校特別救護所	国民学校長 堀川 一眞	3,000
福島分団	福島国民学校特別救護所	国民学校長 田辺 博人	2,000
三篠分団	三篠国民学校特別救護所	国民学校長 日原 範一	5,000
己斐分団	己斐国民学校特別救護所	国民学校長 中村 美之	1,000
古田分団	古田国民学校特別救護所	国民学校長 橋本 千代	1,000
草津分団	草津国民学校特別救護所	国民学校長 原田 智	1,000
大芝分団	大芝国民学校特別救護所	国民学校長 金谷 秀造	3,000

別紙第三十四號

救護薬品購入系統

薬品名		購入先	購入先缺乏ノ場合注大系統
一、アルコール	一、胡麻油	猫屋町 石井豊三薬店	本縣警察本部ヲ通シ三共株式会社ヨリ購入ス
一、オキシドール又ハオキシフル	一、クロラミン錠	中島本町 三宅準作薬店	
一、重炭酸ソーダ錠	一、繃帯	天満町 日野直作薬店	
一、石鹼(薬用)	一、ガーゼ	大手町八丁目 大和屋薬店	
一、三角巾	一、油紙	大手町一丁目 山本宥太郎薬店	
一、脱脂綿	一、留針	宇品町 山本繁薬店	
一、薬瓶		段原東浦町 山本勉薬店	
一、薬包紙		廣瀬元町 住田薬店	

一、稀コード丁幾	堺町四丁目 後藤薬店 其他市内薬店	
----------	----------------------	--

別紙第三十五號

三層以上（地階アルモノハ二階）ノ鉄骨及鉄筋コンクリート造ノ建築物調査表（昭和十五年十一月末現在）

建物所在地	所有者		名称	用途	構造	階数	面積建坪	建築経過年数
	住所	氏名						
國泰寺町	國泰寺町	廣島市	市役所	廳舎	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	6,803 平方米 2,036 平方米	11 年
袋町	袋町	廣島市	國民学校	校舎	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	676 平方米 413 平方米	3 年
鍛冶屋町	鍛冶屋町	廣島市	國民学校	校舎	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,090 平方米 176 平方米	11 年
基町	廣島商工会議所	廣島商工会議所	廣島商工会議所	會議室其他	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	2,045 平方米 588 平方米	3 年
猫屋町	猫屋町	財団法人闡教部	光道学校	校舎	鉄筋コンクリート	地上三階 地下ナシ	442 平方米	15 年
上流川町	上流川町	中國新聞社	中國新聞社	營業所及講堂	鉄筋コンクリート	地上三階	1,071 平方米	12 年
上流川町	上流川町	中國建物株式会社	中國ビル	事務所	鉄筋コンクリート	地上十階	1,431 平方米	3 年
上流川町	東京都麹町内山下町一ノ一	日本勸業銀行	日本勸業銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上二階 地下一階	1,857 平方米 714 平方米	8 年
下柳町	下柳町	廣島合同貯蓄銀行	廣島合同貯蓄銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,034 平方米 109 平方米	2 年
八丁堀	大阪御堂通一ノ一五	福德生命	旧館福屋	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	2,758 平方米	9 年
八丁堀	八丁堀	福屋	百貨店	營業所	鉄筋コンクリート	地上八階 地下二階	8,790 平方米 2,056 平方米	2 年
中島本町	中島本町	呉服店大正屋	呉服店大正屋	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	839 平方米 142 平方米	11 年
袋町	東京日本橋区本名町	日本銀行	日本銀行	營業所	鉄骨鉄筋コンクリート	地上二階 地下一階	2,076 平方米 1,057 平方米	3 年
大手町三丁目	大手町三丁目	瓦斯電軌	日本發送電廣島支店	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,244 平方米 189 平方米	4 年
大手町二丁目	大手町二丁目	銀行集会所	銀行集会所	集会所	鉄筋コンクリート	地上三階	1,181 平方米	4 年
大手町二丁目	大阪市東区今橋三ノ二一	三和銀行	三和銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	1,986 平方米	9 年
紙屋町	大阪市東区北浜町	住友ビルディング	住友ビル	營業所	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	2,554 平方米 184 平方米	11 年
紙屋町	紙屋町	藝備銀行	藝備銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上五階 地下一階	3,914 平方米 749 平方米	13 年
平田屋町	東京麹町永樂町	安田銀行	安田銀行	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	587 平方米	16 年
革屋町	東京麹町区鰐河岸	安田生命	安田生命	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	475 平方米	18 年
袋町	東京麹町区鰐河岸	明治生命	明治生命	營業所	鉄筋コンクリート	地上三階	1,435 平方米	10 年
小町	小町	廣島電気会社	廣島電気会社	營業所	鉄筋コンクリート	地上五階 地下一階	3,913 平方米 864 平方米	19 年
東魚屋町	東京日本橋区通	日華生命	八千代ビル	事務所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	665 平方米 321 平方米	12 年
南千田町	大阪市北区中島二二五	帝國人絹会社	帝國人絹会社	事務所	鉄筋コンクリート	地上四階 地下一階	1,811 平方米 333 平方米	15 年
三篠本町	廣島市小町	廣島電気	電気試験所	事務所	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	1,114 平方米 33 平方米	2 年
堀川町	横浜市鶴見区生麦町	株式会社金港商店	キリンビヤホール	飲食店	鉄筋コンクリート	地上三階 地下一階	612 平方米 354 平方米	2 年

別紙第三十六號

火災及耐火防毒ノ避難場所調査表

分団名	避難所	火災時又ハ耐弾防毒ノ別	收容範圍	收容人員
牛田	早稲田区早稲田神社	火災	早稲田、本町区	1,600
	南区教員養成所	火災	南区	1,500
	新町区日通寺	火災	新町区	600
荒神	荒神國民学校	火災	荒神町、西蟹屋町	1,000
	荒神町常光寺	火災	荒神町	1,000

	東練兵場	火災	大須賀町外一般	無限
	大須賀町萬景寺	火災	大須賀町	600
	松原区広島駅前広場	火災	松原町、猿猴橋町	1,000
尾長	尾長町片河山	火災	尾長町外一般	無限
	東蟹屋町藤野製麵会社広場	火災	東蟹屋町	2,000
矢賀	矢賀町矢賀山	火災		無限
	矢賀町古城山	火災		無限
青崎	仁保字大原大原神社	火災	向洋一円	無限
	仁保字大森向洋説教場	火災	向洋一円	500
	仁保字堀越今宮神社	火災	堀越一円	無限
段原	桐木町比治山神社	火災	桐木町	100
	稲荷町稲荷神社	火災	稲荷町	200
	松原町法正寺	火災	松川、比治山、稲荷町	300
	比治山長広寂寺	火災	松川、比治山、稲荷町	300
	松原町東浦明泉寺	火災	東浦、大畑町	300
	段原長多聞院	火災	土手、比治山、段原町	150
	比治山公園	火災	段原、大島、東浦、山崎、日ノ出、桐木、比治山町	無限
	長性院	火災	段原町	200
	金屋町専律寺	火災	金屋町、京橋町	200
	段原末広広報徳説教場	火災	段原末広町	300
	比治山本町善教寺	火災	比治山本町	250
	比治山中町仙光山広場	火災	比治山本町	150
比治山	比治山公園	火災	全般	無限
	私立女子商業学校	火災	南段原、段原中町	2,000
	段原中町養立寺	火災	南段原、段原中町	2,000
	段原新町菊湯西側広場	火災	段原新町	1,000
	第一國民学校	火災	段原山先町、段原日ノ出町	3,500
	比治山國民学校	火災	東雲町	1,500
	南蟹屋町亀田製砥所	火災	南蟹屋町	1,600
	大州町競馬場	火災	大州町	1,600
皆実	翠町縣立第一中学校寄宿舎	火災	翠町	400
	翠町中村壽一宅北側広場	火災	翠町	300
	縣立師範学校々庭	火災	皆実町一丁目	600
	皆実町福原一宅前空地	火災	皆実町一丁目	600
	皆実町電信隊北側空地	火災	皆実町一丁目	800
	皆実町二丁目南國民学校	火災	皆実町二、三丁目	800
	皆実町二丁目説教場	火災	皆実町二、三丁目	120
	皆実町三丁目凱旋碑前	火災	皆実町三丁目	100
	光円寺跡空地	火災	皆実町三丁目	500
	広島高等学校	火災	皆実町三丁目	3,000
仁保	仁保町本浦仁保神社	火災	本浦区全般	300
	仁保町本浦説教場	火災	本浦区全般	300
	仁保町湊崎西福時	火災	湊崎区全般	1,000
	仁保國民学校	火災	東浦湊崎	3,000
大河	大河國民学校	火災	霞町、旭町、出汐町	1,500
	大河町説教場	火災	大河全般	200
	霞町 城山	火災	全般	無限
	比治山	火災	全般	無限
	出汐町説教場	火災	出汐町	200
楠那	日宇那説教場	火災	日宇那全般	300
	日宇那愛育園	火災	日宇那全般	100
	楠那國民学校	火災	日宇名、丹那区	2,000
	丹那説教場	火災	丹那区	200
	丹那 工場	火災	丹那区	50
宇品	宇品町御幸通千曉寺	火災	御幸通自一丁目至四丁目	500
	宇品國民学校	火災	御幸通自七丁目至十丁目	2,000
	宇品朝鮮だ公園	火災	御幸通自十一丁目至十七丁目	2,000
	宇品町広陵中学校	火災	御幸通自十一丁目至十七丁目	2,000
	広島女子専門学校	火災	神田通自八丁目至十四丁目	1,000
	宇品町神田神社	火災	神田通自四丁目至七丁目	200
	宇品学園	火災	神田通自四丁目至七丁目	300
	内務省埋立広場	火災	海岸通一円	3,000
	元宇品町元宇品分教場	火災	元宇品町一円	500
似島	似島國民学校	火災	似島町全般	300
白島	東泉寺河原	火災	白島九軒町、中町、東白島町	無限
	長壽園河原	火災	西白島町	無限
	工兵隊河原	火災	白島西中町、白島北町	無限
	饒津神社	火災	二葉ノ里	無限

幟町	上柳町土手空地	火災	上柳町	1,600
	下柳町合同貯蓄銀行浦空地	火災	下柳町、銀山町	1,600
	幟町カトリック教會	火災	幟町	400
	幟町國民学校	火災	幟町、東胡町	2,000
	上流川町泉邸前松原	火災	幟町、上流川町、鉄砲町	2,500
	上流川町安田空地	火災	上流川町	400
	第一徴兵保険株式会社	火災	上流川町、斜屋町	500
	鉄砲町杉江空地	火災	鉄砲町	240
	鉄砲町超覺寺	火災	鉄砲町	400
	西練兵場	火災	鉄砲町、八丁堀、其他	5,000
	橋本町明神社	火災	橋本町	240
	石見屋町正光寺	火災	石見屋町	400
	山口町、下柳町電車通空地	火災	山口町	400
	銀山町徳永寺	火災	銀山町	100
	胡町古川空地	火災	胡町	250
	胡町胡神社	火災	胡町	100
	堀川町永照寺	火災	堀川町	300
	堀川町般舟寺	火災	堀川町	500
	弥生町遊郭事務所	火災	弥生町	500
	上流川町日本勸業銀行	耐震	上流川町、東胡町、斜屋町	100
	下柳町広島合同貯蓄銀行	耐震	下流川町、山口町、石見屋町	100
	八丁堀福屋百貨店	耐震	八丁堀、東魚屋町、元町	230
	八丁堀福屋百貨店旧館	耐震	八丁堀、東魚屋町、元町	160
	八丁堀福德生命保険会社	耐震	八丁堀、東魚屋町、元町	100
	中國新聞社	耐震	胡町、鉄砲町、上流川町	100
	中國ビル	耐震	胡町、鉄砲町、上流川町	300
袋町	東魚屋町中ノ棚魚市場	火災	東魚屋町	300
	立町崇徳教社	火災	立町	200
	立町誓立寺	火災	立町	150
	研屋町勝順寺	火災	研屋町	150
	憲兵分隊前	火災	研屋町	500
	袋町國民学校	火災 耐震	播磨屋町、革屋町、紙屋町、西魚屋町	300 180
	中町長谷川小路広場	火災	中町	90
	中町東医院広場	火災	中町	140
	新川場町妙慶寺	火災	新川場町	500
	新川場町聖光寺	火災	新川場町	500
	下中町広島医師会館	火災	下中町其他	500
	下中町縣立高等女学校	火災	下中町其他	2,000
	小町國泰寺	火災	小町	300
	小町白神社	火災	尾道町、大手町	300
	広島護國神社前	火災	猿楽町其他一般	5,000
	記念碑前	火災	猿楽町其他一般	1,000
	細工町西向寺	火災	細工町	100
	細工町西蓮寺	火災	細工町	100
	鳥屋町、元安川大手町三丁目河原	火災	鳥屋町、大手町	100
	大手町二丁目三和銀行	耐震	大手町二丁目	100
	大手町二丁目銀行集会所	耐震	大手町二丁目	120
	大手町三丁目日本放送電広島支店	耐震	大手町三丁目、鳥屋町	230
	大手町五丁目神宮境内	火災	大手町五丁目	150
	塩屋町専勝寺	火災	塩屋町北部	100
	袋町日本銀行南側	火災	塩屋町南部	100
	袋町日本銀行	耐震	袋町、塩屋町	160
	袋町山陽記念館	火災	袋町、塩屋町	150
	袋町妙蓮寺	火災	袋町、塩屋町	50
	西魚屋町明治生命保険会社	耐震	西魚屋町	100
	紙屋町住友銀行	耐震	西魚屋町、紙屋町	370
	紙屋町藝備銀行	耐震	紙屋町、猿楽町	150
	猿楽町産業奨励館	耐震	猿楽町、横川細工町、鳥屋町	600
	基町広島商工会議所	耐震	基町、猿楽町、細工町	500
	平田屋町安田銀行	耐震	平田屋町、鉄砲屋町	30
	革屋町安田生命保険会社	耐震	革屋町	50
	小町広島電気会社	耐震	小町、大手町七丁目	490
	東魚屋町日華生命保険会社	耐震	東魚屋町、立町	130
	金港商会	耐震	平田屋町	220
竹屋	三川町、広島地方裁判所構内	火災	三川町、新天地、竹屋町	1,000
	三川町円隆寺	火災	三川町、富士見町	1,000
	進徳女学校	火災	富士見町其他	1,000

	広島文理科大学グラウンド	火災	昭和町其他	1,000
	下流川町常林寺	火災	下流川町、田中町	700
	薬研掘禪昌寺	火災	薬研掘、新天地	500
	平塚町興善寺	火災	平塚町、鶴見町	500
	平塚町順教寺	火災	平塚町、鶴見町	200
	竹屋国民学校	火災	宝町、鶴見町	1,000
	山陽中学校	火災	宝町、鶴見町	1,000
大手町	縣立第一中学校	火災	国泰寺町、雑魚場町、大手町	4,300
	雑魚場町通信省用地	火災	国泰寺町、雑魚場町、大手町	2,600
	広島市公会堂	火災	国泰寺町、雑魚場町、大手町	200
	広島市役所地下室	耐震	国泰寺町、雑魚場町、大手町	600
	大手国民学校	火災	大手町	1,000
	大手町七丁目金比羅神社	火災	大手町	50
	大手町七丁目普門寺	火災	大手町	100
	大手町七丁目長遠寺	火災	大手町	180
	大手町七丁目元電気会社跡	火災	大手町	100
	大手町七丁目三宅兼一宅	火災	大手町	150
	大手町七丁目本選寺	火災	大手町	200
	大手町七丁目長久寺	火災	大手町	300
	大手町七丁目佐野昆布工場	火災	大手町	100
	大手町七丁目広島貯金支局	火災	大手町	50
	広島高師付属国民学校	火災	雑魚場町	1,500
	大手町八丁目堀田医院	火災	大手町	80
	東本願寺別院	火災	大手町	450
	広島電気会社変電所	火災	大手町	220
	広島水産会社	火災	大手町	1,000
	別天座	火災	大手町	400
千田	広島文理大学運動場	火災	千田町、東千田町	2,000
	修道中学グラウンド	火災	東千田町	2,000
	広島貯金支局地下室	耐震	東千田町	600
	進徳高等女学校グラウンド	火災	南竹屋町、平野町	2,000
	南千田町帝國人絹会社	耐震	南千田町	350
	千田国民学校	火災	管内全般	2,500
中島	中島本町慈仙寺	火災	中島本町	1,000
	元柳町浄法寺	火災	中島本町	450
	天神町記念寺	火災	天神町、元柳町	700
	天神町天城慶一宅	火災	天神町、元柳町	500
	材木町誓願寺	火災	材木町	700
	材木町妙法寺	火災	材木町	200
	木挽町持明院	火災	木挽町	300
	木挽町福壽院	火災	木挽町	400
	中島新町西應寺	火災	中島新町	500
	中島新町善福寺	火災	中島新町	500
	水主町武徳殿	火災	水主町	700
	水主町住吉神社	火災	水主町	300
	水主町説教場	火災	水主町	700
	水主町浅野邸園	火災	水主町	300
	水主町円八寺	火災	水主町	1,500
	吉島町南部空地	火災	吉島町	1,600
	吉島長北部空地	火災	吉島町	300
	吉島羽衣町浅野男爵空地	火災	吉島羽衣町	1,900
	吉島本町畑地三ヶ所	火災	吉島本町	2,800
	中島国民学校	火災	管内全般	1,000
廣瀬	中島本町大正屋呉服店	耐震	中島本町、材木町	130
	廣瀬国民学校	火災	広瀬北町	1,500
	寺町本願寺広島別院	火災	寺町、西引御堂町	1,000
本川	廣瀬神社	火災	広瀬町、西九軒町、西引御堂町、錦町	1,000
	空鞆神社	火災	空鞆町東部	100
	鷹匠町清住寺	火災	鷹匠町東部	500
	鷹匠町幼稚園	火災	鷹匠町中組	80
	鷹匠町土井木材店倉庫	火災	鷹匠町南組	250
	本川国民学校	耐震 火災	鍛屋町、塚本町、左官町	160 3,000
	塚本町古川商店倉庫	火災	塚本町	150
	堺町一丁目養徳院	火災	堺町一丁目其他	450
	左官町本覚寺	火災	左官町	100
	猫屋町光道学校	耐震	猫屋町	45
	猫屋町妙教寺	火災	猫屋町東	300

	猫屋町教西寺	火災	猫屋町西	500
神崎	河原町集会所	火災	河原町、西地方町	30
	小網町三光寺	火災	西新町、小網町、小舟	50
	神崎國民学校	火災	舟入町、舟入仲町、舟入幸町、河原町	2,000
舟入	舟入幸町伊達医院	火災	舟入幸町	20
	舟入國民学校	火災	舟入幸町、舟入川口町	2,000
江波	江波公園	火災	江波町一円	無限
	射の場	火災	江波町一円	無限
天満	小網町土手広場	火災	榎町三、四丁目	200
	天満國民学校	火災	天満町外全般	2,000
	北榎町電話局広場	火災	北榎町其他	500
	新市町車置場	火災	新市町	100
	横堀町辻本工場広場	火災	横堀町	200
	天満町宮原倉庫	火災	天満町	100
	天満町明治足袋会社	火災	西天満町	150
	西天満町正山説教場	火災	北天満町	100
	西天満町廣瀬橋下北土手	火災	北天満町	200
	西天満町長行寺當太郎宅前	火災	西天満町	100
観音	縣立第二中学校	火災	西観音町一丁目、観音本町	1,500
	私立商業学校	火災	南観音町三丁目	1,000
	観音國民学校	火災	東観音町一、二丁目	1,000
	西高等女学校	火災	東観音町二丁目、西観音町一丁目	500
	南観音町大師堂	火災	南観音町三丁目	300
	東観音町二丁目観音院	火災	東観音町二丁目	500
	西観音町一丁目稻荷教会	火災	西観音町一丁目	500
	第二國民学校	火災	南観音一、二丁目	1,000
福島	福島國民学校	火災	福島町	2,000
	福島町愛光園	火災	福島町	1,000
三篠	三瀧町三瀧山	火災	管内全般	無限
	大芝町大芝公園	火災	管内全般	3,000
	大芝國民学校	火災	管内全般	2,000
	三篠國民学校	火災	管内全般	5,000
	三篠本町三篠神社	火災	三篠本町	500
	新庄町元新庄神社跡	火災	新庄町	3,000
	三篠本町興隆寺	火災	三篠本町	1,000
己斐	三篠本町広島電気試験所	耐弾	三篠本町	190
	己斐國民学校	火災	管内全般	1,000
	旭山神社	火災	管内全般	無限
古田	己斐上町区	火災	管内全般	無限
	古田町高須会館	火災	高須区一円	200
	古田町古江会館	火災	古江区一円	200
草津	古田町田方産業組合	火災	田方区一円	200
	草津東町鷺森神社	火災	草津東町	50
	草津東町慈光寺	火災	草津東町	30
	草津國民学校	火災	草津東町	1,000
	草津託児所	火災	草津東町	70
	草津本町西楽寺	火災	草津本町	250
	草津本町教専寺	火災	草津本町	250
	草津本町浄教寺	火災	草津本町	200
	草津本町常盤座	火災	草津本町	250
	草津南町魚市場	火災	草津南町	450
	草津浜町青年会館	火災	草津浜町	200
	草津浜町共同牡蠣処理場	火災	草津浜町	200
	庚午町光明團本部	火災	庚午町一円	200

別紙第三十七號

退避防空壕調

分團名	設置場所	収容 人員	施設者	分團名	設置場所	収容 人員	施設者
大手	大手國民学校々庭	20	大手國民学校	皆実	皆実國民学校々庭	30	皆実國民学校
牛田	牛田國民学校々庭	20	牛田國民学校	舟入	舟入國民学校々庭	20	舟入國民学校
尾長	尾長國民学校々庭	20	尾長國民学校	本川	本川國民学校々庭	20	本川國民学校
宇品	宇品國民学校々庭	20	宇品國民学校	袋町	袋町國民学校々庭	20	袋町國民学校
似島	似島國民学校々庭	20	似島國民学校	大河	大河國民学校々庭	20	大河國民学校
竹屋	竹屋國民学校々庭	20	竹屋國民学校	荒神	荒神國民学校々庭	20	荒神國民学校
幟町	幟町國民学校々庭	20	幟町國民学校	矢賀	矢賀國民学校々庭	20	矢賀國民学校
中島	中島國民学校々庭	20	中島國民学校	青崎	青崎國民学校々庭	20	青崎國民学校
神崎	神崎國民学校々庭	20	神崎國民学校	段原	段原國民学校々庭	20	段原國民学校

大芝	大芝国民学校々庭	20	大芝国民学校	比治山	比治山国民学校々庭	20	比治山国民学校
天満	天満国民学校々庭	20	天満国民学校	楠那	楠那国民学校々庭	20	楠那国民学校
観音	観音国民学校々庭	20	観音国民学校	白島	白島国民学校々庭	20	白島国民学校
福島	福島国民学校々庭	20	福島国民学校	千田	千田国民学校々庭	20	千田国民学校
三篠	三篠国民学校々庭	20	三篠国民学校	廣瀬	廣瀬国民学校々庭	20	廣瀬国民学校
己斐	己斐国民学校々庭	20	己斐国民学校	江波	江波国民学校々庭	20	江波国民学校
草津	草津国民学校々庭	20	草津国民学校	古田	古田国民学校々庭	20	古田国民学校
比治山	第一国民学校々庭	20	第一国民学校	宇品	神田通十五丁目	20	隣保班
皆実	第三国民学校々庭	20	第三国民学校	宇品	神田通千秀園	20	田中喜四郎
白島	白島国民学校裏側	10	白島警防分團	似島	似島町	180	各隣保班
皆実	皆実町三丁目鷹ノ記念碑構内	50	皆実警防分團	大河	昭和高等女学校々庭	20	昭和高等女学校
大手	國泰寺町公会堂構内	20	大手警防分團	大河	小川工場前	40	小川工場
本川	左官町清住寺境内	20	本川警防分團	大河	出汐町 716	43	石井助一
舟入	舟入川口町小公園豫定地	50	舟入警防分團	楠那	日宇那漁業組合市場	15	日宇那漁業組合
江波	江波町自動車ポンプ車庫	50	江波警防分團	皆実	翠町 1490	20	田中秀徳
観音	観音本町市商裏バス停留所前	30	観音警防分團	皆実	翠町 1589	10	上村詫夫
草津	草津国民学校正門前空地	30	草津国民学校	皆実	皆実町二丁目 250	20	隣保班
千田	市立第二工業学校々庭	20	市立第二工業学校	皆実	皆実町二丁目 484	25	隣保班
千田	進徳高等女学校々庭	20	進徳高等女学校	皆実	皆実町二丁目 789	20	隣保班
千田	修道中学校々庭	20	修道中学校	皆実	皆実町二丁目 136	30	隣保班
千田	広島高等学校々庭	20	広島高等学校	皆実	皆実町三丁目官有 31	20	隣保班
千田	千田町三丁目	20	吉村喜作	幟町	広島女学院校庭	20	広島女学院
千田	広島縣立工業学校々庭	20	広島縣立工業学校	尾長	松本商業学校々庭	20	松本商業学校
千田	山中高等女学校々庭	20	山中高等女学校	竹屋	山陽中学校々庭	20	山陽中学校
宇品	広陵中学校々庭	20	広陵中学校	比治山	広島女子商業学校々庭	20	広島女子商業学校
宇品	広島女子専門学校々庭	20	広島女子専門学校	段原	比治山本町鈴川寛一裏	20	縣設置
段原	比治山公園遊技場北東端	60	段原東浦町十五、十六ノ隣組ニテ設置	観音	西高等女学校々庭	20	西高等女学校
段原	段原新町今田金ペン工場内	10	今田工場	三篠	崇徳中学校々庭	20	崇徳中学校
段原	段原東浦町岡村方裏	5	段原東浦町十七、十八ノ隣組ニテ設置	三篠	安藝高等女学校々庭	20	安藝高等女学校
段原	的場町三木方裏	5	的場町渡辺請負業	江波	縣立商業学校々庭	20	縣立商業学校
大手	縣立第一中学校々庭	20	縣立第一中学校	袋町	縣立高等女学校々庭	20	縣立高等女学校
観音	縣立第二中学校々庭	20	縣立第二中学校	舟入	市立高等女学校々庭	20	市立高等女学校
観音	市立商業学校々庭	20	市立商業学校	廣瀬	広島別院境内	50	寺町々内会

別紙第三十八號

工作班ヲ編成セシムヘキ事業者表（昭和十五年十一月末現在）

事業者別	名稱	所在地	代表者氏名
電気事業	広島電気株式会社	広島市小町三三	鈴川 寛一
電気事業	大崎電気株式会社	広島市昭和町	山口 吾一
軌道	広島瓦斯電軌株式会社	広島市千田町	同人
瓦斯事業	広島瓦斯電軌株式会社	広島市千田町	同人

別紙第三十九號ノ一

米穀類配給所一覧表

分團名	配給所名	所在地	電話番号	配給ニ従事スヘキ責任者氏名
青崎分團	向洋配給所	仁保町青崎 175-1	②呼出 0975	沖田 峯治
仁保分團	湊崎配給所	仁保町伏蟬 316	②呼出 2743	櫻井 律太郎
大河分團	大河配給所	仁保町大河 1885	② 2444	浜西 健一
尾長分團	尾長配給所	尾長町 299	② 5079	角谷 保吉
尾長分團	愛宕配給所	愛宕	② 3243	三升 益太郎
比治山分團	大洲配給所	大洲町 135	②呼出 4658	久保田 唯夫
荒神分團	荒神配給所	西蟹屋町 222	② 2246	大西 末登
荒神分團	松原配給所	松原町 642	②呼出 6930	田中 政吉
段原分團	京橋配給所	京橋町 89	② 1331	山田 栄蔵
段原分團	段原配給所	段原大畑町 26	② 2155	加納 利一
比治山分團	日ノ出配給所	段原日ノ出町	②呼出 1216	神明 五郎
段原分團	東段原配給所	段原末広町	② 5785	増原 順太郎
段原分團	柳橋配給所	土手町	② 4837	楠田 勇夫
段原分團	比治山配給所	金屋町 34	② 4541	松村 清一
皆実分團	下皆実町配給所	皆実町三丁目 2011	② 3144	田村 才四郎
皆実分團	上皆実町配給所	皆実町被服廠通	② 4659	中祖 賛次郎
宇品分團	宇品上組配給所	宇品町御幸通十一丁目	② 6585	坂本 孫義
宇品分團	宇品中部配給所	宇品町御幸通五丁目	② 6963	村井 又四郎
宇品分團	宇品海岸通り配給所	宇品町 328	② 1473	國廣 積
宇品分團	向宇品配給所	元宇品町	②呼出 1735	大須賀 勇二
竹屋分團	薬研掘配給所	薬研掘町 34	② 3737	坪谷 多作

竹屋分團	平塚配給所	平塚町 338-1	② 2414	小谷 彌市
幟町分團	鉄砲町配給所	鉄砲町 16	② 5087	八木 午吾
幟町分團	鶴見橋配給所	平塚町 52	② 1146	平松 正義
竹屋分團	下流川町配給所	竹屋町	② 5845	木下 三郎
幟町分團	幟町配給所	幟町 14	② 7874	平岩 清
竹屋分團	昭和下組配給所	昭和町 562	② 5270	横山 喜一
竹屋分團	昭和上組配給所	昭和町 559	② 5239	田原 稔
竹屋分團	竹屋橋配給所	竹屋町 38	② 4772	景山 静人
大手分團	富士見橋配給所	雑魚場町 273	② 1653	木谷 英荘
袋町分團	新川場配給所	新川場町 273	② 3029	小畑 巖
袋町分團	猿楽町配給所	猿楽町	② 6047	木村 松之助
袋町分團	尾道町配給所	尾道町 90	② 4926	梶川 寅一
大手分團	大手町八丁目配給所	大手町八丁目 65	② 2840	丸山 滝蔵
千田分團	千田町配給所	千田町二丁目	② 3141	上田 正純
大手分團	鷹野橋配給所	大手町九丁目	② 2065	古田 徳太郎
中島分團	中島配給所	中島新町 99	② 1627	木村 律
中島分團	水主町配給所	水主町 518	② 4660	朝田 良一
江波分團	江波配給所	江波町	③呼出 3640	清見 庄一
舟入分團	舟入川口町配給所	舟入川口町	③ 1291	勝矢 開治
神崎分團	神崎西部配給所	舟入本町 208	③ 0918	上岡 勇人
神崎分團	神崎北部配給所	河原町 72	③ 1826	新見 米司
神崎分團	神崎中部配給所	河原町 132-8	③ 1333	光廣 三郎
神崎分團	神崎東部配給所	河原町 194	③ 1124	藤居 豊三
観音分團	観音東部配給所	東観音町二丁目 181	③呼出 1174	古田 三津蔵
観音分團	西観音配給所	西観音町二丁目	③ 3775	橋田 好之
観音分團	天満配給所	西観音町一丁目	③ 2511	正岡 登
天満分團	上天満配給所	上天満町	③ 2424	大本 壽一郎
三篠分團	中広町配給所	中広町		山本 繁
本川分團	本川第二配給所	塚本町	③ 1968	渡辺 戎三
天満分團	新市配給所	西大工町	③ 2050	中川 友吉
広瀬分團	広瀬第二配給所	広瀬元町	③ 2960	刈田 悟
広瀬分團	広瀬第一配給所	広瀬北町	③ 1117	西原 源一
広瀬分團	本川北組配給所	西引御堂町	③ 2695	西浦 敏郎
白島分團	西白島配給所	西白島町 33	② 0741	保田 廣市
白島分團	東白島配給所	東白島町官有 46	② 3464	石原 友一
牛田分團	上牛田配給所	牛田町 1269	② 3065	高野 久雄
牛田分團	下牛田配給所	牛田南町	② 4017	橋本 一二見
三篠分團	横川配給所	横川町二丁目 1025	③ 0524	武分 豊
三篠分團	三篠第一配給所	三篠本町二丁目 1222-1	③ 2655	黒田 定四郎
福島分團	下福島配給所	福島町 445-2	③ 2314	原 詳次郎
福島分團	上福島配給所	福島町 81-1	③ 2594	吉田 徹郎
己斐分團	己斐配給所	己斐町 227	③ 0772	竹本 常吉
古田分團	高須配給所	古田町高須 234		品川 君雄
草津分團	草津配給所	草津浜町 784	草津 1	諏訪 勲造
似島分團	似島配給所	似島		清見 ヨシ子

別紙第三十九號ノ二

寝具ノ種類数量所在地調査表 〔※印は本誌中「分團配給部員」〕

寝具ノ種類及数量(枚)			所在地	氏 名	配給 従事 者	寝具ノ種類及数量(枚)			所在地	氏 名	配給 従事 者
掛布団 ノ数量	敷布団 ノ数量	其他 数量				掛布団 ノ数量	敷布団 ノ数量	其他 数量			
32	16	—	西地方町	土井 ハツノ	※	45	40	—	東魚屋町	佐々木 綾子	※
24	12	—	河原町	谷原 静太郎	※	100	50	—	紙屋町	元木 クシ	※
30	20	—	新川場町	田中 助太郎	※	60	30	—	紙屋町	村田 ツネ	※
60	35	—	新川場町	上野 トク	※	30	30	—	紙屋町	徳橋 ナツ	※
50	40	—	立町	松浦 ツル	※	50	30	—	紙屋町	佐伯 トク	※
25	25	—	立町	渡辺 サツヨ	※	30	17	—	研屋町	草田 フサミ	※
40	30	—	立町	和泉 ミチヨ	※	80	43	—	紙屋町	檜山 市蔵	※
130	65	—	立町	平岡 サカエ	※	45	30	—	大手町一丁目	友芳 清一	※
60	25	—	立町	原田 シゲ子	※	270	90	—	大手町一丁目	松本 茂子	※
40	20	—	東魚屋町	今井 ヒサ	※	60	10	—	鳥屋町	吉野 サダ	※
120	70	—	東魚屋町	高橋 キミエ	※	70	37	—	大手町一丁目	阿部 シズエ	※
90	40	—	東魚屋町	岡村 定	※	40	30	—	猿楽町	杉浦 タマヨ	※
45	40	—	東魚屋町	末本 アキヨ	※	25	16	—	猿楽町	檜山 セキ	※
80	50	—	東魚屋町	木原辰右衛門	※	65	40	—	猿楽町	秋島 春三	※
35	25	—	東魚屋町	井原 ハル子	※	20	10	—	猿楽町	小川 チヨノ	※
115	115	—	鳥屋町	寺田 武蔵	※	150	300	—	鉄砲屋町	田中 定吉	※
100	70	—	鳥屋町	泉 サト	※	20	40	—	播磨屋町	平石 トラヨ	※

80	80	—	鳥屋町	中近 茂	※	90	50	—	猫屋町	林 アサノ	※
28	28	—	鳥屋町	武林 テツノ	※	100	90	—	大手町三丁目	新田 トヨコ	※
33	36	—	鳥屋町	花野 シゲ	※	47	40	—	大手町三丁目	杉原 ヤス	※
60	50	—	中町	中山 キヨ	※	60	40	—	大手町三丁目	沖田 光太	※
60	40	—	中町	坂口 ミツヨ	※	105	35	—	大手町三丁目	片岡 ハル	※
120	80	—	中町	田村 博	※	80	40	—	塩屋町	森 マツ子	※
60	30	—	鉄砲屋町	水野 トシノ	※	10	15	—	塩屋町	谷 ヒデ子	※
70	40	—	鉄砲屋町	平井七右衛門	※	170	150	—	大手町五丁目	長屋 範一	※
150	150	—	鉄砲屋町	山本 富蔵	※	110	90	—	大手町五丁目	矢野 ハマヨ	※
200	100	—	鉄砲屋町	山縣 リカ	※	80	40	—	大手町五丁目	中村 千代子	※
80	120	—	鉄砲屋町	後藤 良吉	※	80	50	—	大手町五丁目	浜松 コハル	※
120	60	—	鉄砲屋町	田中 ハルミ	※	150	80	—	大手町五丁目	大谷 タツ	※
21	11	—	鉄砲屋町	内富 ヤスエ	※	240	200	—	大手町五丁目	山本 イト	※
170	75	—	鉄砲屋町	馬場 秀夫	※	80	50	—	大手町五丁目	野田 クマ	※
50	30	—	鉄砲屋町	木村 マツミ	※	100	60	—	大手町四丁目	宮本 スエノ	※
300	200	—	鉄砲屋町	平井 新七	※	100	70	—	大手町四丁目	飯田 クマ	※
80	70	—	大手町四丁目	白川 ノブ	※	40	30	—	鍛冶屋町	伊井賀田ハヤ	※
40	30	—	尾道町	有馬 柳子	※	60	30	—	鍛冶屋町	惣田 ミネ	※
80	40	—	尾道町	松田 イチヨ	※	70	40	—	鍛冶屋町	白須興 茂作	※
20	20	—	尾道町	大島 リウ	※	80	50	—	鍛冶屋町	兒玉 貞夫	※
40	20	—	尾道町	河下 キクノ	※	160	60	—	鍛冶屋町	橋本 一	※
20	10	—	西観音町二丁目	石田 ワカヨ	※	80	50	—	鍛冶屋町	大倉 ハヤノ	※
20	10	毛布 5	西観音町二丁目	中島 千太郎	※	80	40	—	鍛冶屋町	川本 キヨコ	※
150	8	—	西観音町二丁目	島村 繁雄	※	60	30	—	鍛冶屋町	松田 ハヤコ	※
20	10	—	西観音町二丁目	亀田喜和太郎	※	80	50	—	鍛冶屋町	夜陣 トモ	※
26	13	—	天満町	白井 カツエ	※	50	40	—	塚本町	吉本庄右衛門	※
20	10	—	西大工町	中山 ツネ	※	50	50	—	塚本町	吉崎 政一	※
20	10	—	西大工町	藤田 笹一	※	25	20	—	塚本町	木村 アサ	※
10	8	—	西天満町	大隈 イト	※	90	40	—	油屋町	浅枝 衛壮	※
30	15	—	東観音町一丁目	角 一寛	※	100	100	—	猫屋町	石岡 通人	※
10	5	—	東観音町一丁目	友清 シン	※	17	17	—	猫屋町	川本 ヨシコ	※
14	7	—	堺町二丁目	西半 イセ	※	50	30	—	猫屋町	平本 ヒサ	※
60	30	—	新市町	江藤 幸一	※	100	40	—	猫屋町	豊用寺 登	※
19	24	—	新市町	龍川 正一	※	40	30	—	猫屋町	勝本 ツイソ	※
50	30	—	猫屋町	山田 イトノ	※	5	5	—	猫屋町	佐伯 猪三郎	※
50	50	—	猫屋町	三次 マサ	※	30	15	毛布 10	寺町	宮原 長次郎	※
50	50	—	猫屋町	坂本 ハル	※	15	10	—	寺町	山下 重代	※
30	20	—	猫屋町	門田 豊松	※	35	15	—	寺町	堀田 ツナ	※
200	200	—	猫屋町	高橋 十兵衛	※	4	4	—	三篠本町一丁目	三輪 モン	※
80	80	—	猫屋町	片山 コメ	※	40	20	—	三瀧町	松本 吉平	※
60	40	—	猫屋町	岩上 朝之助	※	67	44	—	横川町	岩崎 栄吉	※
100	50	—	猫屋町	伊藤 キシ	※	60	50	—	横川町	岩崎 鶴松	※
150	80	—	猫屋町	郷田 金太	※	7	5	—	横川町	落合 タツコ	※
50	30	—	猫屋町	田村 サヤ	※	43	20	—	横川町	岡田 正人	※
30	20	—	鷹匠町	加計 直人	※	40	25	—	横川町	小谷 ミサヲ	※
50	40	—	鷹匠町	瀧廣 清	※	30	15	—	横川町	泉 カズヨ	※
30	20	—	鷹匠町	調子 フミエ	※	70	30	—	横川町二丁目	小沢 俊一	※
70	50	—	鷹匠町	兒島 キョフ	※	26	12	—	横川町二丁目	岩崎 マツ	※
100	50	—	鷹匠町	原田 清蔵	※	60	25	—	横川町二丁目	井上 ツマ	※
20	10	—	塚本町	宮本 リヨ	※	5	5	—	横川町二丁目	中野 ミネ	※
20	10	—	鍛冶屋町	高橋 廣一	※	40	40	—	横川町一丁目	兒玉 タツエ	※
10	5	—	鷹匠町	向井 ハヤ	※	16	16	—	横川町一丁目	河内 玉市	※
25	13	—	横川町一丁目	宮川 タツエ	※	40	25	—	己斐町	円石 ヤオ	※
30	25	—	楠木町二丁目	住吉 綱一	※	20	10	—	己斐町	弘田 ハヤ子	※
22	10	—	楠木町一丁目	川口 ハル	※	20	13	—	己斐町	藤田 貞一	※
30	30	—	楠木町一丁目	奥野 ハル	※	16	14	毛布 2	草津本町	森本 マス	※
4	2	—	楠木町二丁目	松岡 柳一	※	50	40	—	庚午町	住田 都三	※
5	10	—	楠木町三丁目	中野 キセ	※	22	13	—	福島町	渡辺 ミネ子	※
30	14	—	大芝町	藤田 熊吉	※	35	20	—	福島町	塩田 ツイ	※
16	10	—	己斐町	浜中 年代	※	30	25	—	福島町	堤 チョ	※
15	10	—	己斐町	木下 スミ	※	15	50	毛布 2	上天満町	上手 幾太郎	※
24	12	—	己斐町	田中 三郎	※	15	10	—	上天満町	清水 満郎	※
28	15	—	己斐町	玉重 ミヤ	※	40	25	—	小網町	坂口 ナカ	※
20	10	—	己斐町	平木 タツ	※	10	5	—	小網町	吉川 勇	※
30	16	—	己斐町	岩崎 良雄	※	10	5	—	小網町	新納 賢吉	※
14	7	—	己斐町	若林 ハル	※	10	—	—	小網町	勝野 アイ	※
28	14	—	己斐町	村上 ノブ	※	15	15	—	小網町	八木 イワ	※
34	17	—	己斐町	兼品 耕造	※	20	15	—	西新町	平本 ヨシ子	※

20	10	—	己斐町	住田 トミノ	※	8	8	—	小網町	川崎 ヨシ	※
20	10	—	己斐町	大泉 フジ	※	11	11	—	小網町	市川 治郎一	※
41	20	—	観音本町	川崎 シン	※	80	40	—	天神町	対島 蔵一	※
40	25	—	観音本町	川崎 イネ	※	20	20	—	水主町	住田 昌枝	※
86	80	—	中島本町	堀 マチノ	※	15	10	—	江波町	野間 タケノ	※
45	31	—	中島本町	川野 上兵八	※	10	5	—	江波町	村上 シナ	※
35	25	—	中島本町	川本 アヤメ	※	25	20	—	江波町	香口 カト	※
74	50	—	中島本町	前田 イチヨ	※	170	80	—	大手町六丁目	綿谷 イソ	※
81	41	—	元柳町	村上 正明	※	200	200	—	大手町六丁目	渡辺 キヨコ	※
65	52	—	元柳町	佐々木 コメ	※	40	20	—	大手町八丁目	藤井 シゲノ	※
82	58	—	元柳町	高橋 サト	※	30	15	—	大手町八丁目	片島 チヨ	※
80	50	—	元柳町	田辺 昇作	※	35	27	—	大手町八丁目	鳴川 数太郎	※
60	30	—	中島新町	恵川 保太郎	※	100	35	—	大手町九丁目	小松 ハツノ	※
20	15	—	中島新町	曾我部 シン	※	60	50	—	大手町九丁目	土屋 健一	※
3	6	—	中島新町	遠藤 アテノ	※	25	15	—	國泰寺町	宇多 静夫	※
30	10	—	水主町	小林 幾照恵	※	6	6	—	國泰寺町	久保 ミツヨ	※
60	30	—	水主町	原 ヨシノ	※	12	6	—	國泰寺町	栗原 ヒサ子	※
60	30	—	水主町	王島 春枝	※	50	30	—	雑魚場町	上田 リウ	※
100	80	—	天神町	今村 吉蔵	※	100	35	—	雑魚場町	建畠 シズ	※
510	350	—	天神町	天城 慶一	※	100	100	—	雑魚場町	高木 マスエ	※
150	80	—	古田町	福原 英巖	※	55	22	—	松原町	野村 ハルヨ	※
22	11	—	舟入本町	木村 ナス	※	45	20	—	松原町	小迫 シズヨ	※
計 12,614	8,415	19				70	30	—	松原町	石原 栄太郎	※
30	15	—	竹屋町	下郷 熊一	※	16	10	—	松原町	中本 熊登	※
25	15	—	平塚町	緒本 ユク	※	240	155	—	松原町	沖田 幾太郎	※
38	14	—	鶴見町	田中 正一	※	50	30	—	松原町	中本 初代	※
26	13	—	平塚町	福島 リン	※	62	34	—	松原町	西谷 豊	※
12	24	—	平塚町	吉村 タマヨ	※	100	58	—	松原町	小林 三蔵	※
120	40	—	平塚町	梅原蔵左衛門	※	145	105	—	松原町	谷本 若佐	※
100	60	—	東白島町	中山 ヨシ	※	130	90	—	松原町	沖田 熊四郎	※
73	50	—	松原町	岩渕 文治	※	40	30	—	松原町	沖田 漆志	※
80	60	—	松原町	大平 チカ	※	25	25	—	松原町	中道 ツネ	※
80	75	—	松原町	岡原 澄人	※	195	110	—	松原町	土屋 タマ	※
160	70	—	松原町	沖田 國代	※	24	12	—	松原町	吉田 岸三郎	※
120	80	—	松原町	沖田 辰治	※	40	30	—	松原町	原田 唯夫	※
36	18	—	松原町	瀬越 セイ	※	48	30	—	松原町	倉本 滝蔵	※
40	20	—	松原町	加藤 リキ	※	40	20	—	松原町	川島 トラ	※
60	60	—	松原町	川島 健造	※	35	20	—	松原町	石本 タセ	※
60	30	—	猿猴橋町	大戸 チェ	※	48	35	—	東胡町	松永 ハギノ	※
42	18	—	猿猴橋町	原田 イトヨ	※	75	27	—	銀山町	南羽 智三登	※
12	8	—	猿猴橋町	原田 マス	※	32	27	—	銀山町	西谷 ツル	※
75	45	—	猿猴橋町	佐々木 障子	※	55	25	—	東胡町	奥田 トシ子	※
28	14	—	猿猴橋町	宮田 正一	※	140	32	蚊帳 166	東胡町	阿部 利之助	※
16	10	—	大須賀町	若木 タシ	※	174	27	毛布 36 蚊帳 160	東胡町	田原 十助	※
59	55	—	大須賀町	野田 和七郎	※	35	15	—	堀川町	宗像 マツ子	※
20	15	—	台屋町	野上 セキ	※	80	90	蚊帳 10	堀川町	宮本 シュ	※
40	20	—	京橋町	木村 仁助	※	100	100	蚊帳 8	堀川町	右近 角一	※
70	25	—	京橋町	下山 貞次	※	80	37	—	堀川町	先小山 静夫	※
24	15	—	金屋町	竹原 松治	※	260	116	—	堀川町	芦原 ヨシ	※
34	17	—	京橋町	三上 コマエ	※	60	35	蚊帳 9	堀川町	吉津 アヤノ	※
45	18	—	京橋町	三木 ヤヲ	※	20	20	—	堀川町	奥村 トモ	※
41	22	—	稲荷町	原田 サヨ	※	32	18	蚊帳 4	堀川町	坂本 ベソ	※
64	31	—	稲荷町	國森 マサ	※	75	32	蚊帳 7	堀川町	小早川シナヨ	※
191	22	—	東胡町	加藤 兵衛	※	133	30	蚊帳 149	胡町	川野 弥三郎	※
290	160	蚊帳 20	山口町	古川 史郎	※	40	37	蚊帳 51	胡町	井原 盛吉	※
43	35	—	斜屋町	掟田 マツヨ	※	32	16	—	下流川町	山田 タカ	※
40	20	—	下流川町	大室 フク	※	65	26	蚊帳 6	鉄砲町	川越 研三	※
75	75	—	下流川町	今井 安太郎	※	25	12	—	幟町	作田 重子	※
78	35	—	三川町	今村 ハルエ	※	25	12	—	幟町	南 タマエ	※
17	17	—	三川町	長門 市助	※	30	10	蚊帳 40	橋本町	川手 瀬市	※
30	30	毛布 4 蚊帳 4	三川町	迎林 フサヨ	※	30	13	—	石見屋町	石井 ハヤ	※
26	15	—	三川町	藤原 サツノ	※	22	10	—	幟町	門田 平一郎	※
33	30	—	三川町	吉田 マツエ	※	12	12	—	上流川町	杉 乙氏	※
60	40	蚊帳 5	三川町	香西 輝一	※	40	20	—	幟町	浜田 ヨシ	※
170	100	毛布 30	三川町	天城忠右衛門	※	計					

		蚊帳 6				6, 078	3, 391	684			
50	25	—	三川町	水田 貞一	※	50	50	—	宇品町	大和紡績広島 人絹工場	※
120	70	蚊帳 4	三川町	吉野 正造	※	3	2	—	皆実町三丁目	中川 正一	※
45	41	蚊帳 8	八丁堀	福原 ミサヲ	※	3	2	—	翠町	森山 信一	※
40	30	毛布 4 蚊帳 7	八丁堀	大月 節子	※	計 53	54				
60	30	蚊帳 8	鉄砲町	泉尾 正一	※						

別紙第三十九號ノ二

配給ノ用ニ供スベキ車輛及所有者調

車輛ノ種類及名称	車輛 番号	積載 屯数	所有者	車輛ノ種類及名称	車輛 番号	積載 屯数	所有者
貨物自動車シボレー	119	1, 500	広島市役所	貨物自動車インター	2930	2, 500	広島市役所
貨物自動車新フォード	857	1, 500	広島市役所	貨物自動車フォード	1834	1, 500	広島市役所
貨物自動車ベツトフォード	1285	1, 500	広島市役所	貨物自動車フォード	993	1, 500	広島市役所
貨物自動車新フォード	274	1, 500	広島市役所	貨物自動車フォード	626	1, 500	広島市役所
貨物自動車新フォード	2450	1, 500	広島市役所	貨物自動車オールドモービル	356	2, 100	広島市役所
貨物自動車新フォード	1433	1, 500	広島市役所	貨物自動車オールドモービル	139	2, 000	広島市役所
貨物自動車シボレー	131	2, 000	広島市役所	貨物自動車ニッサン	3341	2, 100	広島市役所

別紙第四十號

罹災者及救護者ニ配給スヘキ食事炊事能力調

分團 名	場所名	一回可 能限度	所在責任者	分團 名	場所名	一回可 能限度	所在責任者
牛田	牛田町丹土区魚瀬仕出店	100	瀬川 巖	荒神	松原町吉川旅館	100	沖田 光太
牛田	牛田町本町区田村仕出店	100	田村 雄	荒神	松原町マルイチ旅館	100	沖田幾太郎
牛田	牛田町本町区安楽寺	100	登世岡界雄	荒神	松原町土屋旅館	100	土屋 タマ
牛田	牛田町南区広島教員養成所寄宿舎	100	松江 利作	荒神	西蟹屋町荒神国民学校栄養食調理所	300	前田 暁
荒神	松原町羽田辨當部	2, 000	川崎栄次郎	矢賀	矢賀町森安飲料店	200	森安 俊夫
荒神	松原町広島館(旅館)	100	沖田 光太	矢賀	矢賀町石津飲料店	50	石津徳太郎
矢賀	矢賀町国民学校	50	林 五一	幟町	堀川町千松旅館支店	50	宗像 マツ
比治山	大洲町建具学校	80	吉田 幸一	幟町	堀川町小早川旅館	50	小早川シチヨ
比治山	大洲町	50	馬場 為八	幟町	堀川町奥村旅館	50	奥村 モト
比治山	大洲町藤川鉄工所	100	藤川 長一	幟町	堀川町宮本旅館	70	宮本 修
比治山	南段原二丁目	400	内田 薫	幟町	堀川町右近旅館	100	右近 角一
比治山	南段原二丁目	50	藤田 宣彦	幟町	堀川町田中屋旅館	70	先小山静夫
比治山	段原中町上組	50	小野 見三	幟町	堀川町山佐屋旅館	50	芦原 ヨシ
比治山	段原中町上組	50	稲野浩二郎	幟町	下柳町大石旅館	70	大石 武彦
比治山	南蟹屋町九一食堂	50	物部 セイ	幟町	下柳町あたりや旅館	60	山本 友吉
比治山	南蟹屋町中村屋	50	中村 丹六	幟町	下柳町防府館	100	加富田倉吉
比治山	南蟹屋町広島製砥所	100	亀田 多吉	幟町	東胡町加藤旅館	200	加藤 リエ
比治山	東雲町南組	50	森本兵之助	幟町	山口町中國旅館	100	古川 史郎
皆実	皆実町二丁目片山旅館	150	片山善太郎	幟町	八丁堀京口旅館	100	福原ミサオ
白島	東白島町とらや旅館	50	中山 寅吉	幟町	鉄砲町川越旅館	60	川越ナミ子
白島	白島東中町安田高女寄宿舎	100	安田 リウ	幟町	東胡町大竹屋	100	大島 和吉
白島	白島中町簿記学校寄宿舎	50	廣兼 吾一	幟町	鉄砲町水月	50	内富 良一
幟町	堀川町吉津旅館	100	吉津アヤノ	幟町	鉄砲町大竹屋(四〇番地)	50	大島 和吉
幟町	堀川町博多屋旅館	50	坂本 ベン	幟町	斜屋町大衆食堂	80	手島 四郎
幟町	鉄橋楼(堀川町)	100	渡辺 政一	竹屋	三川町旅館	50	今村ハルエ
幟町	胡町仙波屋	100	仙波 雅光	竹屋	三川町料理業	50	常川 タザ
幟町	胡町名井屋本店	50	名井次三郎	竹屋	竹屋町飲食業	50	島本ミツヨ
幟町	堀川町スシホール	100	沖田 善行	竹屋	竹屋町旅館	60	下郷 熊一
幟町	堀川町キリン食堂	600	唐須 義雄	竹屋	新天地食堂	130	森 敬三
幟町	堀川町汽車食堂	50	栗栖 敬三	竹屋	新天地食堂	50	山根ミチ子
幟町	堀川町イロハ食堂	70	山田 聖一	竹屋	新天地食堂	50	横溝ミサオ
幟町	銀山町富士食堂	100	金澤シヨ子	竹屋	新天地食堂	70	栗栖 敬三
幟町	山口町敷島食堂	150	大浜 タキ	竹屋	薬研堀食堂	55	田中 シナ
幟町	八丁堀高木しるこ店	70	柳原ソタヨ	竹屋	薬研堀カフェー	60	挽田 三郎
幟町	八丁堀株式会社福屋食堂	400	岡崎 武雄	竹屋	薬研堀料理業	70	高島 庄吉
幟町	鉄砲町広島食堂	60	川口 リキ	竹屋	薬研堀料理業	100	植田 萬蔵
幟町	鉄砲町バカ盛食堂	400	田中 猛脩	竹屋	東新天地飲料店	65	河原崎又治郎
幟町	鉄砲町田村食堂	500	高橋 要	竹屋	下流川町食堂	55	南 健一
幟町	上流川町広島女学院専門学校寄宿舎	50	日野原善輔	竹屋	下流川町食堂	100	岡本 照夫
幟町	上流川町高等文学部寄宿舎	50	日野原善輔	竹屋	下流川町食堂	80	徳永 信男
竹屋	三川町旅館	90	吉野 政造	竹屋	下流川町食堂	80	廣兼チズヨ
竹屋	三川町旅館	50	天城忠右衛門	竹屋	下流川町料理業	80	山根 亀代
竹屋	下流川町飲食業	50	船本治次郎	大手	雑魚場町旅館	50	上田 リウ

竹屋	薬研掘旅館	60	伊藤富士子	大手	雑魚場町旅館	50	山口 貞美
竹屋	宝町竹屋国民学校	150	香川 菊三	大手	雑魚場町魚幾	150	栗川 小幾
竹屋	宝町飲食業	50	折宮 友助	大手	雑魚場町三國屋旅館	200	建畠 静
竹屋	昭和町飲食業	50	中原 ヨシ	大手	雑魚場町廣島縣教育会館	200	廣島縣教育会館
竹屋	昭和町飲食業	50	山口 常人	廣瀬	寺町廣島別院	200	別院輪番
竹屋	鶴見町旅館	50	生駒ヒデヨ	廣瀬	寺町光福寺	50	堀住職
竹屋	鶴見町飲食業	50	田中 正一	廣瀬	寺町報専坊	50	富樫住職
大手	大手町八丁目さなゑ旅館	50	土屋 健一	本川	鍛冶屋町川本旅館	70	川本 富造
大手	大手町八丁目藤井旅館	50	藤井シゲノ	本川	鍛冶屋町本川屋旅館	70	楠本 一
大手	大手町八丁目仕出業	100	松谷寅治郎	本川	鍛冶屋町伊賀井田旅館	50	伊賀井田ハマ
大手	大手町八丁目飲食業	50	大星セキオ	本川	鍛冶屋町夜陣旅館	50	夜陣 トモ
大手	大手町八丁目廣島鉄工所	50	河野 佐一	本川	鍛冶屋町高橋飲料店	80	高橋 寛一
大手	大手町八丁目ますみや旅館	100	渡辺 清子	本川	鍛冶屋町丸一飲料店	60	増原 タカ
大手	大手町八丁目亀屋旅館	50	松村 マツ	本川	塚本町廣濱旅館	50	吉崎 政一
大手	大手町八丁目鷹野橋旅館	50	先小山サハミ	本川	塚本町まるか旅館	50	白川 清一
大手	雑魚場町芳乃屋旅館	50	高木 益枝	本川	塚本町塚本食堂	100	船越 サメ
大手	雑魚場町八つて屋旅館	50	佐伯八重子	本川	塚本町岩三旅館	50	木村 勘一
本川	塚本町明教寺	70	新田 節子	本川	鷹匠町西村呉服店	80	西村平次郎
本川	塚本町郷田旅館	50	櫛田金兵衛	本川	鷹匠町池田鉄工所	80	池田 友吉
本川	塚本町教傳寺	50	尼子 爾郎	本川	空鞘町二宮すし店	160	二宮 謙蔵
本川	塚本町高橋旅館	50	高橋十郎兵衛	神崎	小網町南組汽車食堂	50	北山 光儀
本川	塚本町教西寺	50	武田住職	神崎	舟入町羽田別荘	1,000	羽田謙次郎
本川	塚本町石岡旅館	50	石岡 道人	舟入	舟入川口町日本工業株式会社	50	重住 孫一
本川	堺町三宅商事本店	50	三宅幸太郎	舟入	舟入川口町桐原容器株式会社	100	桐原秀太郎
本川	左官町高木しるこ店	250	高木松次郎	舟入	舟入川口町砲彈ポンプ株式会社	50	佐伯治九郎
本川	左官町敷島食堂	200	梅津 義頭	三篠	三篠本町一丁目光隆寺	150	三篠婦人会 長増田シナ
本川	左官町吉野食堂	250	吉野 綾子	三篠	三篠三丁目西導寺	150	三篠大芝 吉田マサ
本川	左官町喜久屋食堂	50	西本 正治	己斐	己斐本町区敷島食堂	50	影廣 義雄
本川	左官町左官町食堂	50	藤谷 久代	己斐	己斐中町山口仕出業	50	山口 正一
本川	左官町天下鉄工所	150	大下 吾一	段原	台屋町二葉旅館	50	野上 鶴松
本川	左官町妙頂寺	200	頂 岳日	段原	京橋町吉本屋	800	吉村 恒吉
本川	左官町本覺寺	90	岳住職	段原	京橋町デカ盛食堂	500	石川 福治
本川	左官町眞名志鉄工所	80	眞名志光太郎	段原	的場町あつさりや食堂	50	石田 勉
本川	鷹匠町清住寺	70	耕田 八洲	段原	段原末廣町煮豆商	50	唐津松五郎
本川	鷹匠町花屋旅館	70	兒高キヨノ	段原	桐木町比治山神社境内	50	桐 喜 町 内 会々長
草津	草津南町高坂料理店	300	高坂 儀滋	天満	榎町中村壽司店	40	中村
草津	草津東町草津国民学校	400	原田 智	天満	榎町植松壽司店	80	植松
草津	草津浜町塩亀仕出店	300	塩本 亀槌	中島	中島本町相生旅館	50	前田チヨノ
宇品	宇品海岸通東部	100	山縣 浅吉	中島	中島本町吉川旅館	50	吉川 末太
青崎	仁保町青崎下宿業	100	堀川 節造	中島	中島本町福亀旅館	100	福島亀次郎
青崎	仁保町青崎仕出業	50	千北 忠義	中島	中島本町慈仙寺	100	梶山 仙令
青崎	仁保町	50	山本 一	中島	中島本町どん亀旅館	50	大林 敦夫
青崎	仁保町仕出兼旅館	60	廣畑 タネ	中島	中島本町櫻湯旅館	50	川野上平八
青崎	仁保町塩浜館	50	谷本 繁一	中島	中島本町加川旅館	50	堀 政子
天満	榎町	250	清水 文雄	中島	中島本町大松旅館	50	吉田 久吉
天満	西大工町信濃罐詰工場	750	信濃罐詰工場	中島	中島本町極楽旅館	100	竹縄 正治
天満	榎町新見罐詰工場	750	新見罐詰工場	中島	天神町吉久亭	50	対馬 歳江
天満	上天満町楠原罐詰工場	200	楠原罐詰工場	中島	天神町藤林	50	藤永 太郎
天満	上天満町河本罐詰工場	100	河本罐詰工場	中島	天神町天城旅館	100	天城 慶一
天満	上天満町松尾罐詰工場	100	松尾罐詰工場	中島	木材町漁福	50	渋谷虎次郎
天満	上天満町畜産罐詰工場	600	畜産罐詰工場	中島	天神町清岸寺	100	藤井 興隆
天満	上天満町天満国民学校	50	天満 警防分団長	中島	天神町教念寺	80	宮木 思雲
天満	榎町湯浅飲食店	60	湯浅	中島	材木町	50	山香 嘉夫
中島	材木町	100	渡辺 凜太	中島	中島新町佐伯製菓	100	佐伯 福松
中島	材木町	50	山登徳太郎	中島	中島新町三津石酒場	50	三津石ナミ
中島	材木町善福寺	30	鈴木 正道	中島	中島新町本川旅館	50	恵川保太郎
中島	材木町妙法寺	80	中島 龍温	中島	上水主町五島旅館	50	長谷 彦一
中島	材木町	50	藤茂 順一	中島	上水主町	50	横田 雅一
中島	材木町誓願寺	100	成田 順光	中島	上水主町原旅館	50	原 ヨシノ
中島	材木町安楽院	50	大西佐賀雄	中島	上水主町小林旅館	50	小林 十六
中島	材木町魚秀	80	矢川 秀一	中島	中水主町中島警防分団本部	200	朝田 良一
中島	元柳町田辺旅館	50	田辺 昇作	中島	中水主町住吉亭	70	新家幸太郎
中島	元柳町共栄旅館	50	高橋条太郎	中島	中水主町キクヤ	50	小川 清

中島	元柳町村上旅館	100	宮原 惣吉	中島	下水主町小原製菓	50	小原 米藏
中島	元柳町	50	成宮惣五郎	中島	吉島本町日本精機株式会社	250	食堂係
中島	元柳町森永	50	森永製菓山根販売会社	中島	吉島本町寄宿舍	250	食堂係
中島	木挽町西福院	50	長森 勝恵	中島	吉島本町塗装会社	50	食堂係
中島	木挽町福壽院	100	田村 公優	中島	中水主町魚長	50	佐久間豊次郎
中島	木挽町持明院	100	光森 公龍	中島	中水主町	50	宮本 貫二
中島	中島新町西應寺	50	平秀 哲	千田	東千田町精養軒旅館	50	堀出 ウメ
中島	中島新町善福寺	100	藤 勇哲	千田	千田町一丁目丸福	100	佐々木興一
千田	千田町一丁目魚船	100	船本 五一	江波	江波東町仕出業	50	丸本 久雄
千田	千田町一丁目アルプス	80	金山 時子	江波	江波港町縣立商業学校寄宿舎	200	河村 通介
千田	千田町一丁目一本松旅館	50	渡辺コトシ	仁保	仁保町湊崎(町内会)	350	板村 信一
千田	千田町二丁目魚光食堂	100	阿部 三笠	仁保	仁保町大浜塩場	100	大浜善太郎
千田	千田町二丁目松村旅館	50	松村イトヨ	仁保	仁保町柞木(町内会)	300	藤川 政吉
千田	千田町二丁目大阪屋食堂	50	宍戸竹二郎	仁保	仁保町本浦(町内会)	350	津村 数一
千田	千田町二丁目仕出業	50	渋下常四郎	仁保	仁保町國民学校	50	宮武 千穎
千田	南竹屋町福原食堂	100	川上 小芳	福島	福島町(町内会)	90	菊崎 正行
千田	千田町三丁目メリー食堂	100	羽田シズノ	袋町	革屋町廣楽	200	山本 弥助
千田	千田町三丁目南組御幸旅館	50	小山アキ子	袋町	革屋町木村屋	300	川野 政一
千田	千田町三丁目下宿屋	50	和田 香子	袋町	革屋町廣島ホテル	50	松川了之助
千田	千田町三丁目	50	山下 巴	袋町	平田屋町ちから飲食店	200	小林 角藏
千田	千田町三丁目飲食店	50	佐藤 レマ	袋町	鉄砲屋町金水館	50	山本 富藏
千田	千田町三丁目丸一旅館	200	潮 忠義	袋町	鉄砲屋町山金旅館	50	山縣 節雄
千田	千田町三丁目共栄旅館	100	福永 フヂ	袋町	鉄砲屋町山万料理業	50	米田 鶴平
江波	江波本町江波旅館	50	野間 源一	袋町	鉄砲屋町中賀料理業	50	平井七右衛門
江波	江波南町江波温泉	100	香口 カト	袋町	鉄砲屋町神田旅館	70	後藤 豊吉
江波	江波東町山文料理店	50	山本 久藏	—	—	—	—
袋町	鉄砲屋町千歳旅館	50	馬場 丈吉	袋町	尾道町市松旅館	50	松田 秀一
袋町	鉄砲屋町松万旅館	50	松田万之助	袋町	尾道町日の出旅館	50	大島 リエ
袋町	中町山中旅館	50	山中 忍	袋町	尾道町菊の屋旅館	50	川下きくの
袋町	中町田村旅館	50	田村 博	袋町	塩屋町芙蓉館	50	林 浅の
袋町	下中町縣立第一高等女学校	300	岡猪 眞二	袋町	塩屋町山陽せんべい店	100	村田 安藝
袋町	新川場町すし徳料理業	100	市田安之助	袋町	塩屋町しるこや	100	杉本 清吉
袋町	新川場町正清寺	100	三浦 義法	袋町	塩屋町中央旅館	50	森 マツコ
袋町	新川場町本照寺	50	紀野 俊耀	袋町	塩屋町旅館	50	谷 彦三郎
袋町	新川場町聖光寺	50	下野 大展	袋町	塩屋町専勝寺	100	中野 実英
袋町	新川場町海璽寺	50	井上 富禪	袋町	塩屋町山陽長飲食店	80	湯浅 貞吉
袋町	新川場町金龍寺	50	鹿翁 寛宗	袋町	塩屋町すみだや菓子店	100	住田 綱吉
袋町	新川場町福林寺	50	松本 指導	袋町	袋町精養軒	50	青木 志郎
袋町	新川場町盲学校寄宿舎	100	八尋 樹蒼	袋町	袋町妙蓮寺	70	法山 時範
袋町	小町ゑびす餅	100	木谷勤次郎	袋町	西魚屋町生命保険会社	70	俣野 景彦
袋町	小町國泰寺	150	西沢 天海	袋町	大手町五丁目大谷旅館	50	大谷 たづ
袋町	尾道町魚屋	50	湯川 玉一	袋町	大手町五丁目寒月堂菓子店	80	三村 司郎
袋町	尾道町村雨飲食店	50	高畑 義照	袋町	大手町五丁目山本旅館	80	山本 イト
袋町	尾道町稲荷餅屋	50	西森辰太郎	袋町	大手町五丁目天野旅館	60	天野はな枝
袋町	大手町五丁目松屋旅館	50	中村 千代	袋町	鳥屋町中近館	50	中近 リエ
袋町	大手町五丁目五明館	50	浜松 小春	袋町	鳥屋町鳥屋館	50	花野 シゲ
袋町	大手町五丁目蔵内旅館	50	長屋 範一	袋町	鳥屋町今坂餅屋	100	中村 静彦
袋町	大手町四丁目ゑびす館	50	飯田 くま	袋町	細工町木村パン	50	木村八十二
袋町	大手町四丁目蔵田旅館	50	宮本 勇	袋町	細工町更科飲料店	50	田中 誠作
袋町	大手町四丁目渡辺旅館	100	白川 弥市	袋町	細工町西向寺	100	高松 洸
袋町	大手町三丁目吉川旅館	150	沖田 光太	袋町	西猿楽町角初飲食店	50	角田初五郎
袋町	大手町三丁目日本発送電食堂	50	田部文之助	袋町	西猿楽町さくや飲食店	50	松浦 玉よ
袋町	大手町三丁目金明館	50	杉原 やす	袋町	東猿楽町興行銀行	50	戸澤 英一
袋町	大手町三丁目田中旅館	50	玉野 栄富	袋町	紙屋町菊水館	50	元木 隣
袋町	大手町二丁目三和銀行	50	田村 千之	袋町	紙屋町住友銀行	150	馬場 博
袋町	大手町二丁目銀行集会所	50	銀行集会所	袋町	紙屋町藝備銀行	3,000	伊藤 裕
袋町	大手町一丁目第一銀行	80	大野又四郎	袋町	紙屋町檜山旅館	50	檜山 市藏
袋町	大手町一丁目松本館	150	松本はさの	袋町	研屋町済世軍	50	田中 儀傳
袋町	大手町一丁目常盤旅館	70	友芳 清一	袋町	研屋町泉屋旅館	300	泉 完一
袋町	鳥屋町淀川すし	70	吉野 権藏	袋町	立町櫻羊羹商	200	有本 武男
袋町	鳥屋町虎屋旅館	100	寺田 武藏	袋町	立町誓立寺	50	武田 得成
袋町	鳥屋町泉周館	50	泉 朝吉	袋町	立町さかいや	50	平東サカエ
袋町	立町白砂女学塾	80	白砂 進弘	観音	観音本町宿屋業	100	川崎 繁一
袋町	立町高橋旅館	50	松浦 ソル	観音	観音本町飲食店	100	川村百合子
尾長	尾長國民学校	250	西尾 静夫	観音	観音本町下宿業	100	川崎善次郎
尾長	愛宕町仕出業	70	松下 小一	観音	観音本町日産自動車会社食堂部	100	日産自動車会社

尾長	東蟹屋町仕出業	50	網本林太郎	楠那	仁保町丹那料理屋業	50	岡本 好松
観音	観音本町飲食店	100	平木 身利	楠那	仁保町日宇那宿屋業	50	住田 隼人
観音	観音本町仕出業	100	牧村 太郎	—	—	—	—

別紙第四十一號

食料品購入先調査表

分団名	種 類	購入予定先	配給所	配給従事者
天満分団	食料品	北榎町旧市場問屋業組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	北榎町旧市場仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	新市町旧市場問屋業組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	新市町旧市場仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
天満分団	食料品	横堀町廣島漬物製造卸業組合	警防分団	警防分団配給部員
荒神分団	食料品	荒神町青物市場問屋業組合	警防分団	警防分団配給部員
千田分団	食料品	千田町一丁目廣島水産仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
草津分団	食料品	草津町草津魚商仲買組合	警防分団	警防分団配給部員
神崎分団	食料品	舟入仲町廣島漬物製造業組合	警防分団	警防分団配給部員

別紙第四十二號

配給従事者應援団体調

應援団体名	事務所所在地	應援人員数		召集連絡方法	應援団体名	事務所所在地	應援人員数		召集連絡方法
		男	女				男	女	
牛田青年團	牛田國民学校	13	3	電話又ハ傳令	大手青年團	大手國民学校	15	17	電話又ハ傳令
荒神青年團	荒神國民学校	14	5	電話又ハ傳令	千田青年團	千田國民学校	11	6	電話又ハ傳令
尾長青年團	尾長國民学校	12	2	電話又ハ傳令	中島青年團	中島國民学校	11	7	電話又ハ傳令
矢賀青年團	矢賀國民学校	1	3	電話又ハ傳令	廣瀬青年團	廣瀬國民学校	17	7	電話又ハ傳令
青崎青年團	青崎國民学校	8	8	電話又ハ傳令	本川青年團	本川國民学校	41	25	電話又ハ傳令
段原青年團	段原國民学校	13	7	電話又ハ傳令	神崎青年團	神崎國民学校	8	5	電話又ハ傳令
比治山青年團	比治山國民学校	17	33	電話又ハ傳令	舟入青年團	舟入國民学校	25	5	電話又ハ傳令
皆実青年團	皆実國民学校	25	1	電話又ハ傳令	江波青年團	江波國民学校	10	7	電話又ハ傳令
仁保青年團	仁保國民学校	1	5	電話又ハ傳令	天満青年團	天満國民学校	7	—	電話又ハ傳令
大河青年團	大河國民学校	1	7	電話又ハ傳令	観音青年團	観音國民学校	57	31	電話又ハ傳令
楠那青年團	楠那國民学校	3	4	電話又ハ傳令	福島青年團	福島國民学校	2	5	電話又ハ傳令
宇品青年團	宇品國民学校	60	3	電話又ハ傳令	大芝青年團	大芝國民学校	—	22	電話又ハ傳令
似島青年團	似島國民学校	—	—	電話又ハ傳令	三篠青年團	三篠國民学校	20	15	電話又ハ傳令
白島青年團	白島國民学校	3	2	電話又ハ傳令	己斐青年團	己斐國民学校	21	10	電話又ハ傳令
幟町青年團	幟町國民学校	29	12	電話又ハ傳令	古田青年團	古田國民学校	10	23	電話又ハ傳令
袋町青年團	袋町國民学校	38	12	電話又ハ傳令	草津青年團	草津國民学校	14	17	電話又ハ傳令
竹屋青年團	竹屋國民学校	7	10	電話又ハ傳令	備考 動員可能人員ノ約三分の一				

別紙第四十三號

市長ノ指定シタル營造物調査表

所在町名	種 別	所在町名	種 別	所在町名	種 別
國泰寺町	廣島市役所	仁保町	楠那國民学校	江波町	江波國民学校
旭町	大河國民学校	宇品町	宇品國民学校	西天満町	天満國民学校
國泰寺町	公會堂	元宇品町	宇品國民学校分教場	東観音町一丁目	観音國民学校
比治山公園	旧御便殿	似島	似島國民学校	福島町	福島國民学校
舟入町	船入病院	東白島町	白島國民学校	大芝町	大芝國民学校
安藝郡畑賀村	畑賀病院	幟町	幟町國民学校	打越町	三篠國民学校
牛田町	牛田國民学校	袋町	袋町國民学校	己斐町	己斐國民学校
西蟹屋町	荒神國民学校	田中町宝町	竹屋國民学校	古田町	古田國民学校
尾長町	尾長國民学校	大手町八丁目	大手町國民学校	草津東町	草津國民学校
矢賀町	矢賀國民学校	東千田町二丁目	千田國民学校	段原山崎町	第一國民学校
仁保町	青崎國民学校	水主町	中島國民学校	南観音町	第二國民学校
段原大畑町	段原國民学校	廣瀬北町	廣瀬國民学校	翠町	第三國民学校
東雲町	比治山國民学校	鍛冶屋町	本川國民学校	南観音町	市立商業学校
皆実町一丁目	皆実國民学校	舟入仲町	神崎國民学校	舟入川口町	市立高等女学校
東雲町	仁保國民学校	舟入川口町	舟入國民学校	小町	浅野圖書館
尾長町	東隣保館	尾長町	授産場	福島町	家畜市場
福島町	西隣保館	宇品町	棧橋	牛田町	浄水場
稻荷町	東公益質屋	松原町	公設市場	基町	水道部基町分室
天満町	西公益質屋	大手町九丁目	公設市場	己斐町	己斐調整場
宇品町	保養院	天神町	公設市場	安佐郡原村	取水場
福島町	授産場	福島町	屠場		

別紙第四十四號

防空資材製造業者一覧 （昭和十六年一月末現在）

署別	種別	住所	氏名	材料	備考
東	暗幕	廣島市愛宕町	田宗 俊三	黒繻子	

	バケツ	廣島市仁保町青崎	梶川 定	鋳力	
	代用バケツ	廣島市京橋町	落合 義雄	馬糞紙	
西	砲彈ポンプ	廣島市舟入町	佐伯 次九郎	鑄鉄ゴム	
	バケツ	廣島市南観音町二丁目	田村 政市	トタン板	
	バケツ	廣島市三篠本町一丁目	稲田 實	トタン板	
	バケツ	廣島市舟入幸町	脇田 長市	トタン板	
	バケツ	廣島市舟入幸町	田村 政市	トタン板	
	暗幕	廣島市紙屋町	熊野 秀吉	スフ地落綿地更生糸織	
	バケツ	廣島市平田屋町	内海 幸一	トタン板	
	電燈カバー	廣島市平田屋町	内海 幸一	馬糞紙	
	暗幕	廣島市大手町二丁目	横山 重助	スフ地	
	ポンプ	廣島市錦町	津田 喜次郎	鑄鉄	
	バケツ	廣島市猫屋町	伊藤 信一	トタン板	
	ポンプ	廣島市廣瀬元町	横山 加志美	鑄鉄直諭砲金鋼材	
	ポンプ	廣島市左官町	佐伯 次九郎	鉄材	
	暗幕	廣島市西九軒町	田淵 謹一	スフ地	
呉	バケツ	呉市宮原通二丁目	香川 義一	トタン板	
	暗幕	呉市泉場町	高林 秀雄	毛繻子	
	電燈カバー	呉市泉場町	高林 秀雄	毛繻子人絹製	
	担架	呉市泉場町	高林 秀雄	純綿麻	
	バケツ	呉市泉場町	高林 秀雄	綿麻	
	バケツ	呉市泉場町	川上 兵一	亜鉛鋳金鉄板	
	バケツ	呉市寺西町	中米 幾次	亜鉛鋳金鉄板	
	バケツ	呉市本通十丁目	坂野 繁蔵	亜鉛鋳金鉄板	
	バケツ	呉市東雲町三丁目	小林 正行	亜鉛鋳金鉄板	
	電燈カバー	呉市東雲町三丁目	小林 正行	亜鉛鋳金鉄板	
	電燈カバー	呉市本通十四丁目	長山 哲造	亜鉛鋳金鉄板	
祇園	バケツ	呉市本通十四丁目	長山 哲造	亜鉛鋳金鉄板	
	消防自動車	安佐郡安村字上安	土井 莊市	鉄板其ノ他	車体ノ古キモノヲ買入レ改造ス 山火事用、腕甲自動車用
	消火具	安佐郡安村字上安	土井 莊市	帶鉄	
	ホース巻取器	安佐郡安村字上安	土井 莊市	鉄	

別紙特第一號

防空監視隊副隊長哨長一覧表

廣島監視隊長警防課長 宗 玉生

廣島監視副隊長警部 若谷 芳松

廣島監視隊警部 寺岡 盛人

廣島監視哨長 藤本 徳太郎

可部監視哨長 朝枝 亮

鈴張監視哨長 坂井 徳夫

瀬野監視哨長 下野 國助

巖島監視哨長 伊藤 貫一

玖島監視象徴 山村 興一

吉和監視哨長 早田 耕介

加計監視哨長 前田 兼吾

大朝監視哨長（代理） 稲垣 唯三

八重監視哨長 富田 義和

吉田監視哨長 三好 清九郎

三次監視哨長 増原 鶴一

広島県警察部

[illegible]

	軍港中心 来襲)					数													
昭20.4.12 13:25頃	呉市警固 屋町	B29 一機	6						1										
昭20.4.12 14:30頃	佐伯郡小 方村可部 島沖合	来襲機ナ シ																	大竹潜水学校所属潜水艦一隻 (乗組員一二〇名) 演習中触 雷沈没全員殉職
昭20.4.13 09:38頃	呉市	B29 一機							1										被弾なし 軽傷者一名は友軍高射砲弾破 片に依る
昭20.4.19 自06:15頃 至06:17頃	備後南部 沿岸尾道 市及沼隈 郡高須村	B29 一機	12						2					3					
昭20.4.22 13:38頃	安佐郡祇 園町畑中	B29 一機	6											1					
昭20.4.30 06:55頃	広島	B29 一機	10					10	5	11		14	15	5	5		200		其他被害 学校半壊二棟 電車軌道破壊一ヶ所 水道破壊二ヶ所 瓦斯管破壊一ヶ所 電信電話ケーブル切断 一ヶ所 電話不通 約一、七〇〇個 電燈発電力線切断 四ヶ所 停電戸数約五〇〇戸
昭20.5.5 05:35頃	双三郡 作木村 高田郡 船佐村	B29 一機	8					7						2					其の他被害 牛一頭斃死 送電線切断三ヶ所
昭20.5.5 自10:27頃 至11:07頃	県下沿岸 部主トシ テ呉市広 町方面	B29 延約一 三〇機	93					28	6	15	4	61	163	34	3		1,000		其の他被害 曳船三隻沈没 三隻大破 四隻小破 貨物自動車六台全壊 馬車一〇台全壊 馬一四頭斃死 広駅(呉線)一部破壊 投下弾により構内路 線一ヶ所切断上下線 共不通 重要倉庫 (在中品は軍関係の被害な り) 1米倉庫 (二、五二〇俵入) 一棟全焼但し四割程 度残存見 込 2セメント倉庫 (一、〇〇〇俵入) 一棟全焼但し六〇〇

																			俵程度使用可能見込 3日通軍需倉庫一棟全焼 4日通事務所一棟全焼 軍関係被害 （詳細不明なるも概ね左の如し） 広工廠 六棟全焼 六棟大破 七棟中破 十一空廠 四棟全焼 十棟大破炎上 二棟大破 四棟中破 三棟小破 呉航空隊 二棟大破倒壊 三棟大破 一棟中破 坂下部隊（設営隊） 一棟全壊 四棟半壊 三棟小破 海軍共済食堂 一棟全焼 航空機被害 一機大破 十機中破 其の他被害 徴用船（小破） 二隻沈没 三隻中破 貨物自動車 十五台全壊 人的被害 1 広工廠 死者五八名 重傷二七名 輕傷相当あり 尚死傷者増加見込 2 十一空廠 死者四三名 負傷三七名 尚死傷者増加見込 3 呉航空隊 死傷者不明 4 坂下部隊 死者五名 負傷六名
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

																			5 呉海兵団(広駅前) 死者一名(水兵) 6 徴用船乗組員 死者三名
昭 20. 5. 5 自夜半 至昭 20. 5. 6	広 島 湾 及 備後灘	B29 三機				相 当 数													被害なし
昭 20. 5. 10 自 09 : 30 頃 至 10 : 30 頃	佐伯郡 大竹町	B29 延約一 三〇機	7									3	1						其の他の被害 警察電話切断一ヶ所 電話線切断一ヶ所 電力線切断一ヶ所 対岸山口県岩国市陸 軍燃料廠及興亜石油 会社に相当の被害あり
昭 20. 5. 11 12 : 43 頃	賀茂郡 原村山中	B29 一機	2																被害なし
昭 20. 5. 15 07:15 頃	広 島 湾 安 芸 郡 江 田 島 村 南 方 海中	B29 一機	推定 6																被害なし
昭 20. 5. 21 13 : 05 頃	安 芸 郡 戸 坂 村 フ 中 心 ト シ テ 備後一円	B29 一機					約 80, 000												被害なし
昭 20. 5. 22 13 : 10 頃	安 芸 郡 海 田市町	B29 二機	5							2									其の他の被害 送電線切断一ヶ所 軍関係被害倉庫 倉庫二棟半壊 事務所一棟半壊 鉄道引込線 二十米切断
昭 20. 5. 25 13 : 10 頃	安 佐 郡 祇 園町中心 県 下 西 部 一円	B29 一機					約 11, 000												被害なし
昭 20. 5. 27 05 : 40 頃	呉 市 警 固 屋	B29 一機	3						1	1			1						
昭 20. 5. 31 06 : 05 頃	広 島 市 フ 中心 ト シ テ 県 下 沿 岸一円	B29 一機					約 20, 000		1	1									人的被害は宣伝ビラ在中の爆 弾型鉄銅製よう気落下による
昭 20. 6. 9 06 : 30 頃	広 島 湾 佐 伯 郡 深 江 村 西 北 方 海中	B29 一機						3		13									本被害は昭二〇、四、一夜半 頃より同四、二未明に至るま での間に適期が投下したる掃 海漏の機雷に触れ発生したる ものと認められる
昭 20. 6. 22 自 09 : 30 至 10 : 40	呉 市 及 安 芸 郡 音 戸 町	B29 延約二 九〇機	58					69	3	9	1	46	153						其の他の被害 送電線切断一ヶ所 通信電話切断一ヶ所
昭 20. 6. 30 00 : 35 頃	佐 伯 郡 吉 和村	B29 一機	6																被害なし
昭 20. 7. 1 自 23 : 50 頃	呉市全域	B29 延約八 〇機		約 80, 110				1, 817	116	337	52				22, 052	116		122, 535	其の他民間関係被害 全焼

至翌2日 02：30頃																				工場 呉重工業外三 官公衛 呉警察署外二一 学校 清水国民学校外 一八 病院 日赤病院呉市部外 三 半壊 病院一 重要倉庫一 全壊 神社一 仏閣一 軍関係被害 呉海兵团木造建物一部、呉海 軍病院、呉海軍共済病院、求 交社、呉海軍経理施設、軍需 各部、呉鎮守府、十一空廠倉 庫一棟 外一二棟
昭20.7.11 20：55頃	備後灘 （沼隈郡 宇治島北 方海中)	B29一機				4														被害なし
昭20.7.17 17：45頃	安芸郡 坂村	B29一機	小 型 （ 径 3 寸 長 8 寸）3																	被害なし
昭20.7.17 13：45頃	安芸郡祇 園町ヲ中 心	B29一機					約40,000													被害なし
昭20.7.22 10：30頃	賀茂郡安 芸津町	B29一機	小 型 （ 模 型 飛 行機） 1					1		3										昭和二〇、七、二二 自〇八、四〇頃 至〇九、二〇頃 投下せるものと認めらる
昭20.7.24 自06：00頃 至12：00頃	県下沿岸 部主トシ テ呉市及 ニ軍港ニ 対シ銃爆 撃	艦載機ヲ 主トシテ ル小型延 約八七〇 機	166					59	53	86	5	173	118		24	8		4	1,095	其他民間関係被害 学校全焼一 学校一部損壊一 工場倉庫半壊一 船舶沈没四 機帆船沈没一 魚舟沈没二 船舶小破一 気船小破一 魚船小破一 牛一馬一爆死 軍関係被害 軍艦伊勢、日向、 八雲、出雲、岩手、

[illegible]

屋町沖合

至 12 : 50 頃	海中																			
	豊田郡豊浜村中心						約 20,000													被害なし
昭 20. 7. 31 14 : 00 頃	豊田郡大束村中心	B29 一機					約 20,000													被害なし
昭 20. 7. 31 22 : 55 頃	福山市中心	B29 一機					約 80,000													被害なし
昭 20. 8. 6 08 : 16 頃	広島市全域	B29 四機	原子爆弾(ウラム)1個					78,150	9,428	27,997	13,983	6,820	3,750		55,000	2,290		12	176,987	一、重要官公署被害 全焼 中国地方総監府 広島県庁中国軍需監理局 広島市役所 中国海運局 広島控訴院 広島地方裁判所 広島区裁判所 広島鉄道管理部 広島通信局 広島駅 広島貯金局 広島財務局 広島郵便局 広島駅前郵便局 西警察署 東消防署 西消防署 広島国民勤労動員所 広島税務署 広島営林署 地方鉱山監督局広島支局 半焼 広島地方専売局 半壊 宇品警察署 東警察署(破損) 二、学校被害 全焼 広島文理科大学 中等学校八校 国民学校六校 三、重要会社被害 全焼 中国新聞社 広島中央放送局 同盟通信広島支局 日発広島支店 中国配電 日銀支店 住友銀行支店 芸備銀行本店 帝銀支店 勸銀支店 日通広島支店 自動車配給会社

																			劇場映画館一二 全壊 広島電鉄 四、重要工場被害 全焼 東洋軽金属 大橋工業 東洋製罐 広島瓦斯（工場共） 全壊 旭兵器 倉敷航空 中国塗料 帝国兵器 藤川製鉄 中国配電製作所 半壊 帝人工場 三菱機械 三菱造船 東洋工業 其他の工場 半焼六、〇二八工場 罹災工員 二六、四二〇名 全半壊一五六工場 罹災工員 三四、八一七名 五、其他被害 全焼 大本営跡 広島城 護国神社 山陽記念館 県病院 逓信病院 鉄道病院 全壊 比治山御便殿 六、其他軍側に於ても相当 大なる被害ありたる模様なる も詳細不明
昭 20. 8. 8 自 22 : 25 頃 至 23 : 35 頃	福 山 市 全 域	B29 延約五 〇機		約 50, 000				242	90	303	33				10, 154	25		46, 358	一、重要施設被害 全焼 福山市役所 福山警察署 福山勤労動員所 深安沼隈地方事務所 福山駅 福山郵便局 県土木出張所 福山区裁判所 福山保健所 福山城

																			福山商工経済会 中学校二 国民学校二 半壊 三菱電機 日本火薬 中学校二 二、その他軍側に於ても被害 ありたるが詳細不明	
昭20.8.9 12：00頃	佐伯郡大 柿町中心	B29 三機					約20,000												被害なし	
昭20.8.11 自10：12頃 至11：15頃	呉軍港広 島湾及県 西部沿岸 部ニ対シ 銃爆撃	小型艦載 機延一九 機	10																被害なし	
昭20.8.14 自11：30頃 至12：22頃	県下中沿 岸部及広 島湾銃爆 撃	小型艦載 機延一二 機	2														1			
昭20.8.14 20：40頃	呉中心	B29 一機					約20,000												被害なし	
計		3,091 内訳 大型865 小型 2,226	582 内訳 普通爆 弾581 原子爆 弾1	130,126	100	相当 数	391,000	80,477	9,769	29,000	14,083	7,340	4,488	5	87,309	2,459	4	44	350,116	(註) 投下弾数は軍用地内に投下し たるものは調査不能に付計上 していない。

（編者註・原点の誤植及び計算違いは、これを改めた）

(三)

防空日誌

矢賀警防分団

昭和二十年

一月二日＊午前中は各個人、午後は各隣組注水競技会国民学校校庭にてあり。

＊警防員下村鈞再度応召入隊

三日＊警戒発令

午後三時七分発令、同三時五五分解除

六日＊空襲発令

午前八時五〇分警戒発令

午前九時一五分空襲発令

同十一時一五分空襲解除

同十一時二五分警戒解除

九日＊警戒発令

午後二時一〇分発令、同三時解除

十三日＊牛田山防空用松材伐採出動

本日より一月二十五日迄(二十四日休)

夜、本部にて出動の件団員総寄り協議、各自の自覚に待つ事となる。

二十日＊警戒発令

午後七時四〇分発令、同八時解除

二十一日＊牛田山松材搬出慰労会、山にてあり

二十六日＊穴戸分団長宅にて出費の件協議(幹部)

男子一日拾円、女子手伝五円

団特別会計より出費と決定

二月二十日＊警戒発令

午後八時二〇分発令、同八時四八分解除

二十三日＊警戒発令

午前四時三〇分発令、同四時五〇分解除

二十五日＊警戒発令

午後二時四五分発令、同三時解除

国民学校にて中西海軍中佐町葬の最中なりき

三月一日＊警戒発令

午前四時発令、同四時二五分解除

三日＊警戒発令

午後一一時三〇分発令、同一一時四〇分解除

五日＊警戒発令

午後八時発令、同八時四〇分解除

六日＊警戒発令

午後一一時三〇分発令、七日午前〇時四〇分解除

八日＊警戒発令

午前〇時三〇分発令、同一時四〇分解除

午前一一時一五分発令、同一一時四〇分解除

九日＊防空壕設備分団本部南隣消防部員出務

十日＊〃警備部員出務

午後九時本部集合、各家庭灯火管制設備点検

午後一〇時三〇分終了、北官舎寄宿寮に裸火赫々とあり。

十一日＊警戒発令

午前一時発令、同二時二〇分解除

防空壕設備分団本部南隣警備部員出務

十二日＊警戒発令

午前〇時一五分発令、同〇時四〇分解除

十三日＊警戒発令

午後九時二五分発令、同一〇時五分解除

十四日＊警戒発令

午前一時二五分発令、同二時解除

十五日＊警戒発令

午前二時三〇分発令、同二時五〇分解除

＊警戒待機

敵機大空襲の予想の為、午後一一時本部へ集合警戒待機す。午前〇時四〇分四国地区、近畿地区一機来襲するも当地区警戒に入らず、情報放送中止により解散

十七日＊警戒発令

午前二時二五分発令、同三時三〇分解除

十八日＊警戒発令

午前八時二五分発令、同一〇時三〇分解除

十九日＊空襲発令

午前七時一〇分警戒発令

午前七時二〇分空襲発令

呉方面上空に敵機多数来襲、弾幕砲音に快感さへ覚ゆる程なり。午前九時過ぎ敵機七機府中方面より矢賀上空に飛来、尾長・山根方面へ機関砲掃射、爆弾投下す。当分団より、尾長、矢賀防空小区長への報告次の通り、三月十九日午前艦載機七機来襲状況報告(第一次報告)

ガソリン空罐一ヶ広島鉄道局工機都南門左前田中へ落下、家屋人畜被害なし

本空罐並に残存ガソリンの一部は東署へ提出せり、其の他機関砲掃射の被害、人命に被害なくも家屋損傷程度調査中

(第二次報告)機関砲掃射の弾丸は拾得せざるも正午迄に主として矢賀町市組中組にて葉英一〇八

ヶ(ケース付)ケース二二拾得せり

被害は三戸に於て瓦三枚破壊セル他、家屋人畜に損傷なし以上

午前一〇時五二分空襲解除

午前一一時空襲発令、同一二時空襲解除

午後〇時五二分警戒解除

午後〇時五七分警戒発令、同一時四九分解除

午後四時三五分空襲発令、同五時一五分解除

午後五時二五分警戒解除

時宗豊、中山政夫、団服支給

二十日＊警戒発令

午前一時一四分発令、同一時四五分解除

午前三時一二分発令、同三時四〇分解除

午前六時四三分発令、同七時一二分解除

二十一日＊岩本徳一氏応召、下関〇〇部隊

二十三日＊警戒発令

午前〇時五〇分発令、同一時二〇分解除

府中町丁茂墓火災出動、午後六時三〇分から八時迄分団長、副分団長、穴戸重男、宮崎浅吉、高砂徳三、時宗豊

二十四日＊警戒発令

午前〇時二〇分発令、同一時一一分解除

午前二時七分発令、同二時三〇分解除

二十七日＊警戒発令

午前〇時一〇分発令、同一時四〇分解除

＊建物強制疎開跡整理

午前六時岩鼻集合、三川町稻荷神社前へ、午前中四〇名、午後四名増、総員四四名出勤、終日熱心に倒壊跡整理、矢賀分団受持終了後、幡町分団、更に大洲分団に応援、五時作業終了、敷島食堂にてビール飲み、七時小切木を宍戸倉庫へ入庫して解散

空襲発令

右作業中、午前九時五〇分警戒発令、一〇時空襲発令、直に作業止め急ぎ帰り分団本部へ、午前一時一七分空襲解除、午前一一時二六分警戒解除、中食後一時前再度作業場へ

二十七日＊警戒発令

午後一〇時七分発令、二八日午前〇時四二分解除

二十八日＊警戒発令

午後五時二〇分発令、同五時三八分解除

二十九日＊警戒発令

午前五時一七分発令、同六時解除

午前六時五分発令、同七時五分解除

午後一一時一〇分発令、同一時四六分解除

木村金次郎氏応召、鹿児島〇〇部隊へ

三十一日＊警戒発令

午前〇時発令、午前一時四五分解除

四月一日＊警戒発令

午後一〇時発令、同一〇時五〇分解除

二日＊警戒発令

午前〇時五〇分発令、同一時五〇分解除

午後一一時五〇分発令、四月三日午前一時四五分解除

三日＊警戒発令

午後一〇時五三分発令、同一二時解除

六日＊警戒発令

午前一時二五分発令、同一時五〇分解除

八日＊警戒発令

午前一時五五分発令、同二時解除

午後一一時五〇分発令、四月九日午前〇時一七分解除

十日＊警戒発令

午前〇時一五分発令、同一時八分解除

十二日＊警戒発令

午後一時発令、同一時四五分解除

十三日＊警戒発令

午前五時四四分発令、同六時一五分解除

午前九時四〇分発令、同一〇時解除

午前一〇時一七分発令、同一〇時四五分解除

十五日＊沢井好藏氏応召

十六日＊警戒発令

午前一〇時九分発令、同一〇時二七分解除

十七日＊警戒発令

午前四時五五分発令、同五時三五分解除

午後二時三〇分発令、同三時一二分解除

本日ガソリンポンプ操法講習あり

十八日＊警戒発令

午前〇時四分発令、同〇時二七分解除

二十日＊警戒発令

午前七時発令、同七時一七分解除

二十一日＊警戒発令

午後一時四〇分発令、同一時五五分解除

二十二日＊警戒発令

午前五時二五分発令、同五時四二分解除

午前六時三二分発令、同七時一三分解除

午後一時四〇分発令、同二時五分解除

二十三日＊警戒発令

午前五時二〇分発令、同五時四九分解除

午後一時二三分発令、同一時三五分解除

二十四日＊警戒発令

午前五時一八分発令、同五時五五分解除

二十五日＊警戒発令

午後一時発令、同一時二五分解除

二十六日＊警戒発令

午前五時四七分発令

空襲発令

午前六時一五分発令、同七時空襲解除

同七時一五分警戒解除

二十七日＊林倉一救護部長、中山政夫、時宗豊消防部警防員推薦

警戒発令

午後一時四〇分発令、同二時解除

二十八日＊警戒発令

午前五時四〇分発令、同六時三五分解除

午前一〇時三〇分発令、同一〇時五五分解除

午後一時四五分発令、同二時三〇分解除

二十九日＊警戒発令

午前九時四五分発令、同一〇時五分解除

警戒発令集合を期にウイスキーにて天長の佳節を祝い、健闘を誓ふ

三十日＊警戒発令

午前六時一五分発令、同七時一五分解除

小町中国配電附近へ爆弾投下、火災発生

警戒発令

午前一〇時一〇分発令、同一〇時二二分解除

五月二日＊警戒発令

午前五時三三分発令、同六時五分解除

三日＊警戒発令

午前五時八分発令、同五時四五分解除

午前六時五五分発令、同七時五分解除

午後一時五〇分発令、同二時六分解除

四日＊警戒発令

午前〇時五分発令、同〇時一五分解除

午前六時二五分発令、同六時四五分解除

午前八時二分発令、同九時一〇分解除

午後二時一五分発令、同三時一五分解除

五日＊警戒発令

午前五時二八分発令、同五時五八分解除

午前一〇時一八分発令

空襲発令

午前一〇時二〇分発令、同一一時二四分空襲解除

同一一時三五分警戒解除

(広十一空敵爆撃)

警戒発令

午後〇時一三分発令、同一時一〇分解除

午後一一時四二分発令、六日午前一時七分解除

六日＊警戒発令

午前六時二一分発令、同七時一二分解除

午前一〇時三七分発令、同一〇時五五分解除

七日＊警戒発令

午前八時発令、同九時解除

午後一時発令、同一時一一分解除

八日＊警戒発令

午前五時一五分発令、同五時四五分解除

午前七時四〇分発令、同八時三〇分解除

九日＊警戒発令

午前五時一八分発令、同五時四〇分解除

十日＊警戒発令

午前七時二〇分発令

空襲発令

午前七時二八分発令、同一一時一〇分空襲解除

同一一時二三分警戒解除

(岩国陸空爆撃)

十一日＊警戒発令

午前四時四五分発令、同四時五〇分解除

午前六時四〇分発令

空襲発令

午前七時四五分発令、同八時二五分空襲解除

午前八時三二分発令、同九時一二分空襲解除

同九時三二分警戒解除

(阪神・佐伯・大分爆撃)

警戒発令

午後一時一五分発令、同一時五〇分解除

午後二時二五分発令、同二時四〇分解除

十二日＊警戒発令

午前九時一分発令、同九時一七分解除

午後〇時三〇分発令、同一時二〇分解除

十四日＊警戒発令

午前〇時三〇分発令、同一時三七分解除

午前一一時五五分発令

空襲発令

午後〇時発令、同一時空襲解除

同一時七分警戒解除

警戒発令

午後二時一五分発令、同二時四〇分解除

十五日＊警戒発令

午前七時一〇分発令、同七時四五分解除

午後〇時四〇分発令、同一時二五分解除

午後二時二〇分発令、同二時四〇分解除

幹部階級編成申請

十六日＊警戒発令

午前五時一五分発令、同五時五五分解除

午後一時四三分発令、同二時三分解除

十七日＊警戒発令

午後一時七分発令、同一時三〇分解除

十八日＊警戒発令

午前五時四三分発令、同六時一〇分解除

十九日＊警戒発令

午前〇時四〇分発令、同二時一〇分解除

午後〇時二五分発令、同〇時五一分解除

二十日＊警戒発令

午前六時三〇分発令、同六時五七分解除

二十一日＊警戒発令

午前〇時発令

＊空襲発令

午前〇時二〇分発令、同一時二二分空襲解除

同一時四六分警戒解除

警戒発令

午前一一時五五分発令、午後〇時三分解除

午後一時発令、同一時三二分解除

二十二日＊警戒発令

午前五時二〇分発令、同五時五〇分解除

二十三日＊警戒発令

午前〇時四〇分発令、同二時二五分解除

午後〇時三八分発令、同一時二〇分解除

(海田市へ爆弾投下四発)

二十四日＊警戒発令

午前五時三三分発令、同六時二八分解除

二十五日＊警戒発令

午前〇時五五分発令、同二時解除

午後一時一〇分発令、同一時二四分解除

二十六日＊警戒発令

午前五時三五分発令、同六時解除

二十七日＊警戒発令

午前〇時五分発令、同一時五〇分解除

午前五時四五分発令、同五時五五分解除

午後一一時三〇分発令、二十八日午前一時二五分解除

二十八日＊警戒発令

午前八時四六分発令、同九時七分解除

二十九日＊警戒発令

午前五時一〇分発令、同五時三〇分解除

平塚町疎開跡道路整地作業勤労奉仕

午前六時岩鼻集合、同七時出発、鶴見橋を下って平塚町跡へ消防自動車並に人員避難道路の長石除

却、午後四時終了。帰って六時頃より分団長宅にて慰労酒あり、団員久し振りに悦に入る。午後七

時頃逐次散会、出動人員二十九名。

三十一日＊警戒発令

午前六時一分発令、同六時三〇分解除(広島上空ビラ投下)

六月一日＊矢賀警防分団本部を東消防署矢賀出張所へ貸与しあり、従前より宍戸製作所事務所を分団本部とせ

り。よって今般警察署へもこの旨届けたり。

分団本部常置員班長宍戸重男

警防員時宗豊兩名とす

警戒発令

午前〇時一五分発令、同〇時二九分解除

午前九時八分発令、同九時四七分解除

三日＊警戒発令

午前五時二五分発令、同六時二分解除

午後〇時二五分発令、同〇時四一分解除

五日＊警戒待機、警報発令なきもサイレン吹鳴により本部へ集合待機。午前四時一五分一同五時迄

七日＊警戒発令

午前五時三五分発令、同六時一五分解除

(大阪爆撃)

午前九時発令、同一〇時七分解除

午前一一時八分発令、午後〇時一〇分解除

十日＊警戒発令

午前〇時一〇分発令、同一時一二分解除

十一日＊警戒発令

午前五時二分発令、同五時五五分解除

十二日＊警戒発令

午前〇時二二分発令、同一時一〇分解除

十五日＊警戒発令

午前八時六分発令、同一〇時二五分解除

(大阪空襲)

午前一時六分発令、同二時二七分解除

(山口県機雷投下)

午後〇時二〇分発令、同〇時三九分解除

午後一一時四一分発令、十七日午前〇時一一分解除

十七日＊警戒発令

午後〇時五六分発令、同一時二二分解除

飯田義弘君応徴中の処応召、中部一〇四部隊

十九日＊警戒発令

午後一時三〇分発令、同二時一〇分解除

二十日＊警戒発令

午後一時二五分発令、同二時一〇分解除

二十一日＊警戒発令

午前九時五〇分発令、同一〇時解除

二十二日＊警戒発令

午前〇時発令、同〇時五八分解除

午前六時一〇分発令、同六時二〇分解除

午前八時三三分発令

呉・空襲発令

午前八時三五分発令、同一一時解除

同一一時五分警戒解除

警戒発令

午後一時二分発令、同一時五三分解除

二十三日＊警戒発令

午後一一時四六分発令

空襲発令

午後一二時発令、二十四日午前一時四〇分空襲解除

二十四日＊午前一時五〇分警戒解除

二十五日＊警戒発令

午前五時五分発令、同五時一〇分解除

午前八時発令、同八時五〇分解除

午後二時発令、同二時四三分解除

二十六日＊警戒発令

午前七時一〇分発令、同八時七分解除

午後〇時一〇分発令、同一時二分解除

午後一一時三〇分発令、二十七日午前〇時一〇分解除

矢賀町国民義勇隊結成査閲。午後五時よりキリンビール会社に於て、市本部より村上哲夫査閲官、
警防団は警防隊として参加

二十八日＊警戒発令

午後〇時七分発令、同〇時二七分解除

二十九日＊警戒発令

前三時五分発令、同四時四三分解除

(岡山空襲)

午後一一時五四分発令

空襲発令

午後一一時五九分発令、三十日午前〇時五〇分空襲解除

三十日午前一時三〇分警戒解除

(下松爆撃)

七月一日＊警戒発令

午前〇時二三分発令、同〇時四六分解除

午前〇時五〇分発令、同一時解除

午後一一時九分発令

呉、空襲発令

午後一時三五分発令

二日＊午前四時二五分空襲、警戒共に解除

二日＊呉焼夷弾攻撃、罹災民救急用ムスビニ回に亘り運搬

矢賀町国民義勇隊炊事隊出動、団員四名宛便乗し、二河公園迄

三日＊警戒発令

午前〇時一八分発令、同一時三分解除

午後一時一二分発令

空襲発令

午後一時三八分発令、四日午前一時五分空襲解除

四日午前二時一四分警戒解除

四日＊警戒発令

午前二時発令、同四時三二分解除

午後八時五〇分発令、同九時三二分解除

五日＊警戒発令

午前八時五〇分発令、同九時五四分解除

午後一時二七分発令、同二時四二分解除

六日＊警戒発令

午前九時四三分発令、同一〇時一八分解除

午後一〇時五〇分発令、七日午前〇時三〇分解除

七日＊警戒発令

午前八時五〇分発令、同九時三七分解除

八日＊警戒発令

午後一時三五分発令、同二時二分解除

十日＊警戒発令

午後二時五八分発令、岡三時三〇分解除

本夜より別紙の通り、分団本部へ宿直制実施。午後八時より翌朝午前五時迄二名宛

十一日＊警戒発令

午前四時三〇分発令、同五時九分解除

午後〇時一六分発令、同一時二九分解除

午後八時五八分発令、同一〇時四〇分解除

十二日＊警戒発令

午前〇時一〇分発令

空襲発令

午前〇時一五分発令、同〇時五五分空襲解除

同一時二〇分警戒解除

警戒発令

午前九時五六分発令、同一〇時三〇分解除

午後一時四五分発令、同一時五四分解除

午後一〇時二五分発令、十三日午前一時四〇分解除

十三日＊警戒発令

午後八時五〇分発令、同一〇時四七分解除

十四日＊警戒発令

午前〇時二七分発令、同二時一一分解除

午後一時三〇分発令、同二時三六分空襲解除

同三時一二分警戒解除

警戒発令

午後三時二八分発令

空襲発令

午後三時三八分発令、同四時三七分空襲解除

同四時四六分警戒解除

中国地区来襲、呉来襲、広島上空にて一機撃墜、火を吐き落つ。

十五日＊警戒発令

午前一〇時五三分発令

空襲発令

午前一〇時五九分発令、午後〇時五十分空襲解除

午後一時六分警戒解除

(山口県へ戦艦重合来襲)

高橋部長以下五名、東署破壊作業出勤

警戒発令

午後一時五五分発令

空襲発令

十六日午前〇時四五分発令、同一時一分空襲解除

同一時一七分警戒解除

十六日＊警防員三浦漸君、応召中国一〇六部隊

警戒発令

午後〇時一五分発令、同一時一三分解除

午後一時一八分発令、十七日午前一時四〇分解除

十七日＊警戒発令

午後一時四五分発令、同一時五五分解除

午後八時五二分発令、同九時四二分解除

午後一〇時五分発令、同一時三三分解除

十八日＊警戒発令

午後〇時三分発令、同一時八分解除

(戦闘機一機広島上空へ来襲)

午後一時二五分発令、十九日午前〇時一五分解除

十九日＊警戒発令

午後〇時五一分発令、同一時二四分解除

午後八時三〇分発令、同九時三五分解除

午後一〇時三五分発令、同一時二二分解除

二十日＊警戒発令

午前一時七分発令、同二時二分解除

二十一日＊ウイスキーを配給す

二十二日＊警戒発令

午前八時四八分発令、同九時三四分解除

午後〇時三六分発令、同一時二九分解除

午後一時四五分発令、同一時四八分解除

午後九時一三分発令、同九時五六分解除

午後一時一八分発令

空襲発令

午後一時五〇分発令、二十三日午前一時一二分空襲解除

二十三日午前一時三四分警戒解除

二十三日＊警戒発令

午前五時四分発令、同五時三七分解除

午前六時四八分発令、同七時一〇分解除

午前七時三三分発令、同七時四四分解除

午前八時五五分発令、同九時一六分解除

二十四日＊警戒発令

午前五時五五分発令

空襲発令

午前六時六分発令、同八時四五分解除

午前九時一八分発令、同一〇時三七分解除

同一一時五八分警戒解除

午前七時過ぎ、敵艦載機十数機、仁保方面より矢賀上空を過ぐ。本日は中国地区主として呉方面来襲

警戒発令

午後〇時二七分発令

空襲発令

午後〇時三八分発令、同二時五〇分解除

午後三時二分発令、同三時一〇分解除

同三時一六分警戒解除

警戒発令

午後三時五五分発令

空襲発令

午後四時一四分発令、同五時二〇分空襲解除

同五時四〇分警戒解除

二十五日＊本日も前日に続き中国地区へ来襲、広島上空には編隊見ず、呉来襲

警戒発令

午前四時四三分発令、同五時九分解除

午前五時三〇分発令

空襲発令

午前六時四八分発令、同八時二〇分空襲解除

同八時三三分警戒解除

警戒発令

午前九時三二分発令

空襲発令

午前一〇時九分発令、同一〇時五五分空襲解除

同一一時九分警戒解除

警戒発令

午前一一時二三分発令

空襲発令

午前一一時三一分発令、午後〇時三三分空襲解除

同〇時四八分警戒解除

＊警戒発令

午後一時一九分発令、同二時六分解除

午後二時一五分発令

空襲発令

午後二時一九分発令、同二時四二分空襲解除

同三時一一分警戒解除

警戒発令

午後九時二八分発令

空襲発令

午後九時三六分発令、同一〇時二三分空襲解除

同一一時三〇分警戒解除

二十六日＊警戒発令

午前〇時一二分発令、同〇時五〇分解除

午前九時三〇分発令、同九時四四分解除

午後一時四九分発令、同二時二七分解除

午後一〇時五四分発令

空襲発令

午後一一時五分発令、二十七日午前〇時二九分空襲解除

二十七日午前一時一五分警戒解除

二十七日＊警戒発令

午後〇時一七分発令、同〇時四六分解除

午後一〇時発令

空襲発令

午後一一時三五分発令、二十八日午前〇時一二分空襲解除

二十八日午前〇時五〇分警戒解除

二十八日＊警戒発令

午前五時四八分発令

空襲発令

午前五時五六分発令、同七時五五分解除

午前九時三〇分発令、同一〇時三八分空襲解除

同一一時二分警戒解除

警戒発令

午前一一時三三分発令

空襲発令

午前一一時三六分発令、午後一時七分空襲解除

同一時一五分警戒解除

警戒発令

午後一時二五分発令

空襲発令

二十九日＊警戒発令

午後〇時二六分発令

空襲発令

午後〇時一三分発令、同一時二二分空襲解除

同一時四二分警戒解除

警戒発令

午後九時三五分発令

空襲発令

午後九時四二分発令、同一〇時三五分解除

午後一〇時五〇分発令、同一一時四五分空襲解除

三十日午前〇時二八分警戒解除

三十日＊警戒発令

午前八時五分発令

空襲発令

午前八時一五分発令、同八時四六分空襲解除

同八時五一分警戒解除

警戒発令

午後一時一八分発令、同一時四八分解除

三十一日＊警戒発令

午前一時四二分発令、同二時一〇分解除

矢賀警防分団防空当番日割表

勤務時間(午後八時より翌朝五時まで)

七月十日	天道種吉・高砂徳三	十八日	山下弥一・松永慶三	二十六日	飯田源五郎・飯田敏夫
十一日	三浦漸・長谷川数一	十九日	小林重太郎・大久保幾太郎	二十七日	飯田武・飯田雅一
十二日	宮崎浅吉・新畠三之助	二十日	石田孝・福本茂	二十八日	飯田潔・増本勇
十三日	北田庫太・溝手一人	二十一日	住田勝志・木村義博	二十九日	江島一男・三浦順一
十四日	横山元重・小寺篤三	二十二日	国司乙次郎・大久保節夫	三十日	太田初吉・矢戸重男
十五日	中山政夫・植木卯三郎	二十三日	宗田静人・谷川秀雄	三十一日	高橋増雄・難波章三
十六日	大田正吉・大久保豊	二十四日	山田隆夫・藪野政一		
十七日	山代義雄・秋山登	二十五日	出雲直吉・浜本茂男		

八月一日＊警戒発令

午後九時六分発令

空襲発令

午後九時一二分発令、同一〇時二分空襲解除

同一〇時一五分警戒解除

警戒発令

午後一一時一分発令

空襲発令

午後一一時二二分発令、二日午前〇時一二分空襲解除

二日＊午前〇時一七分警戒解除

四日＊警戒発令

午後一一時五〇分発令、五日午前〇時三五分解除

五日＊警戒発令

午後九時二〇分発令

空襲発令

午後九時二七分発令、同一一時五五分解除

六日＊午前〇時二五分発令、六日午前二時一〇分空襲解除

六日午前二時一五分警戒解除

六日＊警戒発令

午前七時九分発令同七時三一分解除

午前八時一五分、B29 数機三機が四機、広島上空に來り、ウラン原子爆弾投下、広島市は一瞬にして廃墟となる。以後電気停電にて警報伝達徹底せず、記録せず。

当時分団長は矢賀町義勇隊長として市内鶴見町にあり負傷、直ちにオートバイにて帰町、町内一巡して罹災状況視察、団員に指示後、尾長町方面火災発生、防火の指揮段取の為再度出動、防空小区長に連絡、よりて団員残員計七名ガソリンポンプを挽き三本松へ行く、高橋消防部長、時宗豊、中山政夫、宮崎浅吉、谷川秀雄、増本勇、飯田雅一氏は火傷を押して消火に従事す。午後五時頃より午後六時頃迄従事す。

矢賀国民学校には直ちに救護所開設、林救護部長と浜本従事、午前一一時頃 B29 一機が状況視察に來た様なり。(以上はお追記)

警防分団本部(宍戸製作所) 詰める団員数名

午後九時三〇分空襲発令、同一〇時五分空襲解除

同一〇時一〇分警戒解除

午後一一時四〇分警戒発令

七日*午前一〇時頃空襲発令あり

夜は宍戸製作所前道路畔へ蚊帳より野宿し警戒警報伝達は口頭なり、ムスピの配給あり道路通行者へ給与、救護所林部長、浜本

八日*矢賀救護所山田出、警防分団本部を学校へ移し団員充実を計る。

(二一時三〇分～二三時三〇分福山市焼夷弾爆撃、中配記録より転記)

九日*矢賀救護所

警戒九時発令

(一一時四三分～一二時三〇分岩国海軍航空隊銃爆撃、中配記録より)

十日*矢賀救護所にて

午前三時頃警戒発令

十一日*大竹町海軍潜水学校爆撃、午前一〇時頃空襲発令

警戒発令

午後一〇時三五分発令、同一一時三〇分解除

十二日*警戒発令

午前六時三九分発令、同七時四分解除

十三日*警戒発令

午後八時四五分発令、同八時五五分解除

十四日*午前一一時三〇分頃B29 編隊で来る。空襲発令

岩国駅午前爆撃午後光市

十五日*正午停戦の詔勅渙発玉音拝聴、涙を流し泣く

二十日*聖旨により正午を以て準備管制解除

二十一日*午前一一時三〇分、宍戸重男宅へ高橋部長、増本、浜本、難波、宍戸重男、山田部長集合、中食後東警防団へ報告の書類調製、午後三時三〇分迄

六日*空襲による死者、重傷、軽傷、行方不明、健在、特功労者報告、職名、氏名、生年月日(死者)

太田初吉警防部長、国司乙次郎班長

(重傷)

宍戸義太郎分団長、坂本信太郎副分団長、三浦順一、福本茂、木村義博、住田勝志、石川孝、山下弥一、松永慶三、宮川丈一、中村万太郎、植木卯三郎、太田正吉、大久保豊

(軽傷)

飯田雅一、難波章三、林倉一、宍戸重男

(行方不明)秋山登

(健在)

高橋増雄、山田隆夫、中川勘助、新畠三之助、飯田潔、飯田敏夫、北田庫太、小林重太郎、宮崎浅吉、大久保節夫、飯田武、藪野政一、天道種吉、浜本茂男、大久保幾太郎、増本勇、谷川秀雄、宗田静人、横山元重、飯田源五郎、長谷川数一、小寺篤三、江島一男、石本二夫、出雲直吉、高砂徳三、溝手一人、時宗豊、中山政夫

(特功労者)

林倉一、高橋増雄、谷川秀雄、難波章三、浜本茂男、増本勇、中山政夫、溝手一人、宗田静人、宍戸重男、時宗豊、山田隆夫、飯田雅一、宮崎浅吉、宍戸義太郎

二十五日*会計係太田初吉氏死亡により不取敢、貯金通帳、会計帳簿、判取帳、買物帳等本部長山田隆夫受継ぐ

二十九日＊警防団員へ罹災当時勤務せし者へ清酒、煙草配給あり

矢賀警防分団防空当番日割表

勤務時間は午後八時より翌朝五時まで

八月一日 〃二十四日 九月十六日	宮川丈一 中村万太郎	八月九日 九月一日 〃二十四日	山代義雄 秋山登	八月十七日 九月九日 十月一日	出雲直吉 浜本茂男
八月二日 〃二十五日 九月十七日	天道種吉 高砂徳三	八月十日 九月二日 〃二十五日	山下弥一 松永慶三	八月十八日 九月十日 十月二日	飯田源五郎 飯田敏夫
八月三日 〃二十六日 九月十八日	林倉一 長谷川数一	八月十一日 九月三日 〃二十六日	小林重太郎 大久保幾太郎	八月十九日 九月十一日 十月三日	飯田武 飯田雅一
八月四日 〃二十七日 九月十九日	宮崎浅吉 新昌三之助	八月十二日 九月四日 〃二十七日	石田孝 福本茂	八月二十日 九月十二日 十月四日	飯田潔 増本勇
八月五日 〃二十八日 九月二十日	北田倉太 溝手一人	八月十三日 九月五日 〃二十八日	住田勝志 木村義博	八月二十一日 九月十三日 十月五日	江島一夫 三浦順一
八月六日 〃二十九日 九月二十一日	横山元重 小寺篤三	八月十四日 九月六日 〃二十九日	国司乙次郎 大久保節夫	八月二十二日 九月十四日 十月六日	太田初吉 宍戸重男
八月七日 〃三十日 九月二十二日	中山政夫 植木卯三郎	八月十五日 九月七日 〃三十日	宗田静人 谷川秀雄	八月二十三日 九月十五日 十月七日	高橋増雄 灘波章三
八月八日 〃三十一日 九月二十三日	大田正吉 大久保豊	八月十六日 九月八日 〃三十一日	山田隆夫 戴野政一		

九月二日＊宍戸重男宅にて午後五時頃より六日以来の慰労会あり

四日＊矢賀尾長小区へ罹災死傷者報告提出

死亡太田初吉・防空当番にて防空監査視中、梁にて頭部負傷為に死亡す。

〃国司乙次郎…〃

〃難波章三…尾長町へ警防団として消火作業に従事中、頭部負傷其後も数日、警防業務に従事為に遂に死亡す。

火傷宍戸義太郎…義勇隊長として鶴見町へ勤労奉仕に出動中火傷、首の後、左肱より掌、左股火傷、当日町内巡視し尾長消火作業の指揮にあたり一〇日間の治療を要す。

〃坂本信太郎…義勇隊として出動中首、背、両手、顔口周

〃大久保豊…〃背、首、右手

〃宮川丈一…〃首、顔半面、右手

〃山下弥一…〃首、両手

〃石田孝…〃首、左手

〃住田勝志…〃顔全部、両手、両足

〃福本茂…〃顔左半面、両手、両足

〃木村義博…〃右手、首、背部

〃大田正吉…〃顔、胸、両手、両足

〃中村万太郎…〃首、両手

〃松永慶三…〃顔、両手

裂傷林倉一…防衛召集の件にて大手町校へ集合中、講堂倒壊により頭部負傷、其の後矢賀救護所勤務、その間貨物自動車にて二回転、胸部圧迫尚約二十五日間勤務、数日

前よりガス中毒にて重態に落入る。

火傷飯田雅一…私用にて愛宕町踏切附近にあり顔面胸上部火傷

当日尾長消火作業に従事

裂傷植木卯三郎…私用にて市内にあり家屋倒壊にて頭部負傷

打撲傷穴戸重男…分団本部にあり警鐘打たんとし家屋倒壊、右股打撲傷を受く。

裂傷三浦順一…市役所勤務中ガラスにて体全部裂傷を受く。

行方不明秋山登…義勇隊として出動中行方不明

以上二十一名負傷種別、住所、職名、氏名、生年月日、負傷事由、部位

十月六日*矢賀救護所閉鎖。日本医療団矢賀病院となる。

十四日*午後二時より戦災戦没者合同慰霊祭、覚法寺にてあり、警防団員太田、難波、国司、秋山四氏へ五十円の香典贈る。

十七日*午前十二時より覚法寺にて町内会と警防団にて戦時中の終戦処理等の慰労宴あり、団員、復員者も加えて甚だ盛会なり。

十二月二十五日*次に貼付の如く年末夜警を行う。

三十一日迄*今年は青年団加入せず、警防団単独なり。青年団夜警を行わざるは本年始めてなり。

一夜の経費三十円支出す。合計二百拾円也

(四)

炎のなかに 原爆で逝った級友の25回忌によせて

旧比治山高女第5期生の会

第二総軍に動員された学徒

秦政子

(1) 安宅先生に会うまで

朝からてりつける陽をかざすすべもなく、部厚い防空頭巾と非常袋を肩に、青いゴム草履をバタつかせながら駅裏の藤の茶屋へいそいだ。

第二総軍(畑司令官)の暗号班に動員された女学校四年生菊組二十名が藤の茶屋に集まる。私はその引率教官であった。我等のオアシス藤の下で隊伍をととのえ、もんぺ姿も凛々しく歩調をとっていつもの様にぎっしり並んだ兵士の右端に一人で朝礼の位置についた。それは又最後の朝礼でもあった。

戦争たけなわの十九年秋、南校舎が軍服縫製工場となり三年菊組が動員されて毎日毎日将校のズボンを縫った。出来たズボンが山と積まれてもミシンを踏んだ。翌年の春頃から「広島もあぶないのでこの工場もずっと山奥へ疎開するらしい」と偕行社から派遣された人達が噂をはじめた。それを裏づけるかのようにズボンが段々少なくなった。梅雨空にも増して暗い気持の六月、ついに学校工場は閉鎖された。

こんな時に第二総軍の暗号班に動員された生徒は、まことに意気軒昂、国に殉じるの心意気でもあったのだろうか。

その朝も一死報国の誓いと体操が終りいつものように生徒は本館に消えた。(暗号班の性質上、身分を拘束するようになるからと、朝礼までしか生徒の行動はわからなかった。)

本館からずい分はなれた別棟平屋の控室、その控室は時々倉庫のかわりにもなるらしい。隣の部屋へ女学院の一年生が動員されて、毎日数学の書き方練習でもしているように見えたがその内容はだれにもわからなかった。

控室ではよく本を読んだ。長塚節、赤彦、百科辞典だけは疎開させたいと思っていたので、とても疎開出来そうにないものを片端から読んだ。生徒にも貸した。丁度その日は亡くなった木村一二三[ひふみ]さんに「レ・ミゼラブル」を貸した。次は「緋文字」をもって来る約束もした。戦争で焼けなかった私の書棚には、「あゝ無情」のカバーとその日の一二三さんの美しい笑顔がのこされた。

控室にはたくさんの机、腰掛が積み上げられていた。しかし外から入るとヒンヤリと気持ちが良い。腰をおろしてホットした瞬間がああ。文字通り何が何だかわからない。どれだけ時間がたったのかも。

自分のまん前に爆弾が落ちたのだと思った。白く、いや黄色く光った様な気もする。ただ落ちつこうと思った。やっと外へ這い出すと今まで全然気のつかなかった大きな煙突が、目の前に突立っているではないか。そのうしろにはガランとした白っぽい建物も。誰もいない。音もない。異様なにおい。控室も隣の部屋も押しつぶされて屋根だけが巨像でも伏した様に横たわっている。耳をすますと蚊のなく様なうめき「おあさーん」「じょうとうへいどのー」ときこえるではないか「大変だ」うちの生徒も? はじかれたように走った。すぐ本館が見えた。もとのまま泰然とそびえているではないか。よかった。つぶれたのは私たちのところだけらしい。早く兵隊さんに連絡しよう。それにしても誰にも会わないのはどうしたことだろう。営庭も爆弾の煙で見通しが悪い。煙のはるか向こうにバラバラと小さく走っている黒い影。生徒だ。私は息を切らして走った。だのにその影も屋気楼のように消えてしまった。きめられた小高いたまりまで一息に走った。そこにも、もう生徒のかわりはなかった。しかし全員無事に逃げたのだと安心した。早くかえって、学校長に報告しよう。片方しかないゴムぞうりを右に左に何べんも穿きかえたが歩くと足の裏がチリチリいたむ。

目の前がバツと明るくなった。黒々とそびえていた本館はみかん色につつまれ菊の紋章があざやかに光る。みるまに本館は火を吹きぐらっとゆらいでくずれ落ちた。美しく壮観とも見える本館の最後であった。町が燃える。線路の枕木さえも燃える。メラメラと。地獄火さながらに。

尾長の町から愛宕町へ出て学校へ帰ろうと思った。しかし焼け落ちた家も道路も燃えくすぶりどこからも向こうへは渡れない。それにしても穿くものがほしい。又二葉の里まで引き帰した。木立の中の人影に思い切って声をかけると「どれなりとおはさなさい」とやさしく親切に下駄をもらったことがひどくうれしい。足もかるく駅に向かったトタンに安宅先生にパツリ会った。

「先生…生徒は皆焼ける前に逃げました…」あとはもう声を出して泣いた。「元氣出しなはれ」「学校は無事よ。」よかった早く学校へ帰ろう。

(2) 傷ついた学徒との出会い

ずい分歩いた筈なのに広島駅はまだまだ遠い。焼けただれた被爆者が練兵場に避難して来る。男女の見わけもつかぬ顔。帽子のあとだけ白い兵士。焼けのこりの布切を引きずり、つぶやきながらさまよう老婆。それなのに涼しいところもない。救護所らしいところもない。牛田の道から、わかめのようなもんぺをぶらさげて夢遊病者のような女学生がやってくる。あ、生徒だ。「加治さん。」又一人「新内さん」こんなに広い練兵場でよくもまあ…。それにしても新内さんはひどい。あのパツチリした目もあけない。加治さんは二葉の里の家まで帰れるだろう。新内さんをどうにかしなければ……。

(加治さんも新内さんも、学校工場が閉じまるまでの受け持ちの生徒で軍管区に動員されて被爆したのだ)

新内さんをどうしよう。陽は又やけにサンサンと照りつける。

暑い練兵場を歩きまわった。テントの張られたところは皆のぞいた。とにかくあの子をどうにかしたい。どのテントも半裸の被爆者でぎっしり。すでにうごかぬ人もいくたりか。

だからともなく、「重態のものは幼年学校に収容される」私は新内さんのところへとんで帰った。新内さんがいない「先生が帰るまでここにいるのよ」と言っておいたのに。どなたか傷ついた学徒をあわれんで涼しいところへ運んで下さったにちがいない。ガッカリして草の深いところに腰をおろした。

みると少しはなれて「先生ココニイマス、ニイナイトシヨ」焼けばっくいで書かれた立札が目についた。新内さんはまるで箕虫のように拾い集めた木片[きぎれ]でかこまれ、その前に私に知らせる立札が置かれていたのだ。

「新内さん。先生がかえったのよ」うめきに似た反応…。

「すぐ病院へつれて行って貰うからね。」「……」「かぜをつくってもらって涼しかったね」「……」「元氣を出すのよ」「……」「先生はもうどこへも行かないからね」「……」

新内さんは何にもいわない。返事が声にならないのだろうか。

藤をつくって、立札を立てて、学徒をいたわってくださった親切な方。こゝでこうしてじっと待ってくれたこの子…二人の心情をいく度も思っただけをぬらした。

それにしても幼年学校へ収容される作業はどこではじまっているのだろう。ながくながく二人で待った。日も暮れはじめ、ひどかった暑さもやわらいだ頃担架が来た。待ちに待った担架が。「ここにいます。お願いします。学徒です。」新内さんは、軽々とかつがれて牛田に通じる道をゆっくり運ばれて行った。

いつまでもいつまでも黒い担架の列を見た。

トボトボと二葉山ろくの第二総軍のたまりにかえって、木村さんの亡くなった事を知らされた。残照が一瞬あたりをあかるくして、長がかった一日の終りを告げた。

(3) 加治さんを見舞って学校に帰る

朝ざりか、人影はまだ黒い。ふもとの茶屋で口をすすいだ。その流れに動かぬ人がはまっている。屍なのだ。私にはもうこわいとかむごいとかいった神経が麻痺してしまったのだろうか。加治さんの家はしんとしていた。空襲を案じてか庭につくられた大きな壕にやわらかそうなふとんにくるんで顔だけ出してねかされていた。

「加治さん。」「千世ちゃん、あなたの好きな先生が来て下さったのよ」お母さんと二人で声をかけたが返事もない。「昨日はずい分苦しかったです。」はた目には安らいだぬりに見えたがもうすでに意識もないのか。枕元におかれた、たえて久しく見たこともない果物の缶詰は口も切られていなかった。その足で駅前、荒神橋、東雲町を通過して学校に帰った。道で「肩に血が流れていますよ」と注意されたことを思い出し傷ついた頭にソッと手を触れて見た。

(4) 亡くなった木村一二三さんのこと

(学友灘岡さんの話)

朝礼がすんで、今日からいよいよ特別の仕事をして貰うからと二階の別の部屋へ引率されました。私は柱の前に、木村さんは私の隣にいました。説明をきき初めたとたんにあの爆弾です。まっ暗な下に落ちましたが木や道具にはさまって身動きも出来ません。「学徒を出せ…」「一番に学徒を」きき慣れた上官の声がきこえます。私も兵隊さんに出て貰いましたが並んでいた木村さんはいませんでした。

(お母さんの話)

その日主人がひどいやけどで、かえって来ました。その騒動でごたごたしましたが、どうも胸さわぎがして落つきません。「一二三がかえらんが、第二総軍まで行って見てくれんか」と姉をやりました。夕方おそく「お母さん。何を云うても力を落しなさんな。一二三が死んだのよ」やっぱりそうか、からだ中の力が皆ぬけたような気がしました。翌日すぐ第二総軍にまいりました。一二三は書類専用のエレベーターに押しつぶされて足だけ見えていたそうです。私がまいりました時には死なれたたくさんの兵隊さんをつみかさねて焼いておられました。一二三は学徒だからと一人だけ白い毛布に包んで焼いたと云ってかたわらの骨をみせて下さいました。見おぼえのあるバックルが形をのこして灰になっておりました。よく揃った歯もきれいにそのまま残っておりました。一二三にちがいないありません。むごやむごや、私はくらくらし気分が悪く立っていられませんでした。慰霊祭がすんでからお骨はとどけるからと言って貰いましたがそのまま一二三をおいて帰る気になれませんのでお舍利さんだけもらって帰りました。

歩けなかった野村さんの話

兵隊さんに出て貰いましたが足が立ちません。仕方なく大きな私をおぶって走って下さいました。途中学友がかわって戸板で東照宮の下まで運んでくれました。救護所というのですが別に手当もうけず伏したままでした。夕方上に運ばれましたが女学院の生徒がたくさん避難しておりました。比治山の生徒は私が一人でした。その夜小さな乾パンとコンペー糖の配給がありまして、翌日母が荷車で迎えに来てくれるまで板の上に伏しておりました。

その日の学徒

第二総軍では木村さん一人が亡くなり他はそれぞれに安全なところへ落着いた筈であるがその日の学徒で今わかっている者の氏名をかかげておく。

天登典子、蔵田美紗江、後藤富士恵、定森茂子、底押町子、樽谷重子、中村コトミ、灘岡幸子、野村栄子、林間子、平村キヌエ、福川妙子、細川民恵、松宗静子、満田綾子　以上

原爆の思い出

平松イチ子

その時、事務室で転出生徒の事務手続をしていました。瞬間、校庭の南側を鋭い五色の強い光線が目につくと同時に、玉沢ミサエ先生と私は事務机の下にもぐり込みました。何かしらただならぬ胸さわぎ。何分位たつてか、ようやく頭をもちあげてみれば、天井は、あわや落ちる寸前、窓ガラスは吹き飛び、屋内で朝礼して居られた校長、山地両先生は、頭から血を流しておられる…。生徒も傷をしたり、あまりに突然のことで、泣いたり、さわいだり一瞬こして全く修羅場と化しました。

ガラスの破片があちこちにたったりした生徒は、私の手になるものは抜いてみましたが、ただ一人目の中にさきった石木さんののは、あまりの恐ろしさにどうすることも出来ず、早く市内の医師のもとにと帰してしまいました。

この状態を一刻も早く偕行社と司令部へ連絡するよう校長先生から御注意を受け、直ちに電話しても不通。どうしてもかかりません。学校のが故障とばかり思い、大河の警防分団へ走りまして、はじめてただならぬことを知りました。

全身大火傷、男女の区別すら見分けられない姿で町からとぼとぼ歩いてくる人達に出逢いました。

中国軍管区司令部（旧大本営跡）暗号通信係として学徒動員で出動中の生徒。第二総軍（大須賀町）、中電製作所（大州町）に動員中の生徒等々を気づかぬ、校長先生は、日夜東に、西に生徒の姿をさがし求められ、情報を学校にもって帰られ、自宅のことなど少しも振り返られませんでした。私は翌日、焼けただれた町なかを、幼年学校跡に收容されている生徒の様子を見に出かけました。さわいば落ちるようなバラックの下に、紺のもんぺの制服、白いきれに名前を書いて縫いつけたのも、むざんに焼きちぎれている姿。

だれもが息苦しさの中からもただ職務のことばかりで、一言もあの苦しさを訴えない、忠実なその貴いおとめの姿、胸をえぐられる思いでした。

観音様のような顔をしていた水野さん。家族に看られながら荒城の月を口ずさんでいた躍場さん等々…。引率の富樫先生は全身火傷、下帯までちぎれています。晒の一片でも不自由な時代、ようやく新しい手ぬぐいで縫い、校長先生から半分いただいたトマトを手で小さくちぎっては口に入れてあげれば、とてもよこんで、「ああおいしいおいしい」と両手を合わさんばかりの感謝いっぱいの表情があふれていました。

それから幾日か、似島に收容されている生徒を気づかぬながら、様子を見に行きますと、なんと白布に包まれた小さな箱を沢山渡されました。夕陽の沈む頃、泣きながら学校に帰り、校長室に安置いたしました。

校長先生と毎日水や香花をたむけ、一日も早く、御遺族にとよびかけて、お渡しすることが出来ました。

まだまだ、たくさんことが走馬燈のように浮かびますが、とうてい私には書き表わすことが出来ないのが残念でございます。

合掌

（尚、気づかっておりました石木さんの目、ガラスのささった方は、とうとう駄目になりましたが、結婚されて二人のお子様にも恵まれて、お幸せにお過しの御様子を承り、ほんとうによかったとよこんで居ります。）

軍管区司令部に動員されて

荒木克子

（旧姓板村）

昭和二十年八月六日午前八時十五分

中国軍管区司令部指揮連絡室。ピカッと光った瞬間まっ暗になった。“B29”の警戒警報を送信している最中である。ピカッ!電気のショートかと思ったとたんドカーン。机上の電話機はふっとび、もちろん机もとばされた。立ち込めるホコリで一寸先も見えない。気がついた時日頃習った通り指で目と耳をおおっていた。今の護国神社大鳥居の南側の壕である。

比治山女子高校（当時の比治山高等女学校、国信玉三校長）の三年生のうち約九〇名がここに動員され三〇名ずつ班を編成し、三交代で昼夜兼行である。主な仕事は中国地方の監視哨、飛行場、高射砲隊などへの警報の連絡事務だった。

「日本が絶対勝つ」「一億総決起」「進め一億火の玉だ」。勝利を信じきっていた私達に唯一すじにお国のためと感激し、大事な仕事を任され身がひきしまる思いだった。勿論出席率は一〇〇%だった。五日夜は私達二班の勤務。その夜から翌六日朝にかけて、相ついで敵機の襲来（七月下旬から十数日間一度も空襲がなかったのは太平洋上の低気圧のため）があり、一睡もしなかった。夜勤は一班が二つのグループに分かれ、午前一時を機に交代するシステムになっていた。交代の直後、敵機の襲来があってやっと眠りについた前班も含め全員部署につけの指令。その後は警報の解除のいとまもなく、四時すぎまでB29が広島上空に進入していた。やっと解除になり疲れた身体に思いきり吸い込んだ明け方の空気は冷ややかで気持ちがよかった。生気を得て友だちとの会話を楽しんだ一時でもあった。

七時すぎ宿舎にかえって朝食をすませる。しつけにきびしい富樫先生の優しい思いやりのある「君達は欲しくなければ無理するなよ。腹でもこわしたら大変だからな。残飯にして捨ててもいいから体を大切にしろなさい」とのお言葉が心に残る。いつもなら御飯を少しでも残そうものなら、もったいないことをするとよく叱られていたものだから。食事を終えて再び勤務にかえる途中、出勤の一・三班に出会い無邪気に朝のあいさつをかわした。それから数分後、あの恐ろしい原爆

投下。

壕内で被爆したため、私達驚怪もなく、殆んど全員無事避難することができた。私が壕の外へ出た時はあたり一面、煙幕をはったみたいで何も見えなかった。只倉田さんが顔一面に血が流れてまっかに見えたので、皆びっくりしたが大したことがなくてホッとしたのを憶えている。その直後大倉さんと二人で消火のためのバケツをとり壕内に引き返したのだ。四国軍管区司令部のある善通寺からの通信をいらいらしながら受けたのもその時。今思えば全市火の海になる位の被害の中でよく電話が通じたものだと思ふがその時は早くすませたいの一心だった。案の定、外に出てみると級友は一人もいない。大倉さんと二人だけの行動はこれからじまる。

下敷になった兵隊さんの救出。大した力もない私達にはどうにもならないことだったが傭員の松井さんと三人で死ぬ思いで一生懸命やった。（でもそのおかげでただ一人ではあるがその方は今も健在と聞く。）私達が大本営そばの土手にかけ上った時には、全く目を疑うばかりの光景に出会った。見渡す限り火の海なのだ。最初壕の中で連絡にかけ込んで来た兵隊さんは「お堀に爆弾が落ちた」、と云われただけだったのに。一体どうなっているのか、これなら私の家も家族も全滅だとはんやり思ったその瞬間に、広島城の表・裏門共に焼け落ちたとの知らせ。ついに脱出出来ず燃えさかる火の中にとどまらざるを得なかった。

ついさっきまで広島を誇りとしてそびえていた美しい鯉城の天守閣も、大本営の建物もあとかたもない。司令官のいらした本館もかき消す如くで、あたり一面は、がれきの山。

丁度本館の建物のほのか下の方から“たすけて”と助けを求めるか細い女の人の声が聞きたが、全く手の施しようがない。どうにもならず焼死するであろうその人の最後の声に耳を蔽ってしまった。一番ひどかったのは何時頃だったかさっぱり判らなかつた。大本営近くの小さな池の傍で、何物をものみ込んでしまいそうな火の海に取り囲まれて、ほんとうに身が焦げてしまいそうであった。池の水とはいっても底に少しばかりあるだけのきたない水だったがそれを浴びても数秒とはもたずすぐ乾いてしまう。何度も何度も本能的に水をかぶっていた。一緒にいた青木参謀は、上半身真っ裸でその背中には指二本大のくさった木のかけらがささり込み、そばに横たわっていた中尉さんは頭が落ちてしまって脳まで見えていた。負傷者も数多くいたが、もう恐ろしさなど全然感じなかったように思う。ただ水を欲しがるその人達に一口の水さえあげられなかったのがお気の毒だった。どれ位たったか例の“黒い雨”が降った。痛い位大きな今迄に見たこともない気味悪いほどの大粒の雨であった。動ける者は近くの避難壕に身をさけた。おかげで火勢は大大分下火になり、九死に一生を得た思いだった。科学的な理由等全然判らぬ当時としては、ただ神の救いと思えなかつた。それに元気づけられて、動ける者はみんなで一日中大本営あたりで傷ついた人達の救助作業に当った。一・三班の人達は一体どうなっているだろうか。丁度あの時刻にけやきを持って朝礼の最中だった筈だが、早く見つけ出さねばと心はあせった。先ず兵隊さんの指図で下敷きになった人々を運び出し、運よく焼失をまぬがれたお米で御飯を炊き、おむすびを作り兵隊さんの短剣を包丁代りに野菜を切りお汁を作って、出来る限り手わけし配って歩いた。大本営の下敷きから救出した富樫先生、藤本弘子さん、野村とし子さん、とは口をきくことが出来た。殊に先生は、御自分は今にも死にそうな息の下から「みんなをこんな目に会わせて申し訳ない。許して欲しい。」と繰り返して生徒達にわびておられた。

旧陸軍幼年学校に面した土手近くで浜岡緑さんと須川裕子先生に会った。ひどい傷だった。多くの人は誰とも判らぬほどかわり果て、衣服は爆風ではぎ取られその上皮膚もまるでボロぎれのようにぶら下がっていた。浜岡さんの片手は手首がほんの少しくっついていてだけでブラリとたれ下がっていた。幼年学校へ医療作業のお手伝いに行く私達の後を追ったのか、それにお水が欲しかったのか、浜岡さんはお堀にかかった城東橋の所までたどりつき後は何処を探しても姿は見えなかつた。多分あやまってお堀の中に。

その夜は勤務室だった壕の中にねた様に思う。一夜郊外などへ避難していた級友達も三々五々帰って来た。元気な姿を確かめ合った時には思わず抱きあつてうれし泣きした。

明けて七日は共に元気な五・六名がジリジリ照りつける真夏の太陽を背に級友を探して歩いた。私たちのグループは常盤橋方面。河原で木本典子さんを見つけた。全身大やけどですでに冷え切っているため皮膚は堅くなり、担架に移す時“ズルッ”とむけてしまう。あまりのむごさに言葉もなかった。八丁堀の福屋百貨店に収容されていた稲住幸恵さんを見舞う。救援物資として送られて来たミカンのかんづめを持って行ったのだから福屋の建物は外壁のみを残し内部は階段のみ、多くの人が収容されていたが彼女は二階に寝ていた。

今の県庁、市民病院のあるあたり（当時の西練兵場）を通って行ったのはもう日が暮れてからだったが、広い練兵場ではあちこちに、あお火が燃えていた。無念の思いで死んでいった陸軍病院（近くに第一、第二分院があり傷病兵は多数練兵場に出て黒こげの状態で死んでいた。）の兵隊さん達の魂の燃焼だろうか、何か訴えているようだと同行の樺村美代子さんと話したのを憶えている。広島通信病院に西崎満枝さん。よく肥えて、明るく愉快な人だったが、「お風呂に入りたい」とうわごとを云い続ける。「心臓の丈夫な人で、普通ならもう駄目な症状」、とお医者さんが話して下さった。

その夜は山中助市先生と友人と三人だったが、その帰途先生は無残にくずれた城をぼんやりと浮かびあがらせている月を見上げながら「あの月は何と云うか」、と聞かれる。何のためらいもなくまた情緒もなく「上弦の月」と答えた。私達にあれこそ荒城の月だ。としみじみおっしやつた。その場の光景をその言葉と共にあざやかに思い浮かべる事が出来る。

造力満子さん、坪井喜代子さん、佐伯俊子さん、水野タケ子さん、奥野奈智子さん、躍場昭子さん、山崎美枝子さん、斉藤偕枝さん、森本允子さん、土屋匡子さん、武田和子さん。次々と救護所にあてられていた幼年学校の校庭に重畳して来た。意識はわりとはっきりしててみな一様に自分の仕事を気にし、私達に問いかける。「敵機襲来、警報を出せ」、「勤務の交代をたのむ」、「通信器具を運んでくれ」、「監視哨へ情報を送れ」、などなど。地獄の様な責め苦にさいなまれながら、心はひたすらお国を思う十五才の少女の純真な気高い心。ある人は「手にしたワイヤーが重い」という。校長先生がかわってあげるから宿舎にかえってひと休みしなさいといわれると、「ありがとうございます。ではお願ひします。」といってそのまま永久の眠りについてしまった。山崎さんは生きながらにハスの花

のうてなにて、極楽を夢見ながら死んでいった。校長先生と一緒に泣いた。躍場さんはお姉さんに「荒城の月」を歌ってもらいながら死んで行った。全身の大やけどに一杯たまったうみで、無数にわいたうじ、あまりにむごい。その中で水野さんはおまえみながら息を引き取った。その瞬間の天使のような美しい顔が今も印象深い。

薬など十分になかったが、みんな一生懸命働いた。水を欲しがる人達に傷に悪いかと殆んど飲ませてあげられなかったのは今もって心残りである。校長先生、秦先生、平松先生方の献身的な看護が続き、私達に無言のおげましを与えてくれた。翌日は宮川さんと二人で兵隊さんの作業を手伝い、幼年学校の校庭の片隅に掘られた穴の中で死体を焼いた。大きな木材に油が注がれて燃え盛っていた。どこの誰とも判らぬ人達、誰の骨なのか。この人達は家族のもとにちゃんとかえられるのか。ひそかに案じながら遺骨を拾った。焼いても焼いても死体はふえる。夜になってもその火は消えず、お堀端の大木の夜となく昼となく燃え続ける炎も、あたりが暗くなると、くっきり浮き上がってその恐ろしさを一層かりたてた。

その頃だったか長崎に広島と同じ型の新型爆弾が落とされるかも知れないという噂を聞いたのは、全国各地から救援隊が到着した。救援物資も送られて来た。心強かった。負傷者は以島などの仮救護所に運ばれ治療を受けた。安否を気づかって次兄がたずねて来てくれた私は安心して作業に精を出した。我が家にやっと帰れたのは十日の夕刻と思う。紙屋町の交差点に立つと、はるか彼方の宇品も己斐も広島駅も一目で見渡せた。同じ仁保方面にかえる佃さんと一緒に元気づけながら数日前配給になった地下足袋をひきづって歩いた。その夜も空襲、黄金山の裾にある小屋に避難し両親と共に一夜をすごした。久しぶりにくつろいだ一時だったが、翌朝直ちに司令部へと急いだ。それから山中先生の監督のもとに壕内に寝泊りしながら十五日の終戦の日迄通信事務に力の及ぶ限りはたらいだ。

十五日正午のあの玉音放送は日本の必勝を信じていた私たちにいいようもない衝撃だった。兵隊さん達は尚更のこと。将校さん達もみなくやし涙を流していた。ただ勝つことを信じて死んで行った級友達も一体どうなるのか。やり場のないくやし気持ちにとらわれたことを忘れることは出来ない。

十八日私達動員学徒の解散式があった。二十日に級友数名と再び司令部を訪ねた時、不思議にも須川先生の御臨終に立ちあうことになった。やさしく美しく日本の女性らしい凛とした気魂の感じられた先生だった。思えば被爆前夜、はじめて先生の剣舞を見せてもらって皆その素晴らしさに感動させられたのだった。最後に児島高德の詩を父上と共に朗詠されながら息を引き取られた。

級友六十五柱の霊よ。安らかに眠って下さい。年毎にめぐり来る八月六日、校長先生と生き残った者のうち七・八名は被爆当時の現場に集まり、花束を捧げてめで福を祈っています。

そして二度とあのような恐ろしい事を繰り返さぬようにと。

通信室・終戦まで

恵美敏枝

(旧姓西田)

太平洋戦争も終り近い頃であった。

アッツ島、グアム島とあいつぐ日本軍の玉砕、沖縄をはじめ本土も度々空襲をうけ、教室でも悲しいニュースを聞かされ、先生も生徒も共に泣き、又励まし合ったことも幾度もあった。その頃学校でもすでに上級生は学徒動員で出動して居り、今度は、いよいよ私達三年生の出動となった。三クラスの中から六十余名が選ばれ、基町の広島師団司令部へ出動が決った。

終戦の年の四月。一カ月間は軍事事務に必要ないろいろを習った。それは飛行場や監視所の名称、そして気象通報、通信記号、等々情報部担当の兵隊さんに習い、皆ただ一生懸命覚えた。そして五月からいよいよ実務につくことになった。

私達は三つの班に分けられ、私は二班の一員となった。そして何かしらひきしまる思いで副官殿の訓示を聞いた。その中で特に印象深く今も残っている言葉がある。

「君達が女子学徒であっても、本日より一兵士として扱う。各自よく心して最後まで任務を全うされし。」この訓示も直立不動の姿勢で聞き、誰の顔も兵隊さんに負けてはならないといった強い気持ちがあふれ出ていた。“広師”と印刷された白いはちまきを固くしめ、カーキ色のユニホームにもんぺ、そして素足に下駄をはき、救急用品と非常食を入れた救急袋を肩からさげ、身支度をして家を出る。

「今日もしっかりがんばりなさいね。」といつも変らぬ母の言葉に励まされて、営門前の橋の所へと急いで集合、引率の先生と共に門に入る。そして司令部前に整列、分隊長殿に人員報告、それがすむと大本営跡で朝礼がある。五カ条の御誓文を大声でとなえ、上官殿の訓示の後、はげしい教練が行なわれた。

午前八時半、私達は前後の勤務の人と交代をして、情報室、指揮連絡室、作戦室の三つの部屋に分かれて勤務につく。情報室には情報機が多く並べられ、監視所からしきりと敵味方の情報が入り、パチパチと情報機で次の場所へ送っていた。

「〇〇監視所、東南〇〇キロ。敵味方不明機が一機、北に向かって進行中。以上。」とかいろいろな情報が次ぎ次ぎに送られて、一刻も休む暇も無いこともあった。一方、作戦室では参謀殿が壇上にずらりと並び、壁に作られている大きな地図の中の豆ランプの進行（赤いランプは敵、青いランプは味方）をじっと見守っていた。そして敵機が近づくとか警報が出される。指揮連絡室の電光板に出された文面を次ぎ次ぎと電送するのが私の仕事であった。空襲の烈しい時は昼夜続行したこともあったが、誰も弱音を吐く者はいなかった。みんな、はりきってよく働く、それを誇りとしていた。

しかし苦しいことばかりでなく楽しいこともあった。私達が歩調とって歩くと、すごい下駄の足音がするので、「下駄部隊が来た。」といって兵隊さんに笑われ

た。その後に全員に地下足袋が配給された。でもそれは、もともと兵隊さんので、十半とか十一文しかない。学徒の中では足にあうものは二、三人しかいなかったのでは下駄をはくより仕方なかった。

宿舎は堀のそばの石垣の上の建物であった。そこで食事や、寝起きをしていた。各自が家から持って来た、どんぶり一個と皿とはしが、きちんと食器棚に並べられ、炊事当番は肥桶同様の桶二つに御飯とおかずを炊事場から運び分配した。いわゆる質より量の食事でもとても食べきれず、先生の目を盗んでは窓から堀へドボンと落したこともあった。兵隊さんは皆食事が少なくて足りないので、私達のを、おすびにこしてそと渡してあげたこともあった。

夜は一人に毛布が五枚づつ手渡され、一枚はくるくると巻いて枕にし、二枚を上、あと二枚を敷き、消燈ラッパの合図でいっせいに寝た。朝は「総員起し五分前！」との先生の合図で目をさまし、ラッパの合図で飛び起き、洗面清掃、そして朝食であった。

中国管区に警報が出された時を除き、二交代で夜の軍務についでいた。夜中に起こされる時は、皆目をこすりこすり交代した。

六月のある晩、「〇〇岬南方〇〇マイルの海上に敵の大軍が日本に接近しつつあり。」との情報が入り、にわかに室内には重苦しい空気が漂い、次の情報を待機していた。「先の敵の大軍は現在一向に進行せず。以上。」そして息づまるような時が二時間過ぎて、「先に報告せし敵の大軍は、夜光虫の群と判明せり。以上。」この知らせに皆はどっと歓声をあげ、安心と空腹が同時となり、皆で乾パンをバリバリ食べたことだった。

しかし七月に入って大都市に空襲が烈しくなり、ぞくぞくと被害情報が入ってきた。その度毎に胸が痛かった。今度は広島が爆撃されるかも知れないと誰もが思い、生死を共にする覚悟を固めた。学校工場に残っていた人や中配へ出勤していた人の中からも、「先生師団へ行かせて下さい。あそこで死ぬのが本望です。」と口々にいっていたとか。その言葉通り、空襲が頻繁となり十四、五名増員された。そして一週間後に広島市民の忘れることの出来ない八月六日となった。その前夜、呉地方が集中攻撃を受け、作戦室には師団長閣下も参謀殿も非常召集され、非常警戒に備えて地図をみつめて居られた。私達も一睡もせず、目を真赤にして勤務した。来襲した敵機は大変な数だったが広島市には一発の爆弾も投下されなかった。

六日、午前四時頃、一応警報がとかれ、師団長閣下以下皆自宅や兵舎にひきあげられた。そして七時過ぎ、又敵機が広島の上空へ近づき、警報が出され、その後日本海へ脱出し、旋回中ということで警報もとかれた。私達も交代で朝食をとり、帰宅の準備を始めていたが、その頃又、「先の敵機が反転して広島県へ侵入しつつあり。」との情報で又、警報が電光石火に出された。「八時十三分広島県警戒警報発令。」私は宇品高射砲と吉島飛行場への二つの電話に電送を開始した。その時が八時十五分。運命の時だった。私は受話器を耳に当てたまま、机の下に入っていた。一瞬、鈍い音がして電燈が消え、君の悪い静けさが続いた。それは長いような短いような時間だった。誰かの声をたよりに手さぐりで外に出て友を探し求めその姿に驚嘆した。すぐ前にあった木も建物も皆こわされ、勿論広島城も見えなかった。そしてなぜか息苦しくハンカチで口をおさえて大本営跡の前へ急いだ。そこには私達と交代する人々が朝礼の後でわら人形を相手に竹槍の練習をしていたらしく、下敷になっていた人は手に竹槍を固くにぎっていた。その姿は本当に痛々しかった。

誰もかれもすぐには名前を思い出せないような変りようで、ただあつ気にとられていた。そのうちに二部隊方面から火の手が上がって、皆城の裏の方へ逃げた。そこでは元気な人は鍵山さん、宮田さんで、末盛さんや、藤井清子さんは服もぼろぼろで傷ついていた。

城の石垣をずるずるとすべって下へおりた。幼年学校へ通ずる橋も穴だらけだったけれど、どうにか渡ることが出来た。くずれた学校の建物の中から、助けを呼ぶ声がしきりにしていたが、幾重にも大きな材木が重なっていて、とても私達の手にはおえなかった。それよりも傷ついた友人を早く安全な所へ連れて行きたくて、見て見ぬふりをして多くの人と共に白島の方へ出ていった。そして知らず知らずの間に泉邸に来ていた。川ぞいの土手は、兵隊さんや町民でいっぱいであった。

ときわ橋の鉄橋の上では貨車が燃えていた。そして泉邸の木にも火がつき、じりじりと音をたてていた。頭に深い傷をしていてすっかり元気がなくなった末盛さんは、「死にそうだ。死にそうだ。」と本当に苦しそうだった。藤井さんは、わりあい元気で、よく身なりを気にしたり、「連れて逃げてね。」と何度も云った。そこで毛布をみつけたので、川の中に入って毛布を皆でかぶって水のひくのを待っていた。

そのうち、牛田の不動院へ行けば何とかなると思ひ出した。土手では、ぐったりと疲れはてた人々。「天皇陛下ばんざい！」と叫んでいる兵隊さん。泣きわめく子供等さまざまで、無傷の者は私達二、三人だけのようだった。その時、にわかに空が曇り、大豆でも落ちてきたのかと思われる大きな雨と、すごい風で、あつという間に私は川底へ押し沈められた。ずるずるの川の石と傷ついた人にはさまれて、もうこれで死ぬのかと思った。やつとの思いで起き上がり、あたりを見ると、一緒だった木元さん、鍵山さんが見えなかった。あのさわぎで川下の方へ流されたのだった。

向岸の河原が大分出て、川幅がせまくなってはいたけれど、流れがきついで傷ついた人を連れては、とても泳ぎきることが出来なかった。その頃倉田さんの声がして、近くに藤井淳子さんも居られるとのこと。でもどうしたらよいものか考えが浮かばない。

宮田さんが、たるが流れて来たので、それにつかまって川を渡ろうとして泳ぎ出されたが、その姿も見えなくなってしまうた。

そのうち川上から二そうの小舟が下って来た。その舟には兵隊さんが乗っていた。そして「師団の者はいないわ。」と呼んで居られる。私たちは大声で、「ここに居ります。」と答え、一番先に向岸に渡してもらった。その時の嬉しさは今も忘れられない。

河原には逃げるのに疲れきった人々が、ごろごろ寝ころんでいて、口々に「水を下さい。」といていた。そこで西崎さん、稲住さん、上野さん他十名位の人々を見た。佃さんや井田さん等元気な人々にも出あった。

日暮れが近づくとも寒く、一枚の毛布を七、八人が取りっこしていた。不動院に行けば毛布もあるだろうと思ひ、倉田さん、井田さん、私は、不動院へ急いだ。着いた頃はもううす暗く、兵隊さん達の姿は一人もなかった。しかたなく寺の床下の石の上に三人はころんで、うとうとと眠ってしまった。

しばらくして「おすびですよー。」といて起こされ、たくわんとおにぎりを食べた。町民の人が作ってくれたのでしょけれど、とてもおいしかった。そし

て有難かった。

その頃広島は真赤だった。消す人もない街は燃え続いていたのだ。そこではじめて自分の家はどうだろうか。親、兄姉は、と次々と皆の顔を思い出し、胸がいっぱいになった。ただ黙って皆真赤な空を眺めていた。

あくる朝、四時頃であつたろうか。未だうすぐらい道を私たちはときわ橋へ急いだ。そこではもう傷ついた人を幼年学校へ運ぶ作業が始まっていた。テントの中には多くの人が集められていた。その姿の悲惨なこと、中には男女の別さえ分らない人もあつた。負傷していない人は数えるほどで、重傷者はかりだった。

情報室に須川先生が居られた。先生は下敷になられたとかで、火傷はしておられなかった。指先の傷が痛むし、臭くて厭になる、といわれて手を出来るだけ遠くへのばすようにして座って居られたが、その時は二週間後に亡くられるとは思われなかった。

その頃友人のお母さん等、家の人も心配して、つぎつぎ師団へ子供を尋ねて来られた。そして我が子の姿に驚く人、無事をよこごぶ人で大変だった。私もおにぎりを作りながら誰か来てくれないものかと待ちわびていたが、誰も来なかった。倉田さんのお姉さんが来られて一緒に家に帰ることにした。

紙屋町へ出るまでの悲惨な有様は一言では書き表わせない。馬は両足をのばしたまま、ひっくり返って目は五センチも飛び出していた。堀の水を飲もうとしてそのまま死んでいる人。堀の中に浮いている人。立ったまま死んでいる人。焼跡から逃げようともがきながら死んでいた人。電車の中でつり皮を持ったままの人等々。それは此の世とは思えなかった。

電車道はまた熱く、電線がいっぱい落ちていて歩くのは大変だった。その中をやっと日赤病院迄たどりつき、貯金局裏の我が家へ帰ってみると、やはり家は焼けていた。誰もいなかったけれど、防空壕の中に蚊帳がつつてあつたので誰か生きていると思って焼炭で“敏枝無事”と書きのこして三人は学校へ行った。日はすっかり暮れて学校へ着いた時は真暗であつた。「誰か居られませんか。」と大声でいったので、先生が出てこられた。中本先生だった。そこで師団の話をして、その夜は校庭の壕の中で寝た。学校は無事だったので、本当によかったと思った。その頃母は火傷の身を、舟で金輪島へ運ばれていたのだった。そして又大竹小学校へ移され、私が尋ねた時は八月十五日終戦の日だった。講堂の板敷の上に寝かされていた母は、いつもの母ではなく、うつろな目で私を見つめるだけだった。もう食欲もなく、時々うわ言をいっていた。あんなにきれい好きの母がこの姿になって、と思ってたまらなかった。四才の男の子、(甥)は何も分らず講堂の中を走り廻っていた。母の足の傷に、うじ虫が群がりうずうずしていた。母は「足が痒いから水をバサッとかけてくれ。」といった。うじ虫がいるともいわず私は泣き出してしまった。母を父に頼んで私は甥をつれて殺人列車にもまれて広島へ帰った。八月十八日朝四時、母は亡くなった。思えば余りにも悲惨な最期だった。

私にとっては誰よりも母を亡くしたことが最大の悲しみであつたが、今自分が母親となって考えれば、我が子を失った親の気持が痛い程分るように思う。多くの友のお父様お母様方の深い悲しみは、二十数年後の今日でも消え去ることはないであろう。

山縣さんのこと

大皇麗子

(旧姓増原)

八月六日から二、三日たったタぐれ、私達ときわ橋の河原に死体の収容に行きました。タぐれのせまった河原には砂浜だけが白く無気味に浮上がつてみえました。

放置された遺体は木本さんと山県さんでした。でもその時はまだ山県さんは生きていたのです。木本さん達をたなかののせると兵隊さん達がかわいいで帰路につきました。総てが焼けた町を夜がすっかり包んでいました。その時不意に、たなかをかわいでいた兵隊さんが「増原さんと言う人いるか。」と言ったのです。はつとしました。何とも言えずこわかったのです。誰だろう。「山県さんが呼んでいるぞ」。ああ山県さん。私はすっかり忘れていたのです。六日の朝河原に避難した時彼女と会ったのです。彼女は空襲がひどくなった大阪から家族と共に広島に疎開して来たのです。そして芸備線の沿線から通学していました。

友達になかった彼女と学校工場の頃から割合親しくしていました。やさしくおとなしい目だたない人柄でした。暗く空を覆った雲と対岸を狂う様にもえている火の海をみながら、経験した大阪の空襲のこわさを語りました。大阪の爆撃もひどかったけどこんなにおそろしくひどくなかったと彼女は言いました。その彼女を河原に放ったまま二、三人の友達と川を渡り祇園の方に避難したのです。彼女は牛田小学校の先生と言う方と二人でふとんにくるまって河原ですごしたのです。そうして私がきつと迎えに来ると言った言葉を信じて今までまっていたのです。

「今から福屋(当時の病人の収容所)に行くから、あんたもついていってあげなさい。」私はとまどいました。恐怖が黒い闇と共に私をおそって来ました。友情、その様な美しいもの一つもなかったのです。ただ死のこわさがひしひしと身にせまって福屋に行くことをしきりにこばみました。今もあの時の情景がはっきりと浮かんできます。

彼女のよぶ声は死者の声の様に心につきさりました。夜の焼跡で死体をやく真赤なほのおが目によきつきました。五、六人の友達は広島城の壕に帰り私一人仕方ない気持で白鳥線のやけあとをとぼとぼとついて歩きました。福屋の収容所は遺体とやけどの人でいっぱいでした。異様な死臭がただよい、くらい電燈の下で苦悶している人々のうめきがひしめいていました。

今夜一晩泊まってあげなさいと言う兵隊さんの言葉もきかないで、私は山県さんにあすの朝はきつと来ることを約束して帰ったのです。

私はこのことが二十余年たった今も深い傷として心に残っています。色白で柔和な顔がいまも心の中にはうふつとしてほえんでいます。純粹で一番美しいと

きに汚れを知らずただ戦争に勝つことのみを信じて死んだ友が悲しく思われます。あくる朝、彼女は亡くなりました。今思えばその夜が彼女にとってどんなにっ
らく悲しい長い夜だったことでしょう。

友達を裏切った様な気持が自身の心の中を去来します。そしてあの夜山県さんと一緒にいたら自身をこんなにくるしめることはなかったでしょうに。おそらく
一生忘れることの出来ないことです。

交換台と共に

岡ヨシエ

(旧姓大倉)

昭和二十年八月六日。

忘れることの出来ない日である。

私はその朝、前夜から勤務していたので、中国軍管区で朝をむかえた。昨夜はいつになく多かった敵機の侵入の為、一寸ほけた頭で朝食を済ませ、真青に晴れ
上がった空をあおぎながら元気をとりもどして、交替迄の勤務に壕に入った。今日は何時よりおそい交替だなあと心の中で思っている中に、八時頃より敵機の
侵入である。そしてすぐ去る。“空襲警報解除”ホッとする気持も東の間、又敵機は広島方面に侵入。八時十五分警戒警報発令の伝令が飛ぶ。私は警報を各司令部、
報道関係に知らせる役目をして居たので、交換機に一度に数本のコードをさして相手をよんだ。(何時もの事なのでさほど緊張感もなかった。)一せいに
出た相手の方[かた]に、「広島山口、警戒警報発令を言いかけた途端ものすごい紫色の閃光が目を射り、何か事故が…と思う瞬間、意識を失った。二、三分もたつたであろ
うか。回復しかけた、意識のぼやけた目に灰色一色だけが目に入った。

舞い上がった砂塵がしたいにおさまり、意識も完全にはっきりして次第に明るくなった部屋の中、私はすわって居た元の位置より二米位飛ばされていることに
気づいた。机は横たおしになり、いすはこわい、ただごとでない光景を目で追う中に、まだうすぐらい部屋の隅に板村さんが手て顔をおおってしゃがんで居る。
思わずかけ寄ると彼女が手をはなした。目のまわりに血が…。

でもよかった、臉にわずかの傷であった。二人は机をざっと元にもどして外に出ようと隣の部屋に入る。どの部屋も誰一人居ない。

板村さんより一歩おくれて外に出た私は一瞬呆然となった。今迄あった司令部も、あっちこちの建物も、ないではないか。ただの木屑と壁土が山になっている
るだけ。私は思わず壕[ほり]の土手の上にかけ上った。広島は街は…。その目に映ったのはあまりにも残酷な瓦礫の町と化した広島であった。赤茶けた想像する
ことも出来ないむごい光景を目にやきつけながら私はその時始めて、「大変だ。」と血のさがる思いをしたのである。下の方で兵隊さんが「新型爆弾にやられたぞ
う。」とどなって言うのが聞こえる。私は元の部屋にかき込んだ。そうだまだ通話の出来る所へ早く連絡を、そう思いながら電話機を持った。九州と連絡がとれた。
そして福山の司令部へ、受信機に兵隊さんの声が聞こえるのもどかしく

「もしもし大変です。広島が新型爆弾にやられました。」

「なに新型爆弾！ 師団の中だけですか。」

「いいえ、広島が全滅に近い状態です。」

「それおほんとうか。」大きくわれる様にひびく声。その内に火の手があがったのであろうか。壕の上の草がパチパチ燃える音が耳に入った。

「もしもし火の手がまわり出しました。私はここを出ます。」

「どうかがんばって下さいよ。」と兵隊さんの声を後に受信機をおく。再び外に出ると炊事場のあたりではもう火がまわりパチパチと木のはぜる音がする。その
音にまじり建物の底から女の人の助けを求める声が耳に入った。

たまらなくなって水をかけようと板村さんとバケツを持って池の水を汲みに走った。でも池の中は建物のくずが飛び散りほこりと砂でゴミすて場の様になって
水は一滴もありはしない。ああ駄目だ他に出来ることは何か…。兵隊さんが下半身を建物の大きな柱にはさまれてもがいて居られる。助けよう、出来るだけやっ
て見ようと二人でかけ寄った。でも組んだ様になってくずれている大きな柱は十五才の少女が力一杯持ちあげても、ピクともしない。傭員の松井さんがそこへ来
て下さる。三人は頑丈な棒を持って来て、力一杯柱をおこす。少しづつ上がった。身体をねじらせて兵隊さんも一生懸命は出る努力をされる。そして人一人を
助けることの出来た喜び。三人は手を取り合って喜んだ。でもまだたくさんの人が…。二人は走る様にして大本営跡の広場へ上った。大本営のまわりの芝生には
負傷された兵隊さんが四、五人おられた。その芝生に火の粉が散ってきて火がつきそうになる。大本営の後にあった兵舎から軍服をとって来て火のついた草をた
たいてまわる。そのうちに手に負えなく

なった。火の手はあちこちにさがりぐると火に囲まれてしまった。幾百年の歴史を秘めた城門も完全に火に包まれてしまった。土手の草々も真赤になって、私
達は物すごい熱気にたまらなくなり、泥水となっている大本営前の池につかった。バシバシに乾燥した髪、あつくなっている服、頭から泥水をかけても一寸の間
にからからにかわいてしまう。

今何時かしら？…あの瞬間からどの位時間がたったのかしらと思ひながら仰いだ空は、けぶってどんより暗い。その中に此の世の色とは思えぬ不気味な赤さに
くっきりと太陽が見えた。その時でさえ、父の顔も母の顔も浮かんでは来なかった。ただひたすらに国の為と教育され職場で何時でも死ぬ覚悟は出来ていたか
らであろう。不意に、大粒の真黒い雨が降って来た。それはドロドロのまるで泥水である。ものすごい豪雨になってあわてて負傷者を壕に運んだ。十分か十五分

かたつものすごい雨が嘘のようにやんだ。私達は友達を探した。幼年学校に通じる城東橋迄来ると浜岡さんに逢った。彼女は右手の関節の内側の皮がさけ肉がはみ出て、関節はくだけ右手はブラブラになっていた。何というむごさだろう。むしように水をほしがる彼女！でも飲み水なんてどこにもないのだ。赤ちゃんをなだめる様にして皆の行方を聞く。

「幼年学校の方へ皆行っただよ。」というので「後ですぐ来るからね。」と念をおして橋を渡りかけて途中迄来た時後でドボンという音。とっさに私は浜岡さんではないかと思った。どうかちがうようにと祈る気持で走って帰ると、水を飲みたい一心の友は、堀に飛び込んですでに助からない状態で浮かび上がっていた。全身火ぶくれになり、目がつぶれてしまい手はボロがさがったように皮が剥がれてしまった可哀想な奥田さん。

私は全身無傷の自分がみんなにすまなくてつらい気持ちでいっぱいだった。お城の裏の方に逃げまどっている友はいないかとお城の下を板村さんと一周した。時間も何時かすぎ木も草もやけ切れて、日もくれかかった頃、一緒に班だった古池さんや、宮川さん森田さん達が帰って来た。再会を喜びながら、他県から救護に来られた兵隊さん達と一緒ににおにぎりを作った。そして負傷されても割合元気な方達に配る。私はおいしいと思って食べた。そういえば朝から何も食べていなかった。仮の収容所が幼年学校に出来て、大本営跡の芝生に居られた兵隊さんもそちらへ移られた。背中に二十センチ程の棒切れが突きささった青木参謀は青ざめた顔で、看護兵の手当てを受けて居られる。

大の男の兵隊さんが脱脂綿を大目に背中に当てて、力一杯棒を抜きとられた。見るまに脱脂綿が血に染まって少々では足りない。

色々な傷を見た。脳天に穴のあいた兵隊さん、脈うつ度に中の肉と一緒にヒクヒク動く。全身黒こげで死んで居る兵隊さん。空をにらんだまま目をむいて死んでいる兵隊さん。お腹が破れて腸がはみ出て死んでいる兵隊さん。負傷した兵隊さんが地の底からうめく様な苦しい声で「おかあさん」と叫んでいるのが暗い夜空に尾をひいて、まるで地獄に居る様な思いだった。つかれ切って何時の間にか私は迷ってしまった。

八月七日は朝早くから森田さん板村さん達と仮収容所へ看病に行く。太田さんもいた。水野さんも向井さんも。全身ひどい火傷のクラスメート、夏の暑さの為に傷に蛆がわいてそれを痛いとひと言も言わず「仕事をさして下さい。」「私は行かなければ…」。「交替の時間です。」と健気[けいぢ]な友の声に私達お涙が止まらなかった。一日中看護につきっきりで七日の夕方 came。一人二人と兵隊さんが亡くなって行く。友達四、五人で表の城門の方へ水を汲みに出かけた。第一の城門わきに、まだ年若いアメリカ兵が横になっていた。しきりに「ウォーター、ウォーター」と私達よびかける。少し可哀想だけど水なんかやれない。

私達の広島を、私達の同胞を、こんなにいためつけた国の人に。

あちらこちらにまだ火がくすぶって居る。城外に出ると、やけにアスファルトが足の裏にあつい。まだとても紙屋町迄行くのも無理であろう。父や母はどうしているであろうか、帰れるものなら帰って元気な姿を見せて安心させてあげたいと思った。夜、壕の中では仕事が続けられた、まだ戦争は終わっていないのだ。情報が入りそれを送らなければならない。あちこちに手伝いにちらばっている為夜の伝令も必要だ。私は幼年学校への伝令をかって出た。途中傷ついた人のうめき声にびくついて走り出せば何かにつまづいた。見れば死体である。暗い夜道はただでさえこわいのに、歯をくいしばってこわさにたえた。帰り道は二、三人の友と山中先生も一緒にであった。死の町に月がのぼり真上にあった。それは細い上弦の月であった。山中先生が「皆はあの月を何と見るか。」と言われた。私は「上弦の月ですか」と尋ねた。みんなも口々に何か言った。最後に山中先生が「あれは荒城の月だよ。」と言われた時みんな一瞬しんとなった。昨日迄そばえていた五層の天守閣はもうそこにはない。くずれおちてしまったその上に伝びしい月の光！！まさに荒城の月でなくてなんであろう。

明けて八日。友達は次々に亡くなって行く。美しい純粋な気持を持って清らかな少女は最後迄仕事のことばかり口にして死んで行った。竹槍を持ったまま即死に近い状態で死んだ西丸さんや佐藤さん服部さん。歌を口ずさみながら全身やけどなのに美しい笑い顔さえ浮かべて息をひきとった友。日本刀を杖にタヤミ迫る空を、じつとにらむ様にして立っていらしかった美しい須川先生。自分のシャツを引きさいて生徒の看護に懸命につくされた、校長先生の慈愛と悲しみにみちた姿！

二十四年たった現在も忘れることは出来ない。

生き残った私達のつとめは、続けられる限り毎年八月六日には集まって若くして逝った亡き友の冥福を祈り、思い出を新たにしたいと思う。

最後に原爆の日に福山の司令部に連絡電話をした兵隊さん、小川国松さんに四十二年二月、東京で奇しき対面をしたことをつけ加えてこの筆をおく。

通信部の解散まで

倉田美佐子

昭和二十年八月六日

前夜空襲警報の鳴りつづけで、とうとう徹夜勤務となった。明けがた、その警報も解除され、ほっとした気持で、あとはただ、八時に交替勤務する筈の級友を待つばかりであった。

当時、比治山高等女学校三年生であった私達は、学業を棄て、中国軍管区司令部通信部に学徒動員として勤務していた。女学生という甘さはなかった。兵士と同じ自覚をもち国の大事に馳せ参じた気魂で張りつめた毎日であった。総員九十余名を三分隊に編成し、二十四時間を交替で勤務していた。飛行情報の受発信、連絡が主な仕事であったため、そこは特に厳重な防禦設備の整った鉄筋コンクリート造りの半地下壕であった。

八時十五分、その壕の開かれた小さな窓一杯に突然、ピカッと閃光が光った途端、室内の電気は消え、ものすごい風圧に目の前の情報機の倒れる音、誰かのかん高い悲鳴、一瞬茫然と立ちすくんでいた私はつきり壕内で大変な事故が起こったのだと思った。周囲のわめき声に慌てて目と耳を両手で押さえ机の下にごそ

ごそとごりこんでいたが戸口にいた兵隊さんの「外にでろ！！」と叫ぶ声につられて壕の外に出てみて再びがく然とした。真暗であった。やがて一面の砂塵がはれるにしたがって目にとびこんだものは、すぐ前にくずれおちた庁舎であり、樹木は残された太い幹だけが虚空に立ち、目を移せば全身血みどろの人々がそこかしこに、のたうちまわっていた。私の顔の血をみて西田さんがとび上がり、早く救護班をとおりおろしながら止血をしてくれたが、その時、大本営跡の広場をころげるように走って土屋さんが助けを求めて来た。それによると残る二コ分隊の六十余名は、朝の竹槍の稽古のあとの訓練中やられたのだという。すぐにその場に駆けつけてみると、もう誰彼の識別さえつかぬ一団となっていて、一様に着衣は縦に切りさいたようにこぼろぼろになり、火傷のために表皮はむけ、手を前にゆうれいのようにかざしたその指の先から、めくれた皮膚がだらりとぶら下がっていた。真赤にただれたその体で、わずかに這い上がろうとしては倒れ、一步進んで転び、さながら地獄絵図をみる思いで手のさしのべようがなかった。くずれた大本営跡の建物の下に誰かのもんぺだけが見え、「助けてくれ」と叫んでいる声がした。元気なものの数人で、くずれた建物の瓦を一枚一枚リレーしてとりのぞいていたが、一かえもある梁が邪魔して、私達女の手だけではどうにもならなくなった時、あちこちから火がたち始めた。とっさに自分の身に危険を感じ、火のない方へ火のない方へ、追われるように逃げだした。城の石垣を滑りおちるように降り、堀にかかっていた非常用の小さな橋をつたって幼年学校にでた。くずれた建物のあちこちから、怪我人の「助けてくれ、助けてくれ」という絶叫をあとにどんどん逃げていったが、急に手先の建物がぱつぱつとやけおち逃げてゆく道がなくなった。しかし、引返すこともならず、まよと一目散に煙の中にとびこみ、無我夢中で走り抜けた。とんでくる火の粉を払いながらやっと道をみつけて進んでいると、くずれおちた石垣の蔭にうずくまっている友をみつけた。空襲の時、白いシャツでは目立つからといってグレーに染めていた見覚えのあるユニホームである。名札を見ると藤井純子さんだった。みなにはぐれて一人だった私は嬉しかった。重傷の彼女は「もう私は駄目だわ」と拒んだけれど、強引にひっぱってやっと土手まで逃げた。浅野泉邸の裏だった。燃えさかる火から逃れるため、本能的に水のあるところを求めて川堤の上は避難者でいっぱいだった。しかし、ここは瀬が早くて渡ることができない。百米先に見える常盤橋は両端が火の海で渡れないし、その向こうの鉄橋には、貨車が横倒しになったまま燃えていた。

気のあせる人達おいて渡り始めたが、急流におしやられ、向こうの川原に辿りつける人はわずかしかいない。その時だった。小さな木片につかまって浮き沈みで流されて行く宮田さんを見た。堤の上から「あっ」と叫んだまどうすることもできない。のちに鎌山さんも同じ溺死体となって川下で発見されたときいて、せっかく壕の中にいて助かった組なのにと思うと猛火をくぐる時、はなれはなれになったことが悔まれて仕方がない。

刻々と増す避難者の中に一人の若い兵士が、うやうやしく掬もっていた詔勅の白い巻物が印象的だった。その人はかぶっていた戦闘帽のあとだけをくっきりと残して頭髮がやけていたが、隣にいた士官らしい人が替って受けようとすると「いや、これは自分が死守するであります」と直立の姿勢で答えた。傍で私の肩につかまって立っていた藤井さんが「憎い米英に負けてなるものですか」とやけただれた目をきっと見すえで歯を喰いしばっていた。

そこへ突如として、対岸から大たつまきが舞いおこった。燃えさかっている木片をふきあげながらみるみるうちに火の渦が川を越えて私達の立っているところまで近づいて来た。周囲の人達おなだれのように一斉に川にとびこんだ。藤井さんと、私は倒れた大木の幹を伝って川にすべりこみ、その枝をしっかりとって体を水に没した。上から火のついた木片がバラバラと落ちてくる。慌ててもくれればすぐに息が苦しくなる。顔を水面にだせば、じりじりと髪の毛のやける音がする。あとで思い出してもこの時が一番恐ろしかった。本当にもう駄目だと思った。やがて、竜巻が去って周囲を見渡してみると、いままでも多勢いた避難者が今の猛火で川下まで押流されて少なくなっていた。藤井さんは私の腰に両手を回してしっかりつかまっていたので、二人とも助かった。「ああ、これで生きのびた」という実感がひしひしと湧き上がってきた。そのうち、大粒の黒い雨がたたきつけるように降ってきて私達は、水に入ったまま、寒さにぶるぶる震えていた。「お腹に力を入んて入れてごらん。寒くない

わ」と藤井さんに逆に元気づけられながら、私は対岸の山ふところに、その春、葬ったばかりの母が、じっと見守っていてくれるような気がして、自然に口から念仏がほとぼり出てとめようがなかった。

やがて、救援の舟が出て、対岸の砂浜に着いてみると、川原に打ちあげられたように寝ている人の群の中に、「水、水」とうめいている級友達をみつけ、元気な者三、四人で応急のかまどを拵え、川の水を汲み、川底からみつけた救急用の一握りの米を入れ、おもゆをつくった。焼けた家庭菜園の親指ほどの太きのさつま芋も抜いて一緒に煮た。そうしてそれを寒さにふるえて寝ている友にあげると、皆、むしゃぶりつくように飲んでおいしいと喜んでくれたが、あとからあとからつくづく被災者の行列に、やがて疲れ果ててしまった。

空を覆う煙のため暗いのか、それとも夕方なのだろうか。傍にいた兵隊さんから、広島への三日位足も踏み入れられないくらい焼けつづけるだろうときかされ、この時、初めて家のこと、家族のことを思い、心細さに手を取り合って泣いた。

ふと、通信部の緊急避難場所が不動態であったことを思出し、ともかく連絡と指示を得るため、西田さんと井田さんと三人で日の落ちた土手を牛田に向かって走って行った。

その夜、真赤に空をこがす街の火をみながら、救援隊の人々が傍にいた安心感から、一度に疲れを覚えぐっすり寝た。

八月七日

恐怖の一夜が明け、救護班の炊き出しのむすびで元気を得た私達は、配給された乾パンをもって、昨日、友をおいて来た川原に引返したが、藤井さんは、しかし、もう乾パンを食べる力さえなく、わずかに井戸水を口にただけだった。

軍管区司令部のある職場に帰ってみると、全滅した本部は、負傷者でごった返していた。その夜は一先ず学校に帰り、運動場の防空壕の中で夜をあかした。

八月八日～十一日

市中にあった家は焼かれ、親戚で一夜をおくり、翌日初めて疎開中の家族のもとに帰った。

途中、ソ連の参戦の報をきき、絶望的な恐怖にかられた。

八月十二日

日頃、職場は死守せよと教えられた通り、一応家族に対面したあと、すぐ職場に復帰。しかし、通信線はなかなか回復せず、怪我人の救護にあたる。毎日死者の数は増えるばかり。

八月十五日

正午より、玉音放送を暗い壕の中できいた。あとで日本が敗けたときかされ、十名ばかりいた私達は声をあげて泣いた。勝つことだけを信じ、最後の一兵まで戦うと固く誓っていた私達に敗戦は考えられないことだった。

八月十八日

中国軍管区司令部の解散式。

一生懸命任務を遂行することがお国に奉公することと、ただそれだけを固く信じて疑わなかった私達の前に、国は破れ、軍隊は亡び、街は焼土と化し、学友は逝き、感無量の思いで参列した。

二葉の里のことなど

児玉典子

(旧姓中川)

その時、窓際に立っていた水野少尉の首がカクッと折れた、と思った。瞬間、私も立っていた部屋の中央から廊下へとばされていた。私たちが動員された師団司令部兵務部は幼年学校の二階、一番つきあたりの部屋で、中央の出入口がそのまま廊下につながっていた。

気がついた時、何か分らない土、壁、瓦、ガラスらしい中に首まで埋まっていた。「助けて！。誰か助けて！。」と思わず叫んだ。

その時の不気味な静けさと暗さは、二十余年たった今も鮮やかに私の中に残っている。

右腕だけが比較的動いたので肩をゆすぶり動かしながら、腕を上げてみると、案外早く土から抜けた。目をつぶって顔を撫でてみると眼鏡は無かった。手が血だらけになったのが、ぼんやりながら見える。「目が見える！助かった！。」と思った。とっさに、とにかく早くここから出なければと思い、自由になった右手で左肩あたりの土や瓦をのけると、少しずつ体全体が動くようになった。

やっと抜け出して明るい方へ這い出してみて驚いた。建物の半分は崩れ落ち、いきなり外が見える。階段もどうなっているのか分らない。下を見ると中二階のあたり、柱や棟木が、めちゃくちゃに折れ重なっている。とても降りられない。「誰か来て！。誰か助けて！。」と大声で叫んでみた。「よし！」という声が伝って来て、兵隊さんがすぐ真下に来て下さる。やっとそこまで降ろして貰ったが、下まではどうしても跳び降りなければならない。目をつぶって跳んだ。しりもちをついて、この持したか腰を何かにぶつつけた。地上のあらゆるものは瞬間吹きあげられ、激しく叩きつけられたように崩れ、散乱していた。大木は裂け、屋根も机も飛び、書類が舞い上がっている。軍刀を支えに荘然と立ちつくしている将校も、あちこち動いている兵隊さん達も、殆どが頭、顔から血を流している。その中に中村トモヨさんの姿があった。私達は思わず駆け寄り、抱き合っておたがい無事をよこんだ。そしてどうやってあの二階から抜け出したかを、自分でも分かるほどうわずった声で話した。

級友のほとんどは通信の仕事についていたが、あまり体の丈夫でない私達五人が、事務の方に廻されていた。中村さんとは家が同じ方向で、いつも一緒に通っていたのである。

気がつくると他の三人の姿が見えない。私達は名前を呼びつづけた。その時、突然、火の手があがって建物（幼年学校）は、たちまち火に包まれてしまった。私がやっと抜け出してから、時間はいくら経ってはいなかった。目の前でぐんぐん火力を増し、生きもののように燃えひろがる焔をみて、握りしめた手も、足も、とめようなく震えてたちすくんでしまった。

「衛戍病院に行け！衛戍病院に行け！。」（陸軍病院の旧称）と中佐がさきから叫んでいた。しかし火は、あちこちから燃えてくる。中村さんと、「火の無い方へ逃げよう！。」とまだ炎の見えない方をさして歩きはじめた。

白島線の電車道に出て、私は息をのんだ。

真黒い電車が鉄骨だけの姿でとまっていた。電車の周辺には、中から這い出したらしい人達が半裸で倒れていた。乗降台にも折り重なっている。よろよろ歩いている人達の衣類も焼けちぎれ、身にまとっているものは殆ど無い。肩ひものちぎれたシュミーズを肌にあきつけ、髪をふりみだした若い女の人があふと立ち上がると、八丁堀の方へ歩きはじめた。十メートルも行かない中に崩れるように倒れそのまま動かなくなった。

目を遮ぎるものは何もなく、見えるかぎりの家屋は崩潰していた。黒く枝だけになった木が目に入る以外、一面が瓦礫の山であり、原っぱであった。瓦や梁の下から、嘯き声や、「助けて！助けて！」と叫びつづけるのを耳にしたが、その姿は見えなかった。私達は顔を見合わせながら、追って来る火から逃げた。

途中、加治さんに会った。私の顔が血だらけだといって驚き、「しっかりしてね。がんばってね。」といって下さる。しかし加治さん自身火傷で顔はふくれあがり、よくみないと分らないほどに変っていた。「下駄が履けないの。」といって胸に抱いていた。そしてこれから家に帰るといって別れた。それが加治さんを見た最後だった。

私達は燃えていない方へと気を焦りながらも、中村さんは釘をふみぬいた足をひきずり、私も体がふわふわして、思うようには歩けない。たくさん馬鈴薯がころがり、毛布が何枚か散らばっていた。私達は一枚ずつ拾ってみたが、重くてとても持ち上げなかった。泉邸の中は大きな木が二つにも三つにも折れ重なり、からみ合った枝葉の中を、くぐり抜け、かきわけながら進んだ。足許や木の間のあちこちに、逃げる気力も尽きてか、備伏せに倒れ、そのまま息絶えている人がたくさんいる。

川岸は逃げて来た人達でいっぱいだった。みんな襲ってくる火から遁れ、向う岸に渡ろうとして、石垣は人で埋っていた。私達も人の少ないところを探して川の中に降りていった。

川上の鉄橋で貨車が横倒しになっている。川に落ちた積荷の玉葱の木箱が、たくさん浮き沈みしながら流れて来る。

傷の少ない人で泳げる人は、向う岸をめざして離れていった。私達は川の中に入ってはみたものの、私が全く泳げないので、つかまっている石垣から離れられない。流れてくる木ぎれや、樽につかまってはみても、思うように体は浮かない。何度かくり返した後、私はもんぺや靴が水でだぶだぶ重いまま、四、五歩川の中に向って歩いてみた。足はすぐ水底を離れた。たちまちぶくぶく沈みそうになり、むちゃくちゃに足を動かしたが、浮かない。叫ぼうにも声も出ない。「もう駄目！」そう思った時、長い竿が投げられ、それに掴まってやっと助けられた。「泳げないものが動くな！」大きな声が石垣の上から降って来た。竿を投げて下さった人だ。

若しその時助けられなかったら、私は溺れ死んでいたに違いない。(そして此の川で、無傷で助かりながら、鍵山さん、宮田さんが溺れて亡くなっている。)

他にも泳げない人がたくさんいたようで、兵隊さん達が、どこから持って来たのか、長い竹や木を組み合わせで筏を作り、四、五人がその上に乗せて貰い、男の人達が担げて川岸を離れた。川の中程に来了時、突然激しく雨が降って来た。叩きつけられ痛ような大粒で、重油でも降って来たかと思われる黒い雨だった。たちまち筏は押し流されそうになり、今離れて来たばかりの岸にやっと戻った。雨はますます激しく、誰かが渡してくれた一つのカップを、三、四人で被り、寒さに震えながら止むのをじっと待った。

ほどなく雨も上がり、私達は再び筏のこせて貰い、無事川を渡ることが出来た。

たどりついた河原は一層すさまじかった。

川原に首をつっこみ、並んだように大勢の人が死んでいた。火傷であか茶色に爛れた手脚が二、三度わずかに砂の上を泳いだが、もうそれだけで動かなくなった。

広い河原を埋めるほどに、負傷者が倒れ、死体が転がっていた。死体の殆どは俯伏せになり、あるいは横に身を丸めて死んでいた。

すぐ足許に、手は空を掴み、目をかっと思開き口をひきつらせた老人が、仰向けに死んでいる。中村さんは一言も、ものを言わない。ずっと両手で顔を覆い、わずかに指の間から目をのぞかせ、私の後からついて来る。

死体の間から嘔き声が聞え、「水！水！」と私達に声をかけた。

「お水をのませて！ お水！」「水をくれ！」水を欲しがう声がつづく。

少し離れたところで、水道管が破れ、水が勢よく噴きあげていた。容器のものはないかと探していると、朱塗りのきれいな菓子鉢が転がっていた。

それから、どれ位の人達が水を運んだだろう。一人に飲ませていると、次の声が待っている。火傷の人にあまり飲ませはいいけない、という声が伝わり、「少しね」「もう一口だけね」といっては、動けないでいる人達にもふくませてあげた。火傷で赤く大きくふくらんだ顔が、かすかにうなづいて口を動かした。ありがたいというようで、私は、年も見わけられないその女の人の側から、暫くは立ち去り難かった。

私達は、皮が剥け、裸でぶくぶくになっている死体につまづかないよう、そのすごい形相に、なるべく目をむけないようにして進んだ。

二葉の里も避難者でいっぱいだった。

よくここまで歩いて来たと思われる重傷者が、そこ、ここに倒れたように寝ている。

近くに仮救護所が出来ていると聞く。中村さんも太い釘を踏み抜いた足が痛いといい、私も顔の傷がどうなっているのか気にかかって来た。手の甲にささったガラスも自分ではとれないので、行ってみることにした。大勢の人が並んで、油のようなものを塗って貰っている。やっと順番が来た時、戦闘帽をかぶった軍医らしい人が、「こんなのは傷じゃない！。次！」といって、二人共何の治療もして貰えなかった。全く私達の傷は恥ずかしい位のものだった。

しかし二人共疲れきっていた。どうにか横になれる場所をみつけると、朝からの疲労と安心感もあって二人はそのまま寝てしまった。

断続的な声で目が覚めた時、日はまだあった。すぐそばに、両足を投げ出して座っている兵隊さんがいた。棒で体を支え、足を交互にすり合せながら「チクシヨウ！ チクシヨウ！」とくり返している。目は、空の一点を見据え、いつまでも動かなかった。

炊き出しの大きなおむすびが来た。

火傷の両手に、カンパンの紙袋をかぶせた男の人、その両手にまっ白いおむすびがひとつのせられた。

あたりは次第に暗くなって来た。

私達は近くにあった防水カバーを被って寝た。

寒くて何度か目が覚めたが、火勢は一向に衰えず、広島街は空いっぱいに燃えていた。

翌朝、木田さんが亡くなったことを知った。

私達のところがいくら離れていないところで、夜を明かしたのを私達は知らなかった。木田さんは、級でも一番小さい方だった。あどけないおもかげは、火傷ですっかり変り、重そうに目を閉じていた。未だ子供のままのような、その小さな胸に、もものあたりから、蟻ごと蛆が、列をなしてのぼってゆく。(何とい

うこと! どうしてこんな姿で死なねばならないの!)

涙が一度にふきあげて来た。昨日からの様々な死が、今、木田さんの小さな体に集まった。私は泣いた。

校長先生が来て下さった。師団のみんなのことを心配され、懸命に探されているということだった。私達は、歩けるからというので、先生と一緒に帰る事になった。大分崩れてはいるが燃えていない段原を通して、昼すぎやっと旭町の家に辿りついた。

昨日は、私を探して歩いたという姉達は私を見て暫くは偶然と立っているだけだった。

八月六日

中川トモヨ

(旧姓中村)

昭和二十年七月、三年生で最後迄学校に残っていた私達五名が師団司令部兵務部(現在基町高校)に勤務する事になりました。仕事の内容は五県の中学校の人員調査で事務的な仕事でした。

当日は前夜空襲がひどかったので仕事は一時間遅く始まることになっていました。

山中中尉の私用に参謀部に行くことになって、手紙を受取ろうとした途端に何の前触れもなくドーンと言う音を聞いたと同時に目の前が真黒になってまるで夢を見ている様でした。五分か十分位かと思います。時間的にははっきりしないのですが少し明るくなりかけたのであわてて傾きかけた二階より飛び下りた途端に大きな釘が靴の底に突きささりました。夢中で釘を抜いて外へ飛び出しました。

それから間もなく中川典子さんが出て来られたので抱きあって喜びました。後の三名は? 中川澄枝さん三浦さん藤本さん、呼び続けましたが、とうとう姿を見ることが出来ませんでした。一階におられた人は材木に挟まれて、助けを求めて叫び続けておられました。助けに行ってもあげることも出来ずそのまま火に包まれてしまいました。三方火の海でわずかに浅野邸の方角だけ火の手が上がっていなかったの二人で手をにぎって逃げました。叩きつけられた体を走る気力も無くぞろぞろと歩き続けました。途中で毛布を拾ってかゝえたものゝ持って歩く気力も無く二人で顔を見合わせて其の場を捨て去りました。

途中で山崎さんに会いました。全身焼けた守れて両手をだらりと下げて見るも痛ましい姿に私はわあわあ声をあげて泣きました。

河岸には焼けただれた人が真黒になるほど集っていました。とにかく川を渡らなければ火の手より逃ぎることが出来ないで水の中に入ったものの、中川さんが泳げないのでほっておいて逃げることも出来ず、流木を拾って来ては色々やってみたのですが浮くことも出来ず、どうしたものかと思案している所へ、同じ兵務部の兵隊さんが来られて、筏を作って泳げない人を乗せ泳げる人は筏をおして渡りました。途中真黒な大つぶの雨が降りだして、油を飛行機でまいたのではないかと皆で心配したものでした。其の晩は家に帰ることが出来ず不安なまゝ二葉山で一夜を明かしました。

夜中には友、造力さんの亡くなったことを知り、深い悲しみにおそわれました。

翌日十時頃校長先生がこられて歩ける者だけ比治山高女へ避難させられました。

帰る途中は死体の山で間を通して歩く有様でした。私は幸いなことに家が仁保に有ったので、焼けていませんでした。安心と同時に寝こんでしまいました。間もなく全身に赤い斑点が出来、歯ぐきから血が出て止まらなくなり、熱は四十度以上の高熱で十日間位生と死の間をさまよひ続けました。

蓮の花の思い出

西田安子

(旧姓古池)

昭和二十年八月、太平洋戦争は、じりじりと本土にせまり、B29の襲来は、日夜東京の空を焦がしていた。

広島は、まだ爆撃らしいものは受けてはいなかったが、食糧は窮乏を極め、警報の不気味なサイレンの音は、日毎に回数を増し、人々の心を肌寒くゆさぶっていた。

そんな逼迫した空気の中で、広島城だけはうつ蒼とした緑の木立ちの中に、静かな佇まいをみせていた。城を囲む堀には、長い時を経たであろう蓮の葉が一面を覆い、ぼつたりした見事な花を咲かせていた。城を中心に、当時の中国軍管区司令部がおかれ、私達はその中の地下室に設けられた情報部に学徒動員で勤務していた。十四才になっていた。

六日の朝、あと僅かで昨夜からの勤務が終ろうとする時、地下室の窓に黄色い光線が走ったのを見た。と同時にものすごい圧力が、体をバシッとしめつけた。夢中で机の下にもぐり込んで、闇の中の不気味な静けさを感じていた。

自分達の居る場所にだけ、何か起ったのだらうと思ったが外に出てみて、はじめて事の重大さを知った。

空に黒く吹きあげられた塵埃が、舞い降りるにつれて、目の前に次第にはっきりしてくる光景を見て、ただ呆然と立ち竦んでしまった。地上のあらゆるものが、くずれ落ち、その中を人間が、のろのろ動きはじめたのである。衣服は形もなく焼け散り、髪の毛は一本一本が総立ちとなって、白くふやけた皮膚ははげてぼろぎれのようにぶらさがっている。それは外にいた学友が一团となって、オロオロしている姿であった。これが生きている人間であろうか…。つい先程賑やかな笑

拶を交して別れた友なのであろうか…。

恐怖が背筋を走った。

「何とかして…」その声は、まぎれもなく、北海道育ちの色の白かった八木さんではなかい。とても面影は見付け出すことは出来ない。今まで白く見えている全身の火傷の皮膚は、真赤に熟した柿の皮が、破れたのを見るように変っていた。

全裸の死体のごろごろ転っている中を、皆の足は自然に広いところへ動いていった。

くずれ落ちた建物から、上半身だけ出て、もがいている人。兵舎の屋根に塗られたコールタールが、熱でとけてそれを全身に浴びている人…。私は、ふっと、小学校で習った「阿鼻叫喚の巷」という言葉を、思い出していた。若く美しい須川先生が軍刀にすがり、宿舎の方にじっと眼を据えて、下敷きになっている生徒を助け出すよう、指揮される悲壮な姿があった。

「助けてくれー」血だるまの兵隊さんに呼び止められ、私は、その人の体を小高い場所に移そうとしたけれど、ぶよぶよになって握みどころのない肉体は、ずりりと手から滑りおちてしまう。一人の力ではどうしようもなく、「わしを殺す気かー。」の絶叫を背に浴びながら、私はその場を去った。

そこら中に散らばっていた白い紙ぎれが、自然にメラメラ燃えだした。あまりの恐ろしさに、足も宙に浮いた感じで救出を手伝っていたが、ふと逃げることに気がついた時には、既に城郭のあたりは火の海となって、堀を渡した橋を塞いでいた。

いつの間にか皆とも離れて、一人になっていたのも、私は逃げるのをあきらめて、水に一番近い堀端に降りて、いざという時には、堀に飛び込むつもりでいた。あれほど覆い茂っていた蓮の葉は、きれいになくなり、茶色に焼けた茎だけが、残って立っていた。その時、フラフラと歩いている福本さんの姿を見た。顔色は悪かったが、鼻のわきの小さな突き傷が目についた。他は、別に変った様子は見えなかった。宿舎の下から自力で這い出したのであろうか…。

二人になって力強くなった私は、倒れた大木の中で、自分達の囲りを燃やすまいとして、力の限り、木の枝で火の粉を叩いた。そこは堀垣の内側に窪地になっている為、視界がきかず、人影がなかった。堀の向こうは、二部隊、幼年学校、と軍隊が広がっていたが、それらは、轟々と、ものすごい唸りをたてて燃えている。

そうこうするうちに、黒い大粒の雨が、バラバラと落ちて来た。空を見ると頭上で真赤な太陽が凛々と燃えている。太陽の位置から察すると、正午をいくらか過ぎていたのであろうか。

私達から少し離れた所に、軍隊には不釣り合いな柳行李が一つころがっていたので、それを引っ張って来て、蓋と底を二人がそれぞれ背中にかぶって、向き合って腰をおろし雨を避ける。堀向うで時折り「ボン」と気味の悪い爆発音がする。以前、二部隊の堀端には、ガソリンの入ったドラム缶が埋めてあると聞いていた。雨が降った安心感と、疲れとで、二人は、いつの間にか眠り込んでいた。

眼が覚めた時には、雨もあがって、何もかも洗い流されたような静けさであった。眠っている福本さんを起こして、おそろおそろ窪地を出た。

しばらくは、自分の立っている場所が、何処であるか、判断がつかない位に、きれいに焼けていた。兵舎の焼跡には、まだブスブスと、くずぶっている人間の胴体があった。唯一カ所、小高い場所にあった城と、大本営跡といわれている建物だけがうず高く、くずれ落ちたまま、火から免れて残っていた。

重苦しい夕暮れが近づいた中で、負傷者は、足許に、死んだようになって、横たわっていた。その中を無事であった学友二人（板村、大倉）のたち働いている姿を見て、私は、今迄眠っていた等とはいえなかったのも、唯、黙っていた。

夜になっても市内の炎上は、赤々と夜空を焦がしていた。それを見てはじめて、私は家族を思った。母は…。祖母は…。幼い弟は…。

B29 がやって来たが、地上にはもう何も残っていない。避難する必要もなく、私は貯水池の側に寝ころんで、空を見ていた。時々火傷でふくれ上がった軍服の人が、水欲しさから私の側までフラフラと歩いて来て、ゴトンと倒れる。飲める水などありはしない。近くの堀の中から、ぼしゃぼしゃと水音がして、馬のいななきが聞こえる。未だ生きているのだ。

その時、同じ方向から夜の空に向かって叫ぶ男の人の声を耳にした。「おっ母さん。おっ母さあー。」私は耳をおおいたいがしたが、それっきり、又もとの静けさにかえった。城内を出て行った友は、皆、無事でいるだろうか…。

一夜あけて、真夏の太陽の下で見る現実は一層、苛酷を極めていた。

広島城を中心として、縦横に広がっていた軍隊と、陸軍病院は、全滅に近かった。炎天下を負傷者の肉体と、屍は、徐々に腐敗して行く。火傷の体は、狂ったように水を求めて、フラフラと歩いては、硬直した体で、ゴトンと倒れる。

救援隊の到着で、幼年学校跡に、屋根だけの収容所が出来て負傷者は荒むしろの上に横たわる。広い校庭は、負傷者でいっぱいになった。かわらでは、死体を焼く黒い煙が立ち上っている。

級友の生きた肉体から蛆が這い出ている。その白い小さな生物は焼けただれた顔の窪みで、モゾモゾと動いている。まだ十四才という純真な心は、禁じられた水を、決して無理に求めず、静かに苦しみに耐えていた。口からもれる言葉は、自分達に課せられた、情報のこと、それをくり返すばかりだった。

二十四年間の歳月の厚みは、記憶をこまぎれなものにしてしまったが、それらは決して私から消え去るものではない。足りない私の言葉では、私の中にあるものを全部書きつくすことはとても出来ない。

八月六日以来、傷ついた生徒の為に、寝食を忘れて奔走して下さったり、そして今もなお、亡き生徒に深い慈愛の祈りを捧げて下さる国信玉三先生に、心からの感謝を申し上げて、拙い手記を結びたいと思います。

あの日のこと

花田 艶子

(旧姓森田)

昭和二十年八月六日午前八時十五分！

やっとの思いで、地下壕から逃げ出した私達数人は、朝の交代の人々に逢った。皆、手にボロをまとっているようだった。顔はただれ服は焼け、わずかに残る服ともんぺ…。私達は右往左往するばかり。女子宿舎の前を通りかかると、宿舎は猛火に包まれ、今焼け落ちる寸前である。二十数段の石段を引きつるような笑いをうかべ、足をひきずり、一段ずつ降りて来る女生徒があった。髪は千々に乱れ、服は焼けこげ、カスリ模様らしいもんぺ姿。よく見ると川上さんだった。周囲はすでに火の海で、近づくことも出来ず、唯速くから名前を呼ぶばかり。やっとな私の声がとどいたのか「私にかまわず逃げて。」という石段の下の方へうずくまってしまった。

兵隊さん二人を加えた私達数人は、川上さんの身の安全を確かめ、焼け落ちる幼年学校の門を通りぬけ、白島の土手まで辿りついた。橋は焼け落ち、仕方なく川へ飛び込んだ。

川は死人と、助けを求める人々でいっぱいだった。

あてもなく、唯、ゴロゴロと人について歩くだけ…。途中で二、三人私達の方角へ加った。そしてお互い励まし合いながら、又もくもくと歩く。その時突然すごい雨が降り出し、背中が痛いようだった。そこがどの辺か見当もつかない。歩きつかれ、皆地面にへばりついたと思ったら、清住さんが、コックリコックリ居眠りを始めた。ホホを叩いたりして励ましたが、清住さんは再び起き上がろうとしなかった。どこだったか、覚えていないが、玉田さんと逢った。手の皮は指先にブラ下がり、顔は大きく腫れていた。でも気分はしっかりしていた。「私は駄目だから先に逃げて」という。そして私達はそんな友達を気にしながら、どんどん歩いた。

やがて日が暮れかけた頃、やっとな祇園に着いたことを知った。その夜は上野歯科で一夜を過ごし、翌朝、司令部の方へ帰っていった。

司令部はすでに野戦病院となり、まるで生地獄そのまま。

「水をくれ水をくれ」と叫ぶ人々、兵隊さんや動員学徒のむざんな姿、そしてあちこちに死体が横たわり、目を覆う有様。私達お仲間もなく、兵隊さんや生徒に、白い火傷の薬をぬって歩いた。その中に藤井純子さんが居た。何か言いたい様に口の中でモグモグ言っている。私達二人は、家も大手町で近所だったし、通学おいつも一緒だった。でも一寸したことで、ケンカして口をきかないこともあった。私は側に行き、一生懸命「ごめんなさい。」「しっかりがんばって。」と、くり返した。そして髪をなでてあげた。両手を出し、情報機を入れている仕草。そして「森田さん。アメリカがにくい。私はだめだけれど、どうしてもカタキを打って…。」といていた。私は「必らず」といって約束した。安心したのか、そのまま静かになってしまった。

私はその場を去った。被災者の多くは次々とローソクの火が消えるように、ひっそりと死んで行った。友達顔を見て廻った中には、私が一番最初に見た朝の交代の人、森本さんの顔もあった。静かに眠っている様だった。

鼻をつくような異様な臭気、お父さんやお母さんもない中で、級友は唯一人、何を考え、何を思って死んでいったのだろうか？

樹倒川を渡って

三浦 富美枝

(旧姓三浦)

私達の女学校時代は、戦争のため一年生の時から臨時動員があり、二年生もあまり勉強せず三年生になってからは、もっぱら動員の毎日であった。はじめは学校が軍服工場となりミシンかけで過した。その後師団司令部へ配属となり皆一層張切ったものであった。

その頃の自分達の気持は単純そのもので、国のため、戦争に勝つため、どんなことにも喜んで参加した。それに加え、師団司令部は兵隊さんと同等ということで、そこで死ぬなら死んでも悔いがないと考えるほど真剣であった。

しかし勤務がはじまると、最初の夜勤はとても辛く、あけの帰り道、的場あたりから、我が家段原につくまでは、半分目をつむりながらやっとの帰宅であった。それでもぐちもこぼさず、炎天の毎日を通った。

八月六日交替で食事をすまし、一番奥の台（たしか川上さんの受持であった広島台）に座っていた様な気がする。その時はあまり忙しくなく、何もしないで窓の方に向いていた。突然、電気がショートしたと思った。青い光がパツと見え、その後は真暗になってしまった。皆のワイワイ騒ぐ声。手さぐりで表に出た。外に出てみると、丁度霧がはれてゆくように土ぼこりか何かが、ゆっくりと地上におり、だんだんあたりが明るくなる場所だった。視界がひらけるにつれ見渡す限り建物も見えず、ひろびろとしている。その中から、あちこちと火の手があがり始め、近くの大木の先も燃えている。何が何だかさっぱり分らず、ただただ荘然とするのみ…。かたわらに、そびえていた広島城も、私達の宿舎もあとかたもない…。

通信室から出た人達は、それでも元気で、少しの怪我ぐらい気にもせず、あたりの様子に気をとられていた。

何時もなら交替の時間は過ぎているのに、今朝は朝礼が長びき、他の二班の人達は、屋外で竹ヤリの練習などしていたらしい。竹ヤリは何時も建物の横でやっ

ていた。丁度その時竹ヤリを持って藁人形に向かっていた人達だけは、きれいな体のままで即死であった。

他の人達は皆ひどい火傷で、顔の変わった人も大勢居り、全身の火傷で服も黒いところは焦げついて居る。手は皆、前にさしだし、その手から、手袋をぬぎかけた恰好に皮膚がたれ下っている。

恐怖にかられ、人の動く流れについて行く。お城のくずれ落ちたそばを通り、崖から落ちるようにして、お堀にかかっていた一本橋を渡り、幼年学校へと出る。そこは一段と人が増し、はじめに一緒に居た人が何処で離れたかも分らず、それでもつねに誰かと一緒に手を取り合つて、あちこちから火の手の上がる中を火に追いつけられながら、火の無い方へと進んでゆく。途中から一緒になった樫村さんとは最後まで一緒であった。

(しかし樫村さんは終戦後盲腸炎でなくなられ、唯一人の昔語りの友人を失って淋しい) その中、川縁に出て来た。(今思えば泉邸あたりらしい) その時は何も分らず、立っていると、火の渦がすぐそこまで迫っている。川は弓潮で流れている。背に火が迫り、地下足袋のまま土手よりザブンと飛び込む。火傷を負った人も泳げない人も逃げ場を失い、川の中へ…。火傷を負った人は、一人で泳ぐ力もなく、ただオロオロするばかり。木切れをつかまえて浮かんでいく人。かろうじて自力で泳ぐ人。そして手を貸してほしいと頼んでいる人。私も(今はもう名前が思い出せないが) そばの人の片手をしっかりとつかまえて、必死に泳いだ。泳ぎ着いた河岸には、大勢の人が横になっていた。私と一緒に人も疲れたので、そこで休んだ。

そこには兵隊さん達も多く、「お母さん」「お母さん」と叫んでいた。私は樫村さんと又手を取り、常盤橋のふもとに出た。途中、動けなくなり、うずくまっている人や、黒こげの死体がたくさんころがっていた。目の前に塀のようなものが突然現われた。それを二人でよじ登り、こえるとどうやら東練兵場らしい。その頃上空に侵入した敵機が悠々と飛んでいる。私達はこわくなって、くぼみに体を隠しながら、やっと山の上まで辿りついた。そこも大勢の負傷者の群、すでに動けない人、息絶え絶えの人、人、人。しかしここには友達姿はあまり見られない。

その中救護班が呉の方から来られた。でもその人達にも、この火傷は手のほどこしようがないらしい。

「こんなひどい全面火傷おはじめてだ。今までは焼夷弾の火傷ぐらいしか見ていないので。何の兵器が使われたのだろう。こんなにひどいのだから新兵器?…。」皆、わけがわからず、「ひどい、ひどい。」と繰り返すばかり。夕方近くやっと炊き出しのニギリメシを貰う。ほんとにおいしかった。

夕陽が沈んだ。あちこちの火は勢も衰えずあかあかと燃えつづける。自分の家の方向を考えながら、あの火は今家が焼けおちているのかも知れない。母や妹はどうしているかしらと心細くなるばかり。

広島駅構内の貨車が、突然大音響と共に火を高く噴きあげ、めらめらと燃えはじめた。二人は家族や、友人達はどうしたであろうかと語りながら、燃えあがる炎をみつめていた。その夜は練兵場の草むらで野宿をした。

翌朝、空は晴れていた。友と別れた私は家へと急いだ。道は瓦や塀のくずれ等でせまく、やっと焼けていない我が家についた。

壁は落ち、玄関の戸も吹き飛び、大黒柱には小さなガラスの破片がつきささっている。天井も床も落ち、戸はあとかたもなくなり、水道の水は出っぱなしの中に、やっと一部屋落着ける場所があった。

母は基町の方なら探しに行っても無駄だと皆に言われ、あきらめて私のために線香をあげていた。母や近所の人達が私の帰りをわがことのように喜んでくれる中を、食事だけそそくさとすますと仕事があるからといって私は家を出た。

友人の家は誰も居らず、あきらめて師団へと急いだ。市の中央部に入るに従い、死人があちこちと多く、練兵場では馬が火ぶくれとなり、内臓がとび出しているのもあった。堀のそばまで来ると堀に頭をたれたまま死んでいる人、堀の中に落ち込んだ人々を見た。師団につくと友人の誰彼れとなく互いの無事を喜びあった。それからは友達探し、数多くの人の看護、と立ち働いた。通信部は故障ながら任務をつづけた。私達は通信室の一室で寝泊りして、終戦まで務めた。

校歌

聖のみあと 神さび立てる

比治山かざの 松のみどり葉

千とせときわの 色ぞかわらじ

やすけき光 永遠に湛へて

幸豊かなる 太田のながれ

源遠く 水ぞつきせじ

ここに生いたつ 吾等はらから

松をこころに 水をかがみに

やまと乙女の 道や励まん

(五)

被爆者救護活動の手記集（陸部隊）

被爆者救護活動の手記集（陸部隊）

一

梶秀逸

(当時理療部附本廠・陸軍少将)

被爆時、部隊は爆心から約六料の金輪島に駐屯しており、朝礼を終って廠舎に入り、作業を開始した直後であった。突如屋外にオレンジ色の閃光がガリリと輝きわたるを見、たちまちにして大音響とどろき、廠舎振動して一同思わず机の下に退避。出てみれば、屋根裏の梁(当時延焼防止のため、天井なし)から落ちた一面の塵・埃であった。弾薬庫か或いはガスタンクの爆発かと思ひ、屋外哨にただと、然らずとの答。そのうち、後にいわゆる原子雲の高く上がるを見、何か異常事態と感じた。廠舎は爆心に対し島陰に当るため、爆心直面の僅かの部位以外はガラスの損害もなく、建物殆ど異常なし。

直ちに状況偵察のため、舟艇にて宇品に渡り、乗用車にて市内に向う。御幸橋あたり(時間は九時三十分か十時ごろか)まで到ると、路上は、市内から避難してくる市民で埋まる。火傷のため、皮膚だらりと剥離したもの、着衣を失ったもの(屋外勤務奉仕中のものの大半は着衣を吹きとばされたりしい)のほか、顔面がはれあがったため、事実上の盲目となったものが、路上を徘徊しているため、車行不可能となり一日帰隊。当時御幸橋附近の日本家屋は損壊多きも倒壊は少なかった。十時ごろから方々に火勢上がり、十八時ごろには市内は炎上し尽したようであった。

第二総軍壊滅のため、船舶司令官が当日午後、広島警備司令官を命ぜられた。八月七日、広島市内を東、中、西警備地区に分け、小職は西警備地区司令官を命ぜられた。県庁・警備司令部打合せ会を比治山近くの神社にて開き、応急措置を決定。(1)負傷者の手当(2)屍体の收容、奈毘(3)道路の啓開(4)避難者への証明書交付を当面の任務とされた。小職は隷下部隊約三〇〇人をつれ、戦闘指揮所を観音町に前進、八月十一日まで野営しつつ前記任務に当たった。負傷者に対しては火傷の応急手当を行なったが、市外の小学校等の臨時病院を見舞ったところ、火傷化膿のため病室一杯の異臭であった。屍体は広場に溝を掘り火葬、河中の屍体は似島等に舟艇にて運び埋葬したが、人数は不明。道路啓開は二、三日で終了したところへソ連の参戦あり、戦備を厳にするため兵力を撤収した。

作業終了直後には、被爆時附近にいた者を除いて原爆症状はなかった。戦後においては、小職自身に異常はない。終戦後、消息不明のものが多かったのでわからないが次の事例はある。

(例) 部隊副官、村本周三氏。当時三十歳。八月六日偵察のため夕刻から市内徘徊、爾後小職と行をともにす。昭和二十五年白血球三、〇〇〇まで低下。半年間白血球増強注射にて回復。

二

篠原優

(当時船舶司令部附参謀・陸軍大佐)

一、救援部隊の規模

イ、広島市を東西南北の四地区に分け、各地区に司令官を置いて救護活動を行った。

ロ、救護所は次の所へ分散して軍医が長で救護を行った。

ハ、看護兵・看護婦をこれにつけた。

二、施設は材料倉庫を使用した。

ホ、場所一金輪・鯛尾・似ノ島・楽々園・宇品等に分散配置。

二、被爆直前の患者收容状況

なし

三、被爆の体験(船舶司令部内にて被爆)

イ、閃光の感受状況

凱旋館内にて二階廊下を通行中、眼前十メートルに写真のマグネシウムをたいような強烈な閃光を感じた。

ロ、轟音の聴取状況

同時にドンという轟音を聴取した。

ハ、炸裂直下の状況

その数分後、屋上に上ってキノコ雲を見た。

二、一時間位の後には市内各所に火災発生。

ホ、收容患者の状況

現六管一階(元凱旋館大広間)に続々として、負傷者百数十名が自力で徒歩で来たが、ここで気力尽き、身動き

ができなかった。

へ、船舶司令部の破壊

ガラスがこわれた程度である。

ト、病院従事者の被害状況

軍医二名・衛生兵三名・看護婦五名程度が服務していたが、被害はなかったと思う。

チ、負傷状況とその後の行動

私自身は負傷しなかった。

炸裂直後二時間、私は第五師団司令部へ連絡を命ぜられ、市役所前まで来たが、附近は電柱や倒壊物が燃えて

おり、路上の前進は不可能であった。

四、臨時救護所の状況

船舶司令部では、軍医・衛生兵を増員して、凱旋館の患者の応急手当を行った。

五、救護活動の状況

イ、八月六日から八月十三日まで

佐伯司令官訓示

「船舶作戦の本務をすてても、広島市の救護に立て。」

ロ、場所

広島市内を四地区に分ち、船舶司令官自ら市役所南側空地に天幕を張り、一週間泊り込みで、救護・復旧作

業を指揮し、都市機能の早急回復にあたった。

金輪・似ノ島・鯛尾・楽々園・坂・宇品各方面に臨時救護所を設置し、負傷者の輸送につくした。収容人員は、

不明なるも、六千人を下らずと思う。

ハ、死体の処理

焼却・埋葬(数は不明)

六、その他書きのこすべき事項

イ、当時大阪中部軍司令部より救護活動のため

防疫給水機関若干

野戦病院一個

救護班五個

を急きょ広島へ応援派遣することになった。

ロ、広島駅前に、探索者の便宜をはかり、戦災相談所を設けた。収容負傷者の氏名・年令などの記録簿を置く。

ハ、佐伯司令官が、市役所に対して、上水の給水能力の復旧を要請した。

三

三吉義隆

(当時教育船舶兵団・陸軍大佐)

兵団司令部の朝礼を終り、参謀長室に入り机に向はんとした八時十五分、突然写真のフラッシュの如き閃光が、空一面を覆った瞬間、猛烈な爆風音に襲われ、ブラック建の司令部参謀部は半壊の状態となった。砂塵もうもうたる裡より逃れ出て中庭に出れば、司令部内騒然、若干の負傷者も出た模様。早々に軍医部を動員、司令部員負傷の手当に当らしめ、一方司令部横の小丘に登り、何処が如何たる爆弾によりやられたかを視察したが、紫赤色のもうもうたるキノコ雲が、空高く向く登るを眺め、ガスタンクに爆弾命中のためか、空中魚雷式の爆弾破裂か、何物か判じ難く、その詮索の暇もないまま司令部に第一陣の一般市民の負傷者が、トラックにて運び込まれた。皆大ヤケドにて皮膚ははがれ、人相も判別し難く、地獄より匍い出たと思われる悲惨さである。とりあえず軍医総動員で手当して倉庫に収容した。九時頃ではなかったかと思う。

目前の悲惨な状況に一時眩惑されたが、広島市内は全部灰色になり、崩壊されて人影もないことが観察されたので、手兵である司令部のものを市内偵察に出したが、いずれも惨憺たる状況の報告で、いずれの部隊の出動救援の模様なく、緊急を要する状態であることが判明し、急遽、船舶通信隊の出動命令を出した。

しかし、船舶通信隊も上を下への大騒ぎで、大部分が負傷者であったため、小人数員の救護班を作らせ、市民

の救済に当らしめた。司令部へも続々負傷者が救助を求めて殺到するに至り、司令部全員看護に当らしめたが、

これら患者は一週間内に千数百名全員死亡した。

船舶司令部命令により地方散在の部隊へ広島救援を命じ、市内秩序の維持、傷者の収容看護をしたが、数千名

の部隊では、なかなか作業がはかどらぬ状態であった。

小生も市内巡察指揮、死体収容焼却等に従事し、軽度の原爆症となり、一ヵ年間療養の必要を生じたが、現在は健康である。

四

野村清

(当時陸軍船舶練習部副官・陸軍少佐)

宇品町七丁目一、一〇〇番地陸軍船舶練習部副官室(旧大和紡績構内)にて被爆した。

主として船舶兵将校教育の任務を有する当隊は、当日(八月六日)も対空監視哨、対空射撃部隊、及び衛兵等の勤務者を除く、各部課教導隊等はそれぞれ日課予定表に基づき作業準備又は教育作業に従事する。

また、公用で船舶司令部基地関係諸隊に外出中の者、あるいは部隊外居住者(営外居住者)で、課業時間の関係上未登庁の者も若干在ったが、その数は極めて少数であった。

閃光・音響の聴取について、私の体験によって述べれば、副官室で机上の書類を閲覧中、突然ピカリと淡黄色の強烈な閃光を感じ、それより一秒～二秒間をおいてゴーンと地鳴りの様な爆音と共に、強烈な爆風が私の座席の正面から襲来し、窓枠、窓ガラス、帽子掛、刀架等が散乱してきたので顔面を両手でおおって床にひれ伏した。

隣室の部隊長の安否確認のため、部隊長室に入室した。芳村中将はガラスの破片で腹部に軽傷しておられたが全般の状況知得のための措置を指令された。

私は双眼鏡を持って屋上の対空監視哨に走り上り、市街の状況を展望し、灰色の煙(モヤ)に包まれて未だ火炎をあげていなかった異様な街相を見て、部隊長に対する適切な報告の言葉に困った。

六日の午前八時三十分頃(被爆直後)における当部隊の状況は、各部・課・隊からの報告並びに視察により、次の状況を知る。

イ、爆発物は異常な爆弾らしいが詳細については不明。

ロ、被害状況(隊内)

人員＝ガラス破片又は器物の散乱等により、若干の軽傷者を発生したが、隊内者にて生命に関わる程の重傷者なし。

兵器・器材＝異常なし。

船艇にて練習部棧橋にあったものは若干破損又は沈没せるものあり。

ハ、外出中の者については未だ不明。

六日朝九時三十分頃から一般市民の負傷者逐次隊内に収容されつりあったが、午後三時ごろには、その数は続々増加して数百人に及び、午後六時～七時から、逐次トラックにて収容される重傷者、また船舶留隊にて編成した船艇にて、河口から市内各河川に進航した船艇救援隊にて救援された市民が、続々と収容され、終夜不眠不休の救援活動が続行され、翌七日朝迄に収容された数は約三千名～四千名と概算された。

救援隊は陸上からのものと、海上から、河口から市内各河川に進入したものがあった。陸上よりの隊は自動車及び乗用車各々二、三輛程で部隊から御幸橋までのものと、比治山橋附近までのものがあり、この附近まで脱出して来た者で、比較的重傷者から先に隊内に収容したと思う。水上救援隊は各河川から進入して、水中生存者を救援し各収容所に搬入しては、これを続行し、逐次川岸に近く脱出して来る者を救援した。

救援収容されて来る者の形相は、老若男女の別も定め難く、特に夜に入ってから作業は、学生教育(将校)の各教室・講堂等利用し得る所は余す所なく利用して、これに収容する作業と、応急手当ての作業に、八月六日午後から八月七日朝迄の活動は、部隊長以下全員の終生忘れることのできない事態であった。

翌七日早朝、市内現地偵察の命を受け部下一名をつれて御幸橋～鷹野橋～紙屋町～西練兵場附近～鉄砲町(自宅住居)～八丁堀～宇品と任務についたが、自転車の通行も困難な状態で、市中にはまだ重傷にて歩行不能な者等が市役所附近、紙屋町の練兵場入口附近及び練兵場内にはまだ多数いることを知り、その旨を芳村中将に報告、特に道路を開設して、自動車の進入路開設の要を意見具申した。

七日午前十一時頃、船舶司令官(佐伯閣下)の命により芳村部隊長は中地区警備隊長となり、北は白島北端から東は京橋川以西、西は本川以东という広島市の中央部の警備救援の任に着き、私は副官として前記地区偵察の常備知識を活用、道路の障害物を排除して御幸橋～鷹野橋～紙屋町～第五師団司令部～工兵隊～二葉の里～上柳町～八丁堀を経て現地偵察に随行し、紙屋町と革屋町本通り入口北側芸備銀行(現広島銀行)附近附近に中地区警備隊本部開設に従事した。

隊員を召集し同所にて八月九日早朝まで、担当地区内の生存者の救援、手当、道路の開設、死体の集結、警備等の任に服し、九日には大多少佐(教育部教官)と交代して、宇品の部隊本部に帰り練習部副官業務に就き、隊内に収容されている負傷者の救援業務、死体処理等に関する区処に任ずると共に、また戦時中のことであり、対空撃・防空等に関し練習部長補佐の任に服した。

収容の負傷者の手当看護には、軍医、看護兵等の衛生部員を主軸とし、女子筆生打字手、印刷工等全員不眠不休の状態であつたが、食事の準備、運搬、配給等から氏名調査(出来る限り記録)等に至るまで、又近親者、知人、友人等の安否連絡の処置をおこなったが、混乱中での仕事の困難さは言外であつた。

死体処理を行った将兵の労苦もまた多大であり、特に燃料欠乏下における処理の状況は、筆舌に尽し難いものがあった。火葬できず、そのまま地中に埋葬された

ものも多々あったと考えられる。

私自身について言えば、終戦の詔勅を拝した八月十五日以降、心身共に虚脱奪え、生きていること自体が不思議で

あり、又無意味の様に思えたが、これが原爆症状ということができたかどうか判らない。現在迄生きているが、目下高血圧と糖尿病に心配しながら仕事に追われて働いている。ただ次に来るべき時代のにない手である若い人達の良い肥料となることを念願するのみである。

五

広瀬自助

(当時船橋練習部・陸軍少尉)

私は大和紡績広島工場の工場長として勤務中・同工場が陸軍に借上げられ、船橋練習部として使用されることになり、元々一年志願兵出身の陸軍少尉であったため、同部隊に召集されて経理課に所属していました。被爆場所はお勤途上のときで、同工場の門前百米の地点の所でした。丁度、頭上八千メートルの高度にB29 三機が飛来し、落下傘を三個投下するのを目撃しました。異様な感じに打たれ、何故の落下傘(註・この落下傘は数日後広島市の西方五キロの山中で兵が発見しました。そして勿論照明弾用でなく、原子爆弾炸裂の諸状況をマリアナ諸島にある米軍基地に自動発信する装置が仕込まれて、いたことが判明しました。)であろうか、昼間に照明弾を投下する筈もないがと不審に思ううちに、視界が真白になり閃光というより、あたかもマグネシウムを何トンも焚いたという感じでありました。その瞬間頭脳をかすめたのは、これは何か新兵器に違いないということでした。そして二秒乃至三秒を経て、「ドン」という音響が耳に入り、同時に身体は爆心地より右側(南の方向)に約三米、吹き飛ばされました。その附近にあった木造建物の破片が、爆風により、私の身体の上に落下しましたが、私自身は負傷(少なくとも外傷)しませんでした。直ちに部隊(会社の工場)に行き、状況を観察しましたが、鉄筋コンクリート造の工場本館は異状なく、木造の寄宿舎住宅は1/3位破壊していました。ただ爆心地側の窓ガラスは一緒に破れていたのは申す迄ありません。工場事務所の二階より爆心地を眺めて、初めて例の柱状の太いキノコ雲を見ました。何れともあれ、爆雲の立っている地点に行ってみようというわけで、下士官・兵三人を連れ、御幸橋の東詰まで自転車で行きました。その地点までは火災はなく無事に行き得たのでありますが、向う岸の市街地は、既に一面の火災で、到底市街中心部には入り得ませんので、工場に帰りました。その道すがら、被爆により負傷した罹災者多数に会い、また工場に収容されている負傷者を見て、これは普通ではない新兵器により負傷しているものである事が、ハッキリと判りました。私の住居は宮島沿線「古江」でありましたから、その日は、同沿線から通勤しておる勤務者のため、舟艇を一隻部隊から出し、約三十人位の者が乗り、「草津町」の岸壁に上陸して、自宅に帰りました。幸い、自宅は半壊していましたが焼失しておらず、当夜は自宅で寝たわけでありました。翌日、部隊から当番兵が来宅して、船橋練習部は広島市の罹災地を三分したうちの中央地区の部分を担当し、死体の整理収容、跡片付の任務が下命された由を伝えました。よって翌七日から一週間十三日まで、練習部本部となった住友銀行広島支店(紙屋町)焼跡に夜警し、任務に就きました。私自身の任務は部隊が担当地区で片付作業しているので、その個々の部隊に給食をする給与係主任ということでありました。ちなみに食事は、工場の炊事場で作った「むすび」をトラックで運んで、各部隊ごとに配給するというわけでありました。死体の収容といっても松根油をかけて纏めて焼くわけでありました。約三日間で担当地区内の死体は完全に片付きました。その悲惨さは多くの人の語るところで、私は省略いたします。私自身は所謂原爆症は出ず無事でした。しかし昭和二十六年に約半年間下痢に悩まされました。強いて申せば、これが原爆症であったかと思えます。

六

堀川松太郎

(当時船橋練習部・主計軍曹)

宇品町七丁目の船橋練習部経理課は、元大和紡績株式会社正門から二〇メートルばかり入った所の右側木造二階建の部屋にあった。

六日午前八時から、全隊員の朝礼、及び軍刀術を行なった。私はそのあと経理課に入り、北側の窓のところで、北側に背を向けて衣服をぬぎ、流れる汗を拭いていたときである。突然、閃光が起った。ピカリとして、背なかの熱いと思ったところへ、ドンという爆発音がして、天井が二、三寸ほど持ちあげられるのを見た。しかし、建物は倒壊しなかった。

自分の至近場所へ、敵機が爆弾を投下したと直感し、北西の方を振りむいてみると、キノコ雲が立っており、見る見るうちに、上方及び横に大きく広がっていた。課内にいた者の幾人かは、窓ガラスの破片で負傷したものもあったが、まもなく救助出動命令が発せられた。

私は、現在の千田町広島大学尚志会館裏のグラウンドの借家に、妻子三人で居住していたので、被爆後一〇分ほどあとに、妻子の確認と破壊状況調査のため、自転車で出発した。御幸橋を渡り、広島電鉄本社前まで来たが、引込線のある車庫の所から市の中央部に向っては、すべての建物が倒壊しており、道路は倒れた電柱や落下した電線が散乱していて、自転車で進むことが出来なかった。私はやむなく徒歩で、地面に押しつぶされている屋根の上を踏み渡って、ようやく家族を見に行った。

つぶれている借家の中にもぐって入って見たが、流血のあとではなく、また家族の姿も見えなかったもので、一応帰隊すると、家族は負傷もせず先きに部隊に来ていた。

そこでこんどは、家族の貴重品を取りに、また引返した。やっと取り出して外に出ると、三軒目の家が燃えはじめていた。

部隊へは、午前十時ごろから多数の被爆者が、治療を受けにプロゾロ入って来た。これらの負傷者の治療は、医務室と兼ねてあった医療研究部(正門から三〇〇

メートル先)が行なったが、被爆当日から三日三晩というものは、正門から医務室まで、負傷者の列が続いていた。

治療の途中、あるいは此処にたどりついて死亡した者は、毛布に包んで一ヶ所に集め、夜中に焼却した。

元大和紡績工場にいた船舶練習部、あるいは船舶工兵教導隊等は、部隊内に溢れた負傷者を、大型、小型の発動艇を駆使して、似ノ島や金輪島などの臨時収容所に輸送した。

七

北山勇

(当時西部第八十七部隊・陸軍主計軍曹)

市内宇品町七丁目(元大和紡績)西部第八十七部隊(船舶練習部)経理課所属。昭和二十年八月六日午前八時から朝会を行い、経理課の室に入った瞬間、爆弾の炸裂の音と同時に青白の強力なる光線を感じた。爆風圧により天井が落下し、室内は一寸先も見えなかった。

爆発音のした瞬間、天井が落下、直ちに軍人軍属に対して、防空壕に避難する様命じ、二ヶ所の壕に待避する。其の際の建物はガラス窓は殆んど破損し、屋根瓦は、爆心地から大分離れていたけれども、その三分の一位が爆風の為にはぎ取られた。幸いに部隊内には余り負傷者はない模様であったが、公用にて市内に外出者の中には、頭・手等に負傷したものが二、三人あった。

木村経一課長(主計少佐)も頭に負傷された一人であった。尚当時は日曜・祭日も返上で勤務していた関係で軍属が交替で休んでいた。女子職員が、爆風により家が倒壊し、その下敷きになっていたのを助けだし、部隊に連れ帰り手当ををしているうち、二、三日後には頭の毛が全部抜けて遂に死亡した。

原子爆弾の炸裂直後、隊内にはわずかの兵を残し、ほとんど全員が市内に出勤し、負傷者の収容作業に連日勤務した。私も木村課長殿の命令を受け、兵三人を連れ、市内に自動車にて出勤中、千田町電鉄本社前からは、火災の為に道路のアスファルトが沸き、自動車の通行が困難の為に引き返し、小型戦車に乗り替えて再び市内に出勤し、千田町から鷹野橋一紙屋町を経て、西練兵場に行ったが、負傷者と避難者などで混雑しており、はっきりした数よつかめないが、約三千人位の負傷者が動けなくなり、苦しんでいた。速かに中隊に連絡して負傷者の収容を行う。二、三日の間に我々の部隊に収容した負傷者は約千五百人位に達した。

私は当時経理下士官であったから炊事の兵隊に握飯を作らせ、負傷者のいる所に運搬供給を行うこと約一週間、なお、被爆当日は盛夏でもあり、薄着していたから、爆風の余り強力な為、人々の着物はほとんど飛ばされ、多くの人々は素裸であったから、被服を与える作業を行った。

我々の属していた隊は船舶練習部で、船舶兵三ヶ中堅将校佐尉官、学生約百名位で人数も少なかったが、負傷者を収容すると共に死体の整理を行う。船舶隊には舟があるので常にこれを利用して、負傷者並びに死体の収容作業を行う。

又、市内の部隊は殆んど被害を受けたので、曉部隊の活躍は特に期待されたように思う。

作業中、急に体がだるくなったので、八日に、部隊の医務室にて診断を受けた。白血球が約半分に減じており、毎日注射を行い、食物等も注意し、十日間位経った頃、検診を受けたところ、大体標準位に回復していた様であるが、未だに健康体になれず、少しの労働にても疲労し易くて困っている。

八

富田稔

(当時船舶練習部第十教育隊・陸軍大佐)

海上挺進第三十戦隊(以下三〇レと略)及び配属の海上挺進第三十基地大隊所属の整備中隊は宮古島へ船舶輸送中、三月一日奄美大島において空襲のため海没、再編成のため江田島へ帰還し、以後内地防衛の海上挺進第三十一〜第六十戦隊の訓練の基幹部隊となり、船舶練習部第十教育隊に所属していた。

五日は日曜日のため教育隊長斉藤少佐外、広島在任の特校生帰宅し、私は部隊に宿泊し、教育隊の指揮に当たっていた。

(爆発時出勤中の船は以の島にあったものと記憶する)

被爆当時、私は江田島幸ノ浦海岸にあった教育隊長室で海(広島方向)を背にし、窓を開放して事務を執っていた。(その直前空襲警報は解除されていた。)突然室中が目がくらむように光り、首筋が焼けるように熱く、後方(広島方向)上空に大炸裂音を聞いた。海岸に多数の燃料ドラム罐が集積されていたので、その爆発と直感し、海岸へとびだしたが異常はなかった。上空にB29一機が、広島上空から西南方向へ飛ぶのが見え、間もなく広島市に黒煙が上り始め、同時に上空に異常な雲状が認められた。然し私達は原爆とは知る由もなく、宇品にあったアセチレン工場の爆発であると話し合った。幸ノ浦の兵舎は、これという破壊は受けなかったが若干の板が吹きとばされていた。兵員の損害なし。

爆発により宇品との有線電話は不通となり、無線により次の連絡を受けた。

(イ) 爆撃直後

広島は原因不明の爆発(撃?)により各所に火災発生した。

(ロ) 十時頃

敵は原子兵器らしい兵器を使用した。広島は損害甚大にして大混乱に陥っている。第十教育隊は即時救助作業に出勤し得るよう準備せよ。

(ハ) 十一時頃

直ちに救助作業に出動せよ。

右(口)の連絡により、教育隊長より先ず第三十戦隊を基幹として出動の準備命令を受け、(ハ)の命令により第一回の発動艇を三〇レ第一中隊長面高大尉の指揮によって宇品へ進発せしめた。十二時頃と記憶する。

一、第一次進発、面高大尉指揮。十二時頃、第二次進発。私は午後一時頃、第二次部隊と共に幸ノ浦を進発。千田町の電鉄本社に至り、先に出発した面高大尉と会い、概況を聞く。私達が宇品へ上陸し、逐次市中に北上する間、救援作業中の部隊民間団体等全く見ず、焼野原と死傷者のみの広島であった。

当時の私達の推察では六、七千人位の死者かと話し合ったが、第一日午後のみ収容人員(死者)は八千人を数え、事の重大さに驚いた始末である。第十教育隊は訓練中の部隊のうち、出戦間際の者は残置し、残余を以て作業に従事すること。従ってその詳細については記憶していない。私はその後引続き、到着した斉藤教育隊長と全般の作業計画を行った。

千田町電鉄本社を救援部隊本部とし、逐次北上しつつ先ず露出せる死傷者の救助を行い、負傷者は宇品(似の島)へ送った。死者は若干ずつ安置した。(その後泉邸に壕を掘り火葬した。)終局的に担当地区は相生橋以南、元安川以東、主として市電に添う地区であった。そのうちに逐次柳井の船舶工兵隊も進出し、川に浮遊する死体及び負傷者の収容に当たった。

赤むけの負傷者が這いながら手を合わせて水が欲しいという姿は、誠に地獄絵図そのまま、水を与えれば死ぬことは分っていたが、見るに忍びず水を吞ませると、目前でそのまま息絶えた。

乗用車の損傷したものを一輛を苦心して修復し、二、三日連絡用に使用していたが、県庁の所有と判りお返ししたこともあった。真夏のことで、死体は直ちに腐敗し、衣服は焼けてその処理に追われ、申し訳ないながら氏名の確認等は到底できなかった。

若干日後、漸く破損家屋の下敷きになっている人々の処理に手をつけたところ、思うようにはかどりはしなかった。又逐次消防団等の組織が動きはじめたが、八月十四日夕、江田島へ引揚げる命を受けて、幸ノ浦へ帰投した。

右、八月六日より十四日迄全員広島市内に露営して作業に当たった次第である。

復員後、私自身には異常はないが、所属下士官の一人が、悪性貧血で発病後、二か月位して死亡した。しかし、田舎の医者にかかっていたため、原子爆弾による障害とは認めてもらえなかった。

九

斉藤義雄

(当時の訓練部第十教育隊長・陸軍少佐)

一か月に一回の帰宅休養の夜を、空襲警報に乱されて、寝過ごし昭和二十年八月六日(月曜日)の朝八時頃、警戒警報が発令されたが、暫くして解除されたので、安芸郡中山村(現広島市中山町)の家族の疎開先の家を出た。この日、空は一点の雲もなく晴れて暑かった。中山から尾長に越える峠道を登って行くと、B29 のいつもの特色のある唸り声が何処からか聞こえて来た。大編隊ではなく、二機か三機の音であった。空を見上げながら歩いていて、快晴の空には何も見えない。相当の高度のようであった。警報は解除されているのに、ブーン、ブーンと聞こえてくる唸り声に、何となく異状なものを感じた。前進しながら退避所を探したが、運よく大内越火葬場の反対側の斜面の峠道から十メートルばかり上がった所に、素掘りの小さな横穴を見つけた。穴の前までよじ登り、空を見上げて機影を探した。横穴は入口が北側にあり、高さが一メートルばかりの三、四名は収容できる浅い小さなものだった。

ふと府中方向の東の空に小さな落下傘が二箇相前後して、ワフワフと静かに落ちて来るのを認めた。(戦後の米側の資料によると、予め受信装置を投下したものである。)「はて何だろう?」と思いながらも、B29 の唸り声は、引続き何処からともなく聞こえてくるし、妙な落下傘は落ちてくるし、何か不安な胸さわぎを感じながら、眼を東から南、西の方向に移しつつ更に機影を求め続けた。視線を真西に向けた頃、相当上空に、B29 の一機が右旋回する姿が、キラッと銀色に光った。万年筆位の大きさに見えた。その附近の空を、機影を求めて凝視していると、その下の方で、今迄に見たこともない強烈な閃光が目に入った。これが史上かつて無い大惨劇を、広島市民にもたらしたいわゆるビカであった。私は予め注意していたためか、反射的に穴に飛び込んでいた。穴の中に居た直後、大音響と共に地震のように大地が揺れて、素掘りの穴の天井からバラバラと落ちた大量の山土を全身に浴びた。穴の向う側の山の松の太木が狂ったように揺れ動いて、互いに交差する様子が土煙の中に見えた。瞬時の後に、あたりは不気味な程に静かになった。私は直接の爆風は受けなかった。穴が北向きであったのが幸運だったようであった。

暫くすると、中年の婦人がベシヤンコになったパラソルを持って、穴に登って来て入った。峠の堀割道を歩いている時に、爆風を受け、パラソルを握ったまま吹き飛ばされて、道路の崖にたたきつけられたらしく、今朝初めておろしたという新品のパラソルは無残に破れていたが、婦人は外傷は受けていなかった。続いて馬車屋さんが、穴に飛び込んで来た。「今のは何でしょう? あしア崖にたたきつけられました。馬も一緒にがんすが、馬は生きとります。」馬車屋さんも外傷はないようであった。暫くの間穴の中の三人は不安な会話を交しながら居っていたが、周囲の静けさには変化がないので外に出た。穴の前から広島市を見下すと、二葉山麓の松の木から点々と煙の上がるのが見えたが、市内からは火災らしい煙も上がっていなかった。いわゆるキノコ雲は、猛烈なスピードでぐんぐん垂直に上昇していたが、大きく広がった傘型の雲はまだ発生していなかった。雲の色は見たこともない不気味な、赤と紫と黒の混合したような異様なものであった。大きな雲の柱はどんどん上昇を続けながら次第に傘の部分が拡大していった。

二人の人と別れて、宇品行きに乗るため、広島駅に向って峠をくだり始めた。附近の家は、窓の建具はないが、倒壊はしていなかった。峠道の東側に沿って点

在する大きな洞穴の中には、泣き叫ぶ子供でいっぱい。ほとんどが上半身裸体で、全部の何処からか血を流していた。硝子の破片で受けた傷のようであった。私は持ち合せたメンソレータムを塗ってやろうとしたが、数名過ぎて手の付けようがなかった。大きな子どもにメンソレを渡して応急手当を頼み、先を急いだ。一刻も早く、部隊に到着しなければの一念が先に立った。家族の様子を見るために引き返すことは頭にも浮かばなかった。愛宕町に出る頃には、市内の方々から火災の煙が高く上っていた。附近の家は倒壊したもの、半壊のもの柱だけのものなど、多種多様で、道路は、瓦その他の雑多なものが散乱していて、歩きにくかった。倒壊した家屋から発火したことを告げて、消火を呼びかける地元の人があったが、消火に赴く人はほとんどなかった。駅の方からの人波は次第に増加してきたが、どの人を見ても、呆然自失した空虚な目をしていて、衣服は着けていたが、埃にまみれ、ほとんどが裸足で、頭髮は乱れ、顔も頭もチリカ埃で汚れていた。外傷を受けた人はまだ見かけなかった。時々、どちらへ逃げたらよいかと問いかける人もあったが、私には答えようがなかった。愛宕町の踏切を渡る頃には、避難者が道一杯に拡がり、逆行する私の前進を阻止する程であった。この頃も、大きな負傷をした人は、まだ目に付けなかったが一人の兵隊が無帽裸足で無表情のまま通り過ぎた。頭を見ると後頭部の動脈が切れているらしく血が勢いよく吹き出している。呼びとめて、携帯していた三角巾で包帯してやった。私の服が手当中に吹き出る血を浴びてひどく汚れた。

広島駅附近は、火災のため近寄れないので、宇品行きを断念し、歩いて南蟹屋町に出た。妻の実家に立寄って見ると、建具・壁は完全に飛び、柱が三本折れていたが、家は倒れてはいなかった。家の中を方々探したが、義母の姿がない。シチリンの火を消していると、消防団の人が、老夫人は負傷していたが、何処かへ収容されたと告げたがら去った。義母の生存を確認したので、安心して東大橋を渡り段原に出た。市内の火勢は、ますます強くなっているが、比治山の東側の家屋には、大きな損傷はないようであった。旭町附近の畑のそばで、夫婦と見える老人二人が、荷車に泣きながら合掌していた。車には二十歳前後の娘さんが既に息絶えて横たわっていた。思わず拝礼して、無言でそばを離れたが、今日初めて見た死者であった。勤務している義妹の安否を確める為、宇品の共済病院に立寄った。まだ出勤していないとのことに、少々不安を感じたが、どうにもならない。病院は負傷者で充満していた。上空を旋回する敵機を避けて防空壕に入る人、入れたくて右往左往する人、動く力もなくなって、小砂利を敷きつめたように硝子の細かい破片が一面に散乱した土間に横たわる人、既に息絶えて動かない人等々、まことに混乱した地獄であった。

午前十時前に船舶練習部に到着して、幸ノ浦の部隊に連絡したが、「異常なし」との報告で安心すると共に、広島市への出動を準備せよとの命令が出たことを知り、先ず富田少佐の指揮する第三十戦隊を基幹として出動を準備するよう指示して桟橋へ急いだ。附近の家は余り損害は受けていないようであった。宇品市菅棧橋から江田島行きの連絡船に乗った。当時船舶司令部で運航していた船である。便乗して来た娘さんを見ると、肩、片腕、背中の薄皮がペロリとむけて大きくぶら下がっていた。当人は比較的元気であったがその後どうなったことであろうか。海上から振り返ると広島市は東から西まで火煙の切れ目がないように見えた。焼夷弾の集中攻撃を受けて、一夜で東京の下町が焦土と化した昭和二十年三月の空襲をこの目で見た私は、一発で広島全市が火の海となったことが、不思議に思えてならなかった。よほど特殊な強力な爆弾であることは、想像出来たが……。海面は平素とかわりなく、美しく静かにキラキラと光っていた。

午前十一時少し前であったか、部隊に到着した。隊員が一名、硝子の破片で手に軽傷を受けたのみで、人員その他に異状のないこと、広島市に出ていた将校三名がまだ消息不明であること、似ノ島検疫所の要請により、約五十名の隊員を派遣したこと等の報告を受けた。当時私は、船舶練習部第十教育隊長として、江田島北岸の幸ノ浦に基地を置き、陸軍海上挺進隊の訓練を担当していた。海上挺進隊は、既に比島及び沖繩における戦闘で、相当の戦果を収めていた陸軍の海上特攻隊であり、本土決戦を予期して日夜の別なく猛訓練を実施していた。本部、整備隊と、十二個の訓練中の戦隊があり、総計約二千名の秘密部隊であった。広島市の火勢はますます強く、幸ノ浦から眺めると、全市火の海であったが、広島市が全滅的打撃を受け、軍隊、警察、消防団等組織的団体が、完全に機能を停止したとは知らなかった。午前十一時過ぎであったか、船舶司令官佐伯中将から、直接の電令が来り、「広島市は全滅的打撃を受けた。君の部隊は、訓練も大切だが一時中止して、全力を以て、広島市の救援に行け。」との命令である。既に準備命令は受けていたので、直ちに全戦隊長を集めて、状況を説明し、なるべく速かに広島市に進出して、救援作業に当る旨を指示し、幕僚に細部の指示を委せて、私は船舶司令部に先行し、細部の指示を受けるため現地に向った。命令された救援地域は、東は京橋川から、西は本川に亘る、市の中央地域であった。白島地区には船舶練習部教導隊が配置された。中央部地域の全般指揮は、船舶練習部長芳村中将がとり、東部地域は沢田中将が全般指揮をされたが、西部地域の状況は不明であった。

広島電鉄本社の一階を借用して指揮所とし、斉藤部隊本部の標識掲げて、救援業務を本格的に開始したのは、火の衰えはじめた午後三時過ぎであったろうか。既に作業を開始していた戦隊もあったが、逐次到着する各戦隊を、次々展開させて作業を命じた。現地に進出した頃には、市の中心部でも火災をあげている建物や、煙の上がっている場所が多く、市内を元気に動き廻る人は、あまりなかった。広島電鉄本社の建物も、天井がぶら下り、建具はなく、机は散乱し、硝子の破片が床、机に一面に光っており、柱や壁にも無数の破片が、突き刺さっていた。部屋の中に居た人達は、恐らく相当の負傷をされたものと想像された。各戦隊が、当初着手した作業は、地区によって異なるが、爆心に近い戦隊は、道路の啓開と死体の搜索、収集であり、比較的爆心から離れた地区では、収容所の開設と負傷者の収容、看護及び道路の啓開であった。部隊の特性上、特別の器材もなく、作業は困難を極めたが、それぞれに工夫して必死の活動をした。爆心に近い場所の死体は、眼球が飛び出ている、皮膚は茶褐色の黒みがかった色をし、水気はなく、苦悶を示す色々な姿態をして倒れていた。高熱による焼死が先か、爆圧による圧死が先か、いずれにしても、想像を絶する一瞬の光と圧力による即死と思われる。焼けた電車の中の死体は死亡した後に電車と共に焼けたものか、電車の火災によって死亡したものか不明だが、白骨化してはいなかった。河、古井戸、水槽、池等水のある場所には多数の死体があったが、即死しなかった人達が、火災を避けて、水を求めて行って、力尽きたものであろう。負傷者は収容所に集め、舟艇及び自動車によって、似ノ島・金輪島その他の大きな収容所に護送した。赤十字病院にも多数の負傷者を収容したが、収容力に制約されて、遠方の収容所に送付せざるを得なかった。焼け落ちた福屋デパートの中に収容された負傷者の惨状は目を覆うものがあり、全く地獄とはこんな所ではあるまいかとさえ思った。兵隊や、年若い電車のバスの車掌と思われる人が、多数目についた。部隊本部を置いた

電鉄本社の横にも、収容所への護送を待つ間の負傷者が集められたが、待ちきれなくて、そのまま息を引きとる人が、毎日相次ぎ、どうしようもない無力さを嘆きながら、辛い思いで死体処理を命じた。

戦後数年を経ても、時々夢に見た忘れられない悲しい場面があった。七日の午後であったか、三、四歳の男児と十一〜十二歳の女児、それに顔が腫れあがって限のつぶれた年令の不明な婦人の、親子と思われる三人の負傷者を収容して来て、私の机の位置から直接見える窓の下に、並べて寝かせた。三人とも汚れてはいたが衣服は着けていた。男児は収容されて、暫くすると呼吸を止めた。「兵隊さん水ちょうだい。」と言うのが、重傷者の口にする唯一の言葉であったが、既にその力も無くなった母親が、自分の右側に横たわっている女児の顔に、時々手を伸ばして、呼吸を確めていた姿には、強く胸を打たれて、正視することができなかった。早く、早く、と何回も督促したが、収容を待ちきれなくて、女児、それから母親と、母子三人共、次々に私の限の前で息を引きとっていった。男児は、私の長男と同年輩であり、他人事とは思えず、崇高強烈な母性愛に、胸を引き締められるような、本当に辛い悲しい思いをした。

日を経るに従って、救援隊の作業の主体は死体の処理となった。死体の処理はすべて火葬によった。薪にするものが不足がちだったので、重油・軽油を使用した。氏名不明の遺骨は、地区毎にとりまとめて、仮埋葬し、簡単な標識を立てておくように指示した。従って、広島市が復興の歩みを踏みだしてからは、市内の方々から遺骨が出たものと思う。氏名の判明した遺骨は、区分して遺族に渡せるようにしたが、とりに来たい遺骨もあった。処理した死体の中には半壊のものでも、男女の区別すら素人には判別できないものもあった。ほとんどの死体は全裸であって、氏名の確めようもなかった。赤十字病院の入口の近くに、急造の火葬場を作り、刻々に死亡する人達の死体を火葬したが、まことに止むを得なかったこととは言え、病院と火葬場と同じ場所にあった例は、あまり聞いたことがない。

出動して五日目と思う頃、川面に浮んで、潮の干満と共に上下していた無数の死体を処理することになり、吉島刑務所から作業隊が出て手伝ってくれた。舟で河から死体を収容し、岸までの運搬をこの作業隊が担当し、岸から後の作業を部隊で処理した。数十体の膨張しきった全裸の死体がずらりと並べられた有様は、見るに耐えないものであった。腐敗した死体は、その手を持って引き上げようとしても皮がツルリとむげず、収容に困難を極めたとのことである。

処理した死体のうち、氏名の判明したものは、部隊本部前に掲示したので、家族や親戚を探して来る人が連日多数あった、五日目頃であったか、探しに来た人が、求める人も見つからず、疲れはてて暫く休息しておられたが、終日食事もしていないとのことであった。隊員のさしだした握飯を、非常によろこんで食べ、礼を述べて二、三步外へ出て、バツリ倒れ、そのまま再び立てなかった。外傷も無かったのに、炎天下に連日焼野原を誰か最愛の肉親を探し求めて歩き廻るうちに、放射能の影響を強く受けられたのかも知れない。また、掲示した氏名を見て、「私はこの通り生きておりますが」と申し出た人があった。いろいろ聞いてみると、六日の朝、吉島の工場に出勤して、門の附近に上衣を脱ぎ捨てたまま、丁場内で救助作業をしているうちに、服がなくなったとのことである。誰か、全裸の負傷者が避難の途上で、落ちていたこの上衣を着た後に息が絶え、これを部隊で処理したものらしい。死体の処理で手を焼いたのは馬の死体であった。しばらくの間は、手が廻らないままに放置してあったので、腐敗して大きく膨張し臭気もはなはだしくなっていた。火葬することも出来ないもので、空地に穴を掘り、これに引き込んで埋葬した。

当初、道路の啓開作業で困ったのは、クモの巣のように道路一面に拡がって落ちていた電車の架線の除去であった。

ワイヤー切断機を入手してやっと作業がはかどった。電鉄本社附近の家屋は、半壊のものもあったが倒壊したものも多く、県立工業学校や工業専門学校には避難者が充満していたようであった。ここには救援隊員が運びこんだ負傷者も多かった。倒壊した家屋の屋根瓦の下を、火がくぐって半壊の家が燃え始めた。燃え上っては、更に南の方に延焼することは明瞭である。本部にいたわずかの人員が全員出て、瓦をはいて消火に努めた。数回繰返して、完全に延焼を食い止めるまでには相当の時間を要した。毎夜、夜が来るのがつらかった。昼間の服装のまま、机の上や防空壕の中、椅子の上でござ寝をしたのであるが、蚊の多いのには全く参った。人間が少なくなったので、特に集中して来たのかも知れない。

投下された爆弾が、原子爆弾であることは、八月六日の夜、アメリカからの短波放送を聞いて知った。

水道の修理工事を実施した人達が、八月六日の一日の作業で次々に倒れたので、工事を取止めにしたと聞いたが、吾々は作業を放棄する訳にはいかなかった。七十五年間は人間が住めないだろうというデマが、真実味をおびて流布されていたが、五日目であったか、焼野原で雑草を見つけた時うれしかった。

井戸の中に死体が折り重なっていたこと、河岸で数人の学生が、腕を組み合ったままで死んでいたこと、倒れた塀の下敷きとなって一列に並んで死んでいた生徒のこと、小さな池に集って死んでいた多数の人達のこと、等々、日々聞く報告は総て悲慘と言うには言葉の足りない事実のみであった。部隊の軍医であった内田大尉は、連日夜遅くまで精力的に走り廻って救護作業を実施していたが、夜遅くなっても、毎日私に報告してくれた。ある晩、報告に来た内田大尉が、憤然として「部隊長殿、戦争には負けられませんよ。今度の爆弾は実に非人道的なものです。死体の解剖所見によると胃袋の内部を、ワイヤーブラッシュでこさいだようになっていたものや、内臓の小さな管までも血液で閉塞していたもの等、真に残忍なものです。」と話した言葉が、今も忘れられない。赤痢のような症状で死亡した無数の人達の胃袋は、このようになっていたのかも知れない。私をはじめ、出動者の多数の者が二日目ごろから下痢を始めた。人により程度の差はあったが、その後一カ月も続いたものや、復員後も下痢を続けた者もあった。私も胃袋がどうにかなったのではあるまいかと心配したものである。

似ノ島検疫所に支援のため派遣した隊長からの報告によると、当初は衛生兵の補助として、被災者の看護を手伝っていたが、死者の続出のため派遣人員を更に約三十名増加して、死体の処理に専従させたとのことである。又似ノ島に一箇所あった火葬場では間に合わず、多数の死体が腐敗するに至り、止むを得ず一部の死体を防空壕に土葬としたとのことであった。部隊の将校夫人が一名、似ノ島に収容されて死亡されたこと、方面軍の参謀であった李グウ公殿下が、似ノ島で逝去されたこと、御付武官が責任を感じて自決されたこと等も知った。

出動中、全員の食事は幸ノ浦から運搬した。既に物資の欠乏していた頃であったから、極めて質素なものではあったが、毎日三食を運搬してくれた残留部隊の

労苦も、大変なことであった。約一週間の救援作業を一応終り、八月十二日から逐次幸ノ浦に引揚げた。処理した死体のみで一万を越え、収容した負傷者の数は幾万あったのか、正確には記憶していない。当時の隊員は、大部分が満洲特別幹部候補生出身の少年で、いずれも十六ないし十八歳の若者であった。死臭の漂う焼野原で、二次放射能の影響も知らず、炎天下を連日活躍し、夜間作業も実施して疲れ果てて、瓦を片付けた僅かな平地にゴロ寝の露営をしつつ頑張り続けた少年兵の姿は尊く、今も忘れられない。

部隊の将校家族に数名の死亡者及び行方不明者があり、将校の中には火傷を受けて長い間苦しみ続け、今もお不安な生活を送っている者もある。隊員のうち一名が、昭和三十五年頃血液病で死亡した。他にも出勤者の中には、二次放射能の影響を受けて苦しんでいる人が、多数あるものと思われるが、連絡不能のため不明である。幸ノ浦帰還後、白血球の検査を受けたが、ほとんどの者が三千以下になっていた。幸いに下痢は重症者はなかった。点状出血や脱毛の症状もでた者は余りなかった。一部の隊員は再び出勤して、終戦後まで各種の作業に従事したが、部隊の主力は終戦まで訓練に熱中した。

任務を解かれて初めて、当時材木町の浄円寺にあった私の祖先の墓を探したが、墓石がなかった。方々を探した後に十メートル位西南方に飛ばされている墓石を見つけ、当番兵の協力を得て、やっとのことで旧に復した。墓石は、新しい刻字の部分が焼けて少し壊れていた。墓地の他のお墓も、墓石の坐っているものは全くなかった。お寺の本堂その他は、完全に瓦礫となり、物淋しい姿であった。家族のことが気になって、十四日、中山村の家に帰ってみると、柱だけになった部屋に、義母と義妹が寝ていた。義母は硝子の破片で腰を負傷したが、東練兵場で二夜を越し、少々元気になってから私の家に辿り着いたとのことであり、義妹は出勤の途上、的場町で倒壊家屋の下敷きとなったが、運よく近所の婦人二救出され、乳母車に乗せられて、私の家に届けてもらったとのことで、その後も長い間腰が立たなかった。部屋の壁、柱には無数に鋭利な刃物のような硝子の破片が突き刺さっていた。建具類は使用できるものは一つもなかった。家族（三・五人）は負傷もなく無事であった。当日の朝、長男が飛行機を見上げて庭に立っていたのを、妻が呼び込んで、膝の二男と親子三人が二階への階段のある狭い部屋で抱き合った時、あの閃光を見、爆風を受けた。

部屋の中に居たらガラスの破片と家具類によって、相当な負傷をしていたことであろう。近い親戚のうち、行方不明三名、一週間以内の死亡者五名であった。部落から出ていた家屋疎開の勤労奉仕の人達は、一名を残して全部死亡されたという。妻は三男を妊娠していたので、勤労奉仕を免除されて家に居たのであった。中山村の小学校も収容所になっていて、妻も看護の奉仕に出ていたので、その惨状を色々と話してくれた。部落の河岸では、毎日火葬の煙が絶えず、私の帰った十四日の夕刻も、ものがなく煙が立ち昇っていた。

一〇

清水健

(当時第四十九戦隊・陸軍大尉)

江田高幸ノ浦にて、徹夜の演習後で、仮眠中突然音響が聞こえた。

斉藤隊長と同じく、相生橋及び県庁を通過した記憶あり。具体的には記憶不明確。活動場所は遺憾ながら具体的には記憶しておらず。他の戦隊と同様、斉藤少佐の指揮下にあり、同じく行動した。

隊員の復員後の状況については遺憾ながら熟知せず。

私は、救援活動のあと二次放射能による白血球減少症(三千以下)にかかった。

――

石塚恒蔵

(当時海上挺進隊第五十戦隊・陸軍大尉)

一、その日は朝から快晴の日であった。江田島の北側東能美島幸ノ浦の海辺波うちぎわに面した九尺二間程もある週番司令室で、波穏やかな瀬戸の海を眺めながら、九州出身のY見習士官が命令受領に来て、土間に立っていた。二言三言話していた時、突如宇品方向の右側に覺しき方向に、白金色の閃光が走ると見る間に、朝日の数十倍の大きさの真紅に燃焼した赤タンの火の玉が挙がると同時に、ぱっと身体に感ずる圧力を受けた。

その、疊八畳敷もあろうかと思う大火玉を何事かと見ていると、ドーンという大音響と共に屋根のトタンの錆と煤がバラバラと頭の上に落ちてきたので、これは付近に別の爆弾が落ちたのだと、錯覚を起した。今から考えると閃光が先で、爆発音は後であったのだ。その火の玉は約三十分以上も地上すれすれの処にぶら下がっていたので、火薬庫の大爆発で火の玉を起したのだと思った。その大火圏がダイダイ色にあせる頃から、層の厚いキノコ雲が火山の大爆発を想わせるように、中天高くモクモクと濃く厚く、まるで生物の如く、後から後から湧いて、一日中それを繰り返していた。

始めは火薬庫の爆発の火か、ガスタンクか、或いは付近の重油タンクに引火してその燃料に燃え移ったのかと思った。そのうち船舶司令部から、広島市内が徹空襲の爆弾によって大火災を起しているのので、部隊全員が救援に出るようにとの報を受けた。私は折悪しく週番司令だったから、部隊と離れることができないため、前任将校の指揮で戦隊全員を船に乗せて宇品に向わせた。その時刻は、正午ごろであったろうか。海は相変らず潮水を思わせるように静かに穏やかであったが、中天に達するキノコ雲は相変らずますます層を厚くして、無限のエネルギーを発散していた。部隊全員を送りだした島は、ガランとしていたが、宇品の船舶司令部からの情報は、午前中適確なものは余りなかった。が、しかし怪我人や火傷を負った人達が似ノ島の検疫所に、陸續と送られている情報が風の便りにはいった。部隊は午後を過ぎても夕刻になっても、帰って来なかった。これは相当の被害だと想像した。翌日になると、似ノ島の検疫所では、裸体の無残な負傷者が、

次々と運ばれている事が判り、李グウ公も軍司令部へ出勤の途中遭難され、同検疫所へ運ばれた事を聞いた。三日目になって、週番勤務が漸斜になったので、船で送られて宇品に向った。途中行き交った舟艇には白い包帯を巻いた怪我人がたくさん乗っていた。宇品の栈橋でも同様で、おびたしい怪我人が、舟艇に乗せられていた。これは大変な事になったと思った。船舶司令部から貨物自動車を出してもらって、それに乗車した時、宇品の街の屋根瓦は大震災に逢った時のように、みまづれて今にも落ちそうであった。私の部隊は、西練兵場の手前の聯隊の入口の道路をへだてた前附近にたむろしていた。その附近が、原爆爆発の中心地であることが、ずっと後になって判ったが、私が其処に着いた時は、市内電車軌道からはずれ、電線は寸断され、電柱は傾き、街路樹も聯隊附近の松の木も軍司令部附近の松の大木も、宇宙の怪物が折ったように中途からへし折れて、真黒く焼けていた。また、コンクリートの建物は爆砕され、木造家屋は全部焼失していた。住民は一瞬にして爆発の衝撃で打ち倒され、後の火災で焼かれて男女の区別がつかぬ程黒く焼かれて、到る処に放置されていた。それを私の部隊の若い候補生達は、焼けたタンを利用して急造の担架を作り、焼け残った遺体をそれに乗せては、十四、五体ずつ一ヶ所に集めて、焼け残りの家屋の木材を積んでは、それに乗せては、茶毘にふしていた。遺体には指が残っていて、割合短時間で茶毘にふすことができた。二時間位、原爆中心地附近の夥しい屍体を何十ヶ所で焼いた。この作業を一週間続けた。その頃から新型の爆弾の被害であることが少しずつ判ってきた。その夜、私は部隊を駐屯地に集めて訓辞をした。敵アメリカは遂に勝つ為に手段を選ばず非戦闘員である住民に対して天人共に許さざる悪虐非道の殺戮をした。我々はこれを肝に銘じて、きたるべき決戦の時、敵の心臓に向って、必殺の体当りをするようにと。しかし現在さし当っては、不幸にして被災せる広島市民の遺体収容と、治安維持に従うようにと述べた。そうした間にも夜通し火傷をした人が部隊を訪れたり、道路を通過して行ったりした。候補生の話聞いてみると、宇品から市内中央事夜行軍で来た時に、多数の重傷者が、その沿道にころがったり、うずくまっていた、軍靴の音を聞くと、「兵隊さん、水をくれ!」「水をくれ!」とうめいんでいる声が耳について一晩も二晩も眠れなかったという。私の部隊の本部は広島市内の最も繁華であった処に位置したらしい。私は翌日、私の部隊の救援受持区域を巡視の為、今の原爆ドームから太田川の附近まで足を延した。太田川の中は、三日経っても、四日経っても屍体の片づけ手がなく、夥しい数の遺体が氷に浮んで満潮の時はおし上げられ、干潮の時はおし下流に流れていた。陸上の屍体取片づけが先だったので、河の中までは手が届かなかったのだ。原爆ドームの入口附近に白人の屍体がうずくまっていた。通行人が憎しみをこめて石を投げたらしく、こぶし大の石がたくさん当たっていた。

聯隊の反対側の広い道路の側で遺体を焼いた中に、モンペ姿の胸に焼け残った衣類に「的場文子」と書いた遺骸を茶毘にふしたが、若い人らしかったのでどういふわけか、今でもその名前だけ覚えている。私はうら覚えのお経を誦しつつ、それ等の遺体に手を合わせた。

私の本部それより東の方にあったが、バスの停留所や電車の停留所の所と覚しき所では遺体の数が特に多かった。

中には防空壕に半分這入りかけて死んでいる人や、お百姓さんらしい牛車で肥料あげに来て、牛もろ共に死んでいる人が銀行附近にあった。この牛の屍体を三日経って焼く時は、腐臭と共に手間がかかって困った。何処へ行っても被災者の累々たる遺体で、如何に大きな被害であるかがしみじみと身にしみた。そうこうしている間に、八月九日、長崎がまた原爆でやられたとの報を受けた。

この屍体収容作業も一週間目にはどうやら片がついたが、被災地で昼夜兼行で働いたためか、疲労と二次放射能の影響を受けて、軽い頭痛と、目まいと発熱を感じた。だがその時はちっとも気にとめなかった。一週間目に、部隊から帰還命令があったので、幸ノ浦に帰って来て、やっとホッとした感じであったが、惨憺たる広島の被災地が眼底から去らずに、二日程過している中に再度広島へ救援作業に赴くようにとの命令がでた。毎日焼けつくような暑い日が続いた。再び広島市内へ直行し、原爆中心地とは少し離れた広島貯金局へ陣取るように、配置された。貯金局の大きな建物は被災以来ガランとしていて、無人の建物であった。窓ガラスは見るも無残に破れ、広い事務室にはガラスで傷ついたらしい人の血痕が、あちこちに飛び散って、黒くへばりついていて。事務机をあけてみると、ご飯のいつぱい詰まったアルミニウムの弁当が腐ってカビを生じていた。出勤した人達が爆風のため傷ついて四散してしまったのに違いない。第二回目の救援は此処を本拠に市内の受持区域を巡視巡察をして、警戒の任に当たった。私はこの頃から発熱激しく、ありあわせの長椅子に毛布にくるまって臥床し、水で頭を冷やしてもらった。原爆の症状は、四十度位の発熱と激しい下痢と、頭髮が抜けた。夏の盛りであったから、学校の生徒も召集日で短いシャツ。市民も腕をだして、身軽な服装の人が多かったから、皮膚をひどく焼かれた。最初は水泡状態だったが、放射能の浸透と共に前記発熱と下痢と脱毛がひどくなって、次々と倒れていた。私の熱は二日位でよくなったが、忘れもしない八月十五日午後一時頃、終戦の詔勅を聞いた。全身の力が一度に抜けた感じだった。何のために今まで苦勞したのだろう。虚脱状態とはこういう状態をいうのだろう。私は一日中放心した状態だった。B少尉は机にしがみついて声をあげて泣いていた。慰めるすべもなかった。

部隊へ帰って来て医務室で、白血球の数の調査をもらった時、軍医が首をかしげていた。「どうしたんだ」と聞くと、私の白血球は大部減っていて八百位とか言っていた。その頃は治療法がはっきりしていなかったのか、お灸か、レバーのようなものを食べたらいだろうと言われていた。

一二劫火

半井良造

(当時海上挺身隊第四十二戦隊・小隊長)

一、八月六日

〔閃光と爆風〕

朝早くから空襲警報が発令されてバタバタしていたのが、八時前に解除されて警戒警報中であった。(広島では既に警戒警報も解除されていたらしいが、部隊では解除が遅れていた。)

朝食後、訓練の準備で兵舎内では皆それぞれ仕度をしていた。私も自室で机に向かって調べものをしていたが、真夏の朝日を反射して明かるい窓の外が、一瞬、まるで写真のフラッシュをたたいたようにピカッと光ったように思った。

私の部屋は兵舎の南端にあって窓は南面しており、海岸すなわち広島の方角とは正反対に開いているのだが、五〇メートル程向うが丘陵で、部隊の防空壕もここに掘ってあるのだが、その斜面と、近くにある建物(便所等)がまぶしい程明かるくなった。

オヤッ?と、窓の外を見ると、前を歩いている兵隊が立ち止って広島の方の空を見ている。「おい、どうした。」と、私は声をかけたが窓際へ歩み寄り、窓から身体をのりだして広島の上空を見た。

実を言うと、その時の空の状態がどうであったかは、はっきりした記憶がないのだが、北方の広島の上空が、太陽の輝くように明かるく光っていたように思う。音は何もしない。

「何だ、あれは?」と、つぶやきながら元の席に戻って、腰をおろしたその時、ドッカーンと大地もひっくり返るかと思うような大音響と木造トタンぶきの兵舎が、ふっ飛ばかと思うようなものすごい大爆風がビューンとやってきた。

海岸に立っていた堀は倒れたり、ひん曲ったり、兵舎の扉は開いていたものは開き、開いていたものはパターンとこわれんばかりの勢いで閉り、棚からはガラガラと色々なものが落ちてくるし、遠くではチャリンチャリンとガラスの割れる音はするし、いやいや全く、台風と大地震が一緒に来たような状況だった。

私は今の爆風が来たなとすぐに解ったが、舎内にいた大部分の兵(特幹生)は、閃光も何も見ていないからそれこそびっくり仰天だ。はだしてかけだす者やら、地面にひれ伏す者やら、上を下への大騒動だった。

閃光から音響と爆風まで二〇秒近くもあったのだろうか。これが私が肌で感じた原子爆弾の最初であった。

〔きのこ雲〕

大騒ぎがやっとおさまり、防空壕から兵舎へ戻るところになって気がついてみると、広島の上空に大きな黒い煙の塊がポッカリと浮かんでいる。そしてそれがまるで生きもののようにモクモク、モクモクと動いており、しかもその所々にチョロチョロと、真赤な炎が見えかくれしている。それは、さながら悪魔が御物を前にして舌なめずりをしているかのような、不気味な感じがした。

爆発から五、六分もたっていたかと思う。勿論我々は、これが原子爆弾などとは夢にも知らず、敵機も去ってからのことだから多分、広島のカスタンクでも爆発したのだらうと思い、やがて平常通りの訓練にとりかかった。それから更に一〇分以上も経ってからだと思う。さっき見た真黒の煙の塊は、いつの間にか真白な煙の塊と変わっていて、尚もムクムク、ムクムクと不気味な活動が続けており、煙塊の下の方には所々で、赤い炎が白煙をピンクに染めてメラメラと顔をだしている。煙塊の大きさは三倍も四倍大きくなっていた。原爆のいわゆる “きのこ雲” はそれから更に一〇分以上、爆発してから三〇分以上もしてから現われたように思えた。

ピンクがかった白煙の塊は、更に更に大きくなって尚も活動をやめず、そしてその中央の辺から真白な煙の柱が、風のない澄みきった青空に、まっすぐに上へ上へと延び、やがて遙かな上空で花が開くように左右に拡がって、さながら “きのこ” のような形となり、真夏の陽光を受けて輝くように見えた光景は、二〇数年を経た今も尚忘れられぬ美しい光景であった。

このきのこ雲がいつ消えたか知らないが一時間以上も続いていたように思う。最後に見た時は北東の空のかたにちぎれ雲のように、いや羽衣をつけた天人が天上へ消え去るようになっていた。

広島に災害に気がついたのはそれからまた後であった。

〔出動〕

部隊から(レ)艇で偵察に行った者が、“広島が大火でひどい災害らしい”という情報を持って来たのは、もうかれこれ昼近くになっていたように思う。海岸に立って、双眼鏡で見ると広島は街が薄雲でつまれたように煙って見える。さっきの爆発で火災が起きたのだらうとは思像したが、それ程の大災害になっているとは知らず、昼食後、午後の訓練も予定通りに始められた。この日、私の所属する戦隊(草深隊)の訓練は、午前中私の担当で“機関の教育”。午後は“陸上における戦闘教練”で藤から海岸沿いに一キロメートル程東の方にある砂地の広場へ戦隊長以下全員で行った。

私は翌日の勢門の準備があるから兵舎に残っていたが、皆が出て行って間もなくだったと思うから、午後一時半頃であつたろうか、部隊長から全員に広島へ出勤のための非常呼集がかった。

急ぎ帰隊した我が第四十二戦隊が、出動準備を整え、戦隊長草深上二大尉、戦隊付中校江頭政中尉以下小隊長(見習士官)・班長(下上官)・兵(特別隊幹部候補生)総員約百名のほとんど全員が舎前に整列したのは、午後二時半か三時頃であった。

服装は水上作業衣袴・巻脚絆・軍靴、携行品は水筒・飯盒・雑囊等であつたと思う。

私は前述のとおり教育を担当していたため残留を命ぜられたから、自分の小隊長に「お前達がはじめて、お国の為の御用をする時が来たのだ。しっかりやっ来てい。」と訓辞した。

やがて戦隊毎に大型発動艇に乗って宇品港へ向って出航していった。

各戦隊とも私と同様の教育担当の小隊長が残留したところを見ると、この時は部隊本部も広島救援の作業が、一両日で済むものと判断していたのであろう。

夕食は私と週番下士官・週番上等兵そして数名の練兵休患者だけだから、気楽に将校室で一緒にとった。おかずは珍しく牛肉が沢山あったように思うが、あるいはこれは広島で爆死した牛の肉であつたかも知れないのだが、勿論そんなことはつゆ知らず、みんなで食べた。

余談になるが、広島救援作業から帰ってから数日の間も牛肉の副食物がよくでたが、これこそきつと被爆した牛であったのだろうが、皆うまいまいと喜んで喰った。放射能の値はそれこそ焼津港のマグロの数千倍もあったのだろうが。どの兵舎もどの兵舎も部隊全部がひっそりとしている。点呼も週番が適当にやったのだろう。私は少し早目に床に入った。

〔宇品栈橋〕

よい気持ちで寝ていたら「教官殿、教官殿」と不寝番にゆり起こされて目を醒ました。「何だ」と起きると、部隊長の命令で、私も出勤せよとのこと、夜の十時過ぎであったかと思う。眠い目をこすりこすり服装を整えて部隊本部へ行くと、各隊から集った私と同様の見習士官が数十名になった。

全員、直ちに舟艇に乗船し、真黒な海上を宇品へ向って進んでいった。宇品の栈橋へ着いたのは、多分夜中の十二時頃であったと思う。

最近、二度、幸ノ浦の部隊跡へ行ったが、宇品港の変貌には驚いた。どこがどう変わったのか正確なことは知らないが当時の宇品港はガタビシと揺れる栈橋を上るとお粗末な改札口があり、そこを出るとちよつとした広場があって、右の方へ行くと船舶司令部、左の方へ行くと宇品の電車通りへでたように記憶している。

八月六日の夜の月齢が何日であったかは知らないが、月明かりのない真暗闇であった。勿論、電灯たども一つも灯っていないから、それこそ鼻をつままれてもわからないくらい。足元のコンクリートの白さだけを頼りに、二列に並んで広場へ出ると、ものすごい消毒薬の匂いが鼻をつき、広場全体が何とも言えない異様な雰囲気につつまれているような感じがした。

ハテ？？と歩きながら闇にすかしてよく見ると、通路の両側に積み上げられた貨物の前に、居るワ居るワ、手や顔に繻帯をグルグル巻いた負傷者が、坐ったり、横になったりしてぎっしりと並んでいる。苦痛の為にうめき声をだしている者もあり、ヒョロヒョロとさまよい歩いている者もあるが、大部分は音もたく声もなく、かと言って眠っているようでもなく、ただ悄然と坐っているかのように見られた。

私は思わず背筋に冷たいものが走るような感じがした。多分、昼間来た我々の仲間が、救出し、応急手当をして船舶司令部や、島の島の検疫所へ移送途中の患者であったのだろう。

我々はそこから、用意されたトラックに乗って、暗闇の町を爆心地へと走った。宇品の町は火災こそなかったが、どの家もどの家も、程度の差こそあれほとんど例外なく斜めに傾いたり、屋根がふっ飛んだりして、窓や扉のガラスはそれこそ一枚残らず割れて、開け放しの状態。

時折り見える警防団や自警団の灯の他は、灯りもなく、人もなくまるで死の街のような感じがした。災害は爆心地に近づくにつれて激しくなり、やがて着いた所は部隊本部(電鉄本社)であつたらしい。

〔消防ポンプ〕

「とにかく、あの火を消さなければならん。お前達、直ちに消火作業にとりかかれ。」と本部の前で命ぜられた。我々の立っている所から四、五〇〇メートル向うは火の海である。この時、部隊の上官から命ぜられたのか、自分達で考えたのか忘れたが、見習士官一〇名程が再びトラックに乗って、宇品へ引き返し警防団の詰所へかけあって消防ポンプを一台借りた。先方もすぐには貸してくれなかったが、もうこの時分には、我々も殺気立っていたし、軍の威力でいや応なしにポンプをトラックに積みこんだ。警防団からもポンプ操作の為一、二名乗りこんだ。トラックは電車通りを再び爆心地へ向って走った。

途中、貯金局の前ではガラスがふっ飛んで開け放された窓から、何千と知れぬカードの散乱しているのが見えた。こんなことで貯金に分るのだろうか？——と思った。やがて火災現場へ到着した。多分夜中の零時半頃であったかと思う。電車通りから左側(西側)が全く物すごい火の海で、炎の向うに赤十字病院が見えた。電車通りの右側は燃え尽きていたのだろうか、どうなっていたのか記憶がない。我々は赤十字病院の北側？附近の広場(疎開跡)にポンプを下ろし、消火作業についた。この時一緒にいたのは一〇人程だったように思う。

幸ノ浦から来た他の戦隊はどこへ行つたのだろうか。私は、グンと全身に力を入れ、ホースの筒先を持ち、火焰に向って走り、「筒先ヨーシッ」と後へ向って手を挙げた。“風下から注水”ということが頭に残ったが、今は風向を判断している余裕はない。ただ目の前の火に水をかけることしか考えていなかった。ところがいつまで待っても水がでてこない。猛火の輻射で顔や手が熱くて仕方がない。物陰にかくれるようにして「おーい、早く水を出せーッ」と、大声で叫ぶのだが何をモタモタしているのか一向に水が来ない。「エンジンがわからない」と、後方で言っている。私は部隊でも機関の教育を担当していただけに、多少はエンジンに自信があったので後へ下がって点検してみた。消防ポンプは二気筒のガソリンエンジンだった。プラグは？……発火しているはず、燃料は？……と調べると、タンクからのパイプのcockが開いている。これでいくらやってもエンジンはわからない訳だ。cockを開けて手動のクランクを数回したら始動した。私は再び筒先へ行き、もう一人の見習士官と共に火炎に向って注水した。ところが火炎との距離は二、三〇メートル程であったかと思うが、熱くて熱くて仕方がない。勢いよく水も出ているのだが、筒先が焼けてきて素手では持てない程になった。然しこの時、幸か不幸か又もや水が止まってしまった。注水しだしてからまだ三分か五分ぐらいしか経っていない。ポンプの所へ戻ってみると、エンジンは動いているのだが、水がホースの方へ行かず、ポンプの真下に向ってジャージャーとえらい勢いで噴出している。水抜き栓の蓋が飛んでしまったらしい。火炎の明かりで地面を這うようにして探したが、瓦や石ころがゴロゴロしていて、いくら探しても見当たらないので遂にポンプを断念した。しかもこの猛火に対して小さなポンプ一台の水では、余り有効とは思えなかったが。

こんなことでゴタゴタしている時だった。立派な軍服を着た将校の団が自動車から降りて、我々の作業を見ている。誰かが、「ハイッ、十教(第十教育隊の略称)の者です。」と答えているようだった。するとすぐ近くで「ご苦労!!」という声があったので頭を上げると、胸には船舶部隊の胸章をつけた“べた金”の将校が立っている。暗いところで顔もよく見えなかったし、星の数も分らなかったが、まぎれもなく将官だった。私は思わず身体が硬直した。後になって考えてみると、あるいは船舶司令官佐伯文郎中将であつたかも知れない。

〔家屋倒壊〕

我々はそこから一〇〇メートルか二〇〇メートル程南の電車通りから、斜めに通っている余り広くたい道路まで戻り、火道を切るため、この通りの北側の家を破壊することになった。火はまだそこへまでは来ていない。

丁度、そこへ来た二〇名程の他の部隊と合流して共同で作業をした。人数は向うの方が多いが、階級はこちらが上だから我々が指揮する形となった。

家を倒すのは簡単なもので既に爆風で傾いているから、二階の柱が棟木に二、三本ロープを結びつけて皆でオイッチニイ、オイッチニイと引けばいい、ひとたまりもなくつぶれてしまう。

私が最初にロープをかかに行った家は電車通りの角の薬局だったと思うが、土足のまま二階へかき上って見ると、嫁入前の娘さんでもいたのか、たんすの抽出しが抜けて、その中にあの物資不足の折にもかかわらず、新しい着物や肌着類それに白足袋などがぎっしりと詰っていた。私にも年頃の妹がおり、母が同じようなことに腐心していたのを思いだし、数分後にこれらもみんな灰になってしまうのかと思うと惜しいような気もし、又気の毒のような気もして家の人がいるなら投げてやりたいなあとも思ったが、勿論そんな所にいるのは我々ばかりだからどうしようもなかった。

柱にロープをくくりつけては引き倒し、又次の家へ行っては引き倒して、道路の北側の家を次々と倒壊しているうちに、火が迫って来たので作業をやめた。これは相当効果があったらしく、大きな火は大体この線でくい止められたようだ。私は倒した家が燃えるの見て、向い側に延焼しなければよかったと心配していたのは憶えているが、その後どうしたのか、又、それが何時頃であったか全然思い出せない。次の朝、明け方の冷気に「おお寒いッ」、身を震わせて目を醒ますと、市電の安全地帯で寝ていたのだ。他の連中もその近くにゴロゴロと寝ころんでいる。どうやらあれから部隊本部の近くまで帰って来て、電車道で寝てしまったらしい。火事はもう消えていた。

二、八月七日

〔負傷者〕

起きたのは朝の七時頃であったと思う。そのうちに皆ムクムクと起きた。そこは市電の車庫の前であった。部隊本部がここにあり、私の所属している草深部隊もこの中にいることが後でわかった。起きて、まず驚いたのは、電車通りの両側に負傷者が二列、三列になってへたばっている。疎開跡と思われる広場にもギッシリという。それと昨夜、宇品で見たのとは比較にならないほど大勢の負傷者だ。しかも彼らは傷(大部分は火傷)の手当ても受けず、とにかく火の中から助けだされただけという状態で寝かされているのだ。我々が近づくと「兵隊さーん。兵隊さーん。」と泣くような声で呼び、早く助けてくれ、手当てをしてくれ、と必死になって訴える。見ると皆、顔も腕も脚もひどい火傷で水ぶくれになり、紫色の皮膚はブヨブヨにふくれあがっている。そして手も足も痛さの為か、あるいは死期が近づいているのか動かすことができない。若い母親が、横に寝ている幼児にムシロをかけてやってくれと頼む。すぐ横にあるムシロに手が延びないのだ。私がムシロをかけてやってくると、子供はもう息絶えていた。又ある女の人は死にもの狂いで水を飲ましてくれと頼む。ところがその顔は水ぶくれでブヨブヨして目をあけているのか、あけていないのか分らない。唇も鼻も腫れあがって、まるで怪物のようで気味が悪い。しかしいやともいえないので、私は目をつぶるようにして、水筒から水をのませた。又、ある少女は家の中で被爆したのか、火傷はしていないが、病身らしく青白い顔で私に「自分は病気で牛乳の特配を受けているから取って来てくれ」と言う。災害がひどくてとても牛乳どころではないと言っても仲々納得しない。やがて軍医がやって来て負傷者一人々々の肌に触ってみて「これは駄目」「これも駄目」と随従の衛生兵に言っていく。それは診察ではなく、生死を区別して行くだけであった。そして三人に一人は既に死んでいた。

〔地獄絵図〕

そのうちに車庫の中にいた私の所属戦隊「草深隊」を探しだし、私は戦隊長の指揮下に入った。だが私の小隊員はあちらこちらに散在していて、どうしているのかわからない。しかしそれを探しているいとまもなく、朝食後直ちに戦隊長に呼ばれ、三本(みつもと)見習士官と共に、各々部下三名を連れて、所定の地域内の負傷者の状態や人数及び死体の数等の調査を命ぜられた。

三本見習士官は朝鮮人だが、真面目で律儀な人だった。私とは割合に仲が良く、私の言うことにはほとんど異議なく、いつも同意してくれた。さてその時、調査に行った地域がどこであったか、正確にはわからないが、文理科大学から北方へ約一キロメートル程、電車通りから四、五〇〇メートル程の地域ではないかと思う。私達四人と三本見習士官達とは、東西に一五〇メートル程の間隔をもちながら北行した。

家の焼跡か、庭か、道路か、区別もつかない一面の焼野ヶ原を、負傷者や死体を探し探し進んで行ったが、案外死体も負傷者もすぐには見つからなかった。初めて死体を見たのは、焼跡を歩きだして五、六分もしてからだった。年令一五、六歳かと思われる少女で被服も焼けてしまったのか全裸で、四つばいの姿で真黒焦げになっているのを見た時は、内心ギクリとした。ところがこれくらいはまだほんの序の口で、それから三分もせぬうちに本当にどぎもをえぐられるような凄惨な状況にでくわした。

それは中学校の校庭と思われる所で、その周囲に立っている樹木の陰に三人、四人と幾組かの負傷者がいる。我々が近づくと、ここでも、ああしてくれ、こうしてくれとせがまれた。その隣の一段高差している所にプールがあったが、三へ上った時思わず「アッ!!」と息をのんだ。

二五メートルプールの周囲に二、三〇人はいたかと思うが、原爆の閃光や、爆風に痛みつけられ、その上面の猛火に追われて逃げて来たのであろうか、男も女も(ここでは案外、男の人の方が多かったように思う)半裸体で、しかも半分以上の人が、何故か絵の具でも塗ったように皮膚が真赤に焼けている。(水ぶくれにはなっていないかと思う。)瞬間私は、学校の理科教室にあった人体の解剖模型(筋肉や血管を赤や青で着色したもの)を連想したが、本当にこれが生きている人間かと疑いたくなるような凄惨さ、勿論、この人達も苦痛が激しく折からの真夏の太陽に照りつけられて、痛い痛い、熱い熱いとうめき苦しんでいる。プールにつかって死んでいる人も四、五人あり、中には片手でプールのふちを持ち、無念の形相で天をにらんで死んでいる人もあった。又、プールへ手をつけては身体に水をかけている人もいたが、その手の動きはまるで、ゼンマイのなくなりかけた玩目のように緩慢に、そしてぎこちなくなっている。きっと死期が近いのであろう。

全く“地獄絵図”を目前に見るような気がした。

我々は焼け残りの板やトタンやムシロ等を集めて日除けをしたが、とても十分なことはしていられなかった。その後、焼跡を進んで行くとあちらこちらに二体、三体と焼死体が藪がっているのが見られた。大分進んだ時だった。向うの方で「半井見習士カーン、半井見習士カーン」と呼ぶ声が聞こえた。三本が例の変なアクセントをつけて呼んでいるのだ。「どうしたーッ」と返事をする。「ちょっと来てくれーッ」と手を振って招いているので、私達は皆そちらへ向って走った。

〔老母〕

三本のいる所へ来て“ウァ!!”とばかりに立ちどまった。長さ一五メートルか二〇メートルもあったろうか、長い煉瓦塀がコンクリートの基礎を残してバツリと倒れ、その下に二〇人以上の人がずらりと並んで死んでいるのだ。町内会で勤労奉仕か、防空演習をするので町会長が訓辞をしている所を後ろからドカンとやられたらしい。死んでいるのはほとんど女の人ばかり、ところがその中に一人、いや二人だけ生きているのだ。一人は町内会長らしい。運よく煉瓦塀から少し離れてはいるが、腰でも強く打ったのか、いざりのように腕でソロソロと身体を動かしている。五五、六歳の白髪まじりの男の人だ。「〇〇町〇丁目の、自転車屋の太田と申します。家の者に誰かを迎えに来るように言ってもらえませんか？」と言うのだが、我々にはその〇〇町というのがどの辺か分らないし、附近一帯全部灰になっていて家らしいものは何もないのでどうすることもできない。そしてもう一人は、煉瓦塀の下敷きになっていながら奇蹟的に命を捨てたおばあさんが助けを求めている。年は六〇をいくつか越していたかと思う。我々が身体を引きだしてやろうと思うと、「痛い痛い痛い」と言う。脚を隣の人にはさまれて出ることができないらしい。倒れている煉瓦塀の高さは二メートル以上もあるから、五人や六人の力ではどうすることもできない。途方にくれていると、一〇メートル程向うの方を兵隊が一〇人程歩いている。「おーい、ちょっと来てくれーッ」と応援を頼んだ。彼らは戦前隊ではなかったが(工兵隊?)都合のよいことにスコップやつるはしやロープ等を持っていた。私は煉瓦塀は少し強い衝撃を加えると案外もろくこわれることを知っていたので、つるはしを借りておばあさんの足もとの煉瓦を割り始めた。すると予想通りボロボロと割れて、暫くするうちに四、五〇センチメートル程のネズミの通路のような形の穴があいた。そこでのぞきこんでみると、おばあさんの右側に二二、三歳の大柄な女の人がひざを折り、うつ伏せになって死んでいるのだが、その人の腹とひざの間におばあさんの右脚が入っているらしい。穴をもう少し大きくあけてはみたが、モンペをはいた大きな尻が見えるだけで、手のつけようがない。私は軍刀でこの尻を切つてやろうかとも考えたが、骨もあることだし、大根を切るようにすっぱりと切れる訳もないし、第一死体を切るのは刀が汚れるような気もしたのでやめた。そこで死体の左の足首にロープを結びつけて、皆の者に「一・二、一・二」と引っ張らせたらバイーンと太い脚が穴から飛び出した。これはうまくいったと思い、老婆を引きだそうすると、又「痛い痛い」という。まだどこかはさまれているらしい。そこで死体の右脚も同じ要領でいこうと思って、右の足首にロープをかけようとすると、足の皮が腐りかけた桃の皮のようにズルリとむけて、血かうみか?私の手袋がグッショリめれた。一瞬、私もゾクッと身震いして思わず手を引きかけたが、皆の者が見ている手前、やめるわけにもいかず、目をつむってロープをかけ「よし引けッ」と号令をかけると右脚もうまくでた。これでやっと老婆も外へ出ることができた。「おーきに、おーきに」と涙をこぼして喜んでいる。「おばあさん、後で助けに来るから気をしっかり持っていなさいよ!!」と励まし、町内会長にも同様に言って我々はその場を離れた。午後、他の隊員と共に助けに行くと、町内会長の姿は見えず、おばあさんは元の煉瓦の下へもぐりこんで静かに死んでいた。“ヤレ助かった!!”と気が緩んでガックリいってしまったのかも知れない。こんなことで、あっちこっちで予想外の時間をくいで、予定の調査をして帰ったのは、二時間ぐらい経っていただろう。戦隊長に調査報告をすませた他の隊員は、既に手近なところから作業を始めていた。午後には、私達が案内役となって負傷者の救助や死体の運搬をした。かますやドンゴロスに青竹を通し急造の担架に負傷者や死体をのせて大通りまで運び、それをトラックがどこかへ連れて行くというようなことだった。

〔新型爆弾〕

右を見ても左を見てもあたり一面焼野ケ原、東方比治山から北方にかけての山並みは、丁度、京都の東山から北山を想わせたが、それらがすぐ近くに見えた。西の方は大きな川を隔てて、その向うもすっかり焼けきっている。南の方は文理科大学のあたりまで焼けて、その向うは火災を免れているようだ。午前中は町に行く人の姿も余り見かけなかった。前記『地獄絵図』といった学校のプールの調査をしている時、七、八人の人が我子、我妻、兄妹などを探しに来ていた。血走った眼・破れた衣服・きつとその人達も火に追われ逃げまどい、肉親と離れ離れにたつたのであろう。午後になると、大通りを往き来する人がチラホラ見えた。食べ物や身の周りの品々をバケツやリュックサックに入れて、行く先のあてがあるのか、ないのか、疲れきった様子でフラフラと歩いている人が多かった。そんな時に一人の警察官に会った。我々は死体の着衣についている名札などで姓名・性別・年齢などを軍用箋(通称「通信紙」)に記入していたが、着衣が焼けていたりして大抵は姓名は不明、年齢も推定が多かった。女の人の死体を調べている時、背中に鉄帽を負った四〇過ぎの警察官がやって来て、同じ死体を見ているので、私は二〇歳前後かと思いい「これはまだ若いね」と言うと、「いやあ、この乳は出産経験のある者ですよ。まあ二六、七ですね」とさすがに専門家らしく教えてくれた。「ひどいですねえ。これは一体どうなったんですか」と問うと、「新型爆弾でがんさア」と、広島弁で答えた。「ほう、ガスタンクが爆発したんじゃないのですか?」「いやあ、そんなもんじゃ、ありませんがなア、日本も早うあれを使わんけりやいけませんがなア。」と言って立ち去った。軍に対する不満をぶちまくようにして……。

私も昨夜来の物凄い災害とその範囲の大きさから見て、とてもガスタンクどころではなさそうだとは思っていたが、今、改めて「新型爆弾」と聞いて少なからずガッカリした。日本軍にあんなものがあれば、とっくに使っているはずだから……。「原子爆弾」という名称は数日後、部隊へ帰ってから聞いた。

〔夜間作業〕

こんな作業を繰り返しているうちに、夏の日もようやく西に傾き、作業を打ち切って戦隊本部になっている市電車庫へ帰った。夕食になって、やっとあちらこちらに散在している自分の小隊員の顔を見た。昨日からの昼夜に亘る作業と余りにも無残な状景を見続けてきたせいであろう。皆グッタリとしていた。ここでの

編成は、部隊での小隊編成とは全然違っていた。夕食後、隊長の指示により、各小隊から一名か二名が、私の小隊員となって一〇名程の第八小隊ができた。誰と誰だったか名前も顔もすっかり忘れてしまったが、下士官も兵長もいないので、たしか三好光男(現在川村光男——松阪市東黒部町)が班長代理をしていたように思う。宿舎は車庫の中にある電車の車輦で、一台に二、三ヶ小隊宛入って寝ることになった。電車の座席に腰をかけたり横になったり、床にムシロを敷いて寝たりして、着のみ着のまま思ひ思ひの姿でゴロ寝した。

電灯もなく、月明りもないから外も中もまっ暗闇、星が大空一面に美しく輝いていた。電車の中で数名の兵がゴソゴソ話をしながら暗闇の中を行ったり来たりしている。やがて私の小隊員もドンゴロスに罐詰を入れて、電車の中へ持ち帰って来た。「どうしたのだ。」と聞くと、少し離れた所にある罐詰工場から取って来たという。火事で焼けてあたり一面に散乱しているということだ。そういえば先程から、遠くでボーンボーンと、鈍い爆発音が時折聞こえているが、罐詰の破裂する音らしい。持って帰って来たミカンの罐詰も半分以上は罐がふくらんでいる。しかしこれは火事でふくれたのだから大丈夫だろうと言って皆でわけて喰った。思ひかけぬ甘味品の特配だった。

一寝入りした夜の十一時頃だったろうか。戦隊本部の当番が起こしに来た。寝入りばなの睡い目をこすりこすり聞くと、戦隊長の命令で、直ちに夜間作業の用意をせよと言って来た。「全員か」と聞くと、「いえ八小隊と七小隊だけです。」「八と七?」「はい建制逆順です」と言って走り去った。私は内心大いに不服だった。特別の事情がない限り、

建制順に第一・第二と行くのが当然なのに、こんな時に建制逆順とは一体どういうわけか……。

みんなヘトヘトに疲れているのに……と。しかしそんな理屈や不平が通るところではないのだ。いやそれらは絶対禁物の軍隊だから仕方なく八小隊を一人一人ゆり起こした。第七小隊も三本見習士官が隊員をゆり起こして、電車から飛びだして行った。私は腹が立っているからわざとゆっくりとして、しかも電車の外で隊員に体操をさせた。夜間だから小した声で私が号令をかけ、「一・二・三・四、二・二・三・四、三・二・三・四……」手・足・首・腰・背・腹・胸と基本体操を順番にしていたら、当番が、又、呼びに来た。「隊長殿がすぐに来いと言っておられます。」まだ体操が三つ、四つ残っているが仕方がないから「深呼吸始めーッ」と、深呼吸をして体操を終り、戦隊本部のテントの前に行った。第七小隊は三本小隊長以下さきから整列して待っていた。「第八小隊、半井見習士官以下——名ただ今参りました。」と整列すると、予想通り、隊長はカンカンになって怒っている。「三本の隊はすぐに来たのに、貴隊はなぜすぐに来ないのかッ。」勿論、こちらでも覚悟の上、「ハイツ夜間作業で事故があつてはいけませんから、ねむけ醒ましに体操をしていましたッ。」と、まっ向から切り返した。こんなときには気合負けをしてはいけない。隊員全部の士気に影響するから……。隊長もそれ以上お追及しなかった。夜間作業は電車通りのあちこちに垂れ下がっている架線の除去であつた。トラックの荷台に脚立を立て、工兵隊の使う鉄線鉋でブツブツと切りとり、下にいる者がそれを整理して行った。作業は二、三時間で終り、再び電車の中で眠った。

三、八月八日以後

六日夜と七日の印象が余りにも強かつた為か、八日以降のことは断片的な記憶は色々とあるが、朝から晩までの行動を順序だてて思い出すことができない。きつと毎日々々死体とつき合っていたので「死体ボケ」をしたのだろう。

今、頭の中に浮かぶ色々な状景を思ひつくままに書いてみる。

〔死体さまざま〕

八日の作業は、紙屋町附近ではなかったかと思う。負傷者はもう殆んどなく焼跡のあちこちに点在している死体を探して集め、これを所定の場所に運搬した。集めるのは、例の急造の担架で集め、運ぶのはリヤカーか大八車などを使ったように思う。どこへ運んだのか知らないが、電柱に“比治山下”という文字があつたように思う。そこにはテントが幾つか張られて、その中にも外にもムシロを敷いて、その上に死体がゴロゴロ並べられていた。我々の持ちこんで来た死体もここへ並べられたのだが、最初の方でも書いたように、火傷で生前既に不気味な姿になっていたのが死体となって、一層無残な有様となり、死体置場は真夏の熱気とむせ返るような屍臭で、とても長い時間はいられない程。これを監視している兵隊もつらいことであつただろうと思う。そしてその中を親子兄弟の遺体を探しに来ている人達もハンカチで鼻を押え顔をしかめながら、一つ一つの死体をのぞきこんでいた。

母娘らしい二、三人がしゃがんで抱き合つて泣いているのは、探す肉親の遺体を見つけたのであろう。死体は老若男女色々にあつたが、やはり女の人や老人が多かつたように思う。准尉の肩章をつけた軍人が長靴を片方だけ脱いで、しゃがむような格好で死んでいるのもあり、泥まみれの娘さんの死体もあり、着衣も頭部も全部焼けて胴の部分だけ残っているものもあり、又外傷も火傷もなく腐りかけているものもあつて、そのむごたらしさは、全く筆にも口にも現しようがない程だ。そんな死体にすがりつくようにして泣いているのは肉親なればこそだ。

死体もすっかり焼けて、まっ黒になってしまっているのは、一番始末がし易い。臭気は全然ないし、目方も半減しているからだ。半焼けの死体もそれ程ひどい悪臭はない。どうかすると焼肉のような“よい香り”のするものもある。「おい、これはビフテキみたい匂いがするぞ。」などと、冗談を言いながら運んでいる。一番いやなのは、殆んど焼けないで腐りかけている死体である。悪臭はひどい裏返えすとウジ虫がウヨウヨはっている。へたに触ると皮も肉もグシャとつぶれる。悪いけれどもこんなのはスコップでゴロン、ゴロンと転がして担架にのせる。遺族の人に見られたら叱られるだろう。それにもう一つ、始末の悪いのが、牛馬の死体である。大きな図体で四股を硬直させて横倒しになっているのは、とても五人や六人の力で動かすことができない。とはいえ、これも何とかせねばならないから、その横に大きな穴を掘ってその中へズルズルとすべりこませ、上から土をかけておいた。

どうせ十分な深さには掘っていないから、多少は上の方へはみだしていることが多かつたが、限られた時間に一つでも多くの作業をしなければならぬのだから、やむを得なかつた。

「軍は拙速を尊ぶ」の格言を我々も実行したわけだ。

〔焼却作業〕

八月九日、死体の運搬をしていたが、こんな状態で作業は仲々思うようには歩まなかったらしい。九日の午後からは各個に現場で焼却することになった、多分作業能率を上げる為と、今一つは集積場でも死体の始末に困ったからではなかろうか。ところがこれも仲々焼くべき材料がないのだ。焼け残っているものといえ、家の柱や棟木といった大きなものばかりで、集めて来るのが一仕事、そしてこれを燃え易く砕いて組み、その上へ死体を二、三体置いて重油をふりかけて火をつけたのだが、何といっても慣れない仕事、顔をしかめしかめして、やっていたのだから実際にはチグハグなことばかりやっていたのだろう。死体は火炎に包まれると、腕や大腿の皮がはり切れるように破れ、松の樹の皮のようにひび割れたかと思うと、その破れ口が開き、そこから青い炎を噴きだして燃えていった。気が立っていたから怖いとも気味が悪いとも思わなかったが、夕方になって、焼跡のあちこちであんな火を見た時は、何となくわびしい感じがした。

〔山根大尉と姫田班長〕

山根大尉にひょっこりと出遇ったのはこんな作業している時だった。私が最初に入った和歌山の船舶部隊で幹部候補生の集合教育を受けた時、教育隊の中隊長であった。全く思いがけぬ時、思いがけぬ所で逢ったので大変懐しかった。聞けば、山根大尉の家がこちらにあって、災害を受けた為に来られたというようなことだったと思う。

又、同じ教育隊の姫田班長にも逢った。大変私に目をかけてくれたので懐しさもまた一人であった。たしか公用でこちらに来たということだった。和歌山にいたころは伍長だったが、今は軍曹になっている。私は更に上の見習士官にはなっているが、やはり頭があがらない。

「半井、お前見習士官になったんじゃろうがな。」「ハイッ」「軍刀はどうしたッ」と言われて頭を叩いた。実をいうと作業中邪魔になって仕方がないので、八日以降は軍刀も凶囊も電車の中へ置いて来ているのだ。それに服装は水上作業衣、曹長の階級章は安全ピンで左腕につけていたが、赤地の布に白糸で金筋や星を織ったもので見にくいのに、油とほこりで一層わかりにくくなっている。だから兵隊が将校とも区別がつかない。皮脚絆を着けていたのと戦闘服が私物で少しばかりいい格好をしていたぐらい。

山根大尉にも姫田班長にも、和歌山で随分とお世話になったのだから、一目、見習士官の精姿覧てもらいたかった。

ところで軍刀ではもう一つ大失敗をやらかした。

〔参謀肩章〕

多分九日の夜だったと思う。その日はどこで作業をしていたのか分らないが、部隊本部から大分遠い所だったようだ。昼食は毎日携行しているのだが、その日は夕食も作業現場へ届けられた。作業を一時間でも長くする為にこんなことをしたらしい。ところが飯盒は汚れたままであり、その上飯杓子も汁杓子も来ていないのでとりわけることができない。結局折角届けられたが、やはり車庫へ帰ってから夕食をとることにして、日の暮れるまで作業をした。

真夏の日は暑い。きつと七時半頃まで現場にいたのだろう。帰る途ですっかり暗くなった。そこを一〇〇人近い部隊が四列縦隊とはいえ、飯桶や汁桶をかついで、ゾロゾロと歩いている姿は、余り立派なものではなかっただろう。ましてみんな綿のように疲れているのだ。やがてある町角へ来た時(勸業銀行の建物が見えたように思うが)テントの中から提灯を持った兵隊が二、三人走って来て、列の先頭が止まった。私は縦隊の中程を歩いていたが、前へ行ってみると“憲兵”の腕章をつけた人が何か言っている。不審尋問らしい。この時、部隊を引率していたのは岩田見習士官であったと思うが、元来おとなしい人だったから、憲兵の尋問を受けてモタモタしている。しかし、よく見ると憲兵は上等兵の階級章をつけている。「何だこちらは見習士官だぞ、しかも将校を取調べることのできるのは、憲兵でも下士官以上」と聞いていたので、岩田の応答が歯がゆくなり「どうしたんだ。」と、私が前へ出て行つた。憲兵も私の気迫に押されたのであろう。「ハイッ、この部隊の名前と行き先や目的をお尋ねしているのであります。」と、俄に口調も変つた。「我々は十教(第十教育隊の略称)の者だ。今まで作業をしていたのだが、市電車庫にある部隊本部へ帰るところだ。」「あれは何ですか」と飯桶や汁桶を指す。「あれは我々の夕食だ。作業現場へ届けられたのだが杓子がないのでとり分けることができないから本部へ帰ってから食事をするのだ。」「ハイッ分りました。どうか行つて下さい。」と敬礼をした。「さまあ見ろ」と内心ちよつといふ気になったまではよかったのだが、その時、暗闇の中から、「十教か、ご苦労!!」と声がかかり、立派な軍服を着た将校が四、五人の憲兵の横から私の前にでて来た。ハッとして見ると、先頭の人は肩から胸にかけて参謀肩章が垂れ下がっており、階級章は“金べた”だ。星は一つか二つしか分らなかったが……。いや驚いたのなんの、今まで憲兵を押しまくつていふ気になっていたのが逆になり、直立不動ですっかりあがってしまった。「この部隊は誰か」私の名前を問われるかと思つたがそうではないのでちよつと安心。「ハイッ戦隊長殿は陸軍大尉草深圭二殿でありますッ」「いや今、この部隊の指揮をとっているのは誰か」私は一瞬迷つたが、今更、岩田の名前をだすのも責任免れで卑怯なように思つたのでっエーイママヨ!!と「ハイッ陸軍兵科見習士官、半井良造でありますッ」と答えた。「半井見習士官か、よしッご苦労、行けッ」「ハイッ行きますッ」と、私個人で敬礼をし、更に部隊の敬礼をする段になってサア、シマッタ!!軍刀がない!!前述したように邪魔になるから持って来ていないのだ。それだけでも既に服装違反だが、今、部隊の敬礼の指揮をとるのに指揮官である私は、当然軍刀を抜いてしなければならない。しかも相手の人は将官である。ラッパ手がおれば敬礼ラッパも吹奏せねばならない人だ。えらいことになったと思つたが、その時、「但し夜間ニ於テハ抜刀シナクテモヨイ」ということが陸軍礼式令に明記されているのを思いだした。よしッ腹を据えて、全員に対して「気ヲツケ、上官閣下に対してカシラー右ッ!!」と号令をかけ、私自身は挙手の敬礼をした。「ご苦労!!」と答礼されたのでヤレヤレ、「直レッ前へ進メッ」と歩きだした。これで今までの疲れもどこかへふつ飛んでしまつて、冷汗をグッショリかいた。戦隊長や江頭中尉は列の後の方で、じつと見ていたらしい。

〔醜と美〕

終戦の詔勅のでた八月十五日は部隊に帰っていたから、広島には十三日頃までいたように思っていたのだが、最近、斉藤部隊長殿にお目にかかった際聞くと、

八月十一日に幸ノ浦の部隊に帰ったということだから、これは十日のことになる。焼跡には「〇〇家、転居先……」「太郎皆無事……で待っている」といったような木片があっちこちに立っている。今は家族の消息が分らないということが一番悲しいことであったのだろう。往来する人の数もだんだんふえて来た。背中や両手に焼け残った家財道具(ガラクタ同然のもの)を持って行く人、そうかと思うと何も持たずに夢遊病者のようにフラフラと力なく歩いている人、三人四人の家族が一同となって肉親の行方や遺体を探す人々等、モンペ姿の女の人が、偶然にも知人に会ったのか、「まあーッ。」と言ったきり、物も言えずに手を取り合って泣いている姿もあった。こんな所で知った人に会えばきっと懐しさも、感慨も無量であったに違いない。

この日の作業は大きな川の左岸で、現存の“原爆ドーム”が二、三〇〇メートル向うの川上に見えた。小学校の焼跡と思われる所、校庭にある二つの防空壕の中に、何十人という児童(女兒が多かったように思う)が、まるで蜂の巣をむし焼きにでもしたように着衣もそのまま、折り重って死んでいるのを見た時は、死体にはもう大分慣れた我々でも胸が痛んだ。そして、我が子の遺体を探し求める母親達が、あっちにもこっちにも立ちすくんで運びだされて来る死体をのぞきこんでいた。しかし、遺族に抱かれた死体は一体だけで、あとの児童の死体は分らなかった。その一体は、他の遺骨と混じらぬようにして火葬した。中には又、遺体は見つからなかったが弁当の包みがあつたと言って泣き、もう一人の母親は、何も見当らないといって抱き合っている姿を見た時は、年若い我々も思わず目頭が熱くなった。川ぶちにある死体はひどいのがあつた。これは大人の死体だったが、六日以来雨も降らず真夏の太陽に照りつけられていたので、死体の中にガスが発生したのであろうか、半裸又は全裸状の死体の顔も胴も、二倍くらいに膨張、目の玉が飛びだし、口はあごがはずれる程に大きく開いて、中から舌がとびだしている。まるで怪物が野球のボールをくわえているようだ。胴はちきれんばかりに膨らんでいるから、乳で男女を見分けることはできない。そして、幾十とある死体の三分の一程は、腹の皮が破れて内臓が風船玉か氷ノウのように出ている。色はネズミ色だったか、黄色だったか忘れたが赤ではなかったように思う。肛門からも腸が飛びだしており、男子の睾丸は焼物の狸のそれより大きくふくらんで股間を押し広げている。おそらく遺族が見てもすぐには判別できないであろうと思う程の物凄い形相で天をにらんでいた。丁度、ここでの作業をしている時だった。長崎の原子爆弾が誤り伝えられたのだろうか、京都も爆撃でひどい災害を受けたらしい、というデマがささやかれた。私の戦隊には京都出身の者が一〇名程いたのでみんな着くなくなった。私も家にいる母や妹がこんな格好で死んでいるのかと思ったときは全身から力が抜けた。焼却作業も少し慣れ慣れて歩った。午前中は一山に死体を一〇体程ずつ積んで焼いたが、昼食の時に隊長に報告したら「一〇体は多過ぎる。五体までにせよ」と叱られた。しかし燃やす材料が仲々ないことを説明したら「それなら今までに焼いたものが白骨になっているはずよ。さもないければ焼き直せ。」と命ぜられた。午後行ってみるときれいに白骨になっていたので、他の小隊に呼びかけて共同作業をすることにした。人員の三分の二程で焼く材料を集め、三分の一で死体を運んでは積み重ねというようにして、一挙に二〇体三〇体と焼いた。更に都合のよいことに、青い服を着た刑務所の囚人が川岸や川面に浮かんでいる死体をどんどんあげてくれたので、我々の作業は一層捗った。最後の作戦は川岸で焼け残りの材木を井桁に組み、その上に積みも積んだり一山に五四体の死体を積み重ね(この中に、会社や役所の同僚らしい三、四人の人が見つけた遺体一つあり、これをトタン板にのせ、針金をつけて引きだせるようにしてのせた)、重油をふりかけて火を放った。一山火をつける毎に我々はその前に整列して哀悼の礼を捧げていたが、この最後の山で敬礼をした後へ、ちょうど通りかかった三、四人の墨染めの衣を着た僧侶が読経してくれた。

焼野ケ原の大川のほとりで、夕焼け空を背景にして、黒々と煙をあげ、すさまじい勢いで燃える火焰の前に立つ僧侶の姿は、深い印象を与えた。

一三

田村繁雄

(当時海上挺進特別攻撃隊第四十四戦隊・陸軍中尉)

当時、江田島幸ノ浦にいた私は、広島市の戦災救援というような主旨の命令により、六日十五時頃、宇品に船で渡り、徒歩行軍により宇品から広島電鉄本社付近に出動した。

第一陣の出発は午前中に出発していたようである。私が出動した時は、残留していた部隊(人数不明)を引率して行ったのであった。佐伯船舶司令官が、広島警備担任司令官として発令され、われわれの救援作業の総指揮官になられたということを、作業中に聴いて知った。

千田町の電鉄本社に到着したのは、十八時頃か?宇品より電鉄本社までは電車通りを行軍して来た様な記憶があるが、途中の建物の状況、火災の状況は記憶にない。電鉄本社には、幸ノ浦部隊の本部ははかれていたから、ここにて、先発の戦隊長の指揮に入る。

一、到着後、電鉄本社付近において、七日朝まで、私は待機していた。その間の作業は、市中心部から来る負傷者を建物内外の空地に仮収容して休ませる作業が主体であった。

他方面の隊の情報では、夜、赤十字病院・南大橋付近に仮収容している負傷者に対し、火災が西北の方向より延焼して来ているので消火命令がでて、宇品方面各所の手動ポンプ(市内の消防ポンプは皆無)を官民の別なく集結し、重点を南大橋東もとと附近、及び赤十字病院の類焼防止に当たっていた様である。八月七日二、三時頃か、風向き関係もあってこの消火活動は一段落した様に記憶している。当時南大橋もと、赤十字病院(内部だけでなく庭の中一面)はかなり多数の負傷者が集結した模様である。

八月七日早朝、電鉄付近に収容されていた(と言っても道路のすみや廊下などに寝ていた)負傷者の大部分が、空が白々明ける頃、非常に寒さを訴えた。毛布等も手持ちがないので、電停前付近の半壊家屋の中から布団類を探して来てかけてやる様にしたが、それも全員に及ばず行届かなかった。夜が完全に明けたとき約半数は死亡されていたようであった。

この七日朝、戦隊の約半数小隊長四人か五人と、兵四、五十人を連れて戦隊長とは別隊として、主目的は①負傷者を収容車の通行路の要所々々に集結し、②死

亡者はできるだけ限りの記録(氏名・性別・年令等)をした上、火葬する。以上二つの内容をもった作業を行う。

八月七日朝より八月十二日迄(六晩七日)の行動。受持区域は紙屋町～鷹野橋～富士見橋～比治山橋～現稲荷橋(当時・電車専用橋)に囲まれた区域と記憶している。ただし紙屋町～鷹野橋の電車道をはさむ両側地域は、他隊もいたようで袋町国民学校、白神社、第一中学校、市役所地域は、救援隊が重複していたようである。

われわれは行軍で、別図の経路(俗称別荘通り)を通り①の地点に行き、この地を中心とし各小隊毎に分散、主目的を負傷者(単独歩行のできない者)を富士見橋～比治山橋線の道路に集結し、逐次通行する収容トラックに収容することとし、同時に自力でこの線(この附近でトラック等の出動できる道路はこの道路が最もよかつた様に記憶する)に出て来ている負傷者のトラックに乗り込むのを補助することとした。

この附近はほとんど焼けてしまつて、比治山橋西詰め附近に近接間風の洋館が傾いて焼け残っていた事が印象に残っている。この建物(使用に耐えない)の前を指揮連絡地点としていた。(使用には耐えないが目標にはなつた。)

①の地点で二泊(指揮所の北側別荘通りに面して、庭園風のところがあつて、地面が焼けていなかった。)勿論着たまの野宿である。

八月九日頃から、作業を死亡者の火葬に主目的を移したのである。死亡者の火葬は焼跡に十～二十人集つた地点で、氏名、性別、年令等を各小隊長において記録の上、周囲の焼けた残材により火葬し、終了後は、その地点に埋葬した。(ほとんどの死亡者が氏名を確認する事は不能で、性別とおおむねの年令を推定し、男約〇〇歳の様な記録がほとんどであつた。)

八月九日①より指揮所を②に移した。(この場所は新川場町の北側に建物疎開がなされ平田屋川の西側付近は川側一帯に空地となり、共同の防空壕が設けられてあつた。)

八月十日、十一日頃から、一部は現稲荷橋より比治山橋間の京橋川中に浮遊している死亡者の収容を行う。当時の川の水面には家屋の破壊した材木が水面一杯に埋まり、潮の干満につれて橋と橋の間を上下に流れ死亡者もこれにはさまれて上下していた。

八月七日から八月十二日(時間不覚)の部隊が揚子江に火葬した死亡者の数は二百名ばかりのような記もするし、三百名をでていたような気もするが、はっきりした記憶がない。

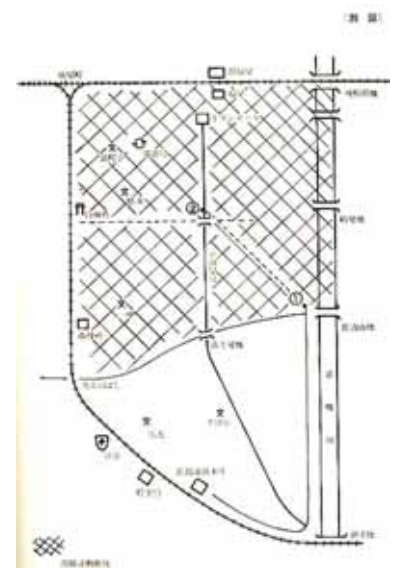
火葬者の名簿は幸ノ浦帰隊後、部隊本部に提出した。(船舶司令部に集められたように記憶する。終戦後、宇品に於て、終戦処理業務に従事中、他の事で船舶司令部の高級副官のところに行った際、見たような記憶がある。)

一、八月十二日、幸ノ浦帰隊

九月十二、十三日頃(広島地方に台風の来る直前)幸ノ浦撤収。

十月末迄、宇品船舶自練習部において残務整理、その後復員。

昭和二十年十一月～十二月頃、歯ぐきから出血を見たり、ちょっとしたことに下痢したり発熱し、風邪をひきやすいようなことがあつた(後で考えて放射能の影響かと思つた)。その後は現在迄別に異常ない。



一四

西塔光喜

(当時水上特別攻撃隊・特別隊候補生)

江田島幸ノ浦海岸に於いて熱線を受けると共に、非常に爆発音を聴取、直ちに広島市に出動命令を受ける。隊員は何か何だか全然わからず、上官は、広島酸素会社が爆発したと知らせる。

六日午前十時頃、宇品に上陸。木造建築は傾き、鉄筋の建物の窓破損、その中を破れた衣服をまとい、半狂乱の婦女子を見、ただならぬ感ずる。すぐ爆心地に向う。近づくに従つて被害の甚大なるを知る。正午前、爆心地到着。四方火の海。我々も身の危険を感じる。

道路には焼けただれた死体が累をなし、傷者のうめき声は地獄からの声であつた。

爆心地に到着後、直ちに傷者の救助に当る。私達は四人一組で、主としてタンカを持って重傷者を医療所まで運ぶ。その数多く誰を先にしたらよいかわしむ。重傷者の多くはタンカの上で息をひきとる。その夜から上流川町に夜営をし、一週間傷者の救助、屍体の処理に当るが、屍体は山をなし、平和な現在に於ては考えることもできない集団埋葬をする。埋葬前に性別、大体の年令を調べる、大半は性別不能の状態であつた。

復員直後、健康診断で、私は白血球に異常ありと言われたが、特別自覚症状もなかつたので、そのままにしているが、結婚後十年たつても子供ができないので医師の診察を受けたところ、生殖細胞に異常があることであつた。十年程前から時々めまい、頭痛あり、又、二、三年前から耳なりが激しい。

一五

高田三郎

(当時海上挺進戦隊第四十一戦隊第三中隊・兵長)

江田島の北端幸ノ浦基地において、我々は訓練が終つて、朝食後の休養をとつていた。みんな内務班にいたので、閃光にはまったく気づかなかつたが、その後

の爆風と音響で初めて気づいた。

爆風は相当強く、内務班の窓ガラスが破れて飛び散り、音響によって、兵舎がかなりひどく揺れ動いた。その直後、外に出てみると、広島上空に黒煙と虹色の爆煙と、キノコ雲の立ちのぼっているのが眺められた。

午前十時二十分ごろ、宇品の船舶司令部から、出動救助命令が出された。我々はただちに装甲艇に乗って、広島に出動した。他の隊員も大型発動艇(大発と略して呼ぶ)やその他の舟艇に乗りこんで、いっせいに動した。

宇品に上陸し、船舶司令部にて各部署の指令を受けた。我々は、太田川の周辺にたむろする負傷者の救助作業を受け持ち、その近辺の応急仮設救護所に負傷者を運んだ。また、川の中の材木にすがっている負傷者や浮いている死亡者を、大型発動艇に収容し、安全地帯に運んだ。

さらに、国民学校が倒壊炎上していたので、その中から負傷者や死亡者を急ぎ救出する作業をおこなった。

この救出作業は、十一時ごろ現地に着して、すぐに開始したわけであるが、一段落すると、倒壊民家の下敷きになっている人々の救出を、夜七時ごろまで続けた。

夜になってからは、死体の焼却作業した。

このような作業を約二週間にわたって毎日毎日交代で行なったが、その間、作業現場にずっと露営し、食事もにぎり飯で、クタクタに疲れるまで活動した。

死体の処理を行なうにあたっては、その人の遺品を確実に集めておいて、探しに来る縁故者のために判り易いようにしたが、勿論、何もない人も多数あった。八月二十日の昼ごろ、幸ノ浦の原隊が復帰し、九月十三日に復員した。復員後、救助作業にあたった戦友(静岡県)が、被爆者と同様の症状を患って、ついに死亡したが、私もまだ作業中の八月十二日ごろから、倦怠感・頭痛・目まいなどがあり、復員前三、四日ごろから、下痢・腹痛・脱毛などがあり、更に眼痛をとまなうようになった。復員後も同様の症状がずっと続き、治療のきいもなく、昭和二十六年九月末、ついに左眼は失明した。

一六

新保正信

(当時の訓練部第十教育隊・陸軍兵長)

六日午前八時ごろ、幸ノ浦海岸において水上特別攻撃用連絡艇(レ)整備中に原子爆弾の炸裂に遭い、八月九日から八月十三日(期間は確実でない)まで広島市の救援作業に赴く。昭和二十年八月中旬ごろ、某基地に赴くべく七月下旬から本格的な夜間演習の毎日であった。たまたま八月六日は連夜の演習で、起床も遅く七時頃であった。点呼が遅れじと練兵場に駆けだした。一点の曇もない澄みわたった真夏の朝であった。敵機B29が二機、超高空に銀色を輝かせて飛んでいる。そのうちに警報があった。しばらくして解除となり、点呼も終わって、それぞれ朝食前の作業日課にとりかかる。私は練兵場裏山海岸にあるレの整備に数人で向った。氏名は忘れてしまった。この海岸岬島、そして広島市を一望することができるしゃべり物一つない場所である。復員の時は、この海岸でレを焼却して、機関は砂浜に埋め、後始末をした場所でもあり、また水泳場でもあった。

暫くして舟艇整備も終る頃、艇内から顔を上げた瞬間ピカッ!と鋭く光った。と同時に、轟音と熱さにより、無意識のうちに両耳を押え、「アツイ!」と悲鳴を発して艇内に伏せた。同僚もそのようであった。場所的にはまともに受けたものの、距離(約十三キロメートル)が幸いした。その閃光は一目から火のである」の表現以上の瞬間的の光であって、目がくらみ、顔は針で刺されたような痛みを感じた熱さで、轟音は耳を突きさすドカーン!という爆発音であり、「アツイ」と叫んだあの瞬時の状況は、今でも脳裏から離れないが、今もって適当な表現ができないままになっている。そしてすぐさま顔を上げる。爆発地点は広島市と思われた。爆発と同時に、あたかも消火ホースで全市を水平に水をかけたように、スーッと市一面が白幕をひくように硝煙に覆われてゆく。中央からは、傘状に白煙がモクモクと上昇して、次第に黒煙と化し、その中からチラッチラツと、ちょうど水平線に沈みゆく夕陽のような真赤な火の玉が見える。この黒煙は上昇にしたがいキノコ状となり、その傘の中は真赤な火の玉である。火の玉を包んで上昇するキノコ状の黒煙と真白な硝煙に包まれた広島市を見つめた。

軍需工場勤務のある経験者は次のように言った。「多分工場のがスタンクが爆発したか、それにしても異様な爆発であって余りにも大きい。それでは先刻の警報の際、B29 がパラシュートに機雷をつけて投下し、空中爆発をさせたのか(B29 は、時々瀬戸内海に機雷を投下した。)」と種々な想像話も出つくし、果然と広島市を見つめていた。兵舎に帰ると、窓枠がへし折れていた。昼ごろになると海上のニュースが入る。それによると広島市は全滅し、大火であって、似ノ島検疫所に負傷者がぞくぞくと収容されている。悲観的な戦局を感じつつ、その夜の演習が開始された。広島沖に停泊中の戦傷油重送船(十八年型八千トン)を仮装敵船として爆雷投下演習を実施したが、広島市の炎上が海面にうつり夜間演習にはならない程であった。

その火災は三日程続き、手のつけようのない惨状であって、救援は鎮火を待つて、八月九日午前八時出発ときまった。身仕度は水上作業衣、鉄帽、手袋そして負傷者にさしあげるべく水筒を持参し、急ぎ装甲艇に向う。救援作業用具は何一つない有様である。

宇品栈橋から広島専売局を通って、大橋(御幸橋)を渡り、市内路面電車軌道に沿って、銀行、百貨店街および偕行社(陸軍将校クラブ鉄筋四階建)周辺の繁華街道路の啓開、遺体処理、及び負傷者収容作業を行なう。私は道路整備作業班に属した。

まず、宇品に上陸した途端驚いた。木造家屋の壁、窓は吹飛んで柱が残っているだけの惨状であり、街路樹は葉が落ちて、あたかもこがらしが吹きすさんで荒れ果てた有様で、真夏の季節には余りにも無情な哀れた光景である。

専売局前を通り一歩広島市に入ると、一望焦土と化し、点々と見えるは、爆風で傾斜している鉄筋高層建物である。その中に目を覆わせる遺体と、死を待つばかりに苦しんでいる重傷者、そして肉親・知人等を探し求めて右往左往している罹災者たち。何たる惨状であろう。

往きかう人は、後頭部から頭にかけて、または顔がそれぞれ黒ペンキを塗ったように黒く(高熱を伴った閃光で焼けたものであろう。)、衣服がボロボロになっている者、下着だけの者、裸足の者など、様々であって、変り果てて誰であるか判らない。ただ何爆弾であるかと考えつつ市の中心部に入る。帰隊する頃には、道路も整備されて、交差点には「更生爆弾」と表示してあったのが目についた。

爆弾投下の時刻は、学徒動員等の出勤時間であったのか、道路上には学徒の遺体が多かった。作業と言ってもスコップ一つない状態のため、焼けた鉄棒、トタン板等を利用して行う。

日も暮れて、爆風で荒れた偕行社の四階に寝具一つなく、そのままの姿で一夜を明かしたり、焼野原に焼トタン板を敷いて野宿の一夜を過ごしたこともあった。灯火一つない夜の広島市にまた一つ悲惨な状況に直面した。それは家屋の下敷きとなった遺体のリン(脂肪が燃焼の現象と思われる)がチョロチョロと黄緑色の炎をあげて燃えているのが無数に目に入る。

とにかく、遺体が爆発の惨状を物語っている。それは、煙にまかれて窒息死している状態である。逃げ場を失い、防火用水槽に母と子が真赤にただれて、抱き合っている姿、煙と火に追われて川に逃げ場を求めて繁れている者など、数々の惨状は一段と悲痛を感じさせた。

また、重傷者は数も多く、収容の手がまわりきれず、放置されたまま苦しんでいて、明日の死を待っているといった悲惨さである。

救援区域の作業も大詰を迎え、最後の道路整備となった頃のできごとであったが、五歳位の両眼失明となった男児を預けたまま若い母親はついで姿を現わず、とうとうこの児は捨子となってしまったことが忘れられない。この児は今ごろは開眼し、社会人として元気だろうか…………。

ついに原子爆弾とは知ることでもできぬまま作業を終り帰隊した。

草木は八十年位生えず、被爆した女子は永久に妊娠しないと聞かされていたが、復員途上の広島駅に草の生えていたのが目に入りつつ、無蓋車に乗って故郷長野へ向ったのであった。

一七

佐伯常夫

(当時海上挺身隊第十教育隊・見習士官)

私たちは江田島幸ノ浦にあった船舶司令部・海上挺身隊第十教育隊に訓練要員として勤務していた。同隊は斎藤義雄大佐を隊長として第四十一戦隊～第五十戦隊——戦隊につき——五人一から成り、これに整備隊要員三〇〇人程度。総人員一、五〇〇人程度の部隊であり、私は第四十七戦隊の小隊長として勤務していた。

当日は朝から快晴であったが、早朝から空襲警報がだされ、朝の行間演習もとぎれとぎれとなり、八時頃警報解除の合間を縫って朝食中であった。その時運命の八時十五分。パッと目を射る白紫色の閃光!今でも眼底に残るスパークの様な鋭い光線。皆々顔を見合わせ、「一体何だろう。」「高射砲陣地のサーチライトに太陽が反射したのだろうか。」等の雑談を交える間があった。(幸ノ浦基地と広島市は十二キロメートルの距離がある。)直後、まさに天地も轟く大音響、兵舎が爆撃されたと直感し、反射的に舍外へとび出す。

遙かに望む広島の上空、キノコ状の原子雲が終日消えなかった記憶は現在も生々しい。あの広島の大爆発は何だろう。しばらく啞然として業務も手につかない有様であった。

正午頃、宇品の本部(船舶司令部)から命令がだされ、「広島市でガスタンクが大爆発し、相当の被害がでているので部隊の半数を救援に出動させるように。」とのことであり、部隊の半数が出動した。ついで十五時頃、更に残存部隊の全部について出動命令が出され、私はこれに参加して十七時頃、宇品港に上陸した。宇品へ上陸(六日十七時ごろ)、直ちに千田町の赤十字病院の延焼防止作業に従事するよう命令を受けて現地に向う。途中、皆実町のガスタンクは二基とも健在なのに驚く。広島市内の、地獄絵さながらの阿鼻叫喚のちまた、筆舌につくしがたいというよりほかない。

赤十字病院には多くの負傷者が収容されていたため、これを延焼から守ることが急務であり、私達の部隊は破壊消防により、赤十字病院の延焼防止に徹夜に従事した結果、さいわい病院を延焼から守ることができた。

翌七日から十二日頃まで、私達の部隊は鞆町、八丁堀、柳町方面の死者の収容作業にもつばら従事した。同胞のむごたらしい死体に手を合せながら、毎日何千、何百の死体を収容し、重油をかけ茶毘にふした。

一八

野田昭夫

(当時砲隊・上等兵)

二十年七月から、特攻隊員として、安芸郡江田島町幸ノ浦にて(レ)艇(二五〇キロ爆雷を装置したベニヤ製モーターボート)の舟艇訓練中、出動命令を受けた。幸ノ浦の海岸から宇品の船舶司令部の方を眺めているとき、広島全市に強い閃光を見た。二秒間ぐらいの閃光が消えると、スーッと一条白い煙が舞い上り、大きな音響がつつわり、窓ガラスが少し破損した。

六日午前九時ごろ、広島市内に家族のいる者に対して、直ちに出動するよう命令が下った。また一方、上陸用舟艇で宇品へ(似)の島検疫所間の負傷者輸送を行う。同日午後三時頃、残留全隊員に出動命令が下り、上陸用舟艇に分散し、午後四時ごろ宇品栈橋に上陸した。

各船隊ごとに分散し、第四十四戦隊は、宇品からトラックで千田町広電本社前まで行き、救助活動に入る。

六日の午後五時頃から工業専門学校裏元安川の川辺に臨時収容していた多数の負傷者を広電本社前まで運ぶ。深夜、広島赤十字病院を火災から守るため、病院裏の民家を取りこわしに行く。取りこわしにかかったが、火の勢が強いため二時間位で引揚げた。八月六日から約一週間、紙屋町、市役所、鷹野橋、東千田町、福屋裏一帯の道路整備、死体収容、鶴見橋附近の京橋川に浮いた死体収容、馬の死体の埋葬。朝早くから夜遅くまで救助活動をしたため、昼間の少しの休憩時間にも炎天下の道路に横になって寝たのを記憶している。

帰隊後、発熱・嫌怠感あり、多くの者現在肝臓障害、白血球減少。

一九

大荷(広島)康夫

(当時第四十二戦隊・特務隊隊員補注)

江田島幸ノ浦海岸の基地において特攻隊員として、昼間は広島湾上における航空母艦その他の艦を攻撃目標としてレの魚雷艇を操縦、一艇当り練習要員として下士官を長とする四名位の人員で、ほぼ四十五度の斜角から突入、体当り寸前にて魚雷を投下し、直ぐ退避するという猛訓練の明け暮れ、及び艇の故障にそなえて機関の講義を受けておりました。又、夜間において小隊編成にて隠密作戦として接岸行動及び歩兵の散開その他に準じる舟艇行動を実施されておりました。

八月六日は朝食を終り、演習にそなえて何かと準備をしておりましたところ、空襲警報発令、隊員は直ちに裏の洞穴に退避しましたが、警戒警報解除と共に兵舎に戻りました所、寸刻を経ずして兵舎屋根に、B29 の機銃掃射を受け、思わず兵舎内土間に伏せておりました。暫くしてもものすごい耳をつんざく爆発音と共に、閃光が走りました。みんなと直ちに舍外へ出ましたところ、対岸宇品の方向にムクムクと煙が中天高く発達していくのを見ました。一同顔を見合わせ平和な広島市が爆撃されたことを知りました。また舍外に伏せていた戦友は、非常な爆発ショックを感じたとのことでした。

その六日午後五時半頃、戦隊長により完全軍装、大発舟艇にて宇品着港、船舶司令部より命令受領の間、暫く、血染めの布をまとって続々集って来る負傷者群を見て、爆撃の惨禍を痛切に感じた次第です。

私達は暴心地に向って行動、放置された電鉄会社の電車を小隊毎に割当てられ、清掃の上、車内を仮宿舍とし、又根拠地としてドーナツ化的に向う七日間の救援作業に従事することになりました。先ず行動開始に当り、小隊長から広島飲料水等に関して細菌類、毒生物等防止の必要上絶対飲まぬこと、被爆者には死期を早めるから絶対に各人の水筒の水を飲まされぬこととの厳重な注意がありました。だが、これが私の生涯忘れ得ぬ辛い思い出となっております。何故ならば、当時は盆前の酷暑の盛り、被爆者の奇跡的な回復を願う弱冠二十歳の私には、朝から全身焼け爛れ、あるいは爆風症による身の苦痛との戦いに敗れ、明日は精根つきで死んで行ったであろう人達の必死の願いを聞き届けることなく、ましてや、あちらこちらから無念の形相でひしと掴まえられた水筒の手を振りしきらざるを得なかった。被爆者達は、我々救援隊の出現をいかに待ち待ったことでしょう。私は戦後二十三年の今日、病死した愛児の事を想いうかべるにつけ、あぁ一滴の水でもいいから口にひたしてやるべきだったと、後悔のほぞを強くかみしめるものです。願わくば在天の霊よ。どうかお許し下さい。

又、私達は死体を一度に七十五人も火葬にしました。先ず焼け残りの柱とか角材とか木片を附近から集めて、幾段か井桁に組んで、その上に死体を積み上げ、重油を注いで火をつけました。間もなく濤々たる黒煙と異臭でした。然し私達の間もなくその様な光景に慣れてきました。その場に居合わせた人々が冥福を祈っておりました。私達は完全に燃焼されることをただ心に念じるばかりでした。時間の経過はすっかり忘れまして。が、焼き終ってまだ温かい骨を戦友と一緒に手頃な壺を探し出して来て、入るだけ入れて土中に埋め、上に墓標代りに木片を立てたり、石を積み重ねたりして集って来た人々と合掌、念仏を唱和した次第です。又ある時私達は軽、重傷者を担架に乗せて待機するトラック迄運び乗せていました。その時です。忘れもしません。多分女学生だったろうと思います。突然「兵隊さん、私助かるでしょうか」と言います。あたりは夜のとばりに包まれてまっくらです。まさに血の叫びとはこのことでしょう。私と運搬した戦友は思わず絶句しました。ややしばらくして、一人は「絶対に助かってもと通りになるから」と、やっと答えました。少女は何か言いたそうでしたが、それきり黙ってしまいました。無理もありませんでした。トラック上は全身焼けただれた重傷人で身動きならぬ程いっぱいでした。又、或時は重傷者を赤十字病院の広場まで運搬しました。看護婦が脱脂綿が何かでヨーチンをぬっておりました。苦痛にゆがむ顔、顔。すでに病院内は満員でした。こうして通り一辺の治療とて明るく日は皆暑熱にさらされ、担架上で死んでしまいました。また或る時私達お道路の両側に別れて小休止しておりました。その時に道の真中を杖をついた老人が、トボトボと今にも倒れん許りに、一步一步やって来ました。私達は突強に救護を求めにやって来たのだらうと凝視しておりました。ところが皆の目前でバツリ倒れました。軍医が走り、傍へ寄って脈博など調べておりましたが、それっきり幽明境を異にしたのです。気力の限界に達したのでしょうか。この様な情景は各所で見られただろうと思われます。又、被爆当初、各所に発生した火災により、瓦礫と化した周囲の中に、ひどく破壊されたとはいえ、形骸を残している産業奨励館(原爆ドーム)の姿、或いは家屋の倒壊した中で圧死のまま発見された娘さん、涙もすっかり涸れ果て、これをじっと見つめる母親の姿など、又、朝礼時整列中に、突如被爆して死屍累々の校庭の女学生群、防火水槽の中の死体、眼球が飛びだし舌が口からはみ出た死体、川に流れる夥しい死体、それを舟艇上から網にて収容する広島刑務所の囚人の活躍ぶり、又、自分の家のあったと思われる所を確認し、必死になって妻子の姿を求めて掘り起こす人、その手伝いもできぬまま聞けば彼は軍人、呉から許可を受けて宙を飛んで今帰って来たとのことでした。とにも角にも、私達生涯忘れ得ぬ悲惨悲惨の連続又連続でした。最後に私達は障害物を除去し、道路を清掃して、わずか一週間とは言え今次大戦の終局的な大惨禍を体験して血と涙の広島を去ったのです。

西義美

(当時第十教育隊第四十四戦隊・上等兵)

幸ノ浦基地にて、昭和二十年八月六日朝食後、漸次の休憩時間、内務班にて雑誌を読んでいた。突如閃光、頬熱く、さっと雑誌にて顔をおおう。急ぎ海辺に走る。みかん色の火の玉が水上にて燃える。自分とはとっさに秘密特攻兵器の(レ)艇が炎上すると判断。突如強い爆風に襲われ戦闘帽が飛び体が揺れる。戦闘帽を拾うや内務班末下に避難するも、腰下が入る迄に兵舎のガラスが破碎し、足の方に落下するを知る。その後少し間をおいて轟音する。その後何の音さたなし。おもむろに同僚とそろそろ海岸に出ると、最前の火の玉は宇品運輸部屋根の上にあり、その後火の玉は大きくふくれるにつれ上空に昇ってゆく。色はだんだんみかん色が薄くなり、後に雲となり原爆雲となり上へ上へとあがって行った。

六日の午前九時頃、広島市出身候補生は出動装備にて本部前集合のラッパを聞き集合する。〇〇少尉以下数名は二台のレに搭乗、宇品軍用栈橋に急行し、運輸部貨物自動車にて中心部に急行するも、皆実町電停手前にて電車の架線落下のため進行できず、車を捨て、鉄カブトをかぶり、架線(電車及電線)の下をくぐり、御幸橋を渡り、駆足で紙屋町に到着する。時刻は午前十時五分位であったと思う、電鉄前あたり迄は、建物半壊全壊あるも炎上はまだしていたかった。鷹野衛付近から国泰寺、紙屋町はほとんど全焼に近かった。印象に残るは、国泰寺の楠木が根本十尺位を残し、ロウソクみたいに炎上していた。電柱は勿論である。福屋、中国新聞社の道路側壁には数十名の人が電車を待っていたのであろう。立ちすがったまま髪は焼け、衣類もなく、顔は骨がでる位に焦げていた。顔を見たのでは、男性と女性の区別ができない。硬直と角度の関係が収容しようとしても、前に倒すことは割合困難であった。紙屋町交差点の西側の電車は木片はなく、丸焼で顔を窓に近づけることができない。鉄骨が熱く、車中にはいいこととなった骨類が山の様に散乱していた。福屋前、白島線角の公衆便所横には二、三歳位の子供が彫刻の如く四つんばいとなって硬直していた。生きた人数はあまりなく静かであった。ぞくぞく消防(自警)、消防団の人が入って来た。相生橋まで来て状況報告のため帰隊した。時の指揮者他中隊の幹候上りの少尉二、三名、同僚の兵の名前は他小隊のため記憶がない。その報告と部隊連絡(戦部隊本部)の指示により、江田島幸ノ浦戦隊より二次三次にわたり救援、道路の開通に派遣された。その後小生は輸送に代り、負傷者の輸送に上陸用舟艇を指揮し、軍用栈橋から似ノ島、金輪島方面にかわり、その後上陸部隊の湯と食糧を朝、昼、晩輸送する。勤務替えとなったのも市内出身のため、身内の心配等があったためであろう。

七日であったとおもう。軍用栈橋で李グウ公殿下死亡の見舞いにゆかれた第二総軍司令官畑元師に勤務中の報告をしたけれど、畑俊六元師の後姿は敗色強く沈み、重くわびしかった。

十年前後から白血球不足、体がだるく、心臓が弱り、顔色が蒼白にたった。昨年検査、広島上川役所原爆福祉センターで要注意と言われ、最寄りの病院で精密検査をするようにとのことであった。

二一

松本宇八

(当時海上特別挺進隊第四十九戦隊・見習士官)

江田島幸ノ浦において、朝食のあと休憩時間で室内にいた。閃光を感じた後、しばらくして突如爆発音と風塵の中にいた。敵機の襲来と思った。負傷者はなかった。それから待機指令があり訓練は中止となった。基地から広島を眺めると、火災の煙が広い範囲にあり、たしかにキノコ雲が上空に見えた。ガスタンクの爆発かも知れぬと話し合った。昼になって広島へ救援の出動命令あり、大型舟艇で宇品へ向った。

私は船舶司令部に部隊到着の報告を命ぜられ、伝令一名を連れ部隊をはなれた。市電の事務所に本部が置かれ、消火班と救護班に分かれた。私は救護班となり、市電の事務所後方を担当した。負傷者を本部前の広場に運んだ。夜を徹して作業した。翌朝四時近く私は次の転進地、市役所の偵察を命ぜられ、伝令二名を伴って瓦礫の街を縫って進んだ。広島文理科大学の建物が窓に灯がともっているように静かに燃えていた。赤十字病院の前に出たところ、前庭に人が集っていた。近づくくと私達の靴音が聞こえたのか、どよめきがあった。水筒の水を分けてやりながら奥へ進んだ。所々に人が倒れている中を白衣の勇士が救護活動に働いていた。婦長らしき人に救護隊は間もなく来るでしょうと告げて市役所に向った。

夜が白々と明けて来るころ市役所に到着した。建物はほとんど全焼していたが、地下室や隣接の公会堂跡に負傷した生存者が残っていた。救援作業は昼すぎまで続いた。被災者におにぎりが届いたが、食べ得る人はほとんどなかった。収容者は次々に息を引きとっていった。

夕方県庁跡へ転進した。翌朝近くの広場で勤労学徒の屍体収容を数日続けた。中学生、女学生の折り重なって倒れた姿は目も当てられぬ悲惨さであった。この作業の後半になって地方の人の救援隊や、肉身を探し求める人々がやって来た。ここで検視のあと、骨にした。

それから焼土の街に再び入り、縫針の会社本部をおき、その周辺の焼屍体の収容をした。

二二

小川武志

(当時訓練隊第十教育隊・兵長)

江田島幸ノ浦第十教育隊兵舎内(爆心地から約十二〜十三キロメートル)にいた。突然兵舎内がフラッシュをたい様な強烈な光で明るくなり、少時(二、三秒位か?)してスッと元に戻った。稲妻の様な感じとも言えそうであるが、光の色は全く異り、又、稲妻やフラッシュよりも光の持続時間がやや長いように感じられた。閃光後暫くして(三、四〇秒位か?)大音響と共に強烈な振動が襲って来た。余りの激しさに直撃弾を受けたかと思った程である。この音響と振動は一回だけで、

後は元の静けさに戻った。爆音振動の直後舍外に飛びだして広島方面を見渡したが、異状はないようでこの時はまだ原子雲には気づけなかった。その後時間を経るにつれて広島上空に巨大な積乱雲が急激に発達して行くのを認めた。昼頃にこの雲は異常な迄に発達し、頭上におおいかぶさるかと思われる程で肉眼でその盛上って行く様子が明瞭に確認され、更に発達の様相を見せていた。積乱雲の下の広島方面は煙ってしまったく視界に入らなかった。この間に皆実町のガスタンクの爆発という情報(恐らく単なる推測)が流れた。隊内には何かという疑問が主で、不安や動揺は見られたかった。

六日即日出勤を下令され、被甲(ガスマスク)、鉄帽携行との指示があった。出勤時間については明確な記憶はないが、午後であった。大発(上陸用舟艇)連絡艇(小型高速の特攻用モーターボート)に分乗、宇品へ向う。宇品港へ入ると多数舟艇が負傷者を満載して来るのに出合った。負傷者はおびずれも手、顔等の露出部に真白に薬をぬり、服装はボロをまとったとしか言い様のない悲惨な状態であった。これらの負傷者は以ノ島検疫病院があるいは宇品港周辺にあった船舶部隊兵舎を仮病院として、収容され屋上にあったものと推測される。宇品港に入った時は、それ程遅い時刻でもないのに、夕ぐれの様なうす暗い感じがした。市営栈橋西側の舟だまりの石段から上陸、一応船舶練習部(宇品港方面から見て電車通り右側大煙突がある)に入る。ここ負傷者の収容所であっていた。船舶練習部を出て電車通りを市の中心部へ向う。この時は又明かるくなっていたと記憶する。途中、ほとんど人影はなく消防署の前を通ったが、消防車はそのままで包帯をまいた署員が唯一人いるだけであった。宇品附近の状況は御幸橋に近づくにつれて家屋の被害が目立ちはじめたが車が傾いている程度であった。特徴は市の中心部に向いた屋根は余り被害がないのに、反対側は魚のうろこを逆に撫で上げた様に瓦立って乱れていたという事である。これは強烈な爆風通過に生じた急激な気圧の下降により、吸い上げられたものと推測された。御幸橋より広電本社前に到り、ここを部隊本部として一応待機する。日没後宿所集め偵察を兼ねて、広島文理科大学(広島高等学校と思っていたが、地理的に見て高等師範学校か)に入ってみた、コンクリート造りの校舎はしっかりしていたが、内部は全壊していた。窓ガラスが散乱し軍靴の下でバリバリと音をたてて、到底すぐに利用できる状態ではなかった。

六日夜再び広電本社前に戻る。広電本社の社屋は健在であったが、隣接の建物などは延焼していた。前方赤十字病院付近に火災が残っており、消火と患者の救出にあたる。間もなく火災もおさまり、患者の動揺も静まった様なので退去する。この病院のビルであったか、その近くの建物であったか記憶は明確ではないが、コンクリート造り三、四階位のビルの正面屋上が、爆風のため巨大なハンマーで打たれた様に凹んでいるのを見た。

七日早朝、市役所を経て、紙屋町交差点に進出。旧県庁跡地に戦隊本部を置き救護活動に当った。市役所正面玄関の石段は熱線の浸透した所から打撃を与える、平らに剥離する状態であった。この建物は内部を片づけて負傷者の収容所にきめられていたと記憶する。紙屋町交差点では電車数輛が脱線あるいは転覆し、赤茶けた鉄材だけを残して全焼しているのを見た。下士官兵集会所(紙屋町交差点手前の道を右へ百〜二百メートル)の建物は外観は残っていたが内部は一物も余さず全焼し、床に厚く灰がつもっていた。どこであったか記憶しないが(市立病院と思っていたが当時市立病院はなかったとのことである)木造兩棟(あるいは校舎であったかも知れない)二、三棟が残り、周囲に負傷者が多数集っていたと記憶する。以後八月十二日頃まで現地において救護に当った。

(以上の記述中の方向は全て宇品より紙屋町に向って記した。)

六日夜、広電本社前まで進出。赤十字病院付近に残っていた火災の消火と患者の救出にあたる。七日早朝紙屋町交差点に進出。県庁跡地に戦隊本部を設置。以後八月十二日頃まで現地にて負傷者の救出、遺体処理、焼跡の整理・道路の開発等その場に応じて必要な作業を行なったが、余りに多くの事がありすぎ忙殺されて、個々の詳細については余り記憶に残っていない。

私は戦隊云令として焼跡の瓦礫の中をずいぶん歩き回ったことを記憶している。私の所属した第四十九戦隊の主な行動場所は紙屋町交差点を中心として紙屋町、大手町、八丁堀、及び現平和公園方面であった。市役所の建物は先にも述べたように、負傷者の収容所にあてられていた。船舶司令官佐伯中将が広島戒厳司令官、救護司令官として、袋町附近であったと思うが、瓦礫の中に天幕を張り総指揮に當っておられた。

尚、当時江田島幸ノ浦にあった第十教育隊というのは、船舶特別幹部候補生(旧制中学三年修了以上の志願者で、年齢は満十五歳以上二十歳以下)を中心に編成された水上特攻撃隊の訓練基地で、広島に出動したのは本土決戦に備えて訓練中の第四十一戦隊〜第五十戦隊と五十三戦隊の十一ヶ戦隊(一ヶ戦隊約百名)の全員であった。中国地方最大の都市であり、且つ最大の軍事基地であった広島が一撃の下に壊滅し、爆心地付近にあった歩兵補充隊をはじめとしてほとんどの陸軍部隊が全滅した時、直ちに出勤し得たのは、爆心地から離れた宇品方面にあり被害の少なかった船舶部隊であったのは当然と言えよう。帰隊後一部の者について軍医の検査があった。九月月上旬、復員迄の間に四十九戦隊に関する限りでは、全員健康に異常はなかったと思う。又、第十教育隊内でも当時特別の病人がでたという事は聞いていない。私自身も今日迄放射能によると思えるような病気はしていない。

二三

戸嶋頭

(当時の船舶練習部第十教育隊・上等兵)

江田島幸ノ浦基地にて本土決戦という状況に備えて連日(レ)艇訓練に熱中していた。八月六日午前八時頃、その日の任務にでる前の注意事項などを聞く為に、舍内に整列していた。同十五分頃、舍内が一瞬稲妻の何十倍もあるうかと思われるような光に「ピカッ!」と輝いた。我々は、ハッと思っただけで、後は「何の光だろう」とささやき合った。そして三、四〇秒後「ドカーン!」という大音響と共に兵舎の出入口の扉がちぎれる程の爆風がきた。隊員各自は敵の至近弾が炸裂したと思い、とっさに整頓棚の下で毛布にくるまった。すぐ「防空壕に入れ!!」という命令がでて隊員は裏山にある防空壕に入った。しかし、その後光も爆音も爆風も何もなく、静けさを取り戻した。壕から出てみると対岸の広島市の上空に見たこともない程巨大なキノコ状の煙雲が上っていた。正午頃「広島でガスタンクが爆発したらしい。」という情報が入った。午後四時頃「広島のカスタンク爆発で被害が大きいから救援に行くべし。」との命令がでた。この時出勤した戦隊数

は不明であるが、小生ら四十六戦隊(百〜百五十名)は、五時頃大発艇で宇品へ向った。

幸ノ浦基地を五時頃大発艇で出発し、宇品に夕方着く。栈橋へ着いた途端、町の光景は異様さを漂わせていた。負傷者がトラックで山のように乗せられて運ばれてくる。被服はちぎれ、髪を振り乱し、黒焦げの顔、手、足の折れた者、これらの患者は舟で似の島へ行くらしかった。宇品町一帯は大した建物の被害もなかったが、一步市内に近づいてみると、それまでの町は消えていた。

道路の両側は老若男女の死傷者で、足の踏み場もない程であり、苦しみのうめき声、泣き叫ぶ悲しみの声、これが地球上の光景だろうかと思われた。

たまに、一つ二つくずれ残った建物には負傷者が満員で、ごった返していた。死んだ人はそのまま放置されていた。

焼野原は一面炎々と燃えつくし、夜はかわらなくずの間から青白い火のおが異様な匂いの煙と共に燃え上り、まるで地獄絵であった。

くずれがかった板塀に誰が書いたのか次のようなビラがはってあった。「特殊爆弾が投下された。町は無くなったが、日本にはまだ山河あり、我らはいよいよもってこの戦いを勝抜くために奮起しよう。」この時、小生は初めて特殊爆弾による被害であることを知った。

直径三〇〜四〇センチメートルぐらいの松の木が幹の中期から裂けて折れていた。爆風が如何に強かったかを思い知らされた。

閃光を受けた人々の膚は黒く焦げただれ、白い歯と、むきだしの眼球だけをギョロつかせて助けを求める負傷者は、口を覆うものがあった。「兵隊さん、助けてちょうだいや。」とせがまれても、我々はなすすべを知らなかった。

わが戦隊は四〜五班に分かれて作業した。作業内容は死体の火葬、道路の整備、患者の看護など、市民に対しては最大限の救援活動をした。

八月六日、戦隊集合、各班編成をしたのが日没後、場所は電鉄本社附近。作業は夜十時頃まで続けられた。小生は死体の火葬をなす。四人一組で扉のようなものでタンカを作り、死者を方々から集めて一定の場所に十数体を積み重ね、その上に薪を積み、重油をかけて火葬にした。

八月七日、駐屯地を浅野泉邸に変えて火葬作業、浅野邸は壊滅していたが、ヨロイ、カブト、刀剣などの類が焼けていた。邸の庭園らしい所に十数人死んでいて、当時では珍しい服装(洋装や和服の女性)の死体であった(註・当時、邸内に第二総軍の女性通信員がおり外電を傍受した)。

八月八日、町名は不明であるが河岸の空地に駐屯。火葬作業を行う。ドラム罐半切の風呂にさかさまに裸のままつっこみ、そのまま死んでいる中年女。閃光がいかに熱かったか想像される。暑い夏の陽ざしに死体は内臓が腐乱して大きくふくれ上り、鼻穴からはドス黒い血状の液、肛門からは腸の一部があふれだしている。軍需工場の焼跡で前の服装でゴロゴロ死んでいる女子学生達。百人以上いるはずだということで発掘したが五十数体しかわからなかった。何列隊もくずらりと並べた死体は悲惨さあまりないものであった。河の名は不明だが、河に死体が木片などと共に大きくふくれ上って何十体となく流れてきた。

八月九・十・十一日、この三日はどこに駐屯したかは全然思いだせない。しかし従事していた作業はやはり死体火葬、道路整備などである。

八月十二日、いったん帰隊したが翌士一百再び「救援作業に出動すべし。」との命令を受けた(この救援には小生は身体をこわし不参加)。二度目の作業は二、三日続けたと思う。この時(前記作業の他、似ノ島で患者護にあたった班もある。隊員の話では患者は髪が抜けたり、クロイドのものや、全然外傷はないがコロリと死んでいくものなどあった由。

六日から十一日まで救護作業に従事し、十二日に帰隊、直後の身体の調子悪く、特に胸部がつかえるような症状であったから、診断を受けた結果、「急性気管支炎」とのことで練兵休を言い渡された。従って二度目の救援作業には参加しなかった。四、五日で回復した。

二四

篠原正身

(当時第十教育隊四十四戦隊・上等兵)

幸ノ浦基地にて朝食準備中、(レ)艇が炎上したのかと思われる様な真赤な閃光と大音響で、窓硝子が破損し、隊員は床下へ入る者防空壕に逃げる者で混雑した。暫くして出て、海岸から広島を望むと原子雲が天高く盛上り、海は津波を思わせるように波が打ち寄せていた。隊員の中に広島市出身がいて、都市ガスのタンクが爆発したのではないかと想像した。

六日の午後、演習で整列の際「広島に緊急事態が発生したので、救援に出動するから部隊に帰って来なくても良い様に準備して営庭に集合せよ。」との命令があり、十三時半集合し、広島に出動する者と、似ノ島検疫所に行く者、小隊毎に別れて出発、私は高速艇にて宇品栈橋に上陸しました。栈橋からそれに通ずる道は、衣類がゴロゴロ、衣類に覆われない部分は火傷で腫れあがり焼けただれ、むごい姿で立っている者、死者も多数いた。まさに生地獄の感の衝撃を受く。

六日、収容した負傷者を宇品栈橋へ搬出。一方千田町の山中高女の消火に当る。宇品電車車庫側に野営。勤労学徒男生徒らか、翌朝生徒の死者多し。

八月七、八日、昭和町の整理に行く。京橋川に勤労女学生徒の死体あり、伝馬船で引き揚げ、田村中尉が身許確認の上火葬にする。六体位と覚ゆ。昭和町は疎開した跡で生徒が跡片付けをしていて被爆し、川へ飛び込んだものと思われる。又、看護婦がセメントの門柱が倒れた下敷きになって死んでいた。同様に火葬にする。町の整理を行う。

九日、赤十字病院にて死体の処理を行う。通路内外に死者多く足の踏み入れる余地なし。正門前の広場にて数十体を火葬にする。芦品部隊の死者が多数あり。

十日は、二部隊前に整理に行く。牛一頭肥桶車と共に倒れいる。道路作業を行う。

十一日には、控衛院附近の整理に行き、道路作業を行う。

八月十二日、ソ連参戦の為部隊に帰営。

二五

川綱重治

(当時**特別攻撃隊・特別幹部候補生上等兵**)

幸ノ浦基地1隊(師団直属特別攻撃隊訓練隊)の兵舎、一階で、小生が小隊長の朝食後の食器の跡かたづけの為に小隊長の部屋に入った途端ドカン、ピカッ!続いて再びドカンと猛烈な爆発音があり、まさに兵舎が爆弾にやられたかのようにグラグラと揺れた。とっさに空襲されたと思い、眼と耳を両手で押えベットの中にもぐりこんだ。しばらくして、誰かが宇品の方を見ろと言うので二階の窓から見たら似ノ島と峠島間の宇品方面が白煙でうもれ、大きなキノコ雲がニョキニョキと上方に拡大して行く。皆何か大事件が広島に起ったといういろいろなうわさ話でもちきりであった。

午後1時に乗って広島へ視察に行った連中が帰って来た。報告によるとある者はスパイによる火薬庫が爆破された。ある者はガスタンクが爆発したとか誰もはっきりした原因は分らなかった。原因が分ったのは、次の日広島へ着いてから、ある学者みたいな人の話によって分った。その人は原子爆弾とはっきり言った。又、パラシュートで落ちて来たとも言った。

その夜は1週の訓練があり、一晩中(夜間訓練一週間の三日目であった)広島湾で乗りまわした。市内は紅蓮の炎に包まれ猛烈な火焰がなめつくしていた。我々は一体何事が起こったのだらうと不安と恐怖、又、好奇心もあり明日の出発が待ち遠しくもあった。訓練隊(三十名)以外はその日(六日)のうちに救助作業に出発した。我々はあとから命令が来た。

翌七日前午七時ごろ宇品栈橋上陸。隊員は中隊長以下三十名、四列縦隊で行進した。栈橋は破壊され倉庫は倒壊していた。宇品から御幸橋迄の間は、両側の家屋が倒壊又は半壊しており広場に負傷者が一杯ゴロゴロしていた。トラックで宇品方面へどんどん運ばれてくる人に出遇った。御幸橋の上に立った時、市内が己斐・横川の方面まで一面の焼野原にたっていたのにはびっくりした。一週間前に公用で市内に来たのが、今は夢のようであった。川には死体が浮いており道路の両側にはムシロをかけた死体が多数あった。市役所で休憩し、各小隊毎に分かれ作業部署についた。市内電車の惨状は宇品・市役所前・紙屋町と行くに従ってひどくなっていった。

作業場所は、市の中央にあたり、七日は幟町と電車道との間で、京橋川迄の区域の重傷者運搬を午後から行った。重傷者運搬作業中、京橋川の橋のたもとに老夫婦が足をやられて歩けないで「兵隊さん、助けて」と言ったが、「我々は、今、重傷者を収容中だからケガ人は待って下さい。」と答えた。助けたくとも命令に従わなければならない。翌日もまだ橋の所にいたから、ようやく収容した。運んだ場所はどこか、今は記憶がないが、そのビルの一階(現在の福屋デパートかと思う)に運んだ。そこには医者や看護婦がいて手当てしたと思う。その晩は今のキリンビール三階に軍服のままゴロ寝した。一時間交替で不寝番にたった。夜立っている時「兵隊さん」と言ってまるで幽霊みたいな髪をした老婆がバツと倒れ、「水をくれ」と言って、そのまま次の朝近くに死んでいた。又、防火用水槽やの三川町の平田屋川の中に多数の人が死んでいた。八日目から死体収容の命令が下った。作業場所は中心部である。死体は幟町の寺(現在は教会になっている所)の境内の墓地に埋めた。最初は火葬にするため、崩れている煉瓦や倒れている墓石で焼場を作った。そして焚き木を探したが、この辺はきれいに燃えつきていて、たき木がなかった。そのため5㎡(深さ3m)の溝穴を掘り、そこに最初の日は五十人位埋めた。死体の上に死体を降した。死体が途中でつかかって下に落ちない時、死体の上に立ち下からつるはしで引きずりおろさなければならなかった。次の日(九日)も死体運搬をし、埋葬作業を行った。この日は約五十三名であった。同じように穴を掘って埋めた。死体収容はタンカでおこない四人一組で五組があり、埋葬・穴掘りは六人でやった。小生は埋葬の方だったが臭くて、支給された”ノリのかんずめ”のノリを手拭の中に入れ、それをマスクにして作業をした。母親が両親に二人の幼子を抱いて自分は黒焦げなのに子供はそのまま、離そうとしても離れない位しっかり抱いていたのには涙がこぼれた。夜は十一時頃、食カンを取りに、火事になって両側から燃えている町の中をひた走り、市役所まで取りに行った。八日、九日、十日は幟町、放送局隣の小さい焼けビルに泊った。屋上にあった防火用水槽の金魚が、生きて泳いでいたのには何かホッとした。ハエも蚊も全然いないし、緑のない死の町で用水の赤い金魚だけが眼にちらついて離れたかった。

一人の母親が、幟町国民学校前で泣いていた。自分の娘、国民学校一年生が朝空襲警報でいったん帰り、警戒警報で再び登校し、そのまま帰って来ないと言って、八日の日泣いていた。またある人は、疎開先から急ぎ帰って来て、自分の家の跡で灰を「兵隊さん、これは人間の灰ではないのか」と尋ねていた。夜、流星の如く真黒な空の中を火の王が飛んで行くのが、再三見えた。十日は受持ちの道路を自動車が通れるように清掃作業をした。ある婦人から取り立てのブドウをもらって食べた時はとても美味だった。軍律厳しい中、地方人から食物はもらえなかった。腹が減っても地方の消防団のたきだしをもらったら叱られた。十日、ソ連参戦のため特攻隊要員は全員十一日の朝引き揚げた。

戦後、長湯をすると目まいが起り、よくフラフラして倒れたりしゃがんで急に立ち上るとフラフラする時もあった。十年前広島へ来てから原爆病院でみてもらったら何でもないと言われた。三年前、人と話している時、眼がかすみ二重にその人が見える時があった。すぐに治ったので病院には行かなかった。何か手術とか怪我人を見ると汗がでて真青になり血が頭から下ろようになることがある。戦前はそんなことは一度もなかった。

なお、私は昭和二十年九月五日、広島駅発の貨物列車で郷里福島県郡山市へ復員したのである。

二六

山村重定

(当時**陸軍水上特別攻撃隊第四十六船隊・陸軍船舶特別幹部候補生**)

小豆島の船舶特別幹部候補生隊の出身者を根幹とする陸軍水上特別攻撃隊は、別名を海上挺進隊ともいい、特別幹部候補生隊員の特殊訓練を、江田島最北端の

幸ノ浦で行っていた。二十四ノットの、高速艇はベニヤ板製ではあったが、二五〇キロ爆雷を装備して必死の猛訓練を行っていた。この隊は艦上第十教育隊(船舶練習部)と呼ばれ、その真相は戦後も発表されざる状態にある。即ち自己の所属部隊四十六戦隊以外のことは、全く知ることができない秘密部隊であった(現在戦死者一、六三六名と発表されています)。

八月六日午前八時十五分、ピカッと閃光が走った。続いてドンと地底から響く大音響で兵舎で坐っていた隊員は、五寸位もはね上がったようであり、又、通行中の隊員は暴風ではね飛ばされた。全員兵舎を出て宇品港の方角を向くとはるか洋上、広島市の上空は今迄の晴天が曇天に変わり、巨大な原子雲が生きもののように対流作用を続けていた。

突然ラッパが鳴り響いた。各戦隊長集合である。「敵の新型爆弾広島市に投下さる。中国地区各基地の陸軍船舶部隊は、全力をあげて復旧作業に従事すべし。」と、船舶司令官佐伯文郎閣下の命令がでた(世にこれを布告という)。基地お活動を開始した。大発(大型発動艇)・小発・イ号高速・カロ艇・レ(特攻艇)が宇品へ輸送を開始したのだ。私は丁度、三時間後に宇品町に上陸。そこで建物の倒壊と負傷者を約二十名見たが、まだ本当の内容を知らないまま広島市内に入る炸裂後、三時間しか経過していない広島市内は、地面が焼け土のように熱く、己斐行き(違うかも知れない)の標示をした電車が暴風で三十メートルも飛ばされており、線路もアメのように曲り、又、どうした訳かなくなっている箇所もあり電車路を北上しようとしたが歩行困難であった。負傷者を一定の箇所に運びながら、先ずふさがった道路の(幹線) 開通を目標と定められた。山あり谷ありで、全く道路一本に三時間もかかり、午後三時頃ようやく軍用トラックが通れるような道路となった。治安維持も僕らの力のみと住民を守った。

明治橋から見ると川底に死体が並び、又、中国新聞社も社屋を残して人影もなく、芸備銀行は外郭が残り、事務室内の約十五名程死んでいた。又、浅野侯の邸という大きな屋敷があったが完全に残っていたのは能倉のみであった。街中の残った建物の中には、負傷者が最後の力をふりしぼって書いた焼炭書きの「このうらみ忘れるな」とか「人類の敵」とか子供や親に書いた伝言・遺言でいっぱいであった。小さな橋(名称不明) 渡ったとき、ランカンに手をはさんでブラ下っていた死亡者を、おろした。各隊とも、死体収容・負傷者救護作業を続け、火葬を毎日々々おこなった。ある所で背丈位の大型金庫あったが、開けてみると紙幣は全部燃えていた。広島赤十字病院へ八月十五日、負傷者を運んで行った。医者も看護婦も血だらけであった。廊下は負傷者で埋り、投棄も余り行われず、傷口の治療もヨーチン、赤チン程度、全部の治療が間に合わず廊下で次々と死んでいく。若い僕ら(満十八歳)の胸は痛んだ病院の丸型大時計のガラス破れていたのが印象にある。ここで終戦を知ったが、作業は毎日々々果しなく続き八月三十日に及んだ。

広島県庁の広場には、黒塗りの自動車も鉄クズとなっており大きな谷のような穴ができていた。これらを平らにした。八丁堀附近も整理した。死体が多かった。師団司令部附近を整理したが完全な死体は一つもなく、身元不詳の首三個・足六本位しかなかった。全く無人の師団とも誤解されるような状態であり、小銃の鉄の部分が十個位と大砲の車輪が一個あったのみ全くの平地であった。八月十六日作業に着いたとき、服を換え、靴を換えたが、皮は手で引っばるとちぎれる程の焼けようであった。師団司令部の作業後、大学と広島高等師範学校の跡で作業した。校庭に寝たが水は地面からでている水道管から呑んだ。作業地点が判らなくなったがミカンの罐詰が沢山あって、負傷者や兵隊も仲よく食べた。

食糧の配給は毎日々々生存者が一列に並んで配給を受けていたが、全く動けない負傷者には僕らが渡して歩いた。全部に支給するカンパン数がなく、又水筒の水は「兵隊さん、水をおくれ」という声で何時もからっぽになっていた。まったく地獄の広島市であった。

八月三十日作業終了、九月十二日幸ノ浦を出発、十六日夜帰宅した。

体がだるく通院したが、医師は栄養失調と診断した。一カ月位で元気になり現在に至るが、風下の黒い雨にあたった人は死亡していると聞いている。

二七

佐々木博

(当時船舶練習部第十教育隊・兵長)

江田島幸ノ浦第十教育隊兵舎の中で、朝食後演習にでかける準備をいそぎながらしている時、すぐ近くに爆弾が炸裂、大音響と共に兵舎が地響を立てたような具合に感じました。ただちに、裏山の方の防空壕に避難しました、兵舎の中で私は閃光を感じませんでしたが、外で掃除をしていた者は爆発音の前にポーッと熱く感じたということです。

私たちは、訳が判りませんでしたが、「広島市皆実町のガスタンク爆発したもの如し。負傷者多数につき救助作業に、広島に出動すべし。」との命令により、昼食後幸ノ浦から出発。宇品の岸壁に上がると、多数の負傷者が火傷をして赤くはれあがったり、白い薬を塗ったりしてトラックで運ばれて来た。それを見ると胸がつまって何とも言えない気持ちでした。隊員の中で一、二名真っ青になって、倒れそうになり、幸ノ浦に帰されたものもありました。

電車通りを宇品から北上。住宅は硝子窓などこわれ、家財道具はちらばり或いは傾き、住民は何かしらボカーンとして虚脱状態。電車は、所々にあったが窓がほとんどこわれていた状態。空には時々煙が回って来て、うす暗くどんよりしていた。御幸橋の辺りから三輪車で食糧を運んで来たので、人々が群って貰っていた様です。

千田町辺りの家が燃えていたが、広島電鉄会社の建物を本部として、各戦隊毎に救援の受持区域に向った。爆心附近は余燼がくすぶり、大変熱く目的地迄やっとなどついた程でした。

赤十字病院のみ残ってその廻りは、見渡す限り焼失してしまったようでした。

宇品―御幸橋―赤十字病院と北上して、左に入った橋の近くを四十一戦隊の本部にして、先ず負傷者の救護作業につく。焼残り板があればそれで応急タンカを作

って、川の土手には沢山の負傷者が火傷を負い、火災の熱さをのがれるために川に入ったり、土手に這い上がったりして、我々を見ると「兵隊さん水、水！」と水を求めている状態でした。舟艇で負傷者を運ぶとかで、橋のたもとに運ぶ作業を夜通しかかって行いましたが、集めた負傷者の中には朝方明るくなるにつれて、死んでいったものも多くありました。

次の日も負傷者の救出に当り、三日目か四日目あたりから、屍臭が鼻を突くようになり焼く事にした。遺留品を集め、死体を集め、焼残り木を積んで火をつけ、毎日々々夜おそく迄かかって火葬にしました。これも二日～四日位かかったと思います。夜、あちこちで焼く無数の火を思いだすたびに、戦争のむごたらしさをこれ程痛切に感じたことはありません。

我々四十一戦隊は出陣も近いので、終戦前に江田島に帰り、(レ)艇の訓練を始めましたが、二～三日後に終戦になりました。

二八

和田功

(当時船舶訓練習部第十教育隊・上等兵)

広島県安芸郡江田島町幸ノ浦海岸地区に、昭和四十二年十二月三日、旧陸軍海上挺進戦隊訓練基地跡に建設した慰霊碑の碑文にありますごとく、昭和十九年戦局の頹勢を挽回すべく陸軍船舶特別幹部候補生(風光明媚なる瀬戸内海、小豆島、現東洋紡績株式会社跡で三カ月訓練)の当時十六歳～十九歳までの少年を主体とし、全陸軍から選抜せる下士官、将校の精鋭を以て編成されたる陸軍海上挺進戦隊(第一戦隊～第五十三戦隊)は、二百五十キログラム爆雷を装備せる「ベニヤ製」モーターボート(元第五戦隊赤穂友義氏の談、第五戦隊は比島派遣の途中海没し、台湾の高雄に上陸、そのまま台湾軍に編入され台南市の南部に基地を設営していましたが、比島・沖繩戦での教訓により、海岸の基地は敵軍の上陸前に徹底した攻撃を受け、出撃不能となる恐れがありとのことで、急きょ山地に秘匿し、出撃の際はトラックで海岸まで輸送する方針が決まりました。そこで新竹市から二十キロメートルも奥へ入った高砂族の蕃社も、ほぼ近い台湾山脈の山ひだの谷間へ進んだわけです。そして八月十五日終戦を迎え、九月に中国軍が接収に来るというので、戦友六人語り合って記念のため、台湾人の写真屋に撮ってもらったのが第一巻二五七頁の写真である。)により一艇以って一船署を任務とし、昼夜を分かたぬ猛訓練を励み、私達は三菱造船所沖、安芸郡坂町の横浜沖に、停泊中の輸送船をめがけて突撃訓練を、一艇に三、四名が教官(小隊長)と共に乗りこみ実戦さながらの訓練を行った。ある時はその輸送船に撃突し、あわやボートが横転沈没と言っているような場面もあった。二百五十キログラム爆雷を敵艦の心臓部に、やみに乗じて静かに接近し、爆雷を投下して六～八秒位の間に、安全圏まで全速力で逃げる。接舷の角度やあらゆる状況を仮定し攻撃、爆雷投下の呼吸等訓練した。第一戦隊より第三十戦隊が十九年九月以降続々沖繩・比島・台湾へと征途このぼり、昭和二十年一月比島リンガエン湾の特攻をはじめとし、二十年三月以降沖繩戦に到るまで、壮烈鬼神も避く肉薄攻撃を敢行し、その任務を全うせし者、あるいは戦局の赴く所やむをえず挺身陸戦に奮戦せし者を含め、戦闘参加の勇士二千二百八十八名中、再び帰らざる隊員実に一千六百三十六名の多きに達し、挙げたる戦果敵艦船数十隻、誠に赫たるものありしも、当時は秘密部隊として全く世に発表されざるままに終った。而して又、第二次訓練が再開され第三十一戦隊以下十二個戦隊が九州・四国・紀州の各地に展開し、米軍の本土上陸に備え更に第四十一戦隊以下十一ヶ戦隊は、当時幸ノ浦基地で訓練中であった。第四十四戦隊は、戦隊藤井昌三(現伊丹市陸上自衛隊)・中隊長は田村繁雄(現広島市在住)以下、各小隊長は小立乾、金谷大蔵、増田則三(現東京都在住)、宮崎文雄、高倉美夫、渡部五郎、田村勝美、金田碩述、米良高德(鹿児島県出身、私の小隊長、昨年末より二回文通したが返事なし)、渡享(現島根県在住)以上。小隊長は大学勉学中、学徒動員令が下り軍務につき、見習士官であったが後少尉に任官、その下に特幹二期生一～二名、特幹三期生五名位で編成されていたと思う。

昭和二十年へ月六日当日、我々は朝食後朝の訓練にとりかかる直前の間、突然海を隔てた広島方面よりピカッと閃光が輝き(我々の兵舎は広島市内が一望に見える海岸にそってあり、入口があった)、何事が起きたかと光の来た方向へ目を向けた直後、今度はドーンという大音響があり兵舎が激しくゆれた。私は直感として、皆実町にあるガスタンクが爆発したものと思い戦友と話し合っていた。多くの戦友もその様に思っていた。後に一期生で北海道の佐々木博氏(第四十一戦隊助教)もその様に伝えて来ている。みるみる内に広島市内一円が雲につつまれ、市街が次第に見えなくなり、遂には完全に見えなくなった。キノコ雲が市街中心部附近から、すさまじい勢いで中天にかけ昇っていく。段々と高くなり地の底から湧き出る如く次から次へと立昇り、今さらながら恐しき壮大たる光景であり、私は呆然と眺めていた。

当日午後、広島市が特殊爆弾により大火災を起し建造物が倒壊し、市中は全滅になった。又、広島の一部隊も被爆、負傷者が続出、全滅したので、我々は直ちに救援部隊を編成し、広島市の復旧、負傷者の救護に向うべく出動命令が下った。直ちに上陸用舟艇に乗船、宇品船舶訓練習部にある軍用栈橋に上陸した。一步広島市へ足を入れた一瞬、啞然となり身の毛がよだち身振いがした。すでに運輸部の岩壁にみんな血の海からはい出たような姿をして、我々の救護を待っていた。頭から顔・手・足、全身血だらけとなり、瀕死の体を横たえていた。うめく者、目だけが血走りギラギラと輝き、何とも言えない異様な光景であった。ただむごいの一言である。後日、茶谷君、西君らの広島在住者に聞いたのであるが、広島市内出身者六十七名位が原爆投下直後、偵察隊として市内の被害状況等を調査に出たと言っていた。

我々は徒歩で、東千田町二丁目広島電鉄本社に到着した。社屋は相当破壊されていたが、右側の建物を我々部隊救護本部とされた。午後四時過頃到着したように思う。広島電鉄本社の周辺、並びに上陸してから本部までの途中の状況はすでに伝えられている如く、見渡す限り猛爆を受けたる如く、一軒の家もなく焼野原となっていた。服はボロボロに焼けて垂れ下り、膚を出し、頭から血を流し、全身血に染り、傷口は痛々しく、ぼう然と歩いている者、皮膚を焼かれてまるでボロをぶら下げたように垂れ下り、歩く力もなく我々の救援を待っていた。まさに地獄の絵それ以上の悲惨な状況であった。多くの人が走った如く、「兵隊さん、水を下さい!」「水を下さい!」と哀願された。虫の息で全身の力をふりしぼり、「水!水!水を下さい!」と言っていた。最初は水を多く与えてはいけないと注意さ

れていたが、誰言うとなく、どうせ死ぬのなら水を請われた通りに与え、死後の冥福を祈ってやろうではないかということになり、多くの人に水を与えた。一滴一滴の水を、おいしそうに飲みまし、まったく満足した様子で、負傷者はよろこんだ。その一滴が最後の死水であったかも知れない。幸いにして広島は水が多くあり、至る所水道管が破裂してふきだしている所が多かったので我々ものどが乾いたとき、しばしば飲んだ。

一日目の六日は、広島電鉄本社の周辺、工業専門学校周辺に逃げて来た負傷者を背負いながら、その学校の校舎の中へ応避難させた。タンカもなく近くにあった固い戸板を探しだし、タンカの代りに使用した。重傷を負った人、元気な者でも固い戸板のせると痛いのに、その当時は止むを得ず乗せて運んだ。痛い痛いといううめき声を聞きながら作業をした。又、中には痛さのあまり「兵隊さん、殺して下さい!」という重傷者もいた。当初はその様な作業を夜遅くまでした。その様な状態にて食欲もなく、二回分位の携行用乾パンもあったが負傷者に与えた。その夜は寝る所もなく、学校の校庭に青天井の夜空を眺めながら寝たが、なかなか寝つかずその日の出来事が走馬灯の様に頭の中に浮かび疲れがでてか、そのうち浅い眠りについた。救護本部に到着した直後、比治山橋西詰に部隊本部が居住されていたので将校(氏名不明)と私と二人で、鷹野橋から比治山橋に通じる大通りの中央を通りながら探して行った。途中は電柱は倒れ、電線は垂れ下り、家屋という家屋はみな倒壊して焼け、燃えつづけていた。熱くて道路の両端は歩けなかった。どうにかたどり着いたが、附近一帯は焼野原となり消息不明であった。

八月七日、比治山橋西詰付近一帯の死体、特に川に浮いて流れている死体を川から引揚げずる作業をした。その日はこの附近にて野宿したが、この日の記憶は余りなく、舟はあったが舟をこぐ者がいなくて困った。小隊長が探していた。作業にも慣れぼつぼつ食欲もでてきた。

八月八日、相生橋東詰の産業奨励館(原爆ドーム)の下の方岸にたどり着く。元安川に流れている死体の収容作業が始まった。満潮になれば朝に乗って上へ流れ、引潮になれば下へ流れて行く死体を一体ずつ引揚げた。川の中に飛び込み、泳ぎ、足に綱を掛けて岸から引寄せる。一日約五十〜六十体位火葬した。特に軍人が多かったように思う。みんな水死体にある如くブクブクと膨張し、鼻から水がブクブク、泡を吹いていた。水に漬った皮膚はすっかりふやけて青白く面変わりしていた。強く皮膚を引張ると、ズルッと皮がむけたりした。材木を探して来たと言っても、焼け残った樹木で、なかなか燃えにくくて苦労した。先ず探して来た木を並べ、その上に死体を並べる。又、木を並べ又死体という具合に重ねて火葬するのであるが、火つきが悪いため宇品から船舶用の重油をもらって来て付けた。勿論、住所・氏名・性別・年齢・特徴等全部記録した。分らないのは推定にて小隊長が一人ずつ記録した。全員合掌し冥福を祈る。時間が経過するに従って、だんだん悪臭が強くなった。川の中へ爆風で飛ばされたのか、暑いので川の中へ入り溺死したのか、猛火に包れ煙に巻かれ、逃げ場を失い、川へ飛びこみ死んだのか、案外水死体が多かった。当時、柳井の船舶工兵隊という兵隊も来て、同じ作業をしていた。夜は紙屋町電車停留所の安全地帯に(当時は三角形をしていた。一個所で広島駅へ已斐・広島駅へ宇品・已斐へ宇品各方面に乗車できるようになっていた。)、自動車等が飛び込まない様に火を燃し、不寝番に見張りを頼みゴロ寝をした。七日と八日と二晩寝た。次第に悪臭にも作業にも慣れてきたのと、腹も減り食欲も順調になってきた、食糧は市内では調理できないので幸ノ浦から直接運搬したようであった。

八月九日は七日八日両日で相生橋での作業、水死体の収容・火葬も終わったので、大手町筋を南下しつつ建造物の下敷き、特にブロック壁の下敷きとなって焼死体となっているのを掘出して一個所にあつめ、一体ずつ記録を書きながら火葬する。半焼死体となったのが多かった様に思う。姓別・年齢等も判明できず、一塊の肉の塊とたっていたのもあった。その他想像にあまる千差万別の形をしていた。段々と日時が経つに従って悪臭がひどくなり、傷口にはウジ虫が湧き、鼻の中、口の中、所構わずウオウヨと身の毛もよだち、冷汗が背中を流れることしばしば。夜が来ると、その場へゴロ寝をし、朝起きてみると、その傍に半焼死体があり、びっくりするという事もあった。

結局八月六日以来六日間八月十二日頃まで、我々は負傷者の救援と死体の火葬が主な作業であった。その間死体の処理は約三百体位に達したと記録している。幸いに雨も降らず作業も順調に終わった。

幸ノ浦に帰隊後、数日間下痢が続いた。食当りが寝冷え位に思って征露丸を飲み続けた。復員後二年位してから激しい胃けいれんが周期的に起り、約二年位困った。別に原爆病も現在感じないが、消化器系統が弱くなった。

二九 炸裂

柴田富雄

(当時の訓練部第十教育隊・上等兵)

梅雨もあけた。いよいよ本格的な夏の訪れだ。仕事の手を休めて一服つけると、じっとしていても汗がにじんでくる。窓外に目を向けると紺碧の空に怪異な入道雲が重なり合い、地上のかたには陽炎がもえている。ふと、もえ立つ陽炎の中に、あの日の「広島」の光景が浮かびあがった。火焰狂う焦熱地獄からはいあがったような全身焼たれた人達。父母兄弟を求めて泣き叫ぶ子供の顔。ホコリで髪も黄色く見える婦人。累累と折り重たる死体、どこまでも続く瓦礫の山。修羅の絵巻を思わせるこれら地上とは、およそ対照的な雲一つない青一色の空。笑いを失った顔にうつろな目。力なき人々がトボトボと陽炎の中に見えかくれしながら、消えてゆく。

一、八月六日

ここは江田島の幸ノ浦にある陸軍水上特別攻撃隊の基地である。昭和十一年八月六日の朝、次の学課までまだ暫くの時間があり内務班では雑談一しきり、やがてそろそろ準備にとりかかろうとざわつき始めたその刹那、ピカーッ!!と目もくらむような強烈な青白い閃光が室内をつつ走った。同時に皆の目が天井からぶら下っている裸電球に注がれた。「漏電だろ」「いやそれにしては余り強すぎる」など、再び騒しくならんとした時(閃光を見てから爆音を聞くまでこの位の余裕

があった。)ズドン!と、あたかも百雷一時に落ちたかと思わせるような地軸をゆるがす大爆音が起った。一瞬爆弾投下の四文字が胸中をよぎる。場所は海岸にある衛兵所付近か?事務室の窓ガラスが大きな音を立て割れた。ハッとその場にうつ伏し、今来るか、今来るかと全神経を背中に集中して、次の爆弾の落ちるのを待つ。何秒経ったか、期待した音は全く聞こえない。そおと頭をもたげてあたりを見ても何の変化もありはしない。ただ天井の裸電球がブラブラ揺れているだけ。外を見ても何事もなかった様子だ。遂に重苦しい沈黙は破れた。そこそこで小声でしゃべりだしたのが次第に大きくなり、皆起き上がった。爆弾投下ではないとすると、一休何の音だったのか…急に海岸付近が騒しくなった、何事かと飛びだしてみると、おお!!思わず呆然として広島の上空を見上げた。そこには、この世のものとも思われぬまことに巨大な噴煙が空高くそびえ立っている。形は傘を開いた茸同然、広島市全域にわたりどっかと根をおろし、今にも戦いをいどまんとして、下界の人間を睥睨している怪物のようだ。何という不思議なそして不気味な煙だろう。あくまで澄みきった紺碧の空に騒然とうそぶくが如き怪煙の下は、どんよりと濁り漂う濃霧にも似た煙で、全く見えない。怪煙の右手にある太陽はその方にたなびく煙に包まれて、あたかも日食を見るように真赤だ。怪煙は一見微動もしないようだが、よく見ると、キノコ型の柱の部分には炎を包み、たつ巻にも以てかなりの速度で回転しながら一路上昇を続けている。一万メートルか、あるいはそれ以上にも達していると思われる。市街の方に目を転ざると、雨を伴っているようなドス黒い煙の下から時折サーッと火柱のあがるのが望みされる。到底人間のしでかした業とは思えぬこの光景に一同驚愕の目を見張っていると、突然特徴のある爆音が聞こえた。見るとB29が一機、今しも煙の切れ目に輝きだした太陽にキラリキラリ光りながら退去しつつある。多分偵察にきたのだろう。畜生!!悪事からさめたような、一回思わず歯ざしりした。上層から崩れだした怪煙は、あたかも急にできた白雲のように浮遊しはじめ、次第に下層に至り、やがてまったくその影を没し去った。かくも烈しい煙をうちあげた原因は、一体何だろう?やはり爆弾投下か?もしそうだとすると、よほど大量の爆弾を落としたのに違いない。あるいはまた、広島位一挙に壊滅できる程の威力をもつ新型の爆弾か?…想像を重ねるたびに、かたくなな頭は、ますます混乱する。正午、どこからともなく、先刻の爆音は市内にあるガスタンクの爆発によるとの噂が伝って来た。なるほど一応はうなずけないこともないが、何となく割りきれない気持ちだ。午後連絡艇の運搬訓練に引き続き、そのまま海岸で学課に移る。真夏の強烈な太陽の光線は容赦なく、さすがに元気な兵士達も流汗淋漓、学課の早く終るのを待つかのようにふらふらしている。その時、わが隊の週番上等兵が走って来た。救われたような面持ちで、両注視する中に、上等兵は小隊長に報告した。「石塚隊は作業を即時中止して、直ちに本部前に集合すべし。」と……。一同素早く隊伍を整えて、本部前に駐足集合する。週番司令が広島出動の命令を掲示板に書き、今後の行動につき何彼と注意を与える。早速携帯口糧の受領にでかけた。炊事当番を除き他の者は内務班に帰り、またたく間に出動準備完了する。第一戦だけでなく内地も正に戦渦の中にあるのだ。広島被害の容易でないことは、あのすさまじい煙によってもうかがい知ることができる。外地への出動ではないが、武者ぶるゝにも似た異常な闘志の全身にみなぎるを覚える。「小倉隊が行くぞ、次は草深隊か、石塚隊はまだか……」等、我々の間断なき無駄話の最中にも他中隊は続々と栈橋に集合しつつある。出動間際の緊張に皆黙々と歩を急がせている。早くも乗艇を完了したのか、ザザーッと、スクリューの騒音が殿(シンガリ)にまわされて亢ぶっている。我々の神経をますますいらだたせる。漸く命令下る。今までの愚痴ほどこへやら、またたく間に舍前に整列…乗艇を終る。我等の艇はすこぶる快調、号令一下、幸ノ浦湾口から猛然と滑りだした。すでに宇品まで幾往復した操舵手の声高に語る市内の被害状況に耳を傾けたがら、前方を睥む一同の面上には、何ものにも屈せぬ気迫がみなぎっている。宇品港が近づくにつれて、爆風の跡も生々しく瓦が吹っ飛んだり、トタンがめくれた屋根、ガラスのなくなった窓が視界にとび込んできた。今しも負傷者を満載した一隻の大発が、似ノ島めがけて矢のように走っていく。目的の栈橋は負傷者、避難者を運ぶ大小の船が入り乱れて、舟艇の割り込む余地もない。負傷でもしたか、片腕を首につつた一将校は、これらの整理に躍起になっている。止むなく別の栈橋から上陸する。本部(練習部本部)前には先発した他中隊も待機中だ。ここで次の命令を待つ。ふと我々は、そこここにうずくまる異様な人達の姿に思わず目を見張った。煤を刷いたように黒く汚れた顔…ボーボーに振り乱した髪には黄色く見える位のほこりをかぶり、ボロボロの衣類を身につげた素足の婦人…半分ちぎれたようなシャツを身にまとい、じつとうなだれたままの男…今にも何か叫びんとするように口をあけ、カッと目をむき、我々の方に視線を向けている一婦人の表情にはたとえようのない恐怖を抱えていることがうかがわれる。我々の通行に対してもドンヨリとしたうつろな目を向けるだけで、何の反応も示さない人達…。余りにも大きな苦しみが思考力を奪いとったようにも思われる。だが無気味な感じさえするその無表情な顔をじっと見ていると、そこには、「自分達もいつの間、どうしてこんなみじめな姿になったんだ…教えてくれ…自分達だけがなぜこんな苦しみを受けなければならないのか…想像を絶するこの出来事は一体何が原因なのか…兵隊は何をしているんだ…早く助けてくれ」と、必死の思いで訴えているような胸迫るものが感じられる。ちょうど鋭利な刃物で切って無理にこじあけたかのように思われる大きく裂けたすさまじい火傷を負った人もある。長さ二、三十センチメートルにも達する位の火傷を手と言わず足と言わず、無数に受けているのだ。そこからは割れたザクロを連想させる赤黒い肉がのぞいている。折りしも負傷者を満載したトラックが入って来た。トラックの上に軍刀を手にして起つ将校の唇がドス黒く変色し、ひきつるようにして、異様にふくれあがっている。この人達も又、烈しい苦痛に顔をゆがめ、車から降ろされるや、たちまち崩れるようにその場にうずくまってしまった。そこら中に満ちあふれる、地に引きずりこまれるような呻吟の声、それにまじり、一層強く胸にひびく血を絞るような子供の叫び、死に直面しつつもお愛着断ち難く肉親を泣き求める傷者の姿。余りにも悲惨なこの光景はまさに地獄絵図同然。見る者をして思わず目を覆わしむる。本部付近では素足の女子職員達がコマネズミのように走り廻っている。土間には無帽の兵士が一人倒れている。外傷はないようだが、ここまで逃げて来て力尽きたものか…命令受領に行った将校の帰りが遅い…いよいよ事態のただならぬものが察しられる。こうして待機している間にも市内の惨状が忍びれて、どうしようもない焦燥感を覚える。ようやく命令下る。石塚隊の目的地は八丁堀だ。ここは被害の中心地と聞く。あたりの空気を震わせて惻惻と胸を衝く悲痛なる傷者の慟哭に必死の努力を誓いつつ号令一下、長蛇の前衛が開始された。進むにつれて左右に立ち並ぶ家屋の被害の度はますます大きくなる。急に視界がひらけて瓦礫打ち重なる焦土が目に入る。燃え落ちた家、倒壊した家屋、壁など崩れおちて辛うじて立っている家、幹の焦げた樹木、道路に散乱する瓦、トタン、材木、板切れなど…道路沿いに建ち残った家も瓦がとんで大穴ができたり、雨戸、障子がはずれたりして、中はガラス、食器などが足の踏み場もないほど、乱雑を極めている。そここでくすぶる家の囲りには火災特有の異臭が漂っている。崩れかかっ

た塀や防火水槽、壁板等人目につき易い箇所には、「〇〇健在、〇〇で待つ、これを発見次第すぐ来たれ」。「〇〇は健在です。〇〇を探しに行く」等、家族の安否を気づかう言葉や連絡先がケシ炭でところ狭しとばかり、雑然と書き連ねてある。右手にある比治山にも飛火したかグングン火勢を強めながら燃え広がっている。御幸橋を通過する頃から障害物はいよいよその数を増してゆく。無残にも破壊された自動車、電車、倒れた電柱、切断されて道路一杯に垂れ下った電線、コンクリート、瓦の破片、レンガ、木材、枝切れ等、あらゆる障害物で広い道路も埋っている。前進も遅々としてはかどらない。前方に見える三、四階建の内部が猛火に包まれて、総ての窓から炎と黒煙を吐きだしている。断末魔の形相にも似て悲惨だ。炎に照らされて、附近は真昼のように明かるい。足下に注意しながら進むうち何気なくそこら中に散乱する黒いものに月を向けて思わず寒々としたものを背に感じた。死体だ。衣類を着けた死体に混じり、これは又、何という無残！！形容もできない程全身焼けただれている死体もある。上陸以来、始めて真近に見る死体こり引緊るものを覚える。死体が燃えているのか、何とも言えぬ異臭が鼻を衝く。ようやく目的地に到着する。直ちに各小隊の作業担当区域が指示される。我々は芸備銀行前の道路整備だ(障害物の除去作業)。まず負傷者を一ヶ所に集める作業にとりかかる。担架の代りに附近に散乱する戸板やトタンで運ぶ。全身焼けただれたような人々が、仰向けやうつ伏せにあるいは物につかまるようにして横たわっている。呻く者、声をだす元気もない者、頭や顔、手足に切り傷、火傷を負った人、流れでる血、ドス黒く固ってこびりついた血、兵隊が助けに来たぞ！！頑張るんだ！！傷は浅いぞ！！……一人一人に声をかけながら次々と運ぶ。兵隊さん助けて！！目を閉じたまま、か細い声で訴える市民を夢中で介抱、救助しながら戦争に直接かわりあいのない市民をこんなにまで苦しめる敵に對し、烈しい怒りを覚える。どうやら作業も順調に進み、ある建物の近くまで来た時、どこからともなく人の叫ぶような声が聞こえた。ハットして耳をすますと、確かに建物の中から聞こえてくる。よし、気負いこんだ一同、中に飛びこんだ。途端にジメジメした冷氣と共に、嘔吐をもよおすような異臭が鼻をつく。ポトンポトン水道のめれる音が聞こえる。うす暗い壁の近くに、五、六人の男女が倒れている。助けて！！助けて下さい！！弱々しい声が訴える。よし今助けてやるぞ、次々と外に運びだし、最後に残った肥満体の男をかつぐとうとすると、奥にもう、一人いると言う。入ってみるとなる程うずくまっている人がいる。お婆さんだ。お婆ちゃんしっかりしろよ！！声をかけても返事がない。体に触れてみると冷たい。死んでいるのだ。間に合わなかったか……肩にかついで外にでる。既に燃え尽きた建物が多いが、そこここには紅蓮の炎をあげながら燃えさかっている所もある。今度は一ヶ所に集めた負傷者を赤十字病院まで運搬する。全く息つく暇もない程の忙しさだ。ともすれば、ゆるみがちになる体に気合をぶちこみ、再び戸板に乗せて運びこかかる。到る所、散乱する障害物で歩くのがひと苦労だ。やがて十字路にさしかかると、五、六人の市民が恐怖におびえた目付きでボソボソ語りあっている。その足下には一人の男がうつ伏せにたっている。死者であろう。微動ともしない。ようやく目指す赤十字病院にたどり着く。玄関前の広場ですでに、おびたしい死傷者で足の踏み場もない程埋っている。地獄！！正にこの世における地獄の出現だ。これらの人達の多くがあたかも熱湯に放りこまれたタコのように、硬直した体は赤黒く変色し、一糸まとわぬ裸体なのだ。苦しさの余り、身をよじらせて悲痛な叫びをあげる者、ひどく物憂げに我々の方に首をまわし、じっと見つめる顔は無表情に近いが、余りにも烈しい苦しみで、精根も尽き果てて、声がでないようにも見受けられる。どの顔を見ても、怒りと苦痛と悲哀の入り混じった実に複雑な表情である。鬼気迫るようなその光景は、まことに悲惨であり凄愴の極みである。何回か往復して負傷者の運搬を終えると、忘れていたのどの渇きを猛烈に覚えた。かたわらに蓋がはずれて地上にあふれだしている消火用水がある。腹がいなくなって、むさぼるように飲んでいると、そばに横たわっていた負傷者がむくりと頭をもたげて、水……とかすかな声をだして渇きを訴えた。重傷者に水は禁物であることは知っているが、余命いくばくもないこの負傷者へのせめてもの心づくしだ。拾って来た茶碗になみなみとついで、ロもとにあてがってやると、ゴクリゴクリと二口、三口飲んで又、横になり目を閉じた。向うの建物の入口付近で四、五人の男女が右往左往している。何かと行ってみると、狂人がいて困るという。見ると階段の中央に頭をモジャモジャにした男がお医者さんの診察着を失敬したのだろう。白衣を身につけステッキを手にして笑っている。近づくステッキを振り回まわすらしい。なる程よく見ると常人と違っている。戦友と階段をのぼり暴れる男をつかまえた。男を連れて帰途に着くダーンダーン！！続けざまに爆発音が聞こえる。ドラム罐でも爆発したのだろうか。そこここで石炭の山が火の塊にも似て真赤に燃えあがり、四方を照らしている。近くを通ると体が焼けるようだ。はじめは幾人もいなかった十字路付近には、十数人の市民が集っている。誰とでもよい、とにかく口のきける人は話さえていければ、幾らかでも不安と寂寥感から解放されるのかも知れない。しばらく行くと市の衛生課の職員と称する人が飛びだして来た。戸板等ではなかなか渉らないから担架を借りに行きたいと言う。一緒に来てくれと頼む。我々も困っていた矢先ではあり、一も二もなく承諾した。職員に分けてもらった乾パンをかじりながら、水道のパイプが破れて噴出している水を飲むのでたちまち腹が張る。夕食もくつていない我々だ。味など全くないこのパンも空腹の時は実にうまい。元気をとりもどした我々に、いつの間にか、かばんを手にした中年の婦人が、近くくついている。どうも病院の婦長さんらしいタイプの人だ。「ガスタンクの爆発ぐらいで、広島が壊滅するとはどうも解せぬ」等話していると、その婦人が「私はおそらく原子爆弾ではないかと思います。」と言った。仲々物知りだ。今朝以来、何か釈然としたい気持を抱いていた我々はこれを聞いて、はじめて納得がいき、原子爆弾の物すごい破壊力の前に一瞬にして崩壊し去った広島を改めて眺めた。途中で婦人とも別れ、ある建物の近くに来た時、一人の学生が道端に倒れているのが目についた。脚絆をつけ、学生服(ズボン)を着ているが、帽子はなくなっている。額に大きく裂けた傷口があり、こびりついた血のかたわらを新しい血がつたい落ちていた。おいしっかりしろよ！！傷は浅いぞ！！元気をだすんだ！！皆でとり巻くようにして介抱する。額を手拭で拭く。兵隊さんありがと！！……弱々しい声で礼を言う。ボツボツ話すところによると、我々と同年位の中学生だ。動員学徒として市内のある工場に通っていた。今日も同じように家を出て歩いていると、突然周囲がパッと光り、気がついたらここに倒れていた。一体何がおこったんですか？と聞く。それにしては火傷も負っていない。閃光が走った時、体が何かの物陰にあり、強烈な熱線をじかに浴びなかったのだろう。しかし重傷だ。助ければよいが……。通りかかった他の戦友に後事を託し、再び歩を進めていると、おとうちゃん！！おかあちゃん！！と必死に父母を求めて泣き叫びながら歩み来る男の子に会った。五、六才か？火傷の跡も生々しく、顔一面に白い膏藥を塗っている。目、鼻、口がのぞいているだけだ。聞けば父毎、兄弟どこに行ったのか分らないと言う。不びんな……早速皆で乾パンを与える。戦友が付近で負傷者の救護にあたっている兵士達に後事を頼む。「ほらあそこに兵隊さんがおるだろ、そこまで行ったらすぐ助けてくれるよ。」等口々に声をかけると大きくうなずいてボ

ロボロ涙をこぼし、しゃくりあげながらトボトボと歩いて行った。何の罪もないこれら子供の親兄弟を泣き求めさまよう者が幾人あったろうか。戦争が生んだこの痛ましくも悲しき犠牲者よ。と、言い知れぬ悲哀が波紋のように胸中に広がってゆく。目的の家に到着、先ず水を御馳走になり、担架を借りて外に出る。橋のそここが燃えている(外側の下部)。しばらく行くと、来る時はさほどでなかった火勢がグングン強まっている。烈しい火は風を巻きおこし、突発した風は怒り狂う火の海をますますあおりたてている。大きな家がものすごい音をたてて倒壊する。バリバリッ!!ガラガラ!!飛びあがるような震動と共に崩れ落ちる有様はまことに悲惨。天に沖する煙の下からさつとあがる火の手は、魔の跳梁にも似て凄惨だ。担当区域に帰ってみると、他の兵士達は道路整理に一生懸命だ。野田小隊長に担架借用の報告をなす。「おおご苦労。命令あるまで仮眠せよ。」そう言って労をねぎらってくれる。やれ嬉しや、ゴロリと道端に横になると、スーツと泥沼にひきずりこまれるような眠りに落ち入ろうとした。その時一人の市民に起こされてしまった。宿舎(あるいは工場だったかも知れない)に孤立している動員学徒を救助してくれと頼む。不眠不休の連続作業に心身共に綿の如く疲れ果て、ともすれば猛烈な睡魔に襲われがちな体に気合をぶちこみ、担架を持って駆けだした。現場に着くと、無事脱出に成功したか、我々と同年位の二、三名の学徒が立っていて、我々も一緒に行くと言ってきかない。だが、ようやくの思いで脱出したであろう彼等を再び危険な場所に連れて行く気にはどうしてもなれない。折角の好意を断って、渦巻く黒煙の中に身を躍らした。ドッと吹きつける煙が目にしみて、顔もあげられない。上からは火に包まれた破片が容赦なく落ちてくる。熱気に顔がまてる。先刻覚えた堪え難き眠気も完全に吹飛んでしまった。つまづきながら走り目指す屋内に飛び込む。助けに來たぞ!!もう大丈夫だ!!一同激励の言葉を発しながら担架に乗せる。担架の足りないものは肩を貸したり、背貰ったり、もと来た方へ急いだ。結果を小波中尉に報告し、担架を渡す。今度は死体の収容だ。燃えてわずかに残っている衣類を身につけている者、血汐にまった顔、手、足……体半分黒焦げになった死体。まるで熱湯に放りこまれたように赤黒く変色した素裸の死体は、火傷の大きな傷口がバリバリと裂けて、皮膚がめくれあがっている。全く想像を許さない異様な、そして不思議な死体だ。ひじから先と足だけが既に白骨化している死体もある。これら多くの死体に混じり、一個の炭のように真黒い塊と化した幼ない子供の死体、ズシリと重い大人の死体に比べて、子供の何と軽いことか。ここにもしも今、敵がおるならひっ捕えてハッ裂きにして叩きつけてやりたい……身内をかけたぐる火のような憤怒の情こいよいよ闘志を燃やし、元気に作業を進める。次第に広い道路がひらけてくる。窓が白んできた。夜明けも近いようだ。野田小隊長(見習士官)が来て、仮眠を命じた。他の兵も交代で仮眠していると聞く。道路に横になると、いつの間にか深い眠りにおちていた。

一、八月七日

どの位眠ったろうか。僅かな時間だがずいぶん長く眠っていたようにも思える。起床して被害の大きいのに改めて驚く。障害物と瓦礫が山のように折重なるこの焦土は、一体どこまで続いているのか……気の遠くなるような惨憺たる状況である。昨日から街全体をおおいつくした鬼気迫るような愁傷をヒシヒシと感じていた我々であるが、今、明るい光線の下に晒された焦土の姿は、まさに荒涼の一語につきる。完全に壊滅し去った街には生氣全くなく、ただ、余燼なおくする中に目の届く限り倒れ伏した死者あるのみだ。練習本部のトラックが砂塵をあげて疾走して来た。待望の飯重般車だ。一同の顔がおのずからほころぶ。我々炊事当番は早速飯桶を受領して、ニギリメシを作る。分配終るや首を長くして待っていた一同、むさぼるようにかぶりついた。食後、昨日に引続き道路整理にとりかかると。昨日も随分整理したようだが、今こうして、あたりを見まわすと整理した範囲は僅かなものだ。飯をくったあとだけに、作業にも自然気合がよいる。散乱する電柱、トタン、壁板、瓦等を道路の両側に運ぶ。道路の整理は急を要する。一同黙々と作業に従事する。午後は附近の死体収容だ、到る所に横たわる悲惨な焼死体を次々と一ヶ所に集める。水道の水が流れて水溜りを作っている所には、いたいけなオカッパ頭の少女の死体が半分水にぬれながら横たわっている。直接熱線にあたらなかったのだろう比較的きれいだ。幼ない犠牲者を目にするたびに烈しい怒りを覚える。次々と片づけているうちに思わず慄然とするような死体こぶつかった。仰向に倒れている妊婦の腹が大きく裂けて、露出した大小の腸がそこら一面に散らばり、然もその先には胎児が転っているのだ、何というむごたらしい死体だろう、思わず釘づけされたように、一同その場につつ立ったまま動くこともしない。この死体を収容し、黙々と、だが元気一杯に作業を進め、ある大きな建物の向う側に出た我々の目前に、実に驚くべき光景が展開された。烈しい爆風に吹っ飛ばされたのだろう、建物的一方に数百或いはそれ以上もあるか。『ユデ蛸』のような裸体の死者が見上げるような高さに果々と折り重なっているのだ。その殆んどが満足な格好をしておらず、硬直した体にふくれあがった唇は南洋の土人を彷彿させるものがある。両手を広げた者、エビのように体を折り曲げた者、両足の間から頭がのぞき、人の頭をふみつけ、逆立ちしたり、仰向に或いはうつ伏せになっている。これは現実の姿なのかと思わず類をつねりたくなる。ホーッとため息のような声が一同の唇をついて出る。何とも凄しい光景である。

この時、身内の者でも探すのか、そこここに転がる死体をあらためていた三人連れの男が近づいて来た。山のような死体の前に立ち、何事か話合っていたが、やがて端の方から次々と調べはじめた。しばらくすると、どうもこれらしいと言って、道端に運び出したのは、年令はおろか、男女の別さえつかないような全身赤黒く焼け爛れた死体である。まったく火傷の程度から格好から酷似したこの死体の群れに求める死体があったとしても、見つけるのは不可能だと思っていた我々の予想は見事にくつがえされてしまった。同時にたえようのない感動の湧きあがるのを覚える。

元気のない足どりで担架をかついで行くその人達の後姿を見つめる一同の表情は複雑だ。作業を続けるうちにふと物蔭に勤めく人の姿が見えた。行っで見屋と髪をボウボウと振り乱し、ほんの申し訳程度のボロ布を身にまとった一人の女が坐っている。我々が近づくと、急に空を仰いで、空襲!!空襲だ!!空襲!!と叫ぶ。突然襲いかかった原子爆弾の炸裂に発狂したのだろうか?戦慄を覚えるような恐怖に怯えた顔が痛ましい。近くには手足をちぢめ、頭からつつ込むような格好をした幼児の死体が黒焦げになって転っている。到る所、目に入るものはすべてこれ修羅の絵巻である。今しも軌道を横断しようとする、急にむせび泣くような呻き声が聞えてきた。半焼のまま立往生している電車の中をのぞいてみると、車掌服をつけた若い女性がうつ伏せに倒れている。車内は乱脈をきわめ、あたりには綿のようなものが散乱していて、負傷者が苦しみ反転するからであろう。その首にも一様こからみついている。ウーンウーンと蒼ざめ、苦痛にゆがむ顔。通りかかった一般の救護班に後事を託して再び作業を続ける。

小休止の命ありて早速水を飲みに行く。営内の炊事場、洗面所跡にある水道のまわりには、水を求めて集ったのだろう、どの水栓にも五人から十人位の焼け爛れた死体が折り重なるようにして倒れている。死体を取り除こうとしても、それぞれの手足がからみあって仲々はずれない。無理にほなそうすると皮膚がペロリとむける。ようやく除いて水にありつく。此処の死体は殆んど軍人である。

強烈な太陽の光線を浴びて転がる死体の周囲には、特有の悪臭が物の焦げた匂とともに漂っている。上半身はユデ蛸のように焼けているが焦げた軍袴をつけ、グジャグジャにそして細くなった茶色の長靴をはいた将校の死体、かたわらには指揮刀が転っている。水に漬けたあと天日で乾かしたように硬直した軍靴のみをつけた裸体の兵士、軍刀、帯剣、飯盒、食器類が散乱している。一尺四方のトタン切れを頭に乘せた男が、破れた水道パイプから流れてくる水溜りに両膝を立て、膝の前に両手を組んで坐っている。勿論死んでいるとばかり思いこんでいた我々は、何気なくその顔をのぞきこんで思わずその場に立ちすくんだ。目玉が動いたのだ。生きている。何という痛ましい姿であろうか。全身赤黒く変色し、足には凄まじい傷口がいくつもあり、一糸まとわぬ裸体なのだ。表情もなく、この世のものと思われぬ物凄い姿でありながら生きている。正に生ける屍の姿だ。畜生!! 目にはいるものすべて目を覆わしむるような悲惨な状況に仇敵必殺の憤怒の情いやが上にも燃えあがる。素裸のまま仰向に倒れている一兵士の胸には両手の指を組み合わせるようにして、銃剣がしっかりと抱かされている。強い太陽の光線を受けた白っぽい目はギラギラと輝やき、両のまなじりからは、涙にも似た液が絶えずタラタラと頬を伝い、耳・口・鼻からはドロ黒い血が生物のように流れている。如何にも無念そうなその形相は、飛上るような激痛をグッとこらえているようでもあり、或いは又、限りなき恨みを天に向かって訴えているようでもある。ただ悲哀のみがヒタヒタとそのまわりをつつんでいる。

見はるかす焦土の彼方まで陸続として横たわる大量の死者を見つめ乍ら、撫然として腕をくむ。兵器の発達した近代戦が人類の消耗を要請し、ふたたび起つ能わざるような災害をもたらすことも知り、これまで烈しい空爆の跡も幾らか見てきた我々であるが、今、目の前に見るこのような悲惨極まる大殺戮の場面に遭遇したのは、聞くも見るもまったく始めてである。ただ空想として説かれ記憶されてきた地獄の世界もかくやとばかりに思われる凄じい修羅場が現世にも存在することが、はっきりと実証されたのである。

あたかも、沸騰するかまに投げ込まれたかのように、全身火傷に焼け爛れた幾万、幾十万の死体。あらゆる苦しみと悲しみの入り乱れて天地を震わす阿鼻叫喚の負傷者の群、祖国の勝利を祈り、東洋の平和を望みながら、変り果てた姿となって焦土に横たわる多くの死者を前にして、やる方なき痛恨の情と共に胸にこみあげるものは、ただ断腸の思いである。

練習部本部から中隊長が帰って来た。忽ち指令がとぶ。我々は牛の焼却を命ぜられた。現場に行ってみると、牛は崩れ落ちた壁土に殆んど埋まっている。堀りはじめると糞袋でも破れたのかムシ焼みたいになった糞が、驚く程大量に出てくる。実に何とも言えぬ悪息だ。ようやく掘りおこし、その上に丸タン棒や板切れなど積みあげて火をつける。最初は湿気をおびているため、なかなか燃えず黄白色の煙が濛々齡と立ちこめ物すごい悪息に、むせかえるようだったが、そのうちブスブスイぶりながら勢いよく燃えはじめた。骨を埋めて帰途につく。

一、八月八日

朝食後、本部(中隊)を中心として、まわりに各小隊毎に掘立小屋の組立てにかかると。材料部附近に散乱する丸太・板切れ・トタン等を利用して忽ちできあがる。強風の場合を考慮して、屋根の上に焼け奄線を縦横に張りめぐらす。中は板切れの上にムシロを重ねた。免かきは至って貧弱だが大丈夫。これで雨露だけはどうやら防げる。

昨日に引続き死体処理にでかける。そこここに大小の金庫の転っているのが目につく。棒で叩いてみると、一つの金庫のトビラがあいた。中には札束がぎっしりつまっている。如何に堅牢に作られていても、この大火災の炎を浴びているのだ。つい興味を覚えて、きれいな札束の山にそ一つと指をあててみた。するとどうだろう。その部分がポコリとへこんでしまった。形だけはきれいに残っているが、熱気で灰同様にこもろくなっている。トラックがおしつぶされ、自転車がアメのように曲っている。

ドアがはずれて、そこここに赤茶けた鉄骨をのぞかせて、立往生している電車がある。通勤途中の人で満員だったに違いない。電車の中は吊り皮につかまったり、窓際に寄りかかるようにしたりして死んでいる人が何人かいる。ドアから逆さまに落ちかかっている死体、中でも一人の男は片手で吊皮をもち、立ったまま死んでいるが、もう一方の腕だけが燃えて、ヒジから手首あたりまで、既に白骨化している。しかもその先には真白なハンカチでつつんだ弁当箱がぶら下がっている。奥をのぞくと、多数の男女が折り重なるようにして倒れている。

営庭の入口附近で、ニタニタ笑っている負傷者が目に映る。近寄るとサッと逃げる。狂人だ。散々手こずってようやく捕まえる。道路の中央でオートバイにまたがったまま死んでいる人がいる。両手でハンドルを握り、両足は地面につけている。車体は燃えさびたようにたっている。焼け爛れた死体を乗せたまま、根が生えたように立っている。オートバイは引けども押せどもビクともしない。パンクした前後の車輪と両足が地面にぬいつけられたように密着している。原子爆弾の炸裂と同時に、物凄い熱線が放射されたものと思われる。地面にくっついた部分が溶解して固まったものだろう。丸太・棒を車体に差しこみ、肩にかついで持ちあげようとしても、ビクともしない。よしそれならと、三人がかりで持ちあげると、バリバリバリッ!!音をたてて、やっと離れた。地面のくっついた部分は、黒くシミのようになっている。ハンドルを握りしめた指を離そうとしても、ズルズルと皮がむけるだけでとれない。やむなく一同で車体も入とも持ちあげ、道端に運ぶ。

午後、営庭に横たわる死体を数える。一列横隊にたらんで、そのまま真直ぐ歩を運ぶ。一人で一〇〇体も数えた頃、突如、空襲警報のサイレンが唸りだした。頭上にかすかな爆音を聞いただけで、間もなく解散となる。他の現場から保った戦友に、広島にあった特幹の通信隊が全滅したと聞き、暗い気持ちに襲われる。広い営庭も数知れぬ程の死体の放つ紛々たる臭気が満ち溢れている。強い太陽の光線をうけて半開きの口からは、無数の泡がブクブクと沸いたっている。これ等の

死体の上を早くも飛来した糞バエが、うなりを立てて群れ飛んでいる。四、五百体も数えたらうか、途中で再び死体の搬出作業にかかる。営庭の横につらなる石垣に沿って、防空壕が設けてある。念のためもぐってみると、鍋・カマ・布とん・衣類・大小のビンや米のいっった袋などが散らかっている。奥の方をのぞくと、人が倒れている。見ると衣類はきちんと身につけているし、どこにも外傷もない。煙にまかれて窒息したものでしょうか？戦友と二人で天井に頭をぶちつけ乍ら、外に運び出す。作業終わって帰途につく。途中いつの間にできたのか、簡単な公衆便所が建っている。急を聞いてかけつける人達の多くなった時、これは大助いだ。露営を始めてから、不寝番は忘れたように実行されなかったが、次第に備品も増えて来たので、愈々今日から実施されることになった。第一回目の不寝番を命ぜられ、戦友と本部前に立つ。時折り、吹きくる風がむせるような屍臭を運んでくる。

一、八月九日

起床ッ!!大声一下、ガバとはねおき、素早く服装を整えて直ちに整列、露営とはいえ、平常と何等変らぬ厳しい朝の点呼だ。早くも練習部本部の自動車が飯を運んで来た。食事終るや、担当区域等が指示される。わが小隊は死体焼却だ。現場に到着すると、連日の猛暑に早くも腐敗しはじめた百余の死体が物凄く悪息を放っている。片手に日傘を持って仰向きに倒れている若い女性の両の目玉が飛びだしている。驚く程の大きさだ。腹が破れて露出した大小の腸が、海黄白色の乾いたハダをみせて、そこら中に散らばっている。

横を向いて倒れているこれも若い女性の指先に、真っ赤な指輪が輝いている。防空頭巾をかぶったまま倒れている婦人、赤黒く焼けて硬直した特徴のある死体にまじり、衣類を身につけているこの人達は、割合見易い方だが、何れも目は白く混濁し、太陽の光線をうけて異様に輝き、半開きした口はブクブクと泡立っている。腐り始めた死体は、あつかもにくい。持とうとすると、ペロリと皮がむけて手がすべる。これ等の死体を、金網を敷きつめた防空壕に積み重ね、その上付近近に散乱する丸太・板切れ等を山のように放りあげ、火をつけると死体特有の臭気を発しながらジューツ、ジューツ!!黄色い煙を立てて火勢は次第に強くなる。やがて下の方にある死体が燃えつきたものか、時々ドサッと上にある死体がずり落ちる。と、三人そこに残り、他の者は、そこら一带にまた収容しきれぬ死体がないか手分けして探すことになった。いたいた、石ころや板切れなどに埋った五、六人の死体を発見する。

「おい此処にもあったぞ。」戦友の声にかけ寄ると、蓋のとれたマンホールの中に四、五人の焼死体が転っている。拾ってきた電線を穴にたらしてもらい、戦友と二人で穴に降り、死体を電線でしばり引揚げにかかると、硬直したような死体は一見軽そうだが、やはり重い。首がグニャグニャして扱いにくい。死体の引揚げを漸く終り、他の死体と共に燃える防空壕にほうりこむ。焼却は案外早く終わった。金網の上は、まさに白骨の山だ。火勢が強かったので、焼けすぎたようだ。トタンを箱のように叩きまげて穴の隅に置く、交代しながらエンピで骨をすくい入れる。折しも通りかかった一人のお婆さんが、「兵隊さん、その骨を少し分けてくれませんか……」と言った。お婆さんは純白の布でつつんだ箱を首に吊っている。「あげるのはいくらでも、誰の骨だか分かりませんよ」と言うと、「この辺に、子供の勤めていた会社があったのですが、幾ら探しても死体が見つかりません。かまいませんから分けて下さい。子供と亡くなられた方々の冥福をお祈りしましょう」。重ねての懇願に一握りの骨を分けてやると、何回もお礼を述べて立ち去る。老婆の後姿を見送る一同の面上には、更に烈しい闘志がみなぎる。骨を入れ終り、容器をきれいに埋めて、もう一度担当区域を丹念に調査する。突然サイレンが鳴りだした。空襲警報だ。瞬間フテフテしい反抗心がムラムラと湧きあがる。溶解して奇妙に固まった固まったガラスや、瓦の破片が散乱する建物の前には、最近召集されたらしい若い兵士が整列している。建物の入口には赤十字の旗をかかげ、負傷者の仮収容所にあてられている。焦土特有の匂いと、死体の臭気、それに菓局品の匂いのまじる中で、負傷者の手当にあたる衛生兵は、多忙を極めている。横にまわると通行人が黒山のようにたかっている。何かと覗いてみると、大きな亀裂を生じた壁に、市役所の係員であろう、判明した生存者と死亡者の氏名を書きつらねた紙を貼りつけている。行方不明の肉親、或いは知人を探す人達にとって、またとない広報(写真・第・第一巻二〇四頁)である。このどさくさの最中に懸命に活躍する吏員の努力の程がしのばれる。広報の氏名を追う市民の表情はきびしい。どうか無事であってくれ、祈るような、或いははるようなまなざしで、われ先にと前に出ようとする。あった!!思わず声をあげる人、肉親の名前を生存者欄に見つけて勇気づいたか、そそくさと立ち去る人、求める人が死亡者の中にあったのか、或いは何れにも見あたらないのか、ションボリと左右の人達を見ながら立ち去る人等、さまざまである。そのほか目につき易い箇所には、手の届く限り隙間もない程、ケン炭・白、赤のチョークで「父母健在、どこに在りし。」「何某ま……に在り発見次第すぐ来たれ。」「……は無事……で待つ」等、父母兄弟知人の安否を気づかう文字が雑然と書かれている。帰途につき、西練兵場横を急いでいると、左手の方で土を掘っていた一人の将校が呼び止めて、「見習士官。候補生を一名貸してくれ」と言った。指令されて早速将校の下に駆けつける。上等兵の従者がいる。「ご苦労だが、ここらを掘ってみてくれ。実は俺の家族が埋ってしまったらしいんじや、よく分らんが此処らだと思うんだ。」そう言って、中尉は上等兵が掘りかけている穴を指さした。先ず掘りかけの穴を、更に堀り下げ、そこを中心にもわりも掘ってみるが、骨らしきものは一片も出ない。出たのはへしやげたヤカンとニュームの鍋だけ。負傷したのか、片腕を首に吊っている中尉は、黙念として穴を見つめていたが、「候補生まで頼んで探したのに出ないようでは、とても望みがないね。ヤカンのみからでも出たのが、せめてもの慰めだ。」そう言って、上等兵を振り返った。悲痛な中尉の胸中が察しられる。上等兵は同情に堪えぬもののように、だまって頭を下げた。暫時穴に目を落していた中尉は、急に思いだしたように、「おお、ご苦労だった。どうもありがとう。俺は北谷山病院の渡辺中尉だ、帰ったら小隊長によりしく言ってくれ。」そう言って再び目を穴におとした。しばらく行って振り返って見ると、矢張り元の位置に立ったまま、上等兵と話している。本部に到着。小隊長に報告して、小屋にとびこむと、「ご苦労!」戦友はすかさず労をねぎらってくれる。

一、八月十日

あちこちに憲兵が立って道行く人に新聞を配っている。附近の壁にも朱線を入れた各社の新聞が何枚も貼ってある。近づいた我々の目に飛び込んだのは、「長崎にも新型爆弾」の大きな見出しだ、瞬間、懐しき故郷の姿が脳裡をかすめる。ああ長崎もまたこのような悲惨な廃墟と化したか。おのれ憎き奴!!切齒扼腕するも空しく、じっと目を記事にとめたまま一同化石のように動かない。市内出身の戦友は、われわれ以上に深刻だ。林田・小林両候補生は、宣託線の架設係として金

丸兵長の指揮下にはいり、他の者は死体処理などに従事する。リュックを背負い、トランクを下げた人達がせわしそうに行き来する。肉親や知人の安否を気づかって、入市した人達だろう。被害の余りにも大きいのに驚嘆の目を見張っている。あちこちの電柱などに貼られている『広島市民けっ起せよ。船舶司令官』のビラに対しても一瞥するだけで、市民の表情には、何の変化もおこらない。原子爆弾の投下と共に彼等は笑いを失ってしまった。時折もらす微笑にも言い知れぬ悲しみが口辺に漂っている。

昼食後、村田候補生達と交代を命ぜられ、廃墟の中をよぎって行く。まだ収容し切れぬ死体が、そこそこに転っている。目的地に到着、交代する。練習部本部から応援に来た斉藤軍曹の指揮をうけ乍ら電話線を延ばしてゆく、障害物を除き、或いはさけながら、漸く目的地に到着する。作業終了、カンパンをかじり乍ら雑談していると、本部から命令が送られてきた。「石塚隊を除く他の中隊は、直ちに帰営準備をなし、本日中に帰営すべし」という。早速、丸山中隊に伝令すべく戦友と出発する。途中、某医院近くの倒壊した塙の下には、休憩していた動員中の女学生十数人の死体が埋っていると聞き、暗然たる気持ちに襲われる。命令を伝え、引き返し、途中でふり返ってみると、兵達があわただしく装具を整えている。帰着すると、金丸兵長が任務終了を伝える。漸く架設係から解放されて帰途につく。

夕食後、馬の死体焼却を命ぜられる。小隊長の引率で現場に行くと、すぐ近くに、西警察署の建物(商工会議所跡か)がある。早速道端に横たわる馬の焼却にとりかかる。やがて物すごい臭気を発し乍ら燃えはじめた。馬を焼き乍ら、あたりを眺めていると奇妙な物が目に映った。何だろうか？しばらくすると、手製の車をつけた木箱に人が乗って、両手で地面を叩きながらやってくるのが見えた。四十年配の男である。イザリだろうか？あたりをキョロキョロ見まわし、休みながら近づいて来た。どこからやって来たのか。あの体でよくも無事でいたものだ。飄々とした顔で箱を動かすこの人物が、凄じい焦土にそぐわないような気がする。丸山見習士官が、川を流れる死体の引揚作業に来てくれと、応援を求めに見えた。すぐ近くの川だ。行ってみると、焼け爛れた焼死体が浮き沈みしながら流れている。早速、竹竿や棒切れで引寄せ、一先ず岸に穴を掘って埋める事にする。岸を左右に走りながら、作業を続けているうち、何かにつまづいた。見ると、砂に埋った死体の両手が、ニョッキと突きでている。あたかも虚空をつかむようなその格好は如何にも無気味だ。川を流れる死体は、橋脚にあたると、まるで一本の棒杭にも似て、一瞬グッと止まり、半回転しながら、すぐまた何事もなかったように静かに流れて行く。作業を終り、再び馬の焼却が続いていると、警察署から一人の警官がやって来て、小隊長に話を始めた。かたわらで聞いていると、原子爆弾の炸裂した頃、海軍に籍をおく或る皇族の方が自動車でこの付近を通過中、行方不明になられた。何か遺品でもないか、探すようにという連絡があったので、今から探そうと思うので協力してもらえないか、このような主旨である。ホー!!一同驚いたようにお互いを見まわした。幸い月夜だ。小隊長の命令で直ちに警察署附近を手分けして探す。将校なら軍刀があるはずだ。だが、幾ら探しても何も発見できない。橋の上、川岸近くの障害物の中、ヤブの中、かなり遠くはなれた所までくまなくまわり探す。文字通りシラミつぶしの搜索だ。布切れを見つけて、ハッとすると、あかりにすかしてみると別のものだ。どの位の時間が経ったろうか。幾ら探しても遺品らしき物は一片も出ない。やむなく搜索を打ち切り、現場に戻る。馬も殆んど焼けて、頭だけがグロテスクな格好で転っている。ひとしきりの雑談も終ると、交代で仮眠する事にする。連日の奮闘につかれた戦友が早くも軽いイビキをたてはじめた。

一、八月十一日

自動車のエンジンの音に目を覚ます。空にはまだ星がまたたいている。馬の骨を埋めて帰途につく、午前中、死体の搬出、障害物の除去及び焼却作業に従事する。午後、帰営準備をなし一路宇品に向う。原爆炸裂から早くも六日目を迎え、市外から駆けつける人の数も急速に増してゆく。一時は死の街と化したかと思われた焦土のあちこちに、焼けたトタン板等を利用した掘立小屋が現れはじめた。宇品町にはいると、瀕死の状態にあるような負傷者が虫の這うような足取りで歩を運んでいる。一歩進んでは倒れ、ようやく立ちあがったと思うと、二、三步も進まないうちにバツタリとつんのめって、そのまま長々とびてしまう者もある。素裸でユデ蛸のように変色した人、ホコリで黄色く見える髪は、ボウボウと乱れるに任せ、目を宙に据えて、口は半開いたまま放心したような表情で、トボトボと歩く裸の婦人、自分もすさまじい火傷を負い乍ら、肩を貸すつもりだろう、これもユデ蛸のような男に、だきつくようにして介抱しながら歩く人。道端に坐り込んだまま、放心状態にある人。歯をむき出し、足を引ずりながら歩く人。これらの殆んどの人々は、手と言わず、足と言わず、バリバリと大きく裂けて周囲がめくれあがった傷(やけど)を負っており、足の傷口には、白いウジが無数にうごめいている。

体中が焼け爛れて赤黒く変色し、一糸まとわぬ負傷者が呻き泣きながら、三々五々と歩いて行く。どこか遠い国で、異民族の行列を見ているような錯覚にさえとられる。然し残念な事に、この悲惨な恐ろしい行列は、現実の姿なのである。栈橋に到着すると、此处にもまた二人、三人と肩を寄せあい乍ら坐り込んでいる。我々が通ると、無表情な顔を力なく向ける。だが、その目の色には、すがるような思いが、かくされているような気がする。

基地に到着すると、待ちかまえていた残留の兵士が、ご苦労ご苦労と心から労をねぎらってくれる。やがて夜気を震わして消灯ラッパが鳴りだした。声高く市内の模様を話していた戦友達も、何時の間にか静かになった。

一、八月十二日

起床!!叫咤するような不寝番の大声に、ガバとはねおき、服装を直し、毛布・蚊帳をたたみ、直ちに舍前にとび出す。何時もながら、朝の点呼は実に活気が溢れている。午前中、内務班の整理、午後は休養だ、夕食後、広島再出動の命令が下る。瞬間生地獄さながらの市街が目に見え、同時に勃然たる敢闘精神の体内にみなぎるを覚える。

一、八月十三日

出発準備まっくとなり、緊張した面持で、待機する一同に漸く命令下る。軽快なるエンジンの音は、われらの活躍を期待するものの如く、艇上飛沫をあげて猛然と滑り出した。上陸するや、息つく間もなく前進が開始される。目的地は旧中隊本部跡、市民もようやく生氣を取り戻したか、何となく復興の息吹きが感じら

れる。目的地に到着すると、本部を貯金支局の四階に置くことに変更になり、再び前準備が開始される。目指す貯金支局は焦土の中で、ひときわ目立つ高層の堂々たる建物だ。割当てられた室内の掃除が終ると、各小隊毎に作業の担当区域が指示される。われわれは水道のパイプ修理だ。破損して洩れる箇所はコルク栓を打ちこむだけだから作業は極めて簡単だ。障害物が取り除かれて、広くなった道路を歩いて行くと、焦土の中に不思議な煙突のみが、枯木のように立ち残っている。無事だったのだろう。早くも縄張りして「立入り禁止」の札をぶら下げている所もある。水道の破損箇所は至るところにある。コルク栓はいくらあっても足りない。止むなくパイプを折り曲げて洩れを止めてゆく。作業の性質上、活動範囲も広がる。負傷者を励まし、直接死体に触れながら行なう。息づまるような作業と違って、如何にも地味で単調な軽作業である。ともすれば、ゆるみがちな体に気合を入れ乍ら、どこまでも歩く。終日この作業に従事、夕刻本部に帰る。

一、八月十四日

気合充ち満ちた朝、朝点呼終りて、本日の作業が伝えられる。われわれは昨日に引続きパイプ修理だ。空は文字通りの日本晴、水道関係の仕事をしていたという四十位の臨時召集兵が派遣されて来た。真夏の太陽の直射を浴びながら道沿いに、或いは焦土の中にはいりこみ、水洩れ箇所の目につき次第コルクを打込む。新聞の記事には今後七〇年間は、草木も生えず砂漠のような不毛の地になる。と、解説してあったが、どうやらこの予想は覆がえされたようだ。そここの皮を焼かれた樹木の幹に、目にしみるような青い芽がのびていて、自然の逞しい生命力を感じさせる。やがてある建物(最初芸術館と思こんでいたが後日住友銀行と知った。)の入口附近の壁に、人の影が黒く鮮やかにうつっているのが目についた。何故だろうか？石段をのぼり近づいて見る。トビラのあくのを待って、壁にもたれて坐っていた人が、原子爆弾の強烈な熱線をまともに浴びて出来たものだろう。死体の代りに影が残る。こんな不思議なことがあるのか。じっと見つめっていると、今にも壁のうしろから本人が現れてきそうな気さえする。それにしても底知れぬ威力の下に、一瞬にして広島を死の街と化さしめ、しかも、これだけ鮮明な影が残る程の強烈な熱をもたらした原子爆弾は、一体どんな性質を持っているのだろうか？向うには、丸い形をした屋根が、無残にも焼け爛れて赤くなった鉄骨を白日の下に晒している。召集兵から産業奨励館だったと聞く。昼食後、今日から実施されることになった衛兵勤務の第一回目に勤務することになった。道路をはさんで両側に立哨する。支局の玄関に立つと、道路の向う側の立ち残った門柱に「広島文理科大学」の文字がくすんで見える。局の職員もボツボツ復職しはじめたようだ。勤務を終り、屋上にあがって見ると、焦土と化した市街が一望のうちに眺められる。広漠たる焦土に打ち重なる瓦礫の山が、果していつになったら取り除かれるであろうか。

一、八月十五日

厳しき中にも活気溢れる。朝の点呼終了。やがて昨日に引続き、パイプ修理に出かける。日を重ねるにつれて、歩きまわる範囲も次第に遠くなってゆく。まだどこかに死体が埋まっているのだろう。ムツとするような一種独特の悪臭が鼻をつく。昼食をすますと再び出かける。一通り作業を終り、エンピを返納すべく戦闘司令部に向う。天幕で急造した司令部には、多くの将校が働いている。エンピを返納し、近くの民家の軒下で一息入れる。地獄のような市街の惨状をよそに、樹上では蟬がやかましく鳴き立てている。此处で召集兵とも別れて本部に帰る。今度は戦友と警備にでかける。ドサクサにまぎれて悪事を働く不心得者が出没すると聞く。我々の警備も、盗難予防が第一の目的だ。暫時、日陰にあつて、時折、吹き寄せる風に頬をなぶらせていると、風に乗って強い屍臭が、漂ってくる。何気なく近くの防空壕をのぞくと、ムツとするような屍臭がたちこめ、男の死体が、一つ転っている。既に腐爛状態にあるのを地上に引ずりあげる。折よく通りかかった市民の救護班にあとを頼み、再び警備を続ける。夕陽が沈むと、いつのまにか降りそそぐように夜の帳がおりてゆく。

そここの堀立小屋から、夕餉の煙が立ちのぼり、子供を呼ぶ父母の声が聞える。「ご苦労さんです。」心から労をねぎらってくれる市民に対して、われらの責務愈々重大なるを痛感する。不意にわれわれは異様な光景の出現に思わず偶然として目を見ひらいた。見渡す限りの焦土に、今、幾千、いや幾万、幾十万にのぼるであろう数知れぬ燐の大群が、忽然として、青白き光を放ちながら、明滅しはじめたのである。幽魂漂うその光景は、慄然として思わず肌に粟を生ぜしめる。じっと見ていると、現実の姿ではなく、何処か別世での出来事のような錯覚にさえとられるのである。高さは、二十五糎から三十糎、氷にも似た冷たい光を放ち、トロトロと燃えては消え、消えては燃える燐の群は、万斛の恨みのみを乍ら、悲命に倒れ去った人々の、やるかたなき痛恨の叫びにも似て悲しく、成仏しきれぬ魂が、無理矢理に奪いとられた屍の周囲を彷徨し、悲しき死体の存在を告げんとしているようでもあり、誰にぶちまけようもなき烈しい怒りと、言語に絶する苦しみを抱き乍ら、その悲運に哭いているようにも見える。

驚愕から悲しみへ、そして憤りに…。われわれと共に、そこここで見つめる市民の表情は複雑だ。トロトロッと燃え上った燐が、近くの燐とくっついて急に大きく、又、はなれてスーッと消える。次から次へと、小止みたく繰り返される。燐の明滅は、恰かも死の街「広島の悲歌」をうたっているようにも思えるのであった。

三〇

岩野志

(当時第百第十教育隊・特別幹部候補生)

幸ノ浦基地において、夜間訓練を終り、朝食をすまして就寝したとき、突如、閃光が起った。約三十秒から一分間後に爆発音がきこえると共に、兵舎に激震があった。何事が判らないまま、午前十時ごろ、広島市救援の出動命令が出た。直ちに舟艇を駆って、我々は宇品に向った。

宇品から御幸橋を経て、鷹野橋に至り、さらに水主町の県庁付近に前進した。我々救援隊は、市内を貫流する七本の川の、川と川のあいだの区域を作業分担し、それぞれが負傷者優先に救護作業をおこなった。死亡者は一ヶ所に集めて焼いた。

我が救援隊は、爆心地の中島地区(元安川と本川との間の区域)から、下流の吉島町の刑務所北側を担当したが、八月六日から一週間は負傷者の救出作業と死体

の火葬作業をおこなった。

八月十五日、終戦になってから一週間は、雑多な残骸で埋まっている道路の開通作業、及び倒壊建物の清掃作業などをおこなった。

他の戦隊員の一人が、踏み抜きをしたのが直接の原因で、死亡したため、それまで船舶靴を着用していたのが危険とされて、以後は軍靴を着用して作業をおこなった。

この救援作業後、幸ノ浦に帰り、下痢のため一週間入室したが、現在に至るも消化器系が弱くて太らない。

三一

榎本武次

(当時海上挺進隊第四十八戦隊・上等兵)

我々は、江田島幸ノ浦基地から出動した。六日の朝、基地内で閃光を認め、数秒後に一大音響を聴取した。異常を直感して、すぐに防空壕に待避した。防空壕は海岸に沿う兵舎のすぐ裏の小さい丘陵に三、四個所設けられていた。人間が立って自由に出入りできる大きな壕である。万一の場合には戦闘指揮所にも使用できるような洞窟である。

いったん壕に入ったが、何事も起らないので出てみると、広島の上空に巨大なキノコ雲の上昇しているのが望見された。

その日(六日)の午後五時か六時ごろ、出動命令が下り、我々は舟艇に乗りこみ、宇品に到着した。宇品に上陸して、その近辺の建物が多数半壊状態になっており、被害の大きさに驚いた。

救助作業を開始したのは、午後七時ごろからで、主として建物疎開作業に出動していた人々(大竹方面の人数)を救出した。全員上半身火傷で重傷者が多く、己斐方面の学校に運びこんだが、治療すべき医薬品は皆無の状態であった。

七日からは、紙屋町附近の工場跡で負傷者を救出するとともに、死体の焼却作業をおこなった。爆心地に至近のためか、死体のほとんどは、男女の性別さえ判らないという惨状であった。

十日ごろ、一応、幸ノ浦に帰隊し、翌十一日再び出動、こんどは八丁堀附近の負傷者の救出作業にあたり、十三、四日ごろ幸ノ浦基地に引揚げた。

三二

佐々木稔

(当時船舶練習部第十教育隊・一等兵)

江田島幸ノ浦基地の草深隊兵舎において、朝食後、突如、異様な閃光を感じたあと、大きな爆発音を聞いたので海岸に飛び出した。その時、広島市の上空にキノコ雲ができて、その雲が次第に巨大になっていくのが眺められた。

どうしたことだろうかと、皆であれこれ話しあっていたが、午後になって斉藤部隊長から命令が出て広島市の救援に出動した。

我々は幸ノ浦基地から舟艇によって、宇品に到着、宇品から市中まで徒歩で前進し千田町の広島電鉄本社(半壊)を救護本部とした。ここを処点にして、それぞれの分担区域に進入したが、私の戦隊は大手町一帯の区域で、まず負傷者の救出を優先的におこなった。焼け残りの戸板を拾って来て、動けない負傷者をこれに乗せ広島赤十字病院へ運搬したが、一方では、その橋(失名)の所から、大型発動艇に乗せて川を下り島の方へも運びこんだ。発動艇は、宇品の船舶練習部から出動したもので何度も繰り返し運んでいった。

六日は夜になると消火作業にあたったが、火道を切るために、半壊の家屋にロープをかけて、次々に倒していった。どこであったか学校の体育館が盛んに炎上していたのを思い出す。赤十字病院の北の方で郵便局があったのを覚えている。

七日、夜明けと共に作業を開始し、昨日に続いて負傷者を救出した。救出場所は、赤十字病院の北西の方面一帯で舟艇で島へ運んだり赤十字病院に運んだりした。赤十字病院は負傷者で埋っていたが、その中でみずからも負傷した医師や看護婦たちが、大活躍で応急治療をおこなっていた。

赤十字病院前の庭に、ドラム罐の重油があったが、一応負傷者の救出が終ってから死体の運搬に取りかかった。焼け残りの材木を集めて来て、その上に死体を積み上げ重油をかけて焼却した。

田舎から、肉親を探しに出て来た婦人が、自分の子どもを多くの死体のなかから見つけだし、遺骨を持ち帰りたいと申し出たので、この一体だけは別のトタン板の上に乗せて火葬したことがあった。また、ある寺の池の中にある死体を引上げる作業をしている時、その近くの防火用水槽の中に、母親と子どもが丸くなって入ったまま死んでいたのが忘れられない。

終戦後、復員してから眼底出血があったが、現在のところは異常ない。

三三 似ノ島にて

義之栄光

(当時船舶練習部、斉藤部隊・津留隊)

一、概況

(イ) 出動命令を受けた場所

江田島北岸幸ノ浦戦隊兵舎内

(ロ) 部隊員の様子

当早前十時から軍装検査正午頃広島を経て九州五島へ、出戦の内示を受け、最高に戦意が昂まっていた折であったから全員切齒した。まもなく軍装検査は一時中止、舎内待機の指示が出たように思う。しかし、広島被害を推定して、早期に偵察員を出し、又救援隊を組織して繰り出す必要ありというのが、兵舎での話題であった。

(ハ) 閃光と音響

小生は丁度、舟艇番で海上にあり(レ)艇の整備作業をしていたが、北方上空仰角五〇～五五度位のところに、突然、強いマグネシウム花火のような光があり、それがユラユラとおりて来て、約四五度位の高さの場所で、白が金色にかわり、ダイダイ色のような丸い火の王になった。「熱い!」と思った。暫時の後、強烈なしかも熱い爆風に叩かれ、つづいて間もなく、ズ・ズーンと鈍重な爆発音がひびき渡った。あらゆるものがビリビリと震え、ゴソゴソと小突かれたような感じであった。

二、出動の経路とその際の周囲の状況について

時刻ははっきりしないが、記憶の断片をつないでみたところから、当日午後、(レ)艇K-12号に四人便乗して宇品桟橋に向かう。桟橋は大変な混雑で、上陸困難のため東に向かう。上陸できそうな場所がなく、あまりの混乱と海岸に殺到する人波に上陸をあきらめ、金輪島・峠島を経て帰投する。報告は「広島は何しろ大変な被害で状況の正確な把握は不能、上陸も困難、海岸には被災者が雲集、市内の救護収容施設は殆ど壊滅又は使用不能のため、海上輸送によって周辺の収容可能施設に極力輸送中。」ぐらいな事しか出来なかった。

建造物などの被害よりも、人間の被害の大きさと悲惨さに気をとられて此頃あいまいになる。その夜、広島は炎々と燃えつづけ、北の空は真っ赤。翌朝食後、五十三戦隊を二つ又は三つに分けて小生の編入された分隊は、大発動艇に乗り北上。服装は体操衣袴。似ノ島の検疫所桟橋につき、構内にはいってすぐ左手の建物に拠点をおき、向い側(桟橋から上って右側にあたる)の舎内に収容されている患者の看護と次々に桟橋に着く船や舢舨からの患者を担送、又、誘導する。これが作業のはじまり。被災者の輸送には機帆船や舢舨が多かったが、中に一隻りっぱな客船が混っていた。「フクセイ」という船名であった。

三、活動場所とその状況

八月七日、患者の看護と担送、そして生者の氏名・住所などを聴き取り、荷札に書いて身体のだこかに結びつける。内服薬はなく、外用薬としてはマーキロ液と唾鉛華胡麻油ぐらいしかない。食器とコップは孟宗竹の輪切り。ハエがすこぶる多い。患者も飯を食い、水を呑み(おおむね死水となる)、ハエを追ひ払う。目玉の動き、目の光りが止まった時が「死」を迎えたときらしい。死体は次第にふえて置場なくなる。桟橋から海岸伝いに南へ三、四〇〇メートル行ったところにある厩舎へはこぶ。作業止めがなかったのは、夜八時頃であった。ロウソクをつけて部隊から運ばれた握り飯を喰う。汚れた被服の代りはない。手を洗う水も不便な島だった。

八月八日、朝から死体運搬。死体からは身元の荷札と何か遺品になりそうなもの(毛髪が多かった)を封筒に入れて、それに氏名を書き、本部(?)へとどける。又、一〇体かそこらは同じ穴の中へ材木を入れ、死体を並べて、その上に麦ワラやタタミ、材木をつみ上げて火を放って茶毘に付し、その骨灰をとりあつめた。死体そのものは、最初の一、二体は火葬窯で焼いたが、そのあとは防空待避壕を少し掘りひろげて、一穴当り六〇～八〇体配を入れ、上に土をかけて土饅頭とした。それでも間に合わなくなると、最後には役で重ばれて来た死体を南側の崖に穿った横穴待避壕の中へ直接担ぎ込んだりした。穴の中には死体を狙って小さな赤い陸蟹が沢山いた。夕方、離家のようなところで死んだ吉成弘陸軍中佐の死体を棺に入れて運び出した。何でも朝鮮の李王家の中のどなたかの侍従武官だったとかで、拳銃で頭部を撃たれたと言う話であった(人に撃たれたのでなく自決)。その頃、火葬窯の中では、鍋島大尉と某下士官(伍長あるいは軍曹)の、二体が煙になっていた。この夜もロウソクとランタンの灯でおそくまで作業をした。

八月九日、午前十時頃迄作業をすると、皆のびてしまった。昼前、部隊から迎えの大発動艇が来て、一旦幸ノ浦へ引揚げた。交代が出向いたかどうかについては不詳。その夕方から小生は高熱を發し寝こんでしまう。翌夜だったと思うが、軍医の診察を受けると「破傷風」の疑いありという事で、夜中、青森県北津軽郡鶴田町出身奥瀬勇一候補生殿の付添いで広島市の赤十字病院へかけこむ。そのまま入院という事で、小生の救護・死体処理作業はそれまでとなる。この間、日時不詳たるも広島市へ行き、御幸橋付近で救護活動・焼跡整理などを半日位やり、過労で倒れたことがあった。

四、その後

赤十字病院は建物が糸巻型に変型し、窓はちぎれとび、階下は一般患者とハエの渦巻きで、気分の悪くなるような環境。小生は軍人の故をもってか階上に収容される。二階はハエもすくなく、悪臭も薄く、重症患者も少ない。破傷風ではあるまいという事で、二日程で退院、奥瀬氏と共に帰隊。しかし熱はあり、下痢は続き、全身から力が抜けて、何か重い病氣にかかったらしい感じが濃厚で、起きられるようになったのは十三日頃であったと思う。復員後、ひどい視力障害。毛穴からの出血、殆ど一年を周期とする発熱・発疹・下痢症状などが昭和三十二年頃までつづく。それが原爆症状であったか否かは不詳。昭和四十三年春、申請して被爆者手帳をうける。

三四

扇勇

(当時陸軍船舶練習部雇員・軍属)

私は、昭和二十年八月六日の朝、公用のために出て、舟入川口町の民家の中にて被爆いたしました。あの当日を思いうかべますと、生地獄とは、このようなことかと思います。小生も家の下敷きとなりましたが、ようやくの事にて這いだし、すぐ舟入本町五間道路から住吉橋・御幸橋と渡り、部隊に帰隊いたしました。部隊では、部隊・雇傭人全員が、負傷者の収容の用意で、いそがしく働いていました。また、午前十一時過ぎ、軍属には家族の安否をたしかめる様に命令があり、全員市内にいく途中、御幸橋にて負傷者を曉部隊自動車隊にて宇品船舶部隊並びに陸軍船舶練習部に収容する手伝いをする。また出勤は六日夕方に命令がでました。

翌七日、袋町の元精養軒一階に船舶練習部負傷者収容所が開設されました。

部隊が、宇品七丁目元大和紡績にありましたので、宇品電車通りから専売局前の御幸橋を渡ると、千田町では、赤十字病院・貯金局の建物が残っただけ、また市役所・浅野図書館・中国配電・精養軒など鉄筋ビルだけがのこって、木造家屋は全部焼け、死体があちこちころがって、まだ焼け残りの煙が上っていました。

革屋町附近や袋町精養軒に救護所を開設した陸軍船舶練習部(後西部八十七部隊)衛生班は軍医指揮のもとに、全身やけどした一般市民ならびに西部軍関係の兵隊達の負傷者を、一階広場に収容し、応急の手当をして自動車にて曉部隊に送り、曉部隊並びに練習部では患者が満員にて収容できないので似島に船にて送る等の活動を十日頃まで中心地附近にておこないました。

私は足と手に切傷がありましたが、それがなかなか治りにくいので、東京から医療班がこられましたとき、血液検査をしてもらった所、白血球が六、〇〇〇という事で、中心地にあまり出ない様に注意されましたから、其後は余り中心地を通らない様に宇品線を利用し、広島駅・横川駅経由で通勤いたしました。

三五

金子鉄夫

(当時曉部隊機砲隊・上等兵)

一、被爆直後二週間以内の状況

昭和二十年八月六日午前八時頃、広島市比治山にて部隊命令に依り、八月十五日頃迄、復旧整理作業に従事。

爆発による轟音を聴取した。

閃光を受けた人は隊にて五、六人いたが、一人は八月二十二日頃死亡。

一、広島市内は倒壊炎上にて、地上は煙雲に包まれ、何が何だかまったく不明。部隊の活動場所には死体だけ。

昭和二十年八月六日午前八時頃、比治山本町通りで行進中に投下され、被爆直後に帰隊。部隊命令に依り八月六日正午より八月十五日早朝まで野営しつつ、宇品町―千田町―小町―吉島町―紙屋町―松原町―大手町方面にて負傷者の救護、死体の処理、火葬、市街地の復旧整理作業に昼夜兼行に従事した。その後、八月十五日一時帰隊し、八月十六日より八月三十日頃まで連日、市街地の復旧作業等のため派遣された。その後九月十四日復員した。

一、直接原爆症状はないと思う。

特別被爆者健康手帳を持っている。昭和四十三年五月二十九日に健康診断を受けた時は

赤血球数四七〇万

白血球数六、八〇〇

血色素量一〇〇%

色素係数(ザーリー)一

判定異常なし

大体は健康である。

三六

荒井勇

(当時船舶通信補充隊・上等兵)

昭和二十年八月六日の朝、宇品から市電を利用し、千田国民学校へ帰途途中、御幸橋を渡る手前にて警戒警報解除を聞き、橋を渡って間もなく、突然に電気がスパークした様な光が目映った。電車はそのまま走りつづけていたようであった。電車が停まって車外に出ても何も見えず、目の前が明るくなった時は、広島電鉄本社の少し手前で停車したようであった。電鉄本社の建物は全壊を免れており、建物内から何人かの職員が表に飛び出してきた(女性が頭に日の丸のはち巻をしていたので乗務員と思う)。

私の本籍は、比治山の麓の曉第一六七一〇部隊(船舶通信補充隊)で、私達船舶特別隊幹部候補生(三期生)は千田国民学校の校舎を利用していた。被爆当時、私の乗った電卓には、約四〇〇人の候補生が乗っていたと思われる、私は乗降口近くの窓際に立っていて、右手の指二本火傷したのみであったが、正面に立っていた人は顔等を火傷した。

千田国民学校へ向う途中も家屋の倒壊がひどく、どの様にして学校に着いたか、今は思い出せない。候補生が当時幾人程残っていたかもわからず、校舎も全壊

していた。

私達が着いた時は、学校の前の公園(グラウンドとのこと)に、候補生の負傷者が収容されていた。また校舎の下敷きになっている候補生がいると皆が言っていたが、大きい校舎の梁の下敷きになっているため救出することができず、そのうちに火の手が大きくなり、遂に不帰の人となった(二期生で指導候補生故加納氏)。昨年判ったのですが、もう一人下敷きになり、救出された方がおられます(東京都在住の二期生指導候補生で円崎氏)。

学校を出て、御幸橋を渡り電車通り沿いに比治山の部隊(本隊)に到着したが、兵隊はあまりいない様で、兵舎は全半壊、負傷者が何人程度いたかも不明である。皆比治山に掘った洞窟や山頂に避難していたと思う。

私も、山頂で一夜を過ごしたが、当時、山頂には、多勢の兵隊や市民等が集っていた。被爆後何日目か忘れたが、その比治山から裏の鉄道(宇品線)を横断して仁保国民学校に収容された負傷者の看護をした。学校の破壊状況は半壊程度より少しよいと思われた。収容人員については記憶がないが、階下のどの教室にも、相当数収容されていた。被爆後の死者は、記憶では石綿・志村両候補生の二人だが、千田国民学校に残っていた候補生も多数死亡者が出た由聴いている。

九月十日夜、広島出発、十五日札幌着。現在は身体には異常がない。

三七

岩下一夫

(当時陸軍船舶部隊・見習士官、中級航海長)

暁部隊の輸送潜航艇は二五〇トン、乗組員二五人。八月六日朝は、一隻だけ運輸部岸壁に接舷していた。松山沖へ訓練に出るため、出航用意で艇長など五人、艇の司令塔上に出ていた。艇内には二〇人入っていた。

爆音は聴いた記憶もなく、落下傘・照明弾的なものも見なかった。見張りが二人立っていたが、何も気づかなかった。

司令塔の上でピカッとして、熱くてかなわぬので、私は舵手の陰にかくれた。見ると、艇長は立っているので立ちあがり、艇長と「熱いですね」と会話をした。その時、太陽のような火の玉を見た。瞬間、その火の玉の下に、火の玉と地上を結んだように火柱が立った。これを確認。煙雲はまだ立たなかった。

とても熱く(上半身)、何が何だかわからぬが、とにかくにも出港しようというので、すぐにエンジンかけて出航し、直ちに潜航、呉寄りの沖で浮上して見たら広島上空に茸雲。その猛雲は浅間山の火山の噴煙そっくりと見た。郷里が長野県なので、見なれた浅間山の火山の噴煙そのままのようにモクモク盛り上っていた。

艇内にいた二〇人は、出入口四〇センチメートル角のハッチから、その大きさ一杯の巨大な丸太棒が飛びこんだような感じだったと皆言った。

何が起ったのか、わからぬままで松山沖に行き訓練。四、五日たってから帰り、広島の荒廃に驚きつつ、戦災証明書の発行(紙屋町)や尸体処理などに一週間ぐらい従事した。

原子爆弾投下の時、潜航艇の司令塔の上だったので、火の玉の形は実にハッキリと見た。厚味のある火の玉であった。

八月五日の夕方、紙屋町附近で、高等学校時代のクラスメートと酒を飲み、別れて宇品に帰ったが、その友人は原子爆弾で翌朝は被爆死した。その友人の墓参に神奈川県鶴沼に行き、鶴沼海岸で戦後処理の火薬の大爆発を見た時、それが広島原子爆弾の火の玉とソっくりだったので、驚いて思わず身をちぢめた。

火の玉・火柱、それはキレイというよりも、異様な恐怖感を強烈にいだかせるものであった。

三八

松井幸雄

(当時船舶通信隊・特別隊候補生)

一、キノコ雲望見

昭和二十年八月六日午前八時十五分頃、私は山陽本線瀬野駅をのなか程を、広島へ向って進んでいる列車のなかをいた。

同年二月一日、第三期陸軍特別隊候補生として小豆島の若潮部隊に入隊した自分は、適性検査の後、広島市の比治山のふもとにある陸軍船舶通信隊補充隊通称暁第一六七〇部隊に配属され、船舶無線通信の訓練をうけて、あと一ヶ月程で実戦勤務につこうとする七月下旬、郷里から中隊長あてに「チチキトク」の電報があり、七月三十一日午後六時より八月六日の午前八時三十分までの一週間の帰省休暇をもらい、六月ぶり家に帰った。まだ息のある父親の顔をみて、当時、大阪に嫁いでいた姉にも会い、目前に実戦勤務を控えて心残りのない様に、時間のある限り、知人にも会った(父親は八月七日の朝息を引取った)。そうして休暇期間の前日の八月五日、まだ息のある病の父に気を残しつつ、帰隊するため家を辞し、午後九時三十分頃の神戸発下りの満員の夜行列車に乗り込んだ。ところが、岡山の手前あたりから警報が発令されて、列車はイザリりの如くじりじりしか動かない(ちょうどこの時阪神間、とくに西宮は空襲をうけていた)。

この状態では、とうてい定刻午前七時三十分広島に着くことはできそうにない。ようやく尾道を過ぎたあたりからまともに走り出し、海田市の一つ手前の安芸中野に臨時停車したときは、これで広島に着いた様気持になってやれやれと思った。ところがしばらくしてから、駅員が、いま広島が空襲でやられているから、西方面に行く人は歩いてくれと言う。ただそれだけで他のことは何もわからない。仕方なく駅のホームに出て外を見渡したとき、西方の山の真上に白い雲がもくもくとぼり、たちまちそれが頭デッカチな、まるでキノコの様な異様な形をして、さらにそれがむくむくと広がっていくのが見えた。

列車の人達よ、あの雲の下が広島あたりで、恐らく爆撃の煙であろうといい、距離からしてもおおよそれと思われたが、変な雲が出た程度でさして気にもと

めなかった。ともかくこれから広島に向って西へ三里(一二キロ)ほど、レールの上を歩かねばならない。私は、八時三十分という門限があるので、すぐ近くの中野村役場で「通過証明」をもらうことにした。同乗の人達も、列車がこれ以上動かないので、不満の表情をあらわしながら降りた。戦時体制の防空服の服装にまじって、軍服姿も見られた。

自分は、軍服に雑のうと水筒を十字にかかけ、帯剣の装備、雑のうの中には母の心づくしのにぎりめしと、おはぎが少し残っている。それは部隊に着いたら、どうということになるか判らないので、たくわえておく事にした。

列車から降りた人達は、自然に幾つかのかたまりになり、レールの上を西へ向って歩きだした。真夏の太陽がざらざらと体を焼きつけ、汗が背中の中にじんできてくる。はるか西方を望めば、依然としてあの無気味な白い雲の広がりがあり、いっこうに消えそうにない。あの雲の下は広島だ。広島に異変があったのではたいかと、一まつの不安を抱きながら、レールの上をただ黙々と歩いた。

約四キロほど歩いたであろうか。もう少しで海田市駅という所で、我々と反対にレールの上を、こちらに向いて、やって来る一団がある。私は間近になって、その一団の様子がおかしいことに気づいた。両手をぶらつかせたり、手を首から手ぬぐいでつつたり、顔をほろもくしたり、また、その顔は黒紫色で、皮膚がズルズルして、中には、出血している人もある。

「どうしたんだ。」と聞くと、「乗っていた上り列車が、丁度、広島駅に着いた瞬間、いきなり爆発が起き、列車ごと吹き飛ばされて、訳のわからぬままにこの様にやられた。足を痛めた者はそのままだまににいるが、われわれはやっとの思いでここまでやって来たが、広島の町はひどい被害で入れない。おそらく時限爆弾が落ちているから、広島へ入ったらいつ爆発するかわからない。」という。

しかし、時限爆弾が無数に落ちているものでもないし、ともかくこの目で確かめなければと思いつつ、更に西へ西へと歩いた。しばらくして広い道路と交差する所に出たら、軍用トラックに出会った。これは助け舟とばかりに運転手に事情を説明すると、トラックも広島へ救援に行く所だということで、広島駅までという約束で、荷物台に乗れるだけ乗って一路広島へ向ってひた走った。

海田市を過ぎ、広島の一つ手前の向洋あたりから建物の窓ガラスが壊れ、広島へ近づくにしたがって、被害が大きくなった。今まで広島市街は一回の空襲もなく、呉軍港に対する昼夜兼行の爆撃にも上空を飛行する程度(たしか外出のとき、不発弾が落ちたことを記憶している。)で、呉に比べて広島は、無気味なほど平穏な日々であったが、最後にはまったく無傷の広島をねらったものであろう。

戦時爆撃とはこんなものかと、米国に対する憎悪の念が胸に迫った。

二、被爆直後の広島に入る

トラックはやっと広島市街に入ったらしい。腕時計は正午を少し過ぎていた。「ここが広島だ。」と降ろされたが、

帰郷の際にあった広島駅がわずかに残骸をとどめているばかりで、市電もレールが吹っ飛び横倒しとなって、架線はズタズタに切れている。それと、不思議に附近には人影は見当たらない。被爆した人達は避難場所を求めて散ったのであろう。すでに火災が至る所に発生しているらしく、火の海に入っている様でパチパチという音がする。全市が被災して手がつけられないため、消火活動はまだできていたらしい。それに一番困ったことは、目標になる建物が壊れて方角の見当がつかないことだ。

広島は船舶通信補充隊に配属されて、すでに六ヶ月になるが、なにぶんカゴの鳥で、月二、三回の外出は、八丁堀附近のもっぱら繁華街をうろつき、たまに広島城附近に出かけたが、市内全体の土地勘には案外うとく、それに加えて目標の建物が無くてはめくら同然、まことに心もとない次第であったが、とにかくにも部隊に辿りつかねばの一念で、比治山目ざし南へ南へと走った。

火災が大きいところへさしかかると熱くて通れない。思わず道ばたの防火用水槽を見つけて、水をかぶり走る。三番目位の防火用水槽で黒いものが目につくので、よく見れば、それは五、六歳の男の子が、おそらく熱いために無意識に水槽に飛び込んだのであろう。そのまま黒焦げになって、頭をつつ込んだまま冷たくなっているのだ。思わず合掌してその場を離れ、やがて橋のたもとに着く。この附近にいる人は、身にまとっている物は皆ボロボロ、顔のずりむけたまっ黒な人が群れをなして、重傷者はじっとしてうずくまり、横たわっている人もある。川の中に目をやれば、ぎっしりとやられた人が水際うずくまっている。熱いために無意識に水のある所へと寄って来たのであろうか。皆、動きがこぶく、ただ呆然と水にひたっている。

その前を通り過ぎようとする、その中の二、三人の婦人が突然駆け寄り、私の水筒にしがみついて、「兵隊さん、水ください。」と、三拝四拝のおがみ倒し、あまりの気の毒さに水筒を差し出すと、栓を抜くのもどかしく、ゴクンゴクンと飲んで、たちまちなくなってしまう。それでもまだ飲み足りないような顔をする。その顔は、いずれも正視できぬほどにやられている。橋を渡りきった所でたむろしている集団に、また水をせがまれたが、すでに水筒のお茶はからっぽであるが、承知してくれない。しかたがないので栓を開けて、水筒をさかさにして、やっと納得さすが、やられた人達はよほど喉が乾くのであろう。

交差点で警備している憲兵からは、水を飲ましたら死んでしまうからいけないと、注意された。むごい事になったものだ。まったくこの世にあるまじき、さながら生地獄の様相、すべてが常識はずれの事ばかりで、無我夢中でわけがわからないが、自分は軍隊の一員であるという自覚で、やっと恐怖を抑制することができた。

三、船舶通信隊の状況

やっと部隊の営門が見えたが、今日程、広島駅からわずかに一キロ半余りの部隊までを遠くに感じたことはなかった。兵舎は全壊ないし半壊で、まともな建物はなくなっている。営門に衛兵が五名立っているだけで、営庭には人は見当たらない。

衛兵に帰隊した事情を報告し、休暇証明と中野村役場でもらった通過証明を渡し、同時に被害の事情を聞いたが、詳しく語ってくれず、兵員の八割程度負傷し

て、現在部隊は比治山の洞窟に避難しているから、直ちにそちらに行くようにと指示するだけである。

営庭を横切り、裏門をくぐって急いで比治山の洞窟に這い上がった。洞窟は通信器材の疎開場所として、わが部隊が昼夜の突貫工事で行ない、夜間にはよくドカンドカンとダイナマイトの爆発音がしたものだ。比治山は部隊と余り離れていないが、不思議に被害をまぬがれている。息せき切って自分の所属のイ中隊の収容所に入った。

洞窟の中は、裸電球の照明を各所に行ない、通行には不便を生じない。特四班の所にたどり着き、まず班長(失名・香川県出身)に帰隊の旨を報告すると、班長は、「よく無事で帰ってくれた。」と、涙を流さんばかりに喜んでくれた。班長も首から上の顔全体をやられていた。もともと気のやさしい班長だったが、被爆して一層気が弱くなったようだ。班の人員はだいたい揃っているようだが、日夜顔を会わせている戦友の顔が、「誰か?」と聞かなければ、判らないほど変形している。

三重県出身の藤森候補生や福島県出身の柳田候補生などの顔は、フット・ボールのようにふくれ上っている。首から上や手・足などのやられている所は、すべて被覆していないので、直接太陽光線に露出していた所ばかりである。

被爆したときの状況を総合すると…いつもの通り、朝の点呼が終って、八時三十分の演習整列の時間で、部隊の九割程度整列ができたとき、いきなり上空でピカリと閃光を感じた瞬間、顔や手の露出部分に激しい熱さを覚え、同時にものすごい圧力で地面にたたきつけられた。その時に、熱さを覚えたところが火傷のようになった。地面にたたきつけられたとき、人の下敷きになった者は、火傷をまぬがれている。太陽光線が直接当たっている部分がすべてやられ、被服で包まれている所は助かったと言うのである。これは、今までの常識では考えられない不思議な爆弾を、奴さんは持って来たものだ。…(この爆弾の呼び名は、海田市で聞いた時限爆弾に始まり、特殊爆弾、ピカドン、原子爆弾と変っていった。)以上の通り自分の部隊は、演習整列という最悪の状況で被爆し、人的被害は八割だという。わが部隊に限らず、被爆した午前八時十五分という時間は、広島市民にとって一番不幸な時間であった。それは、主人は通勤、子供は通学途上と屋外に出ている時屋外に出ている時間であり、しかも市外から市内への通勤路と人口間であり、しかも市外から市内への通勤と、人口表裏にふくらみつつあったからだ。

部隊でも、まったく無傷な一割程度のものは、すでに市民の救護活動に出動している由、ただひとり無傷で、何もしていない自分は、やられた戦友に対して申しわけのない気持ちでいっぱいであった。

広島市内は、被爆した夜から三日三晩の間、燃えつづけた。われわれが避難している比治山は、市街の南方面で高台にあるので、市内の展望がよくきき、昼は警防団が救助活動とあわせて消火活動をやるので、火勢は衰えているが、夜ともなると燃えひろがって、それは悪魔の焰の如く、市民を恐怖のどん底に落とし入れてもするようなすさまじさで、夜空を焦がしていた。しかし、広島はもうなす術もなく、運を天に任せているのだ。私は、悪魔の火よ、燃えるだけ燃えろと叫びたくなった。

四、救護活動に出動

二、三日して宇品の船舶司令部から、わが船舶通信補充隊に対し、「被災者の救護に出動すべし」の命令が出た。広島市内の軍隊もほとんどやられ、特に広島城附近の中国軍管区諸部隊では、出陣式的最中に全滅し、この爆弾は、広島城附近になるほど被害が大きいとの情報を聞いた。

陸軍病院をはじめ、そのほかの市内の主要な医療施設が潰滅して、人的被害に対する救助ができない。幸い市内から離れている宇品は、大きい被害をまぬがれ、ここに陸部隊のセンターである船舶司令部と船舶練習部がある。この練習部へ軍民一体の収容が始まった。道ばた、橋の下などあらゆる避難場所から、歩きたい被爆者を担架に乗せてトラックへ。そうして宇品の船舶練習部へと、五日程連続しただろうか。収容人員次第にふくれあがり、約二、〇〇〇人の軍民合同の収容で、名簿作成にひと苦労。重傷、重体者もかなりおり、口もきけないので完全な収容名簿ができない。

被爆者に気の毒なことは、せっかく収容しながらも医師や医薬品が不足していて、満足な診療ができないことである。われわれが衛生兵の代用をやるわけで、傷口に火傷用の黄色い塗り薬と包帯の取替えを行なうが、それも人手不足で満足にはできない。真夏で、暑いので傷口から化膿をおこしてくる。それと甚だしく食欲がない。炊出しのにぎりめしはほとんど口にしない。しかたがないのでオカユにする。手や口をやられて自由がきかない人には、われわれがスプーンで口に運んであげる。(後に聞いたことだが、放射能で体の細胞が死んで、胃腸障害が生じたため、食物が体内に入らなかったのだそうだ。)

それに一番困ったのは、収容後一週間ほどしてから化膿面がへがたかり、それが卵を生みつけるために、ウジ虫がわくことである。ウジ虫の発生はすごく早く、とつてもとつても湧いて隙がない。包帯をはずした傷口の中で、ウジ虫がうようよしている。それをピンセットで一匹一匹根気よくつかみ出しては殺す。中には、つかみ出す前に傷のすき間に入りこんでしまうすばいものもある。このウジ虫退治の要求にも、人手不足でとても応じきれない。患者にとつてもこの傷口の客には、気持ちが悪くつらいことは表情でよくわかる。ほかのことを省いてでも、ウジ虫退治はできるだけ入念にしあげる。それはなによりも喜ばれた。さらに気の毒なのは婦人たちで、頭の毛も乱れるだけ乱れ、手入れをしてあげたいが、首から上をひどくやられていて、手のつけようがない。

夜の不寝番のつらいことは、平常の内務班の比でない。それは患者のうめき声に混って、訳のわからぬウワ言を言いだしたら、翌日は必ずといってよいほど冷たくなってしまふからだ。連日連夜、その繰り返しである。近くの福山、それに大阪、福知山の陸軍病院から応援に来てくれた。それでも手が足りないのだ。

八月十五日の朝、救護に当たっているわれわれは、重大ニュースのあることを知らされ、正午にラジオのある一室で、陛下の玉音を拝聴した。雑音が入って聞きとりにくかったが、日本がボツダム宣言を受諾したことにはかならなかった。それは連合国に対する日本の無条件降伏を意味するものである。とたん人に張りつめていた気持ちが抜けて、何をするのもいやになった。

九日には、長崎市にも、広島のような爆弾が投下されて、甚大な被害をうけたということだし、この二つの新型爆弾で、日本は手を上げたのだろうか。軍民一体、一億総決起の本土決戦、日本海軍の誇る連合艦隊はどうなったのか。何を言ったところですべてが終ったのだった。

やがてわれわれ軍隊にも武装解除をしなければならぬことが伝えられる。それにつけても、広島はこのひどい状況を目前にして敗戦とは、どうしたことであろう。泣くにも泣きたい気持は、自分一人の感情ではなかったと思う。やがて、この船舶練習部の収容所から、軍は手を引き、引続き看護は公共機関に委ねられることとなった。

僅かな期間で、しかも満足な看護ができず、いまだ数多く病床に伏した人達を目の前にして立ち去ることが心残りであった。しかし、後を引き継いだ地元の人達は、被爆者に対する手厚い看護と広島復興に立ち上ってくれるだろう。それからわれわれは、郊外の国民学校の校舎に移動して復員をまった。時期は九月十日前後であった。

五、復員

九月十九日に復員するまでの間、いまだ軍規も乱れず、規律のある生活を送ったことは、せめてもの軍人としての誇りであった。しかしながら、この間、われわれは最も恐れていたことが現実となった。

それは、直接被爆者でない者までもが、脱毛・血便の症状が出てきて収容されたことだった、(当町これが原爆症といわれた。)それからというもの、元気な者までがすっかり原爆症ノイローゼにかかり、朝、起床したらお互いに同僚の頭髮をつかんで引っ張り合って、毛が抜けなければ安心したものだった。また、当時原子爆弾で被爆した広島にるので、自覚はなくても、多少の放射能の影響を受けていたらしく、ほとんどの者が、蚊にかまれた部分が化膿するといった具合だった。

復員式は、比治山の部隊にかえり、顔面半分を火傷された部隊長より、「それぞれ郷里に帰り、祖国日本の再建に努力されたい。」との訓示のあったことを思い出す。暇さえあれば、「映映ゆる瀬戸の海、昇る朝日の島影に…」と、わが陸軍砲部隊の歌を軍歌演習したなつかしの比治山とも、いよいよ別れを告げることになった。二月に入隊するときは、夢にも考えなかった丸腰の復員である。被爆のケロイドを顔にとどめ、今やそれが薄赤くなった数多くの戦友、いや同僚とともに焦土と化した広島をあとにして、復員の途についた。

三九

古本源吾

(当時の船舶練習部経理室・陸軍業務手)

被爆した場所は、宇品町七丁目の元大和紡績工場内(船舶教導聯隊)です。八月六日午前八時ごろ、向洋へ作業に行くため、長谷川曹長と小田女子職員と私の三人(時間も早く出勤者三人でした。)が、船舶練習部経理室で更衣中、突然、青い閃光を窓側に見たとたん、猛烈な爆発音と爆風を同時に受けました。

工場の厚いガラスや窓枠が室内に飛び込んで来て、私は頭部三カ所に負傷し、急いで教導聯隊の医務室に行きましたが医局は足の踏み場もないほど薬品が散乱していました。

幸い陸軍の医療公用行李が見つかり、ヨードチンキとデルマトールで応急措置をしました。まだ、誰も来ていませんでしたが、私が自分で応急手当をした頃から、続々と聯隊の兵士がやって来ました。いずれも相当の負傷です。ガラスの破片で強く切られた人が多いようでしたが、死亡者はなかったようです。

爆弾の威力から察して、普通のものではあるまいという噂でした。私も原子系の放射線状のものかも知れんと思いました。隊内は一瞬にして、例えて言えば、敵味方の区別できない混戦状態とでも言えたでしょう。市内の方は火災が起き、音信不通、無統制の状態に陥り、詳細は不明でした。

しかし部隊内の建物は、爆風によって窓枠やガラスが飛散しただけで、主体構造物の倒壊はなかったようです。七丁目付近では人畜・建物の被害も比較的に少ないように見受けられましたが、市の中心部の方は大火災で、踏み込める状態ではありませんでした。

午後二時頃になって、私は宇品七丁目から丹那に出て、比治山の東裏の段原町を通り、段原は比治山の関係か、半倒壊の家が多く道路の通行は困難でしたが、ここから大正橋を渡り、広島駅の東側を通り、岩鼻に出て、火傷者が路上にいつぱいの矢賀村を通り、中山峠を越え、戸坂村にたどりつきました。戸坂の国民学校は負傷者の収容所となって混雑していました。戸坂から、また歩いて口田村の自宅に帰りつきましたので、午後四時ごろでした。口田国民学校も多数負傷者が収容されていましたが、治療はせず、ただ寝ころんでるだけの状態でした。

私は頭部の負傷で、治癒に一週間を要しましたので、その間の市内の状況はわかりません。八月十二日、歩いて口田村の家から牛田に出て工兵橋付近に至りますと、被爆後七日目ですが、堤防付近にまだ兵士の死体がたくさんあり、悪臭紛々。ふくれあがったその死体は工兵作業場のあちらこちらで火葬されていました。白島町から電車道に沿って歩き、八丁堀に出て、瓦礫ばかりの中心部を経て、御幸橋を渡り、宇品の原隊に帰りました。

隊内は、軍隊的秩序がなく、兵士の戦意喪失、敗戦の色は濃厚で、軍人軍属の家族や知人の治療に精一杯のように感ぜられました。私達の業務と申しましても、周囲がこんな状況で特別に記述するほどのことはありません。

終戦後に、宇品の陸軍共済病院が日本医療学院となりしましたので、此処に船舶練習部経理課長であった木村経一氏と共に就職し、院長小見山泰造博士(元軍医小将)のもとで、医療業務に従事しましたが、同病院は原子爆弾の被害も大きく、建物の損傷いちじるしく、広大な二階建も、内部はひどく崩壊していましたから、一部分の片づけを行ない、石橋元県病院長を副院長として業務を続けました。黒川博士が小見山院長と交代され、石橋副院長は井口県病院の方へ転任されましたとき、私も井口病院の方へ先生と共に移りました。

石橋先生は、戦前水主町の県病院の院長でしたが、病院の建物が倒壊すると同時に、その下敷きになられました。幸い先生は建物の合掌のすき間から、一縷の光線を発見され、これを頼りに這い出して助かったと語っておられました。先生は看護婦七人の遺骨を、井口病院に持って来て、七年間、仏間に安置し毎朝お経

をあげて冥福を祈っておられましたが、在職中に逝去されました。後任には、院長の長男高橋洪一氏が院長となりました。洪一氏は、己斐町で被爆負傷者の治療にあたっておられ、原爆症に関する貴重な研究論文を、現在でも持っておられると思います。

(六)

(県政)雑記帖

竹内喜三郎

八月六日

豊田郡九名

衛生課へ三名杉野精八日――一日(秋光)

大迫礼三八日――〇日・一二日→

田中魁八日――〇日・一二日→

(学務課長)

援護課へ五名佐伯鼎八日――二日

西村必二八日――二日

山田三千三九日→

林秋雄八日――一日井出上

外一名

食糧課へ一名中本圭市→

(註)これは、昭和二〇年八月六正午前、西条警察署長を通じ、当時豊田地方事務所長であつた私宛連絡の電話により、豊田地方事務所より応援のため、広島県庁に派遣した割当人名表である。

広島市空襲被害予想外に多し。

一、食糧、救護班できるだけ多く送れ。

二、警察官、警防団員を応援派遣せよ。

三、貨物自動車できるだけ多く送れ。

四、ローソク、マッチ、給水用具(四斗樽の如きもの)できるだけ多く送れ。

五、県庁職員は多数死傷ある見込み。指揮連絡に支障あり、各署(警察署)は応援の後も自署同様に行動すべし。

六、警察部長は多聞院、長官は安芸高女にあり。

(註)県庁舎焼失に備え、県では、予め県庁舎焼失の場合における庁員参集の場所を次のとおり定めてあつた。

安芸高等女学校(広島市打越町)

広島県立第二中学校(広島市西観音町)

元・広島師範学校(広島市皆実町)

八月七日

罹災患者救護所の設置

(救護所)東練兵場・泉邸跡・被服廠・県庁跡・御幸橋東側三叉路・赤十字病院・府中国民学校・市役所・比治山西

側聖橋・東警察署・観音町中央十字路(市商北側)・工兵聯隊・舟入本町・似島・宇品船舶練習部・曙六一

八〇部隊・坂金輪部隊・住吉橋・横川駅・古田国民学校・己斐駅・中山村・土橋・廿日市町

(註)被爆直後逸早く設置された臨時救護所である。

昭和二十年八月七日午後二時より、東警察署二階会議室(現在・広島銀行銀山町支店)における広島県庁部長会議の内容その他の記録

一、新聞

大阪ヨリ一〇万部・門司ヨリ一五万部・松江ヨリ一、二万部配給方連絡

二、部長会議開催午後二時

イ、食糧ソノ他ノ物資配給計画

ロ、屍体処理二村、刑務所囚人四〇〇人使用、僧侶ノ動員

三、経済第一部長中心ニ農務課長、地方事務所員等協議

(食糧配給対策)

イ、缶詰二〇万人分二五万個

ロ、蔬菜二〇万人分

ハ、砂糖一人宛一斤

配給対象……負傷者・官公衙・防空要員・放送局・新聞社・警防団・消防署・警察署・救護班

二、水産食品イリコー一人当一五匁・鰯一人当三枚・海苔一人当五枚・削鯉一人当一五匁・昆布一人当一〇匁

ホ、酒・蔘酒一人当三合・煙草一人当一〇本

配給対象……砂糖ノ配給対象ニ準ズルコト、但シ、負傷者ヲ除ク

へ、配給機構(配給挺身隊ノ組織)

西署一〇ヶ所安佐郡

東署〃安芸郡

宇品署〃佐伯郡

ト、食器ノ供出安佐・安芸・佐伯ニ於テ各家庭ニ点宛

チ、草履ノ供出山県・賀茂・豊田・高田・御調・世羅一戸毎二二足宛

四、東地区警備隊長(睨沢田部隊長)

中地区〃(〃芳村〃)

西地区〃(〃梶〃)

五、屍体処理箇所

イ、山陽中学北側

ロ、市役所

ハ、紙屋町・八丁堀附近

二、土橋

六、天幕及ビ菰ノ配給

七、水道ノ復旧一日約八万立方米使則ノ所、現在四万立方米

八、バスノ運行開始

九、罹災民相談所開設

一〇、燈油ノ配給

一一、罹災証明書ノ発行……警備隊ニ移ス……一応一週間後

戦災相談所ノ設置(町内会)

一二、炊出シハ、八日間行ヒ、順次通常配給ニ切替ヘ

残存町内会、部落会ノ整備

一三、便所ノ建設、収容バラックノ建設

一四、地方人ニ対スル案内所設置

八月八日

中国復興財団設置

設置年月日昭和二十年八月八日

事務所広島市小町中国配電(株)内

事業中国地方復興に必要な資材の獲得及びこれが適配分並びにこれに伴う一切の業務

組織委員長(鈴川貫一)、常任委員、委員若干名

対四ヶ国宛通告(昭和二〇・八・八)

一、天皇陛下は、世界平和を衷心より希望し、ソ連を通じて和を講じ、ポツダム宣言を受諾する。

二、但し、天皇陛下の大権を侵害しないこと。

三、天皇陛下は、陸、海軍に対し交戦中止を命令し、軍事行動を停止せしめる。

四、天皇陛下は俘虜の輸送を確保する。

五、日本の政治、経済は自由を希望する国民の総意を以てこれを決定する。

六、必要のときまで連合軍の武装占領を認める。

八月十日

広島県庁内連絡会議

一、八月九日 “ソ聯ト交戦状態ニアル旨” 呉鎮長官ヨリ通報アリ

二、町内会ニ於テ、共同湯沸場、共同便所ノ設置ヲ希望

三、縁故無キ者ノ収容方法、修覆用資材ノ配給如何

四、海軍兵学校保管、朝鮮米二、〇〇〇俵(六〇kg入)一時借受

五、海軍潜水学校及ビ大竹海兵団ヨリ、各朝鮮米四、〇〇〇俵一時借受

山口県萩ヨリ、毎日二〇輦、一、六〇〇石廻送(四、〇〇〇俵)

六、警察署ニ於テ給食継続中

八月六日～八月九日、三日間ノ給食状況

乾パン三五五、九八〇食握飯七五七、七一一食

七、(非常用食糧配給要綱)

警察給食二日間、三日以後平常配給、一一日以後ハ、町内組織ノ確立地区ヨリ順次通常配給→

目下、配給所ノ設置準備中

八、庁員罹災状況

総数健在数負傷者死者不明

警察部二七八七五七二一五一一六

其ノ他八二九一七九一九五四二四一三

計一、一〇七二五四二六七五七五二九

全軍将兵ニ告グ

ソ聯遂ニ戈ヲ執テ皇国ニ冠ス名分如何ニ粉飾スト難大東亜ヲ侵略制覇セントスル野望歴然タリ

事茲ニ至ツテハ又何ヲカ言ハシ斷乎神州護持ノ聖戦ヲ戦ヒ抜カンノミ仮令草ヲ食シ土ヲ嚙リ野ニ臥スルトモ斷シテ戦フ所死中自ラ活アルヲ信ス是即チ七生報国

「我一人シキテ在セハ」ノ楠公救国ノ精神ナルト共ニ時宗ノ莫妄想慕直進前以テ醜敵ヲ撃滅スルノ闘魂ナリ

全軍将兵宜シク一人モ剩サス楠公精神ヲ具現スヘシ而シテ又時宗ノ闘魂ヲ再現シテ驕敵撃滅ニ慕直進前スヘシ

昭和二〇・八・一〇陸軍大臣阿南惟幾

八月十二日

高野広島県知事自ら起案された災害復旧対策三案(昭和二〇・八・一二)

第一案災害復旧対策

一、民心安定策……宣伝、啓蒙

二、食糧対策……通常配給へノ切替

三、生活必需物資ノ配給へノ切替……配給機構ノ確立

四、給水対策……水道復旧

五、配電……主要地区個所へノ急速ナル配電

六、傷病者ノ医療救護

七、尸体処理

八、道路ノ啓開清掃

九、交通対策……鉄道ノ復活

バスノ〃

電車ノ〃

其ノ他ノ輸送機関ノ利用

貨物自動車ノ運用統制

軽車輛ノ〃

自転車ノ運用統制

荷牛馬車ノ〃

一〇、集団罹災者ノ収容対策ト孤児収容所ノ開設

一一、新聞報道機関及ビ放送局ノ復活

一二、金融機関(銀行、組合、保険会社)ノ復活

一三、防疫対策

一四、治安維持ト流言蜚語ノ取締(敗戦、厭戦思想ノ取締)

一五、慰安並ニ士氣ノ昂揚

第二案広島市復旧対策

一、恒久的都市建設計画ハ戦後ニ譲ルコト

二、焼失地域ノ暫定的建設計画(戦争遂行中)ヲ策定スルコト

暫定的建設計画ヲ樹立ニ当リテモ、可能ナル範囲ニ於テ、恒久的計画ヲ考慮

三、焼失地域ニハ、一般民家ノ建設ヲ認メサルコト

但シ市民自己独立ニテ半地下式又ハ壕式

一、主要道路ヨリ一〇〇米、其他五〇米

二、間隔二〇米ヲ存スルコト

三、河川ヨリ五〇米、橋側ヨリ一〇〇米

四、市内外山間部ニシテ軍事上支障ナキ地域ヲ選定シ、横穴式又ハ簡易ナル住宅ハ、所要ニ応ジ、其ノ建設ヲ認ムルコト

五、残留スルヲ特ニ必要トセサル市民ハ、出来得ル限り市外縁故地ニ疎開シ、極力増産ニ挺身セシムルコト

六、市内ニ残存スル者ノ居住分布ヲ適当ニ決定スルコト

七、市内ニ残留ヲ要セサル官庁・学校・銀行・会社・組合・統制会社等ハ、夫々適當ノ地ニ疎開セシムルコト

八、残存堅牢建築物ノ利用統制ヲ図リ(軍関係ヲ除ク)戦争遂行上、必要ナル向ニ重点的ニ之ヲ利用セシムルコト

第三案罹災工場復旧対策

(註)この災害復旧対策三葉は、当時東警察署楼上(県庁仮舎)に泊り込んでおられた高野広島県知事が、深夜自ら鉛筆をとって起案され、傍らに同じく泊り込んでいた私に検討の上、謄写版にかけるよう渡されたものである。

焼失地域内における配給対策協議会の決定事項(昭和二〇・八・一二)

馬鈴薯四五、〇〇〇貫(安佐・安芸・佐伯ノ三郡ノ罹災民一人当三〇〇匁…地方事務所ニ委ス)何レモ話合済
(75,000 貫)

三〇、〇〇〇貫(市内ノ分ハ賀茂郡ヨリ受入市内罹災者一人ニ付三〇〇匁)

蔬菜(市内九日～一一日)三日間、安佐・安芸・佐伯三郡ヨリ

青果物配給統制株式会社ヨリ手配(五万貫出荷)

(一二日・一三日)今明二日間蔬菜配給ヲ停止

切替用……混食大豆萩ニ在リ

朝鮮米……三五、〇〇〇俵＝一四、〇〇〇石

大豆……二〇、〇〇〇俵

一五日迄(一、七六〇石)ノ分ハ配給済

外ニ、政府手持外白米四五五石五九五石

〃三五〇俵＝一四〇石

外ニ兵学校、海軍ヨリ融通ヲ受クル分一〇、〇〇〇俵又ハ萩ヨリ廻付ノ分ヲ融通

(註)私は八月十三日、市内各配給所を自転車で廻り、末端配給の実情を視察したが、充分配給方法が徹底しておらず、副食物の配給を更けていないところもあったので、翌十四日から毎朝、配給責任者会同を催すこととした。(食糧配給統制組合、青果物配給統制組合、県食糧課、広島市配給課)

防衛会報

昭和二〇・八・一二一四・〇〇於・広島市庁横空地天幕内

一、軍管区司令官ノ発令ト共ニ、戦災復旧ノ指令ハ、地区司令部ニ移ル

本日ヨリ地区司令部ニ於テ、防衛会報ヲ主催ス

ニ、今後段々技術的ナ細カイ問題ニ入ルモノト考ヘルカラ、一般的会報ハ進捗状況、一般的連絡、之ニ対シ打ッベキ手等ヲ協議スル程度トナラン
細カイ技術的打合せ(分科会)ハ別に其ノ都度開ク

(以上、軍管区参謀)

一、地区司令部ハ、現在北地区ノミノ警備ナレドモ、今後ハ全部ノ地区ヲ受持ツ

明日カラ比治山ニ一時移リ、将来ハ已斐町上野ガーデンニ移ル

隸下、地区警備隊ト県下特設警備隊トヲ以テ警備ニ当ル

兵力ノ援助ハ今後困難可成各自ニ心配セヨ(地区将校)

二、放送機械回収終ル、流川放送局ノケーブル発見、中継所迄ノ連絡ハ、近日中回復ノ見込ミナルモ、通信省線ノ被害復旧程度如何ニ依ル(放送局)

三、第二総軍・中国軍管区・船舶司令部・県庁・其他主要官庁・茲一兩日中ニ復旧可能ナラン、関係回線ハ電報モ本日ヨリ受付開始……中央電話局ニテ受付……

送信不能ノ区間ハ通送ニヨリ中継(通信局)

将来横穴ニ移転ノ予定……中央電話局配線ニ付特別工配意ヲ望ム(通信・放送局)

四、山口県ヨリノ防空情報ハ山陽回線ノ為、大阪ヨリ四〇分モ懸カル、コレデハ防空情報ノ価値ナシ、何トカ考慮ヲ望ム

広島監視隊本部ノ情報ハ、県庁ノ中枢回線破壊ノ為、送ルコトヲ得ス、何トカナランカ

中国軍管区ノ放送ハ、四国復旧後(一七、八日頃)開始ス(軍管区)

五、機関区水道水压不足、タンクニ上ゲルコト不能(水道部)

幹線送水停止、注水場ノ機関車低下設備ヲ研究スルコトニ決定

六、電車復旧三五人、高師八〇人応援、電柱ヲ建テルコトニ全カヲ注ギツツアリ

電柱毎日一軒――七日間ニテ完了、電線ノ整理(スパンワイヤー、ドリルワイヤー)――〇日以内ニ運行開始ノ意込ニテ進行中(電鉄)

復旧後ノ停留所ヲ予メ決定、会報ニ懸ケヨ

七、電灯ハ明日中ニ完了(総軍・中軍・県庁・市庁・測候所・地区司令部)

八、郵便物……隣組配給、局止メ

差出シ……駅前、貯金支局内(ポストニ四ヶ所ノ復活)

主要官公署間……連絡郵便ヲ開設

九、落橋、一部落橋、橋脚低下ノ復旧……資材入手難

一〇、市内一六ヶ所、配給所二八二八俵ヲ割当配給済(蔬菜其他ノ綜合配給実施準備中)

一、四〇〇俵……海軍軍需部

△字品ヘ昨日八〇〇俵、本日六〇〇俵……今日トラック五台ニテ引取中

三、〇〇〇人……▽三〇……◎三篠方面切替ニ心紀シツツアリ

隣組、町内会ノ急速整備、戦災保護法ニ依ル救護ノ徹底

山口萩一、三〇〇石

外米二、〇〇〇俵ハ字品ニ入荷……荷役未済(二〇輦――一、六〇〇石)

一一、(赤痢患者発生状況)

日赤二三人、軍人六人、廿日市方面、観音町、地御前、女専、太田川上流ニ散発(本川、袋町?)

市周辺七ヶ所、市内三ヶ所ニ救護所ヲ集約ノ予定

市内ニ現在イル患者一、〇〇〇人程度、今後ハ市外ニ重点ヲ指向スベシ

軍患者及ビ民患者五、〇〇〇人近ク字品ニ在リ、三、五〇〇人転送済

収容所ニテ医薬品不足ノモノハ、軍ニ於テ補給ス(已斐・向字品晩部隊補給所)

一二、白血球三、〇〇〇以下トナルト生命ヲ失フ

火傷ハ白血球ガ増エル筈ナルニ、似島ニテ検査ノ結果、事実減少ノ事実アリ(検査官ハ軍ナリ、顕微鏡検査)

ラヂウムヲニ軒(半径)範囲、ウランノ原子爆弾ト決定二軒内ニ放射

一三、海上、島附近漂流ノ死体ハ町村ニテ処置スルコトニ取計ハレタシ

一四、戦闘司令部ハ連絡所ト変更

軍管区ノモノ、外関係ノモノ数名残留、当分勤務継続

(一般会報一時間(一五時――一六時)、引続キ一時間(一六時――一七時)、分科会(二時間)ヲ開ク)

(明日ノ分科会ハ輸送ト衛生)

一五、収容患者死亡ノ場合ノ孤児ノ収容(比治山校三五人収容)

(編者註・欄外記入ノモノ)山口萩ヨリ一〇輦着荷、至急荷役スルコト

八月十三日

食糧配給計画

味噌一人当五〇匁～三〇匁一五、〇〇〇貫・楠原味噌工場(中広町)

曉六一四〇西警備隊ヨリ一部酒配給方希望(二、〇〇〇貫～三、〇〇〇貫希望)

(神崎国民学校跡・連絡員本庄長正主計中尉)午後一時

一八〇、〇〇〇人×五〇匁=九、〇〇〇貫

安芸・佐伯・安佐郡ニ各一、〇〇〇貫

救護用一、五〇〇貫四五〇〇貫

計一三、五〇〇貫

輸送……八・一四トラック一台要求、油手配

容器……八・一四市周辺地帯ヨリ借集メ、楠原非常用味噌ヲ詰替暫配給

配給……八・一五

◎患者ニ鶏卵ヲ配給方手配セヨ…(長官指令)…農業会、配給方法ハ衛生課ト連絡セヨ

佐詰類五日市ニ在リ六二、四〇〇匁

牛乳毎日六〇〇～七〇〇人チチヤス(配給責任者・和田)配達人アリ

砂谷酪農組合(六斗～七斗)……油又ハ自動車手配ノコト

八・一三ヨリ衛生課ノ指示ヲ受ケ、配給ノコトニ決定

食器類ハ救護課ヨリ地方事務所ヘ手配ノコト

附添人食糧、患者ニハ粥食、味噌、塩、自炊設備ヲ用意セヨ……(生活物資課)

◎現在、町内会整備中、順次通常配給ニ移ス

主食ハ営団

副食ハ食配主任及ビ配下二人位配置済

◎宇品・村上康夫(醤油醸造場) 醤油、諸味相当アリ……現状ヲ見テ修理ノ上保管セシムルコト

塩尾道ヨリ六〇俵、入荷分ヲ署長ニ任ス

炊事ハ学校教員、八・一五日ヨリ開始……女学生一五〇人応援

救護所ノ責任者ヲ決定、鍋、釜ハ救護課ニテ手配

蔬菜出荷(安佐郡)当初計画ノ約半分ニ過ギズ

八・一四(広島)二、〇〇〇貫(呉)二、四〇〇貫

一五三、〇〇〇貫二、四〇〇貫

一七二、九〇〇貫二、九〇〇貫

一八二、九〇〇貫二、七〇〇貫

一九二、四〇〇貫二、九〇〇貫

二〇三、九〇〇貫三、二〇〇貫

計(広島) 一七、一〇〇貫(呉) 一六、五〇〇貫

安芸郡一〇、〇〇〇貫(一〇日間)

佐伯郡一〇、〇〇〇貫

市内一五、〇〇〇貫

八・一八二ハ、二一日～三一日迄ノ計画ヲ、立テルコト

郡内ノ大口消費ハ青果統制組合及ビ軍需ヲ含ム軍民ノ振分ケ折衝中

白米既ニ八・一五迄配給済

軍ヨリニ、〇〇〇俵……宇品ヘ着荷

八・一四山口萩ヨリ順次送出ノ予定

非常配給

警防団(警官ヲ含ム)一、六五〇人

救援地三四八人

〃(訓導)三一人

〃五二人一人当ニ・一合宛

土木八一人今後市ノ救援が増加スル予定

耕地三一人

重傷患者二、三六〇人

計四、五五三人約一〇石

防衛宿直ニ対スル食糧ノ問題(官公署、直接監督指導ノ責任者)今マデ、一合程度加配

浜井市配給課長ト連絡

八・一三・〇〇市役所ニ於テ聯合町内会長召集(三三人中、三〇人出席)

一、聯合町内会長会議ニ於テ、下部組織ノ整備、食糧配給ノ切替ノ趣旨、之が実施上ノ協力等指示スルコト

二、綜合配給所従事者ノ勤務、陣容ノ整備、配給確保ニ対スル配意等ニ付、一層ノ精進ヲ望ムコト

三、各配給所ノ視察ヲ当分ノ間実施スルコト

(註)浜井市配給課長は、後に広島市長となった人である。

(編者註・欄外記入ノモノ)

◎砂糖◎野菜◎缶詰

大森経済第二部長静養先可部町署附近”笹木旅館”

食糧荷役(食糧事務所へ連絡員ヲ出スコト)

一〇輜貨二、〇〇〇俵(自動車六輜)馬車配車――五日ヨリ五屯一車輜一最低二四〇俵積

四、〇〇〇俵×七日間＝二八、〇〇〇俵爾後毎日二〇輜ノ予定

計三〇、〇〇〇俵(一二、〇〇〇石)(軍ノ警備、警防団ノ応援＝六〇人、トラック配車)

◎福山物産焼失製麦設備糧秣廠(八木村)……第二総軍へ話スルコト

(自動車一台六〇俵～四〇俵一日四往復)

宇品ノ分八月一二日一八、〇〇現在

朝米九〇〇俵……八、一三日完了

食糧営団外米六五〇俵……八、一四日完了

〃三五〇俵……五〇俵ヲ似島、三〇〇〇人配給

八、一三イリコ一人一〇匁見当一、三八〇貫＝一三八、〇〇〇人配給

現在当イリコ六、〇〇〇貫(外ニ愛媛ヨリ、一〇、〇〇〇貫入荷見込)

鰻五、〇〇〇貫(八、一六一人半枚一八〇、〇〇〇人分準世帯共第一回分)

削節五、〇〇〇貫

昆布一二、〇〇〇貫

白米約九〇〇俵

腐敗センモノ雲丹漬

工場関係一八、一四日中ニ労政課ヨリ資料取纏回付アル筈

隣接町村転入者ニ対スル特配……実情調査ノコト(員数)

◎非常配給完了後、水産関係団体協議会……水産課草津ニ選定

◎曉部隊ノ協力ニヨリ、イリコ六、〇〇〇俵入荷、内一割六〇〇俵ハ曉部隊へ配給、罹災者用及ビ市へ五〇〇俵配

給セリ、改メテ長谷川少佐ニ懇談ノ上措置スル筈、残数二、〇〇〇～三、〇〇〇俵@一貫俵

双三郡ヨリ計画外入荷ノモノ

漬物(梅干、沢庵漬)トラック一台……救護所へ配給

トマト、胡瓜、南京〃一台……大手町地区へ配給

富国ビル収容ノ患者

燐寸、ローソク、白米、味噌、醤油、塩、副食物配給手配ノコト

長官室用白米特配ノコト

八月十四日

味噌五日市驚見旅館、山門醤油味噌組合理事ヲシテ業者ノ応援方手配…味噌ノ詰替(配給所へハ大樽、収容所へハ小樽)

一般世帯七、〇〇〇貫(三五〇丁)(八六丁空樽借入使用)

白米積卸シニ、〇〇〇俵、警防団員六〇人、貨物自動車六輜

野菜広島向・安佐郡差出シ分二、〇〇〇貫内五〇〇貫市民向一、五〇〇貫軍需向

梅干収容所へ配給

スルメ一、〇三八貫一人当六匁(半被)

乾麺(三星製菓所)二、〇〇〇梱

内一、〇〇〇梱…農林省…箱入

内一、〇〇〇梱…県……吸入

塩一人当二〇〇瓦

みかん缶詰収容所患者ニ配給(郡部ノラモ含ム) …衛生課渡

四八個入一四四箱六、九一二個

大手町配給所

従業者一人配給所タルノ表示ナシ(野菜、乾物)

秤ノ備付ナシ目分量ナリ(八、一一開設)

イリコハ配給課ニテ取扱フ

燃料ハ別ノ処ニ保管

主食糧ノ配給設備不十分ナリ、改善ヲ要ス

千田町二丁目町内会事務所電鉄前花咲印刷所

千田町三丁目北組〃〃森信商事

千田町三丁目南組〃〃池田良雄(二八二人)

千田町配給所……主食ノ配給ナシ市役所ヨリ何等ノ連絡ナシ塩ノ配給現在手配中

南竹屋町下組町内会事務所高師プール事務所内

近藤、原田代行……(米、塩、イリコ、玉葱、配給済一二九人)

南竹屋町上組、平野町町内会高師プールの町下土井方……(イリコ、塩済、米、野菜ナシ)

◎大手町食糧配給所

(千田町三丁目電鉄裏＝糧休蔵精粉工場)

主任・中川小一(元鷹野橋主任)

(元昭和町、千田町配給所ヨリ一名宛応援ニ来ル)

三滝ヨリ配給ヲ受ケニ来ルモノアリ

一二、一三、二日間ニテ九四俵現在手持ナシ

(配給区域本川・中島・袋町・千田・神崎・竹屋各学区)

皆実町下配給所(皆実町三丁目)

在庫玄米七〇俵白米八〇俵外米三〇俵

麦七〇俵大豆三八俵玄高粱七二俵

馬鈴薯一二俵(コノ分本日出荷)

皆実町学校区(比治山本町・皆実町一丁目・二丁目西部・焼失・二丁目東部・三丁目西東・翠町)

(聯合町内会長→町内会長→隣組長→配給)

◎事務整理期間(一〇日間)ヲ置き、夫レ以後ハ通常配給ニ切替フルノ措置ヲ講ズルコト→広島市復興ノ方針ヲ

早ク示スコト→罹災者証明ト通牒配給トノ複雑性ノ解消ヲ考慮スルコト

副食物ハ、従来ノ綜合配給所(笹田氏)ヨリ聯合町内会長ニ引渡シ、聯会長ハ之ヲ町内会長ニ引渡ス

◎毎朝、関係者ノ打合会、連絡会ヲ開クコト

慰問用葡萄

八、一七一八、二一毎旦一、〇〇〇貫集荷予定五、〇〇〇貫

仁保工業指導所九・〇〇

大洲橋一三・〇〇

八、一九九・〇〇(平時切替)

蔬菜出荷打合会…当課・生産課・配給課・統制会社・経済保安課

八、一五宇和島ヨリ海苔八、〇〇〇枚到着

八月十五日

特高主任會議内容昭和二〇、八、一五

一、市民の動靜につき署員一体となり協力すること。

二、軍隊、在郷軍人、右翼、左翼、内鮮関係の動向を査察すること。

三、朝鮮獨立運動の警戒。

四、流言取締。

五、詔書の内容を体し、指導者の責任遂行を期すること。

六、經濟界、金融界を撓亂し、事務の延引渋滞を図るが如き行動の警戒。

七、物資買溜め、窃盜、強盜、職務怠慢者の増出の警戒。

八、戦災者、戦死者、出征軍人遺家族への対策強化。

八月十六日

世界平和確立についての動き

二〇、八、六原子爆弾使用。

〃〃九ソ連参戦、最高戦争指導會議及び臨時閣議。

御前會議においてポツダム宣言受諾決定。

〃〃一〇重臣會議、臨時閣議。

二〇、八、一一ポツダム宣言受諾通告。

〃〃一二首相参内、御前會議、皇族會議梅津、豊田、東郷、平沼、鈴木参内。

〃〃一三正式回答決定。最高戦争指導會議、閣議開催(国体護持につき意見一致せず)。

〃〃一四二回首相参内、元帥會議、御前會議、遂に聖断を仰ぐ。

三回閣議を開き、遂に詔勅換発。

阿南陸軍大臣自刎。

ストックホルム発同盟＝戦争終了を発表。

〃〃一六鈴木内閣総辞職内務次官、警保局長、警視總監辞職申出、勅選議員補充。

(註)終戦処理要綱

一、停戦協定の順序

戦争中止を全軍に布告

停戦取り決め

敵の保障占領

協定委員会にて条約協定

二、戦災者、戦死者遺家族の処遇に留意

三、大御心を奉戴し、輕挙妄動を慎み、職務に挺身せよ

四、動員学徒の取扱農業関係については、引続き動員

工業関係は、都合によつては引揚ず

五、疎開学童の取扱親元に引揚ず

大竹海兵団並びに大竹海軍潜水学校よりの食糧借受けと、その引取り計画

(編者註・欄外記入ノモノ)

欄外記入の数字は、大竹海兵団、潜水学校より借受けの食糧引取りに要する鉄道貨車の所需車輛数である。

ワム二四〇俵(一五屯)～一六〇俵(一〇屯)屯＝一六俵乃至一七、八俵

二〇車輛(大竹) 一〇輛(大野) 三輛(玖波) 四輛

〃一〇〃三〃三六輛

〃六〃

八、一七一三輛二、六〇〇俵

八、一八一〇輛二、〇〇〇俵

海軍兵団

四、〇〇〇俵大竹駅付近倉庫ニ在リ、積込ニ付、兵員ヲ援助セシム

貨車配車ノ件、積込時間ノ件鉄道電話ヲ以テ連絡ノコト

海兵団掌衣糧長森福正蔵氏ニ連絡ノコト

潜水学校

・厳島一、二〇〇俵……商船浅瀬附近(六〇キロ入)

小方村(玖波ニ近シ)一、〇八〇俵……内地米五〇キロ入

大竹精米所一、一三八俵……内地米五〇キロ入(内八——俵ハ駅ヨリ七、八町アリ)

・玖波(駅附近)三九七俵……(六〇キロ入)

・駅前三二七俵ハ人力運搬可能

大野六〇〇俵(内地米五〇キロ)……曉部隊ノ附近

トラック手配ノモノ兵員運搬可能ノモノ

小方村一、〇八〇俵厳島一、二〇〇俵(船の手配を要す)

大竹八二俵大竹駅前三二七俵

大野六〇〇俵玖波三九七俵

計二、四九一俵計一、九二四俵

総計四、四一五俵

自動車実動八輛・油手配貨車輸送二、四九一三、二一五俵

七二四

荷牛馬車実動一二輛

蹄鉄修理ニヨリ尚一二輛蹄鉄、飼料ノ補給蹄鉄鉋鉋旋

(註)蹄鉄鉋一回三〇(主計中尉伊藤勉作)

日通実動車六〜四輛(陸然)

(1)厳島一、二〇〇俵(一日)ハ曉部隊ヨリ配船……日取連絡……兵員援助ニヨリ積込

(2)トラッカー輛六〇俵宛トシテ

一日……大野一〇輛(東亞陸運ノ応援)＝二輛

一日……大竹一四輛……馬車二変更

一日……一、四〇〇俵＝小方村一八輛一輛六往復二輛

玖波町七輛

(陸然…三輛)

日通井上氏……海兵団四、〇〇〇俵(六〇kg)兵員ホーム出、積込

潜水校三二七俵……兵員ホーム出

八——俵……荷馬車五輛……兵員ホーム出

鳥居原駅長……貨車ノミナラス機関車ヲモ連絡ヲ要ス(特別列車ヲ仕立テルコト)(一〇輛宛二回)

貨物主任・中川氏貨物係長・土生氏司令部・川平氏

◎馬鈴薯……広島二二輛、矢賀二一輛、至急引取ラレタシ

◎昨日ノ大詔渙発ハ朝鮮人ヲ強気タラシム(帰国申出者アリ)

◎本日ノ出勤状況三〇人、平常ノ三〇%以下ニ低下(四五〇人中、一〇〇人出勤)一火ノ消エタ如シ

◎房総半島、名古屋方面ニハ既ニ敵上陸開始ノ噂ヲナスモノアリ

潜水学校ト連絡ノコト

玖波一、四七七俵一小運搬六輛ニテ貨車三輛以上ハ(操業困難)

大野六〇〇俵一〃

八、一七一三輛海兵団二、六〇〇俵

〃一八一〇輛〃一、四〇〇俵

八、一八潜水学校六〇〇俵(直二三二七俵、荷馬車二七三俵)

〃一九三輛〃五三八俵(大竹)

〃 〃 三輛 〃 六〇〇俵(玖波)
〃 〃 三輛 〃 六〇〇俵(大野)兵員不要
〃 二〇四輛 〃 八七七俵(玖波)
〃 二〇船舶司令部ノ 〃 一、二〇〇俵
二一船舶ニヨル

八、一八大竹馬車ニテ積込一、〇六八俵
(小山)五俵午前八、〇〇
〃 一九大竹小方ヨリトラックニテ積込一、〇八〇俵五〇人
二輛六往復(陸然ヨリ二輛借上)(小山・田川)五輛八、二〇広島へ
〃 二〇玖波五一二俵三輛五〇人
トラック(日通一輛)五〇人
〃 〃 大野浦六〇〇俵(陸然ヨリ二輛借上)三輛五〇人
トラック(日通一輛)(小山・田川)
〃 二一厳島……曉部隊ノ都合ニ依ル、一旦宮島栈橋ニ着ケ、兵員ヲ乗セテ行クコト
(日通伊藤氏)

(註)終戦の詔勅を拝したその日、私は大竹海兵团、大竹海軍潜水学校に走り、下野大竹警察署長と共に食糧借受けの交渉を済ませ、翌十六日は、広島鉄道管理部に貨車の手配を依頼、その足で再び大竹に引返したが、列車遅延のため深夜に大竹へ着いたので、その夜は遂に大竹駅前の防空壕に一夜を明かした。
輸送車輛の手配については、小山静二氏(後比婆地方事務所長)が、寝食を忘れて当たられた。

(極秘)八、一六長官会議決定
一、戦争終結ニ伴フ国民生活安定策
イ、軍需生産態勢ノ切替……民需、民生ノ安定、民心涵養、秘密裡切替
軍需ヲ民需ニ移ス……経路ヲ不明瞭ナラシメ置クコト
軍需物資ヲ速ニ配給シ民有ニ移セ(一〇日間ニテ転換セヨ)
ロ、国民義勇隊、戦闘隊編成解除
国民義勇隊ハ其儘トス
国民義勇隊ノ使命
(1)国民ノ師表タルベシ……戒心自肅、民心ノ向フ所ノ道標タレ
(2)焼跡処理、罹災民救護、疎開ノ後始末
(3)会社工場……経済復興、生産能率昂揚ニ挺身
◎警防団ニ防空、防火、水害要員存続
(隣組ノ結束)配給、自給精神ノ昂揚

誓詞
“承詔必謹”誓ッテ総力ヲ国体ノ護持ト将来ノ建設トニ傾ケ、一日モ早く皇国
ノ再興隆ヲ図リ、以テ聖慮ヲ安シ奉ランコトヲ期ス
安佐郡阿村長会
〃 農業会長会

ハ、輸送機関ヲ民需、食糧関係ニ指向
二、(工場ノ転用……)
ホ、軍需生産……停止
民需物資生産ニ重点ヲ置き自由ニ生産
農具、建築材、セメント、繊維、紙……生活物資
松根油、松脂……人手ナケレバ後廻シトス
ヘ、食糧増産ト供出……特ニカヲ入レヨ、綜合計画ノ完遂ヲ図レ
ト、薪炭確保……継続セヨ重点ヲ入レヨ(農業土木工事)

チ、未開墾地ノ開墾……労力ノ確保(土地改良)

リ、漁業ノ復活……油・網ノ確保

ヌ、応徴士、指定要員、女子挺身隊近々解除…復員対策ノ急速ナル確立(一、〇〇〇万人)

ル、住宅ノ建設……農村方面ハ資材が許スナラハ制限セズ＝坪数制限

都市方面ハ制限ス＝戦時住区、戦時住宅

ヲ、軍人遺家族、戦災者、戦死者ノ援護

生活援護、生活再建→戦災者援護ノ徹底(七〇〇万人へ)

新シイ軍事援護対策ノ徹底→遺族援護、傷疾軍人ノ再起

衣料品、食料品、其ノ材料

医料品〃

通信、電話〃

ワ、学徒動員ハ解除

力、学童疎開ハ適当ノ時期ヲ見テ帰家セシム

ヨ、一、運輸、通信、食糧増産、戦災処理等、引続キ動員差支ヘ工場方面ノ学徒ハ操業ノ実情ニ応ジ決定

二、農村出身ハ農村へ、其他ハ戦災処理又ハ食糧増産へ

三、附設課程ノ学徒一校長ノ指示ニ依リ解散帰宅

◎凡テノ施設ハ軍ダト言ワセヌ様指導セヨ

◎都市疎開者ノ引揚抑制

(1)都市ヨリ地方農村ヘノ疎開ハ出来ルダケ援助スル

(2)現在、農村ヘ疎開中ノモノハ、食糧事情其他カラ今直グ都市ニ帰ラセズ、之ヲ抑制スル……農村カラ都市ヘノ移動証明書ヲ発給シナイ

◎呉市治安維持連絡会(毎日)

預金引戻シノ状況……(払込制限ヲナスが如キコトナキ様注意セヨ)

供出麦ノ保存方法……(農家ニ保存セシムベシ)

◎甘藷ノ早掘リ……五〇〇万貫……◎甘藷、砂糖ヲ原料トスル燃料生産ノ即時停止

◎交易物資……罐詰、塩鮭、繊維品其他至急配給スベシ

◎海軍志願兵、徴募検査取止メ

八月十七日

昭和二〇・八・一四～八・一七広島市内配給所視察結果

◎草津、古田……順調ナリ管理米二、〇〇〇俵ノ内七〇俵ヲ憲兵隊取得セリ

古田……配給米手持ナシ至急手配ノコト(営団ニ連絡済)

◎己斐……戦災者入込ミタル為、人員確定セズ目下調査中

(中通ニ在リ旧配給所ニテ取扱ヒ居レリ、燃料、副食共総合配給ス)

◎天満……配給所調査スルモ判然セズ福島交番所……倒壊家屋ヲ利用再調◎調味料、野菜、燃料ノ配給ヲ熱望シ居レリ

◎江波

◎三篠三丁目……コルク会社昨ニテ米ノ配給ヲナス(配給円滑ナリ)

副食、燃料等ノ配給所、停留所前

◎牛田…主…旧配給所…概ネ円滑、家庭持込常会渡

…副…牛田信用組合前…家庭持込常会渡

◎尾長……町民ノ協力ニ依リ、倉庫ヲ守リタリ、総合配給中、連絡完全、配給所主任亦優秀

◎向洋……被害ナシ。精米機ノ設備ヲ希望、副食等ノ配給ハ如何

大州…

◎仁保・渋崎……被害ナシ

八月十八日

県庁留置課長会議午前一一時

県庁本部東洋工業三階ニ移転云……事務

①衛生、救護、食糧、輸送、警察ノ一部門ハ残留

2 合宿関係ヲ切替フル為、合宿希望者ヲ会計課ニテ取纏ムルコト

③各課、傷病、死者、生死不明者ノ調査……人事課ニ連絡

4 健康者中出勤セザル者ヲ調査、欠勤届出、官吏秩序維持、復員ノ後ハ優秀者ヲ充実シ、怠勤者ヲ整理

⑤地方事務所ヨリ転勤替ヲ行フタメ適任者ヲ詮衡、人事課ニ連絡ノコト

⑥家族ノ住居所ヲ明確ナラシメ置クコト(救助金、俸給支給等)

7 従来ノ指示通報ノ整理、官報等ノ取揃(人事課)

⑧島根県石橋内政部長、広島県内政部長兼任発令

⑨政府ノ方針等ハ新聞ニ依リ、推測ノ上善処ノコト

⑩軍需ノ民需ヘノ転換(民間倉庫ヘノ入替、民間ヘノ配給)

11 農村関係……農耕中心、余力ヲ松根油ヘ、自給製塩、アルコール、草刈、麦供出、調整米、貯金引戻

(調整馬鈴薯)疎開者、疎開学童ニ飛行機献納金ノ件

12 戦災応急物資ノ急速払下げ

地区司令部ヘ取纏メ申出ノコト(食糧、衣料、建築資材、用紙其他、医薬品)

品物ノ内容ヲ早く知ッテ手配ノコト

内政課長中心ニ、関係課長協議ノ上手配

交貿物資ノ処分

13 応召見合せ、応召解除ヲ行フ

14 学徒動員解除、徴用工ノ解除

15 軍需工場転換ノ場合ノ失業問題(土地改良、土地開墾)

16 指導要項(別記ノ通り)

17 デマノ取締リ(児庁員トシテデマヲ飛バスコトナキ様)

(註) 県庁ノ東洋工業ヘノ移転は、八月十八・十九日に行われ、八月二十日から本格的に同所で事務が始められた。二十日午後一時同社講堂で長官の訓示があった。

◎(横川八・〇〇)発通勤用バス一台ヲ出ス、停留所等細イコトハ通知スル)

指導要項

一、政府公表ノ経過内容及ヒ戦争終結ニ至ルノ已ムナキ状況ヲ詳細ニ伝ヘ、全国民ノ結束ト奮起ヲ要望スルコト

ニ、国内輿論ハ全国民結束ヲ保持シ、国体護持ト国難ニ当ルベキコトヲ根軸トシテ、コレカ指導取扱ヲ行フコト

具体的内容左ノ如シ

(イ) 現下最大ノ問題ハ大御心ヲ奉戴シ、飽迄モ国体ヲ護持シ君民親和シ、一億全国民一致結束シテ臥薪嘗胆、未曾有ノ艱難ニ当ルコトヲ強調スル

(ロ) コノ未曾有ノ国難ヲ招来セルニ付、国民悉ク責任ヲ分チ、上陛下ニ対シ奉リ深ク謝シ奉ル。不射ノ誠ヲ竭シ奉ルト共ニ、皇国伝統ノ精神ヲ遺憾ナク發揚シテ、一切ノ事態ニ対処スルコトノ特ニ必要ナル所以ヲ強調スル

(ハ) 今後ノ難局ヲ打開スル為ニハ、戦争以上ノ苦難ニ耐ヘル覚悟ヲ持チ子々孫々トトモニ、一意皇国興隆ニ邁進スルコトヲ強調スルニ国民ヘノ杞憂ヲ取除ク様説明スルコト

(ニ) 時局ヲ痛憤ノ余リ同胞互ニ傷ケヘ含ヒ、又ハ経済的、社会的、道德的混乱ヲ惹起スルコトアラバ、皇国滅亡ニ至ルベキ杞憂ナドヲ強調スル

(ホ) 共產主義的、社会主義的言論ハ、徹底的ニ取締ル

(ヘ) 事茲ニ至レルニ付、一般的憤激又ハ悲哀或ハ批判ハ、コレヲ認ムルモ勅諭議決定方針ニ、全然相反スル戦争継続論文其国内結束ヲ索ル論議ハ之ヲ取締ル

(ト) 軍政府ソノ他指導層ニ対スル所謂戦争責任追及ノ論議ハ之ヲ取締ル

(チ) 直接行動ヲ惹起スル如キモノ又、自暴自棄的言論ハ之ヲ取締ル

(編者註・欄外記入ノモノ)

“言論集会、文書頒布ノ禁止”

御真影ノ件

昭和二〇・八・一八午後一時市長、地方事務所長会議

長官訓示

戦争終結ノ事由、戦災者、戦没者及ビ其ノ遺家族ノ援護

万難克服将来へノ建設、国民ノ衷情、輕挙妄動ヲ戒メ、信義、道義ノ確立、陛下御自ラ勅語ヲ賜フ(ラヂオ)

一、大御心ノ指導者階級へノ徹底

二、国民学校教職員へノ徹底ト青少年ノ奮起ヲ促ス

三、中等学校教職員ハ県ニ於テ代表者ニ対シ徹底ヲ期ス

皇国護持……日本国民タルノ矜持ト氣魂トヲ失ハサル様指導スベシ

指導要領ノ説明

大藏大臣談ノ説明

安佐郡よりの蔬菜出荷計画(昭和二〇・八・一八)

出荷量計(呉軍需、呉民需、広島軍需、広島民需)

八・二一九、〇〇〇貫広島民需分六五〇貫

二二九、五〇〇貫一、一〇〇貫

二三一一、一〇〇貫一、一〇〇貫

二四一〇、〇〇〇貫一、一〇〇貫

二五一〇、五〇〇貫一、一〇〇貫

二六一〇、七〇〇貫一、一〇〇貫

二七九、〇〇〇貫一、一〇〇貫

二八九、五〇〇貫一、一〇〇貫

二九一〇、一〇〇貫一、一〇〇貫

三〇九、〇〇〇貫一、一〇〇貫

三一〇、一〇〇貫一、一〇〇貫

計一〇八、五〇〇貫一一、六五〇貫

八・二八安佐地方事務所九・一〜九・一〇の出荷計画打合せ

八・二九広島市役所……配給計画打合せ

(註) 広島市民に配給する蔬菜の出荷が思うように進まず、この供出督励には一方ならぬ苦勞があった。

この計画にもとづき辛うじて広島市民への蔬菜配給は、細々ながらも続けることができたが、この供出には当時の安佐地方事務所長榎本米一氏(既に故人)、県青果統制組合専務理事瀬川義士氏、県食糧配給統制組合理事長寺川正雄氏との並々ならぬ御尽力を得た。

八月十九日

◎最高司令官マッカーサー政治顧問ヲ置ク

分割占領セラルルコトナカラン(八・一九朝ノニュース)

◎保障占領軍ノ本土進駐ハ停戦協定成立後……上陸日時ハ政府ニ於テ其ノ都度予メ発表

停戦協定成立ノ順序

一、軍事代表派遣

二、全戦線ニ於ケル正式停戦時協定

三、日本軍武装解除ノ方法、軍船、飛行機其他武器ノ引渡、軍隊ノ処分、捕虜ノ引渡、占領軍ノ上陸地点、保障占領地域等ニ於テノ敵側ノ通告受理

四、協定調印

五、本土進駐

進駐軍ニ対スル便宜供与……輸送、宿舍、食物ノ供給保障、占領ハ軍事占領ニ非ラズ、戦闘部隊ニアラズ、從テ直接ニ食物、宿舍其他民需品ノ徵発ヲ行ヒ、預貯金ヲ差押フルガ如八月二十日

馬鈴薯配給手配の件(昭和二〇・八・二〇)

綜合配給用……四〇六万貫

蔬菜用……一〇〇万貫(調整用ヲ轉換)

調整馬鈴薯五〇六万貫

(日甘及ビ青果)

|| ||

綜合用蔬菜用

貫当……五五錢一円二〇錢

八月二十一日

◎昭和二〇・八・二一豊田郡下各種団体長会同における豊田地方事務所長の伝達事項

一、御真影焼却問題

二、戦死者ノ碑文抹消問題

三、救護会ノ強化又ハ停止問題

四、燈火管制ノ解除

五、貯蓄ノ件

六、大詔奉戴日ノ件

七、藁工品供出物資等ノ件

八、呉市疎開児童受入設備費ノ件(一人二〇円ハ板代ニ足ラス)

九、馬鈴薯ノ供出

一〇、藤皮、蓬ノ供出

一一、松根油設備費補償

(註)御真影焼却、戦死者の碑文抹消など終戦当時の気の配り方が窺われる。

履歴書から軍籍に係る履歴事項を抹消したのもこの時である。

◎外食券食堂設備の件…昭和二〇・八・二一より広島駅前、己斐駅前、県庁前(東洋工業前)に設置

◎県下抑留外人優遇の件

缶詰、食肉、砂糖、バター、油……外人(八一人)

油、臍物、雑穀……支那人(三一〇人)

(註)この措置は終戦と同時に直ちに手配したものである。

八月二十二日

昭和二〇・八・二二午前一〇時日本製鋼所広島製作所における軍需物資転用に關する打合会記録

◎引取ノ準備ヲ為シ置クコト

引取責任者総監府……広島県ガ代行

一、兵器補給廠(経済保安課)……霞町

ガソリン、油、軍刀、双眼鏡(通信機械)

二、被服廠(生活物資課)……旭町比治山裏

防寒具・被服等四万着(内一割〜二割保留)

材料三〇万着分

保管物品……西条保留分以外ヲ紀給ス

八・二二一一、〇〇打合セヲナス

三、需品廠……海田市高女本部……矢野需品廠……総監府

竹内副参事官一需品廠在庫品転換場所照会ノコト(地方事務所、警察署)

建築材料、通信材料、銅、鉛其他、輕車輛

(生活物資課、土木課、農務課、地方事務所五人……三次、廿日市等)

帳簿ノ査定ト實際数量ト一致セザルモノ可然取計レタシ

四、糧秣廠(食糧課)……宇品……主食ナシ

削節、茶、イリコ、甘味材料一、〇〇〇屯

釘、ブリキ板、藁工品等……宇品海岸倉庫、海田市、海田市附近民間倉庫(各県毎ニ各県ノモノヲ取ル)

糶込……愛媛県ニ相当量アリ……「小運搬具二七輛、鞍、庁中用品、用紙、ブリキ、ハンダ、釘、一升壺、王冠」二〇日頃受領ノコト

五、衛生材料(衛生課)……府中町教徳寺

島少佐東城一八、 $\left\{ \begin{array}{l} 〇〇〇梱……現品所在地ニテ引継タシ \\ \end{array} \right.$

広島一、〇〇〇梱

△輸送関係……明日改メテ協議

食糧、ガソリン、其ノ他重要度ニ応シ順位決定

広島市罹災者ニー〇〇、〇〇〇枚ノ被服給与…福山モ考慮

△総監府へ受領明細報告、各官庁毎へノ割当ハ有償ナレドモ決済ハ後ナリ

(編者註・欄外記入ノモノ)

関東厚木飛行場に、二六日空挺隊到着

(千年四隻、鯨崎二隻、浦崎三隻)＝宇野一四隻

(曳船日立二隻、占部一隻)

◎(大豆油三、五〇〇＊、落花生一、三〇〇＊、菜種油五、五〇〇＊、ガソリン四、〇〇〇＊)…大三島、

盛口ニ在リ

防府(東亜化学)

大豆粕三、三〇〇屯雑穀米六、六〇〇屯曉部隊トモ折衝ヲ要ス

油二、八〇五屯砂糖一、六五〇屯

◎広島陸軍燃料廠防府出張所…中国海軍局ニテ配船手配ノ予定(八・二二午後一、三〇打合せ字品税関) 吉田大尉

八・二二一三、〇五中国海軍局トノ物資輸送懇談、管理部へ連絡、輸送配車関係ハ、本日管理部ニ於テ打合中

西日本地区(千年・浦崎・鯨崎)石炭輸送

八・二四午前中一〇〇屯(尾道署)

解、平均二七〇＊曳船

八・二四日中、午後三時迄ニ海軍局ニ連絡

(小幡氏大阪支店長)三菱、水野、占部、日立(曳船組合、日産)

(須波一五〇屯～四五隻使用可能)

警防団員ノ応援手配ノコト

◎ラジオ発表……八・二二正午警防団解消

◎吉田大尉ノ話……可成砂糖カラ荷捌シタシ、三田尻二一〇〇輻帯庫中、遂次五〇輻宛廻送

◎田川氏ニ依頼……船舶司令部応援ノ件打合せ

◎オート三輪車、借入方ノ件交渉(東洋工業)

◎大竹潜水学校

岩永少佐(内務長)……八・二四日連絡ノコト=(青果会社倉庫ニ入レ替へ)

耐火粘土五＊セメント二〇〇袋耐火煉瓦二、〇〇〇個

◎船舶重営会広島支部業務部副参事伊藤健次郎(字品三二八一九)配船手配協力ニ付来所……配船程度回答アル筈

◎大竹海兵团

宮島白米約三、〇〇〇俵……二八日ニ兵員援助ニ依リ引取ルコト

乾パン一、四〇〇箱

麦粉二、〇〇〇梱(船内)

大竹町内缶詰二、〇〇〇箱二八日以降ニ相談

白米三、〇〇〇俵

帰還要員ノ食糧ニ充ツル為、引渡不能、九月三日頃頃今一度打合せ

◎大竹海兵团、大竹潜水学校所有ノ被爆相当アリー呉軍需部大竹支部…呉ニ連絡ノ上引取措置ノコト

安佐地方事務所糧秣廠物資

山県地方事務所

八・二五…実情調査山県倉庫ト看板ヲ掛替へ

曉部隊ノ物資ノミー〇ヶ所へ分散保管ス(有木中尉・佐藤曹長)

壬生町へ八重ヨリ砂糖一五〇俵米二五〇俵(藤井商事)

◎軍需転用物資ノ入手、獲得、配給糧秣廠

戦災者配給物資ノ末端配給状況ノ把握呉鎮軍需部

今後/戦災者配給物資ノ末端配給状況ノ把握

◎各物資別受払簿ヲ備付クルコト

物資別基礎調査

物資需給状況

(註) この会議は、昭和二〇・八・二六に連合軍隊のわが国進駐が開始されるという情報が入ったのに備え、終戦処理のために成立した東久邇内閣の決定に基き、八月二六日までに引取りを完了するようにとのきびしい中央からの指令で行なわれたものである。

しかし、輸送能力も潰滅に等しい状況で、このようなことは無理な話であり、一策を案じて看板を民間名義のものに書き換え、糊塗するというような措置も採られた。

私の前記メモの中に、八・二五…実情調査、山県倉庫と看板を掛け替えとあるのはその例である。

八月二十四日

食糧検査所の運営について

調査課八・二〇現在収獲予想調査

健在者所長成田泉田川鉄雄主任梶原技師加藤技手長谷技手新宅属

(一六名中、八名死亡、二名負傷、六名健在)

事務室ノ供与方手配ノコト

事務室ニ区劃ヲ設ケ、落付テ仕事出来ル様ニ考ヘルコト

八月二十五日

醸造指導所の事務について

原料……脱脂大豆、焼麦、フ

醤油、味噌ノ種糎……焼失……醤油、味噌ノ仕込ニ支障アリ

西条分場…来月五日頃迄ニ種糎ノ製造ニ着手

塩入手ナキ為在庫ナシ醤油ハ仕込ノ見込アルモ味噌見込ナシ、味噌ノ種糎ノ製造ニ依リ仕込促進ニ努力

本所長橋本負静養中当分出勤見込ナシ(西条指導所福島属)

(従来技術員七人)酒井技師、樋口技師、西脇嘱託

(酒井、樋口氏……西条分場ニテ従事二、三人雇入レノ上)

現在、仕込中の葡萄酒……一〇〇石程

自給製塩ノ援助

◎三原国民学校乾パン一〇万食

◎東警察署乾パン二〇万食玄米三〇俵代替配給

苧ノ特配

◎救護班三五班ノ給与ヲ厚クセヨ酒ノ特配

牛乳ノ特配

坂村……小屋浦救護所二八六八……食糧配給手配ノコト

昭和二〇・八・二五一三・〇〇広島県県政協力会議

(県会議員代表五人、県下市町村代表、翼賛会関係代表その他三〇人位)

一、福山ノ戦災跡地整理ノ為、農機具ノ斡旋、焼土ノ効力如何(質問者福山中島議員)

加里分肥料ハ含ムモ窒素肥料ハ僅少又ハ含マザルベシ

二、戦災地土地物件使用関係(質問者呉市葉山氏)

一ヶ月後ハ物件ノ所有権ヲ失フ

二ヶ月後ハ土地使用権ヲ失フ

三、進駐軍占領後ノ治安維持方策

警察隊、武装警察隊、憲兵、海兵隊ニ依リ治安ヲ維持

四、ラジオ放送

八・二四一八・〇〇以後一〇〇屯以上ノ船ノ運行禁止、飛行機ノ航空禁止

広島市戦災者ノ救護ヲ徹底(特別二) セヨ

八月二十六日

長官命令

- 一、県庁員ノ出頭連絡広告ラジオ放送ノ件
 - 二、県庁員ノ募集広告ノ件中卒以上、高小卒以上(厳選主義)
 - 三、自動車運転手募集広告ノ件軍トノ連絡(船舶司令部海軍)
 - 四、大工、守衛、小使、給仕等ノ雇入
- 庁員ノ死亡確認取扱ノ件……部長協議ノ上決定スベシ

八月二十七日

戦災復旧官公署連絡会議午後一時より於県庁

広島県高野源進知事

- 一、永野経済部長を鳥取、島根両県に派遣し、近畿方面向け食糧の当県への転換方を手配せしめた。
- 二、製表設備の拡充＝福山にある軍の施設を引受けた。
- 三、甘藷二・七億万貫(全国)、本県は五〇〇万貫の早掘供出を計画した。
- 四、医療救護関係

昨日(八月二十六日)を以て患者全部を軍より引受け三三ヶ所に収容した者二、一〇〇人、通院患者二、〇〇人、各町村に収容の患者二、〇〇〇人計六、一〇〇人。各府県よりの応援救護班の派遣、軍帰還軍医の応援を得て救護に当たっているが、昨今死者が続出。収容患者の一割程度が死亡している。

- 五、県庁は、現在東洋工業に移転しているが、中国地方総監府も昨日(八月二十六日)東洋工業に移転した。

後任の児玉九一総監は、明日(八月二十八日)着任の予定である。

- 六、浴場、理髪所、簡易宿泊所の建設が急がれる。
- 七、橋梁の復旧＝当面福島橋、己斐橋の復旧が急がれる。
- 八、破損建物の修覆援助と焼跡地への仮設住宅の建設。

広島市柴田助役

- 一、仮設住宅建設用木材の斡旋を得たい。一五坪程度のもの六万戸で九〇万石を必要とする。
- 二、応急土木建設団による大工、左官等の斡旋を得たい。

上記に対し広島県知事より

- 一、建設用木材は斡旋するが当面真にやむを得ざるものに限る。
- 二、大工、左官等の斡旋は考慮計画中である。
- 三、焼跡地バラック居住者の実情を調査せられたい。

なお自活の道なきものも調査せられたい。戦災保護法により保護する必要がある。

(これに対し、広島市助役より江波方面に、一〇〇世帯程度ある旨を述べられた。)

検事局

- 一、検事局職員の大部分は着のみ着のままなり。食糧及び衣料の配給について特に考慮してほしい。
- (毛布、靴下等)

中国配電

- 一、電灯の復旧状況

電業局全滅したるも県下の応援を得て三篠町、千田町以外には配電、残存区域、主要幹線は概ね復旧せり。明日位より三篠方面配電線の一回線復旧の見込。(福島町、尾長町方面未点灯)

- 二、残存家屋の点灯

復旧班一〇班を以て実地につき調査し、概ね復旧したるものなお重ねて調査の上、破損程度により点灯するか否かを決定する。

上記に対し

- 一、収容所になお点灯せざるところあり
- 二、準世帯、街灯の点灯
- 三、電鉄の電柱にも点灯せよ

等の要望あり。

逓信局

県庁、総監府の電話架設は至急手配する。

郵便局広島駅前局舎建築の計画あり。協力を望む。敷地関係は公共的のものにつき、地主との手続を簡易ならしむるよう配慮を得たい。

三、県庁、総監府のために郵便局分室を県庁内に設置したい。

広島電鉄

一、電車、バスの運行回復計画

駅前―県庁。県庁―東警察署間のバス運轉は増加は、現状においては困難なり。

己斐―左官町間。(但し土橋迄に止まることあり)

宇品―電鉄前間(電鉄前―土橋間はバス連絡)開通せり。

二、架線工夫の援助要望

架線工夫なきため架線復旧工事が遅延しているので援助を得たい。

(これに対し、架線工夫の援助派遣方を京都方面に依頼しては如何との話も出た。)

鉄道局

一、通勤列車の運行目下研究中。遂次実施に移すが、可部線との直通運行は困難なり。

二、水道については軍の協力により補修中。

軍側

一、呉及び尾長方面に自衛団を設置したが、成績良好である。

二、屍体の処理を迅速に行え。

三、水道、電灯の復旧に力を入れよ。(大國部隊の援助を得て努力中)

四、被服一〇万着のうち、どの位配給せりや。

一五屯貨車四〇輛二、三日前積込み本日到着の筈。

一〇万着中には、鉄道局、逓信局の分も含む。

貯金局

一、焼失貯金通帖の再交付に全力を挙げて努力中。

そのため地下室に合宿。寝具類、窓枠用材、地方応援者の食糧について配慮を得たい。

◎戦災死者の叙位叙勲、官等陞叙の手続をすること。

◎救護所用として収容者一人当任詰二個、砂糖二斤特配すること。

八月二十九日

中立国利益代表、広島県知事を訪問、広島市内の罹災状況を視察、このうちに国際赤十字社マルセル・ジュノー博士あり、視察案内中の小職にたいし、

一、余の友人で、ビルフィンガーという宣教師が尾道に居る筈につき所在を確め連絡を乞う。

二、蚊や蠅の発生、目を蔽うものありて見るに忍びず。驅蚊蠅蚊蚊薬D・D・Tの撒布を行わん。

D・D・Tは撒布後数分間、眼及び皮膚を刺戟することあるも、人体に害なし。

飛行機により、空中より撒布すべきにつき、その旨連絡手配せられたし。

との申し入れがあった。

九月二十日

呉鎮守府通信隊司令高内大佐の要請

一、呉一中焼跡を呉鎮守府通信隊において使用したい。

二、現在、呉一中では夜間中学開設中であるが十月中旬閉鎖、電信設備をなし海軍通信所として存続、十一月頃まで借用したい。(呉一中側に連絡、諒解済)

三、上記のため、兵員約一〇〇名宿営、電信設備をなす。

九月二十一日

風水害対策協議会PM一・〇〇

(安芸)死者二四七人田畑流二四三町

一、土木技術者ナキ為護岸修覆等ニ困難ヲ感ズ

二、災害状況調査ニ付町村の繁瑣ヲ避ケヨ……報告書取纏考慮セヨ土砂流出河岸の方却テ堤防ヨリモ高クナッテイル所アリ

(豊田)田畑ノ被害甚大

”幸可麦一、〇〇〇俵、米五〇〇俵浸水”

(山県)道路破損甚大一〇、〇〇〇間決潰

堤防七、一五八間決潰

田流失五一・二町畑流失三五町

米収穫皆無二一四町

甘藷七三町

雑穀二二町

(高田)水稻土砂流入二三一町

畑〃九五・四町

◎呉線一〇・三開通

山陽線一〇・六〃

可部線見込ナシ

芸備線近日中開通

(註)昭和二十年九月十七日、暴風雨襲来し、県下の被害甚大なりしも通信杜絶し詳細判明せず。その収まるを待って警察署長、地方事務所長会議を招集、対策会議を開催した。

九月二十七日

第一〇軍団駐先遣隊レイノア中佐との会見記録

昭和二〇・九・二七午後二時より呉鎮守府司令長官官邸において

(註)この会見は、日本側中国地方総監府山口参事官、広島県石橋経済部長以下関係課長二〇名。第一〇軍団側は先遣隊将校レイノア中佐外に黒人の大尉の二名によって行われたが、この会見におけるレイノア中佐の態度はまことに謙虚そのもので、日本側関係者に煙草をサービスするなど、戦勝に驕る様子の無いことには心打たれるものがあった。以下この会見でレイノア中佐から日本側に要求されたことについて記録する。

レイノア中佐の発言要旨

私は、第一〇軍団駐在に伴う土地、建物その他の便宜を得ることを役目としている。

この会合では、如何なる方法により接収するかを説明する。

私の諒解するところでは、装置、土地、便宜の獲得はすべて日本の機関を通じて行うことになっている。

山口氏は、東京の中央の責任者であるが、そちらからこちらへ人を寄越して連絡に当ることになっている。

各県にその事務の主任者を置かれることになっていると聞いたが、このたびの台風で、全部揃っていないがそれを待つわけには行かないので、それが揃うまでに事務は始めておいて貰いたい。

多分十月三日前後に部隊が呉、広方面に上陸すると思う。そして当分の間この方面に駐屯することになっている。

今のところ、広島に軍隊を出すことにはなっていないが、飛行場を作ることになるかも知れない。

十月末には、五、〇〇〇人が岡山に駐在する筈である。

獲得接収には軍隊の必要なものは、秩序ある方法で為すことになっている。

上陸して必要なものは、直接取るのではなくそれぞれの機関を通じて与えて貰うということになっている。

日本設置委員会で差し出されるものは、明朝申し上げることになっている。

実際には呉、広において必要であるが、供給して貰うものについては、広島県及び他の県から供給して貰うことになろう。

軍隊の単位単位に接収獲得の部ができて、その単位単位の要求を本部に持って来る。たとえば、岡山に居る軍隊が呉に何か必要とするものがあるときは岡山に持出して要求する。(接収するものは土地、建物等で、食糧や被服類は要求しないことになっている。)

この要求は次の事項を記載した四枚綴りの書面で中央のボードに提出する。

一、必要な設備の装置、設備等の種類

二、位置(木材等の場合には位置の記入はしない)

三、所有者(所有者の判っている場合に限る)

四、数量又は分量(たとえば二階だけというような場合)

五、条件(よく判っている場合はこれを書くが、判らない場合は、後から書くこととなろう。)

六、引渡の方法(日本側で輸送するか、軍の方で取扱うか等について)

七、引渡期日

八、何の目的で必要とするかの明示

九、何処の分団のために必要とするかの表示

一〇、備考

この要求に対し、軍の全体接収委員会では、これを承認するが、次の例外を附する。

一、引渡された場合報告せよ。

二、同様な要求が沢山ある場合は、シリーズ、ナンバーを附する。

三、それに主計官がリマークする。

日本側においては

一、要求された物件が間に合うか或いはかかる団体に連絡すれば判る旨のコピーを二枚作って一枚を連絡委員会に送る。

二、若し要求に応ぜられたいときは、その理由を申し出ることとし、これに対しては事由を調査し、司令官に申し出ることになっている。

引渡しが出来ない例は色々あるが、たとえば一つの物を両方から要求されるような場合は、司令官の裁決によって決定する。

又或る場合には、日本の経済的事情のためにできないこともある。又要求されたものが全然ない場合もある。この場合は軍隊の方でこれを作ることに努力しなければならない。

以上のことは二枚に書き入れて主計官に出すことにしたい。

主計官は要求したものが調達されるとそのうちの一枚にサインして一枚を返すことにする。

以上は通常の場合の調達方法を述べたものであるが、急の場合は直接軍が接収を行うこともある。しかし、成るべく左様なことはないよう、又、あつても自制するよう努力する。

次に我々の方からは、如何なる種類の食糧も要求しない。市場等から買うことも禁止する考えである。それは左様なものに日本が困っていることを承知しているからである。

被服についても食糧と同様に考えている。しかし、個人が着物や人形などを買うということまで禁止するわけには行かない。

飛行場は海軍が必要とするかも知れぬが、極めて狭い場所で足りるであろう。

暴風雨のため当初の予定は変更されたが、具体的ことは後から知らせるが、一五、〇〇〇人位だと思う。

例えば、水雷艇基地を要求することは、私自身でマークして示すが、大体のことは明朝にする。軍隊が来るまでに正式の手続をとることのできないものは、先に措置して後から手続をとるが、普通には事前に手続を済ます。

委員会の重要性についてはよく判っていることと思うが、今直ぐに機構を整えて如何なる要求にも応ぜられるようお願いしたい。

私は今、ただ一人で助手もいないので、コピー四枚を作ることに困難を感じるので鉛筆書きをお願いすることもあるが、よろしく願ひする。

呉は海軍関係の委員会であることを諒解されたい。

警備隊は軍と一緒に来るから、よく警察と連絡して打合せする。

輸送については、鉄道輸送は日本に依頼するがトラックは日本の貧弱なことを知っているので恐らくは軍自体でやるであろう。

船舶輸送についてはどうするか。その時に決めることとする。

差し当たり土地、建物、木材、コンクリート、セメント等を要求する。

次に我々も左側通行とするので、この点よく連絡して道路標識を作る考えである。

九月三十日

中国地方総監府の連合国軍機注対策連絡会議午前八時五〇分より

一、本日正午迄に、食糧課員一、会計課員一、都市計画課長及び課員一、建築課員(技術者)一、動員課員二、労政課員二を出頭させよ。

二、事務用品相当数手配せよ。

三、九月三十日現在で呉、広地区伝染病発生の過去一年間の統計を、十月二日までに提出せよ。

四、労政関係の機関とその責任者を報告せよ。

五、労務者一、〇〇〇人を確保せよ。

(本件については海軍側労務者六、〇〇〇人を流用することに、山口参事官から海軍側に折衝済)

六、昨日来呉地区関係の建物接収について続々要求あり、現地職員更に充実の要あり、改めて要員要求をする。

十月一日

山口参事官発青木第一部長宛書簡

貴部主管武器保管引継に関する警察部課長会議は、十月五日午後二時呉市役所において開催することに決定。呉鎮守府管下関係者召集せらるるにつき、各県に至急連絡召集願いたし。

(註) これは最初の武器保管引継打合せ会の召集についての連絡文書である。

◎オーバン号入港延期

海軍中将ヒル坐乗のオーバン号は十月二日以前入港せず、ホビー号先遣視察団を乗せて十月一日午後三時広に入港す。

オーバン号入港期日は追って通知す。

(註) これは九月十七日、呉地区を襲った風水害の被害が甚大であったため広島県知事から進駐延期を要請したのに対し発せられた回答である。

十月二日

広島県庁連合国軍進駐連絡会議午後五時より

一、乗用車、貨物自動車の供出数を明確ならしめること。(輸送課関係)

二、道路標識を至急手配すること。(道路課関係)

三、呉港の航行禁止が、十月四日午前〇時から行われる。

四、自動車車輛及び運転手の手配。

十月三日

中国地方総監府の連合国軍進駐対策連絡会議午後二時より

一、労務者一、〇〇〇人分の宿舍を手配せよ。

(海軍施設部のものを利用することに決定。寝具、食器等用意あり)

二、労務者特配手続のため建築課員を派遣せよ。

三、通訳二〇名、十月六日までに呉に集結せしめ労務者使用の際の通訳に当らしめよ。

四、洗濯設備は、海軍施設部に一度に一、〇〇〇人分の洗濯をなし得る施設あり。

五、食糧として、フリカケ食、のり、缶詰、味噌、醤油、馬鈴薯、塩を至急手配すること。

乾パン一、〇〇〇人分二日間の用意あり。

(註) これお進駐に備え、労務者確保のために行われた当面緊急措置である。

◎進駐軍兵員三〇人宇品に上陸

十月三日、宇品凱旋館に進駐軍兵員三〇人上陸した。(警察電話により連絡)

十月八日

広島県庁連合国軍進駐連絡会議午後二時より

一、進駐軍に対する事故の申入れ。

二、軍需物資受入課の設置(転用課設置に決定)

三、陸軍との打合状況の連絡

四、海軍関係食糧中、現に腐敗の虞のあるものの所在場所、品目、数量を海軍と連絡の上至急内政課宛報告のこと。

(註) 十月六日進駐軍の呉、広地区への上陸が開始され、十月七日には海田市に進駐して来ている。

十月十八日

広島県庁連合国軍進駐連絡会議

一、道路課長、十月十九日午後一時までに総監府へ出頭のこと。

- 二、進駐軍経費支払の件写を総監府に送付のこと。
- 三、R・マスター中佐の通告文(進駐に関するもの)を隣組に配付すること。
- 四、通訳の待遇問題、日当五円五〇銭を、一〇円に引上ぐることに決定。
- 五、呉市長に糞尿汲取り清掃等について警告を要す。

慰安婦の活動状況(保安課報告)

場所	期間	慰安婦延数	客数	水揚金額
吉浦	自十月十一日五日間 至十月十五日	四四六人	七、四九三人	一五七、四二九円
白石	自十月七日七日間 至十月十四日	三六四人	七、七四五人	一六五、六七〇円
呉市広つばさ	自十月九日五日間 至十月十三日	八四人	三四六人	一九、三〇六円
計		八九四人	一四、五八四人	三四二、四〇五円

(註)慰安所開設には随分苦労したが、広島県遊興協会長であった山本久雄氏(後広島市助役、衆議院議員、現在死亡)の手を煩わして阪神方面から一人、一万円の身代金を以て三〇名を募集した。
この資金三〇万円は小笠原会計課長(後県議会事務局長)によって調達された。

十月二十五日

官庁復興に関する打合会午後一時より於県庁

長官(中国地方総監児玉九一氏兼任)挨拶の後

海軍局は、軍の施設をその後転換使用

専売局は、現在庁舎を補修の上使用

通信局は、広島駅前局及び鉄道郵便局は旧位置に再建。電話局及び電信局は日本製鋼所精心寮において取り敢えず開設。

広島市利用床面積一、〇〇〇万坪の内五〇〇万坪を住宅地とし、残りを緑地帯(一畝毎に五〇〇米の緑地帯)とする。

広島市役所は、現在の庁舎を補修の上使用するも市役所総坪数六七三坪、補修資材としてセメント二、二五〇袋、石灰七、六五一袋、木材九五六石、硝子一九一二九平方尺を要し、補修費が測定し難し。

控訴院、地方裁判所は、府中青年学校を借入れ開設。目下、別に府中に一、〇〇〇坪程度のものを建設することに計画中。

放送局は、事務所は東洋工業の第九食堂にあり。大手町に約一、〇〇〇坪の土地あり。応急的には流川町の旧館を利用するも、宇品凱旋館又は富国ビル(袋町)借入を考慮中。

食糧事務所は、現在の場所を利用。倉庫八棟、食糧五万石の収容能力あり。

通信局業務部長＝庁員の宿舎建設に配意を乞う。

以上各関係者よりの報告説明に対し

児玉長官より

移転の希望地、庁員数、建物延坪数、特殊の建物(例えば、法廷、倉庫など)、敷地坪数、復旧の場合の所要資材等、又、職員の住宅についても希望戸数を調書にして、十一月五日までに提出するよう指示された。

(七)

記録

比治山国民学校迷子収容所

五日市戦災児育成所

斗栴良江

比治山国民学校迷子収容所・五日市戦災児育成所

斗栴良江

被爆場所段原末広町の自宅

当時の勤務学校比治山国民学校

教え子被爆

ピカッと、軒先に異様な光を見たのは、風呂場のたらいに洗濯物を投入れた瞬間だった。無意識に「靖子ッ」と、我が子の名を呼んで外へ出ようとしたが、玄関で立ちつくしてしまった。頭の上に何やらいろんなものが落ちて来て真暗になった。しかし幸い家はどうやら倒壊だけは免れた。塵埃がおさまるに従って、家の中の惨憺たる光景が目につくた。

窓硝子はふっとび、壁ははがされ、天井はぶらさがっていた。机が庭になげ出されているかと思えば、テーブルからは反対の方へとんで、畳の下へ入っていたりした。

何はさておき、学校が気になるので、ごみをかぶったままの体の上に衣を着て登校する。途中のどの家を見ても同じ様なこわされ方をしているので、不思議な気持ちで歩いて行くと、同僚の若い女の先生が二人来られるのに出会った。

「どちらへ。」と聞くと、

「校長先生の命令で、今から市役所へ行くところなんです。学校の近くに爆弾が落ちたので、報告しようと思っても、電話が通じないので、歩いて行って来い、と言われまして。」との事、ますます不可解な気持ちになった。

とにかく私は学校へ急いだ。と、右の道から、フラフラとやって来る奇怪な人に目を見はった。

髪は灰をかぶったようであり、顔はしらけて年の頃がわからない。

「あなたは一体どうされたの、焼夷弾でそんなになられたの。」

「どうしたのかさっぱりわからないんです。私は女子商の生徒ですが、鶴見橋の方へ勤労奉仕に行っって、ピカッと光ったと思ったらこんなになってしまって。」

よく見ると、焼け残った服から女学生と察することが出来るだけで、はじめはおばあさんかと思ったぐらいである。手足はちょうど魚を焼いた時のように、皮ははげてぶら下っている。腫れた足に、はき物もなく、でこぼこ道を痛そうに歩いて行く。

ともかく学校が救護所だからと、その子を伴って学校へ急いだ。

私は校門を入るなり、またもドキッとした。

「先生!!」と言って、跳びついて来た化物のような者、ほんとうに化物とでもいっかねば言い現わしようもない。むごたらしいこの姿。

「先生、苦しい、殺して下さい。」

「貴女は一体だれ。」

「私は空です。」

今年、第一高等科へ入った空美智子という教え子である。全身火傷で腫れ上り、どこにもその面影は見られない。

先生方は給食用の食用油を持出して、来る人ごとにぬってあげて居られるので、私もそれをもらって来て、空さんにぬってやる。

「先生つらい、先生殺して。」と訴える。

「かわいそうにね。つらいでしょ、元気を出すのよ。」と力づけるばかり。何ら手のほどこしようもない。そばにいた先生が、

「先生、あの子の側へ行かないでよ、私はあの子の声を聞くのがせごくてたまらないわ。」と言われる。

私達は、これらのひどい火傷の人を前にして、なすすべもなく、ただうろろうろするばかりであった。

しばらくして、空さんの母親が来た。

(短歌)

先生!!殺してととびつける教え子は

むざん全身の火傷こくるう

悲運

運の悪いことに、ちょうどその朝、比治山国民学校から、第二集団開児童の荷物を積んだトラックが、佐伯郡友和浅原方面に向って出発していた。

そのトラックには、山田教頭先生、養護訓導の平川先生、若い今田、久保両女先生、販売部の甲野さん、それに疎開地の子供に面会したいという母親数人が同乗していたのである。

安否を気づかっている所へ、トラックが帰って来た。帰られたのは教頭先生だけであった。聞くところによると、トラックが住吉橋にさしかかった時、原子爆弾の光線を浴びたそうだ。

教頭先生は、あたり一面火の海となって、逃げ場がなくなりそうなので、皆安全と思われる方向へ逃げるように言って自分は荷物についた火を消したりして、とてもトラックが通れそうもないところを、やっとの事で帰って来たと言われた。

トラックがこうして帰って来られるのだったら、皆を乗せて帰って来られたらよかったのにと、歯がみして残念がったが、所詮後のまつりであった。

石田校長先生と、山田教頭先生は、早速これらの先生方をさがすために出て行かれた。

市の周辺部にある避難所や救護所を一つ一つ廻って

「比治山の先生はおられませんか。」

と叫んで歩かれたそうであるが、誰一人見出すことが出来なかったと言って、夕方、ヘトヘトになって帰って来られた。

あくる日も、又あくる日も、校長先生は先生方や長男の行く方を捜して歩かれたが無駄であった。

八月六日の夜

わが広島にとって最悪の日八月六日も、次第に夕闇が濃く、学校もたくさんの負傷者を容したまま、夜を迎えようとしている。

私は一応段原末広町にある自宅に帰ったが、火災がここまで及ぶかどうかを確めるために、大正橋のところまで行って見た。

電車の線路より向う側は、コンクリートの建物を残して全部倒壊しているのに驚いた。まだあちこち盛んに燃えつづけているところもあったが、線路に近いところは余じんがくすぶっているだけで、こちらまで火災になることは先ずないと思われた。

昨日に変わる今日の姿、ただ一発でこの大都市を壊滅させるこの威力、わが卒到底及ぶべくもない科学の進歩の差をまざまざと見せつけられたようであった。

私は家に帰ると必需品だけを乳母車につみこんで、子供を背負い、父母と共に夜を明かすべき所をさがしに出かけた。

比治山の学校近くやって来たが、大きな建物は焼夷弾の的になりそうな気がして、少しでも離れたかった。だいぶん遠ざかった蓮田の中の道にゴザをしいてみんな落ちついた。

蚊が多いのと、昼間の興奮とで、私と母は一睡もせず夜を明かした。私らは炎々と燃えさかり、また衰えたりする火をまんじりともせず見つめていた。市民の人々のお通夜であった。

(短歌)

逃げし田に子の蚊を追いて眠らねば

町の炎は燃えつおとろえつ

八月七日の朝

夜が明けた。昨日のように朝からジリジリと夏の太陽が照りつける。畠の野菜や道端の草が枯草のようにになっているのは、あの光線のためであろうか。

学校の裏の築島さんの離屋をかりて、家族はそこを仮住居とした。私は子供を母に託して登校した。

昨夜の中に、こと切れた人があちこちに見られた。空さんのお母さんが

「先生、とうとう駄目でした。先生によろしくといって死にました。」と言った。

空さんは防空壕の中で死んでいた。ふとんがかけられて枕元に線香がゆらゆらとたちのぼっていた。

(短歌)

先生によろしくと言って逝きし子の

面影少しく元の形に

検視

警察の人が来られて、検視に廻るからついて来るようにとの事で、それに従った。

運動場の片隅に、玄関に、廊下に、工作室の机の上に、講堂に、丸太ん棒のように横たわっている上に、何歳位の男(女)検視済と書いた紙をおくだけのことである。

死体の枕元には、昨日配られた乾パンが、そのままころがっていた。

高山先生が、

「私が家からお米を持って来る。それでおかゆをたいて食べさせようよ。」と言われ、早速持って来られた二升の米に、うんと水を入れ、おかゆを炊いた。それを、バケツに入れて罹災者のいる講堂へ持っていった。おわんについて渡すと、私はおかゆは喉を通りませんという人が多いので、又このおかゆに水を大分入れて、おもゆとおかゆの二通りにして持って廻った。手の自由のきかない人にはさじで少しずつ口に入れてあげた。

祈り

その当時、比治山国民学校の南校舎は、鉄道の臨時工夫として徴用された人達の宿舎になっていた。ちょうど広島駅附近の工事に行って居られた人は、ひどい火傷を負って帰っておられた。

帰宅出来そうな者は、任意に帰ってもよろしいとの指揮者の命令が出ると、それらの人々はフラフラと裏門から出て行かれた。

私は思わず後を追った。

「貴方はどこまでお帰りになるのですか。」

「私は小郡まで。」

「そのお体で大丈夫ですか。」

「どうかわかりませんが行けるところまで行ってみます。己斐まで行けば汽車があるそうですが、何とかなと思います。」

「それで何かおあがりになったのですか。」

「いいえ、何もほしくないのです。」

「では一寸お待ちになって下さい。」

私は太急ぎで、我が家の仮住居に行き、みかんのかんづめをあげ、その汁をコップに入れて持って来た。

「これなりと飲んでお帰りなさい。」

といってコップを渡すと、

「ありがとう。」と受取って二口三口飲まれたところへ同じような人が通りかめられた。

「すみませんが、この人に半分あげて下さい。」

と頼んだ。快よく二人で飲んで

「お陰で元気が出ました。ありがとう。」

と立去って行かれる。

焼けただれた背中に夏の光がようしゃなく照りつける。ふくれ上ったはだしで、やけつくような道を行く一足一足が痛々しい。

どうかお二人がそれぞれのお家に無事にお帰りになりますよう祈らずには居れなかった。

(短歌)

炎熱の道をただれし素足にて

帰りゆく人をただ祈りいる

葡萄園の夜

七日の夜は、葡萄園のほとりに蚊帳をつつねた。その葡萄園は、一体どの辺にあつたかよくわからない。ここには大勢の避難者が入りこんで、寝る場所を探していた。

葡萄園の持主が来て、出てくれとしきりにどなるけれども、誰も聞かぬふりをして一人として出る者はない。

とうとうあきらめて、帰って行ってしまった。寝つかれない夜だったが、昨日からの疲れでいつの間にか眠りにおち込んでいった。

(短歌)

葡萄園の主の怒る声しきりなれど

出でんともせず避難者の群

治療

明くれば八月八日

大分家に引取られていった人もあるが、まだまだ講堂は罹災者で一杯だ。医師に従って治療に廻る。火傷はすでに化膿し、全身うみにおおわれている。うみが目をおおって、目が見えないという婦人の目の廻りを、脱脂綿でそうっとぬぐってあげた。

医師の治療といっても、薬は赤チンとオキシフル位しかないのである。

とても助かりそうもない人は、治療しても無駄だからと、一向に手を下さないのである。

まことに残酷この上もないことであった。

死体はトラックが来てまるで材木をつむ様に積み重ねて帰って行った。

迷子収容所発足

八日の午後であった。

市の社会課長さんが子供を一人だいて来られた。

「今日から、此の学校を迷子の収容所にするから、子供を預ってもらいたい。」との話なのである。

見れば二歳くらいの女の子、すっぱだかにワイシャツをひっかけた抱いて居られる。この手をだき取ったものの、私達は顔を見合せて途方にくれた。

当時、比治山国民学校の職員の大半は疎開地にあり、後は女子職員がほとんどであった。

校長先生の長男が行方不明、教頭先生の長女、谷村先生のお父さん、久保先生のお母さん、米重先生の主人、藤川先生の弟さんが死亡されていた。

梶谷先生は疎開地から帰っていて罹災されたということであった。狩山先生は顔をけがして居られた。

だから、家族すべて無事故というのは、高山先生と山崎先生と私の三人だけであった。

私達は非常時なのであるから、出来るだけのことはせねばならぬと、各自の心に誓ったのであった。

この子は、名前を聞いても答えない。非常におびえていて、絶体こひざからおりようとしな。い。おろせば立きわめいてすがりつくので、三人かわるがわるだっこしていなければならなかった。

何といってもはだかではどうにもならないので、私は末広町の家へ帰って服とおしめを取って来た。

それから学校裏の仮住居へ、今日から迷子の世話をするようになったので、夜も帰れない旨を伝え、子供の世話を母に頼んだ。

まだ母を離れて寝たことのない子が、きつとおばあちゃんを困らせることだろうと心配だかいたし方がない。やっとなにかしつけてそっとぬけ出す。学校への足は重い。

学校では、高山先生と山崎先生が、代る代るだっこして、私を待ちかねて居られた。日はとくに暮れていた。

今夜は運動場で夜を明かそうということになった。校長先生がゴザを持って来て、イモの植えてある側にしき、ゴロリとねて星空を眺めて居られる。きつと行方不明のご長男の事を考えておられるのであろう。

空襲警報が出るたびに、避難壕へ走り、ろくに眠れない一夜を過した。

恐怖の夜

夜更けに、土間を通りぬけようすると、いきなり闇の中から

「すみませんが、水を一ぱい下さい。」

という声、私はとび上らんばかり驚いた。頭から水をかけられたほど恐しくて、声が出ない。私は思わずかけ出していた。

明くる朝、その人は目をあけたまま、一点を見つめて死んでいた。

「ああ昨夜水をあげれば、まつごの水になったのに、気の毒なことをした。」

あの人はきつと私を恨んで死んでいったに違いないと思うと、気持が悪かった。

(短歌)

水をくれとわれにたのみし人は今朝

息絶えてあり眼ひらきて

頬に穴のあいた子

日時不詳に明らかでないが、若い男の人が、誕生日前かと思われるふつ頃からかわい。い男の子をつれて来られた。見ればかわい。そうに左の頬にぽっかりと穴があいているのである。

この子は母の乳ばかり飲んでいたらしく、ミルクを与えても、ゴムの乳首になじまず、てんで飲もうとしない。私はほとんど自分の子供と顔を合わすことも出来ない状態であったから、私の乳ばかりはっていた。試みに乳房をくわえさせるとおいしそうにゴクゴクと飲みはじめていた。

また恐怖の夜が来た。毎夜毎夜、空襲警報におびやかされ、壕への待避をくりかえしていると、しまいには私達も子供もヘトヘトにつかれ切ってしまった。はじめの中は、子供達皆をつれて待避していたが、しまいには目のさめた子供だけつれて待避するようになった。

夜更けて壕の中にいると、突然赤ちゃんの泣く声、あのほっぺに穴のある子供が目をさましたのだ。黒々と横たわる巨大な校舎は、何か魔物を思わせる不気味さである。その校舎も砕けよとばかり母を求めて泣き叫ぶ赤子の声は、全く悲痛の限りで、私の肺腑をえぐられるようであった。たまりかねた私はいつの間にかその子のいる衛生室に向って歩き出していた。

暗闇の中で、声をからして泣きつづけている子をだきあげ、乳をふくませてやると、母にあった安らかさをおぼえたのか、腹一杯乳を吸いつくすと、やがてスヤ

スヤと眠りはじめた。

(短歌)

魔の如き校舎も砕けと泣き叫ぶ

赤子はひたに乳をほりつつ

吾を母と置いて乳を吸いつくし

眠りぬ頬に穴のあきし子

焦土のなか母を慕いて泣き叫ぶ

赤子の声は今も聞ゆる

この子の世話を段原山崎町のある奥さんが、引受けて下さって、ほっぺの穴はきれいになおして頂いたのであるが、その後だんだんやせ衰えて死んでしまった。

ソ連参戦

衛生室を取片づけて、六畳の間を寝室にした。ガラスの破片がものすごくあった。

昼のうちは、何とか過ごすことが出来たが、灯のない夜の心細さといったらない。この時程灯火が人間にとって、どんなに大切なものであるかということを、痛切に感じたことはない。警防団の奥平さんが、カンテラを持ってコツコツと見廻って下さる。その灯を見て、私達ほどこんなに勇気づけられた事だろう。それはただ便利であるというだけでなく、人間に生きる力というものを与えてくれているという事実である。

しかし、その人からソ連参戦を聞かされた時は、断崖からつき落された様な気がして、目の前が真暗になるのをおぼえた。ピカドンにあってもまだ私達は負けるという気はしていたかった。しかし、この張りつめていた心も、グラグラと倒壊して行くのを禁ずることが出来なかった。

水を求める女学生

夜、私達が壕に待避していると、講堂の中から

「水ッ、水ッ。」と、悲鳴に近い叫びが起った。女学生の声である。あたりの闇と静けさを破って必死に叫びつづける。そしていつまでも止みそうもない。たまりかねて高山先生が

「あの火傷ではとても助かる見込みはないわ、どうせ死ぬものなら飲みたがる水を飲ませてやろうじゃあないの」といわれる。私も前夜のこともあるし、すぐに賛成した。

暗闇の職員室に入り、手さぐりでやかんとコップをさがしあて、水を入れて持って出た。高山先生と私は、恐しさと気味悪さで肩をしっかりと組んでいた。講堂の中は罹災者でいっぱいである。灯はつけられないし、足さぐりで一步一步進む。うっかりあやまってつまづこうものなら、火傷の人か、死人の上に倒れねばならない。相変らず、「水ッ、水ッ。」と叫びつづけているその声をたよりに、やっとの事で辿りついた。

「さあ水よ。」とコップに水を入れて与える。

「ゴクン、ゴクン。」と喉をならしてのみ、

「ああおいしかった、もう一杯。」

「もうこれでまんしなさい。明日はおいしいおもゆを作ってあげるからね。」

といって、そこを引揚げた。

(短歌)

水ッ水ッと呼びぬける子に闇のなか

水与えんと足さぐりゆく

吾が子を探しあてて

真夜中である。突然大八車の音がして講堂の所どとまった。昼間探しあてた家族を連れに来たらしい。

「〇〇〇〇はいますか。」と呼んで灯が点じられる。

「今、空襲警報中ですよ。灯をつけてもらっては困ります。」と校長先生。

しかし、聞えぬふり、一時も早く我が子を連れて帰りたいばかりである。

校長先生はたまりかねて、つかつかと側へより

「なぜ灯をつけるんです。講堂には沢山の動けない人がいるんですよ。もしもの事があったらどうします。」と言葉鋭く叱られたが、さっさと子供を大八車に乗せて帰って行った。

「よう生きとってくれたね。お母さんが来たからもう大丈夫、きつとなおして上げるからね。」と母がいっている。どうか母の真心で元の体こと祈りつつ見送った。

おびえる子ら

十日、己斐方面からトラックで、子どもたちが十三人一ぺんに来た時はどうなることかと思った。

ひどい火傷の子もいる。けがをした子もいる。これらは市役所から松林先生が来られて、毎日手当てをしてくださる事になった。

食事は鉄道の人がついでにおかゆをたいてくださった。

衛生室へは小さい子を寝かせ、一人で便所へ行ける子は、となりの教室にゴザをしき、蚊帳をつつて寝かせた。

「お母ちゃん、おしっこ。」

といって起き上る幼児には涙をさそった。

暗い廊下を通して便所までつれていく。殆んどの子が下痢便なので、便所までもたないことがある。一人すませたと思ったら、また次が目をさます。おしっこがわかって起きる子はまだよいが、わからない子が、一、三人いる。

朝起きて見るに惨憺たる状態である。ふとん、毛布、蚊帳まで粘液便、血便でヌルヌルになっている。朝はおしめやこれらの洗濯で大忙である。早く洗濯をし、その日の中に乾かしておかないと、数少いおしめや夜具に事かくことにたるのである。

地獄のような猛火をくぐって九死に一生を得て来た子供たちは、ひどく神経過敏になっていて、空襲警報のサイレンを聞くと

「先生こわい!!逃げよう、早くつれて逃げて!!。」とわめきたてる。そして私達の手を引張るようにして運動場の待避壕へと走るのであった。全く恐怖の夜の連続であった。

ある早朝の事である。早く目をさました一人の子が、突然、

「火事だ!!炊事場が燃えている!!。」

と叫び出したからたまらない。その声に目をさました子供らはみんな、「キヤーッ。」

「火事だ!!。」と奇声を上げて廊下を右往左往しはじめた。

それは鉄道の人が朝飯を炊いている火であったのだ。

あの市内の焦熱地獄を体験して、やっと自分だけ助かって来た子供たちは、体中おびえ切っているように思われた。

婦人会の協力

被爆以来の収容作業で私達ももうすっかり疲れ切っていた。

そこで町の婦人会の方々が、毎日三人ずつ出て協力して下さることになった。

「先生方は夜が大変なのですから、昼間はゆっくり休んでいて下さい。」

といって、お掃除や洗濯などもお願いしくやって下さって全くありがたかった。

何日ごろからか、これものはっきり憶えていないが、市の保母の方が毎日一人か二人出勤して、子供らの世話をして下さいになってからは、大分楽になって来た。

しかし、夜は私達の役目で、殆んど家に帰れず子供と寝食を共にした。

豚

十二日

廊下を歩いていてふと目を庭に移すと、あっとばかり驚いた。そこには二つの教壇がおかれ、それがまないたになって、豚が五、六人の徴用工の人たちによってさばかれていたのである。そこに展開した血なまぐさい光景に私は目をそむけた。

この豚は給食のざんぱんで飼うようにと、各学校に配られたもので、はじめは二頭もいたのである。一頭は児童が疎開する前に殺して給食にした。あとの一頭は飼料に困りはてていた。六日後は誰も豚に飼をやるものはなく、豚は腹をへらして、小屋を出て野菜畠をあらした。夜も街の中を歩き廻ると街の人から苦情が出た。

校長先生も困りはてて、徴用工の方に処分を頼まれたらしい。「こんなことは朝飯前ですよ、支那で十分経験していますから。」と、御馳走にありつかれたのを喜んでおられた。

「夕食を御馳走しますから来て下さい。」といわれたが、あいにく校長先生は居られず、私たち三人でいった。

ぶた飯、ぶた汁、焼ぶたとぶたづくめで、皆舌つづみを打っていたようであるが、私は昼の光景が目の前に浮んで、喉を通らなかつた。子供らが、あんなに世話をしていたのに、子供らの口には入らず、みんなこの人らの口に入ってしまうのかと思うと、今は居ない子供らがかわいそうでならなかつた。

私はせめて近くに居られる狩山先生のお宅へでもと思って、自分に頂いたものを届けに行った。

春川さん

春川さんは沖縄の人だった。主人は行方不明との事、赤ちゃんがいて仕事は出来ないし、食べていく事が出来ない。「食べさせてもらうだけで良いから、何でもしますから使って下さい。」と言って来られた。

校長先生にお願ひして洗濯をしてもらうことになった。

十二月末、子供らが五日市に移る時、山下所長さんにお願ひして、ここでも洗濯をしてもらうことになった。

後に入って来られた引揚者の玖島さんと一緒に働かれた。

五月頃、春川さんは故郷の沖縄に帰って行かれた。私たちに、とても名残りを惜しんで、今でもどうして居られるかと時々思い出す。

お見舞

久保先生と今田先生は、家族の方に見つけ出されて、自宅で療養されていると聞いて見舞に行った。久保先生は矢賀、今田先生は船越であった。久保先生の宅へ先に行き、数日して今田先生を見舞った。どちらもトボトボと歩いて行った。

二人とも全身の火傷で、身動きも出来ない状態であった。

久保先生のお母さんも、建物疎開に出ておられて死なれたそうで、お姉さんが看護して居られた。私達はガーゼや脱脂綿をお渡しして帰った。しばらくして私は心臓に良いという薬を届けてあげた。

この二人の先生は、その後すっかり回復されたということを聞いたが、平川先生と甲野さんは遂に行方がわからなかった。誠に思いがたしい事であった。

終戦

八月十五日、終戦の詔勅が下って戦は終りをつけた。その日から空襲の恐怖は去ったが、占領軍が蜂注して来るという、新たな不安が私たちをおびやかした。

鉄道徴用工の方達も、解散ということになって帰って行かれた。

学校の中央校舎には、兵器廠のいろいろな材料部分品が疎開してあった。

終戦数日後、六、七人の人がトラックで乗りこんで来て山積みして持って行った。

私達は何の疑いもなくこれを見ていた。大分たってからその人らは盗んでいったのだということを知った。

ここに監視人がおかれたのは、ずいぶん運び出された後であった。

尋ね人

此所が迷子の収容所だということが世間に広まると、毎日のように、我が子はいないか孫はいないかと訪れる人が絶えなかった。

「あ、いたいた。」と走りよっていただきあい、喜び勇んで帰って行く、うれしそうな様子にも幾度か出合った。その反対に、待てど暮せど迎えに来てもらえない子供の表情は、日がたつにつれて暗くなっていった。

「もう死んだに違いないと思って葬式をすませたのですが、生きていてこんなうれしいことはありません。ほんとうにお世話になりました。」と、心から礼を言って帰って行かれる姿を見送って、ああよかった思うと同時に、後に残された子供があわれで、一日も早く親子対面が出来るよう祈らずにはおられなかった。

入浴

子供らは着たりきりすずめの垢もぶれであった。何とかして入浴と思って、考えついたのが給食用の桶であった。

釜で湯をわかして桶に入れ、ほどよい温度にして、子供を一人ずつ入れて体を洗った。

湯はたちまちどす黒く汚れてしまった。新しい湯を入れては次々と洗っていった。中には気持がいいといって出ないとがんばる子もいた。

この方法も厄介なので、高山先生のお家の風呂を借りることになった。

先生の家は学校の前にあった。一人でよう入らない子は、先生が入って一人ずつ洗ってやられた。

それで、とうとう先生は子供の皮膚病をもらってしまわれた。

三悪

終戦後の三悪に、皮膚病、眼病にしらみがある。共にしぶといものばかりである。

松林先生が、子供の体中に薬をぬりつけたり、洗眼をしたり、根気良く治療して下さった。当時はまだDDTもなく、やせ細った子供らの体を、なおもこれらがいじめつけた。

日だまりで、しらみをつぶしている子らの姿など、実にあわれであった。

私達も、この三悪を一通り体験させられた。

食事

終戦までは、鉄道の徴用工の方が食事を作ってくれたが、それ以後は私らの手でやらねばならなかった。

子供らは、殆どが下痢しているので、おかゆを炊いた。おかずは、梅干、味噌、運動場に作りたいも、いものはっぱ、などであった。毎日のように、近所を歩き廻って、農家で野菜をわけてもらって来た。

カッチちゃんという子がいて、れんこんを煮てやると、

「せんせい、カッチちゃん、デンコンすき、デンコンすき。」と言ってついて来た。

こうりゃんの配給があった時は、うすを借りて来て粉にし、だんご汁にして与えた。

時には五目めしや、ばらずしなどして、子供連をなぐさめてやった。

おやつには、僅かばかりの牛乳や乾パンなどの配給があった。

衣服

古着がほとんどであった。子供にあう物ばかりはなかった。ズボンのすそや袖口を折りまげて子供にあうようにして着せた。

ある婦人の方から、新調のネルの着物十枚を寄贈していただいた時は感謝でいっぱいだった。子供らも新しい着物に手を通した時は、さすがにうれしそうであった。

ふとんはなく、軍隊からの払下げの毛布を寝具とした。

配給物

終戦後、数日たってからと思う。毎日何の配給があるかわからないから、一度は市役所へ来てみるようにとのことである。

これも私達にとってつらい仕事であった。

配給物があろうがなかろうが、毎日のように大八車をひいて市役所へ通った。大八車はタイヤでなく、金のついた重い車輪で曳くとガラガラと大きな音がした。

行けども行けども、炎天の下に廃墟の街はつづいて、出会う人はほとんどなかった。くずれた瓦礫の下に、人の骨が見えたりした。ある時は黒人兵がいたという恐れ、誰もこの役をきらった。

結局、若い山崎先生や私が行くことになった。配給物は、ミルク、味噌、しょうゆ、塩、梅干、乾パン、その他毛布、シーツなど軍隊の払下げ物資であった。

子らの最期

下痢のひどい子供らは、頭の髪がうすくなり、次第にやせ衰えて、次々と倒れていった。そのたびに私達は、運動場の片隅に運び、わる木を重ねた上にのせて焼いた。その数は遂に十一名になった。

ある時は、長雨のため焼く事も出来ず、階段のおどり場に置いて雨の止むのを待った。今度行ってみると、ウジがいっぱい湧いて、手がつけれなくなっていた。

今思っても不思議でならないのは、誰一人、つらい苦しいと訴えたものがいなかった事である。みんな静かな最期だった。しかし、もしそこに母がいたら苦しみを訴えたであろうに。

自分の名さえ知らぬ子、自分の名がやっと言える子らが、私達に甘える事もようせず死んでしまった事を思うと、ふびんでならないのである。

これらの幼な子は、戦争も原爆も恨みはしなかったであろう。しかし、最期まで母をどんなに慕ったことか。私はこの子供連を母の膝の上で死なせてやりたかった。

保母さんにお寺の方があって、十一名の幼な子の霊にお経をあげてもらった。子供らは皆小さな手を合わせておがんでいた。

長雨

原爆の後、長いこと雨は降らなかった。降り出したのは九月の半ばごろであったか、記憶がはっきりしない。降り出すとたかなか止まなかった。あっちもこっちも雨もりがおぼろしい。天井にはってある馬糞紙のようなのが、水を吸って重くなって落ちて来る。

子供のいる衛生室は、幸い、雨もりは少なかったが、それでもあちこちにバケツや洗面器をおいて寝た。

廊下は洪水のようで、長靴をはき、傘をさして歩かねばならなかった。

炊事場は屋根が壊れて露天同様だったので、おかゆを炊くのも傘をさしかけてもらっていなければならなかった。

それにもまして困ったのは、洗濯物が乾かない事であった。

橋詰ひろみさんのこと

五歳位の目のぼつちりしたかわい子であった。この子が、ここに来る少し前に、この子のお母さんがたずねて来られたのであるが、それからいくら待っても姿を現わされなかった。

ひろみちゃんは、暗いじめじめしたこの生活に、すっかり嫌気がさしていた。そして家族の者に次々と引とられていく友達が、うらやましくならなかった。

ある日、子供がほしいといっけて来られた奥さんは、この子なら世話をしたいと言われる。ひろみちゃんもついて行くといっけて聞かない。

「ひろみちゃん、あなたはお母さんがきつと迎えに来られるから待っていきましょうね。」

といっても、まだついて行くと言う。その晩はとうとう私の家へ一晩泊らせて機嫌をとった。

年があけて二十一年三月末、幼児は五日市戦災児育成所へ移ることになった。

ひろみちゃんは、一度は頭の毛が全部ぬけたが、その頃にはきれいに生えて、よく太り、元気なかわいい子になっていた。

それから間もなくであった。お母さんとおばあさんに涙の再会をしたのは…

私が、あの当時の事を話すと、お母さんはあれからずっと休養しておられたという事であった。

ひろみちゃんは今どうしているかな、もうお嫁にいつているかしら、もうお母さんになったかしら、と思い出し、いつも幸せを祈っている。

名づけ親

幼児に唾の子がいた。高山先生がこの子に田中正夫という名をつけらるるその他、カッチちゃんというだけの子、姓も名もわからない子もあって、米の配給を受けるにも、名簿をつくるにも困るので名をつけてもらった。

名づけの親はすべて高山先生であった。

高松宮殿下御来訪

日時をはっきり記憶していないが、ある小雨の降る日、一台の黒い車が学校の前に止まった。

天皇陛下の御名代として、この収容所をお見舞下さったのであった。

「ひどいなー。」と、一言おっしゃって衛生室にお入りになり、子供らの状態をいろいろとお聞きになってお帰りになった。

戦災児育成所開設

五日市戦災児育成所は、元農事試験場であった所を、山下義信先生が、戦災によって迷児あるいは孤児となった者を育成する場所として開設されたものである。昭和二十年十二月の頃である。

子供を収容するには十分の建物があり、小高いところに小さいお寺のような建物(後に童心寺と名づけられた)があった。その丘にはびわの木が植えられていた。そこから海が見え、風光明媚、気候はよく、子供らを育成するには絶好の環境であった。

ここは織町国民学校の分教場として、子供らの教育方面を担当することになった。

一、二年、三、四年、五、六年の複式授業であった。

教室は子供らの寝室が早がわりした。第一児童館の第二号室が一年生の教室、食堂が三、四年生の教室、第二児童館の二階が五、六年生の教室であった。

五、六年が主人(斗栴正)、三、四年が藤原先生、一、二年が私の担当であった。

一、二年合わせて五、六人しかいなかったが、これを部屋に集めることからしてむずかしかった。風の中の風船とでも例えようか。

子供らの気持は、何かうつろでフワフワしていた。おしっこへ行ったら、なかなか戻って来なかった私の取扱いも下手だったと思うが、何をやらしても根気がなく、すぐあきてしまった。何かをしたいという気力は、全然といってよいほどなかった。

これらの子供に勉強させようとする事は、水を飲みたがらない馬に、むりやり水を飲ませようとする事だった。

だからその歩みはなめくじよりもおそく、毎日ため息の連続だった。

父となれ、母となれ

山下先生は宗教家であった。次男を原爆で失って居られた。原爆で両親を失った子供を放っておけなかったのである。どうにかして一人前になるまでと、戦災児育成所設立を思い立たれたのであった。

先生はいつも職員を一堂に集めて法話をされた。

「私達は常に広い愛とまごころを以て子供らの面倒を見てやらねばならない。もしここに親がいたらどうするだろうか。というを常に念頭におき、父となり、母とたって世話をしてやってほしい。」

私は子供らを中流以上の家庭の子供としての、教養と躾を身につけさせたいと思っている。それには親となるものが、自分を磨き向上していくよう努めなければならない。」

いつも魂にくい入るような先生のお話であった。

林田先生

山下義信先生の手足となって、育成所の基礎を築かれたのは、何といっても林田先生である。

出身は九州と聞いていた。戦争のために最もひどい痛みを受けた戦災孤児、これを見捨ててはいけなないと立上られたのが山下先生である。その義侠心と熱意に共

鳴されて、はるばる九州から広島の地に馳せられた森田先生には、一べんの名誉欲も利己心もなかったと思う。

山下所長も林田先生も、まず子供らを飢えさせてはならないと東奔西走の明け暮れであった。

夜なども、明け方までコウコウと電灯がともっているので行ってみると、机にうつ伏して眠って居られる。

「先生、もうお休みになつては、風邪をひかれますよ。」

「あ、ねていましたか。もうすぐねます。もう少し仕事が残っていますから。」

といって、また帳簿の整理をなさっていた。そんな事は一度や二度ではない。文字通り寝食を忘れて子供らのために努力されたのである。

先生は大学を出られて間もない純情な方で、且つ敬虔の念の厚い方であった。私達のようなつまらない者でも、子供らの師として扱ってくださった。私達子供らの事について、いろいろなお願いをしても、いやな顔をせず、聞き入れて下さった。お風呂なども、私達が入ってからでないと絶対に入られなかった。どうか先に入って下さいとお願いしても駄目だった。

先生の我が身を忘れて子供連のために努力して居られる姿には、頭の下がる思いがした。先生は心から子どもを愛された。だから子供達も兄の如くなついていた。先生は今どうしておられるかなとなつかしく思う。

はじめはさびしそうな子供たちをどうしたら慰めることが出来るか、どうしたら元気を出させることが出来るかと、そればかりを考えた。

夜など一堂に集って歌を歌ったり、レクリエーションをして気分を引き立たせようとした。しかし、その時はさびしさを忘れてはがらかくしているけれども、すんでしまえば、ただ空しさだけが心に残るようであった。

子供らの前途には、いばらの道がつづいている。このいばらの道を切り開いて、進みやすくしてやるのがまんとうの愛であろうか。

子供たちが悲観のどん底から、悲しささびしさに耐えて自らの力で、はい上ってくれることを切望した。

朝の礼拝

起床の鐘がなると、皆とひ起きて夜具をたたみ、洗面をすまずと、童心寺に集る。幼児も保母さんに手をひかれて、丘に登っていく。

重本先生を中心に、十二礼を一斉に唱える。終りには、幼児もおぼえて、やさしいところだけ声をはり上げて読んでいる。丘をおりる頃には朝食の用意がととのっている。

しらみ退治

比治山の収容所から持って来たのか、よくはわからないが、しらみが子供たちの間で横行した。

その頃、まだDDTはなく、その撲滅に手をやいた。そこで子供達の衣服を全部ぬがせてふる釜に入れ、煮沸することにした。ところが白いものも、黒いものも一緒に煮たから大変だった。

きれいな女の子のセーターも、見るかげもないきたないものとなり、私達は「ごめんね、ごめんね」と子供たちにあやまった。

お骨拾い

四月のある日、子供達はおのおの自分の家の焼跡を訪ねることになった。だいたい地域別に三班に分れた。

私達は、井上みちこ、大黒美都子、茂子姉妹を伴って出かけた。町名を忘れてしまったが、どこまでも瓦礫の町がつづいて、住む人はごく僅かだった。ところどころ水道の水が噴き出していた。道はだいぶん片づいていたので、さすがに子供たちはよくおぼえていた。

「この小路に入って何軒目だったから、ああここです。ここです。」と、なつかしうにあたりを見廻し、早速お骨はないかと探しはじめた。井上さんは、お父さんと二人暮らしであった。お骨が出て来た。ねまきの焼け残りも出て来たのでお父さんの遺骨とわかった。大黒さんの方もすぐ見つかった。用意して来た箱に入れた。焼跡に花を供え、みんなで拜んでから、そこを後にした。

脱走

籠の鳥は籠の中に居さえすれば、餌も水も与えられ、危険にさらされることもない。しかし、それに満足せず、外はもっと自由な世界があると思ってとび出す。

子供らもそんな気持なのか、脱走者が相ついで出た。居ないということは食事の時にわかった。わかるとすぐ職員が宮島方面と、広島方面の二手に別れて探しにいった。運よく見つかって、連れて帰ることもあったが、殆どは行方がわからなかった。

ある時は、二人で夜の脱走を計画し、事務所の金や倉庫の食料品などを持出したこともあった。

個別指導

戦争によって家を失い、両親を失った子供らの心の中には、大きな空洞が出来、他からどんな手がさしのべられても、容易にみたすことの出来ないものであった。向学心など要求するさへ苛酷と思われた。しかし、私達はどうかして一日も早く立直ってくれることを望んだ。どうしたら子供をなぐさめることが出来るか、どうしたら勉強しようとする意欲が湧くだろうかと、毎夜のように職員会議が続いた。

そして、主人の発案によって、朗読、漢字、計算力のテストを、随時個人別に行なうこととした。朗読は自分で練習して自信がついたら、好きな時やって来て、先生に聞いてらう。良かったら合格の印を押してもらい、次に進む。

漢字、計算力テストは、何段階に分けてテスト用紙が印刷してあって、程度の低いものからやって、出来ればいくらかでも上のテストを受けられるようにした。これは、割合、子供の競争心をあおったようで、よろこんでテストを受けていた。

下村先生

若い女教師であったが、教育熱心で子供のことを親身になって考える方であった。

子供らは先生のように甘えた。そして何でも先生に話した。子供らはどんな環境に生い立ったのか、家族構成はどうだったか、くわしく調査されていた。

子供らの寝た後は、毎夜のように、三人で話し合った。話題は子供の事ばかりだった。

きょうの出来事、子供らの言動、個々の子供の性格、なお、その性格が形成された過程についての探究など、話はつきず、十二時を過ぎてねることが多かった。あまりたくさんな子供ではないし、たえず密接な話合いによって、すべての子供について、大体を把握することが出来たと思う。

ひし型のよもぎ餅

主人の一中時代の友達が、宇品でひし型のよもぎ餅をつくっていると聞いて、尋ねて行った。

よもぎと米の粉、胚芽、ぬか、みかんの皮を粉にしたものをつきまぜ、それをひらたくして、ひし型に切ったものである。餅というにはあまりにもお粗末な物であった。

これは、工場のおやつにというて作られているもので、街にでも出ると、たちまち行列が出来、とぶように売れたのである。

主人がおねがいすると、取りに来られるなら、毎日、子供の人数ぐらいはあげますとの事、最年長の子が、毎日、宇品まで取りに行って来ることになった。

子供にとっては、貴重なおやつで、これをやるからお掃除を代ってくれといったら、よろこんで代るといった具合であった。

運動会

秋日和の一日、育成所の中庭で運動会が行なわれた。職員も交って、かけっこ、二人三脚、置きかえ競争などをした。また、マラソンもした。女の子は遊戯をした。全員で村祭を踊った。

林田先生が目かくしで走る時、一生懸命走られて、第一児童館の板べしに、いやというほど頭をぶっつけられて、気の毒だったことを、今でもはっきり思い出す。所長さんも、平常よりしっかり食べさせてやってくれといわれて、子供らも大よろこびだった。

遠足

明日は遠足というので、炊事の人たちは弁当作りに忙しい。子供らの好きそうな卵やき、煮豆、てんぷらなど、物資の少ない時なのに、いろいろと考えて作られたおかずを、夜おそくまで折箱に詰めておられる。普通の家庭では、これだけのご馳走は出来ないだろうと思われる。

所長さんはじめ、職員の方々のご苦労がうかがえる。

食べる時間は二十分もかからないのに、これを作るために要する時間と労力、そして心配はなかなかではない。

このことを、子供たちにもよく知らせねばならないと思った。

明るく日、一日を楽々園に遊んだ。

お月見

いつも腹いっぱい食べさせてやるという事が出来ないから、今夜だけは、とにかく腹いっぱい食べさせてやってくれとの、所長さんのお達しで、夕食はいろいろとご馳走して下さい上に、子供らの作ったさつまいもを、たくさんふかしていただいた。

子供達は、歌ったり、踊ったり、レクリエーションに楽しい一時を過した。

野炊き

所長さんが、どこからか牛肉を求めて来られた。牛肉など、近來見たこともない貴重品だった。今日の夕食は野炊きという事になった。

各母親を中心としたいくつかのグループに、牛肉・野菜・鍋・食器などが配られた。子供たちのはしゃぎ方は大変なものである。男の子は薪集めをする者、丘の上を走り廻って場所を探す者、女の子は鍋や野菜を洗う者、野菜を切る者、やがて鍋のものは煮えたらしく、あちらでもこちらでも夕食がはじめられ、丘の上はほがらかな笑い声に満ちあふれた。

農作業

私たちは一家に割りあてて、畑が定められていた。

食物を作るとなると、子供らも真剣だった。一生懸命掘りおこして、堆肥を入れてうねを作り、いもづるをさした。時々、水やこえをやり草取りもした。

秋になるといも掘りをした。大きないもが出来ていた。子供のよろこびようは大変なものであった。それがおやつとなった時は、どんなものよりもおいしいといった表情であった。

外出

子供らも少しは外出させて、外の空気を吸わせねばということで、時々七、八人の子供をつれて広島方面へ出かけた。

その頃、已斐行の電車は、全線が復旧しておらず、天満橋のあたりで、少し歩かねばならなかった。そこに露天の闇市が出来ていて、いろんなものを売っていた。人だかりがしていると思って、のぞいてみると、必ずそこには食べ物があった。

子供らをつれてそこを通ると、みんなはふり返って私たちを見ていた。

私たちは海藻で作ったそうめんでもなく、ところてんでもなく、春雨でもないが、まあそれらによく似たものを売っていたので、それを買ひ、段原末広町の自宅へ持帰って、子供らに食べさせた。

たにしどの

職員と子供らが、一堂に会して食事を共にする時など、決って歌われた歌に「たにしどの」がある。これは望月先生の音頭ではじめられた。しまいには子供らが、皆おぼえて手拍子面白く歌われた。

私は数年たって、この歌を口ずさんで見ると、一ヶ所だけどうしても思い出せない箇所があるので、畑重熙君に手紙を出して問うて見た。細君はすぐ返事をくれた。

たにしどのたにしどの

あたご参りにおじやらぬか

いやで候いやで候

丁度去年の夏の頃

おどじょうどのにさそわれて

ちよろちよろ小川をわたる時

とんびやからすやふくろめが

あちやつきこちやつきつつきだす

そのきずがそのきずが

ずっきらずっきら

ずっきらずっきら

うずきだす

何か妙薬ござらぬか

ござるともござるとも

山の上なる蛤と

海の底なる松茸と

のみのきん玉

しらみのはらわた

これを丸めて飲むなれば

効能たちまちあらわるる

効能たちまちあらわるる

畑君の手紙

畑君からの手紙を読んで、その生長に驚いた。文章も実に立派で、思想も堅実であることがうかがえた。

自分らが原爆によって両親を失ひ、悲歎のどん底にあった時、あたたかい手をさしのべて救い上げて下さったのは、山下所長さんである。所長さんは終戦後の物資の乏しい時代に、われわれの親に代ってかならず廻り、食物を、衣服をと心配して下さいました。

私達こそ所長さんをはじめ、職員の方々のあたたかき愛に守られ、また広い社会の方々の寄せられた厚意によって、ここまで生長することが出来たのである。われわれ、この育成所に育った者はみな兄弟である。喜びも悲しみもわかち合い、励ましあうために重心会を結成している。みんなで、しっかり手をつなぎ励まし合って、社会のために働きたい。というような内容であった。

松村先生

集団疎開児童を引率していつて居られた松村先生は、原爆で家族全部を失われた気の毒な方であった。自身が身を以て体験して居られるだけに、子供たちへの愛情は深かった。三、四人の子供の母として世話をして居られたが、大きな子供が「お母さん、お母さん。」と甘えている様子は、ほほえましいものであった。先生は、主として炊事の方を担当して居られたが、くるくるとこまのように働いておられた。何事にもよく気のつくやさしい先生であった。

増田君からの手紙

先生、本日はなつかしいお便りをいただきまして、涙の出る程嬉しく思いました。さて開所満八周年の記念行事を昨年の暮に催しました。年月の過ぎ去るのは早いものです。人生五十年にして時計の如くコツコツと短かくなっています。朝に夕にと日々を送り、いつのまにかは白骨となる身です。当育成所も一月十五日に、市移管式を挙行政致まして、おじいちゃん、おばあちゃんたち(山下所長夫妻)は、基町のバラックの方に移転されております。これからは市営になり、今迄の職員は、臨時雇として勤められています。先生はみんなの名前をよくおぼえていらっしゃいましたね。みんなの様子を簡単にお知らせ致します。全部は書かれませんので、これをよき機会と致しまして度々お便りを差上げますからね。先生、よく私の事を忘れずにいて下さいましてどうもありがとうございました。

では時節がらお体をお大切になさいませ。

井上美智子昭和二十二年頃、伯母の所に引取られ子守などしています。

大黒美都子家事見習のため、二、三日前退所しました。

大黒繁子職員代りとして所内で働いています。よく肥えていますよ。

岡田浩二自衛隊に入っています。

岡田登美育成所で働いています。

斉藤章パン屋に勤めていましたがやめています。

畑俊夫佐伯郡原村国立療養所で療養中です。

重熙、誠二、良則の三人は元気でよく勉強しています。

岩田雛恵畑君と同じく療養中です。

他の兄弟は元気です。

菅隆夫野球好きでよく肥え、よく何でも食べます。

堤六方学園に入りましたが、間もなく病気のため亡くなりました。

堀イネ子幼い時と変わらず、少し叱るとすぐ大声で泣きますが、元気でいじが悪くてなりません。

田中止夫ろうあ学校の寄宿舎に入っています。

大昇元気です。

縫部職業補導所へ通っています。

中湯尾道市の東洋せんいの方で働いています。盆や正月には帰って来ます。

増田君へ

早速お返事をどうもありがとう。

とてもとてもうれしかったですよ。一々丁寧に消息を知らせて下さって、皆の様子がよくわかりました。

増田君はあの頃も上手だったけれど、とても字が上達しているのでびっくりしましたよ、学校でもよく勉強が出来るのだらうと想像しました。

一月十五日から市営という事になったそうですね。長らく可愛がって頂いたおじいちゃん、おばあちゃんとお別れするのはつらかったでしょうね。あなた方の一番つらかった時代をよくめんどうを見て下さったおじいちゃん、おばあちゃんの深い御恩を忘れないでね。

細君とヒナちゃんは可愛そうね。病気、ひどくなければ良いけど、早く元気になって下さるよう祈っています。

堤君は亡くなったって、可愛そうな人だったわね、きっとお父さんお母さんに会って喜んでいるわね。

なつかしい皆さんに会いたいなあ、お話をしたいなあ、あの頃小さかったうちの子も、中学へ進みます。皆が大きくなっている筈だね。またお便り下さいね、楽しみにしています。では元気で御勉強の程を祈ります。

斉藤君へ

お久しう、どうです、お元気ですか。

お別れしてからもう六年にもなりますね。

ずい分変わったでしょうね、六年間どんな道を歩んで来ましたか。育成所での平凡な様な生活の中にも、いろいろと何かを経験し、心のなやみにもぶつかり、或いは之を切り開き、試練の年月を経られた事と思います。過去をふりかえっての感想をお聞かせ下さい。

これまでおたよりをしないでいましたが、決してあなた方のことを忘れていたのではありません。どうか正しく明るくのびて行かれるようにと祈って居りました。戦争の痛手を被ったのは何といってもあなたたです。戦争はいやです、ほんとうにいやですね。それを最も、痛切に感じられるあなたたが、強く世界に向かって叫ばなければなりません。その使命に生きてこそ、あなた方の生涯は意義づけられるのではないのでしょうか、希望に向かって突進して下さい。あなたたの将来は長いのです。こつこつと築いて行くのです。未来に光明をえがいて、いかなる困難にも克って勇しく邁進して下さい。

階段のおどり場で、よくうちの先生と議論しましたね。斉藤君はなかなか面白い子だといっていました。あの頃と今とでは多少あなたの人生観も変っていることでしょう、あなたと紙上討論をしてみたいです。おひまの折またお便りを下さい。

元気で明朗な日々をお送りの様、祈っております。

中湯さん、進藤君へ

中湯さん、進藤君、お元気ですか。

ずい分しばらくですね、私をおぼえていてくれますか。

育成所も変わったでしょうね、そしてあなた方も見違えるほど大きくおなりでしょう。開所当時の先生方もすっかりお変わりになり、あの頃の友達もだいぶ減った事と思います。

新聞に育成所のことが出ていると、目をみはっていつも読みます。そして思うのは皆さんの事です。なつかしい色々の思出です。一度お会いしてあの頃の思出話がしてみたいといつも思います。

中湯さんと進藤君の事が、このあいだ新聞に出ていましたね、中湯さんはアート洋裁学院に通っていらっしゃるそうね。洋裁がお上手におなりでしょうね。進藤君はもう中学生ですって、進藤君が勉強したいといっって困らせたわね。一年生だったわね、あの時からどんたに背が伸びているかしら、どんなに中学生らしくなったかしら、ほんとに見たいですよ。そしてあなたが小さかった時の話を上げたいわ。

他にこうちゃん、藤田君、小野ケイ子さん、岩田君などがいましたね、藤田君はお父さんが復員されてつれて帰られたという事が新聞に出ていたので、よかったなあと喜びました。藤田君が比治山にいたころは髪はぬけるし、ひょろひょろにやせてとてもだめだろうと、松林先生もおっしゃっていましたのにね。ほんとうに運が良かったのですよ。

他の人はどうしましたかしら、両親や親類に引取られていった人がいますか。あつたらおひまの時知らせて頂けませんか、お願いします。

では又、お二人とも元気で勉強にはげんで下さいね。

教え子の手紙

今日はお手紙ありがとうございました。

突然の手紙なので内心びっくりしましたが、拝見しているうちに何時の間にか涙で文字が見えなくなりました。先生は私のような者を今もまだお忘れにたらないで色々とお心配下さっていることが判り、何と申上げてよいかわたし親にも勝る先生の愛情をしみじみと身に味わい、幾度も読んで泣きました。

先生のお手を離れてもう十年になりますね、その長い間私は数えきれない程、いろいろな経験をしました。その中で最も忘れられないのは言わずとも、原爆の惨禍です。私の生涯はその日から見事に左右された様に思います。

終戦直後、人々の頭の中を混乱させていたあの苦しみの中で、私は訴えようにも訴える所のない、怨もうにも怨む人も判らない、さながら地獄そのものの毎日を泣いて暮らしました。

なにも知らない幼子達は、私を見ると「鬼が来た、鬼が来た。」と言って逃げました。私はその子達を本当に鬼になった様な気で泣き乍ら追い廻しました。亡くなった人がどんなにうらやましいと思ったか知れません。其の度に母に「殺して呉れれば良かった。」と言っては困らせました。私達お死にも勝る苦しみを味わいました。しかし周囲がだんだん平常の生活に戻っていくうちに私の気持も少しずつ静まって、結局どうにもならないことを悟りました。いくら悲しんでも、泣いてみても、今更どうにもならないことを……

自分で自分の気持を変えるより方法はありません、でも気持を変えることも、そんなに簡単には出来ませんね。又、そうすることも一つの苦しみです。

私は学校を卒業して、交換手という職業につきました。私のような不幸な人間には、顔の見えない声を主要とする事務が適していると考えたのです。恥しい思い

をすることもないでしょう。悲しいこともないと思いました。もう四年半になります。その間に本当に自分の生きる喜びを知り、希望が与えられました。この職業について本当に良かったと思い、毎日感謝の生活をしています。

皆明かるく親切です。友達もすぐに出来て私の暗い気持は一時こふっとんでしまいました。少々の苦しみや悲しみは誰もが持っています。私は仕事に何時しか愛着を感じ、私から手離せないものになりました。私は体全体のサービスを声に託して一生懸命働いています。

最近各方面から私達を原爆乙女と、あんまりありがたくない代名詞をつけて呼びかけていますが、私だけはそれらの人々より異った生き方をして行こうと思っています。

先生と今はなき多くの友達と送ったなつかしい小学校時代が思い出されて涙がやみません。あの頃は、皆生きていてみんな幸せでしたね。どんな小さな事でも記憶しています。本当に幸せでした。私は忘れません。

教え子へ

早速ご返事をありがとう、私は貴女からのお手紙を拝見してどんなにうれしかったか知れません。貴女は苦しみのどん底から雄々しくも立ち上っていて呉れたのね。私がつまらない自分の一人合点で、あまりにも敬遠していたことを今更のように恥しく思います。

でも、私の思っていた通り貴女は心のしっかりした人であったとうれしく思いました。そして、思い切ってお手紙を出して良かったもつと早く出せばなお良かったのにと後悔の心も起りました。広島へ出るたびに会ってお話したい、手紙が出したいと何度思ったことでしょう。そのたびに何か私の心をためらわすものがあったのです。

貴女のお手紙を読んで、私の心の深い霧はすっかり晴れてしまいました。よくもここまで更生してくれましたのね、しかし、この心境に達しられるまでには、苦しい幾多の過程を越えられたに違いありません。

むしろ私はこの苦しい時にこそ温い手をさしのべるべきであったのです。しかし、貴女はもう救われています。貴女は若くして深刻な体験をされました。そして見事にそれを克服されました。その点私の師であると思っています。泣いて泣いて泣きあかし、どうにもならないことを知って、その悲しみのどん底から立ち上り、今は希望にみちた職場に自分の生き甲斐を感じ、感謝の毎日を送っていらっしゃるとは、何と美しくも尊いことではありませんか。お友達の誰もが進み得たところの心境です。私もとてもそこまで行けてはいないのです。

貴女は高いところに立っていらっしゃる、明るさといっても普通の明るさではないのです。澄み切った明かるさです。

どうかこれからも、この気持を持ちつづけて元氣でお働き下さい。

古城澄子さん

古城澄子さんは、比治山国民学校で五年、六年と受持って、山中高女に入学、原爆当時は二年生になっていた。

お父さんは、アルゼンチンで貿易商をしておられた。日本人は日本の学校で教育されねば、ほんとうの日本人にはなれない。というお気持から、お母さんは澄子さんと妹の栄子さん弟の徹さんを連れて、帰国されたのであった。

澄子さんは、容姿端麗、努力家で成績もよく、性格は素直で明かるく、級友のみんなから愛されていた。山中高女でも成績優秀で、級長をつとめていた。

私が迷子の世話にあけくれている時、お母さんが学校へ来て下さった。

「澄子は、あの日の午後、まるはだかで家に帰って来ました。私はそんな姿になって、苦しかったろうに、ようがんばって帰って来たね、とほめてやりました。

澄子は、自分の苦しいのも忘れて、栄子ちゃんはどうしたかしらと、妹のことがかりしきりに案じていましたが、あくる日の夕方なくなりました。

栄子は似島にいるということを聞いて、かけつけましたが、この子もとうとう駄目でした。先生、ほんとうにいろいろとお世話になりました。これは澄子が学校で縫ったもんぺです。あの子の記念品と思ってはいてやって下さいませ。」といって渡されたもんぺは、紺の服地でミシンでまことにきちんと縫われてあった。私は数日後、仁保町にある古城さんの家をお訪ねした。仏前こぶどうをお供えして、あかりをともし合掌した。明かるい笑顔で「先生」と呼びかけてくるような気がした。

「こんないい子が、どうしてこんな可愛そうな目にあわねばならなかったんでしょう。」

私は涙があとからあとから湧きでるのをおさえることが出来なかった。

「あの子は、先生が日記をつけることは、とても良いことだとおっしゃったといって、六年生の頃からずっとつけていましたんですよ、あの子を思い出す唯一の記念品になってしまいました。」と話された。

一年位経って、古城さんの家を訪れた時、お母さんは、たった一人残された徹さんをつれて、御主人のいらっしゃるアルゼンチンに帰られるという直前だった。折角、子供の教育をと思って帰って来られたはずなのに、何ということだろう。こんな事になるのなら、なぜ日本に帰って来たのだろう。悔いても悔いてもあまりあるものがあるだろう。

帰って行かれるお母さんの気持、それを迎えられるお父さんの気持はどうだろうと、胸があつくなるのであった。

八月六日の朝、建物疎開のため、動員されて出ている勤労学徒はずい分多かった。私の教え子も女学校一年二年に在学し、殆どが被爆した。

私は、伝え聞いた限りその家を訪ね、霊前にお参りさせていただいたが、私の知らない人もたくさんある事だろう。

私は舊のままで死んでいったこれらの教え子がいいとおしくて、何時までも忘れられないのである。

戦争さえなかったら、皆生きているのに、そしたらどんなに楽しい事だろう。

私は北治山国民学校の収容所で、淋しく死んでいった幼な子と、亡き教え子の冥福を祈ると共に、戦争のない、原爆水爆のない平和な世界が、一日も早く来ることを切望するものである。

育成所にいた子供の姓名

河村二人、井関二人、谷口・山中・増田、岩田四人、川井二人、井上・杉本・中和、大黒二人、畑四人、縫部・進藤・藤田・吉永・岡田二人、野崎・中津・田中・加藤・橋詰、今田三人、大昇・中湯・小野・菅・堀

職員

山下所長・森・林田・校正・望月・温品・橋羽・松村・伊藤・松本・迫間・林・佐々木・らんしょう・重本

学校職員

藤原・楠木・下村・田中・渡辺・斗樹二人

原爆で亡くなった教え子(わかっているだけ)

古城登子・中村田鶴子・浅野琴美・田村滋子・上坊幸子・上野美代子・今中葉子・黒崎幸子・保田延江・佐々木順子・空美智子・山中順子・山本晴子・浜崎幸子・原静子・瀧房子・仁井佐枝子・中辻・佐藤・峯野・新見・木村

(八)

広島原子爆弾被害調査報告（気象関係）

Meteorological Conditions Related to the Atomic Bomb Explosion at the Hiroshima City. (Synopsis) by Mititaka Oda.

Nov. 1947

The Hiroshima District Central Meteorological Observatory

昭和22年11月

広島管区气象台

内容

1. はしがき……………1
2. 爆発当時の景況……………1
3. 一般の風の状況……………5
4. 火災に伴った旋風（龍巻）現象……………7
5. 爆撃と火災に伴った驟雨現象……………10
(他の都市の爆撃に伴った驟雨現象との比較、降雨状況、雨水の性状、降雨量、降雨機巧)
6. 雷鳴……………19
7. 飛散降下物……………19
8. 破壊現象……………23
(状況、分析区域、程度、爆風傳播速度、爆風圧)
9. 傷痕現象……………26
(火災状況、自然着火、火傷、熱感、植物の焼損、縞状の焼夷現象)

広島原子爆弾被害調査報告書（気象関係）

広島管区气象台

§一、はしがき

本調査報告は原子爆弾被害調査委員会（学術研究會議）の第一分科C班（宇田道隆技官主任）の行った気象部門の調査に於て、広島管区气象台長菅原芳生技官並びに同台員北勲、山根正演、中根清之、西田宗隆各技官の協力により、昭和20年8月～12月までに蒐集した資料に基づいて宇田技官が主となって取纏めた成果である。

これを今回（昭和22年11月）印刷に附して関係のある向に配布することに致した次第である。

§二、爆発当時の景況

(1) 昭和20年8月6日朝8時15分頃、米軍（B29）3機が高度8500米ぐらい（高射砲隊の測高機観測）で広島市北東方上空から飛び来つて前古未曾有の原子爆弾1発*を略々広島市中心に向つて投下、地上より600米前後の高さの空中で爆発せしめた為瞬時に殆んど全市の家屋建造物を破壊し、市内大部の火災発生による焼失と死者数十万、商社住数万の殺傷の惨状を残して、市南西方上空に飛び去つた。

*同時に白色落下傘を附したラジオゾンデの如きもの3箇を投下し、それらは亀山村に落ちた。

該機は爆弾投下後反轉して急速に離脱を図つたが、炸裂時には約16秒離れていて、恰も高射砲至近弾を受けた様な衝撃を感じたと放送された。

(2) 爆発当時の景況に関しては第一回（a' , a" , b , c , d）に図解した通りである。即ち當時は晴天無風に近い静穏であつたが突如中空で「火の玉」が爆発し、恰も大量にマグネシウムを焚いた閃光のような（或ひは炭素弧光が、電車のスパークの如き）白晝の太陽に直面したよりも更に強烈に眩しい自熱的閃光（人により紫色と云ふ者あり）が「ピカーツ」と光つた。**

*太陽光線を凌ぐ自熱的眩光より判断すれば、火の玉の中心温度は1万度乃至それ以上であつたのであらう。学友明治工業専門学校教授柴橋博辰氏の長崎に於ける調査研究によれば、火の玉の温度は2～3万度、火の玉の直径70米位と推算された。同氏の御教示に深謝する。

市民の各人は皆自己の側近に爆弾乃至焼夷弾が炸裂したかの如く感じた（第1図a' , a" , 参照）

次に火の玉を中心に円形に広がった火焰の前面は白色乃至赤白色の光幕の如く驚くべき速さを以て（秒速集料と推定）四方に走り直径4キロに亘り殆んど全市を傘で上から伏せたように或は赤い朝顔の花を逆さに伏せたように蔽ひ包んで見えた。（第1図b参照）

次は第1図Cに示す如く黒煙が殆んど同時に市中央部の地上より立ち昇つて高度数千米に及び全市を蔽ふたが、一方火の玉は消失すると共に白い煙の様な雲に化して更に高く昇つた。

この状況を遠望すると白い雲を頂にして赤黒い雲を中心にし黄色を帯びた雲を側辺に繞らして、五色の雲海は恰も松茸の生え出る様に、又は南瓜の上へ上へ伸び上つて行くような形をして左右にモクモクと白黒赤黄ともつかの彩雲を渦巻きつゝ入道雲状に発達して第1図Cに示す如き形態に成長した。

一方火光の走るに續いて煙が波状に広がると見る間もなく疎密波をなして爆風が襲い来り、ドーンと瞬間的に次から次へと破壊力を逞しうした*。

※当地では原子爆弾のことを俗稱「ピカドン」と云ふ。「ピカーッ」と光った後に「ドーン」と来たことを示す。

斯うして閃光に續いて爆風の通つた後暫く経つて黒い煙の條が行く本も市中から立ち昇つて火災の発生を示し、第1図dの示す如く大火災による巨大な塔状の積乱雲を終日発達せしめ、且つ黒雲（積乱雲）は爆発後20～30分から北々西方に徐々に移動してその進行につれて第2図に示す様な顕著な驟雨現象（9～16時）を示した。火災は9時頃から大きくなり10～14時頃最も盛んで夕方には稱々衰へたが、尚3日間も燃え続けたくらいで、6日の午後は殆んど全市火災の煙で包まれていた。

（3）当時の体験者に就て調べた所、下記の事実が判明した。即ち爆心より2軒以内の圏内では光つて直建物、土壁などが倒壊し、土埃が黒煙の様に一時に四方に立つて急に周囲が夕闇乃至日食時程度の暗さになり、はれて明るくなる迄に5～30分位も要した***。（爆心の直下の者は鏡餅大の白き光物落や数條の大流星の如く次に数百の爆弾の様に地上近くで炸裂の観ありと云う。）

※※広島で頻りに「ガス」を呑んだ者は原爆症がひどいと云うがこの「ガス」は恐らく高放射能を持つ有害な物質を含む黒塵の立つたものを指すと思はれる。
爆心より2～5軒の県内にあったもので、山上とか会場とか廣い野原とか展望の開く所に居たものは前述の第1図a, b, cの如き火の玉爆発の景況をよく観察している。

5軒以上の圏内に居た者は入道雲の立つて変化するさまを観察し且つ閃光と爆風との時間的間隔をよく認める余裕があつた。
従つて爆発して火焰光陣面が広がつたと殆んど同時に市の中心部2軒以内の圏内より黒塵煙の柱が立ち昇つて全市の上を蔽ひ、續いて生起した驟雨によつて洗ひ落されて市西方の黒雨現象となり、雨に會はず気流に運ばれた分が黒塵の降灰現象となつたのである。

斯の様な黒塵の昇騰は如何なる機功によつて起つたのであろうか？ 恐らく爆発そのものとこれに基づく高熱が爆心附近のガスと空気に急激な膨張を與へ、先づ爆風により地面を叩き且つ家屋、土塀、壁などの崩壊による塵埃と爆発物の微粒子（放射性物質を含む）を混入し、恰も灰神楽のように舞ひ立てゝ、次に爆発中心部に於ける気体の膨張と高熱で軽いための昇騰による低圧吸引の作用が中天に迄急速に黒い塵煙を舞い上らしめたものであろう。以上の事柄が起るには光つてから数秒を要しなかつたくらいの速さであつた。

（4）爆心位置
爆心の地上に投影された位置は第8図に示す通り大体護国神社の南方300米付近で相生橋東方の商工陳列所の直ぐ南の墓地付近が倒壊物、折損物の示す方向、焦痕の示す方向、墓石等の倒れ方、破壊の一般状況から判断してこれに該当する。

爆心の高度は第1表に示すが如く焦痕による吾々の調査によれば600米前後と見られる*。
*長崎に於ける爆心の高度は柴橋博辰氏の推算によれば530米位でよく似ている。

表1表 爆心高度(h) 北、中根技官計測

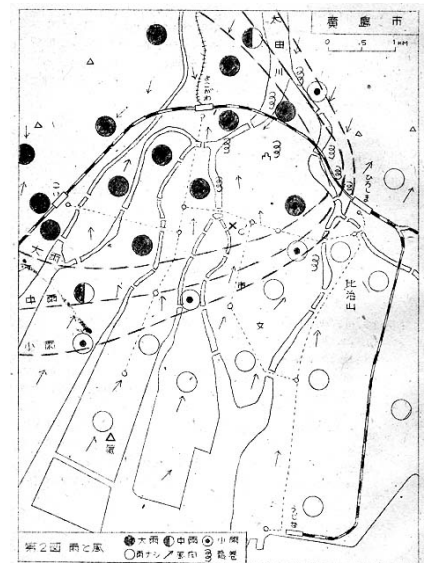
(イ)	二葉山鶴羽根神社社務所 米梅柱 熱線により黒魚の痕 入射角(θ)測定(ハンドベル使用) $\theta=20^{\circ}55'$ 爆心よりの距離 $\Delta=1870\text{m}$ $h=714\text{m}$
(ロ)	同社拝殿庇、檜、焦痕 $\theta=18^{\circ}01'$ $\Delta=1850\text{m}$ $h=601\text{m}$
(ハ)	三滝橋～新庄間堤防竹林幹上の焦痕 $\theta=16^{\circ}30'$ $\Delta=2500\text{m}$ $h=740\text{m}$
(ニ)	三滝橋附近竹肌の焦痕(橋欄干の影と看做されるもの、稍不確実) $\theta=16^{\circ}30'$ $\Delta=2500\text{m}$ $h=740\text{m}$
(イ)(ロ)(ハ)平均685m、(イ)(ロ)(ハ)(ニ)平均615m	

（5）爆発音は山口県の柳井(60軒)でも聞かれたが、これは音響異常傳播の疑ひがある。閃光は壬生(34軒)、呉(20軒)、岩国(38軒)の如き遠地に於ても認められた。

§三、一般の風の状況

（1）地上風

（イ）当日の気象状況は付録1の通りであるが、市内外の人々の火災時の煙の靡き工合や風当り等に基づく経験風向を図示したのが第2図である。之を流線化し



たのが第3図である。

爆発当時は海陸風の交代時の朝風で、既に陸風が衰へて海風になり、海風の強まりつつあつた時で、市の北方は北寄りの風、市の中部以南は南よりの風を示していた。

瀬戸内海でも特に海陸風の顕著な広島で、その最も卓越する盛夏8月であるが、その範囲は大体海岸から数キロ以内を見られている。

当日の南北風の境界即ち前線は略々地形的に二葉山から白島、横川を経て茶臼山に亘る…広島駅～横川駅～己斐駅の鉄路に近づき…線に沿つて存在するものと見られる。これは略々海陸風の限界線に近いから、発生した前線が特に持続発達したものであらう。

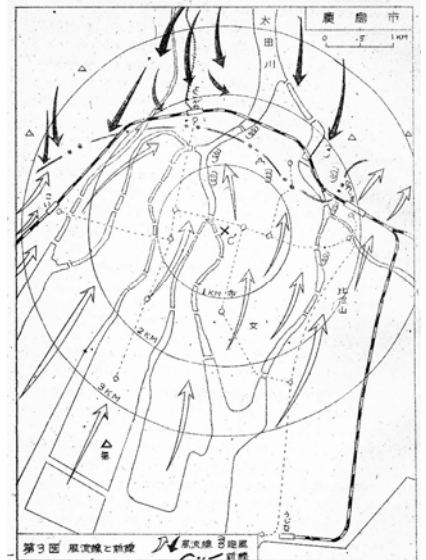
(ロ) 第2図、第3図に於て注目すべきは前記の南風と北風の収斂する前線の存在であるが、爆心地C'はこの前線の少し南方に位置するため、中心部附近の上昇気流補填のため吸入せられる南偏気流は一層発達し、特に火災の盛んなるに及び一段強くなつて、6日夜には少し弱まつたものの、遂に陸風に転ずることなく、南寄の風を続ける異常を示した。尚南西風系は北上するに連れ南風から南東風、東風と次第にC'に対し北偏風系と共に反時計回りの施風分布帯を含んでいる。

(二) 市西部の江波山の風は北枝官の調査によれば、8時5分頃、陸風から海風に交替し、南西風3～5米/秒で市内に流入し平常なれば22時過ぎ陸風に転ずる筈のが、火災のためか引き続き南風を吸引して翌朝に及び、この間の南西風2～3米/秒で、平常の陸風1～2米/秒を加減して4米/秒ぐらいの流速で火災現場のC'方面へ吸収された気流を推察出来る。(附録2参照)

(2) 上層風

黒雲、黒煙は共に北西方向に流れ動き黒雨を降らし、黒塵灰を降らせたことから高度五百米以上数千米に及ぶ上空に南東風があつたことがわかる。この推定流速は1～3米/秒である。

当時の高層観測資料を欠き実測の意味のできぬを遺憾とする。



§ 四、火災に伴つた旋風（龍巻）現象

(1) 火災の勢い最も猛烈なるに及んで11～15時を中心に市の中心より北半部に局所的に激しい旋風現象を発生した。

(2) 旋風は特に前線対附近に発達している。(第2図、第3図)

(3) 太田川の主流及びその支流の神田川から京橋川にかけての分流域を中心に河川流域に旋風の顕著なものが発生し、龍巻現象を示している。両側陸岸部の火災による激しい上騰気流と、河川上の冷たいための下降気流とがよれ合つて激烈な旋風の一群を河川上に連ねるに至つたものと判断せられる。

関東大震災の火災時に東京隅田川に沿ひ旋風の著しかつたのも同様である。

(4) 旋風の威力は甚だ甚大で、体験者中には生命に危険を幾度となく感じたといふものが多い。次にその実例を挙げよう。

(イ) ドラム罐を巻き揚げ、径3尺くらいのトタン板も巻き揚げ、屋根に葺いたトタン板は紙を剥く様に舞ひ飛んだ。(泉邸、常盤橋附近)

(ロ) 鉄板が舞ひ飛び暑さ1寸位の厚い板も吹き飛んだ。(白島、太田川附近)

(ハ) 衣類入り行李が巻き上げられた。(柳橋附近)

(ニ) 人を何人も巻上、大人でも橋につかまつて暫く昇天を免れ得た。小供など中に舞ひ上つた。(栄橋附近)

(ホ) 1章酒瓶が宙に浮ひ踊り、ビール瓶3本転り来る。(大塚町、常盤橋附近)

(ヘ) 客車が旋風にため独りでに転がり動き出した。(広島駅)

(ト) 火焰を北から南に数十米吹きつける強風を示した。そして火のついた木材が舞ひ上つた。(横川駅附近)

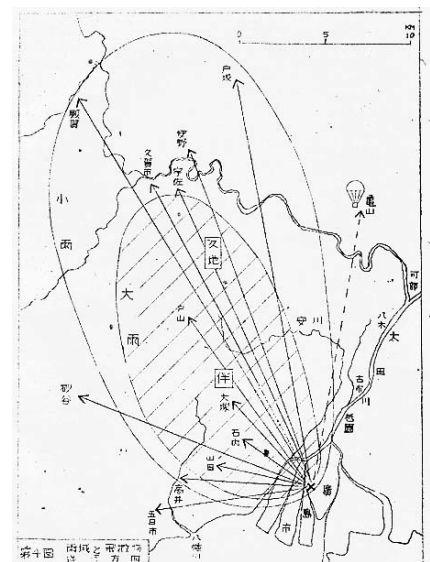
(チ) 神田川の河水7～8尺も龍巻をなして昇り、その水が又沛然と雨下した。当時の豪雨をこのようにして生じたものとして浅野泉邸附近や猿猴橋附近の体験者で考へていたものがある。

以上を通観するに旋風がこの場合特に前線帯の河川流域に発達したのは前述の通り、河川の兩岸に於ける火災による著しい高温のための上昇気流に対し、河川域では比較的低温で下降気流を示し、両者の間に温度差が甚だしく、此處に先づ河川の兩岸の各々に沿ひ水平軸の渦を2列作り、次に之等が垂直渦に立ち上がり、丁度河川の北方は北風、南方では南風と相反する二大気流の衝突、収斂する前線帯では火災の最盛期に最も激烈な旋風を発生するに至り、それらの垂直渦が、一般気流の方向に流れ動いたものと解せられるのである。これは旋風系列を人工的に作り出す方法を暗示している。

§ 五、爆撃と火災に伴つた驟雨現象

(1) 都市焼夷爆撃に伴つた驟雨現象との比較

昭和20年6月1日、7日、15日の大阪市爆撃の例、さらに8月の福山市、福岡市の例など到るところ各都市の焼夷爆撃に際して発生した特異な驟雨現象が観察せられた。6月1日大阪に於いては煤煙を雨水



に含めるためか黒雨で、鉄帽や防空服に泥塵の付着を認めた。この爆撃は9時40分～11時30分頃にあり、火災が弓続き起り、13時頃最も盛んで夕刻に及び、雨は11時48分～16時37分に降った。11時23分～12時19分の間雷鳴を伴った。(国富大阪管区気象台長の御教示による)

広島の場合には以上に対し驟雨現象が特に局部的に激烈顯著で且比較的廣範囲で、直径19km、短径11kmの楕円形乃至長卵形の区域に相当激しい1時間乃至それ以上も継続せる驟雨を示し、少しでも雨の降った区域は長径29km、短径15kmに及ぶ長卵方をなしている。(第四図参照)

さらにこの雨水は黒色の泥雨を呈したばかりでなく、その泥塵が強烈な放射能を停止人体に脱毛、下痢等の毒性生理作用を示し、魚類の斃死浮上其他の現象をも表はした。そして其後も長く2、3ヶ月も広島西部地区の土地に高放射能性を留める重要原因をなした。

同じく原子爆弾攻撃を受けた長崎では広島に比し遙かに小規模な驟雨現象があったに過ぎないが、これは恐らく広島の場合の如き前線の現はれはなかったことゝ火災がずっと小規模であったことが一般気象による成雨条件の他の大きな因子となったからであろう。

以上の爆撃による驟雨現象、特にその降雨機巧に就ての探究は人工降雨法の見地よりするも極めて重要な意義ありと思料せられ、将来の研究に多大の示唆を與へるものであらう。

(2) 降雨状況

(イ) 降雨域の範囲 (第四図参照) は広島市中心の爆心附近に始まり、広島市北西部を中心に降って北西方向の山地に伸び遠く山縣郡内に及んで終る長卵形をなして居る。これをさらに細かに広島市附近に拡大して見ると第2図に示す如くである。

(ロ) 始雨時の分布は第五図に示す如くである。

始雨時は爆撃の閃光があった後15分～4時間に亙るが、光つて20分乃至1時間後に降り始めたものが多く、前線域では1時間以上2時間も後に降っているが(白紙までは4時間後)これは恐らく火災によって発達した収斂性上昇気流に起因するものであらう。

即ち今回の降雨は爆撃による直接的な上昇気流による降雨と、爆撃から起こった火災による間接的な作用に基く上昇気流のための降雨の重つて現はれたもので前線の存在により強化されたものと認められる。

(ハ) 降雨継続時* (第六図及第四図参照)

継続時30分以下数分程度に及ぶバラバラ雨の区域を少雨域30分以上1時間に及ぶザーザー降りの区域を中雨域、1時間以上を大雨域とし、2時間以上は土砂降りの甚だしい豪雨区域として第6図に示した。

驟雨区域は白島の方から三篠、横川、山手、廣瀬、福島町を経て己斐町、高須より石内村、伴村を越え、戸山、久地村に終る長楕円の区域である。

*降雨継続時(t分)の増すほど雨量(rmm)の増すのは当然であつて、その関係はケツペン氏によれば $r = n\sqrt{t}$ (他乙では $n=8$) 強雨の強さ $i = n/\sqrt{t}$ と與へられる。(岡田武松著“雨”による。)

(ニ) 終雨時 (第七図参照)

終雨時は当日の9時～9時半から始まり、15～16字頃までに亙って居り夕方迄には終つたが、爆心から北西方向に向かつて順屋れになつていて始雨時の分布と趣を異にするが、やはり前線帯に沿つて突出した終雨時の強い古状部を示して居る。

(ホ) 降雨分布の偏倚

(i) 降雨域 (第2図及第四図参照)、降雨継続時 (第6図、第四図)、始雨図 (第5図)、終雨時 (第7図)の何れの分布を見るも、爆心位置から北西方向に引いた線に対し著しく北よりに偏倚し、前線帯を中軸とするが如き特殊の分布を示している。このことは爆撃及火災による同心性上昇気流が爆心附近を中心とする上空に生じ、これが上昇の一般気流によって北西に流されつつ降雨を生じたと共に前線性の持続的な上昇気流による降雨によって強化されたものと考えらる。

(ii) 山岳の向斜面即ち武田山、山手、茶臼山、己斐山より古江の北裏の鬼城山に続く連山の南東斜面及石内村、伴村、安村北方連山の南東斜面、戸山村、久地村方面山岳の南東斜面に降雨量が比較的多く、これ等の反対側の山脈の裏側即ち北西斜面には降雨量が比較的薄い。

(3) 雨水の性状

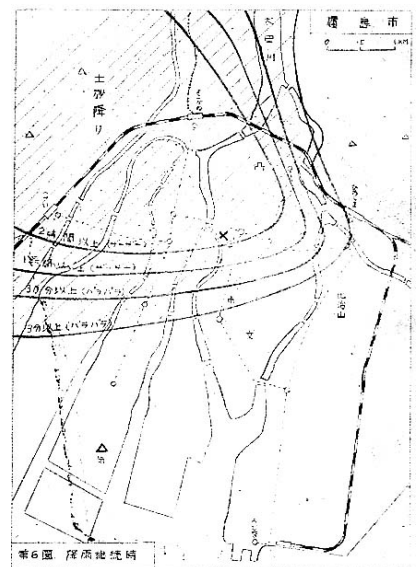
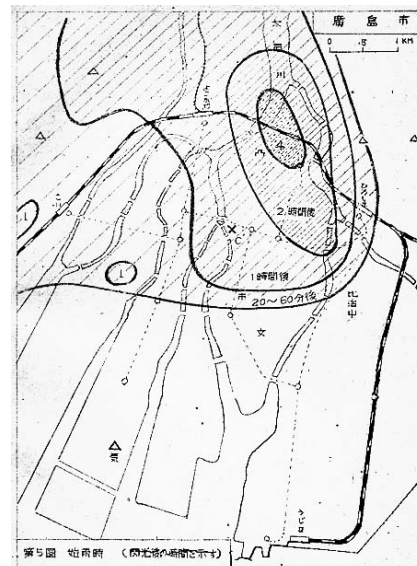
(イ) 黒雨 (泥雨)

(i) 始雨時の少雨の雨粒には特に黒き泥分多きため粘り気あり、当時「油を落とした」と騒がれたが、匂ひもなく油とは異つていた。しかし白い衣服も絨状になり、あるいは笹の葉などに黒泥が残った。

(ii) 谷川を轟々と流下する黒雨による出水は眞白い泡を立てゝ流れた。流れる河水は墨を溶いたように黒かつた。

(iii) 雹の如き大粒の雨、裸の身には痛いほどの粗い粒の雨が土砂降りに降った。

(iv) 大雨の最中は盛夏の暑い日であつたに拘らず気温が急降し、裸か薄着で身を以て脱出した人々が多くて震える程であつた。



(v) 雨水中の泥分*は理化学研究所調査班の佐々木、宮崎両氏の調べられた結果を承ると、放射能が頗る最大であつて爆発後2ヶ月経過しても 50Nat. と云ふ爆心地の数倍を算していた。

*資料の泥分は高須に於ける筆者の宅の雨戸（爆発当時爆風により庭先に飛び雨に打たる）に付着した泥分を採取したものである。筆者の次男が山奥の学童疎開から帰ってきて、その雨戸の傍に寝ていたため髪の毛が脱毛し始め、驚いてその雨戸を取り片附けたことであつた。

(vi) 池の鯉や川の鯰、鰻等の漁族が黒雨水の流入によつて斃死浮上した。蝦、蟹は生残った。

(vii) 牛が泥雨のかゝつた草を喰べて下痢をした**。

**己斐、高須方面の人は爆発後3ヶ月に亘つて下痢するものが頗る多数に上つた。これは水道破壊のため井戸水（地下水）を飲用したことが関與するものと推察せられる。

(ロ) 白雨と泥の本体

1～2時間黒雨の降つた後は続いて白い普通の雨が降つた。虚空に含まれた泥の成分は爆発時に黒煙として昇つた泥塵と火災による煤塵を主とし、これに放射性物質片など爆撃で起原して空中に浮遊し或いは地上に一旦落ちた物質塵をも複合したものと見られる。

事実前記の倒れた雨戸に黒雨が降つた為に残った泥を採集してこれに水を注いで検査して見せた所、広島市内外に普通に存在する黒色微細な泥塵と種々粒の粗い附近の畑地や丘陵にある風化花崗岩の茶色の碎砂泥塵との混合物を主体とすることが容易に看取せられた。これにより推察すれば昇騰した泥塵煤塵の空中に浮遊懸垂せるものを洗ひ落した後の雨が白くなったので、それ迄汚染のため黒かつたと云

える。即ち大気中の塵埃は1～2時間の雨水洗滌により概ね除去せられそれが地上に降つたため、この降水量の多い地区即ち広島市西方の高須、己斐方面に高放射能性を示すに至つたのであろう。

(ハ) 雨の降り方

豪雨域では大概始めボツボツ降り、30分～1時間もザーザー来て小止みになり又ザーザー来たのが多く、波状的で最初のザーザー降りは黒雨で、後のザーザー降りには白雨が多い。

(4) 降雨量の推定

今回の降雨域内には遺憾乍ら一ヶ所も気象観測所を含めため定量的に降雨量を決定することは出来ないが、己斐の谷川や伴村、安村を還流する安川などに9月17日、18日の颪風時*と殆んど同程度の出水を短時間に示したことから、土砂降りの豪雨域には1～3時間位の間に50～100耗の降雨があつたものと判断せられる。

W. Koppen の式**強雨量= $n\sqrt{\text{継続時間(分)}}$ により、 $n=8$ とし、継続時間1～3時間に対し総雨量は60～110耗となり、略々上記の推算と合致する。従つて本雨域の全雨量は14万～24万立方米程度と推算される。

この大雨で、己斐、山手方面の山火事はすっかり消されてしまった。

*総雨量200耗に近し、この場合は2日間に亘る降雨であり、且雨量に対する出水率を1/2程度と見て相当雨量を50～100耗とした。

**岡田竹松著：雨（大正五年刊）参照

(5) 降雨機巧

本爆撃による降雨機巧はその著しく激しく且持続的の豪雨を示した点から見て、單純に爆撃及火災による旺盛なる上昇気流にのみ起因するものと異なり、之等の因子に加へて何等か原子爆撃炸裂による放射性物質の分裂衰変に伴ふ放射線（β線或は中性子の如きもの）の射出が働いていて恰も巨大なウイリソン霧函内に於ける如く、大気中の塵を連續的に多数のイオンに化し、之等が凝結核となつて大気中に浮遊するため引續いて激しい降雨を呼び起こす様になつたのではあるまいかと考へる。

このような驟雨現象の解明には確かに新しい原子物理学的な知見を従来の地球物理学的な見方に取り入れて研究する必要があるであらうし、人工降雨法に放射性物質の作用を取り入れることも将来の研究問題であらう。

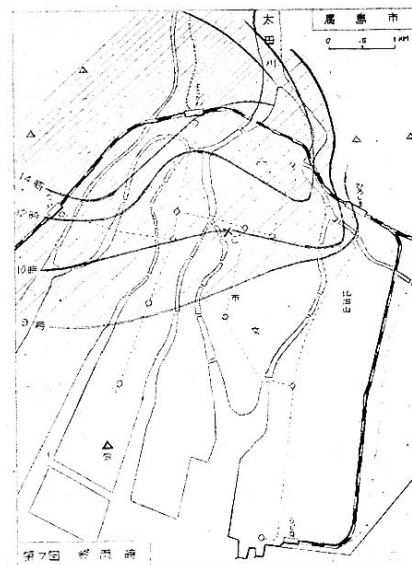
§ 六、雷鳴

10～11時頃降雨中乃至其の後の数回爆発音が砲声に似た特異な雷鳴を聴いた。その音は爆心より10耗以上離れた所でも聴かれ、山県郡毘賀村、安野村の如き20耗も隔つた地点でも聴いた。

§ 七、飛散降下物（第2表及第四図参照）

(1) 五日市、八幡村、古田町北西など雨域の外周数耗の範囲まで黒い灰埃が降つて居り、南瓜の葉など眞黒く見えた。

(2) 降下物は焼タン板、屋根のソギ板、蚊帳の片、蒲団綿の片、布片、紙片、切符、名刺、紙幣、債権、埃など軽重、大小、種々雑多のものが無数にあり**、



トタン板のような重いものが4軒以上も北西に降ったのは一見不思議な程である。

爆風で灰神楽のように上昇った灰、紙片などの他に焼け焦げたものの多いのは火災の盛時に都心の旋風及上昇気流で昇騰したものであろう。

※亀山村へ落下した落下傘は地上から騰つて飛んだものとは異なるから、此處には一緒に取扱はない。

第2表 原子爆弾による飛散降下物

拾得場所	爆心よりの方向 及び距離	飛集時間	落下物件	飛来出所	摘要	推定速度 km/時
伴村細坂	北北西 9.5	9～10 時	蚊帳切れ	不明	木にかゝる	9
戸山村	西北 13		十円札、百円札			
伴村大塚	西北 7	9 時頃	紙片、とたん板		雨と共に降る	7
山縣緒安野村	北北西 20		焼けた布片、紙片、歌の本、そぎ板等			
同 穴	北北西 18		武徳殿證書		元県庁附近	
同 宇佐	北北西 19		紙片、そぎ板			
同 澄合	北北西 19		住友銀行傳票、藝備銀行用紙	紙屋町		
水内村久日市	西北 16		五十銭札束			
殿賀村西調子	北北西 25		紙片少し		雨と共に降る	
都谷村長笹	北 25		そぎ板等			
久地村瀬谷	北 12		紙、布切			
石内村原田	西北 6	9～10 時	綿切、とたん板、薄板		雨降る最中落る	6
			焼そぎ板、名刺、経本	寺町		8
石内村湯戸	西 8	9 時	焼残り十円札、五円札、銀行通帳	爆心南百米位		
			広島郵便局(貯金用紙片、電報為替)			
石内村利松	西 8	9～11 時頃	そぎ板、紙片		焼けてをる	4
石内村高井	西 8		十円債権、五十銭紙幣		焼けてをる	
砂谷村	西北 16		紙片多数			
高井越	西 8	9 時	郵便本局用紙、藝備銀行用紙	革屋町		
			そぎ板、綿片			
			広島合同銀行			8
			福屋のはがき			5
己斐峠	西北 5	9～10 時	そぎ板、びら、焼トタン板		雨の最中降る	
			切符、綿片、紙片		雨の最中降る	
己斐山	西北 5		紙片、板片、ぼろ片、びら			
鬼城山	西 5.5		広島郵便局為替領収證	革屋町		
			縣廳用紙(願書)	縣廳		
			富国徴兵保険用紙	袋町		
			中国配電会社	白神社附近		
			藝備銀行領収證	紙屋町	雨の前にも落つ	6
古田町山田	西 6	9 時頃	埃、新聞紙、帳簿			
五日市坪井	西南西 10		新天地劇場びら、黒埃	新天地		
			ガス会社収金帖	大手町三丁目		
同 揚上		9 時頃	住友銀行通等、名刺	紙屋町		
			防空頭巾、黒幕、郵便本局用紙	革屋町		
同 地毛			名刺、紙片、杉板、ゴミ埃			
◎飛散物の爆心附近より飛来せるものとして推定速度 5～9 軒/時 平均 7 軒/時＝2 米/秒。						

(3) 降下物の中で最も多かったのは紙片であって、その範囲は30 軒北方まで拡って居り紙片中には官庁、銀行、郵便局の傳票、帳簿の紙など目立つて多く、発源所在の明らかなものを調べると、悉く爆心より1 軒以内の市中心部にあり、紙屋町、八丁堀、革屋町方面のものが多い。

こゝから拾得された所まで直線で結ぶと略々北西～西向の気流で流され飛散されたことが判る。

紙片は山中や田圃の中へ数限りなくヒラヒラ落ちて来て農山村の人々を驚かした。(第4図参照)

(4) 降下は概ね降雨の前から始まつて降雨中にかけて見られた。これから降下物の飛行してきた速さを概算すると1～3 米/秒位になる。

(5) 降下物の分布区域は広島市内に少なく、爆心より3 軒以上離れた市北西方山岳地帯を主として(山脈の峠を超えた所から多い)雨域よりも廣く、砂谷村、八幡村、五日市、亀山村に亙るが、その分布の濃密状態は降雨域とは異なり、爆心から北西方に引いた軸線に対してその南西方に偏倚して多い。このことは爆心が前線帯(前述)の南方にあり、降下物の発源域が前線の南方にあるため昇騰した後何等よりの一般気流に流されて前線南西方向の下降気流域に多く降つたのは当然と解せられる。

(6) 爆発後の高須、己斐方面の放射能の著大な分布は降雨による持続的な放射性物質の雨下(特に爆弾による高放射能物質の混在)と南東気流による降灰中に放射性物質を含有し、その最も強く高須、己斐方面に指向されたためであろう。

§ 八、破壊現象(第8図、第9図参照)

(1) (イ) 鉄骨建造物、学校、工場、家屋、鉄塔、煉瓦壁、木柱、煙突、樹木、石碑、墓石などの破壊状況を倒壊、折損、傾斜、凹入に方向などで示したものは

菅原技師調製の第8図に見られる。之によれば爆心C'の位置、堅固な建築物の倒壊は中心より1～1.5 ㌦以内、脆弱な工場倉庫など2～3 ㌦の地点でも倒壊した。折損は概ね中心部より2～3 ㌦以内、傾斜は2～4 ㌦に及んでいることがわかる。

(ロ) 倒壊方向は大概暴風波の進行した方向にあり、窓硝子の飛散もその方向であるが、稀に180° 製反対方向に倒れた鉄柱、煙突、樹木があり、横川～舟入町道路沿ひ4例を見た。又硝子小片の逆飛散も見られた。

(ハ) 北技官の調査に筆者の調査を加えてみると、住家破壊状況は第9図に示すとおり、倒壊範囲は2.5～3 ㌦、大破範囲は3～4 ㌦、中破範囲は4～5 ㌦、小破範囲は5～10 ㌦程度であるが、窓硝子1枚でも破れた範囲といえば玖波の如き、27 ㌦の遠方に迄及んでいる。(大、中、小破の区分は第3表参照)

◎第3表 住家破壊状況調査基準

区分	柱	屋根	壁	建具	硝子窓	摘要
倒壊	折	破	落	—	破	住居に堪えず
大破	折	破	破	—	破	半以上破壊、住むに不適
中破	外れ、傾き	破	破	—	破	半は破壊、住むに不適
小破	全	傷	傷	—	破	少し傷んだ程度、住むに差支えなし
全	全	全	全	—	全	住むに適

備考：二階建と平屋とは区別す

(2) 破壊分布区域は海岸線に沿ふて南西方にと海上に向かつて南方に遠達拡大して居るのに反し北方に山地に向つては短距離に阻まれている。即ち北方の14 ㌦の可部町には被害なく、南西方の20～27 ㌦の宮島、大野、玖波には硝子窓の破損があり、南東方の江田島兵学校(20 ㌦)でも窓硝子が破損した。又南方海上10 ㌦の似ノ島は同距離の海岸沿ひの廿日市町(西方)、矢野町(東方)に比し遙かに被害が大きい。

(3) 破壊程度は

(イ) 爆風に直面した側に大きく、反対側に小さい。

(ロ) 同距離でも高所では被害が大きく、低所の地表に近いほど小さい。例へば小高い山上では平地より大きく、二階は階家(平屋)より大きい。緑井村(北方8 ㌦)では二階の硝子窓は皆破れたが、一階のは余り破れなかつた。

(ハ) 戸障子を閉めてあつたところは開けてあつた所より被害が階段に大きい。八木村(北方9 ㌦)、廿日市(西方12 ㌦)では硝子戸を開けてあつた所は3分通り以上壊れたが、開けてあつた所は殆んど破れなかつた。

(4) 爆風傳播速度

第4表は当時の光つてから音を聴くまでの動作を反復して貰つて測時計推算したのと、記憶によるもの(表中括弧す)とを調べたものである。

第4表 爆風傳播速度(V)

場所	爆心よりの距離	経過時間	V米/秒	摘要
江波山	3.6 ㌦南	5 秒	700	北技官測定
草津町	5.2 ㌦西	8-9 秒	600	—
五日市町坪井	10.2 ㌦西	15 秒	680	井街博士測定
古市駅	6 ㌦北	(6-8) 秒	600-800	—
江田島	20 ㌦南東	(22) 秒	800	充分正確を期し難し
玖波	27 ㌦南西	(120) 秒	230	多少不確実
下黒瀬村	18 ㌦東	(30-60) 秒	300-600	多少不確実

以上を通覧して信頼すべき数字として爆心より3～10 ㌦の間は700 米/秒内外で、600～800 米/秒の程度で音速の大約2倍であり、恐らくVは距離の遠くなる程度遞減していくものであろう。

(5) 爆心圧は

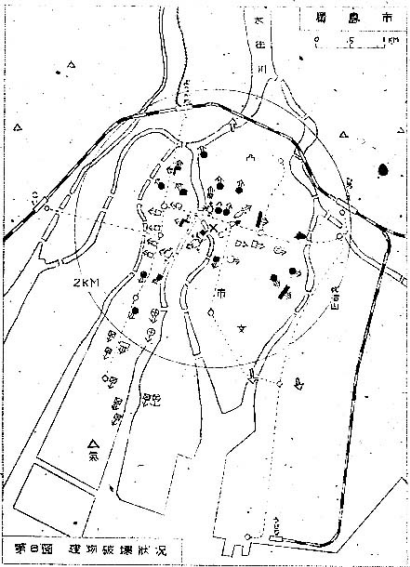
爆心から2～4 ㌦の所に於ても体重50～60 ㌔の大人が数米も吹き飛ばされる程の強さを持っていた。しかし、1 ㌦以内の爆心附近でも眼球が飛び出したとか、鼓膜を破つたとか云ふ人の話は聞かない。

(6) 2～6 ㌦の距離の所に残った破損家屋でよく認められる天井、床、畳の吹き上げられた様な状況は單一爆風波の進入にのみよるものではなく、爆発の負圧による吸引力域は直達暴風波と地表に沿ふ爆風波の時間的位相差による吸上げの力が加まつているのではあるまいか。

§九、焼夷現象

(1) 火災状況

(イ) 今回の火災は従来の焼夷弾域は爆弾の攻撃による火災とは異なり、建物等の倒壊により最初より火気のあつた所から発火した火元の他に、爆発時の熱線そのもの及爆発破片の直接点火による多数の着火火源があり、之等無数の着火点によつて生じた火災は次第に拡大し合流を續けて大火となる一方、市民は防火用具、



用水を瞬時に失ひ、負傷と精神的に虚を衝かれた狼狽の為避難に汲々として防火に従事する者少く、為に著しい大火災になつて了つたのである。

(ロ) 江波山よりの観測によれば、火災は爆発5分経過してから、市中より転々と煙が立ち始め、爆発30分後には既にかなり大きな火災群を舟入町、天満町、国泰寺方面其他に見るに至り、10～14時間頃最盛、夕方になつて稍衰へたが業火は夜空を炎々と焦し市内一帯火の海で、爾后も各所に延焼、翌日10時頃から段々部分的になつたが、局部的には尚3日間以上燃え続き、余燼よ一週間に及んだ。

(ハ) 消失区域 (第10図参照)

宇品、大河、江波等の周辺地区を除いた全市の殆んど大部分は消失した。大体爆心より円を描いた様に2軒以内の区域が消失している。

(ニ) 炎症は概ね風向に従つて起こつた。前述の如く当時市の北部では北風が北方への延焼を妨げ、東西方向には比較的延焼の自由を許されたため、第10図に示すように、消失区域は同心円とは云へ東西方向に幾分扁平に広がっていることが認められる。

(ホ) 2～4軒の区域では着火点源が明示されており、特に藁屋根の家屋が比治山、二葉ノ里、牛田町、三篠町、新庄、三滝、山手、己斐の局部的消失斑状部の火源となつてゐることがわかる。

(2) 自然着火

(イ) 自然着火は第11図に見る通り爆心地より概ね3軒の圏内に含まれる。

(ロ) 自然着火の認められるものとしては藁屋根、畑の藁藁、松皮葺の神殿(饒津神社、東照宮)、紙障子、生ゴム、セメント、入紙袋とか尾長、牛田、二葉、山手、己斐方面の山林の松葉等、電柱の頭、線路脇棚杭木、枕木、柱の折れ目、棕櫚等で大体乾燥した引火し易い物が主である。山手の鉄路脇の焼杭及び横川付近や己斐、福島鉄橋枕木は後から見ても明らかにそれ自体に着火して焼つたもので延焼ではないことは確認できる。

(ハ) 黒色体は白色体の反射能の大なるに反し、熱線をよく吸収して燃えつき易いことを実証し、1～2軒の区域で服の黒い部分のみ焼け抜けて白地を残した例(白島、広島駅前、鷹野橋)、表札などの黒文字のみ焼けた例(牛田町)、石碑の中で黒字にしたものだけが裂け割れた例(下柳町)、同じ場所に並んでいた夫婦で黒服の夫人が重い火傷のため死亡、白服の夫は火傷が軽くて助かった例(的場町)など枚挙に遑がない。

(ニ) 三滝北方の川縁りの堤の竹林の幹に熱線による焦痕が焦茶色に現はれていて堤の陰影を現はしている。(爆心より2.5軒)

又鶴羽根神社(爆心より1850米)の焦痕も庇の影を示して居り、己斐町、皆実町にも見出されたように3軒以内の圏内では氣をつけて見ると方々に木材や石などに焼焦の後が見えて、これが爆心の高度と方向線を決定するのに大いに役立った。

(ホ) 西方8軒位の山村で草刈中の農夫が光つた時、笹の葉影の鮮明に地面に映つたのを見た。爆心近くでも熱線は帽子を着た者の頭髪を帽子を着た部分のみ残して焼いた。又偶々地下防空壕にゐっていた者は爆心附近でも無事であつた。

(3) 火傷 (第11図参照)

熱線によつて黒焦になるような最強度の火傷者は当然死亡し調査もできないが、爆心より0.5～2軒の圏内では皮膚がズルリと剥げる程度の強度の火傷である。2軒以内では洋服(鉄道の黒制服)なども焼け裂け或は燃えて居る。弱度の火傷は日焼け程度のもので、爆心から概ね2～4軒に分布しており、戸外にゐた者が大概蒙つた。西天満町東洋製罐会社(1.2軒)では戸内の者は窓際でも火傷しなかつたのに金庫近くに居たものは光線の反射で全治1ヶ月の火傷を負ふた。

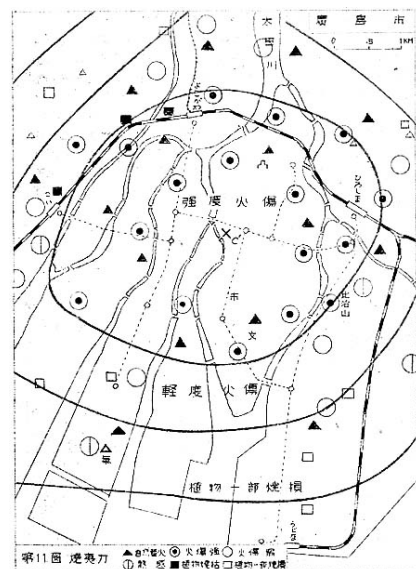
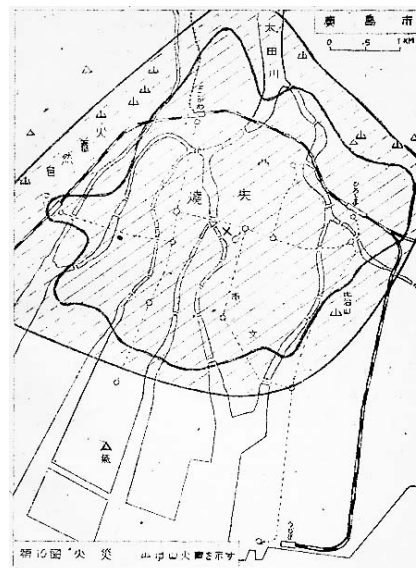
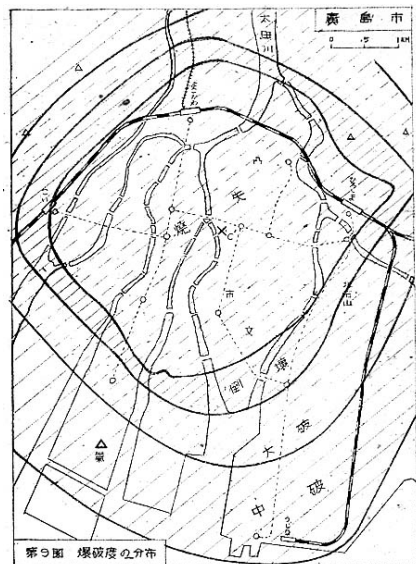
(4) 熱感 (第11図参照)

熱線の照射を受けて「熱い」と感じたのは4～5軒の圏内の戸外に居たものである。1～2軒以内にいた者は殆ど感電したような激しさで熱を感じ同時に火傷を起こしている。

「温い」「暖かい」と云ふ程度に熱を感じた者は20軒遠方に迄分布し、可部や玖波、大野の方まで及んで居り、皆戸外に出て働いていた人である。

(5) 植物の焼損 (第11図参照)

作物では稲の穂先や葉、黍、粟など、茄子、南瓜、蓮の葉、里芋や甘藷の葉など柔らかい繊弱な植物体が焼損され、樹木では松、櫻、榎、柃、木犀などの葉が焼損した。焼枯は2.5軒以内の範囲で一部焼損は



約4軒以内の範囲に見られた。

比治山、双葉山、牛田、己斐、山手の山々の樹葉が火災により他に熱線で直接焼けて、盛夏に一時秋の紅葉の様になり、山色為に変わる状況であったが、1ヶ月以上経過すると新芽が出て殆んど旧に復した。

(6) 縞状の焼夷現象

双葉山が波上に焼けた後と赤茶と交互に見せたこと、打越や牛田方面で数米の幅で家や草や畑の作物も焼けている例など、道路に沿って爆発直後日光の走ったのを見た報告など原子爆弾の焼夷被害の縞状濃淡を想はしめているが、これに対し確かな決定は出来ない。

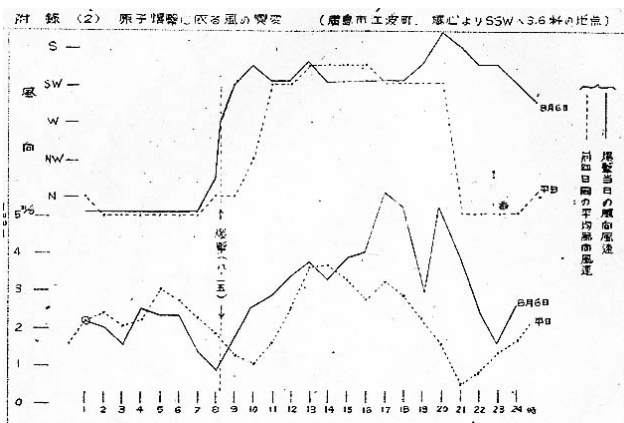
又電線に沿ひ火傷などの被害の大きいことも言はれたが半信としない。参考のため付記して置く。

— 終 — (昭和20年12月稿)

附録1. 昭和20年 原子爆弾受ケタ当時ノ気象

広島管区气象台

附録1. 昭和20年 原子爆弾受ケタ当時ノ気象 広島管区气象台												
月	日	時	気温	湿度	風向	風速	天気	雲	視程	降	雪	状況
8	6	3	62.3	25.6	87	NNE 1.5	○	0	—	—	—	(6 tA)
	1		62.0	25.0	88	NNE 2.0	○	0	—	—	—	3° 2' α
	2		62.1	24.2	90	NNE 2.0	○	0	—	—	—	-0° 03' 4" 50"
	3		62.1	24.2	92	NNE 1.5	○	2	C	—	—	-0° 01' 38" 15"
	4		62.5	23.9	93	NNE 2.5	○	2	C, S, K	—	—	-0° 02' 50" 45"
	5		62.7	23.7	93	NNE 2.3	○	4	K, C, S, K	—	—	-0° 05' 50" 6" 15"
	6		63.1	23.6	94	NNE 2.3	○	8	S, C, K, S, K	0.10	—	1° 10' 02" -0° 3' 07"
	7		63.5	24.7	89	NNE 1.3	○	8	S, K, C, S, K	0.39	—	1° 5' 10" 52" 40"
	8		63.6	26.7	80	N 0.8	○	10	C, S, K	1.00	—	1° 11' 09"
	8.15		63.6	26.8	80	W 1.2	—	—	—	—	—	(7 tA)
	8.15		63.6	26.9	80	W 1.2	—	—	—	—	—	-0° 10' 11" 30"
	8.20	下	27.0	80	下	1.2	—	—	—	—	—	-0° 20' 30"
	8.30	下	27.0	81	下	1.0	—	—	—	—	—	0° 5' 50" 6" 40"
	9		63.5	27.3	79	SW 1.7	○	9	K, N, C	0.80	—	0° 10' 45" -1° 3' 40"
	9.30		64.0	28.4	70	SSW 2.3	—	—	—	—	—	0° 3' 07"
	10		63.9	29.3	67	SW 2.5	○	7	K, N	1.00	—	—
	10.30		63.6	29.6	67	WSW 2.5	—	—	—	—	—	(観望)
	11		63.3	30.0	65	WSW 2.8	○	5	K, N, C	1.00	—	外雲方(N)観望
	11.30		62.8	30.4	64	WSW 3.2	—	—	—	—	—	外雲方(N)11°-12°
	12		62.5	30.7	64	WSW 3.3	○	6	K, N	1.00	—	外雲方(N)11°-12°
	13		62.1	30.7	64	SW 3.7	○	8	K, N, C	1.00	—	外雲方(N)20°-21°
	14		61.9	31.0	66	SW 3.2	○	6	K, N, C	1.00	—	—
	15		61.5	30.0	70	SW 3.8	○	7	K, N, C, K, C	0.90	—	—
	16		61.4	30.7	65	SW 4.0	○	5	K, N, C	1.00	—	—
	17		61.3	29.7	72	SW 5.5	○	4	K, N, K	1.30	—	—
	18		61.6	28.3	78	SW 5.2	○	4	K, N, K, K, C	0.40	—	—
	19		62.1	28.2	77	SSW 3.0	○	9	K, C, S, K, N	—	—	—
	20		62.3	27.5	83	SSW 5.2	○	9	S, K, K, C, S	—	—	—
	21		63.0	26.9	79	S 3.7	○	10	S, K	—	—	—
	22		62.9	26.7	78	S 2.3	○	9	S, K	—	—	—
	23		63.0	26.6	78	SW 1.5	○	10	S, K	—	—	—
	24		62.7	26.5	75	WSW 2.5	○	10	S, K	—	—	—
8	7	1	62.8	26.3	76	WSW 3.0	○	10	S, K	—	—	—
	2		62.9	26.5	70	WSW 2.2	○	10	S, K	—	—	—
	3		62.8	26.0	72	WSW 2.3	○	10	S, K	—	—	—
	4		63.0	25.7	76	WSW 1.2	○	10	S, K	—	—	—
	5		63.1	25.6	78	WSW 1.3	○	10	S, K	—	—	—
	6		63.5	25.6	82	—	○	10	S, K	—	—	—
	10		63.9	30.3	61	SE 3.0	○	3	K, K, C	—	—	—
	14		62.2	29.4	56	SSW 4.2	○	2	K	—	—	—
	18		61.6	26.8	62	SSW 3.8	○	1	K	—	—	—



附録(2) 原子爆弾に依る風の異変 (広島市江波町、爆心よりSSW×3.6軒の地点)

(付)

終戦年の広島地方気象台

北 勲

測候時報第 38 巻第 1 号別刷 (昭和 46 年 1 月)

終戦年の広島地方気象台

北 勲*

551.5:623.451.746.083.2(521.84)

*広島地方気象台

目次

1. はしがき
2. あらまし
3. 原爆投下以前
4. 広島に原爆投下さる
5. 一原爆被災以後
6. 枕崎台風襲う
7. 枕崎台風以後
8. あとがき

1. はしがき

終戦から既に 25 年経過し、人々の記憶もうすれ、当時の職員も四散し少なくなった現在、あえて当時の記録を綴ろうとする動機はつぎのような理由による。

(1) 終戦ごろの地方気象官署の窮状を記述しておくことは気象資料を取り扱う場合参考になり、戦時の気象業務がいかなる状態で続けられたかを知る資料になる。

(2) 枕崎台風 (昭和 20 年 9 月 17 日) の際、悪条件が重なったため、広島県だけでも、死者・ゆくえ不明・傷者あわせて 3066 人というまれな大被害を生じたことに対する防災面からの反省材料として書き残しておきたい。

記述の形としては、広島地方気象台に保存されている当番日誌を主軸として、月日を追いながら必要な事項を再録し、これに補足するに各種調査報告物・新聞記事・官公庁記録・個人の記憶を加えて理解を助けたいと思うが、資料の精粗により片手落ちの記載になるやも知れず寛容を得たい、職員の名前も必要なものを除き省略して簡素化を図った。

2. あらまし

昭和 20 年、各気象官署とも相つぐ空襲、人員ならびに物資の不足から、業務の遂行が困難であった。とくに広島は人類最初の原子爆弾を浴びて、物質的にも精神的にも相当参ってしまった。

8 月 11 日に管区気象台に昇格したが、名目だけで実質的には測候所なみの仕事しかできない状態であった。9 月にはいって新台長を迎えて復興の第一歩を踏み出したが、職員の 3 分の 1 は半病人で、また食糧補給のため郷里に帰省するものが多く、全員 20 名のうち約半数しか出勤できないありさまであった。

9 月 17 日枕崎台風が来襲した。気象特報は出していたが、各官公庁・報道機関も体制不備で、一般県民に十分伝達されたとは言いがたかった。一方、台風の勢力が格段に強かったため、いたるところで山が抜けるような土石流が発生し大被害が起こった。原因の第 1 は豪雨、第 2 は敗戦に伴う防災体制の不備と言いが得る。

3. 原爆投下以前

(当番日誌より抜粋転記する)

昭和 20 年 6 月 26 日

早朝、午前、夜半ニ警戒警報発令サル。

(注、以下空襲、警戒警報ともにケイホウと略記する)

電信局、広島一大阪間、有線、無線トモ不通ノ由。

当番者以外ハ全員防空壕完成作業ニ従事ス。

6 月 27 日

夜半ケイホウ発令。

2日間局留ニナッテイタ氣象電報ハ19時頃ヨリ特別措置ニヨリ發送サル。

6月29日

夜半3回ケイホウ發令。

3時ヨリ電話故障、5時復旧。

7月1日

夜半ケイホウ發令。

呉市大空襲ニヨル火災望見。

7月2日

平野台長米子へ出張中ノトコロタ刻歸台。

有線不通、無線モ不達ノモヨウ（氣象電報關係）。

7月3日

コノトコロ毎夜半ケイホウ發令。

有線、無線モ不通ノトコロ、夕刻一時過ジタノデタマッテイタ電報ヲ発信スル。

7月4日

夜半例ノ如クケイホウ發令。

有線ハ不通、無線ニヨリ07時ト18時ニマトメテ電報ヲ暗号化シテ発信ス（局扱）。

4、5分宿直料ノ支払アリ。

7月7日

氣象原簿ヲ防空壕内へ移ス（151冊）。

氣象台義勇隊へ出動命令が發令サル。

木材運搬（ゾンデ室建築用）ノタメ、午前午後全員製材所ニ行ク。

7月8日

義勇隊員5名出動ス。0730-1700、本川国民学校付近家屋疎開。

7月9日

義勇隊員本日モ5名出動ス。

本科生3名実習ノタメ来台。

7月10日

義勇隊員5名出動ス。

山麓ノ残材全員デ運び上ゲ完了ス。

今朝ヨリ以後、台長直々ニ職員ノ呼名点呼ヲ実施。

自今14時ノ実況ハ6時使用天気図ノ裏面ニ記入。

7月12日

鉄道警報（テケ）發布中。

17時氣象特報發布。

本科実習生5名、本日ヨリ実習開始。

技手以上參集ノ上、台長ヨリ夜間ノ防空ニ関シ訓示アリ。

専用線、電信、電話共不通。

ケイホウ3回出ル。

7月18日

加入電話モ不通。

正午頃、敵機（P-38）続々來襲。

7月19日

本台伊藤技師氣象電報ノ件ニツキ来台、午後電信局ニ赴ク。

ケイホウ3回。

台長ハ米子ニ在勤中。

7月22日

遠藤技手乱数表受領シテ帰台ス。

山路技手入営ノタメ壮行会。

ケイホウ 3 回。

7 月 24 日

早朝ヨリ敵機五百数十機来襲。

西郷、松江、津山、岡山、松山、高松、室戸各測候所ノ氣象電報ヲ広島テ暗号化スルヨウ依頼アリ。

7 月 28 日

早朝ヨリ敵機二百数十機来襲。

可部分室(疎開先トシテ用意シタモノ)整備ノタメ職員 4 名大八車ヲ引イテ出発。

7 月 30 日

事務整理ノタメ本日ヨリ地震計観測ヲ中止(中。央氣象台通牒ニヨル)。

8 月 1 日

本日ヨリ ロビッチニヨル日射観測ヲ中止ス。

8 月 2 日

庁舎外壁ヲ塗装シテ偽装ヲ完了ス。

10 時台風氣象特報ヲ發布。

台長ヒル前、米子へ出張ス。

8 月 3 日

軍船舶司令部 25 名見学。

カネテ不通ナリシ電信 15 時ヨリ回復ス。

台長米子へ出張中。

8 月 4 日

氣象特報ヲ 101 時ニ解除。

夜ケイホウ。

台長米子へ出張中。

8 月 5 日

夜ケイホウ。

台長米子へ出張中。

8 月 6 日

8 時 15 分頃 B-29 広島市ヲ爆撃シ当台測器及当台附属品破損セリ・台員半数爆風ノタメ負傷シ一部ハ江波陸軍病院ニテ手当シ一部ハ輕傷ノタメ当台デ手当セリ。

盛シニ火事雷発生シ、横川方面大雨降ル。

台長米子へ出張中。

上記のとおり当時は氣象専用線、電信局との専用電話とも不通の日が多く、加入電話も時々断線し、電報の送受に支障が多かった、一部郵送している日もある。

広島電信局と大阪電信局との間ハ状況により無線を代用していた。そのため電文ハ暗号化を必要とした。

空襲警報に悩まされ、義勇隊として出動など作業日数が多く、落ち着いて業務ができなかった。台長は官舎が米子にあり、米子と広島を半々に勤務していた。

4. 広島に原爆投下さる

8 月 6 日朝、広島市街は前日来の油照りの青空を迎えた。市民がこの日の活動を始めたばかりの午前 8 時 15 分運命の原子爆弾が市の中央部上空 600m で轟然と火を吹いた。

一瞬にしてこの世の地獄と化した広島市の南部(爆心より南南西へ 3.6km)に位置した氣象台にも、恐ろしい閃光が見舞い、その直後をすさまじい爆風が襲った。氣象台の内部および近傍でも、熱傷・ガラス傷・骨折などの重軽傷者多数を出した(台員の約半数)。大混乱がやや静まったところ、建物・器械などの損傷を、点検してまわったところ、RC3 階建の堅牢な建物の窓ガラスは鉄製のサッシが無惨にへし曲がり、飛散したガラス破片が壁面などに突立っていた。一部の扉は吹き抜かれ爆風のとおりに抜けた跡を示していた。

氣象測器は意外に損傷が少なく、露場の百葉箱内のガラス温度計なども破損せず、もとの位置にあった風力塔の器械もほとんど無事であった。椀型風速計は爆風によって急激に回転し、200m の走行距離を記録していた。2 階屋上に設置してあったロビッチ日射計は大破して使用不能になった。気圧・気温・湿度の自記器はその性能上、ごく短時間の変化は記録できなくて、ショックの跡を示していた。地震計室は内部が 2 重構造の室であったが、爆風の突入によってガラスが破損

して器械に当たり、地震計はすべて大破していた。

こんなわけで、幸い気象観測は1回も欠測することなく続けることができた。職員が多く負傷し、住家を焼かれ、肉親などを亡くしたため、毎日気象台に出勤して業務を続けることが困難となり、欠勤者が多くなった。加えて食糧事情が一段と悪くなり、勤務中にもその方の心配がつきまとった。重傷の職員2名は動かせないのもので、そのまま庁舎内に収容して、家族・同僚の看護で1か月以上過した。

このような悪条件の中で、少数の職員で昼夜連続の観測を続けることは至難の業であったが、観測を一刻も欠測してはならないという使命感に徹して完遂した。敗戦とともに敵国軍が虜囚としてきて、施設・記録を接収されるという不安はあったが、その時まで決して観測を放棄しないという測候精神を堅持した。またこのことに生きがいを感じていた。

ここで被爆当時の広島市の状況を述べよう。被爆10分後、江波山(高さ30m)から見た市内は、死の砂漠のように茶褐色で、上空は一面黒灰色のものにおおわれていた。15分後にはもう市内の各所から火の手が上がリ、9時ごろには市内の中央部一帯は黒煙に包まれ、舟入町、観音町方面の火の手がはっきり見えるほかは、一面真黒な煙に包まれて行った。

黒煙の上部は天をつく雄大な積乱雲に発達し、その頂きは目測で10数kmにも達した。火災は10時から14時ごろが最盛期で夕刻には次第に衰えたが、夜にはいってもなおあちこちの火点が指呼できた。

江波山の気象台では終日南よりの風が吹いたため、視界は良好で、市街の火災の状況は手にとるように観察できた。火災から昇る煙や雲はほとんど北～北西の方向に流れていた。市の南部、江波山では終日、日照があり、青空が見えて、北部の暗黒と強烈な対照をなしていた。

風について、後日の調査結果を合わせて考えると、大火災の発生後、市内の火災地域に流れ込む気流が終日続き、気象台では平常日の風の流れ方(海陸風)を差し引いて、約4m/secの風が火災現場に吸引されていたことが判明した。市の北部、山陽本線付近に沿って、南からと北からの両気流が集まる収束線が発生し、盛んな上昇気流を生じ、たつまきが起こっていた。

つぎに“黒い雨”について述べると、気象台では当日1滴の雨も降らなかったが、後日気象台員の行なった調査によると市の北西部を中心に、2時間以上に及ぶ土砂降りの雨が降っている。この原因として考えられるものは原爆大火災に伴う強い上昇気流によって、上空で多量の雨粒が作られ、雷雨性の雨が降ったと見られる。旋風・爆風で多量に舞上がった灰、その他が雨に混って黒い雨になったと考えられる。

大火災の際には雷雨が発生することがあるが、広島原爆の場合は一段と規模が大きかった。これは、上に述べた上昇気流の他に、核爆発による放射性物質から多数の凝結核の生成が考えられている。

5. 原爆被災以後

8月7日

観測室ノ破損セル窓ガラスヲ取除ク。台内ノ整理。負傷者ノ手当、食糧準備ニ職員敢シシアリ。

有線、無線共ニ不通。電灯ナシ。

台内ニテ南瓜給食ヲ行フ・当番ノ4名分ヲ江波高射砲隊ヨリ給食サレルコトナル。

8月10日

台内整理ハ急ヲ要スルコトナルモ現在出動可能人員ワズカニ6名ニテハナカナカハカドラヌノ遺憾。

有無線、電灯復旧ナラズ。

本夕敵機広島来襲ノ声高シ

8月11日

台長未ダ帰任セズ。尾崎田村不在。

防空壕ノ拡張ヲ急グ。原簿類ハ3ヶ所ノ防空壕ニ埋メル。

8月12日

台長2時頃帰台セリ・

北枝手午後ヨリ市庁及中国配電等ニ打合セニ行ク。

8月13日

午後電灯復旧ス。

本日ヨリ気象電報(02, 06, 10, 14, 18, 22時)ヲ電信局へ持参ノコトトス。

8月14日

本日ヨリ「トヨハタ」受信ス。

8月15日

正午ヨリ天皇陛下自ラ証書ヲ朗読サル。台員一同謹ンデ拝聴ス。

8月16日

古市技手病氣（原爆症）ノタメ高松市ニ帰郷。

8月17日

台内デ雑炊給食。

8月18日

「アシヘ」放送シテナイノデ乙種電報ハ發送スルニ及バズト台長ヨリ達シアリ。

14日ブリニ微雨アリ。朝夕冷涼ヲ覚エル。

吉田技手本日カネテヨリ所在不明（原爆死）ノ職員栗山雇搜索ノタメ市内ニ出張ス。

8月20日

2時頃米子測ヨリ岡田、本村両氏連絡ノタメ来台ス。

本日ヨリ準備管制解除トナル。

当番者ニハ大豆1合宛配給サレル。

8月21日

本日ヨリ塔上、露場、百葉箱ニ点灯スル。

8月22日

「トヨハタ」今朝ヨリ暗号化セズニ送信シツツアリ。気象電報ハ本日ヨリ暗号化ヲヤメ、乱数表ヲ焼却ス。

本日ヨリ航空気象電報トリヤメニナル。

土中ニ埋メシ原簿ヲ掘出ス。

国民義勇隊ハ解散サル。

8月23日

米子測ヨリ応援ノタメ大谷雇来台ス。

（注、この後引き続き米子より応援者交代して来台す。）

8月24日

晴雨計室、観測室ノ応急修理ヲ行ヒ、第2蔵室ノ晴雨計ヲ元ノ位置ニ復ス。

本日ヨリラジオノ音楽放送が開始サレ、ラジオ、新聞ニヨル天気概況ノ発表行ハル。

（注、後日の新聞資料の調査によると8月23日から復活している。）

8月25日

台風が室戸岬南方ニ現ハレタノデ暴風警戒ノ指示書ヲ川本定夫ニ市役所へ持参サス。

8月26日

台風アッケナク日不海ニ出デシマフ、

金子、加藤両雇原簿保管ノタメ出張ス。

（注、進駐軍による原簿没収を恐れて田舎の職員の家に疎開した。）

新台風四国南方ニ現ハレ北ニ進行中ノモヨウニテ警戒体制ニ入ル。21時気象特報ヲ、点灯ス。

8月27日

平野台長米子へ赴ク。

菅原台長来台。（注、新台長の発令昭和20年8月11日）

8月28日

隣組ヨリ郵便ヲ持参ス。

9月1日

「トヨハタ」放送内容ニ変更アリ。

9月2日

本日菅原新台長着任。

9月5日

戦時体制ヨリ平時体制ニ復スー出勤時刻ソノ他

9月6日

新旧台長事務引継、平野台長送別会ヲ行フ。

9月7日

第1号官舎ノ屋根修理ヲ行フ。

9月17日

台長上京中。

台風接近ノタメ臨時観測ヲナス。

10時気象特報、テケ、発布。

(注、この日枕崎台風襲来す)

9月18日

昨日ノ台風モハヤ通過シ、本日ハ灼ケルガ如キ天気トナル。台風ノ被害大ナリ。

10時気象特報解除ス。

停電中。

9月19日

夜間ハ冷込ミ秋冷一時ニ加ハル。

県庁ヨリ台風調査ノタメ来台。

停電中ノトコロ16時復旧。

6. 枕崎台風襲う

中央気象台彙報第33冊によれば以下のとおり、「昭和20年9月17日九州南端枕崎付近に上陸した台風は九州、中国を横断して日本海に出、さらに奥羽を横断して太平洋に出た。

この台風は沖縄付近にあったころ、既に中心気圧720mm以下に推定されたが、九州に接近上陸するに及び、著しく強力なことがわかった。しかし、当時終戦後の電信線の復旧不完全のため確かな状況はわからなかった。枕崎からの暴風報告に接するに及んで、この台風は稀有の強さのものであることが明らかとなった。枕崎の最低気圧687.5mmは、昭和9年の室戸岬で測られた世界的記録684.0mmに匹敵し、且つ台風の規模も室戸台風に劣らず、そのもたらした被害は多大なものであった。

大分付近で約710mmを示した台風は19時半ごろより伊予灘を通過して時速55kmで北東へ進み広島に近づいた。広島における最低気圧721.5mmは22時43分に観測されていて、このころ風が一時衰えている。風向は訓練している。広島気象台の報告によれば台風中心は広島の西方15kmを通ったという、広島における風速は中心の通過時に南の25m/sec、通過後3時間で北の30m/secの最大値が出ている。雨は前日の朝から降りつづき、17日の中心接近直前に最も強く1時間雨量57mmを示し、総雨量は218.7mmに達した。

被害については、岩国より東の方へ行くと被害が目立ち、大之浦にいたる間は、流木や押し流されてきた大石等のために潰された家、流された家が所々に見うけられた。水田は土砂で埋没し、線路も埋められて、惨たんたるありさまである。厳島の被害が大きく山津波が起こり多数の死者が出た。呉市内の水害による死者は500名を越えたのは同地方として未曾有のことである。

山陽本線に沿って、海田―西条―三原の間でやはり小河川や谷谷いにあふれ出た水が急湍となって流出し、大石小石を押し流し、土砂は水田を埋め、線路を埋没し、道床をはぎとった。山から流されたと思われる木材や根こそぎにされた樹木が累々と横たわっている。このため山陽本線だけで復旧に要した人員約18,500人となっている。山津波の起こった時刻はいずれも中心の近づいた、雨の最も強かった時刻に一致し、今回の災害の起こり方の一つの特徴である。」

さて、この台風の襲来に敗戦直後の広島県民がどう対処したかは問題のあるところであるが、県庁・市庁は原爆で消え失せ、職員の大半が死亡四散した状況下で、猛台風が接近しつつあるのを知っていたのは何人あったろうか？ 気象台ですら1日数回の無線受信をして最小限度の天気図を作成して、業務の参考にしていただけで、とても予報に使えるような代物ではなかった、台風襲来日の朝10時に気象特報と鉄道警報（テケ）を出しているが、内容とか通報先は記録がないのでわからない。加入電話は生きていたので、何箇所かは通知したであろうが、受けた方でそのあとどう扱ったか、当時の状況では一般に周知困難な状況であった。

今回の調査をするに当たって、各方面から資料を集めて見たが、いずれも周知されたという確証があがらない、まず当時の新聞であるが、昭和20年4月21日以降、政府の指示により新聞は中央紙、地方紙の合同発刊が行なわれている。同年10月1日からは単独発刊にもどっている。広島市立、呉市立の両図書館の所蔵を合わせても、新聞のない日がかなりある。ちなみにこのころの新聞は1日2ページ建、定価1部10銭である戦時中の気象管制が解除され気象記事がはじめて掲載されたのは8月23日である、以下日を追って新聞の見出し文を列記してみる、

昭和20年8月23日

当分早天続き

けふの天気は八月二十二日から復活、気象概況をラジオで放送。

8月26日

台風四国付近に上陸の恐れ、西日本は警戒。

お天気：概況を記す。ただし九州を対象に中央気象台福岡支台の発表。

8月27日

早天に慈雨，蘇生の畑作物。

8月28日

颱風日本海で腰くだけー中央気象台

山口県の水害。

8月29日

天気予報二十九日

(注、はじめての掲載、ただし福岡地方のものらしい)

8月30日

思ひがけめ颱風予報，沖縄近海”死の測候所”から入電。

9月4日

颱風けふかあす，くれば風速三，四十米，壕舎生活は特に颱風に注意。

9月5日

颱風は日本海へ

9月11日

二百二十日は大丈夫(中央気象台観測)。

9月15日

コラム欄”百万一心”

二百十日から二百二十日後にかけて殆んど二十日間にわたり中国地方に降雨が続いている気象は珍らしい記録である。

梅雨と同じ気圧配置，こしばらくはバラックは御難。

9月17日

……………

(気象関係の記事全然なし，この夜枕崎台風が襲来した。)

9月18日

橋は落ち道路は湖，颱風広島県下を襲ふ。

八月の末から，まるで梅雨のように執ように降りつづいた雨は十七日朝になってどっと豪雨になった。「洪水にならなければこの雨は止まんのじゃないか?」という心配は不幸適中して昼ごろから風を相伴につれてますます降りしきり本格的颱風になった。八月六日に原子爆弾といふ「火」の試練をうけた広島市民に今度は「水」だ。みるみる河川は増水する。下水は逆流していたところに激流をつくる。焦土に建ったバラックや半壊の家屋は吹きとぶ。

農村方面も低地の田畑は湖のようになった。戦々競々たるうちに夜を迎えたが風雨はますます激しくなり電気も消えた橋梁は流れる，汽車も不通となった。不安は刻々と増す……だが火に生き抜いてきた市民は敢然とこの天の猛威と戦った。暗夜に不断の警戒がつづけられた。かくて夜半ようやく雨は止んだ。やがて風もおさまった。

被害は県下一円に相当あるらしい。だが新しい日本建設にたくましく進む更生県民にはこれしき何ぞ苦難を乗り越えて起き上がるだろう。

一写真1枚(新聞に写真が出ているという意味)ー

洪水と戦ふ村民(広島市外温品(ぬくしな)村中国新聞社疎開工場付近)

9月19日から9月30日の間は新聞見当たらず。

これは枕崎台風の被害によるものと推察できる。中国新聞社はこのころ広島市向洋東洋工業内に仮事務所を置いていた。

10月5日

颱風また本土を狙ふ。

けふの天気：岡山・香川・徳島・鳥取・愛知・岐阜・福井・石川・富山(広島は出ていない。)

10月7日

けふの天気：12地方が出ている。広島はなし。

10月9日

四国に気象特報(松山発)。

けふの天気：8地方。広島はなし。

10月10日

本年掉尾の大颪風来る。稔りの秋に大打撃、西日本各地は警戒の要。

けるの天気：12 地方。広島はなし。

以上のような調子であった広島地方の天気予報が戦後はじめて新聞に掲載され始めたのは昭和 21 年 3 月 13 日からであった。

つぎに当時のラジオ放送(NHK 広島)の状況について調査したものを示す。なお放送所は郊外にあって原爆の際に直接の被災は軽くてすんでいる。広島中央放送局所蔵の放送番組表〔昭和 20 年 1～12 月(2～8 月の間は記載していない)〕から抜き書きすると天気予報は第 1 放送で 0500, 0600, 0700, 2100, の各時刻に時報、報道、天気予報とあり、1850 に天気予報、番組予告とあり、合わせて 1 日 5 回放送していた。この天気予報も全国中継かローカルなものか区別がはっきりしない。

台風のきた 9 月 17 日のページを見たが平日どおりの放送で台風に関する特別な放送は見当たらない。10 月 5 日のページに午前 0 時と 3 時に台風警報(紀伊水道に接近し東北東へ進路をかね東沖に去ったもの)を臨時に放送したと記載してある。放送内容はわからないが中央から流れてきたものを放送したもようである。

また当時、広島管区気象台長として赴任されたばかりの菅原芳生氏に手紙で当時のようすをお尋ねしたところつぎのような回答が寄せられた。

「取急ぎ赴任せよとのことで、駅に下車して見た光景は只見渡す限りの広漠たる廃墟で、家畜の屍はまだウジがわいたまま放置されていたのを覚えており、一体どうなることかと思いました。

気象台の晴雨計室には原爆でこわれた硝子の破片がそのままに散らばり、官舎は雨漏りで、本台の担当者に見て貰うようそのままにしてあるとのことでした。小生もとりあえず台長官舎の屋根に登って応急修理したのを覚えています。気象台は市内中心部に比較して幾分被害は軽かったとはいえ、職員の大部分が被災しており、まず差し当たって職員の生活を、住居をどうするかが当面の大問題でありました、そこでお尋ねの件ですが

(1) このような状況のもとで広島県や市の機能がまだまひ状態から回復していなかった。気象台でも観測の現業を続けるのがようやくであり、当時トヨハタを受信してあったとすれば、まだ大出来の方でしょう。9 月にはまだ予報を出せる態勢にあったとは考えられません。またこれを県内に伝達するための機能も回復していたとは考えられません。

(2) 日本中がいわば虚脱状態にあり中央あるいは近県からの業務援助など(皆自分のことで手一杯)期待できるふん囲気ではありませんでした。

(3) 広島の壊滅的打撃のため、管区気象台の機能を米子に移す方がよいのではないかな等の意見もありました、そのようなことで小生も米子に出張中であつたと思います。」

枕崎台風の被害のとくに大きかった理由として考えられることは、前にも述べたように、第一に台風が路段に強烈で豪雨を伴っていたこと第二に気象台をはじめ各公共機関とも壊滅状態にあって、一般県民に周知できなかったこと。第三に戦災を受けて、民家をはじめいろいろな施設が荒廃していて、暴風雨に耐え得なかったことによる。

いわば戦災に積重なった猛台風によって、広島県民は打ちのめされ、不幸この上ないうき目を見たのである。

7. 枕崎台風以後

9 月 21 日

県農産課ヨリ台風調査ノタメ来台。

9 月 22 日

広島工業港所長台風調査ノタメ来台。

9 月 23 日

県警防諜ヨリ台風調査ニ来台。

9 月 24 日

地震計室片づけル。

9 月 27 日

図書室ソノ他片づけル。

無線受信機ヲ修理スル。

時報サイレン鳴り始ム。

9 月 28 日

宇田道隆博士来台。

北枝手、原爆、台風被害調査ノタメ本日ヨリ引続き市内出張ス。

10 月 3 日

台長原爆調査ノタメ本日ヨリ引続き市内出張。

10 月 7 日

ヒキツツキ停電中。

電話ノ修理ニ局ヨリ来ル。

18時電信課ト連絡ス。08時ヨリ18時マデラシイ。

10月8日

16時過ヤット点灯シ、18時ヨリ「トヨハタ」ニピカドン以来2ヵ月目ニハジメテ広島気象が延着ニテ入ル。

10月10日

台風接近ノタメ気象特報発布。

昨日15時ヨリマタ電話不通ナリ。

10月11日

県河港課ヨリ台風調査ノタメ来台。

10月12日

本台地震課佐野技師他1名原爆調査ニ来台。

10月13日

正午ヨリ1時間ニワタリ米軍人5名通訳同行視察ニ来台。

8. あとがき

昭和20年戦況不利となるとともに日夜をわかつため空襲に苦しい勤務がつづき、つい8月6日朝世紀の原爆を受け、潰滅状態の中で観測を死守していたところえ、再び猛烈な枕崎台風め襲来を受けた広島の惨状を記録して、後日の参考とする。

げに昭和20年は広島県民にとって最悪の年であった。

(九)

原子爆弾に依る電気工作物の被害調査

昭和21年3月

中国配電株式会社広島支店

目次

I. 緒言・・・・・・・・・・ 1

II. 一般被害状況・・・・・・・・ 3

III. 配電線路の被害・・・・・・・・ 18

1. 支持物・・・・・・・・ 18

 (1) 木柱・・・・・・・・ 19

 (2) 鉄柱・・・・・・・・ 29

 (3) 鉄筋コンクリート・・ 35

2. 電線・・・・・・・・ 38

3. 碍子類・・・・・・・・ 39

4. 変圧器開閉器・・・・・・・・ 40

5. 地中電線（高圧電線）・・ 41

IV. 発電所の被害・・・・・・・・ 43

1. 千田町発電所・・・・・・・・ 45

2. 大手町変電所・・・・・・・・ 49

3. 三篠変電所・・・・・・・・ 51

4. 段原変電所・・・・・・・・ 52

5. 南部江波庚午変電所・・ 53

6. 櫓下変電所・・・・・・・・ 53

V. 送電線路の被害・・・・・・・・ 55

1. 架空送電線・・・・・・・・ 55

2. 地中送電線・・・・・・・・ 55

VI. 結言・・・・・・・・・・ 56

I. 緒言

昭和20年8月6日8時15分米軍飛行機B29、1機は広島市上空に1個の落下傘を投下して飛び去った。落下傘は風に流されて市街の中央に迫り約5～6000mの高度にて轟然と炸裂、稲妻の如き閃光を發し、次の瞬間には広島全市は濛々たる密雲に閉ざされてしまった。人類史上未曾有の大破壊が行はれたのである。この恐るべき爆弾の威大な破壊力のため附図に示す如く市の中心約20平方キロが破壊され時を移さず發生した大火災により全くの灰塵に歸し、貴き幾多人命を奪ひ去ったにであるが之等原子爆弾に依る甚大なる被害のうち電気工作物の被害に付いては早急に調査すべきも当時の複雑なる事情により調査は手に着かず漸く8月下旬より概略の調査を開始し、本格的には11月下旬より来年に亘って実施調査を行つたにである。従つて幾分整理後片付をなした地域もある、調査地域も被害全域に比すれば極く僅で大略の被害状況を調査することを得た。

本調査に當つて爆心地点は各調査団により既に發表せられたる（広島市細工町本広島郵便局）附近とし爆心よりの離間距離による被害の特異性並に部材の消失、破壊の状況等を調査の主目標に置いた。尚当時居合わせた関係者の見聞談を参考として推定せる所も尠くない。

II. 一般被害状況

原子爆弾による一般の被害は全く壊滅的なもので人的には放射熱による火傷、爆圧による傷害並に放射性物質に起因する爆弾症等により死亡せる数は8月15日現在に於て約6万人と推定されていたが12月末広島市役所発表によれば市在籍者のみにて約10万人に垂んとし夫に当地の在広諸部隊並に隣接町村よりの疎開作業出勤の国民義勇隊死亡者を加られば実に15万人乃至20万人に達すとも謂れている。

次で建築物は爆心より2,000m迄は完全に倒壊消失、2,000～3,000m迄は半壊し鉄筋コンクリートの堅牢な建物が僅かに外壁のみを残す状態である。

第一表 建築物被害戸数（昭20.12 広島市役所調査）

被害程度	被害家屋数
全焼	55,001 戸
全壊	6,835 戸

半焼	2,295 戸
半壊	3,735 戸
計	67,866 戸

写真 1、本社屋上より爆心地付近略西北方を望む

写真 2、本社屋上より東北方（広島駅方向）を望む

写真 3、本社屋上より西南方（大手町変電所方向）を望む

写真 4、本社屋上より南方（宇品方向）を望む

写真 5、大手町通り附近の建物の破壊状況（0.5km）

写真 6、爆心方向のため被害のなかった栄橋（1.5km）

当社に於ては本店社屋（市内小町 33）は爆心地より約 650m の距離にあり建物は鉄筋コンクリート五階建てにて爆発と同時に窓枠、什器類、硝子等破損し、防空幕並に机上の用紙類より発火（放射熱によるものと推定）建物内部は一編の可燃物を残さず全壊し従業員 340 名（出張休務者を含む）の内建物内に於て死亡せるもの 34 名避難後死亡せる者 44 名負傷者（軽傷者を除く）78 名計 156 名の被害者を出した。尚建物は鉄筋コンクリートの堅牢なる建築物なる為倒壊並に天井等の脱落に至らず假改修の上再使用中である。

写真 7、本社全影（被害状況）0.65km

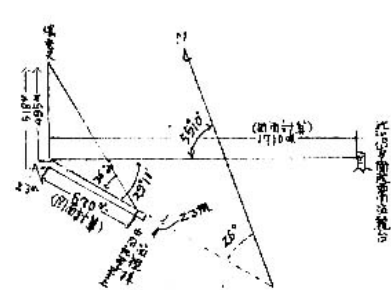
写真 8、四階総会場の被害状況（0.65km）

広島支店並に広島電業局（市内研屋町）は爆心より約 500m の距離にあり建物は木造モルタル塗装二階建てにて爆圧により完全に倒壊、之に加へて放射熱と類焼のため全焼し、従業員 157 名（出張者を含む）のうち当日出勤せる者で死亡 88 名負傷 20 名（休務者を含む）計 108 名の被害者を出せり。尚爆発時に就ては当時いち早く本社屋上の欄干並に防空監視塔木窓の焼焦状況並に市内残存電柱の焼焦状況より、大略市内細工町広島郵便局上空五百数十米の点ナハは確認せるも、その後理化学研究所、広島文理大等の調査団による精密観測の結果も全く同一であつた。その大要を記すと一般に木材の表面は爆弾炸裂によつて生じた熱線のため焼け焦げている。若しこの前方に熱線を遮る障害物があるとその部分は焦げずその木材の表面に障害物の影を明瞭に寫して居る。

こんな類例を当市内に幾箇所も発見せられた。

其の陰影からこれを焼焦した熱線の発点の仰角並に方位角を観測せば爆弾炸裂の位置を算出することが出来る。本調査に於ても本店社屋上の欄干及防空監視窓枠並に比治山本町多聞院附近の防空監視櫓等の焼焦した部分より仰角並に方位角を測定爆発点を算出すると大体爆心地は細工町広島郵便局北端附近（島病院の南前）で高度約 520m で爆発して居る。

第一図 原子爆弾爆発点測定図



備考 1、中国配電よりの仰角は監視窓の焼焦に依る角度（36° 30′）

2、中国配電よりの方位角は屋上欄干並に監視窓の焼焦による其の平均観点より逆に図面上にて計りし角度（26°）

3、比治山本町多聞院西南監視台よりの方位角も（2）と同様な過程なり（55°）

写真 9、本社屋上の欄干の放射線によつて焼焦さる状態（爆心方向が黒く焼焦げている）（0.65km）

写真 10、本社屋上防空監視窓枠の放射熱によつて焼焦せる状態（爆心方向が黒く焦げて居る）（0.65km）

III. 配電線路の被害

広島市内の配電線路が附図に示す如く段原、大手町、三篠、千田町、南部、江波等の各変電所より市内全般に施設せられていたのであるが爆発時の内向（放射熱）並に爆風により混線、断線、損傷、倒壊、傾斜等が殆んど同時に起こり時を移さず発生した大火災により凡てが焼失し盡くされた感がある。

1. 支持物

施設支持物は殆んど木柱にして鉄柱、鉄筋コンクリート柱は主幹線並に特殊場所の一部に施設されたに過ぎなかった、これ等の被害は下表の通りにして木柱は大部分消失、鉄柱は倒壊、コンクリート中のみ割に頭丈であつた。

第二表 支持物被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0～500	8	5	27	5	4	231	280
500～1000	34	27	67	3	3	550	684
1000～1500	185	29	22	0	13	883	1132
1500～2000	384	15	24	6	17	743	1189
2000～2500	1006	0	0	0	4	41	1051
計	1617	76	140	14	41	2448	4336

(1) 木柱

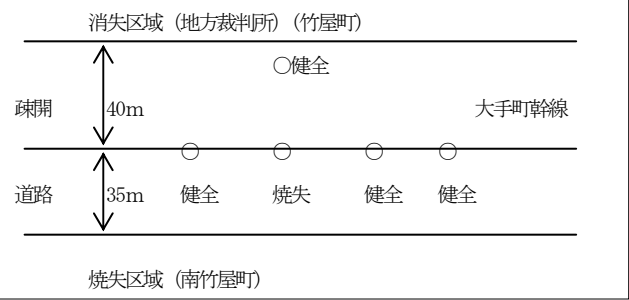
木柱は他の支持物と異なり燃え易きため類焼によつて殆んど焼失し盡くされた感があつた。然し疎開地等の空地で類焼を免れた木柱を調査した結果、放射熱、爆風、類焼と其の被害を大別する事が出来る。

第三表 木柱被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0～500	6	5	18	5	4	231	269
500～1000	33	26	37	3	3	550	652
1000～1500	182	29	20	0	13	883	1127
1500～2000	347	15	5	6	17	743	1133
2000～2500	1006	0	0	0	4	41	1051
計	1574	75	80	14	41	2448	4232

先づ放射熱に就て見るに爆心地附近では直上にて爆発し熱線を垂直に受けたため消失、或ひは焼焦した形跡が非常に少く 500m～1,500m附近では放射熱のために消失、或ひは半焼したと認定し得るもの約10%～20%程度あつたが同じ距離でも消失せざるものも少なからず、木柱の状態により或ひは地域的に熱線の強弱があつて斯く左右せられたのではないかと思考せられるのである。

第二図 放射熱により消失せるもの及焼失せざるもの

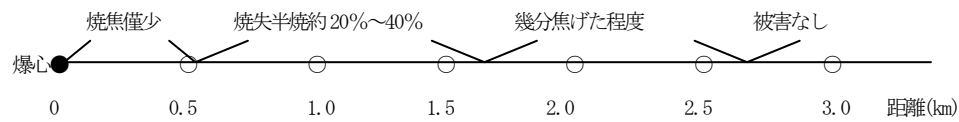


1,500m～2,500mの距離では爆心側が深さ1mm～3mm程度焼焦し、焼失までには至らなかつた様であるが、1,700m～2,000mの距離にある広島刑務所に於ては上部腕木取付部分に於て燃焼を生じ、防火上當日切倒せしもの(5本)頭部のみ燃焼し残存せるもの(2本)あつた。

写真11、放射熱により木柱の爆心方向が焼焦せる状態(木柱前面が道路樹の葉のため焦げずに模様を残して居る)(段原大町附近) 2km

2500m以遠になると放射熱のためには何等被害を受けた形跡が認められず、結局放射熱のために焼失した木柱は500m～1,500m内に点々と閑散的に存在し大部分は多少焦げた程度で焼失までには到らなかつた様である。

第三図 放射熱による照射程度



次で爆風による被害であるが100m以内の爆心直下には垂直荷重を受けたため被害極めて軽度(約10%)で100m～1,000m附近が折損倒壊せるものが一番多かつた様である(約30%程度)特に線路方面と直角に爆風を受けたものは線路方向に受けたものより数倍多かつたのは勿論である。

1,000m～2,000mでは折損倒壊は約10%程度で傾斜せるものは相當あつたが漸線其の他による不均張力の為に依るものと思考せられたものが多かつた。

2,000m以遠になると傾斜せるもの僅かに数本あつたのみで爆圧力は颱風時の数圧約200kg/㎡(風速約40m/5)程度と推算出来るのである。

以上の折損倒壊せる木柱を視るに地際にて折損せるものが最も多く約70%程度地上2m～3m程度の処で折損せるもの約20%あつたが、大体に於て横加重を受けたものには柱の下部で、縦荷重を受けたものは柱の途中で折損せる傾向があつた。

何れも折損倒壊並に傾斜の方向は爆心よりの放射方向である。結局爆風のために被害を受けた木柱は100m～1,000m附近が最も多く距離の増加に従つて漸減し3,000m以遠になると皆無の状態である。

第四図 爆風による折損倒壊程度

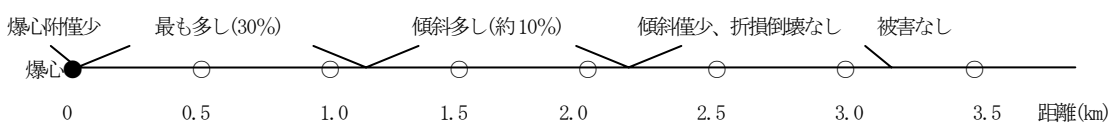


写真12、地際にて折損せる木柱(鷹野御所附近の連続折損木柱)

写真13、本社前(大手町通り)の傾斜木柱(0.6km)

写真14、横川幹の傾斜木柱1000m(爆心方向と直角)

写真15、線路方向が爆心方向のため近距離なるも被害のなかつた旧第二舞台裏門附近の健全柱(1,000m)

写真16、僅かに傾斜せる木柱(京橋附近1.4km)

写真 17、僅に傾斜せる木柱（爆心方向と直角） 修道中学校付近 2.3km

尚最も被害の受つた類焼であるが建築物より 5m 以内に於つた木柱は殆んど焼失し、爆心よりの距離とは無関係であつた。

風の方建物の種類或いは建物との距離距離により差異はあつたが、火力の強力であつたと推定せられる附近のものは完全に燃焼して居るが、処によつては傾部約 1/4～1/5 程度残つたものもあつた。

之は建物の倒壊後、火災発生して木柱の下部に燃え移り、大体鎮火した頃に木柱が焼け折れて残つたものと推定せられる。以上の如く木柱の被害は類焼最も多く、折損倒壊之に次ぎ放射熱に依るものは僅少であつたと推定せられるが殆んどが焼失せる為確然たる判定の出来ないのは甚だ残念である。

(2) 鉄柱

鉄柱の施設数は木柱に比し極めて僅少で約 2% に過ぎないが被害は相当なもので爆風のため 2000m 以内に於ては約 75% が倒壊し、不思議な現象を示したのであるが、之を距離的に究明すると次の如くなる。

第四表 鉄柱被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0～500	1	0	8	0	0	0	9
500～1000	1	1	30	0	0	0	32
1000～1500	0	0	2	0	0	0	2
1500～2000	18	0	19	0	0	0	37
2000～2500	0	0	0	0	0	0	0
計	20	1	59	0	0	0	80

爆心地付近では直前に於て、爆発のため爆風を垂直方向（垂直荷重）に受けたが広島郵便局（本局）跡に 3 基の鉄柱鉄塔が完全に残つた点から考へると相当数設置されていたとしても被害はごく僅少であつたものと推定出来る。

次で 200m～1,000m の範囲では、本通り筋及横川～十日市間の鉄柱が悉く倒壊して居り実に 95% の倒壊率を示した。この垂直面に対する爆風の荷重は一般風圧の荷重と趣を異にするか又は鉄柱が他の円塙支持物に比し、安全係数が小さいのではなかつたかと思考せられるのである。

1,000m～2,000m では尚相当倒壊して居る鶴見橋付近（大手町線）は線路方向に爆風を受けたもの等数基を残し他は悉く倒壊して居たが、この大手町幹線の比治山西側はコンクリート柱と鉄柱が連続して施設せられ同距離同方向なるに拘らずコンクリート中は健全に残り、鉄柱のみ倒壊したのである。

第五図 比治山西側鉄柱コンクリート柱被害状況

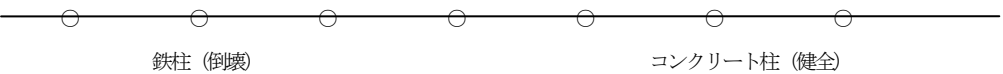


写真 18、爆心地（郵便局跡）（爆発直下なるため鉄柱折損せず）

写真 19、鉄柱連続倒壊状況（段原大畑町付近）爆心方向と直角にして鉄柱倒壊コンクリート柱は健全に残る。（1.8km）

写真 20、船入支線の鉄柱連続倒壊状況（1km）

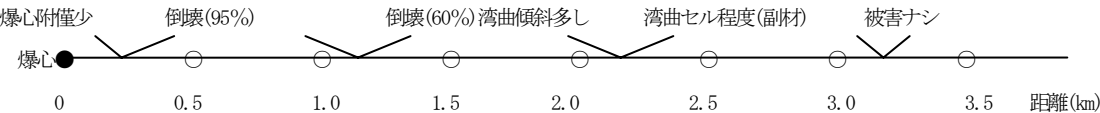
2,000m 以上になると倒壊傾斜せるものなく副材の曲がつたのが少しあつた程度である。

以上の倒壊せる鉄柱を見るに線路方向に爆風を受けたものは地際より 1m～2m の所で殆んど倒壊し（本通り筋）直角方向に爆風を受けたものは 1m～4m の処から倒壊して居る様である。之は建物等の影響を受けたものと思考せられた。

写真 21、船入支線の鉄柱連続倒壊中の一基の倒壊 爆心方向と略直角（1km）

起訴に何れも強固であつたが主脚材の継合部或いは主脚材のボルト穴（副材取付用）で殆んど折損倒壊の状態になつて居り何れも爆心よりの放射方向であつた。結局鉄柱は 200m～1,000m では全壊し 2,000m に到るも尚高率を示して居るが 2,500m 附近にて漸く皆無の状態であり他の円形支持物に比較し被害甚大であつた事は否めない事実である。尚放射熱其他放射生態物質の影響は殆んど認められなかつた。

第六図 爆風による折損倒壊程度



(3) 鉄筋コンクリート

施設数僅か 23 本にして全部継合式鉄筋コンクリート柱であつたが、木柱鉄柱に比して被害非常に少なく煙突と共に爆風に対しては非常に頑強であつた。

第五表 鉄筋コンクリート柱被害調査表

距離	健全	傾斜	損傷	倒壊	半焼	消失	合計(施設数)
0～500	1	0	1	0	0	0	2
500～1000	0	0	0	0	0	0	0
1000～1500	3	0	0	0	0	0	3
1500～2000	19	0	0	0	0	0	19
2000～2500	0	0	0	0	0	0	0
計	23	0	1	0	0	0	24

先ず爆心より 200m（西警察並に本通り附近）に 2 本施設されてあつたが、本通り筋の 1 本折損倒壊したの 1 本は少し割れ目の出来た程度で大した被害はなかつた。

次で 1,800m の地点でなる段原大畑町附近の大手幹線に 12 本のコンクリート柱が鉄柱と連續施設されてあつたが鉄柱は全壊、コンクリート柱は 1 本の被害もなく又同距離程度なる西観音町のコンクリート柱 5 本も健全であつた。

残念ながら 500m～1,200m 間に施設なく被害程度の推定に苦しむのであるが、円筒形煙突が殆んど完全に残った点から考へて相当施設されていたとしても被害は僅少であつたものと思はれるのである。

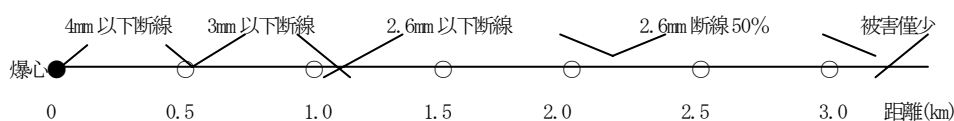
写真 22、旧西警察署前の鉄筋コンクリート柱（200m）（折損倒壊焼失を免る）

2. 電線

電線の被害は支持物同様類焼に依つて焼鈍せるものが最も多く、焼失区域の殆んど全部がこの被害であつたが、一部疎開空地等にして焼鈍を免れた電線の被害状況を距離的に調査せるに爆心地附近に於ては 4.0mm～3.2mm 当の電線は悉く断線し、5.0mm 以上になると漸く断線を免れて居た様である。被害は爆発以前の程度が不明であり何れによる損傷か推定に苦しむのであるがゴム混和物並に燃綿糸が相当損傷弱くなったものと思はれた。

次で 500m～1,000m 附近も爆心地と大差なく 3.2mm 程度は断線し被害も幾分劣化して居たが、1,000m～2,000m 附近になると 2.6mm の引込線でも幾分断線を免れており、被害も何ら異常が認められず 3,000m 以上になると電線の被害は全く皆無の状態になつて居る。

第七図 電線被害状況



結局電線の被害は類焼による焼鈍が大部分で断線損傷せるものは爆心よりの離隔距離の増加に従つて漸減し 2,000m～3,000m 以上になると被害皆無の状態であつた。

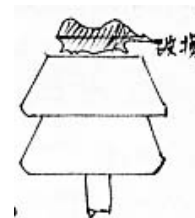
3. 碍子類

碍子類の被害は類焼によるもの最も多く 50%～60% を占め支持物の折損倒壊等機械的原因に依つたもの約 20%～30% 程度で直接爆風のために約 10% 程度破損して居たが、放射熱では恐らく被害はなかつたものと推定さる。

第八図 頂部の破損された碍子

先ず類焼によつては碍子が高熱で過熱せられ磁器が脆弱となり磁器とピンとの結合部分に使用して居る硫黄乃至セメントが変質（膨張係数の差異によつて二重碍子の中心より亀裂を生じ硫黄が溶解流出、硬化脆弱等）殆んど破損、茶台碍子、碍子管等は幾分弱い様ではあるが使用に耐へ得るものは可なり多い様であつた。

又図に示す如く碍子の頂部がもぎ取られたものが爆心より 1,000m 附近迄の間で傾斜並に健全柱に可なり残つていたが之は恐らく電線に受けた爆風に因りもぎ取つたものと推定せられる。



1,500m 以上になると爆風のみによる破損は殆んど皆無の状態であつた。其他の支持物の折損倒壊により破損せるものは折損倒壊並に地盤等の状態又は加熱後の倒壊或は倒壊後の過熱等により破損の程度は複雑で距離的には木柱の被害程度と略同様の傾向にあり加熱後に落下せるものが破損率最も大であつた。

4. 変圧器開閉器

柱上変圧器及油入開閉器は類焼により焼損せるもの最も多く実に被害の 90% を占めて居るが柱上よりの落下に際し外函の破損せるものも可なり多数あつた様である。放射熱に依つては大した被害は無かつたものと推定して居る。先づ類焼に依つては焼失区域の殆んどが損傷して居り之を部分的に観察するに外函は焼損せしも一部破損を除き再使用可能コイル並に絶縁物は焼損又は焼鈍せるものも多く修理により大部分再使用となりと推定せり。従つて絶縁物並にコイル取替による修理可能なるもの大部分をしむるものと思はれり。

次で爆風に依つては柱上より直接落下域はぶら下り（主に変台上に取付せしもの）外函其他破損せるものが可なりあつたが、これも爆心より 1,000m 以内に於て 1,500m 附近になると殆んど被害なく取付不十分であつたと思へるものが僅か変台上にて傾斜したに過ぎない。

従つて 2,000m 以上になるとこれら被害は皆無の状態であつた。異常変圧器の被害は距離的には木柱、碍子類と同様の被害率を示し、被害別では類焼、破損の順位である。

5. 地中電線（高圧電線）

主として大口需要家の高圧引込に使用されて居たのであるが、埋設部分は 0.6m～1.2m 以上の深さに埋設せられて居るため恐らく被害はなかつたものと思はれて居るが、終端設備附近に於て爆風或は建築物の焼失により損傷又は焼損したものがあつた。

即ち爆風による支持物の損傷、倒壊により地中よりの引上鉄管が倒壊し電線が折損したものであり距離的には支持物の折損、倒壊率の多い 1,500m 以内の被害である。

次で類焼によつては火力の強弱によつて差異はあつたが、一般に絶縁混和物並に鉛被が溶解絶縁紙が焼失して居り、本社の高圧引込に使用して居た電線にしても柱側並に地下変電室内の終端の数米が焼損して居り現在はこの部分を切斷使用して居る。

尚この調査は相当に困難のため多くの施設に就ては調査して居らず、詳細なる被害は不明である

IV. 発電所の被害

発電所の被害は暴風に依る建物の倒壊、器具計器類の破損並に類焼による建物及諸施設の焼失であり、大手町変電所及千田町発電所が最も被害甚大で、段原、三篠変電所等は之に次南部、江波、庚午変電所等の被害は極めて軽微であつた。

各変電所の施設概要を示せば次の如し

第六表 発電所

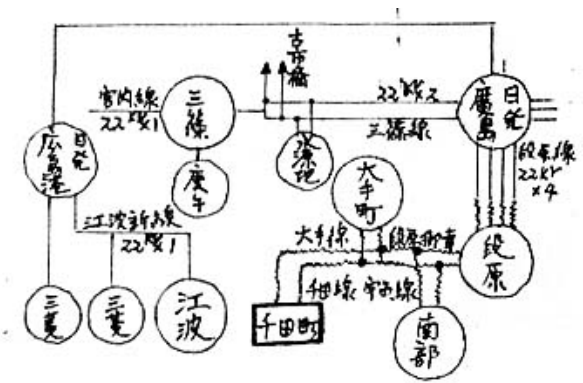
発電所名	原動力	出力(予備) R. VA	汽罐		汽機	
			種類	箇数	種類	廻轉数
千田町	汽力	6000	ハイネ水管式	6	混合式スチームタービン	3,600

発電機			変圧器			
容量kw	電圧KV	箇数	容量KVA	相数	電圧kv	箇数
3000	3.3	2	1500	1	22 11/3.3	4

第七表 変電所

変電所名	出力 KVA	変圧器			
		容量KVA	相数	電圧kv	箇数
大手町	6000	2000	1	22 11/3.3	3
三篠	6000	1000	1	22 11/3.3	7
段原	6000	1000	1	22 11/3.3	7
南部	6000	1000	1	22 11/3.3	7
江波	6000	2000	1	22 11/3.3	3
庚午	3000	1000	1	22 11/3.3	3

第9図 広島市附近送電系統図



1. 千田町発電所

千田町火力発電所は既に所機械も老朽で最近数年間は殆んど使用せず廃止の予定だったもので、当時3配線用変電所として使用して居たに過ぎない。

煉瓦造の建物にボイラー発電機、配電盤室、屋外に変圧器、遮断機が施設されていたが、暴風により瓦葺屋根窓が前回、煙道の一部が倒壊した。続いて附近木材倉庫に火災発生しボイラー発電に配電盤室に延焼し、燃焼物の悉を消失した。

然し、ボイラー、タービン、及発電機が附近の燃焼により何の程度の被害を受けたかは今だ精密調査が行はれず詳細不明であるが恐らくボイラー、タービンは修理可能と推察さる。屋外鉄鋼並に変圧器、開閉器等諸施設は何れも被害はなかったが配電盤室の消失により変電所としての使用も不可能な状態である。

写真 23、千田町発電所全景 (屋根全壊屋内全焼) (2.3km)

写真 24、千田町発電所発電機並に配電盤室 屋根全壊全焼 (2.3km)

写真 25、千田町発電所 ボイラー室屋根全壊 全焼 (2.3km)

2. 大手町変電所

大手町変電所は昭和 20 年 6 月までは広島市の中央へ配電供給して居たが、7 月から疎開のため運転休止、変圧器 4 台中 1 台は既に江波変電所へ疎開されて居たのである。建物は鉄骨モルタル塗装三階建にして屋外に変圧器が施設されていたが暴風により建物壁全周破壊し僅に主鉄骨のみ残り屋外の鉄構の大部分が湾曲倒壊したが附近家屋よりの類焼により屋内外とも大部分は消失せり。

即ち配電盤は消失し油入開閉器類引火或は転倒して殆んど使用不能只主変圧器が現在の処被害程度の詳細不明なるも、焼失を免れて居り外函は一部は存して居るが修理せば使用可能と思考せり。

尚変電所北側の旧製作所は完全に倒壊消失して全くの廢墟となれり。

写真 26、大手町変電所破壊状況 (0.8km)

写真 27、大手町変電所及旧製作所破壊状況 (0.8km)

3. 三篠変電所

三篠変電所は煉瓦造りで屋根は木造瓦葺屋根に配電盤並に高圧開閉器類を屋外に特高開閉器類並に変圧器が施設されて居たが、類焼を免れたため千田町、大手町変電所等に比し被害は割合軽微であつた。

即ち暴風により木造屋根、及窓が全壊し配電盤が倒壊一部計器類の破損があつたが屋外鉄構の主脚材 (アングル) 二本が約 5 cm 程度湾曲せる外、変圧開閉器類にも何ら被害が無かつたため (防破片壁が爆心方向に施設せられて居た為、屋外施設の被害が漸く僅少であつたものと思考さる) 應急修理により 8 月末日より運転中である。

写真 28、三篠変電所の倒壊せる配電盤（1.6km）

4. 段原変電所（爆心より 2.5km）

段原変電所は鉄筋コンクリート壁の木造瓦葺で屋内に配電盤並に高圧開閉器類と屋外鉄工に特高開閉器類並に変圧器が施設されていたが三篠変電所と同様類焼を免れたため排外はわりに軽微であった。

即ち爆風により木造屋根及窓が大破し配電盤の一部計器類が破損したが屋外の特高器類に何ら被害の無かつたため應急修理の上 8 月 8 日より運転中である。

5. 南部江波庚午変電所

各変電所共爆心より 4.0km～4.5km の距離にあり電気施設の被害はごく僅少にして特に鉄筋コンクリートの南部変電所は窓の大部分が破損した程度に留まつており電気器具並に計器類の破損はなかつた。

江波、庚午変電所いずれも木造ストレート葺建物であつたため屋根一部、天井窓等が破損し庚午変電所は約 10° 建物が傾斜した程度である。

電氣的には江波に於て天井の一部脱落により碍子数箇と継電器 1 箇破損し庚午に於ては蓄電池数箇が転倒破損せる程度である。

6. 櫓下変電所（爆心より約 0.15km）

広島電鉄電車様変電所にして水銀整流器及廻轉變流器を設置されて居たが爆心より近距離のため建物（煉瓦造）全壊各電気器具計器の殆んど破損、続いて火災により完全に消失し盡くされた。

写真 29、櫓下変電所の被害状況（0.2km）

V. 送電線路の被害

送電線路は附図に示す如く架空、地中、線路が施設されて居たが遠距離のため被害極めて僅少であつた。

1. 架空送電線

架空送電線は三篠線及宮内線の一部分が爆心より 2,000m でいちばん近距離にあり爆風、類焼等爆弾に依る被害は皆無であつたが架空電話線に於て混線、断線せるもの次の如し。

第八表 架空電話線の被害

	三篠線	宮内線	計
断線	4	3	7
混線	4	2	6
送電線と混線	3	1	4
計	11	6	17

2. 地中送電線

ケーブルは御幸大手線が爆心地より 700m～2,000m で一番近距離にあつたが高圧引込ケーブル同様、地下埋設部分は異常なく大手町変電所に於ける終端接続函並に其の附近が消失迄には到らぬも絨斗並に鉛工部のハンダが多少溶解せる程度である。

御幸、千田線、其他には何等被害なし。

VI. 結言

原子爆弾に依る電気工作物の被害は以上の如く地上施設に対しては放射熱爆風及類焼のため壊滅的な被害を受けその範囲も爆心地より 2,500m 附近まで及んでゐるが地下施設（地中電纜）には何ら被害が無かつた。

之は爆発が空中約 5,600m の高度で行はれた為で長崎市に於ては爆心地と思われる附近（浦上川の西側）に大爆発孔が出来て居り結局爆発の高度により距離的の被害並に地下に及ぼす影響は大変異なつて来るが何れにしても原子爆弾に対する防護対策としては殆んど考えられず地下施設にすれば被害を極度の現象出来得る事は勿論である。

尚電気工作物は放射性物質によつては何ら被害が認められなかつた。

写真 30、爆心地附近の元安橋（0.15km）（爆心方向のため橋欄干が両外側に倒れ燈籠が僅かに移動す）（爆心附近なるため木柱が爆風等の被害なく健全に残つた）

(十)

8・10 広島陸軍兵器補給部に於て 新型爆弾ニ関スル研究会

当時・呉海軍工廠電機部無線工場主任

海軍技術中佐

大野 茂

2) 8.10. 広島陸軍兵器補給部に於て新型爆弾ニ関シ研究会

○機銃見習士官陳述

落下傘三個ヲ認ム。距離ハ爆発位置ヨリ 4km、高度 9000m、方向 700 南 爆発点ハ高度 500m、方向 0

○七研所員陳述

△比治山ノ見習士官ノ談 野外ニテ放育中 V 3 機ヲ見タ 目測 6000~7000、頭上デ急降下落下傘 (大) ヲ見ル 吊下物ヲ見ズ暫クシテ「シューツ」音ヲ聞ク。

熱ク感シ閃光ヲ見タ后伏ス。火傷者ナシ 3ヶ所ニ火災發生ヲ望見ス。

△二十日市ニ居タ者ノ経験、屋内ニ居タ、閃光ヲ見タ、己斐ノ方向ニ高度 2000~3000 青黒イ雲ヲ見ル虹ヲ重ネタ様ナ ring ヲ見ニ人ガ近ヅク

△爆発音ハ 1 丈感ジタ

△二十日市ゾイ直后油用ノ雨が落チタ。5 分~10 分以内直グ止ンダ

○永松少佐 (衛生関係)

死亡者ハ家屋等ノ圧壊ニ依ル圧死者ト爆死者トガアル

傷者ノ 90%ハ焼ケド、一部挫骨等アリ。大部分ハ顔ト四肢、被服ガー寸コゲテキルニモ係ラズ此ノ下ノ皮ヲ焼ケドノヒドイモノモアル。火傷ノ性質ハ痛ガ少イ 觸感ハアル。水泡ノ出来方ガ早イ。

光ヲ見タ者デ中心カ方 3km 以内ノモノハ大抵火傷ヲ受ケテオリ、耳、目ノ傷害ハナシ。入院者ノ死亡率大、死因ハ火傷。

レントゲンフィルム、日赤ノモノハ感光シテイタ。地下格納ノモノハ感光ガ少イ (ナシ)

○海軍整備隊砲術長

0814 ナカノ砲台当直員西條方向ニ大型 V 爆音ヲ聞ク

0815 B29 1 機航行 1 機 ナカ上空通過 広島方向ニ向ク 高度 7000、間隔 200~300、先頭ノ一機 北ニ変針、次ハ南ニ変針旋回ト同時ニ閃光ヲ見ル 南ニ旋回シタモノハ殆ンド垂直旋回 (未ダカハル急旋回ヲ見タコトナシ) 右ニ旋回シタモノハ 落下傘 4 ケ投下。最初ノ 1 ケハ不開 3 ケ開傘ス。見エナクナツ タノチ閃光ヲ感ズ

電話員ハ瞬間過電流 (ガガーツ) 音ヲ感ズ。同時ニ手足ニ電氣ヲ感ズ。閃光ノ発光セン位置ハ左ニ旋回セル V ノ附近ニ認ム

爆音ヲ 6000m 位ト認メタ

落下傘ヲ認メタ、ソノ落下速度ハ 150m/sec

爆心ノ 15000m 離レテカラノ相当ノ爆風ヲ感ズ

○火工部長

爆発中心護國神社南方 500m

高度 550m (文理大学ノ其ノ北方、防空壕内閃光ニヨル焦グ跡カラ測定)

閃光ハ近クハ黄、遠クハ藍ガカル

熱感アリ

爆音一回、近クノモノハ爆音ヲ聞カズ

遠イ所デハ螢ノ光ノ様ナ落下物ヲ認ム

日本家屋半径 2km 以内全壊

鉄筋コンクリートハ爆心デヒビガ入ツタ

防空壕ノ丈夫ナモノハ完全ニ残ル

道路異状ナシ

地下ケーブル、水道等異状ナシ

V 掩堆外ノモノ 1 機焼ケタ

竹網ニテ防護シテアツタモノハ有効デアツタ

爆心附近ノ相生橋ハ波ウツデキル

550m 圏内ニアツタ者ハ内臓ガ露出シテキタ

1200m圏内デハ衣ガ裂ケテキタ

藁、紙ハ直接着火ス

木ハ着火セズ

山火事ガ起キテキルガ原因不明ノ螢火カ？ カナリ遠クデモ発生シテキル

落下傘ガ広島ノ北13km 龜山村大毛寺デ1km 離レテ3個接着シテキタ

○捕虜ノ話

基地硫黄島

東京ヲ12日ニヤル

電気装置デ高度ヲ規正シテ破裂センメル

強烈ナ爆発ヲナシ白イ煙ガ上ル

GE デ研究、重量500lbs、長さ30〜36" 巾15〜24" 尾部 6〜8"

威力圏 3哩

爆発スルト電気嵐ヲ生ズ

日中殊ニ雲間ナク地上ノ明レイ時ノ方ガ効果的 夜間、雨天ハ効果少シ

○大野

落下傘附無線装置説明

○軍医少佐

白色下着着用ハ侵サレテキナイ

黒色デモ厚イモノハ侵サレテキナイ

宇品ニテ鼓膜ノ破レタ例アリ

水中爆傷ト相似ノ有モ調査中

外傷火傷共少ナクテ死亡セルモノアリ、死因研究ヲ要ス

失明者ナシ

露出ハ絶対不可 白色下着ヲ着ス 伏セテスルコト

中心ヨリ1km 離レテ防空壕ガ無事ナリシ者アリ

硝子ノ飛散

地区司令部（練兵場）防空壕デ無事ナリシ者アリ

結論

① 本弾ハ爆弾デモナク、焼夷弾デモナイ

仁科 ウランノ原子全部ガ有効ニ働イタトスルト2000Tノ爆弾ノ40倍ニ作用〇〇ガナル、 v^{13} 乗ニ反比例スル

レントゲンノフィルムニ感光シテイルモノガアル

下ニアツタ物質ガ放射性トナツテイル筈

寿命ガ短イガ資料ヲ東京ニ持ツテ行ツテ調査シナイ

放射性ガヤケドノ原因トナツテキタカ否カ調べル要アリ

放射線ガ沢山出テイル間ハ白血球ガ増ス筈

時機ガ少シオソイ

6kg/c m²ノPヲ出スニハ10,000 tノTNTヲ要ス

ウランハ100 kg以内 純粋ノウランニハ数kgナラン濃度？

地上物体デ放射性ヲ持つテイル時間ハ物ニヨリ中性子ニヨリ異ル 塩ヲ調べルトヨイ

中性子ハ人体ニ対スル影響ハ白血球ヲ増ス

energyヲ温度ニシタトスルト100,000度ニモナル

反応ノ時間ハ計算シテ見タガ長イ

原子弾或ハ同種類ノモノト考ヘル

②爆発地点

護国神社ノ南300m 高度550m

③爆王

施設部 草津 硝子破レテチル 0.2 kgノ圧力ナリ

己斐 家半壊 0.6 kg //

R^2 =反比例スルトシテ計算スルト爆心ニ於ケル地上大気圧ハ6 kg/c m² トナル

爆原地上ニ於ケル爆圧ハ6 kg/c m²ト推定セラルトモ更ニ研究調査ヲ要ス

④火傷ノ原因

半径2km 完全ニヤケドシテキル

半径3kmデモヤケドシテイルモノ多シ

更ニ遠クデモヤケドシテキル者アリ

仁科 β線デハナイトイフ考エモアル β線ナラバ3km行クニハ1/10 秒クライカカルト想像セラルルガハツキリハ判ラヌ

硝子ヲ透過シナイ例ガβ線トモ考ヘラレル

紫外線ナラバ目ヲ損ス 熱線ハ硝子ヲ透ス

白色布ヲ透サナイ点カラ考ヘルト 光熱線デアル

若シテ混ツテイルカモ知レヌ

宮島 (12 km) デニ総軍ノ少尉ノ話 1秒間以上続イタト思ハレル

光線ノ作用アルハ確実ナルモ更ニβ線ノ作用アル疑アリ 持続時間ハ瞬間デハナイ

⑤火災ノ原因

燃エ易イモノハ着火シテキル

ワラ、ヒハダ屋根、コールタール塗柱、防空黒カーテン

引火シヤスキ物質ノ光線ニヨル着火ニヨリ火災ノ原因トナル

⑥投弾方法

此ノ爆弾ハ単機又ハ少数機ノ投下ニヨリ必ズシモ落下傘ヲ伴ハズ

対策

①非難ノ方法、警戒警報中ト雖モ敵V近接を知らノ直ニ蓋ヲ有スル

防空壕ニ退避スベシ間ニ合ワナイ場合ハ遮蔽下ニ姿勢ヲ低クシ閃光ヲ見ル瞬間ニ空地ニ飛び出スベシ

②服装 露出ヲサケルコト、厚着ノコト、白色ノ下衣 (木綿ガ可)

③建物 硝子戸ハ外スコト 日本家屋ハ半地下壕舎ニ改ムベシ

軍関係

①本弾ヲ持ツテ第一Vデ異状ヲ認メナカツタ

②V、Vガ野外ニアツタモノ (3km) ハニツニ折レタ

Vハ有蓋掩タイ若クハ地下ニ入レルコト

③被服

④高角砲台ノ防御

調査研究問題

爆圧ヲ更ニ精密ニ調査 (今月中)

焼ケドノ問題更ニ限界ヲ明ニスルコト (今月中) 原因強力等

(β線ナラバ方向性アル筈 歩哨、兵士等モ更ニ調査)

寫眞ノフィルムヲ調べルコト

落下傘附発信キ〇〇今月中ニ到着

京大、大傷ノ原因ガ熱ノトキ水泡ガ早く出ル

放射線ノトキハ遅イ

(十一)

軍関係災害調査報告文書集

中野深照灯台廣島爆撃目撃状況

呉海軍警備隊

時刻	記 事
〇八一四	現當直員電話員下士官一見張員二西條方向ニ大型機爆音ヲ聴取ス
〇八一五	西條上空B29 一機進行方向西向首對勢ナリ續イテ一機計二機十二糎双眼鏡ノ同一視野内ニ映ズノ時肉眼ニテモ二機ノ機影ヲ認め得タリ 中野上空ヲ通過通過時稍々南寄りニシテ進行方向西（廣島方向）稍右横通過對勢ニ二機共B29 ニシテ同一型雁行ス（高七千間隔二百乃至三百ト推定）
〇八一七	先頭ノ一機右ニ旋回次デー、二秒後後ノ一機左ニ殆ト垂直旋回ト思ハル程ノ大角度（高度七度計算高度一八〇〇米）トナリタル為眼鏡ヲ外シ右旋回ノモノヲ捕捉ス先頭機右旋回中落下傘降下三箇開クモ最初ノ一箇開カズ後續機旋回始メントスル瞬間閃光ヲ認メタリ 閃光ヲ発シタルトキ露天ニ在ル者ハ眼眩ミ丁度マグネシウムノ燃焼ニ似タリ土中壕内ニ在ル電話員耳ニ過電流大ナル震動飯ノ感覺ト身體ニ微弱ナル電流ノ通過スルヲ感ゼリ閃光發光ノ位置ハ左旋回ノ敵機ノ位置ヨリ發シタル如ク認め目眩ミタルモノノ後直チニ右旋回ノ敵機ヲ捕捉スルニ 支ナク目ハ元ノ情況ニ復ス若干遅レタル時爆煙ヲ見ル（爆煙高角二十二度、自己標高五〇〇米、計算高度六五〇〇）落下傘ハ中野ヨリ三百度
〇八五八	仰角三十二度ノ地点ヲ北北西ニ流レ中野三二〇度仰角四度ニ於て消滅ス落下傘ハ小型約二米位下部ニ円筒頭部円形白色ノモノヲ吊ルス内一ケニハ紐状ノモノ附着セリ落下速度一分間約百五十六米ニシテ落下地点鈴張カ八重民防空監視所附近ト思考ス天候快晴雲量一視認距離三〇〇〇〇風向北北西風速〇米/秒爆風ハ山林ノ立木皆動キテ身體ノ衝動相當大ナル程度ナリ

板城深照灯台廣島爆撃目撃状況

時刻	記 事
〇八一五	西條上空B29 一機發見信仰方向西
〇八一七	廣島上空ニ於テ変針ト同時刻ト思ハル頃落下傘三箇投下七倍稜鏡ノ一分劃位ニ針中ノB29 見エタ瞬間強烈ナル閃光ニ驚キ目ヲ轉ジタル時二八〇度乃至二九〇度ノ中間ニ一大火災ノ猛烈ナル勢イニテ石ヲ水ニ投ジタル如ク擴大シツゝ中ヨリ中ヨリ湧出シ積雲ノ天ニ昇ルガ如キ勢イニテソノ上辺ハ赤黄黒白入り乱レタル雲柱ヲ認メタリ 其ノ頃敵機ハ東方ニ変針落下傘ハ西北ニ流レ
〇八五八	中野北方ノ雲中ニ機影消滅ス

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三三(八月十日送付)

八月六日広島空襲被害状況並ニ対策(第二報)

呉鎮守府衛生部

A 事件ノ概要呉鎮司令部ヨリ各鎮警宛ノ電報済二付省略

B 症状ノ大要

一、熱傷(大多数)

1、街頭ニアリタルモノ一般ニ程度強シ又屋内ニアリタルモノ熱傷ナキ例多シ

2、熱傷ニ方向性アリ

(イ)閃光ニ直面セル露出皮膚面ヲ主トス

(ロ)光線ノ死角ノ部(例之足趾)ハ侵サレズ

(ハ)頭髮ハソノ側ノ頂上ニ近キ程焦ゲ方強シ

3、同一部ニテ熱傷度ニ強弱アリ即チ同一部位ニテ濃淡アリ

4、女子ニ多シ(薄着ノ為)

5、閃光ニ気付キタルト同時二一四秒間露出皮膚面ニ熱氣ヲ感ゼシモノ多シ

6、色トノ關係

(イ)白色部ハ侵サレズ

例一、白布中黒字ノ部分ノミ焦グ

例二、白紙中黒字ノ部分ノミ焦グ

例三、下着ノ白ノ部分(褲)ノミハ侵サレズ

例四、舟上ニ在リタル少年パンツノ部分ノミ侵サレズ

(ロ)青色焼ケル

(ハ)薄赤色侵サレズ

備考黒クテモ厚ケレバ侵サレズ

7、死因トノ關係

爆発中心地ニテ観ルニ熱傷度ハ死因ト考ヘラルル程度ナラズ(詳細調査中)

(+日射病モアルベシ)

8、熱傷ハ総人口ノ八〇%位ト推定サル

備考生松ガ燃エタル事実アリ相当ノ温度ト考ヘラル

ニ、爆風傷(創)

1、救護隊取扱患者(比較的周辺ノモノ)ニテ鼓膜損傷、難聴ヲ来セルモノ稀ナリ(但シ確實ニ存在ス)中心部ノモノハ不明

2、中心部ヨリ西練兵場ニ於ケル屍体ハ腸脱出眼脱出ノモノ散在ス其ノ数中心部多ク周辺部少数

備考

(イ)水中爆傷(爆雷ニ依ル)ト相似ノ症状ナルモ解剖施行困難ナルニヨリ詳細不明從テ肺損傷等モアルベシ故ニ東練兵場ニテ軽度ノ喀血例アリ

(ロ)両外眦部ニ結膜溢血アルモノアリ(呉病ニテ観察)

(ハ)西練兵場ニ於ケル屍体ノ内腸脱出ノモノハ裸体ニテ同場所ニテ労働中ノモノニシテ圧死等ノ跡ヲミズ死因ハ腸脱出ト認ム

3、中心部ニ於ケル死因ハ概ネ之等爆風ニヨルモノカ爆風傷ニヨルモノト推定ス(要検討)

三、眼症状

1、煤煙火焰ニヨル結膜炎ナシ(焼夷弾トノ相違)

2、両外眦部ニ結膜下溢血ヲ認メタル例アリ(於呉病)

3、失明者ハ取扱患者中ニナシ

(イ)光ハ頭上ヨリ来ル為

(ロ)反射的ニ閉眼ノ為

(ハ)光ノ出タルニ氣付キ頭ヲ反射的ニ廻頭セルモ費消時アル為

(ニ)結膜ハ白ク虹彩(黒目)上ニハ角膜(無色)アル為

四、倒壊家屋ニヨル負傷

直後及八一七相当人員圧セラレテ救助ヲ求メタルモノ多シ

五、飛散破片ニヨル負傷

硝子片種々ナル断片(例之木片)ノ鼠入多シ

C 負傷状況(八一八県警察及県衛生課調査概数)

一、広島市民

総人口—25 万

罹災—20 万

火傷—16 万

手当ヲ要スル物—5 万

要入院者—2—3 万

死者—2—3 万

二、八一八現在陸軍対策

1、八一七医務隊一中隊(門司ヨリ)(約二〇〇名)

2、八一八Ⅱ(小倉ヨリ)(Ⅱ)

3、現在収容数約七〇〇〇(陸軍部隊ニ於テ収容一部部外者ヲ含ム)

4、陸軍部隊続々到着中

備考八一九附海軍救護隊及救出隊派遣ヲ解カレタリ

D 戦訓

1、露出不可

2、白色ノモノヲ少クモ下着ニ着ス要アリ(状況之ヲ許セバ最外表モ)

3、伏セノ姿勢耳目ヲ塞グ(閃光ト同時ニ)

4、防空壕ハ爆心地ニ於テスラ簡単ナルモノ(但シ被蓋板張又ハ丸木渡シ)ニテ崩壊ヲ認メズ

5、同右ニヨリ中心地ニ近キニ不拘助リタル一家アリ(衣服ニモ変化ナシ)(距離爆心ヨリ一畝)

6、硝子ニ白ペンキ又ハ白紙ヲハルコト

7、又ハ黒幕(展張用)ノ外ニ白幕ヲ張ルコト

8、落下傘監視ヲ要ス(紫外線ヨケ眼鏡ヲ見張員ニ装備)

E 新兵器ヘノ考察

落下傘付新爆弾ヲ落下地上五〇〇米ニテ起爆セシム

其ノ際閃光及爆風ヲ生ズ閃光ハ熱線ヲ伴ヒ雷射ニヨリ皮膚面ニ熱傷ヲ生ズ之ニ或物質粒子ヲ附随スルヤ否ヤハ不明

(2)爆風ニヨリ負傷ヲ生ゼシム

傷者多発ノ原因トシテハ当時警戒警報解除後ニシテ多人数屋外ニアリ又伏セノ姿勢ヲ採ラザリシ為ナラント

思考ス

(終)

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三三ノニ(八月十四日送付)

八月六日広島市空襲戦訓(第三報)

呉鎮守府衛生部

其ノ後半明セル事実ニヨリ前報加除訂正ヲ行フコト左ノ如シ

A 症状

一、熱傷(大部分)

- 1、白色ノ遮断性ハ比較的ナリ白色以外ニテモ厚キ程侵サレズ
- 2、閃光前面ノ皮膚後面ノソレニ比シ熱傷広ク高度ニシテ原因物体ノ反射性ヲ考ヘシム(白壁ノ前ノ草一様ニ両面焦アリ)
- 3、一度二度三度ニ近キ二度多シ中心部程広ク強シ
- 4、死因トノ関係

(イ)中心地ニテ一次の熱傷死アリ之ニ引続キ日射病ヲ併発シ死亡セルモノモ考ヘラル

(ロ)挫傷後二次の熱傷(延焼ニヨル)ニヨリ死セルモノアリ

二、爆風傷

1、腸脱出、眼脱出、咯血ハ中心地ニ於テスラ絶対ニナシ(前回ノ觀察ハ破片ニヨル創面又ハ之ニ死後変化ヲ伴ヒタルモノナリキ)蓋シ水中ト異リ身体ハ大爆風ノ前ニハ木ノ葉ノ如ク吹飛バサルル為ナラン

三、死因ノ考察

1、爆心ヨリ五〇〇乃至六〇〇米範囲迄ニ在リシモノ

(イ)熱傷死(全身熱傷)

(ロ)熱傷後日射病合併(熱傷面比較的狭)

(ハ)圧死

(ニ)挫傷セルモノ火災ノ延焼ニ依リ焼死

(ホ)爆風傷ニ依リ死亡セルモノナシ

(ヘ)脳震蕩症(?)ニ依リ死亡ノ者アリ(死体傍所持弁当箱アリ)

註、中心地ニアリシガ掩体又ハ家屋間ニ半姿勢ニアリタル者無事ナリシ例アリ

2、収容患者ニ付

例之収容五六〇中死亡一五〇(死因熱傷)(詳細調査中)

B 物的被害

一、家屋

	全壊	半壊
木造	二一三軒迄	同上ヨリ六一七軒迄
煉瓦又ハ石造	五〇〇米迄	同上ヨリ一〇〇〇米迄

註、鉄筋(中心地)＊ノ入ル程度但シ窓硝ハ全部破壊内部焼失

二、水道及道路被害ナシ

三、爆心地上ノ圧力ハ6km/cm2 ト概算サレアリ (詳細後報)

(終)

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三三ノ三

八月六日広島市空襲戦訓(第四報)

呉鎮守府衛生部

其後判明セル事実ニ依リ前報加除訂正ヲ行フコト左ノ如シ

A 経過

閃光及音トノ関係

- 1、中心地ヨリ約十二軒地点ニ於ケル閃光ヨリ爆発音迄ノ経過時間三〇秒(体験者直後追試秒時計ニテ測定)
- 2、爆心一広島駅ヲ結ブ圈内ニ在リタル者ニシテ爆発音聴取者ナシ

B 統計的観察(全体ニ就キ未ダ不明ノ為個々ニ付記述ス)

一、病類別

例1 海軍甲救護隊取扱患者

熱傷九〇%有傷創一〇%骨折アリ(頭蓋底骨折、肋骨、四肢)

註熱傷内訳

程度月日	八一七	八一八	八一九	計
重症	七八	一二四	三一	二三三
中等症	一二九	二六二	五〇	四四一
軽症	二〇八	六三〇	一二七	九六五
計(実数)	四一五	一〇三六	二〇八	一六五九
%	二五・〇	六二・四	一二・五	

例2 海軍乙救護隊取扱患者

熱傷六二名挫傷一六名熱傷兼挫傷一七名

例3 陸軍収容患者(二〇〇〇名二付)

熱傷約七六%挫傷約二%異物鼠入約一九%

二、死亡率

二、〇〇〇名中八二〇名(約三〇%)死亡者ハ全部熱傷ヲ有ス(陸軍)

C 症状

一、爆風傷

中心地ニ於テハ死セル者多カルベク屍体収容当時既ニ相当死後変化著明ナリシ為陸海軍共未ダ確実ナル例ヲ證明セズ

二、破傷風、ガス壊疽八月十二日現在陸海軍共未ダ一名モ認メズ

三、眼症状

1、眼瞼熱傷多シ瞼縁ノ摩擦多シ将来魚眼症ヲ続発スルモノ多カルベシ

2、結膜浮腫及眼脂アルモノ多シ

3、角膜皸裂ニ一致スル表在性熱傷多シ(殊ニ重症者ニテ)

(事件当日表層ニ瀰漫性混濁ヲ認メタル一例外アルモ遠隔成績ヲ得ズ)

4、水晶体爆風性白内障ニ関シテハ将来ノ例ニ俟ツ

5、虹彩瞳孔変化ナシ

6、網膜ベルリン氏混濁、黄斑部浮腫トシテ認メラルルモノ多シ(定型例ニアリ)

備考陸軍調査ニヨレバ現在(八一十二)ノ処中心性暗点電気性眼炎、角膜剥脱、羞明、煙ニヨル結膜炎ヲ認メズ眼障害ハ眼瞼部熱傷及之ニ続発セル結膜炎ニ依ルモノナリト

四、耳

1、爆心ニ近キ程熱傷側ノ鼓膜裂孔多シ(二四例中一四例確実陽性)

2、熱傷患者其ノ他客観的ニ異常ヲ認メザル者ニ於テモ極メテ多数ノモノニ眩暈悪心嘔吐ヲ認メ之等ノ症状ハ迷路障碍ニ関係スルモノト推察セラルルモ確実ナルコトハ今後ノ専門的調査ニ俟ツ

五、血液

1、爆撃当時広島市ニアリシモノ二三名ニ就キ調査セル成績別表ノ如シ(検査続行中)

2、収容患者ノ血液ノ時間的追究ハ目下施行中

○熱傷患者ニ幼若細胞ノ出現アリト(陸軍但シ検査例数少シ)

○事件後來広セルモノニ〇名三日間滞在現在ニ於テ変化ナシ

○八一十二派遣調査団員四名現地滞在(四時間)前後変化ナシ

六、尿

- 1、熱傷患者ハ何レモ酸性十三例中十一例ハ蛋白、円柱、白血球、赤血球何レモ陽性(陸軍)
- 2、呉病収容患者中「リバノール」様着色尿ノモノ多シ(十時過現地溝在ノ調査班員ニモアリタリト)

七、一般症状

- 1、熱傷患者中ニハ高熱四〇度ニ及ブモノ可ナリ多シ(陸軍)
- 2、閃光後三十分乃至二時間ニシテ悪心嘔吐ヲ来セルモノ多シ其ノ程度種々ニシテ現地水飲用ト関係ナキモノノ如シ
- 3、事件後六日目尚食欲不振。悪心嘔吐技量、頭痛、口渇、便秘(時ニ下痢)ヲ訴フルモノ多シ(陸海軍収容患者)

D 熱傷効果線ノ作用機轉

- 1、方向性、色トノ関係、竝遮断線性(死角存在ノ事実)ヲ肯定スル事実増加シツツアリ
- 2、硝子ニ依リ遮断セラル事実アルモノノ如シ(詳細調査中)

(イ)熱傷面ニ就キ

(ロ)エーテル、ベンゼン等発火セザリキト(於広島日赤病院)

E 要研究事項

前回報告ノ他(関係各部ヘノミ通知済)尚左ニ付検討ヲ要ス

- 1、放射線ニヨル直接焼死ノ有無
- 2、現地ニ於ケル放射性物質残存ノ有無。位置及其ノ消長(生物学的竝理学的検査)人体ニ及ボス影響、対策
- (3、農作物ニ対スル影響)

F 対策(追加)

- 1、適当ナル塗料(人、物ヘノ)ノ研究
- 2、煙幕展張効果
- (3、要スレバ立入禁止区域制定)
- (4、農作物ニ対スル対策)

呉鎮機密第一四二号ノ一〇ノ三四

陸、海軍合同特殊爆彈研究会決定事項(要項抜萃)

呉鎮守府衛生部

一、日時二〇一八一一〇自一〇〇〇至一六三〇

二、出席者

海軍側兵科、技術科(中央及現地、技研)軍医科(呉病一部長)

陸軍側兵科、軍医科、技術科(中央及現地)

理研仁科教授(原子物理)

京大荒勝教授(同)其ノ他

木村教授(病理)

杉山教授(同)

三、決定事項

1、彈種

原子爆彈乃至之ニ類似ノモノナラン(爆彈ニ非ズ)

2、熱傷ノ原因

熱傷ノ作用アルハ確實ナルモβ線及X線ノ附加ノ疑濃厚ナリ

持續時間ハ少クモ瞬間的ナラズ

3、火災原因

光線ニヨリ引火性物質ニ点火シ発火セルモノナラン

4、投弾形式

落下傘ト無関係

5、対策

(イ)警戒警報中ト難又一機ナリトモ油断セズ様

(ロ)角材又ハ丸材ノ被蓋ヲ有セル屋外待避壕ニテ可

(ハ)閃光ヲ見タラ伏セヨ(殊ニ遮蔽下ニ)余裕アレハ屋外待避壕止ムヲ得ザレハ屋外空地ニ飛出シ伏スルコト

(圧死ヲ免ガルル為)

(ニ)露出不可少クモ下着ハ白トセヨ厚キモノ程ヨシ木綿ノ方ヨシ

(ホ)建築物

窓硝子ヲトレ日本家屋ハ地下壕舎式トスベシ

追記 會議終了直後阪大浅野教授(原子物理学)一行到着参会者ト談合呉病帰着後現地土塊ヨリ放射性物質ノ存在ヲ證認ノ旨報告アリタリ

(終)

八月六日広島空襲ニ對スル研究会議事概要

二〇.八.一〇 呉工廠

一、日時、場所 八月十日 於広島陸軍補給廠

二、出席者

陸軍 二總軍兵器部長(主宰者) 佐野参謀 新妻軍務局課員 其ノ他 兵器、医務、砲台、監視哨関係者、目撃者等

海軍 呉廠砲塹部長、電気部長、火工部長、大野技中佐呉病一部長、技研 北川技中佐、二總軍 花岡参謀呉警砲術長、呉衛生部 酒井医少佐、横砲校 大野少

佐兵校教官、佐鎮轉聴者等

學界 理研 仁科、京大 荒勝、木村、杉原博士等

第三、議事大要

(陸軍側) 海軍調査以外ノ事項次ノ通

(イ) 落下傘投下点ト爆發点トハ別ナリ(宇品船舶部觀測)

區分	高度(米)	方位(密位)
落下傘	約九、〇〇〇	〇
爆發点	五五〇	七〇〇

(ロ) 日赤所在ノ「レントゲンフィルム」ハ全面的ニ感光ス、地下格納ノモノハ感高度薄シ

(ハ) 硝子ノ陰ニ在リシモノハ熱傷ヲ受ケザルモノアリ

(海軍側)

(イ) 敵機ノ運動及遠方ヨリ視タル状況 呉警砲術長

(ロ) 一般被害状況及其ノ考察 呉廠火工部長

(ハ) 落下傘附近短波發信機 呉廠電気部長

(ニ) 醫務関係 呉病一部長

(ホ) 呉鎮ノ採レル対策

説明シ多大ノ參考資料ヲ提供セリ

四、判決

(イ) 彈種、通常ノ爆薬又ハ焼夷剤ニアラズ 原子爆彈又ハ威力之ト同等ノ特殊爆彈ナルモノト認ム

(ロ) 爆發位置 護国神社南方三〇〇米、高度五五〇米

(ハ) 爆王、爆心地上ニ於テ六軒ノ平方程度ト推定スルモ 尚検討ヲ要ス

(ニ) 火傷原因 光線ノ影響ナルモ尚β線及X線ノ影響アルベシ、光線ノ持續時間ハ瞬間ニ非ザルモノノ如シ

(ホ) 火災ノ原因 熱戦ニ依リ引火シ易キ物質(藁、黒幕等) 發火シ火災ノ原因トナルコトアリ

(ヘ) 投彈法 必シモ落下傘ヲ伴ハズ

五、對策

(イ) 一般ニ達スベキモノ

(一) 警戒警報中ト雖モ敵機上空ニ近接ヲ知ラハ掩蓋アル屋外防空壕ニ退避スベシ

(二) 間ニ合ハザルモノハ遮蔽下ニ低キ姿勢トナルベシ、閃光後直チニ空地ニ飛ビ出スベシ

(三) 服装ハ露出部ヲナクシ、厚着ヲナシ白色ノ下着ヲ着スベシ

(四) 火傷薬ヲ所持セヨ

(五) 硝子窓ハ負傷ノ原因トナルヲ以テ撤去シ、日本建築等ハ半地下式ニ改造スルヲ可トス

(ロ) 軍関係対策

(一) 投下機ノ外觀ノ特異点ハ不明ナリ。投下時急旋回セリ

(二) 基地飛行機ハ有蓋掩体若ハ地下ニ格納スベシ

六、爾後ノ要調査事項

(イ) 爆圧ノ検討

(ロ) 火傷程度

(ハ) 野外ニ在リシ兵器彈藥ノ損傷状況

(ニ) 寫眞材料ノ感光程度

(ホ) 落下傘附發信器ノ研究

七、其ノ他

(イ) 荒勝（海軍）、仁科（陸軍）ノ兩戦研ニ對シ兩軍ハ優先、強力ニ援助シ、兩者緊密ニ連絡シ成果ヲ速ニ得ル如ク最大ノ努力ヲナスコトヲ要望セリ

(ロ) 被照射物質（同、鉄、亜鉛、食塩、砂等）ノ放射性トナクアルヤヲ調査ス

(ハ) 今後ノ兩軍調査事項ヲ交換ス（二總軍平野參謀、吳廠火工部長）

(ニ) 海軍ニテ空中寫眞撮影セハ陸軍ニ提供ス

F

軍事機密

八、六廣島市被害状況

昭和二十年八月十三日

中國軍管區司令部

目次

一、概況

二、空襲状況

三、軍部関係被害

四、一般被害

五、戦災後ノ状況

一、概況

今次爆撃ヲ蒙リタル廣島市ノ被害ハ破壊或ハ焼失セル建物約九十%死者約三萬以上（恐ラクハ六七萬ニ上ルベシ）ニ及ビ特ニ軍隊諸官公廳等ノ中枢指揮機關ノ機能喪失或ハ潰滅ニ依リ爾後ノ復舊ニ甚大ナル障碍ヲ来セルモ漸次増援機關終結整備セラレ應急復舊業務ハ着々進歩シアリ目下死体處理ノ大部ヲ終了シ復舊重点ヲ重軽傷者ノ本格的収容シ吸水、照明、交通、通信機關等ノ恢復ニ指向シアリテ概ネ八月中旬末概成セラルハ豫定ナリ

二、空襲状況

(イ) 氣象状況

1、空襲直前

晴天南風二米程度高雲少量視程一五—二〇浬

2、空襲後

晴天南風七—八米局部的ニハ風速一〇—一五米ニシテ且旋風起ル

尚火災延焼中市内中央部一部ニ少量ノ驟雨アリテ西北部ニハ局部的ニ相当多量ノ驟雨アリ

(ロ) 敵機ノ襲来並ニ警報發令状況

〇七〇九廣島縣警戒警報發令

豊後水道及国東[クニサキ] 半島ヲ北上セル敵六型三機ハ廣島縣西部ヲ經テ廣島縣中部ヲ旋回後〇七二五逐次播磨灘ニ脱去セリ

〇七三一廣島縣警戒警報解除

〇八〇六大松永監視哨ハ西北進中ノ敵大型二機ヲ發見〇八〇九更ニ同哨ヨリ三機ト訂正

(イ) 軍管區部隊人的被害差表ノ如ク細部別紙ノ如シ

人員被害状況一覧表					
階級別 区分	健在	戦死	戦傷	行方不明	計
将校	151	81	330	307	869
准下士官	315	80	375	342	1,112
兵	1,718	331	1,963	1,719	5,731
文官・雇傭人	131	93	305	409	938
合計	1,315	585	3,973	2,777	8650

(ロ) 臨時動員部隊被害状況

1、第二二四師團司令部ハ師團長、幕僚負傷時ニ參謀二名共相當重症ナリ

獣醫部長以外の部長ハ戦死セリ

2、第二二四師團隷下部隊タル歩三四〇、工兵隊、通信隊、輜重隊ハ第一期充足人員タル基幹要員ノ大部死傷ス

動員担任各補充隊罹災シ動員實施ニ支障アルモ一部ノ担任換ヲ行ヒ豫定ノ如ク二十日完結ノ見込ナリ

歩三四〇聯隊ハ編成地廣島オリシモ山口市歩兵第三補充隊ニ変更セリ

3、独混一二回旅砲兵隊、工兵隊、通信隊ハ第一期人員ノ充足ヲ終了シアリタルモ共ニ殆ント潰滅セリ

4、独工一一六大隊ハ總人員ノ約半数死傷セリ

5、独工一一七大隊ハ輕傷者ノミニテ人員戦用品共ニ異状ナシ

6、第一五四師團砲兵隊（護路）ハ殆ント潰滅セリ

(ハ) 砲兵補充隊罹災後、現況上左記部隊ハ中部軍本状況ニヨリ警戒警報ヲ發令セントスルヤ〇八一五爆撃ヲ受ク

(ハ) 爆發時ノ状況

1、B-29 三機（B-29 三機小型一機ト称スルモノ或ハB-29 一機ト称スルモノアルモ詳細不明）ハ高度約八千五百ニテ市東北方ヨリ進入投擲セリ投擲後左方向ニ反轉シ急遽炸裂點ヨリ離脱セルモノ、如シ（敵側放送ニ依レバ炸裂時飛行機ハ約一六秒間隔シアリト）

2、投下物ハ特殊大型爆彈ナリ（三個或ハ落下傘三落下セリト称セルモノアリ）

3、炸裂状況

遠距離ヨリノ自認者ノ言ニ依レバ最初「マグネシウム」燃焼時ノ如キ赤黄色ノ鋭キ閃光ト同時ニ火煙ヲ以テ全市ヲ叩キ伏セタルガ如キ状況ヲ呈シ次デ爆發點ノ上方ニ白煙上昇シ同時ニ黒煙累々ト捲上ルヲ認ム

4、本爆彈ノ破壊威力ヲ推斷スルニ家屋全壊半径約二―三軒半壊半径約四―五軒硝子窓破損半径約二十軒熱風ニヨル火傷半径概ネ左ノ如ク推斷セラル

表皮一瞬ニシテムケタル程度ノ大火傷 約二軒

普通程度ノ火傷 約三―四軒

熱風ヲ感ズル最大限 約一五軒

尚家屋ニ対シ若干ノ焼夷効力ヲ有シ市内数箇所ヨリ火災ノ發生ヲ見タリ

一、軍部關係被害

管區部隊ニ於テ再建セラレ度当該軍ニ連絡中ナリ

第一五四師團砲兵隊

独混一二四旅砲兵隊

(二) 軍管區司令部及地區司令部再編成ノ為其ノ大部ノ將校、下士官ヲ二十日迄ニ隷下各隊ヨリ補充スベク示達済ナリ

四、一般被害

(イ) 市内一般被害

1、人的被害

死者 約三萬

重輕傷者 約十萬

重輕傷者 約十萬

罹災者 約二十萬

其他行方不明 多数（死者大半ナルベシ）

負傷者ノ大半ハ火傷ニシテ普通爆彈ノ如ク鼓膜ヲ破リ眼球ノ飛出セルモノ皆無ナリ尚強力ナル光線ヲ發射セルモノ之ガ為失明セルモノナシ

2、物的被害

全焼 五五、〇〇〇

半焼 一二、五九〇

全壊 六、八二〇

橋梁全壊 約四

全焼セル主要建物

中國地方總監府、縣廳、市役所、控訴院、地方裁判所、地方専売局、中国海軍局等、大本宮跡、廣島城、護国神社、縣病院、通信病院、鐵道病院、比治山御便

殿ハ全壊

(ロ) 鐵道被害

1、人的被害

従業員約六〇〇名中死亡約七〇名重傷約一二〇名輕傷約二五〇名行方不明約七〇名

2、物的被害

焼失車輛 客車一〇 貨車四〇 電車六

大破 機関車一 客車三〇 電車二

小破 客車三五 貨車五五

焼失施設 広島駅、横川駅、横川電車區、横川自動車區、広島管理部

大破 廣島鐵道局、己斐駅、廣島操車場

其他橋梁、通信線若干被害アリ尚現在山陽線及藝備線ハ開通シアリ

(ハ) 通信被害

市内通信電話ハ全部焼失目下重要軍艦機關ノ復舊ニ勉メツヽアリテ十八日頃開通見込尚長距離電話ハ二十日頃開通見込警察電話ハ縣警察部ノ焼失ニヨリ縣下ノ通信連絡不能目下復舊ニ勉メツヽアリ

主要通信現業機關中消失又ハ大破セルモノ

廣島電氣通信工事局、同複送電氣通信工事局ハ同電話中繼所、同中央電話局等現業員ノ死傷者約七〇%ナリ

(二) 工場関係

市内輕工場四分ノ三全壊

宇品、江波方面ノ重要工場ハ被害ヲ蒙ラザルモ勞務者ノ被害甚大ナル為一時創業ヲ中止スルノ已ムナキ現況ナリ

輕工場ノ復舊ハ当分見込ミナク重要工場ニ在リテハ要員ノ就業ヲ得ハ直チニ生産ヲ開始セラルヽモ概ネ二週間後ト豫想セラル

主要ナル戦災工場左ノ如シ

東洋製罐、旭兵器、廣島瓦斯、帝人絹

重要物資ノ既ニ郡部ニ疎開シアリタル為殆ント被害ナシ

五、戦災後ノ状況

第二總軍ハ戦災直後之ガ復舊業務ノ為在廣軍官民ヲ直接指揮スルニ決シ船舶司令官ヲシテ之ガ業務ヲ統括處理セシメタリ船舶司令官ハ異常ノ熱意ヲ以テ之ヲ指導シ為二軍官ノ中枢機能多大ノ損害アリタルニ拘ハラズ恢復ハ着々進歩セリ軍官司令官ノ御着任ニ伴ヒ總軍ノ直接指揮ヲ解カレ本来ノ系統タル軍管區業務ニ轉移スルコトナリタリ而シテ船舶司令官ハ日々防衛會報ヲ實施シ其ノ対策ニ遺憾ナキヲ期シアリテ民心ノ動向ニ関シテハ特異事象ヲ見ズ逐次平靜ニ復シツヽアルモ今次敵空襲ニヨル慘状就中敵使用爆彈ニ対シテハ極度ノ恐怖心ヲ抱キアリ今後戦意ノ昂揚ニ勉ムルト共ニ防衛都市廣島市ノ再建ニ関シテハ大局的の見地ニ立チテ地方官廳ノ指導スルノ要アルモノト認ム

昭和二十年九月

廣島市ニ於ケル原子爆彈ニ関スル調査

(一般的調査)

附録 被害地寫真帖

呉鎮守府

内容

第一概説

一 経過

二 成果

第二詳論

一 敵機ト當日ノ事情

- イ 氣象狀況
- ロ 鉄器ノ行動ト防衛對勢
- ハ 爆発前後ノ敵機ノ行動

二 投下物

- イ 投下ノ時期ト爆発ノ時期
- ロ 落下傘附超音波発信器
- ハ 爆発物本体

三 爆発時ノ徴候

- イ 閃光ト熱感
- ロ 爆発音又ハ爆風
- ハ 爆煙又ハ塵煙
- ニ 敵機発見ヨリ爆発生起迄ノ実験談三例

四 被害發生ノ狀況

- イ 人体火傷
- ロ 家屋倒壊
- ハ 火災

五 被害ノ範圍

- イ 爆心ノ判定
- ロ 建造物及一般地物被害
- ハ 人的被害
- ニ 其他ノ生物ノ被害

六 爆発本体ノ究明

- イ 爆風威力ノ検討
- ロ 原子爆彈タルノ実証
- ハ 原子爆彈ノ原理の可能性

(附崙四葉添)

「終」

調査者

呉廠火工部
砲偵實驗部

報告作成者

海軍大佐 三井 再男
海軍少佐 神津 幸直
海軍技術大尉 西田 亀久夫

廣島市ニ於ケル原子爆彈ニ関スル調査（一般的調査）

第一概論

一、経過

八月六日米國機ガ廣島空襲ニ使用セル特殊爆彈ニ関スル調査ハ主トシテ、

- 一、爆發源ノ位置及使用數量ノ推定
- 二、危害効力ノ原因及其ノ程度ノ判定
- 三、市街地被害狀況ノ概観及其ノ特徴ノ把握
- 四、都市防衛対策ノ樹立

等、諸項ヲ基準トシテ現地踏査ヲ行ヒ其ノ蒐集セル資料ニ基キ数次ノ研究會又ハ調査ヲ行ヒ更ニ

五、敵機ノ行動及投下物ニ対スル事實調査

六、特殊爆彈實用時ノ各徴候ノ綜合判定

七、爆發物本体ノ各種可能性ノ検討

等問題ニ関シ可及的廣範圍ノ判定資料ヲ得。以下此等ヲ綜合統一シ若干ノ取捨ヲ加ヘテ報告トシテ取纏メタリ

尚本資料ノ根據トナシル調査、研究会及文献ヲ左ニ採録ス。

〔調査隊〕 八月六日一七三〇一二二〇〇 呉廠調査隊 五名

八月七日一〇三〇一一六〇〇 呉廠調査隊 十一ヶ班

八月八日〇九三〇一一四三〇 大本営海軍部調査團

〔研究会〕 八月七日一八〇〇一二二三〇 呉鎮調査隊

八月八日二〇〇〇一二三〇〇 大本営海軍部調査團

八月十日旅陸軍補給廠 二總軍、陸軍々務局、砲台監視哨、呉鎮、呉警、呉廠、一技廠、仁科、荒勝、木村

〔文献〕 ①八月六日廣島空襲被害状況調査報告概要（八月八日呉鎮機密第三九六）

②八月六日廣島空襲被害状況竝ニ対策（第二報一第四報）

③中野及板城探照燈台廣島爆撃目撃状況（呉海軍警備隊）

④八、六廣島被害状況（八月十三日中国軍管区司令部）

⑤敵新型爆彈調査ニ関スル意見（八月七日呉廠電氣實驗部長）

⑥廣島市爆撃ニ関スル報告（廣島文理科大学三村教授他二名）

⑦原子爆彈ノ可能性ニ就イテ（八月十三日京大野間氏講演）

⑧廣島市街地土壤β線放射能測定成績（八月十二日於西練兵場）

⑨中國新聞記事

（①乃至⑨番號ハ本文中ニ其ノ引用ノ出所トシテ附記セリ）

二、成果

イ 爆撃機數ハ大型三機ニシテ内一機ハ別行動ヲ取レル算大ナリ。

ロ 特殊爆彈ハ別行動ノ一機ニヨリ投下セラレ他ノ二機ハ落下傘附超短波発信器ヲ降下セシメタルモノノ如シ。

ハ 特殊爆彈其ノモノノ確實ナル爆發經過ハ不明ナリ。

ニ 超短波発信器ハ氣圧変化ニ依リ發信電波周波數変化スルコトヲ知レルモ爆發機構ト關係不明ナリ。

ホ 爆發ハ廣島市内護國神社南方約三百米高度約五百五十米ノ上空ニ於テ行ハレ閃光、爆風及各種放射線ヲ發生セリ。

ヘ 閃光及放射線ハ瞬時ニシテ半径に𪛗以内ノ人畜ニ被害ヲ与ヘ熱傷又ハ原子爆彈症ヲ發生セリ。

ト 爆風ハ閃光ヨリ遅レテ爆心ヨリ等方的ニ伝播シ半径に𪛗以内ノ木造家屋ヲ全壊セシメ遠ク十數𪛗迄硝子破壊ヲ生ゼシメタリ。コノ為人員ヲ爆風死圧死及破片傷等ヲ發生セリ。

チ 爆彈ノ焼夷力及倒壊家屋内ノ火氣ニ依リ爆發後數分乃至數十分ヲ経テ各所ニ火災發生セリ。当初ノ火勢劣弱ナリシモ防火機能消滅セル為被害地域ノ大部分ヲ消滅セリ。

リ 各種特徴ヲ綜合スルニ原子核破壊ノ莫大ナル發生「エネルギー」ヲ應用セル特殊爆彈ナルコト確實ナルモ實際構造ハ原理的推測ノ範圍ヲ出デズ。

第二詳論

一、敵機ト當日ノ事情

イ、氣象状況

晴天、高雲少量 視程一五一二〇𪛗 南風に米程度（④）

（雲量一 視界三〇𪛗 南々東風 ③）

ロ、敵機ノ行動ト防衛体勢（附面第一参照）

八月六日 〇七〇九 廣島縣警戒警報發令 豊後水道及國東半島ヲ北上セル敵大型三機ハ廣島湾西部ヲ経テ廣島縣中部ヲ旋回

〇七二五播磨灘ニ脱去ス

〇七三一廣島縣警戒警報解除

〇八〇六松永監視哨ハ敵大型二機ヲ發見

〇八〇九同哨ヨリ三機ト訂正（以上④）

〇八一四中野探照燈臺西條方面ニ大型機爆音を聴取ス

○ハ一五西條上空B29 進行方向西

(十二種及双眼鏡内同一視野ニ二機ノミヲ認ム中野上空通過時稍、南寄り高度七千間隔二百乃至三〇〇米 (以上中野探照燈台)

(西條上空一機ノミ発見) (板野探照燈台)

ハ、爆発前後敵機ノ行動

各種ノ所見一致セズ不適確ナルモ概ネ次ノ如シ

④ノ所見 B29 三機 (或ハ大型三小型一トイヒ或ハ大型一トモイフ) 高度八千五百東北ヨリ廣島上空ニ進入投彈シ後左方向ニ反轉翻脱セルモノ、如シ

③ノ所見 ○ハ一七B29 二機雁行中先頭機右旋回ス (中野ヨリ望見セルマヽノ光景) 旋回中投彈セルモノアリ最初ノ一機開傘セズ

後三機ノ落下傘開ケリ後續機ハ先頭機ヨリ一乃至二秒後レテ垂直旋回ニ近ク左ニ急旋回ス此ノ後續機旋回始メントスル時閃光アリ

③ノ所見 (板城探照燈台) ○ハ一七廣島重空ニテ変針ト思ハレル頃落下傘三箇投下七倍稜鏡ノ一分劃位ニ変針中ノB29 見ヘタル瞬間強烈ナル閃光ニ驚ケリ (板城ヨリ望見センママノ光景)

爆撃後ノ行動ヲ見タル者少々○ハ二〇板城探照等ハ右旋セル敵一機ガ東方ニ変針シ中野北方ノ雲中ニ消滅センヲ認メタリ

以上ヲ綜合スルト總機数ハ三機ナルベク及市内ノ觀察者或ハ一機ト云ウト三機ト話モ不同ナリ中野、板城両探照燈台其双眼鏡ノ視野狭少ニシテ三機中一機ガ高度或ハ進路ニ於テ別行動ヲ採ラン為別目標ヲ捕捉セント非ズルトノ推定モ可能ナリ之ハ前述ノ松永監視哨ノ初メ二機ト云ヒ後三機ト訂正センコトニモ關聯ス市内ニテ爆撃直前敵一機ノミヲ認メタルモノ三例アリ (⑤) 市中ニテ三機ヲ見タリト謂フモ落下傘三箇ト機数トフ關聯セシメ漠然ト事後判斷ヲ加ヘ居レルモノヲ見ルハ處々ナリ尚小型一機ガ爆撃直前南方ヨリ飛来シ低空ニテ頭上ヲ通過セリトノ意見モアリ (第二總軍參謀長談)

二、落下物

落下物ニ就イテハ落下傘附ノモノ三個トイフ意見一致シ (別々一箇傘不開ノモノアリトアル中野探照燈台所見アルモ概ハ投下用ノ付属具ナルヤモ知レズ)

其ノ他確實ナル意見モ居ナラズ而ルニ此ノ三箇ハ爆発物ナラザルコト判明セリ

イ、投下ノ時期ト爆発ノ時期

中野探照燈台 (③) ハ○ハ一七東方又ハ東北方ヨリ廣島市方向ニ侵入スルヤ前述ノ如ク先頭機右旋回シ落下傘投下後續機ハ一乃至二秒後レテ急左旋回セントスルヤ閃光ヲ認メタリ (附圖第二参照)

廣島文理科大生久間助教授 (⑥) ハ大學南側ヲ歩行中爆音ヲ聞キ上空東方約十度二三個ノ白ノ日光ヲ反射スル物体ヲ認ム。此ノ時其ノ西方ヤ久十五度ニ機影一個北進 (落下傘略同一高度) スルヲ認メ之ヲ目シツヽアリシニ暫時ニシテ閃光ヲ認メタリ

廣島女學学院専門學校生徒 (⑥) ハ海田市ニ於テ瀨野方向ヨリ一機飛来シ廣島市上空ニテ引續キ三個白キ物ヲ投下落下傘附ナルヲ確認シ間モナク閃光ヲ感ズ

以上ヨリ敵機ハ廣島市上空ニ侵入シ右旋回北進セル敵機ヨリ三個投下セルモノナルハ確實ナランモ爆発閃光迄ハ一乃至二秒トイヒ暫時トイヒ定ムベカラザレモ路上通行者ノ開傘ヲ目撃シテ閃光ヲ感ジタル迄ノ話説ハ少ナクモ数秒以上後ノ時間々隔ヲ認メザルベカラズ

ロ、落下傘附超短波発信器 (附録高真帖参照)

三個ノ落下傘附投下物ハ廣島市北方約十七村ノ安佐郡龜山峠附近山中ニ三個共殆ント毀損ナク発見セラレタリ

外貌ハ輕金屬性ノ円筒ニシテ一端ヲ傘ニテ垂直ニ懸吊シ下端ハ半球形ノ有機「ガラス」ニテ覆ハレ内部ノ時計式発停装置ヲ透視スルヲ得。円筒内部ハ強力ナル電池ト超短波発信装置ノ一郭ヲ有シ有機「ガラス」内ノ電気装置及其ノ末端ニテ外郭ニ露出セル氣圧板ト關聯シテ外圧変化ニ應ジテ周波数ヲ変化シツヽ強力ナル電波発信ヲナス本装置附圖第四ハ電路系統ハ附圖第四ノ如シ「アンテナ」ハ円筒ガ傘ニ接続スル端ニ出口ヲ有シ傘ト共ニ上方ニ展帳セラルヽモノヽ如シ傘ハ人造絹布製ナルモノヽ如ク展開直径十一・六米更ニ全重量三十一匁ナルヲ以テ推定落速毎秒約二米ナリ

本装置中ニハ爆発物ナリ特殊爆彈ト如何ナル關係ヲ有スルヤ不明ナリ

ハ、爆発物本体

本件ニ關シテハ何等実証的資料ヲ得ル能ハズ (判読不能)

時、認メタルモノ少々且落下傘ハ二機中ノ一機ヨリ行ワレ而モ廣島市東方高々度ニテ爆発生起時迄ノ時間的余裕少キヲ以テ爆発物投下ハ別行動ノ一機ニ依リ行ワレタル算大ナリ

三、爆発時ノ徴候

体験者ト望見者トヲ問ハズ瞬時ノ突發彈ナルヲ以テ事後ノ判斷不明確ニシテ所見一致セズ概ネ次ノ如シ

イ、閃光ト熱感

一般者ノ体験ハ「マグネシウム」ヲ空一パイニ燃燒サセタル如キ光景トイヒ或ハ青白色或ハ黄赤色ナリト称ス一般ニ強度ノ閃光ノ色感ハ直接印象ノ他補色残像ノ印象ヲ相加セラレ必ズシモ明瞭ナラズ著シキ幻感作用ナク眼症ヲ発熱セルコトナキハ光源巨大熱感ハ一般ニ閃光輻射ハ同時的ナル他ニ熱風ヲ相当後レテ感知セルモノアリ閃光ノ特徴ハ瞬時的トイフモ数々ノ事実ヲ綜合スルニ二乃至四秒位トイヘル説妥ナルベシ (②) 尤モ閃光ハ瞬時ニシテ熱感ノミ持續セルモノナルヤ知レズ

更ニ附記スベキハ中野探照燈台土中壕内ノ電話器ハ閃光ト同時ニ烈シキ雑音ヲ聞キ又身体ニ微弱ナル感電ヲ経験センコトナリ (③)

ロ、爆発音及爆風

爆風ハ何処モ例外ナク強烈ヲ感知セルモ著シク急峻ナル疎密波ト云ハンヨリハ暴風ヲ以テ巨大ナル運動氣流ガ近く衣服帽子ヲ吹飛バサレ或ハ柔軟ナル竹ニ至マデ完全ニ吹き倒サレ「トタン」板ノ廣ク散乱セル等著シキ特徴アリ

爆風ハ爆心ヨリ隔タルニ從ヒ閃光ニ後レテ傳播セルコト殆ンド例外ナシ例ヘバ廣島文理大学南部（約二軒）ニテ数秒（⑥）、十二軒隔テタル処ニテ約三十秒（②）ヲ経過シテ爆風ヲ感ゼリトイフ

聊カ奇怪ナルハ爆心ヨリ二軒以内ノ鷹野衛附近或ハ駅ニ至圏内ニ於テ爆発音ヲ聞カザリシトイフ者少カラズ爆発ト同時ノ破壊音ニ紛レタルカ爆発源ニ近キ為ノ特異現象カ或ハ全クノ心理的錯覚ナルカ不明ナリ（②）

但シ遠距離ノ地ニテハ明カニ山野鳴動ノ爆音ヲ聞キタリ（⑤③）

ハ、爆発マタハ塵煙

廣島市内ニ於テハ爆発ト同時ニ一面暗黒トナリ砂塵蒙蒙トシテ視界ニ米程度トナリ息苦シクナリ間モナク太陽ヲ認メ得タリト云フ（⑤⑥）遠隔地ヨリ望見セル状況ハ爆発後殊更ニシテ白煙トニ宙シ其ノ状初メハ白色ノ柱ニ茸状ノ笠ヲ戴キ次第ニ笠ヲ拡大シ上方ニ持上ゲ爆発後四分ニシテ頂高約六千八百米（呉ヨリノ實測）約八分後ニハ上部ノ笠ノミー團トナリテ上方ニ昇リ柱ハ崩レテ次第ニ笠ト分離セリ笠ハ白色ナレト淡紅色ヲ帯ビ柱ハ白ニ鼠色混ジリタリ砂塵ヲ包含セルモノナラン（呉ヨリノ観測）

ニ、敵機発見ヨリ爆発生起ノ望見談三例（⑤）

1、呉廠工員 於古江（広島西方約四軒）

敵一機広島上空ニ来リ光強キモノヲ投下（又ハ発射）セリ最初ハ照明彈ヲ投下セリト認メタルモ其ノ形状ハ煙突ヨリ出ル煙ノ輪ノ如ク次第ニ降下シテ漸次拡大スルト共ニ光カ増大ス直径廣島市ヲ蔽フト思ハレル程度トナリ炎ハ太陽ヨリモ明ルクナルヲ以テ危険ヲ感シ伏セリ

2、呉廠工員（三名） 於安佐郡伴村奥畑（廣島北西約十軒）

熱氣ヲ感ズル光線ヲ感ズル瞬間空ヲ見レバ敵機ヲ中心ニ快晴ノ空色ヨリ濃キ色ノ円形ノ波動ガ中ニ二箇所ノ白煙ヲ混ゼ大キク拡ゲルヲ望見ス直チニソノ場ニ伏スト同時ニ大音響ヲ一回聞テ廣島市方向ヲ白煙ノ立上ガルヲ認ム

3、呉校技術士官 於広島駅前停留所

南北ニ立並ブ列中ニテ直上ヨリ北寄りニ高々度三、右旋回中ノB29 ラシキ敵機ヲチラト認メタル瞬間其ノ後方（南側上空）ニ照明彈炸裂ノ如キ烈シキ閃光（〇、一乃至〇、二秒間）ヲ感シ照明彈投下ト判斷シ其ノ火炎ヲ避クル為駅建物内ニ退避セント数歩前進セントスルト背後ニ爆風ヲ受ケタルタメ以テ直チニ地面ニ伏セテ顔面ヲ覆フ

四、被害発生ノ状況

1、人体火傷（又ハ熱傷（②）（尚本件詳細ハ今回報告中ノ『医学的方面』ノ部参照）火傷発生ニ次ノ特徴ヲ認ム。但シ火災ニヨル二次的モノヲ除ク。

- （1）屋外ノ者殆ンド被害シ屋内又ハ物蔭ニテ免レタルコト多シ。
- （2）熱傷部ニ方向性アリ。即チ爆心ニ面セル側甚シク陰側ハ侵サレズ。
- （3）選考ニ氣付キクルト同時ノ二乃至四秒間位ニ皮膚面ニ熱氣ニ感ズ。
- （4）同一面内ニシテ白色部侵サレズ黒色部ノミ焦ゲタルコトアリ。
- （5）皮膚露出面甚ダシク厚ク被ハワレタル程被害ナシ
- （6）白色面ノ輻射線反射ニ依ルモノカ白壁前ノ草一様ニ両面焦ゲタルアリ。
- （7）同一部ニテモ熱傷度ニ強弱アリ

何レノ場合モ閃光発生ヨリ熱感ハ直チニ発生シ若干持續シ、其ノ短時間内ニ熱傷ヲ蒙レルコト明ラカナリ。但シ閃光発見後直チニ物蔭ニ入りテ火傷ヲ免シ、同一場所ニテ退避セガリシモノ火傷セル例少ナカラザルハ熱傷進行ニ若干時間ヲ必要トスルノ推定セラル。然シ之ハ爆心ヨリ遠距離ニテ比較的の火傷軽度ナリシ地方ニ適用セラルハコトナリ。

次に（1）乃至（6）ノ特徴ハ熱傷原因ガ完全ニ輻射的ニ存在セシコトヲ示スモノト云フベク、而モ被服面ノ色彩ニヨリ熱効果ニ選擇性ヲ示スコト或ハ反射性アルコト等何レモ注目スベキ特徴ナラン。爆心ヨリノ遠近ニ関セズ閃光ト同時ニ熱傷ヲ蒙レルコトモ熱輻射的ナル一証據ナラン。

ロ、家屋倒壊

閃光ト同時ニ何人モ伏臥人ハ退避スルヲ常トスレバ爆風ニヨル家屋等ノ破壊状況ヲ詳細ニ觀察セル者ナシ。唯轟然タル音響ト共ニ一瞬ニテ崩壊シ正氣トナレル時ハ殆ンド其下敷ナリシ実状ナリ。家内ヨリ直チニ脱出シ崩壊ノ下敷ヨリ免カレタル者殆ンド皆無ナリシハ倒壊作用ノ極メテ急速且威力的ナリシヲ知ル。蒙蒙タル爆煙砂塵ノ霽ルハヤ既ニ一切ノ破壊終了セルヲ皆謂ヘリ。

倒壊状況調査ノ際一方的強圧ニ依ルモノカ或ハ暴風のニ屋根ヲ持上ゲ風ヲ孕ミ柱梁ヲ分解セシメタルモノカ觀察ヲ詳ニセシモ爆心附近ハ必ズシモ此ノ區別ナク全壊半壊ノ限界附近ニ後者ノ例多キヲ見タリ。

ハ、火災

本特殊爆彈ニハ一般ニ著シキ焼夷性アリトハ認メ難キ実例多シ。熱傷著シク発生セルタメ焼夷彈ト誤解セラルハモ一般家屋ニ対スル火災ノ副次的原因ニヨルモノ多クヲ認メラル。被害直後市内ヲ踏査セシ検分ニハ倒壊後相當時間ヲ経テ発火セル記録アリ。爆発後三十分頃市中ヲ通過ノ際四、五百米置キ小火発生スルヲ認

メ後忽チ火災拡大スルヲ見タル例アリ。(⑤) 通常早クモ数分、遅キハ数十分ヲ経テ火ノ手ヲ見タリトセリ。

但シ、破壊ガ全ク豫想ヲ裏切リテ短時間ニ終結シ、且ツ多人数ノ家屋ニ一旦下敷ニナリ専ラ之ヨリ救出スルニ急ニシテ心ニ餘裕ナク更ニ火傷患者ノ惨憺タルアリテ市民ヲ絶望ナラシメタル等殆ンド積極的消火作用ヲ放棄セルコトニヨリ悉ク焼失セシメタル結果トナレリ。(其ノ一根據トシテ全壊領域ニハ例外ナク焼跡ヲ見、半壊領域ハ火災ノ拡大セルコト僅少ナリ) 被害地ヲ踏査シテ悉ク一瞬火災ナリシヲ想像スルハ真相ニ非ズ。例ヘヽ廣島城及大本営跡等類焼ノ眞ナキ建物ハ比較的爆心地下記ニ拘ラズ單ナル倒壊ニ終レル実例アリ。然レドモ特殊爆撃ニヨル火災原因モ無キニ非ズ寧々特異ナル現象トシテ注目ニ値スルモノアリ。例ヘヽ爆撃直後附近ニ見ルベキ火災ナキニ街路ノ電柱ガ局部的ニ虫喰ヒノ如ク火ヲ吹き居リ炭火ノ如ク次第ニ火ノ浸透シ行ク例或ハ木橋ノ橋桁、鉄橋ノ枕木等ガ燻レル事実(⑤) 或ハ附近ニ全ク火災ノナキ遠方ノ山林ニ点々山火事ヲ生起セル事等單ナル輻射熱トハ別ニ相當広範圍ニ撒布セラルハ火点ノ存在ヲ保証スルモノナリ。爆撃直後地上ニ蛍光ノ如ク青白ク弱キ光ヲ発スル物質ノ散布セラレタル事実ヲ市内泉邸附近及江波飛行場ニ聴取シ又已斐附近ノ木道家屋ノ棟木ニ同様ニ火點發生シ水ニテ容易ニ消滅セザリシヲ傳ヘタリ。(此ノ青白キモノハ皮膚ニ附着セバ水泡ヲ生ジ次第ニ蔓延シ痛感アリトイヘリ。同様ノ事ハ長崎ニテ聞ケドモ此ノ方痛ミナシトイ(リ) 熱傷發生ト同一原因ノ火災ヲシキモノアリ。藁屋根、黒幕等ガ爆撃直後発火セル実例アリ。(①)

五、被害ノ範圍

イ、爆心ノ判定

当初被害状況ヨリ威力ヲ推定センガ為、主トシテ爆発源ノ位置ト数量ヲ求メントシ廣島全市ノ各建物及樹木ノ崩壊状況ト其ノ方向性ヲ普ク調査フシニ何デモ爆心ガ唯一ニテ概ネ紙屋町ト相生橋ノ中間ニシテ護國神社南方三百米附近ナルコトヲ確メ得タリ。更ニ広島文理大構内及牛田方面ニテ熱輻射ニヨル木材表面炭化ガ輻射線障礙物ノ比較的明瞭ナル陰影ヲ畚メ居ルヲ発見シ之ヨリ略正確ニ輻射源ノ方向ノ仰角ヲ決定シ、同地点マデノ水平距離ヲ假定シテ爆心ノ高度ヲ求メ夫々五百八十米及五百十米ナル値ヲ得タリ。之ヲ以テ炸裂高度約五百五十米ト判定シ監視哨ノ報告ト一致スルヲ確カメ得タリ。

ロ、建物及一般地物ノ被害

(1) 概観スルニ爆心ヲ中心トシテ等方的ニ被害波及セルヲ認メラル 就中構造物トシテ統計的觀察ノ對象トナルハ日本式木道家屋ニシテ一全壊(完全ニ倒壊シ、殆ンド棟、梁、柱等ノ原構造ヲ留メザルモノ) ト半壊(一部崩壊又ハ著シク傾斜スルモ完全ニ分解シ居ラザルモノ) トノ領域ハ比較的明瞭ニ指摘シ得。其ノ境界ハ附録寫眞帖ニ示ス如ク爆心ヨリ半径約二軒ナリ。

半壊ト稱シ得ベキ限界ハ半径四乃至五軒、硝子窓破損ハ東方ハ海田市西方ハ草津、北方ハ壁附近迄ニシテ七乃至十三軒程度ナリ。

倒壊家屋ハ廣島城、大本営旧跡ヲ除キ全壊区域ハ殆ンド全部火災ニテ消滅セルモ、半壊区域ハ特殊ノ領域ヲ除キ火災ノ發生少シ。

(2) 洋式建造物例ヘヽ鉄筋「コンクリート」造リハ極メテ強力ナルコトヲ立証セリ。爆心数百米内ノ至近距離ノモノハ受圧面崩壊又ハ天井、梁、挫屈等ヲ生起セルモ、概ネ原型ヲ維持シ得タリ。(附録寫眞帖参照)

但シ窓、扉悉ク吹拂ハレ内部ハ火災ヲ發生セルモノ多シ。大ナル建物ガ燃エル際ハ屢々爆発音ヲ聞ケリト謂フ ⑤熱風ニヨル發生「ガス」充滿シ爆発燃焼ヲ起セルモノナラントノ説アリ。

(3) 橋梁ハ廣島市ニ多数アレドソノ構造上比較的被害少ナク、全壊ハ僅カカニ四箇所餘リト云エリ。爆心至近ニアリシ相生橋モ欄干崩落、一部陥没或ハ亀裂セルモ猶當分ノ使用ニ堪ヘル状態ナリ(附録寫眞帖参照)

(4) 船舶ニ関シテハ太田川所在ノ小型和船ニハ殆ンド被害ノミルベキモナク又字品方面ハ遠隔ニテ全ク威力圏外ニアリシ為其ノ例ヲ聞カズ

(5) 護岸工事ハ爆心ニ近キ相生橋ノ橋畔片方ニ多少ノ陥没ヲ生起セル他崩壊ノ跡ヲ認メズ

(6) 爆心ヨリ五百米附近ニテモ半土中式ニシテ丸太柱ヲ使用セル堅牢ナル防空壕ハ完全ニ爆風ニ堪エヘ得タリ。天井ヲ薄板等ニシテ渡シ、其ノ兩側ノ固メ不充分ナルモノハ何レモ天井陥没セリ(附録寫眞帖参照)

(7) 樹木ハ木道家屋全壊区域マデハ殆ンド全部板吹拂ハレ、大部分ガ転覆又ハ挫折セリ。爆心附近ハ直径四、五十糎ノ松、樟等モ吹折レ、泉邸附近(距離約千三百米) ニテモ直径三、四十糎ノ檜、直径二十糎ノ竹等ガ幹ノ中間ヨリ吹倒サレタリ。

(8) 電柱、架空線柱等、木造ハ固ヨリ、鉄塔構造式ノモノモ爆心ヨリ二軒附近迄倒壊又ハ屈曲セリ。

(9) 爆心ヨリ三・五軒隔テタル飛行場ノ無掩蓋体内ノ金屬製双発高等練習機(陸軍)ハ胴体構造円管及外鋸挫屈シ、掩体外ニアリシ小型戦闘機ハ座席部ト方向舵(布張) 炎上シ居レリ。掩体上面ヲ竹・網ニテ覆ヘルモノ良好ナルモノノ如シ

(10) 被害統計(④ニ依ル)

全焼	五五〇〇〇戸	全壊	六八二〇戸
半焼	一二六〇〇戸	半壊	三七五〇戸
(全焼ハ全壊又ハ半壊後全焼セルモノヲ含ム)			
焼失又ハ崩壊セル官公署、施設及工場			

中國地方總監府、廣島文理大、広島高師、縣廳、市役所、控訴院、地方裁判所、地方専売局、中國海軍局、大本営跡、廣島城、護國神社、縣病院、通信病院、鐵道病院、広島駅、横川駅、廣島鐵道管理部、中央電話局、東洋製罐、旭兵器、広島瓦斯、帝人人絹

ハ、人的被害

警戒警報解除中ニシテ全ク退避セルモノナク朝ノ始業時ニテ人員ノ都心集中行ハレタル後ナリシ為、人的被害ハ豫想以上ニ惨烈ヲ極メタ。八月二十五日現在ノ統

計 (⑨) ニ依レバ

死者 (男二、一一二五名、女二、一二七七名、性別不明三七七三名) 計四、六一八五名

行方不明 (男八五五四名、女八八七五名) 計一、七四二九名

重傷 (男九八五七名、女九八七四名) 計一、九六九一名

軽傷者 (男二、一九四七名、女二、三〇三二名) 計四、四九七九名

罹災者 (男一〇、三六四九名、女一三、二〇〇八名) 計二三、五六五六名

本統計ハ尔後ノ死亡者ヲモ含ムモノニシテ、所謂原子爆彈症トシテ研究中ノ難症發生シ幾多ノ問題ヲ提供スルモノナリ

人的被害ノ内内容及其ノ各種ノ特徴ハ本報告別冊「医学的方面」参照ノコト

ニ、其他ノ生物ノ被害

的確ニ此ノ見地ヨリ調査セル資料ナク詳細不明ナルモ、確實ナルニ、三ノ兆候ヲ挙グレバ次ノ如シ

- (1) 市内泉邸池中ノ鯉多数死亡浮上セリ
- (2) 太田川ノ分岐点附近 (白島) ノ河中ニハ魚類仮死状態ニテ浮游セリ
- (3) 比治山山林中ニテ屢々鳥類ノ屍ヲ発見セリ
- (4) 災害三日後市中踏査ノ際モ、人間以外ノ如何ナル生物ニモ遭遇セズ屍果々タルニ一匹ノ蠅等ヲ見カケズ
- (5) 災害後兩三日市中ニ起居セル者ハ虫蚊類ヲ経験セザリシトイフ
- (6) 市内到ル處ニ牛馬ノ死体ヲ発見セリ

六、爆發本體ノ究明

イ、爆風威力ノ検討

本爆彈威力ノ最モ顯著ナルモノハ廣大ナル爆風威力圏ナリ。家屋全壊半径約二軒トシテ、地上大藥爆發式ニヨリ通常炸藥量ニ換算セバ優ニ数万匁ヲ凌駕スベシ。米國モ八月七日「ホノルハ」放送ニヨリ TNT 二千匁ニ相當スル爆發威力アリト宣傳セリ。而モ敵機極メテ少数ナリシコトハ特殊ノ「エネルギー」源ヲ使用セルコト必セリトナス。

ロ、原子爆彈タル實證

米國ノ宣傳セシ如ク原子爆破「エネルギー」ヲ其ノ根源トスルトセバ、使用地域ニ顯著ナル放射能反應ヲ検知シ得ベキニ付、各方面ヨリ之ヲ實驗セラレタル處、何レモ爆心附近ニ其ノ兆候ヲ発見セリ

- (1) 日本赤十字病院 (爆心ヨリ約二軒) 所在「レントゲンフィルム」ハ全面的ニ感光シ居レリ、地下格納ノモノハ感高度弱シ。
- (2) 「ガイガー・ミュラー」計数管ニ依ル放射能測定ニ於テ次ノ成果ヲ得タリ

八月十一日 市内各地土壤ハ放射能 (回/分) (②)

護國神社 一二〇

中國軍管區司令部 四〇

西練兵場入口 九〇

八丁堀 三七

己斐橋 九〇

宇品運輸部 三七

「註」自然放射能ハ八、二七ナリ 阪大 浅田教授測定

- (3) 其ノ後市内所在ノ被照射物質 (鉄、砂、人骨等) ニ放射性アルコト判明セリ (⑨) ハ原子爆彈ノ原理的可能性 (⑦)

「ウラニウム」原子ノ原子核ヲ中性子ニテ破壊シ Sr TXe 及中性子ニ分解スルトキ、此ノ中性子ニ依リ更ニ次ノ U 原子ヲ破壊スル如キ連鎖反應ヲ生起セシメ得レバ莫大ナル「エネルギー」ヲ放出スル爆發反應ヲ考ヘ得。

然レドモ此ノ連鎖反應ヲ生起スル為、中性子ノ通過スベキ酸化「ウラン」ノ厚サニハ最小値アリテ、速キ中性子ヲ其ノ儘使用セバ酸化「ウラン」ノ量莫大トナルヲ以テ、適當ナル方法ニ依リ中性子ヲ反復反射セシメテ使用スルカ、或ハ中性子源ヲ水又ハ「パラ クオン」等ニ依テ包容シ極メテ遅イ中性子トシテ使用セシムレバ略實用的ナ量ニテ可能トナル。又何等カノ方法ニテ U (二三五) ノミヲ分離シ得タリトセバ遅イ中性子ニテ連鎖反應セシムルニハ一乃至一、五匁ニテ足ルコトモ推定セラル。

然レドモ以上ノ原理ヲ實現スベキ技術的ナル各種ノ問題ハ今後ノ研究ニ俟ザルベカラザル状態ナリ。

酸化「ウラン」ノ原子破壊ニ依リ得ラルベキ「エネルギー」ハ一匁當リ、約 1.6×10^{10} 「キロカロリー」ニシテ TNT 爆藥ノ約千七百倍ナリ。

「終」

附図第一 広島附近関係地名



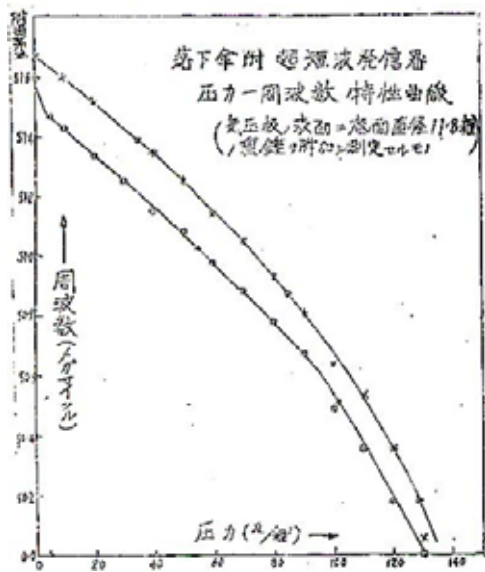
附図第二 中野探照燈台ヨリ敵機望見状況

(8月6日 0815頃ヨリ)

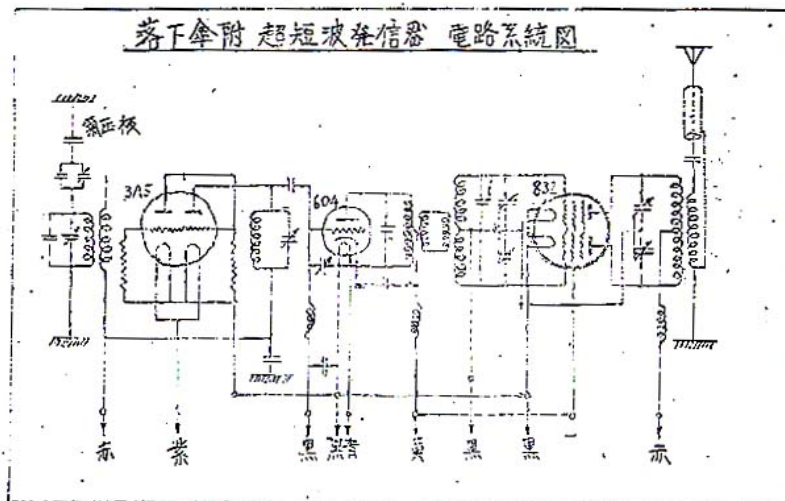


附図第三 落下傘付長短波発信器 圧力一周波数 特性曲線

(気圧板ノ表面ニ底面直径11.8 ㎝ノ重錘ヲ附加シ測定セルモノ)



落下傘付超短波発信器 電路系統図



衛生速報 第二號 昭二〇.九.二 中国軍管区軍医部

一、被爆地ノ人体ニ與ヘル影響

1、検査ニ供セルツ対象及其ノ行動概要

船舶練習部第一教育對

(イ) 石塚隊 八月六日夕刻ヨリ紙屋町ニ露營シ八月十一日ニ至ル間紙屋町一八丁堀一太田川ニ亘ル間ノ死体發掘其ノ他作業ニ服ス 十二日ヨリ宿營地ヲ貯金局ニ移シ之ヲ中心トシ一六日作業ヲ終ル

(ロ) 清水隊 八月八日八丁堀軍人会館九日天神町産業組合一〇日文理大校舎内ニ夫々轉々宿營シツ、宿營地附近ノ清掃ヲ行ヒ十一日夜半歸隊

(ハ) 本郷隊 似島ニ於テ患者ノ收容援助ヲ為シ特異作用ヲ受ケアラザルモノト判定セラル

何レモ特攻隊ニシテ二〇歳ニ充タザルモノナリ

2. 検査成績

赤血球沈降速度 (一時間値 ㎖)

隊	人員	0-10	10-20	20-30	30-40	40-50
石塚隊	65	46	12	3	4	1
清水隊	55	47	6	2	0	0
本郷隊	59	53	3	0	0	1

白血球数

疝気赤血球沈降速度ノ促進ヲ示スモノ（三〇耗以上）ニ就テ白血球ノ算定ヲ行ヒタルモ五〇〇〇以下ヲ示スモノナカリキ

一般身体検査

下痢、發熱ヲ示スモノアリタルモ原因明瞭ニシテ特ニ戰災ニ基因セル脱毛出血性素因、全身倦怠ヲ示スモノナカリキ

3. 結論

當時、爆心乃至特異作用ノ限界以遠ニアリシモノ直後ニ爆心ニ於テ作業セルモ特ニ異常ヲ呈シ来レルモノナカリキ

二、晩期障碍ニヨル死亡者ノ骨ノ放射能ニ就テ

晩期障碍ニテ死亡セル兵九名ニツキ其各部分ノ骨ヲ焼却シ骨灰一瓦ニツキ放射能ヲ檢シタルニ其ノ判定値ハ略器械ノ自然漏洩ト同一ナル値ヲ有ス（測定器械ノ誤差ノ範囲ヲ一〇％トシ）即チ放射能ハ有セザルモノ、如シ

尚前期死亡者ノ受傷地ハ三名ハ一〇四部隊營内（中心地ヨリノ東北約一杆）四名ハ中島国民學校（中心地ヨリ西南方約一杆）他ノ一名ハ不明ナリ

〔前回配布セン衛生速報第二号ヲ第一号ニ訂正相成度〕

衛生速報 第三號 昭和二〇.九.一二 中国軍管區軍医部

一、治療ノ状況

1、廣一宇品分院ニ於テ 30/VIII 来都築教授指導ノ下ニ行ヘル治療ノ成果左ノ如シ

ソノ後ノ成績ハ目下調査中成リ

九月四日現在

治療法	治療数	成果			摘要
		良好	不変	不良	
自家輸血	31	16	4	11	良好十八 脱毛停止 喀痰輕快 鼻出血停止 溢血斑減少 ヲ示ス
自家輸血 カルシウムビタミン注射	15	12	2	1	
自家輸血 カルシウム注射	5	1	1	3	
自家輸血 ヴィタミン注射	3	1		2	
カルシウムヴィタミン注射	2		2		
カルシウム注射	2	1	1		
計	58	31	10	17	

2、5/IX 北京大學久保教授ノ談ニヨレバ同教授ハ戸坂高杜國民學校（廣一分院）ニテ原子爆彈症患者ニ對シ「ツベルクリン液（一〇〇〇〇〇〇〇〇倍希釈）」ヲ連日皮下ニ、一耗宛注射シ經過頗ル良好ニテ四六例中總ベテ輕快セリト目下宇品分院ニ追試ヲ依頼シアリ

二、原子爆彈症患者ノ骨ノ放射能ニ就テ

原子爆彈症ニヨル死者ノ骨灰ニツキ其ノ後放射能ヲ檢セルニ僅カニ放射能ヲ認メ得ルモノ一例アリタリ

受傷場所ノ放射能ノ關係左ノ如シ（前回報告ノモノモ含ム）

骨灰「一 g」ノ放射能測定値

氏名	受傷場所	爆心ヨリノ距離	器械ノ自然漏洩	測定値	測定日	放射能ノ有無
〇〇	一〇四部隊	一杆	0.060	大腿骨 0.030	31/VIII	ナシ
			0.071	脛骨 0.071	31/VIII	ナシ
			0.071	骨髓 0.066	31/VIII	ナシ
			0.071	胸骨 0.062	31/VIII	ナシ
			0.071	脊椎 0.076	31/VIII	ナシ
			0.071	肋骨 0.083	31/VIII	ナシ
〇〇	不明	不明	0.071	0.083	1/IX	ナシ
〇〇	一打撲傷 中島國民校	八〇〇米	0.071	0.062	1/IX	ナシ
〇〇	一打撲傷 中島國民校	八〇〇米	0.071	0.062	1/IX	ナシ
〇〇	一〇四部隊	一杆	0.071	0.066	1/IX	ナシ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.071	0.066	1/IX	ナシ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.060	0.060	2/IX	ナシ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.060	0.060	2/IX	ナシ
〇〇	一〇四部隊	一杆	0.102	0.153	5/IX	アリ
〇〇	中島校	八〇〇米	0.113	0.120	5/IX	ナシ
〇〇	轅町國民校	一杆	0.113	0.113	5/IX	ナシ
〇〇	不明	不明	0.110	0.120	5/IX	ナシ
〇〇	一〇四部隊	一杆	0.110	0.100	5/IX	ナシ
〇〇	自宅ノ間	一杆	0.110	0.094	5/IX	ナシ
〇〇	不明	不明	0.062	0.071	31/VIII	ナシ
備考	測定誤差ヲ一〇％トス					

衛生速報 第四號 昭二〇.九.一二 中国軍管區軍醫部

一、晩期障害患者ノ状況

宇品分院患者中各種治療ノ効ニ依リ（治療法トノ関係ハ調査中）稍輕快ニ赴ケルモノヲ認ムルニ至レリ 本日調査セル七名ハ解熱シ白血球増加シツヽアリ

氏名	白血球数	
	九月五日	九月八日
〇〇	1800	6400
〇〇	1300	2200
〇〇	700	3600
〇〇	1000	2900
〇〇	1900	3900
〇〇	1300	4900
〇〇	900	2800

二、病理所見

4/IX以後 8/IX午前迄ニ五例ノ剖検例アリ

前回所見ト異ル所左ノ如シ

1、出血性素因特ニ肺臓ノソレハ著シク輕減ス 大腸ノ壊死性炎モ亦同様減少ノ傾向アリ 2、腎臓重大著明ニシテ貧血性脂肪沈着 高度ナル所謂リポイド腎症（ネフローゼ）ナル者ニ例ヲ認ム

尚、腎盂ニ出血シ為ニ血尿ヲ出スモノ三例アリ

3、皮膚ニハ着色著シカラザルモ内臓、漿膜、粘膜ニ黄疸ノ中等度ナルモノ一例アリ

4、全身血液ノ凝固性度ハ増加セルモノノ如クヌリポイド含有量ハ減少シツヽアルモノノ如シ

以上即チ

出血性素因特ニ肺ノ出血性水腫ニヨル死因ノ者次第二減シ全身ノ新陳代謝障礙ト考ヘラレル腎症ニ例ヲ見得タリ

衛生速報 第五號 昭二〇.九.一二 中国軍管區軍医部

一、広島市内ノ放射能ニ就テ

イ、空氣中ニ於ケル放射能ノ強サ

自動車上ニテ市内ノ各所（附図第一）ニ就キ放射能ノ強サヲ主トシテ東西ノ線ニ沿ヒ測定セルニ第一表ノ如キ値ヲ得タリ

八月中旬ノ測定値ニ比シ其ノ値減少ニ逐次放射能ノ減弱シアルヲ認メ得之等ノ値ヲ爆心地ヨリノ距離ヲ横軸トシ放射能ノ強サヲ縦軸トシ図示セハ附図第二図ノ如キ結果ヲ得（南北ノモノハ前同測定ノ再記ナリ）

尚此ノ値ハ主トシテ地表ヨリノγ線ノ強度ヲ示スモノニシテ地上ニ家屋ヲ構築セル際ノ室内ノ強サニ畧匹敵シ人体ニ障礙ヲ與フル量ト百倍以上ノ程度ノ差アリ

再ビ広島駅日赤病院ヨリ依頼ニテ全所ノ放射線ノ強サヲ測定セルモ何レモ自然漏洩ノ値ヲ超ヘズ

ロ、翠町ニ於ケル特異ナル現象

爆発直後翠町（宇品広島高校附近爆心地ヨリノ距離三、五軒）畑中ニ落下物アリタルトノ報ニ接シ同地畑中ノ放射能ヲ測定セルニ局所的ニ自然漏洩ノ三倍程度ノ放射能ヲ認メタリ 落下物ノ性状ニ関シテハ不明ナリ

二、人工放射能物質ニ就テ

爆発ニヨリ発生セル中性子ニヨリ各種物質ハ人工放射能ヲ有スルニ至ル

中性子ノ強度分析ヲ知ル目的ヲ以テ比較的人口放射能ノ壽命長キモ硫黄ト磷ニ就キ其ノ強度ヲ測定セリ 硫黄ハ碍子ノ他絶縁材料ヲ磷ハ焼跡ヨリノ人骨ヲ用ヒ其採取場所ハ附図第三ノ如シ 硫黄ハイ中中性子ニヨリ $_{16}\text{S}^{32} + \text{ON}' = _{15}\text{P}^{32} + \text{H}'$ ニテ放射性磷トナリ $_{15}\text{P}^{32} \rightarrow _{16}\text{S}^{32} + \beta$ β線ヲ放出シ再ビ硫黄トナル 其ノ半減期ハ十四日ナリ

磷ハ遅イ中中性子ニヨリ $_{15}\text{S}^{31} + \text{ON}' = _{15}\text{P}^{32} + \text{H}'$ ニテ放射性磷トナリ $_{15}\text{P}^{32} \rightarrow _{16}\text{S}^{32} + \beta$ β線ヲ放出シ硫黄トナル 其ノ半減期ハ同ジク十四日ナリ

之等ノβ線ノ強度ヲ測定スルニ第二第三表ノ如キ値ヲ得タリ

爆心地ヨリノ距離ヲ横軸トシ放射能ノ強サヲ縦軸トシ図示セハ附図第四ノ如クナリ 何レモ距離ニ應ジ急速ニ強度弱ルモ磷ノ方稍曲線急ナリ

尚詳シキ値ニ関シテハ東京ニテ再測定ノ予定ナリ

三、広島西方地区ノ放射能ニ就テ

先ニ仁科博士ノ採取セル高御附近ノ土ニ放射能多カリシ事ト當日ノ風速風向同地区ニ降雨アリタル事實ヨリ（氣象狀況ニ関シテハ目下調査中）推定シ同地区ニ爆発物ノ灰残骸ノ沈積セル虞アルニヨリ同地区ノ放射能ヲ附図第五ノ位置ニ於テ測定シ第四表ノ値ヲ得タリ

高御附近ヲ中心トシ東北―南西―西北―東南ノ断面図ヲ描ケハ附図第六ノ如クナリ等放射線曲線ヲ想定セハ附図第六ノ如シ

尚同地区附近ノ桶中ノ土ノ放射能（主トシテβ線）ヲ測定スルニ $g\gamma$ ニテ一〇倍以上ノモノアリテ降雨ニヨル沈積ヲ想像セシムルモノアリ 之等ノ意義ニ関シテハ後ニ報告スルモ先ズ人体ニ障礙ナキモノト推定サル

第一表

測定地點	放射能強度 (測定値／自然漏洩)
1. 柳橋	×1
2. 中国新聞社	×1.7
3. 福屋デパート	×1.5
4. 紙屋町	×2.6
5. 護国神社鳥居	×3.9
6. 電話局西文局	×1.3
7. 天満町	×1

第二表

碍子硫黄採取場所並ニ測定値 γ0.10 0.06

場所	爆心ヨリノ距離(km)	測定値	場所	爆心ヨリノ距離(km)	測定値
1. 柳橋	1.14	0.06	16. 市廳	0.98	0.067
2. 中国新	0.98	γ0.11	17. 駅東	1.76	
3. 福屋	0.68	γ0.11	18. 駅	1.87	γ0.107
4. 紙屋町	0.17	0.11	19. 比治山下	1.67	γ0.113
5. 鳥居	0.06	0.05	20. 住吉橋	1.67	
6. 相生橋	0.08	0.09(0.06)	21. 観音橋	1.75	γ0.12
7. 左官町	0.18	γ0.1	22. 西大橋	2.1	γ0.13
8. 電話局	0.98		23. 古江	3.0	γ0.107
9. 三篠橋	1.8	0.06	24. 己斐橋	2.08	
10. 横川橋	1.17		25. 小河内橋	1.72	γ0.11
11. 二病	0.9	γ0.10	26. 天満橋	1.30	γ0.10
12. 一病	0	γ0.14	27. 白島神田橋	1.85	γ0.10
13. 元安橋	0.17	0.05	28. 104 部隊	1.0	γ0.10
14. 袋町校	0.50	0.08	29. 聯隊区司令部	0.63	
15. 楠	0.75	0.088	23. ガード (白島)	1.46	γ0.11
備考 自然漏洩 其ノ他0.06 γ0.10					

第三表 焼死者骨採取場所並ニ測定値

場所	爆心よりの距離	測定値
1. 鳥居南	0	γ1.6
2. 細工丁	0.07	γ1.46
3. 紙屋町	0.25	γ1.23
4. 一病	0.53	γ1.45
5. 福屋	0.68	
6. 八丁堀	0.70	γ6.25
7. 天満町	1.28	[判読不能]
8. 西大橋	2.0	
備考 自然漏洩 其ノ他0.10 γ0.06		

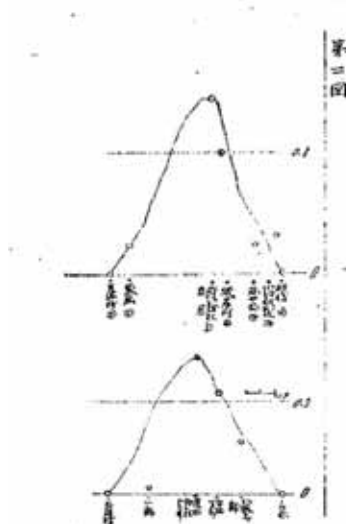
第四表

測定値	放射能ノ強サ (測定値／自然漏洩)
イ. 己斐橋	×1.4
ロ. 己斐西方踏切	×2.4
ハ. 高須	×3.
ニ. 高須上野ガーデン入口	×3.6
ホ. 草津踏切	×1.9
ヘ. 井口踏切	×1.3
ト. 五日市	×1.
チ. 高須広中新開	×1.5
リ. 古江広午新开	×1.2
ヌ. 高須踏切	×2.6
ル. 福蔵寺	×4.2
ヲ. 福蔵寺裏山	×5.1
ワ. 山田	×1.9
カ. 国有	×1.
コ. 己斐上町	×1.
タ. 田方北方1.5 軒	×1.8
レ. 八幡村吉田	×1.

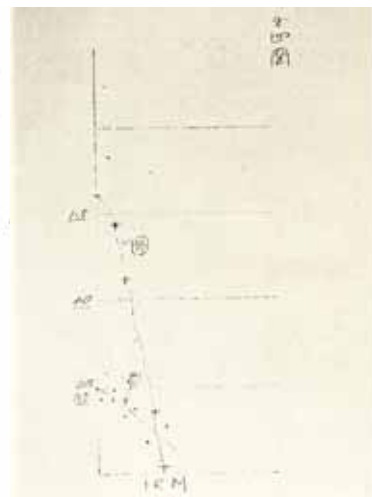
第一图



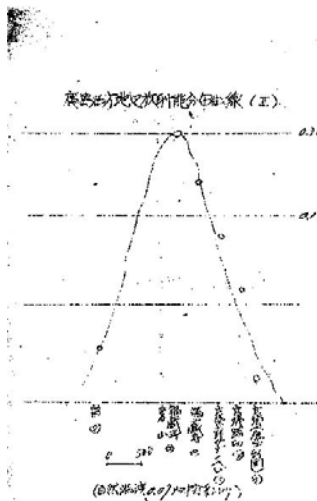
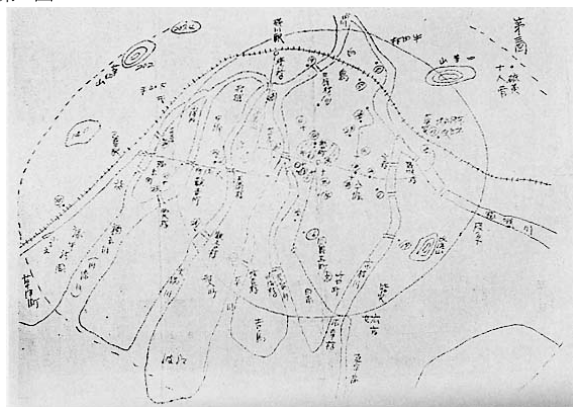
第二图



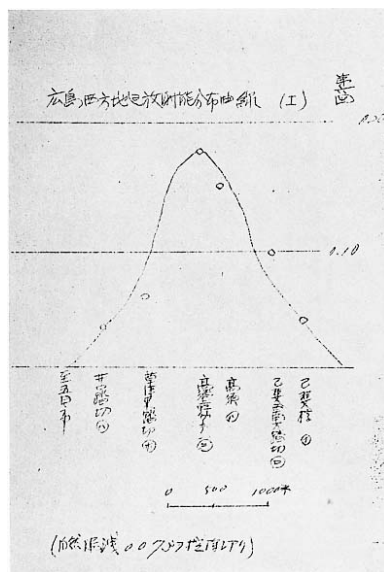
第四图



第三图



附图第五图



一、廣島地方ノ放射能ニ就テ

先ニ報告セル広島西方地区ヨリ土ヲ採取シ其ノ放射能ヲ検スルニ

ワ 山田峠土 ×1.2

ヲ 福蔵寺裏山〇ノ土 ×3.1

ル 福蔵寺庭土 ×4.6

ル 福蔵寺樋ノ土

ホ 草津町樋ノ土 ×1.2

コ 上野が一でん樋ノ土 ×4.9

ヨ 己斐上町樋ノ土 ×1

タ 古田町田方樋ノ土 ×2.3 (土ノ目方ハ1 g γ)

自動車上ニテ測定セル値ト平行ス

但シ樋中ノ土ニ著シク放射能ノ大ナルモノアルハ爆発物ノ灰等ノ沈積ニヨルモノナルベシ

二、爆発後外来者ガ作業シ晚期障碍ヲ呈セル土地ノ放射能

爆発後早期ニ爆心地区ニ作業セル人員中ニ晚期障碍ト同様ノ症状ヲ起セル者存在セル事實ハ其後ノ情報ニ依ルニ必ズシモ否定シ得又後述ノ理由ニ依リ理論的ニモ承認シ得ザルニ依リスル患者ノ発生セリト言フ土地ニツキ 10/IX放射能ヲ検スルニ

測定値	爆心ヨリ ノ距離	放射能ノ強サ (測定値/自然漏洩)	測定値	爆心ヨリ ノ距離	放射能ノ強サ (測定値/自然漏洩)
一〇四部隊	0.8-1.0 軒	×1.3	護国神社境内	0.3 軒	×3.5
中国軍管区	0.8-1.0 軒	×1.1	爆心地附近		×3
寺町	1 軒	×1.3			

ニシテ現在人体ニ障害ヲ与ヘル量ノ 1/100 以下ナルヲ以テ考慮ノ必要ナシ

三、原子爆弾ニ対スル考察

原子爆弾ニヨル機械的障害竝ニ熱傷ハ別トシ放射線 γ 線ニヨル障害ニツキ考察セントス 爆発ニヨリ多量ノ中性子竝ニ γ 線放射セラレ中性子ハ各種元素ニ作用シ各種ノ人工放射性物質ヲ形成セシメタリ之等ノ人工放射性物質ハ短キハ数秒長キハ数十日ニ達スル半減期ヲ以テ β γ 線等ヲ放射シツハ減弱ス 而シテ斯ル中性子ノ作用ハ零距離ノ自來ニ逆比例スルニヨリ爆発高度ヲ五〇〇米ト推定セバ爆心地ヨリ五〇〇米ノ地点ニテハ強度 1/2 ニ一軒ノ地点ニテハ 1/5 トナルナリ從ツテ人間ハ爆心地附近ニテハ最も強く距離ガ遠ザカルト共ニ二次第二弱ク中性子竝ニ一時的ニ発生セル γ 線ノ照射ヲ受ケタル事ナリ造血器官ヲ始め其他ノ器官ニ障害ヲ生スルニ至レリ

中性子ガ多量ニ放射セラレタルコトハ土地ノ放射能ノ増加セルコト爆心附近ニテ死亡セル人間ノ骨ガ燐ノ放射能ヲ有スル事ニ、三ノ物質ニ尚放射能ヲ照明シ得ル事ノヨリテ明ラカナリ

爆発當時ハ殆ント總テ物質ガ放射能ヲ有シ之等ヨリ半減期ニ應ジタ多量ノ β γ 線ノ放射セラレタル事ヨリ考クレバ爆発直後ニ、三日ノ間ハ爆心地ニ於テ作業シタル人間ニ β γ 線ニヨル障害ヲ生シタラン事ハ肯定シ得ベシ

擬爆時廣島ニ在リシ人間ノ障害ヲ考フルニ中性子 γ 線ノ障害ヲ大イニ受ケタル人間ハ熱傷機械的損傷モ大ニシテ即死或ハ比較的早く死亡シタル者ナラン 之ガ為爆心地ノ死体骨比較早期ニ死亡セル人間ノ中幾何カニ骨ノ放射能ヲ證明シ得タルナリ

中性子 γ 線ノ障害ヲ受ケ中等度ノ熱傷創ヲ有セシモノハ其ノ次ノ時期ニ死亡シタルモノナルベシ 前回ノ調査 (13/VIII—19/VIII) ニテ受傷セル者ノ赤血球ノ著シク少ナカリシハ此ノ例ニ属シタルモノナルベシ

次イテ距離ノ關係受傷時ノ位置等ニ依リ外部的損傷ヲ受ケテオラズ主トシテ一時的二次的 γ 線ノ照射ニ稍多量ニ受ケウルモノハ斯ル輻射線ハ幼若或ハ分裂期ノ細胞ニ強く作用スルガ為人間ノ機能上障害直チニ發現セズ一定ノ潜伏期ノ後ニ各種器官ノ Disfunktion ノ状態ヲ呈シ所謂晚期傷害トシテ認めラレルニ至リタルナリ

之等ノ症状ハ死体ノ骨ニ殆ント放射能ヲ證明シ得ザリシ關係上中性子ニヨル人体内元素ノ人工放射性物質ニ変化シタル事ニヨル慢性障害ニアラズシテ主トシテ爆発時ニ受ケタル γ 線ニヨル急性障害ナルベシ

然シテ此ノ急性主外ノ派生ニハ個人ノ抵抗力受傷後ノ休養給与ノ關係若干ナガラ距離ノ差遮蔽物ノ影響アリテ同一部隊同一内務班内ニテ或ハ同一家庭内ニテ死亡セルモノヨリ発病セザルモノニ至ルマデノ変化ヲ生シ尚症状發現セルモノニテハ輕重ノ差ヲ生スルニ至リタルモノナルベシ

更ニ外来患者等ニスルニ更ニ爆心地ヨリノ距離稍遠キモノニハ白血球ノ減少ヲ認ムルノミニテ他ニ症状ナキモノアリ又抵抗力強キ者ニテハ白血球減少ハアリタルモ骨髓ノ再生ヨリ不知ノ間治癒シタルモノアルベシ

更ニ爆弾ノ一部ノ破片?ノ落下 (翠町ノ畑) ニヨリ地位的ニ稍放射能ノ高マリタル土地ヲ生シタル事モアルベシ

又同日ノ風向（弱キ東風カ？）ニヨリ爆発物ノ灰様ノ分裂産物ノ一部高須方向ニ流サレ——〇〇時ヨリ約二時間ニ亘リ降雨ノ為同地附近ニ沈積シ放射能ノ高マリタル事實等モ存在スルモ其ノ後ノ降雨風等ニヨリ之等ノモノモ略均等化サレ測定値ノ示ス如ク現在ニテハ放射能ヲ有セザルニ至リウルモ当初ハ若干ノ影響ヲ人体ニ與ヘクルヤモ計ラレズ

以上ヨリ推定的ニ結論ヲ下セバ

- 1、骨ガ人工放射能ヲ得ル程度ニ中性子ヲ受ケタル人間ハ他ノ原因或ハ他ノ原因トノ共同ニテタラバ死ニ至リタルモノナルベシ
- 2、晩期障害ヲ發生セルモノハ主トシテ一時的二次的 γ 線ノ障害ニヨルモノナルベシ骨ニ放射能ヲ與ヘザル程度（前回報告ノ如ク測定誤差ヲ一〇%トシ）ノ中性子ガ障害ヲ與ヘタルヤ否ヤハ更ニ研計ノ予定
- 3、晩期障害發生ノ時期ノ輕重ハ γ 線ノ硬サ線量人間ノ抵抗力再生能力ニ關係スルモノニシテ前者ニ關シテハ更ニ研計ノ予定ナルモ新患ノ發生ハ次第ニ減シ輕症型トナリ死亡率ハ次第ニ減少スル見込ミナリ
- 4、広島市内ニ於ケル生活ノ安全性ニ關シテハ今後顧慮ノ要ナシ特ニ外来者ガ入廣ニヨリ今後障害ヲ得ルガ如キ事ハ絶対ニ否定シ得
- 5、広島西方地区ニハ現在以後ハ人体ニ障害ヲ與ヘルガ如キ事ナシ

桶中ノ土ノ放射能ハ相當ナルモ斯ノ如キ一部ノ強キ放射能ハ土量ノ少ナキ事距離ノ關係ヨリ心配ニ及バズ不安ナレバ其ノ土ヲ處分スレバ可ナリ

四、将来ニ對スル意見

γ 線ノ硬サ線量ハ尚研計スルモ将来起コリ得ル障害トシテ想像シ得ルモノハ

- 1、白内障ノ發現 數ヶ月以上後
- 2、生殖異常

男子ニ手ハ名用ナラザルモ女性ニ手ハ月經異常ニ留意スル要アリ（当初二、三ヶ月ハ卵ノ成熟程度ノ關係ヨリ發現シ得）

十一、二月以後無月經ノ者アラバ γ 線障害ヲ考慮シ得流産モ生ジ得ルモ他ノ因子ニヨル事アルヲ以テ明カナラズ

- 3、不明瞭ナル點ハ帰校後檢討ノ予定

衛生速報 第九號 中国軍管区軍医部 二〇.一〇.二三

原子爆彈症ニ關スル研究

目次

- 一、緒論
- 二、症状
- 三、血液所見（末梢骨髓）
- 四、剖検所見
- 五、診斷
- 六、経過並豫後
- 七、治療法
- 八、總括並考按

一、緒論

昭和二十年八月六日廣島市ニ投彈セラレタル原子爆彈ニ依ル人的損傷ハ八月六日當日或ハ當日以降一週間内外ニシテ死亡セシ患者ト爆撃後概ネ二—三週日ヲ経タル後亜急性症状惹起シ死亡セル患者ト二種類ニ之ヲ區別シ得ベシ

抑モ原子爆彈ノ如何ナルモノナルカヲ解セナル限り之ガ言ワハ避クベキモノナランモ前者ニ屬スル死亡者ハ原子爆彈爆発ニ伴ヒ發セル熱線ニヨル火傷並ニ其他不明ナル放射性物質爆風等ノ共同作用ニヨル所謂「ショック死」或ハ中毒死ト考ヘラルベク後者ハ所謂不明ナル放射性物質ノ徐々ニ作用シ症状ヲ惹起セルモノニシテ火傷トハ全く無關係ニ経過セル興味アル症状ナリ

本報告ハ主トシテ校舎ニ屬スル患者五百余例ノ臨末経過並ニ血液学的方面ヨリノ檢索（三五〇例）及剖検例（四例）ヲ併セ考察シタルモノニシテ現在尚受傷當日ヨリ五十日ヲ経過せるノミニシテ数多誤謬ノ多カラシコトヲ眞ルハモ取敢ヘス研究ノ結果ヲ述ベテ大方ノ御批判ヲ仰ガントス

二、症状

（1）八月六日原子爆彈爆発當日廣島市ニ在住シ然カモ爾今二—三週間症状全く無キ者モ原子爆彈爆発直後嘔吐或ハ嘔氣ヲ際シタルモノ或ハ発熱三八.〇—三九.〇度ニ及ヒタルモノ多數ナリ

然ルニ其後全く症状ナク日常生活ニ支障ナカリシ者カ漸次全身倦怠感高度疲労感ヲ覺ユルニ至リ顔面蒼白トナリ心悸亢進ヲ訴ヘ次デ出血性素因トシテ身体諸所ニ散発スル皮下溢血斑ハ衄血齒齦出血ヲ認ムルニ至リ加フルニ脱毛（主ニ頭髮）ヲ招来シ更ニ高熱持續スルニ及ビ粘膜ニ潰瘍性病変ヲ来シ食思不振著明ニ加ハリ死ノ轉帰ヲ執ル者多シ

下痢ハ水様性或ハ血性ナル者アルモ亦便秘ニ傾クモノモアリテ一定セズ 出血傾向ノ著シキモノニアリテハ血尿子宮出血月経經過多ヲ認ムル者モアリ 黄疸ハ必発ノ症候ニ非ザルモ余ノ觀察セシ死亡症例七五例中四例ニ著明ナル黄疸ヲ認メタリ

(2) 爆心地ヨリノ距離ノ関係ニヨル障碍ノ差異

概ネ白血球算定ニヨリ「ウラニウム放射性物質ノ人体ノ影響ノ差異ヲ論セルモノナリ 爆心地ヲ護国神社南方三〇〇米地上五〇〇米ノ地点トシ概ネ該地点ヲ中心トシ半径一糎圏内ニ居住セル者（一九八例）ハ悉ク著明ナル白血球減少症（三〇〇—三、〇〇〇）半径一糎以上二糎圏内ニ居住セル者（一〇二例）ハ約四〇%（四九例中一九例）ニ軽度ノ白血球減少症ヲ認メタリ

著明ナル症状惹起セシ者ハ概ネ半径一糎圏内ニ居住セル者ニ多ク一糎以上に糎圏内ニ居住セル者ハ概ネ全身倦怠疲労感ヲ訴フル者多ク他ノ一般症状具備セル者ヲ多シニ糎以上三糎圏内ニ居住セル者即チ白血球減少著明ナルサル者ハ症状殆ンド無キ者アリ上記ハ個人的差異ニハ触レズ概ネ一般的ニ取扱ヒタルモノナルモ爆心地ヲ距離ノ距離ニ於テモ方角ニヨリ白血球減少症並ニ一般的症状ニ可成相異アルハ「ウラニウム放射性物質ノ同質性ニ放散セズ即チ放射性物質ノ濃淡ノ存在スルヲ窺ハシムヘシ

(3) 爆心地ヨリノ距離並ニ方角ノ関係ハ上記ノ如ク原子爆彈ニハ頗ル重要ナル役割ヲ演スルモ遮蔽物如何即チ建築物ノ中ニアリテ直接光線ニ當ラサル者即チ火傷無キ患者モ火傷ヲ受ケタル患者モ「ウラニウム放射性物質ノ影響ニハ著明ナル差異ハナイモノ、如シ

(4) 性別ニヨル障碍差異ハ無キモノ、如キモ年令ニヨル差異ハ可成アルモノ、如ク余ノ取扱ヒシ死亡症例七五例中六四例（八五%）ハ一八—三〇歳ノ者ナリ調査ニ比較的困難ナルモ青年期ノ者障碍著明ナルガ如シ

(5) 爆撃当日ハ廣島市ニ在住セス八月六日以降廣島市ニ於テ作業ニ従事ハ其ノ他ノ用務ヲタメ同地ニ滞在セシ者一三六例中八九例（六五%）ニ白血球減少症（二、三〇〇—五、〇〇〇）ヲ認メタリ

中程度以下ノ減少者ハ概ネ八月六日爆撃直後ヨリ直チニ爆撃後始末死体収容等ノ為廣島市内就中爆心地ヲ距ル五〇〇米圏内ニ這入リシ者ニ著明ニシテ滞在日数ノ長キ者程著明ナル影響ヲ蒙リ爆心地ニ遠距離モ地点ニ滞在セシ者ハ減少ノ程度尠シ

一三六例中四例ニ於テ白血球増加症（二、〇〇〇—二〇、〇〇〇）（著明ナル核形左方移動「エオジン嗜好性白血球増多症」）認メタリ「ウラニウム放射性物質ノ適当ナル刺激ニ依レルモノナルガ

上記両者供五十日ヲ経過セル今日マデ重篤ナル症状惹起セル者ハ僅少ニシテ死亡セル者ナシ

(6) 性欲ニ関スル調査ハ現在重篤ナル者ニ於テハ衰弱ノ為的確ナル判定不能ナルモ概ネ影響無キモノ、如シ

上記ノ如キ症状著明ナルモノハ漸進性貧血極度ニ加ハリ高熱ヲ発シ遂ニ死ノ轉帰ヲ執ル者多キモ受傷当時ヨリ絶対安静ヲ守リ適當ナル治療（自家輸血、カルシウム注射、肝臓破裂、鉄剤内服、ビタミンB C PK注射・内服）ヲ施セル者或ハ比較的軽症ナル者ニアリテハ概ネ三—四週日頃ヨリ身体諸所ニ散発セル皮下溢血斑ハ漸次消失シ粘膜ノ潰瘍性病変ハ治癒シ出血性素因（衄血齒齦出血）脱毛止リ筋痠弱感疲労感漸次消褪顔色勝レ血液学ノ方面ノ考察ハ後述スルモ白血球血漿何ノ恢復ヲ先驅トシ遂ニ赤血球数ノ恢復ノ途ニアリ（受傷後五十日現在）全身性貧血ノ途ニ遽高熱ヲ発スルハ豫後不良ノ徴ニシテ概ネ死ノ轉帰ヲ執ルモノナリ

三、血液所見（末梢骨髓）

(1) 末梢血液所見

(イ) 赤血球

赤血球数ノ影響ハ初期ハ比較的輕微ナルモ病勢進行ト共ニ漸次減少ス病床中程度ノ者ニアリテハ二〇〇—三〇〇萬程度ナルモ死亡症例ニアリテハ一〇〇萬以下ニ減少セル者アリ 此ノ場合比較的大型赤血球並ニ畸形赤血球等認ムルモ多染性赤血球塩基性斑点並ニ有核赤血球ノ出現ハ認メス漸次赤血球数ノ恢復ニ從ヒ軽度ノ多染性赤血球並ニ不同症ハ屢々認ムルモ其等強度ノモノ及塩基性斑点等ハ極メテ稀ニシテ有核赤血球ノ出現之ヲ認メス

(ロ) 白血球

一般ニ著明ナル変化ヲ招来ス

1 白血球総数

原子爆彈爆発直後ノ変化ハ不明ナルモ漸次減少ノ一途ヲ辿リ著明ナルハ一、〇〇〇以下（甚ダシキハ三〇〇）ニ及フ 概ネ三—四週日ヲ終タル頃ヨリ回復ニ向ヒツハアリ白血球総数ノ減少ハ主ニ中世嗜好性白血球琳巴球トノ絶対数減少ニ基因ス恢復ハ比較的速ニシテ赤血球数ノ恢復ニ先驅ス

2 中性嗜好性白血球

著明ナル変化ヲ蒙リ白血球総数ノ変化トヨク一致シ絶対数相対数共ニ減少ス恢復ニ赴クニ從ヒ著明ナル核形左方移動ヲ招来ス主ニ桿状形多數出現スルモ時ニ骨髓細胞ノ出現ヲ認ム一般ニ核ハ萎縮シ原形質ノ顆粒ハ粗大増染シ病的形狀ヲ呈ス

3 淋巴球

著明ナル変化ヲ招来シ白血球総数減少ノ一因ヲ為シ絶対数著明ニ減少シ相対数ハ稍々増加傾向ニアリ恢復ニ赴クニ從ヒ小淋巴球ノ出現著明ナリ

4 「エオジン嗜好性白血球

絶対数相対数共ニ減少シ恢復ニ從ヒ比較的速ニ出現ス

5 大単核白血球及移行型

一定ノ変化ハ認メ難キモ一般ニ相対的ニ増加シ絶対的ニハ稍々減少シ恢復ニ赴クニ從ヒ増加ス

6 塩基嗜好性白血球

一定ノ変化認め難シ

7 分類不能ナル細胞

骨髓淋巴系共ニ病的細胞ナルベシ

(ハ) 血小板

著明ニ減少シ（一—三萬）時ニ算定不能ナルコトアリ恢復ニ赴クニ從ヒ比較的著明ニ激増シ然カモ大形血小板ノ出現著明ナリ

(ニ) 出血時間

定型的ニ遅延ス一五—三五分（デューク氏法）恢復ニ赴クニ從ヒ著明ニ短縮ス（五—一〇分）

(ホ) 凝固時間

凝固ノ開始ハ遅延スルモ完全凝固ノ時期ヲ測定シ難シ

(2) 骨髓血液所見

穿刺液ハ血性ニ乏シク油様水様ノ感ヲ與フ固定標本ニ於テ細胞成分著減ス

(イ) 白血球系統ニ属スル細胞

著明ニ減少シ骨髓母細胞前骨髓細胞ハ殆ンド消失シ骨髓細胞後骨髓細胞桿状核分葉核細胞ハ僅ニ存在スルモ形状ハ比較的區別困難ニシテ各原形質ノ變形セルモノ多シ恢復期ニ赴クニ從ヒ核形左方移動著明ニ起リ前骨髓細胞認めラル

大單核細胞モ定型的ナルモノヲ発見セス

(ロ) 赤血球系統ニ属スル細胞

重傷貧血者ニ在リテハ殆ンド有核赤血球見当ラス比較的輕傷者ニハ多染性有核赤血球少数ヲ認ムルノミニシテ恢復ニ赴クニ從ヒ白血球核形左方移動ノ如ク著明ナラサルモ有核赤血球多数出現ヲ認ム有核赤血球原形質ハ概ネ多染性ナリ

(ハ) 淋巴系統ニ属スル細胞

病勢極期ニアリテハ小淋巴球多数出現シ恢復ニ赴クニ從ヒ相対数減少ス

(ニ) 骨髓巨態細胞

塗抹標本ヲ丁寧ニ觀察スルモ病勢極期ニ於テハ之ヲ認メス恢復ニ從ヒ骨髓巨態細胞ノミナラス大形血小板遊出ヲ認ム

(ホ) 骨髓網状織内被細胞系統ニ属スル細胞

病勢極期ニアリテハ大小類淋巴性網状織細胞類プラズマ細胞性網状織細胞貧喰性網状織細胞内被細胞間質細胞及其ノ他分類不明ナル細胞並ニ病的ト思惟セラル、核ハ萎縮シ原形質顆粒ノ粗大ナル者出現ス恢復ニ從ヒ赤血球白血球系統細胞ノ著増ニ伴ヒ相対数著明ニ減少ス

上記血液所見ヲ綜合スルニ白血球血小板ノ著明ナル減少ヲ先驅トシ出血性素因著明ニ現レ漸進性赤血球減少ヲ招来シ恢復ハ先ズ白血球血小板増加ヲ以テ初リ次テ赤血球数ノ恢復スルモノ多シ此ノ際ノ白血球数ノ中性嗜好細胞ノ著明ナル核形左方移動ヲ認め赤血球系統ニ於テハ輕度ノ多染性ハ認ムルモ幼若赤血球ノ増加ハ著明ナラズ

死ノ轉帰ヲ執ル者ニ於テハ白血球数概ネ一、〇〇〇内外（甚シキハ三〇〇）血小板モ概ネ一萬以下ニ減少シ赤血球数モ概ネ二〇〇萬以下著明ナルハ六〇萬ニ減少セシ例アルモ亦三〇〇萬程度ノ者モ相当数アリ比較的セ血球数ノ減少甚キハ死亡マデノ病床日数ノ尠キ者ニ多シ白血球数血小板数ノ現象ハ絶對的ナリ

四、剖検所見

五例病理解剖ニ伏セシモ詳細ハ之ヲ省畧ス

肉眼的ニ著明ナル変化トシテハ通常ノ造血性赤色骨髓ハ被造血性ノ脂肪髓ニ變化セリ其他漿膜点状出血胃腸粘膜ノ出血斑ハ認めベキ變化ナリ

五、診断

上述ノ症状経過並ニ血液所見解剖的檢索ヨリ我々ハ顆粒細胞消失症アグスロチトーゼ或ハ再生不能性貧血（或ハエールリヒ氏ノ所謂出血性アロイキー或ハフランク氏ノ全骨髓癆パンミエロフチーゼ）ノ二者ヲ考フルコトヲ得

疾病ノ起始ハ比較的明瞭ヲ缺キ漸進性貧血（蒼白）高度疲労感ヲ以テ初リ出血性素因トシテ皮下溢血斑衄血齒齦出血ヲ認ムルニ至リ粘膜ニ潰瘍性病變ヲ起シ漸次衰弱死ニ赴ク点並ニ血液所見即チ白血球血小板並ニ赤血球ノ著明ナル減少赤血球ノ幼若形即チ有核赤血球多染症赤血球等ノ出現ナキコト出血時間ハ著明ニ延長シ血餅収縮性モ不良ナル点及剖検所見ニ依リ赤色骨髓ガ脂肪髓ニ變化セル点ヲ併セ考察シエールリヒ氏ノ出血性アロイキー或ハフランク氏ノパンミエロフチーゼ然骨髓癆或ハ再生不能性貧血ト思惟シテ差支ハ無カル可キモ屢々斯カル亜急性型ガ急性経過ヲ執リ突然高熱稽留シ胸腔並ニ咽喉粘膜ニ潰瘍性病變進行シ扁桃腺ハ腺窩性アンギーナ或ハチフテリア様義膜ヲ呈シ急激ニ死ノ轉帰ヲ執レル者ニアリテハ顆粒細胞消失症トノ鑑別稍々困難ナルモシュルツ氏ノ定型的ナル顆粒白血球消失症ハ疾病ノ起始ハ極度ニ急激ニシテ赤血球血小板ノ減少並ニ出血性素因ハ通例之ヲ認めサルコト等ヨリ本症ハ全骨髓癆パンミエロフチーゼヲ支持シタキモシュルツ氏以來ノ諸報告ニ赤血球並ニ血小板ノ現象ヲ認メタル報告例相当数アリテ遽ニ両者何レカヲ斷シ難キモ斯カル急激ナル型ヲトリタル症例ハ顆粒白血球消失症ノ假面ヲ冠リタル「パンミエロフチーゼ」ナルベシ蓋シ「ウラニウム放射性物質ノ作用ガ短時間ニ骨髓機能全般ヲ破壊スルモノトモ思考サレス逐次破壊セラルハ首肯セラルコトニシテ白血球ノ現象ヲ先驅トスルハ不明物質ノ白血球系統ニ對スル影響ガ大ナルカニ依ルモノナルヘク赤血球系統モ後ニ至リテ侵サルハ

ハ当然ニシテ漸進性貧血ヲ招来スルモノナラン

唯受傷後比較的経過日数短ク急性経過ヲ執リ死亡セシ症例ノ中ニ白血球減少ノミ著明ニシテ赤血球減少ノ著明ナラサルハ尚破壊作用ノ赤血球系統ニ迄波及シ得サリシ時期ノ於テ高熱其他ノ要約ニ依リ死ノ轉帰ヲ執リタルモノト思考シテ可ナルヘク大多数ハ白血球血小板赤血球数ノ減少著明ニシテ然カモ剖検例ノ如ク骨髓ノ赤色髓ノ脂肪髓ニ変化セル点ヨリエーレルヒ氏ノ再生不能性貧血或ハフランク氏ノパンミエロフチーゼ全骨髓癆ト思惟シテ大ナル誤謬ナカルベシ

急性ロイマーゼノ白血球減少顆粒細胞減少ノアルモノト鑑別モ重要ナランモ概ネ幼稚型白血球ノ遊出等血液像所見ニ依リ明白ナリ漸次恢復ノ途上ニアル者ハ再生機能減弱性品貧血ト見做スヘク「ウラニウム放射性物質ノ比較的輕微ニ作用セシモノナルベシ

六、経過並豫後

前述セシ如ク三—四週日頃ヨリ白血球血小板ノ増加ヲ先驅トシ出血性素因即チ皮下溢血斑衄血齒齦出血脱毛漸次止リ粘膜貴瘍性病変治癒シ赤血球ノ漸増ヲ来シ高度疲勞感筋痿弱感モ薄ラキ受傷後五十日ヲ経タル現在恢復ノ途上ニアルモノハ如ク思考セラルハモ蓋シ斯カル物質ノ人体ヘノ影響ヲ論スルハ今面初メテニシテ予後ヲ正確ニトスルハ至難ナリト謂フヲ得ヘシ

爆心地ヲ距ル距離的關係ハ最モ予後トスル上ニ重要ナル役割ヲ演スルモノナリ然シ個人的素質ニ依ル骨髓ノ反應ノ差異ハ相当ニアルモノナルベシ 最初ヨリ安静ヲ旨トシ治療施セシ患者ハ現在恢復途上ニアルモ激動其他日常業務ニ従事途中ヨリ臥床セシ者ハ現在尚血球減少症ヲ繼續セル者多シ

七、治療法

絶対安静ヲ命シタル上左記治療ヲ施セリ

1. 自家血液腎筋内注射 (二〇—三〇cc)
2. 輸血 (一〇〇—二〇〇cc)
3. カルシウム静脈内注射 (二〇cc)
4. 肝臓食及肝臓製剤ノ内服注射
5. 還元鉄剤投與
6. ビタミンB. C. P. K製剤ノ内服注射

上記各種治療法モ何レカ良キカ遽ニ断定シ難キモ第一條件トシテ絶対安静ハ必須缺ク可カラサルモノト思惟ス 蓋シ爆撃當日家ノ下敷キニナリ幸イニ受傷セス其後元氣ニ焼跡ノ整理屍体発掘等激務ニ従事セル者ガ症状悪化遽ニ不帰トナレル者多数ニ上レル事實竝ニ爆心部附近ニ居テ火傷ヲ受ケタルタメ只管安静入院加療セル者ノ漸進性貧血ヲ克服シ漸次恢復ノ途上ニアル者アルハ安静ノ第一條件タルヲ窺知スルニ充分ナル事實ナリ

八、總括並考按

上記ノ所見ハ原子爆彈爆發當日ヨリ五十日ヲ経過セル今日マデノ経過検索所見ヨリ言々セルモノニシテ的確ナル記載トハ謂ヒ難キモ殊ニ熱線ニ依ル火傷並ニ放射性物質ニ依ル骨髓破壊ニ基ク恰モ相反セルニ作用ノ重複セルモノニシテ判定ニ困難ナルモノナルモ上述セルハ主トシテ後者不明放射性物質ニヨル骨髓破壊ニ基ク症候ヲ論セルモノナリ

死亡症例ノ如ク骨髓ノ赤色髓ノ脂肪髓ニ全ク変化セルカ如キハ完全骨髓癆ニ陷レル者ニシテ諸治療モ其甲斐無キモノナランカ上述ノ如ク漸次恢復ノ途上ニアルハ再生機能減弱性貧血ト稱セラル可適当ナル治療ニ依リ恢復ニ赴クモノナルベシ安静ハ最モ重要ナル條件ナリ 然ルニ所謂原子爆彈ノ放射スル不明物質ニ依ル斯ル影響ハ今回初メテニシテ予後トシ難キモ一應恢復セルカ如ク見エタル患者モ激務ニ服スルヤ又再発ノ憂ヘ無キニシモ非ズヤト思考セラル激動ヲ避ケ精神的肉体的安静ヲ守リ新鮮ナル空氣ヲ吸ヒ造血ニ必要ナル滋養ニ富メルモノヲ選ビ努メテ紫外線ヲ浴ビ保養ニ努ルヲ最善ト思考ス 原子爆彈ニ依ル障碍トシテ上述ノ骨髓破壊ヲ起ス他諸種ナル影響アルコトハ想像ニ難カラサルモ時日ノ経過ヲ待チテ判定スヘキコト多カルベシ

確言ハ性差ヲ待チニ為スヘキモ同一地点ニ於テ火傷ヲ蒙リシ者ト蒙ラザル者トノ予後ハ一般ニ火傷ヲ蒙リタル者良好ナリ想フニ軽度ノ火傷ナレバ骨髓機能鼓舞トシテ効アルモノナルカ

(十二)

昭和二十年八月

原子爆撃研究綴

広島第一陸軍病院

八月六日広島市戦災ニ関スル経験並所感

一、原子爆撃炸裂時病院廊下ニ於テ特有ノ閃光ヲ見タリソレ以後病棟ノ陰ニ退避セルニ約二―三秒後特有ノ強烈ナル爆風ヲ感じタリ姿勢ハ立位ニテ停止シアリタリ

二、光ハ「マグネシウム」発光時ノ如ク白ク強烈ニ感じタリ熱波ハ全然ナク爆風、振動臭気ハ特別ノモノナシ爆音ハ聴取シ得ズ

三、四、五、特別ノ事項ハ点数ノ関係上ナシ

六、第一救護状況 別紙ニ依リ直接分院長殿ニ對シ報告済

但シ自ラハ救護班トシテ住吉橋東詰及縣病院裏手ノ堤防ニ於テ八月六日午後九時ヨリ翌朝六時マデ看護婦五名ト共ニ救護ニ當タリタリ。患者ハ概ネ重傷ノ全身火傷ニシテ呻吟シアリテ爾後概ネ死亡セルモノト想像セラル。救護中患者ノ呻声ト堤防、池等ニ散乱スル死体ノ多数ナノニ阿鼻叫喚ノ地獄ヲ想像ス
◎治療ハ重曹水ノ洗滌、搬出ノミニシテ植物油欠亡、強心剤ノ欠乏ハ治療ニ関シ良心的自信ヲ喪失セルニ残念ナリキ。班長トシテ恐ラクカカル重症患者ニハ萬全ノ治療ヲ望ムハ無益ナリト思フモセメテ強心剤ノ投與、救急火傷剤等ノ携帯ヲ切實ニ必要ト感じタリ。

尚、衛生材料ハ亀山等ノ遠隔疎開セズ病院内、各院内、救護所等各適当ナ場所ニ埋没乃至格納シアラハ急場ニ望ミ直ニ使用可能ニシテ治療上遺憾ナカリシト痛感ス。尚江波分院ニ外科ノ簡單ナル治療具ナカリシ点ハ軍医トシテ残念至極ニシテ今ニ當時ヲ回想シ無念ノ涙ヲ禁ジ得ズ

七、自己所属分院（収容所、救護所）ノ位置ニ関シテ詳細別紙ニテ各病院長殿ニ報告済

患者ノ到着時ハ状況 爆発後殆ンド六、七分後ニハ一時ニ多数ノ患者雲集殺到シ軍医ハ治療ニ関シソノ發揮ニ混乱スル状態ナリキ

火傷ノ状況トシテ殆ンド全身特ニ顔面、上肢、下肢、前胸部等露出部ガ殆ンド全員ヤラレ黒褐色ニ顔面ソノ他ガ着色シ皮膚全部剥皮シ水泡等ハ少ナイ様デアツタ。特有ノ臭気ハ發現シアリタル如ク思ハル

主訴 熱感、疼痛、口渴、悪寒、顔面火傷ノ多浮腫ヲ生ジ目ガ見え誘導ニ就テ看護婦ノ手ヲ借ル状態デアツタ

八、水泡、離皮ノ発生時期ニ関シテハ患者病院到着時既ニ発生シアリタリ患者ノ言ニ依レバ最初ノ発光ニ於テ既ニ火ガ燃エ移リ爆発後氣ガ附イテ見ルト既ニ水泡ヲ生ジ然カモ露出部ハ完全ニ剥皮シアリタルヲ見タリト云ウ

治療マデノ日数ハ収容期間ガ短キタメ鮮明ニナシ得ザリキ

化膿ノ程度ハ殆ンド多数ノ患者ニ之ヲ見タルモ二度ノ程度ノ火傷ニシテ水泡ニ膿ヲ持ツ状態デアツタ

有効ナリシ治療トシテ虹液一―二粒宛一週間又一粒宛一週間ヲ服用シ服用セザルモノト相違ヲ檢セシニ収容時期及期間等ヨリ遠隔成績ヲ知り得ザル。点アルモ少ナクトモ肉芽ノ清浄ニ関シ何等ノ好影響ヲアタヘタルモノト思考ス尚副作用等ナク病氣ニ對シ悪影響ナカリシカ斷言出来ル。然シ一時ニ多数ノ患者ヲ診察セルタメ看護力ニ限界アリ多数ノ死亡者ヲ出セルハ遺憾ナリ。

普通ノ火傷トノ差ハ原子爆撃ノ他ノ放射能ノ作用アリタルタメ食思不振、最初ノ嘔吐等一般全身状態ノ悪化アリ死亡者多カリシモ遠隔成績ヲ知り行ザルタメ斷言不能ナリ

療法ノ概要 （１）強心剤、チンク油塗布、重曹水ノ塗布、リングル氏液注射最初ノ数人ノ患者ニ對シ３％タンニン酸水ノ湿布ヲ使用セシモ薬品ノ欠乏ノタメ継続不能ナリシハ残念ニシテ之ニヨリ疼痛ノ軽減、収斂作用ニヨリ初期ニ於テ火傷ノ予後ヲ良好ナラシムル可能性ガアリハシナカツタト思考ス

リングル氏液ノ製剤直ニ欠セルタメ左記ノ要領ニヨリ生理食塩水ヲ製造シ使用セリ

先ズハ、五％ノ精製食塩水ヲ清水一〇〇〇cc ニトカシ之ヲロカシ直ニ煮沸沸騰シ冷却再ビロカシ之ヲ速製リングル氏液トシ多数ノ患者ニ使用ス。付ル悪害ヲ見タルモ口渴等之ノタメニ減減シ強心剤ノ伴用ト共ニ火傷ノ治療ニ好影響ヲアタヘタルモノト信ジ爾後蒸留水ナキタメ之ノ方法ニテ製造シ赤痢等ノ患者ニ利用シ好結果ヲ見タリ。

（２）原子爆撃傷ノ初期ノ病状 最初全身倦怠、下痢、蒼白（顔面）、食思不振、胸部ニ於ケル出血斑点、脱毛、発熱、口咽頭疼痛等ヲ以テ発病ス。検血スレバ白血球減少ヲ見ル。

◎白血球減少ハ八月一杯ニテ発病セルモノハ一五〇〇―一六〇〇マデハ全部約一週間位デ全身ノ出血エソ性口内炎、鼻血等ニテ死亡ス。

◎九月一日以後ニ入院セルモノハ白血球八〇〇位ヲ見タルモ次第ニ回復シ治癒ス。治療後トシテハ師管区軍医部ノ指示ヲ遵法セリ只温灸ヲ手及足ノ三里ニ施療シ之ガ白血球増加ニ好影響ヲアタヘタリト思考ス。

（３）伴発症 今マデ発表サレザル以外特記スベキモノナシ

九、八月六日以後救護ニ従事セル職員特ニ軍医、看護婦、衛生兵ノ中ニ概ネ九月初旬頃ヨリ全身倦怠ヲ以テ発症シ輕キ発熱、食思不振ヲ訴ヘ白血球二〇〇〇―三〇〇〇台ニ減少セル者ヲ約五〇％ニ見タリ。但シカヘフア白血球ノ増加ヲ見タルモノモアルガ之ハ極メテ少数デアツタ。前患者ハ概ネ一週間乃至二週間ノ安静加療ニヨリテ恢復セリ。之ハ輕キ原子爆撃症ト思考セリ。

都野大尉
増田少尉
石井少尉

原子爆弾症報告

江波分院 藤田少尉

- 一、江波分院第五号病棟医官室東側廊下ニ於テ柳少尉ノ「焼夷弾」ト云フ聲音ニ舍前ニ出シ瞬間赤キ光リ及熱キ爆風ヲ感ジシ為危険ヲ思ヒ防空壕中ニ退避ス
目前ノ（約五米）第六号病棟ノ屋根トタン板ノ飛散スルヲ見シノミ
- 二、赤キ光リト同時ニ熱キ爆風ニテ頬ヲナグラレシ感シ振動、臭気ハ感ゼズ（自分ノ身近ニ油脂焼夷弾（實際ニ見タルコトナシ）ノ落下ト同時ニ爆弾ノ落下セシ感ヲ持テリ）
- 三、閃光ヲ感ゼザリシ
- 四、江波分院ニ於イテハ火災発生セズ。但シ兵ノ話ニヨレバ院庭ニ乾シアリシ藁ニ引火セリト。（時間不明）
- 五、火災発生セズ
- 六、原子爆弾炸裂ヨリ約五分経過シ手術場ニ到レバ院内ニ於テ打撲傷、ガラス破片ニヨル創傷（出血多量）木材破片ニヨル創傷（出血多量）約数十人参集セリ
約十分経過セシ頃ヨリ地方人ノ参集ヲ見ル
約二十分経過ノ頃ヨリ火傷患者ノ参集ヲ見ル
地方人ノ創傷、火傷共ニ砂、ホコリニテオ染サル
創傷ハ出血多量、火傷ハ水泡ヲ生ゼリ骨折患者アリ
第一救護所（広サ二〇×一〇m）軍医三名、看護婦六名
創傷ニハマーキユロ、リパノールガーゼ、火傷ニハ亜鉛華オレーフ油塗布（量ハ不明）
- 七、江波分院
初期ハ創傷患者（主トシテハ江波住民）中期以後ハ火傷患者多数ヲ占ム
創傷ハガラス破片、木片等ニヨルステイツヒブンデ多ク為ニ出血多量ナリシ
骨折患者モ相当数ヲ占ム
火傷患者ハ顔面手背脚部等露出部火傷ニシテ到着時ハ既ニ水泡ヲ生ゼリ。砂、ホコリノ為ニオ染サレ亜鉛華オレーフ油ノ塗布ニ困難ヲ感ゼリ
火傷患者ノ主訴ハ皮膚ガヒリヒリスルカラ油ヲ塗ツツクレ油ナクテ、生理的食塩水塗布ノ患者ハ乾燥スルト此ノ種訴ヘガ多クナル一一定時経過スルト口渇ヲ訴ヘリ
- 八、火傷ノ経過
- 1、水泡ハ二四—四八時間ヲ経過シ膿泡発生セルモノ多シ
治癒迄ノ日数、軽傷ハ二週間、重傷ハ一ヵ月半
火傷ノ面広キモノ殆ト化膿セリ
鎮痛ニ有効ナリシ療法、化膿セルモノニ対シテハアクチゾール注射ヲナスト患者ハ痛ミ少シト云ヘリ。乾燥ハ痛ミヲ増セシモ治癒ニ対シテハ、殊ニ化膿ニ対シテハ良好ト思ヘリ
亜鉛華オレーフ油ナキタメニマーキユロ塗布ノ程度ナリ
- 2、原子爆弾傷ノ初期症状及経過
最初気付キシハ赤痢疑ニテ入院セル患者ガ（血便一日二十行乃至五十行）入院後一日又ハ二日ニテ死亡、症状ハ血便ノ他ニ小出血斑、齒齦出血、頭部毛髪脱落、高熱稽留共ニ必発症状ナシニモ初期（原子爆弾炸裂後二週間頃）ニ於ケル患者ニハ出血斑ハ散見スル程度ナリシ。患者死亡一日前頃ヨリ皮膚ハ亜黄疽色トナリシ。
脾臓ハ殆ト見ズ肝臓亦ワズカニ触レル程度ナリ
中期及後期（原子爆弾炸裂後一ヶ月乃至一ヵ月半）ニ於テ発病セル患者ハ高熱稽留。出血斑ハ必発ノ條件ナリシモ齒齦出血ナキモノ又ハ血便ナキモノ毛髪脱落ナキモノ等アリ前記初期発生患者ニ於テハ前中期症状全部揃
後期発生患者ノ治方ハ自家輸血（一日一〇㍑）毎日約一週間続行、治方前白血球一〇〇〇前後ノモノガ二週間後ニ四〇〇〇—六〇〇〇ニ恢復セリ
初期ハ中間発生患者ニ於イテハ輸血（三〇〇㍑—五〇〇㍑）シナスモ効果ナシ
- 3、併発症
脳症ヲ起スモノヲ散見ス
- 九、1、中期発生患者ノ初期症状（自己ノ経験セシモノ）

患者ハ二十一才男子

八月二十四日発熱（三九度前後）感冒気味トテ臥床ス

八月二十六日初診、所見、左側扁桃腺僅カニ肥大白斑点附着歯齦出血ハナキモ口腔粘膜一般ニ発赤ス。小出血斑ハ胸部ニアリシト云フモ自分ハ気付カズ普通ノ扁桃腺炎ハ診断ス

アミノピリン〇.五ヲ与ヘ、アクチゾール五.〇注射

八月二十八日依然トシテ下熱セズ（但シ下熱剤（アミノピリン）ニハ支處スルモ亦スグ高熱トナルト云フ）扁桃腺肥大アルモ口内炎悪化シ歯齦出血ヲ少量見ル、小出血斑ヲ胸部及背部ニ二十数個見ルモ髪脱毛、下痢ナシ。食欲良好ナルモ口内炎ノ為痛ミアリテ充分食ベラズ

此所ニ於テ原子爆弾症ト診断ス

八月三十日輸血一〇〇㏄

八月三十一日他家血液二〇㏄筋注

九月一日右ニ同ジ

其ノ他ビタミン剤、肝臓製剤、葡萄糖注射ヲナス

九月一日頃ヨリ毛髪脱落アルモ高度ナラズ歯齦出血此頃ヨリ多量トナル血便ナキモ下痢此頃ヨリ始マル

歯齦出血多量トナリ九月九日遂ニ死亡ス

2、初期発生患者ニ於ケル経験

火傷患者中高熱毛髪脱落出血斑、血便、歯齦出血（又ハ鼻出血モアリ）等ニテ死亡スルモノ多発ス最初ハ全部敗血症ト考ヘズルフォンアミット剤リンゲル等ヲ治方ス何レモ死亡スルニ依リ之レハオカシト考ヘ居ルキ柳少尉受診ノ患者中赤痢疑ニテ入院セルモノガ前期症状ニテ一、二日中ニ死亡スニヨリ柳少尉モ赤痢ニ疑問ヲイダキ白血球数ヲ調べレハ何レモ四〇〇以下ナリシニ依リ自分受診ノ火傷患者中前期症状ヲ起セルモノ（敗血症考ヘシモノ）ノ白血球数ヲ調べレハ跡四〇〇以下敗血症ナレバ白血球増多症ナルニヨリ疑問ヲイダク、依ツテ三名ノ患者ニツキ血液培養ヲ行フモ何レモ陰性ナリシ。依ツテ敗血症ニアラズト断定セリ

シカラバ何カト云フ疑問ヲイダクニウラニウムハ放射線ヲ放出スルカラ白血球減少ハX線ニヨル白血球減少ト同一ノ症状ニシテ強度ナリシモノト考ヘニ到着セリ

爾後新聞等ニテ之レノ正シキヲ知レ

一〇、特記スベキ事項ナシ

以上

原子爆弾症報告

江波分院 柳少尉

一、江波分院第五号病棟廊下ヨリ外ニ出デントスル時ニシテ服装ハ上衣ヲ脱ス

二、突如、約二米奥手方位ノ白色ノ閃光ヲ認メ「エレクトロン」焼夷弾ト感シ直チニ地上ニ臥ス当時夢中ナリシ為ヤ熱気、爆風、臭気等ヲ殆ント感ゼズ

家屋ノ破壊音モ感ゼザリキ

三、四、五、—————

六、閃光ヲ認メタセリ約五分後入院患者ガ負傷セリトテ診シ求ム、診ルニ硝子破片ニヨリ軽度ノ擦過症程度ナル故手術室ニ運搬スルニ（既ニ患者数名居レリ）又手術室ハ硝子散乱、物損倒壊シ足ノ踏ミ場モ無也キ故屋外ニテ治療ヲ始メントス

而ルニ其ノ頃ヨリ（約十五分后）地方患者續々来院セルニヨリ直チニ二号病棟一番室ヲ救護所ニ当ツベク準備シ軍医三名看護婦若干名ニテ治療ヲ開始ス

而ルニ多数ノ患者一時ニ殺到シ全ク〔2字判読不能〕ニ治療室内ニ侵入シ吾先ニ處置ヲ受ケントシテ軍医ノ所ニ押シ掛け殆ント強要スルガ如キ態度ナリシ為重軽症ヲ区別スル暇ナク又姓名住所歳ヲ聞ク事モ不能ニシテ手当リ次第ニ處置シ従フテ患者数、症病別等全ク不明ナリキ。

材料ハ大傷患者ニハ始メチンリエールヲ使用セルモ間モナク欠乏セルニ至リタンニン液後ニハ食塩水。マーキュロヲ用フ。外傷患者ニハマーキュロ、リパノー、ガーゼ治療法ハ材料ノ〔1字判読不能〕保モアリチンクエール、マーキュロ食塩水ヲ使用セリ

（2）八月十三日頃ヨリ粘血便ヲ訴フ赤痢疑ニテ續々入院セル患者ニシテ粘血便一日十数行程度全身衰弱モ著明ナラザルニ入院后、三、四日ニシテ嘔吐（淡黄色）ヲ頻発シ約一日后突然死亡シ或ハ死ノ直前痙攣（牙関緊張、四肢痙攣）ノ起シ死亡スル患者續出セリ

今迄ノ赤痢患者ト全ク様子ヲ異ニスルヲ以テ始メテ赤痢ニ非ラザルモノナランカト思ヒ調査セル結果總テ、火傷、外傷ナキモ爆撃ニ直接関係セルヲ認め且カカル患者ニテハ白血球数三〇〇—七〇〇ナリシヲ以テ之ハ一種ノ血液病ヲ起セルモノナラント考クルニ至レリ

而テ、始メハ赤痢ト考ヘタリシ為一般赤痢ノ療法ヲ起ヒタルタメカ、スベテ数日ニシテ死亡セリ

八月十六日頃ヨリ更ニ発熱（三九.〇—四〇.〇度）ヲ訴フチフス患者ノ疑ニテ入院スル患者現ハル

省事強キ口内炎或ハ歯齦炎、頭髪脱毛アリ漸次鼻出血、歯齦出血重度トナリ紫斑全身ニ現ハレ出血死ノ如キ状態ヲ呈スルモノアリタリ

八月末ヨリ発熱ヲ訴へ白血球減少ヲ示セルモ脱毛、紫斑、出血等ノ各症候ヲ定型的ニ示サズ一、二ノ症候全アル者或ハ、單ニ全身倦怠ノ之ヲ訴クル程度ノ者現ハルニ至ル

病院職員ニ於テモ自覚症状ナキモ殆ンド全員ヲ使用ス

七、患者ハ殆ンド全部半裸体又ハ裸体ニシテ女子モニュミーズ等ボロボロニナリズロースノミノ者アリ。完全ナル恢復ヲセルハ極メテ僅カナリキ。是ハ大傷患者ガ大部分ヲ占テ居リシ点ニモヨルカ、勿論其ノ他破片創、骨折、腸露出（数名ノ子供）モ居リシモ、比較的少数ナリキ

火傷患者ハ避難中ノ苦難ヲ思ハス如ク殆ンド總テ砂、泥ニマミレ、殊ニ全身火傷患者ハ来院后處置込ニ地上ニ或ハ廊下ニ臥シ轉ビ、疼痛ヲ訴へ、水ヲ呑マシテクレ、或ハ甚シキハ苦シイ殺シテクレ等ノ悲痛ナル叫ビヲ発スル等主トシテ疼痛、乃至苦悶感、口渴ヲ訴へ轉々反側シ居レリ。

火傷ハ第一度程度ハ僅カニシテ大多数ハ水泡ヲ形成シ或ハ既ニ表皮剥脱シ全身膨張セル如キ感アリ殊ニ顔面ニ甚シクテ妙齡ノ女子ノ如キモ殆ンド年令ヲ想定スル事全ク不可能ノ如キ顔貌ヲ呈ス

大傷面ハ砂、泥ニマミレ是ガ清拭ニ甚ダ困難ヲ覺エシメタリ。

八、

（イ）受傷後暫時（一二日）ニシテ殆ンド總テノ患者ニ於テ化膿シ、消毒、看護ノ不充分ノ為カ蛆ノ発生セル者モ相当数認めラル。治癒ハ一般ニ順調ニシテ輕症ニ於テハ三、四日頃ヨリ乾燥シ約二週間后ニハ僅カノ皮膚着色ヲ呈セル程度ニ治癒セルモノモアリタリ。重傷者ニ於テモ大体一ヶ月后ニハ殆ンド總テ創面乾燥セリ。

二 白血球減少ヲ示セリ（三〇〇〇—五〇〇〇）

カカル隔離患者ニ於テハ安静、自家血注射ニテ比較的早く白血球数恢復セルモ勤務等ニテ再び減少ヲ來セル者アリタリ。

少尉ハカカル白血球減少症ノ患者ハ直接治療セズ從フテ治療性ノ比較時等全ク不明。

原子爆彈傷ニ就テ

広島第一陸軍病院櫛ヶ浜分院

原子爆彈傷ニ就テ

広島第一陸軍病院櫛ヶ浜分院

一、昭和二十年八月六日広島市ニ於テ原子爆彈ニ依ツテ爆心ヨリ一キロ以内ニ於テ受傷セル後六日目（八月十一日）ニ當院ニ收容セル患者總數二〇八名中九月廿日現在マデニ判明セル死亡者ハ五四名（内五名ハ帰郷療養中死亡）ナリ。而シテ當院ニ於テ死亡セル四九名中三八名（七七％）ハ受傷後八日乃至十七日間ニ於テ死亡セリ。受傷十一日以後ノ死亡者ハ概ネ晩期障害ニヨルモノナリ。（第一表参照）

二、死亡者五四名中火傷患者ハ四五名ニシテ他ノ九名ハ火傷ヲ受ケザル打撲傷、破片創或ハ骨折等ニシテ早期ニ於テ之ガ直接死ノ原因トナルモノナシ。

三、臨床的症狀（第一表参照）

（１）早期障害、火傷ニヨル發熱・食思不進ニシテ特異ナル症狀トシテ下痢多ク便通一日三十乃至五十行ニ及ブモノアリ。多クハ水様便ナルモ粘液血液ヲ混ズルモノアリ赤痢様症狀ヲ呈シ体液缺乏状態トナリ死ノ轉歸ヲトレルモノ多シ。而シテ脳症狀現ハレ興奮状態ヲ呈シ不眠、多辯、多動、叫喚ヲ轉々反側シテ心臓衰弱ヲ惹起シ死期ヲ早メタルモノ多シ。

火傷ハ收容時痂皮形成セルモノアリシモ痂皮下層ハ概ネ化膿ヲ呈セリ。痂皮ノ黒色ヲ呈セルハ特異ナル所見ナリ。之レヲ剥離シ清拭シ２％マーキクロローム液ヲ塗布シ然レ後オレーフ油ヲ塗布セリ。

火傷死ハ火傷面積ノ大小ヨリモ火傷部位ノ如何ガ關係ヲ有スルモノノ如ク特ニ顔面ノ火傷ニ於テ死亡率ノ大ナルヲ認メタリ。（死亡者ノ五五％）

症 例	姓 名	症病名	火傷部位						症 状								歸
			頭	顔	胸 腹	背	上 肢	下 肢	発 熱	食 思 不 振	脱 毛	出 血	咽 頭 炎	下痢	脳症		
1	玉○康○	火傷	+	+	+	+	+	+	輸送中死亡								6
2	安○俊○	火傷	—	—	+	+	—	—	收容直后死亡								6
3	廣○正○	火傷	—	+	—	—	—	+	+	—	—	—	—	—	—		7
4	坂○正○	火傷	—	—	—	+	—	—	+	+	—	—	—	水様	+		8
5	吉○五○	火傷	—	+	—	—	—	—	+	+	—	—	—	水様	—		8
6	平○眞○	火傷	—	+	—	—	—	+	+	+	—	—	—	水様	—		8
7	菊○信○	火傷	—	+	—	—	—	—	+	+	—	—	—	水様	+		8
8	椎○清○	火傷	—	+	—	—	+	+	+	+	—	—	—	粘血	+		9
9	井○茂○	火傷	—	+	—	—	—	—	+	+	—	—	—	水様	+		9
10	末○悟○	火傷	—	+	—	—	+	+	+	+	—	—	—	—	—		9
11	大○眞○	火傷	+	+	—	+	+	—	+	+	—	—	—	粘血	+		9

12	渡○健○	火傷	－	－	－	＋	－	－	＋	＋	－	－	－	－	＋		9
13	佐○一○	火傷	－	＋	－	－	－	－	＋	＋	－	－	－	－	＋		9
14	西○修○	火傷	－	＋	－	－	－	－	＋	＋	－	－	－	水様	＋		9
15	島○國○	火傷	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－	－	－	－	升		9
16	田○政○	火傷	＋	－	－	＋	－	－	＋	＋	－	－	－	水様	－		10
17	廣○七○	打撲傷	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－	－	－	水様	＋		10
18	伊○三○	火傷	－	＋	－	－	升	－	＋	＋	－	－	－	粘血	＋		10
19	町○忠○	打撲傷	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－	－	－	水様	－		11
20	兼○秀○	火傷	－	＋	－	－	升	－	＋	＋	－	＋	＋	－	－		11
21	小○遊○	火傷	－	＋	＋	－	升	升	＋	＋	－	－	＋	粘血	＋		11
22	神○廣○	火傷	－	＋	－	－	升	升	＋	＋	－	－	＋	－	＋		11
23	鳥○栄○	火傷	＋	＋	－	－	－	－	＋	＋	－	－	－	－	－		12
24	引○義○	火傷	－	＋	－	＋	升	－	＋	＋	－	－	＋	－	＋		12
25	[25は欠く]																
26	紅○震○	破片創	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－	－	－	水様	－		12
27	大○信○	火傷	－	＋	－	＋	升	＋	＋	＋	－	－	－	水様	－		12
28	岩○武○	破片創及骨折	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－	＋	－	血性	－		12
29	田○晴○	打撲傷	－	－	－	－	－	－	＋	＋	＋	－	－	－	－		12
30	平○茂○	火傷	－	－	－	＋	－	升	＋	＋	－	－	－	水様	＋		13
31	大○善○	火傷	＋	－	－	＋	升	－	＋	＋	－	－	－	水様	＋		13
32	西○津○	火傷	＋	＋	＋	＋	升	升	＋	＋	＋	－	－	－	＋		13
33	神○元○	火傷	－	＋	－	－	升	－	＋	＋	－	－	－	水様	＋		13
34	増○勝○	火傷	＋	－	－	－	－	－	＋	＋	－	＋	－	水様	＋		14
35	難○義○	火傷	＋	－	－	＋	－	－	＋	＋	－	－	－	水様	－		14
36	森○晃○	火傷	－	＋	－	＋	升	－	＋	＋	－	－	－	水様	－		14
37	平○退○	火傷	－	＋	＋	－	升	－	＋	＋	＋	＋	－	粘血	－		17
38	宮○勝○	火傷	－	＋	－	－	－	－	＋	＋	＋	升	＋	水様	－		17
39	石○一○	火傷	＋	＋	－	－	＋	－	＋	＋	＋	－	＋	水様	＋		17
40	狩○勝○	火傷	－	－	－	＋	升	升	＋	＋	＋	＋	－	水様	－		17
41	佐○照○	火傷	－	＋	－	＋	升	－	＋	＋	＋	－	－	水様	－		17
42	新○善○	骨折	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－	－	＋	水様	－	尿閉	19
43	光○尚○	火傷	－	－	－	－	升	升	＋	＋	＋	＋	－	－	＋		22
44	竹○清○	火傷	－	－	－	＋	升	升	＋	＋	＋	＋	－	－	＋		23
45	請○清○	火傷	－	－	－	－	－	升	＋	＋	＋	＋	升	水様	－		25
46	石○竜○	火傷	－	＋	－	－	＋	－	＋	＋	＋	－	＋	水様	＋		25
47	上○精○	破片創	－	－	－	－	－	－	＋	＋	＋	＋	＋	水様	＋		26
48	加○陽○	破片創	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－	＋	＋	水様	＋		30
49	井○英○	破片創	－	－	－	－	－	－	＋	＋	＋	＋	＋	粘血	＋	黄疸	33

(2) 晩期障害

(イ) 出血受傷後十日目頃ヨリ出血傾向ヲ示シ鼻出血、齒齦出血、皮下出血、咯血、吐血、下血及ビ受傷部位ヨリノ出血ヲ招来セリ。第廿八例ハ頻回ノ咯血ニ依ツテ失血死ニ陥レリ。

(ロ) 咽喉炎ハ主トシテ咽喉扁桃腺ノ腫脹發赤、疼痛ニシテ第四九例ハ腫脹強度ノタメ摂食不能ヲ訴ヘタリ。

(ハ) 脱毛モ亦晩期ニ於テ著明ナリ。

(ニ) 下痢ハ晩期ニ於テモ現ハレ主トシテ水様性ニシテ粘液、血液ヲ混ズルモノアリ。

(ホ) 發熱食思不進ハ打撲傷、骨折等ニテ早期ニ之ヲ訴ヘザルモノニ於テモ現ハレ来ル。

(ヘ) 黄疸ヲ呈セルモノアリ (第四九例)

(ト) 脳症状ハ晩期ニ於イテハ著明ナラズ。

四、血液所見

白血球ノ減少ハ特異ナル所見ナリ。即チ顆粒白血球ノ減少ヲ認ム。受傷後五十日目 (九月廿五日) 白血球ノ百分率ヲミルニ中性嗜好性白血球ハ左方核移動ヲ呈シ幼稚型白血球ノ出現ヲミルモノアリ。淋巴球ハ概ネ五〇%内外ヲ示シ未ダ比較的淋巴球過多症ノ像ヲ呈セリ。

(第二表参照)

第二表 白血球百分率分類表								
症例	1	2	3	4	5	6	7	
姓名	川○義○	酒○昭○	中○守○	松○太○	廣○正○	坂○安○	延○忠○	
月日	26/9	26/9	26/9	26/9	26/9	30/9	26/9	
白血球数	16,000	4,300	2,300	5,200	2,500	5,800	7,300	
中性嗜好性 白血球	幼稚型	7	3	1	1	0	1	4
	桿状型	13	8	14	8	23	10	8
	二葉型	42	39	20	27	31	16	27

	三葉型	7	13	16	9	4	13	6
	四葉型	0	1	0	1	0	1	0
	總數	69	64	51	45	58	41	45
淋巴球		30	36	49	55	42	59	55
塩基性嗜好性細胞		0	0	0	0	0	0	0
エオジン嗜好性細胞		1	0	0	0	0	0	0

九月上旬ヨリ逐次経過ヲ追ヒテ觀察セル患者ニ於ケル白血球數ノ移動ヲ見ルニ漸次増加シ九月廿六日正常値ニ達セルモノアリ、又正常値ヲハルカニ超過シテ一六、〇〇〇ニ達セルモノアルモ概ネ二、五〇〇乃至五、〇〇〇ヲ示セリ。白血球數ノ増加率ハ個人的差異ニ依ツテ一定ナラズ全ク増加ヲ見ザルモノアリ。(第三表参照)

九月卅日現在赤血球數ハ概ネ三〇〇万乃至四〇〇万ニシテ軽度ノ貧血症ヲ認メリ。(第四表参照)

第三表 九月中ニ於ケル白血球數移動

例	姓名	症病名	日	白血球數	日	白血球數	日	白血球數	日	白血球數	日	白血球數
1	川○茂○	打撲傷	8	800	16	2,200	20	5,800	23	6,300	26	16,000
2	酒○昭○	打撲傷	17	3,800	22	3,800	26	4,300	30	4,400		
3	中○安○	骨折	17	2,500	21	2,800	23	2,500	26	2,300	30	2,400
4	松○千○	破片創	17	4,700	22	5,700	26	5,200	30	3,900		
5	福○正○	火傷	5	1,200	16	2,300	22	5,800	26	2,600	30	3,400
6	坂○安○	火傷	17	3,200	21	4,500	23	4,600	26	5,800	30	6,100
7	延○忠○	火傷	17	4,500	23	4,500	26	7,300	30	7,300		

第四表 赤血球及ビ白血球數 (30/9)

症例	1	2	3	4	5	6	7	8
姓名	川○	酒○	中○	松○	福○	坂○	延○	西○
赤血球數	302 万	360	371	523	422	323	380	304
白血球數	16,000	4,400	2,500	3,900	3,400	6,100	7,300	3,400

五、男性生殖機能ニ関スル觀察

患者 西○久○ 二十一才 一〇四部隊 (爆心ヨリー一キロ以内)

初診 昭和二十年九月廿九日

原因及ビ経過 昭和二十年八月六日廣島市ニ於テ原子爆彈ニテ受傷、木材ニテ頭部及ビ両頬部ニ切創ヲ受ケタルモ火傷ナシ。切創ハ約一週間ニテ治療セリ。然ルニ九月二日頃ヨリ齒齦出血アリ二十二日頃ヨリ尿ノ黄褐色ニ着色スルニ気付ケリ。齒齦出血ハ漸次止マリシモ黄疸ハ次第ニ著明トナリ腹部膨滿感ヲ訴ヘ毎日より軟便アリ食思不進ヲ訴フ。

現症、体格營養中等体温卅六度八分脈拍八〇至皮膚及ビ可視粘膜ハ亜黄疸色ヲ帯ビ齒齦出血アリ扁桃腺ノ腫脹發赤ヲ認メズ。肺域著変ナシ。心骨正常ナルモ心尖部ニ於テ収縮期雜音ヲ聴取ス。腹部一般ニ膨滿シ心窩部ニ軽度ノ圧痛アリ肝臓脾臓ハ之ヲ觸レズ

血液所見、赤血球三三〇万白血球三四〇〇ヘ淋巴球 45%中性嗜好性白血球若幼型 2%桿状型 9%二葉型 26%三葉型 4%) 塩基嗜好性細胞 0 エオジン嗜好性細胞 0

尿所見 淡白陰性 (ズルホザリチール酸法) 糖陰性 (ニーランデル氏法) ビリルビン陽性 (グメリン氏法) ウロビリノーゲン陽性 (エールリッヒアルデヒード法) ウロビリン陽性 (シユレージンゲル氏法)

精液所見 採取直後ノ精液ヲ檢スルニ精虫ハ多数存在スレド一視野ニテ活動シツハアルモノ一ニ匹ニシテ他ハ静止状態ニアリ、精虫ノ活動ハ概ネ活発ナラズ頭部ノ振子運動ハ敏活ナルモ前進運動ハ不活発ナリ。採取後約十分間急動ヲ觀察シ得タリ。

本症例ハ爆心ヨリー一キロ以内ニアリ火傷ヲ受ケザリシモ明ラカニ晩期障害現ハレ特ニ肝臓機能障害アリ各臓器ノ機能障害ガ考ヘラル。精虫ハ多数存在スレドモ運動可能ナルモノハ少数ナリ。

六、死體解剖例

患者 竹○清○ 第二總軍司令部 (爆心ヨリー一キロ以内)

原因及ビ経過 昭和二十年八月六日廣島市ニテ原子爆彈ニテ受傷、顔面、背部、両下肢及ビ左上膊ニ火傷ヲ受ク。八月十一日當院ニ收容ス。

現症、体格營養中等体温卅九度脈拍一〇〇至脳症狀著明ニシテ興奮状態ヲ呈シ不眠、多辯、多動、床上ニ轉反側ス。食思不進缺損ス。皮膚及ビ可視粘膜ノ貧血著明ナリ。肺域著変ナシ。心骨正常ナルモ心尖部ニ於テ収縮期雜音ヲ聴取ス。腹部沒〔1字判読不能〕スレド圧痛ナン肝臓及ビ脾臓ヲ触レズ。四肢正常膝〔1字判読不能〕腱反射正常。

上記ノ症狀ニテ火傷ノ處置ヲ施行ビタミン剤注射施行セルモ食思不進ニシテ八月二十日頃ヨリ下痢一日數行水様便ノ排泄アリ脳症狀輕減セズ全身衰弱加ハリ八月廿八日死亡セリ。

直ニ死体解剖スルニ肉眼的ニ各臓器ノ貧血著明ニシテ肝臓及ビ脾臓ハ萎縮ヲ呈セリ。胃腸管表面ニ多数ノ點状溢血斑ヲ認メタリ。(標本保存)

十三、被爆広島の写真記録者たち

川西恒夫

人類史上初めての原子爆弾の犠牲となった広島市の記録は、平和理念をつちかう原点として、非常に有意義なものであるが、各種の文献や資料の中でも、その惨状を赤裸々にとらえた数々の写真は、重要な歴史的証言として、正しく後世に伝えられなければならない。

あの日、私は中国新聞社に出勤しようとする直前、上天満町の自宅で被爆した。突然、家屋が倒壊して下敷きとなったが、運よく傷も軽く、妻を助けて脱出することができた。

たちまち火災となり、危険の襲い来るなかを、かねて町内会が決めていた佐伯郡宮内村目ざして、妻と二人でようやく逃げた。そのときの惨状は、多く体験記やその他に語られているとおりであるが、写真は言葉や文字に言いあらわせないものを、その時点において明確に把握しており、迫力をもって見る者の胸を打つ。これらの貴重な写真を、後世に遺した人々の功績は実に大きなものがあり、その写真がどのようにして撮られたかということも記録しておく必要があろう。被爆者の一人として、また、平和を願う者の一人として、ここに幾人かの撮影者について、調査できた範囲内のことを取りまとめた。

なお、アメリカ占領軍のきびしい干渉にも屈せず、映画に記録し、学術的にも貴重な撮影をおこなった加納竜一・菊池俊吉・林重男三氏については、加納氏及び水野肇氏の共著「ヒロシマ二十年」から抜粋し、三氏の手記形式にして、再録させていただいた(敬称略・順不同)。

加納竜一(当時・四一歳)

昭和二十年八月十五日、大東亜戦争はついに終わった。

「新近爆弾とは何か。これを急いでドキュメンタリーとして、記録しなければならない」という考えは、私たちが所属していた日本映画社の文化映画部や演出者たちのあいだには、当然あった。ともかく広島へ行こうという者、まずは、その製作資金を作る方が先だという者もあった。この時、会社自体は軍御用の社団法人から、自発的解放の方針を決めており、新しいニュース映画会社が、どうかたちで再編されるか、まだいっこうに見通しもたないという状況下にあった。しかし、ともかくプロデューサーが私で、生物班・物理班・土木建築班・医学班・ニュース及び遊撃班など三三名の撮影スタッフと、ネガフィルム四万フィート、サウンドフィルム二万五千フィート、ポジフィルム四万三千フィート、ロケーション費二万七千円が決定した。

こうして、九月十四日、製作スタッフはいちおう次のとおり決定した。

〔プロデューサー〕 加納竜一

〔生物班〕 演出/奥山大六郎、演出補助/豊原慶人、撮影/鈴木善代治、撮影助手/今野敬一、佐野勇

〔物理班〕 演出/相原秀次、演出補助/伊豆村豊、撮影/坂谷小一郎、俣野公男、撮影助手/関口敏雄、城所敏雄

〔土木建築班〕 演出/伊東寿恵男、演出補助/水野肇、撮影/三木茂、撮影助手/金子宝次、菊地周

〔医学班〕 演出補助/吉田庄太郎、撮影/山中真男、栗田玄忠、撮影助手/小島明、林七郎

〔ニュース及び遊撃班〕 撮影/藤波次郎、演出/小畑長蔵

〔進行係〕 水上公成、山村圭三郎、笠井信太郎

〔照明係〕 城戸惣作、徳田輯、林栄之

〔スチール担当〕 菊池俊吉、林重男

ただし、このスタッフ編成は、出発後、少し編成替えが行なわれた。

できあがりはどうであろうと、広島・長崎の映画撮影は、日本の歴史の一つのドキュメントになるだろう、私はそう思って、終戦まで海外宣伝の仕事をしていた文化社の木村伊兵衛氏にたのんで、同社からスチール写真のカメラマン菊池、林、田子の三氏を派遣してもらった。

一口に言って、この原爆記録行というのは、初めから終りまで、ないないづくしのいわば無謀な取材であった。なんとか記録しておかなければという執念にかられて、しやにむこぶつかっていったというよりほか、言いようがない。

撮影開始が九月二十四日、第一次の撮影が終ったのは十月二十九日。さらに第二次の物理班の撮影は、十二月二十二日から翌年の一月二十六日、第三次は一月二十七日から二月十五日までかかった。

私たち一行の宿舎は、郊外の海田市町の日本製鋼所の第一報国寮と決まり、撮影隊の送り迎えに、一台のオート三輪車が提供されることになった。宿舎から爆心地へおよそ六キロの街道を走ると、爆風にたたかれた家並みが次第にひどくなっていく。そして、広島駅に近づく、見渡すかぎりの焼野原で、人影のない繁華街跡があった。

私たちは、この赤銅色の荒地地で大部分の日数を過ごした。いたるところで、八月六日の惨状を目撃することができた。日本銀行前の焼跡のトタンに、白墨で、「この下に女中さんが死んでいます」と、書いてあった。そっとトタンをめくってみたが、そこには平らな土があるだけだった。

万代橋の上には、そのとき歩いていたと思われる人の影が焼きつけられていた。一人、二人、荷車をひく姿の影もある。この荷車はどんなぐあい、吹きとばされたものか。そばのランカンにはキズ跡一つ残っていない。焼きついた人影に、自分の足を合わせてみると、一人はやや大股である。おそらく身体の大きな男か、あるいは急いでいたのであろう。

爆心から五〇メートル、島病院前の墓地で御影石の焼け方や、動き方を調べていると、人体の腐敗したような臭いがする。倒れた塀のコンクリートや墓石をころ

がしながら、犬のように臭気をかきわけていくと、小さい子供の片腕が石の下からでてきた。五歳ぐらいではなかろうか。このあたりは、真上から爆風を受けたところなので、おそらくここで無心に遊んでいた子供に違いない。それにしても、身体の他の部分は、どこへ飛んでいったのだろう。爆心が真空状態になったとき、天空高く吸いあげられたものとすれば、あるいは灰となり、己斐の茶臼山の方面に泥雨となって降ったのかも知れない。取りだしてみると、関節の骨の見える部分に、赤く血痕が残っていた。

広島・長崎で撮影したフィルムの編集と録音は順調に進み、二十一年四月中旬、完成の見とおしがたった。

ところが、ある日、日映本社の岩崎承製作局長に面会にきた二人のアメリカ軍人が、一通の書類を示した。それには、この「原爆記録映画」の完成作品だけでなく、使ったフィルムいっさい、ネガフィルムはもちろん、NGやラッシュプリントの一コマに至るまで、資料すべて残らずGHQに提出せよという命令であった。こうして、完成品「原子爆弾の効果(広島・長崎)」は、一九巻(一万五千フィート)、その撮影に要したネガ約三方フィートのいっさいは没収され、海の彼方へ持ち去られてしまった。

しかし、「原爆映画を返せ」との日本国民の激しい返還運動に圧倒されたアメリカ政府は、二十数年ぶりに、この“幻のフィルム”の返還をOKした。帰ってきた“幻のフィルム”が、テレビでいっせいに放映されたのは、全国民の記憶にまだ生々しいところである。

菊地、林、田子の三氏の撮影したスチール写真は、一部を映画に挿入したが、広島・長崎に派遣された仁科博士ら学術調査団の報告に多く利用され、広島・長崎の記録として公表された。

菊池俊吉(当時・二九歳)

二十年十月一日から二十一日まで、広島に滞在した。広島赤十字病院・陸軍病院宇品分院(船舶練習部跡)・通信病院・及び袋町・大芝両国民学校などの救護所をまわり、被害状況とその救護状況をカメラにおさめた。その数七八〇枚である。

大芝救護所で撮影した負傷者の写真説明に、咳・呼吸困難と記入したが、その大半は二、三日後に死亡した。また、負傷し子供を看護していた母親(三十一歳)が、まったく外傷もなかったのに、突然発病して危篤状態に陥った。原爆症を目前にみて、私は栗然とした。

東京から広島に来るとき、尾道までは汽車で来たが、そこからは汽車不通のため、尾道港から便船で宇品に上陸したのであった。

林重男

文化社(東京)写真部のカメラマンであった私は、社命により、昭和二十年九月三十日、学術調査団のメンバーに加わって、広島入りした。

主として、爆心から五キロ以内の物理的破壊状況を撮影して回った。十月十日まで滞在して、その間に約一〇〇〇枚も撮ったであろうか。カメラを向けるたびに、原爆の巨大な破壊力に背すじの寒くなるのをおぼえた。東京―広島間、往復とも鉄道を利用したが、山陽線も東海道線もベタ遅れで、片道に三十数時間もついやさねばならなかった。

木村権一(当時・四一歳)

支那事変が勃発したとき、新聞社をやめて陸軍運輸部(宇品町)に写真班員として志願し、中国大陆から南方戦線へと駆けめぐった。帰国後、運輸部から陸軍船舶練習部に転属したが、そこで私は被爆した。

その日、練習部の練兵場南側で、軍馬の厩舎移転作業に従事中、強烈な閃光とともに、左頬と左肩に熱湯を浴びせかけられたような感じがしたので、素早く地面に伏せた。とたんに、そばにあった古い厩舎が背中の上に倒れかかった。幸い少し間隙があって、下敷きにはならず、そのままの姿勢で閃光のあった方角を見れば、市の中央部に白煙があがっていた。大したことはたいと思っていますと、白煙の頭頂部が次第に膨れ上り、うすもも色に変わった。そして、あたかもキノコが立ったような形になった。約三秒くらいほど経ったかと思うあいだに、もの凄く太い爆発音が腹にひびいた。とっさに私は「カメラに収めておこう」と考え、立ちあがろうとしたが、倒れた柱が背中につかえていてどうにもならない。身体を反対にして、仰向けでジリジリと背中を地面にこすりながら、這うようにしてようやく脱け出た。

写真室まで約二〇〇メートルの距離を、一目散に走った。爆風で窓ガラスの飛散している部屋に入り、机の右抽出の中からカメラ(マミヤシックス)を取りだし、その場ですぐに撮ろうとしたが、キノコ雲があまりにも大きく広がっており、出張った雲の端の方は、太陽の光が射して黄色に見え、雲の裏側は柿色のところもあり、茶褐色・灰色の部分もあり、見るからに気持ちが悪い。ファインダーでのぞいたが、附近の邪魔物が写るので、また元の現場まで走った。もうその時は、練兵場には人影無く、思うにまかせてシャッターを切った(第三巻グラビア写真)。

しばらくして、西部の方から火災の煙らしいものを見たので、三階屋上まで鉄はしごを登り、市中を望見すると、おおいぶさった灰色のなかに、七カ所ぐらいのところから、火炎が立っていた。そのうちに全市に広がっていき、空一面、灰色の煙につつまれた。ここで全景を二枚続きに撮影した(第一巻グラビア写真)。写真室に帰る途中、医務室を見れば、たくさんの負傷者が行列を組んでおり、大食堂付近では、誰もが心配そうな顔で右往左往していた。中には、家族の安否を気づかい、もう帰り仕度をしている者もあった。私は、戦時下の心得として、常日頃から父や妻に、何時何処で別れることになるかも知れぬから、覚悟しておくと言っていたので、何もあわてることはなかった。大切な写真は、カメラに装填したまま、入口の防空壕の中に仕舞いこみ、戸締りを厳重にしておいた。この写真が辛うじて戦後まで残ったのである。

もう正午近かった。腹が減ったら戦争はできないの例えて、食堂に行ったが、係員も誰もいない。私は一人で残飯の雑炊を食べてから、営門を出て、宇品七丁目の電車道まで行くと、電車は各所で停っており、運転手もいない。架線が切れて垂れさがり、その間を負傷者を戸板に載せ、次々と運んでくるのであった。大変

なことになったぞと思いながら、専売局付近まで来ると、皆実町一帯は、火災の煙で見とおしがつかず、御幸橋東詰では、憲兵が立っていて、そこから市中へ立入らせないよう警戒していた。私は、向う岸の平野町の自宅に、どうかして帰ろうと考え、憲兵の隙を見て京橋川東土手下を、石垣伝いに行って比治山橋にたどりついた。途中、土手上の家が燃えて川の中へ落ちてくるので、私は上の方を注意しながら歩かざるばたらなかった。幸い引潮で川水が少なかったので良かった。橋の上に出て、西側へ渡ったが、昭和町の道路が灰色の煙で見えない。死んだ子供を抱えた親が、その中を気遣いのようになって泣き叫びながら走って行った。また、水道の傍で老人が死んでいた。私の父もこの様に死んでいるのではないかと心あせり、西側の土手伝いに平野町へと下って行った。前方に中国新聞社の社長宅が盛んに燃えており、傍に写真部の吉岡豊君が呆然として立っていた。お互いに安全を祈って別れ、そこから約三丁ほど西寄りの自宅を目ざした。焼け落ちて熱い瓦の上を渡っていく途中、焼けた下水蓋を踏込んで右足を奪われ、火傷した。ようやく自宅の跡に辿りついたが、むろん父や妻の姿は無かった。以前妻の父が、牛田の山に避難小屋を建てていたので、そこへ逃げたものと思った。また比治山橋にかえり、比治山を左手に見て上大河の汽車の線路伝いに、広島駅前に出、饒津神社の横の川土手を通った。もう夕闇が迫っていたが、対岸の浅野泉邸裏の砂浜では、所々で焚火をしたがら、多く負傷者が応急手当を受けていた。川面には、上流の工兵隊の兵士の死骸が赤く膨れあがって何人も浮いていた。遙か後方を見ると、広島街がきれいに灰土と化し、余燼がくすぶっている。紫色のもやが横にたたびき、深い哀愁を感じた。何とも言えないさびしさであった。

私は足を早め、山の小屋にたどりついたが、誰一人帰った形跡が無い。しかし、もうまっ暗な夜、どうすることもできず、錠をこじ開けて中に入った。仮眠しようと思ったが、心配で眠れず、翌朝四時ごろ小屋を出た。裏山の畠のトマトをかじってから、市内へ出て行った。白島の電車の終点付近では、電車が丸焼けとなって脱線し、運転手が投げだされたまま死んでいた。また、前方の通信局や通信病院など窓ガラスが飛び散り、火災のために黒くくすぶっていた。八丁堀から西練兵場へさしかかると、黒い雨に濡れた兵士の死骸が点々と横たわっており、凄惨このうえもない。紙屋町から妻の実家(大手町二丁目)、広島瓦斯会社近くに行く途中、住友銀行広島支店の所で、霧のように余燼の立っている中から、頭から顔までピツタリ血のついた小柄な人が浮んで、近寄って来た。それが、私の名を呼んだ。驚いてよく見ると、まさに父であった。かたく手を握りあって健在をよこんだ。私は急に元気が出て、妻の実家跡に行ったが、妻の両親は白骨死体に変っていた。繰り返して念仏を唱えて合掌していると、妻の兄弟も探しに来た。私は、なお行方不明の妻を捜し出そうと焼跡を歩きまわった。夏の日射しはきびしく、のどはカラカラに乾き、腹も減った。破れた上水道からもれ出る水を両手に受けて飲んだ。県立高等女学校付近に来ると、負傷した女性が倒れていた。見れば、肩のつけねから、大きな口をあけて腕が切れかかっており、水が欲しいと訴えた。私が布切れで水を浸ませて口もとに注いであげると、目を白黒させてよこんだ。とうてい生ききれなかったであろう。そこから千田町の広島文理科大学のグラウンドのプール付近に行き、一体みした。そこで救援隊から炊出しのにぎりめし二個をもらったが、胸につかえて気分が悪くなり、食べられなかった。

また宇品国民学校へも廻ったが、入口から土間に至るまで負傷者がぎっしり収容されていて足の踏み場もない。その中を血まなこになって捜したが、妻はついに発見できなかった。

この日から毎日妻を捜し廻ったが、一週間目に、同じ船舶練習部の運転部写真班の尾糠政美君と、皆実町で出会い、妻が丹那橋東詰の衛生部隊の板垣に貼られている死亡者名簿の中に掲載されているということを知った。すぐに駆けつけてそれを確認し、無言の遺骨を抱いて、牛田の山の小屋に帰った。在りし日の妻の日常の言葉や面影、その他のことが忍びだして、どうしようもない悲しみがこみあげて来た。

さて、被爆の日から数日後、東京から都築博士一行が船舶練習部に来られた時、放射能で死亡する者を重点的に写真撮影するよう依頼された。私は部隊の上司の許可を得て、博士と伴し、キャビネの組立暗箱を持って、たくさん負傷者の中を立廻ったが、中には撮影中に死んでいく者もあって、心ふさがる思いをなめた。負傷者の多くは兵士や軍属で、約五日間ぐらいうちに六ダースばかり撮った。その中から最も研究資料になる写真を、博士がネガのまま東京へ持帰えられた。その他の乾板は、進駐軍上陸前に船舶練習部構内の土中に深く埋めたり、今まで写した作戦用の映画フィルムと共に、確実に焼却したりして処分し、昭和二十年十月九日、軍隊から永遠に別れをつげたのであった。

この頃、すでに進駐軍が立入っており、部隊大講堂にある据付けの映写機二台も、進駐軍に引渡すため、一応計理部に預けた。その他カメラも相当数あったが、それがどうなったかは知らない。

尾糠政美(当時・二四歳)

宇品の陸軍船舶司令部(砲部隊)の写真班に所属し、砲部隊の行動を記録し、作戦報告・或いは防空対策の資料とするのが私の任務であった。

五日の日曜日に、楠木町の下宿に引越したばかりで、慣れぬこともあり、引越した夜は警報続出のうえ、大変暑くて寝苦しかったから、六日の朝は何時もより早く起き、八時にはもう部隊に出勤していた。

私たち写真班七人は、凱旋館の前庭で、毎日のごとく訓示を受けている時に被爆した。突然、強烈な黄色い光が目の前に拡がり、ドンと腹にこたえる轟音が伝わった。一瞬、その場に伏せた。しばらくして頭をあげると、建物の中にいた者が、窓ガラスの破片で顔を切って血だらけになり、悲鳴をあげていた。しかし、爆撃を受けた様子もない。

写真室に戻ってみると、棚が落ちている。ほとんどのガラスが割れている。「こればかり大きな爆発だな」と思い、兵器廠のガスタンクの爆発だろうかと話しあった。しかし、それをつかの間のことで、市内の方向に黒煙が立ち昇り、空は入道雲が幾重にも重なったような不気味な様相になっていた。

時が経つにつれ、市内各所が大火災となり、壊滅的な打撃を受けたことが伝わった。参謀部の某中尉が、命令で「市内の居住者は帰宅せよ。」と伝えてきた。私は皆実町に母と義姉、平野町に実姉がいたので、まず皆実町に向かって司令部を出た。

その頃、すでに表通りには、負傷者が続々と避難して来ていた。真黒く脹れあがった顔、ザンバラ髪、ボロボロに焼けた服など、文字通り幽鬼の群が続いていた。電車通りは、港に向う被爆者で埋っていたから、汽車の宇品線に沿って歩いた。皆実町の家は、少し傾いたぐらいであったが、誰もいない。隣り近所も人影がない。タンスが裏庭に吹きとばされていた。私は平野町の実姉の家に行くことにし、電信隊の前を通り、比治山橋まで行ったが、それ以上は火の海で、とても行かれない。そこで、下宿先の楠木町に向った。比治山の西側道路も通れそうにないので、比治山の裏側の段原町を、「水をくれ、水をくれ。」と呼ぶ声の中を泳ぐようにして歩いていった。

水槽の中に首をつけて死んでいる婦人、家の下敷きになっている子供や老人を目に見ながら、ようやく広島駅の手前までたどりついた。これまで、ガダルカナルの撤収作戦やブーゲンビル島の戦線で、多くの悲惨な場面を見てきたが、それどころではない惨状である。私は下宿先に帰るのを諦めて、宇品の司令部へ引返した。

翌七日、午前中は、司令部に殺到した負傷者の収容作業につき、似ノ島に収容する死亡者の運搬、ならびに負傷者の救護にあたった。午後は、収容所の活動状況を撮影のため、似ノ島に渡り、多数カメラにおさめた。軍医の指示により、焼けただれた負傷者や一か所に集められた死体などを次々に撮影した。

八日と思うが、憲兵隊の要請により、憲兵二人と私の三人で、市内の収容所を撮影してまわった。比治山や段原など二、三か所の収容所を経て、相生橋まで行き、爆心地に近い商工会議所の残骸にあり、その三階から相生橋の破壊状況を撮影した。この写真一枚は、現在、川原四儀氏が保管している。その後、水主町の県庁など撮したように思うが、その間、どこで憲兵と別れたか、はっきり憶えていない。

広島赤十字病院や福屋百貨店の収容所、被服廠の収容所、袋町国民学校の一部の収容所などへも行ったが、「苦しい、苦しい。」と訴える少年の姿、無残な姿の女学生、動員学徒など、ファインダを通して見ると、いつもの冷静さではいられなかった。

母を探しながら平野町に行ったとき、比治山の橋の下に集っている人々の中で、母の名を呼び続けたが、ついに見当らなかった。三次から出て来た兄と二人で、さらに母を求めて焼跡を歩きまわったが、これも徒労に終わった。現在まで行方不明のままであるが、西練兵場で火葬するために集められた死体の山の中に、あるいは富士見町付近にあった死体の山の中に、探す母がいたのではないかなと思われる。それとも、二十六年間、似ノ島の上の中に埋っていた死体の中にいたのではないかなと思う。このとき、使用したカメラは、キャビネ暗箱・マミヤシックス・三五ミリ版ライカとハンザーキャノンであった。

川原四儀(当時・二四歳)

陸軍船舶司令部の写真班員であった私は、被爆の翌々日八日に、司令部の命令で、軍の施設及び焼跡の臨時収容所数か所を撮影した。使用カメラは、ライカ、セミパール二機である。

終戦とともに占領軍が進駐することになり、司令部の命令で、多くの機密書類にまじって、被爆者の写真も焼却処分にあつた。占領軍に発見されたら厳罰というわけで灰にしたのであるが、今にして思えば、「歴史の証人」として残しておくべきであった。

しかし、焼却した数百枚のうちから、二十五枚だけ、私はひそかに残しておいたのである。

山田精三(当時・中国新聞社運動部勤務)

その時、私は広島市郊外の水分峡（ミクマリキョウ）（安芸郡府中町）の入口を歩いていた。爆心地から二キロメートルくらい離れた地点である。上空を、機体を光らせたB29が飛んでいた。当時、もうB29は見なれた存在で、そう珍しくはなかった。ひょいと見たら、飛行機の下に白い落下傘があった。たしか三個あったように覚えている。雲一つない澄んだ青い空。朝日にキラキラ機体を光らせ、旋回するB29、ゆらゆら落ちてゆく落下傘、きれいだった。

そんなとき、急に目の前で写真のフラッシュ、マグネシウムをたかれたような、強烈な光りがきた。「何だろう、友人と二人、そんな話をしていた。そのうち、いとも不思議な現象があらわれた。池の中に小石を投げこんだとき、起る波紋、ちょうど、そのように、松の向うから虹が次から次と出てきた。とても美しかった。

ドカーン、ものすごい爆発音と爆風が襲ってきたのは、その直後である。

すぐ目の前、直径三〇センチメートルもある松の木が大きくゆれていた。しばらくして、いわゆる原子雲がムクムクと頭をもたげてきた。真赤、いや違う、黒味がかった朱色、そんな気もする。とにかく、過去一度も見たことのない、あざやかで、強烈な色だった。

私がシャッターを切ったのは、最初、ムクムクと原子雲が頭をもたげてきたとき(第一巻グラビア写真)。そのあと、最初の雲はかなり高く上がり、そして、次の大きな雲の魂がまた出てきた。私はシャッターをつづけて切ったが、あまりにも大きいため、ファインダーに入らなかった。

松重美人

あの朝、私はどんな事態が発生したのか、何も判らないまま、勤務先の中国新聞社と広島師団司令部へ駆けつけるべく、翠町の自宅を飛び出した。師団司令部へは、私がその報道班員でもあったためであるが、都心はすでに猛火に包まれており、行手はさえぎられていた。引返して、御幸橋西詰の交番所前に到着したときは、炸裂後すでに二時間ばかりたった十時半ごろであった。そこには、ただ一人の警察官が、半裸で群がって来る何百人もの被爆者の傷の手当をしていた。一人残らず火傷で、火ぶくれが破れ、皮膚がボロボロになって垂れさがっていた。なかには、「痛い、痛い!」と、泣き叫びながら、路上をのた打ちまわっている者もある。

油の一斗罐をぶち抜いて、応急手当をしている警察官も、頭を負傷しているらしく、無造作に巻いた包帯が、帽子の下からのぞいている。

時がたつにつれて、負傷者の数はぐんぐん増えて、あの長い御幸橋の両側が、負傷者でいっぱいになった。髪は焼けちぢれ、衣服は引き裂かれ、男女の識別もつかない。全身焼けただれて意識もうろうの母親の体にすがりついている幼な子は、泣き声も出ないらしい。

「熱い。助けてくれ。どこかへ連れて行ってくれ!」

「水、水、水を飲まして……」

絞るような断末魔の声が肺腑を突く。鬼も顔をそむけるであろう空前の惨劇のなかで、今、私はカメラ・マミヤシックスをかまえている。それを撮ろうとしている。この「私」を、尋常な神経を持つ人間ではないと言うであろう。冷酷無残な行為と思われるに違いない。

私は一瞬心を殺してシャッターを切った。いつの日にか告発すべき証拠として、この惨状をありのままに撮影しておかなければならない。私は、新聞社のカメラマンとして、また陸軍の報道班員としての使命がある。

呻吟する多数の負傷者に、許しを乞う気持ちで、非情なシャッターを切ったのであったが、二枚目を撮るとき、私は立っていた。ファインダーがうるみ、かすんでいた(第一巻グラビア写真)。

それから半月後、安芸郡温品に疎開していた新聞社で、このフィルムを現像した。暗室は横穴防空壕を予定していたが、設備があるわけではなし、折りからの月明りを利用しておこなった。仮眠テントのそばを流れる岩清水で水洗いし、近くの木の子にぶらさげての乾燥であった。これほど心のやり場もない苦しい撮影は、決して二度とこの世にあってはならないと願っている。

宮武甫

当時、私は朝日新聞大阪本社写真部員で、中部軍報道班員も兼ねていた。

広島が「新型爆弾」らしいもので全滅したという報が伝わると、中部軍では、ただちに情報収集と被災者の厭戦気分掃などの任務で、在阪各新聞社の記者・写真部員、放送局のアナウンサーなどの報道陣と、将校・下士官・兵約五〇名の宣伝工作隊が編成された。

一行が臨時列車で広島へ着いたのは、八月十日であったと思う。これには、放送局の宣伝車も貨車で重載するという大がかりなものであった。

まず、爆風で押しつぶされた広島城天守閣の横に、テント張りの基地を作り、それぞれ活動をはじめた。

「焼夷弾」に焼かれた他の被災地では、かなりひどい焼跡でも、判別できるものが残っていて、すぐ復興に立上がる人々の元気な姿が、あちこちに見られた。しかし、広島は町々は違っていた。一面粉微塵の焼野が原である。あとから考えると、私は暴心地を撮影して歩いていたのであろう。ビルは腰がくだけ、天井は吹抜け、鉄筋はアメのように曲っている。常識では考えられない状況であった。

焼跡には、復旧に立上がる人たちもなく、さながら「死の町」といった異様な印象が、わずか三日間の取材であったが、今でも強く目に焼きついている。

私は、まだくすぶり続ける被爆地や、救護の状況、爆風で倒された宇品方面の民家を、コンタックス・カメラを使って、35ミリフィルム七〇枚ほどに収めて引揚げた。

すでに「新型爆弾」とは「原子爆弾」らしいとうわさされていたが、帰阪ののち、トルーマン放送で「原子爆弾」だと聞かされ、謀略とは思いながらも、慄然とした。

松本栄一(朝日新聞東京本社出版写真部勤務、当時三歳)

草も木も、今後七〇年は生えない不毛の地になると、当時ほまことしやかに伝えられていた。被爆の状況を撮影のため、長崎・広島に行けと言われたとき、まず、脳裡にきたのが、この得体のしれない惨害のことであった。残留放射能のことも二次感染のことも、甚だ漠然としていた頃なので、私たちが現地を送り出す上司は、かなりの決断が必要であったと思われる。

東京で得ていた情報では、終戦を迎えて、長崎では跡片付けも手につかず、惨状もそのままになっているということなので、まず長崎に直行することにした。

さて約二週間にわたって長崎の取材を了え、広島へ向ったが、折悪しく枕崎台風(九月十七日)に遭い、ズタズタに切られた鉄路を見かぎり、山口県の下松から内海航路の運搬船の便を見つけて、これに乗りこんだ。この木造のポンポン船は、広島にいる肉親や親戚たちの安否を気づかう人たちが満員であった。

宇品に上陸した私は、広島市内に向かって足を運ぶにつれ、長崎で味わったと同じような驚異をここでも見せつけられた。ただ一発の爆弾の炸裂で、本当にこれだけ広い範囲の破壊ができ、何万ともしれぬ人命が消され、何十万にも及ぶ市民に治癒もおぼつかない傷を負わしたのか。それまでに各地の爆撃の被害などを見て来たが、いずれも何十何百の爆弾であり、焼夷弾の数による被害であったことにくらべ、私はすごく恐怖を感じた。放射能の恐ろしさについては、ずっとあとになって判ったことである。

「科学朝日」という雑誌に掲載予定の取材であったから、例のドームを中心にして一〇〇メートル、二〇〇メートル、三〇〇メートルと地図上に円を描き、その中での建造物や人体などの被災の状態を撮影して歩いた。これは結局足を使って焼土の中を歩く以外に手はなかった。

中古の軍靴の、重い足を引きずるようにして、廃墟の中を歩きまわるのは、時間ばかりかかって、一日の仕事の量は知れたものであった。夕陽に映えて、一本の煙突が、緑い地の底から突っ立っているのを、流川町の中国新聞社の残骸の屋上から眺めた印象は、いまだに忘れることのできないほど、強烈なものであった。

食糧も乏しいときであった。当時の朝日新聞広島支局の若い人たちと手分けをして手に入れた僅かな米や、イモなどで自炊をしながら、山手に残った盲学校の寄

宿舎を根城にして活動した。こことて、天井も屋根も吹き飛ばされて、寝床の中からは、仰げば星空がながめられた。こうした生活を約一〇日ほど続け、約七〇〇枚(使用カメラ・ライカ)を撮影して、広島を発った。

岸田貢宣

広島師団司令部の報道班員であった私は、あの日、司令部の命令で、高田郡の吉田へ出張していたが、広島空襲の報にとって返し、太田川の岸伝いに大芝土手にたどりついたのは、原子爆弾の炸裂後四時間もたっていたであろうか。

ボウボウの髪、ふくれあがった顔、めくれて垂れさがった皮膚、全裸・半裸の姿、この世とは思えない惨状である。路傍には、火傷で手も足も顔も腫れあがった人々がうずくまっている。「水、水、水をください。」と、うめいている人もあるが、多くは声もなく動きもない。すでに死んでいる人もあるようである。

郊外へ郊外へとのがれていく避難者をかき分けるようにして、私は市内に入っていた。ようやく基町にたどりついたが、陸軍病院や輜重隊はどこへいったのだろう跡形もない。広島城の天守閣も消えて無くなっている。傍の溝の中には、白衣や褌のままの兵士が、頭を突っこんで死んでいる。溝の黒い水を求めて、腹這いでやっとたどりついて、そのままこと切れたのであろう。

ふと、われにかえった私に、傷ついた無残な格好の兵士たちが、あちらこちらから寄って来た。まともに歩けない人たちがばかりである。私がまともな服装で負傷もしていないのをみて、救助を求めに来るのであった。

「いまに衛生兵が来る。今しばらく辛抱してください。」

どうすることもできないで、そう叫ぶ私の声はうつろであった。

報道班の私は、このとき肩にカメラ(コンタックス)をさげていたが、どうしてもシャッターを切る気になれなかった。

翌七日になって、この未曾有の被害状況を後世に残さねばならないと、ようやく決意し、廃墟の町々をフィルムのある限り写しつづけた(第一巻グラビア写真、その他)。

松重三男(当時・レントゲン技師)

その時、私は安佐郡安古市町に住み、病気療養中であった。

ピカッと光った一瞬、屋外に飛びだすと、広島市の上空に、オレンジ色に似た火球が、尾を曳くようにして、超スピードで上昇するのを目撃した。急いで部屋に引返し、友人から預っていたカビネの暗箱で、てのオレンジの雲を撮影した。炸裂直後二分の光景で、風向きなどを立証する貴重な記録となった(第二巻グラビア写真)。

このあと、午前九時十五分頃、一時間たっても残っているキノコ雲を撮影、そして、正午ごろ、市の上空いっぱいには拡がった雲と煙を撮影した。

最初に私が目撃したのは、キノコ雲になる前の光景で、名状しがたい美しい色彩の火球の下に、水泡のような灰色に近い白煙が噴きあがっていた。

時間を区切って撮影したのは、まったくの偶然で、もちろん原子爆弾とは知らなかったが、特殊な爆弾だとは直感していた。

そのうち、奥の可部方面へ被災者を運んでいくトラックが、自宅の前を数十台通りすぎるのを見たが、あまりにも無残な姿であったから、撮影するにしのびなかった。ただ一度だけ、記録にとどめておこうと思ってシャッターを切った(第一巻五六八頁所載)。

この避難する写真の乾板は、いつのまにか紛失したが、残った古い写真からは、二〇人ばかりの避難者が、荷台の上に横たわっている姿が薄く出ている。

故川本俊雄(長男・川本逞雄報告)

当時、大手町五丁目に店住、家は県警察部の要請で警察寮になっていた。その関係から警察部の写真班員に委嘱されていた。

五日、西条へ出張し、六日の朝、広島に帰る予定であったが、遅れて帰ったため被爆からまぬがれたのであった。

帰って来てから、爆心地を中心に約一〇〇枚ぐらい被爆状況を撮影した。しかし、そのうちから幾枚かがアメリカに持ちかえられたとも言われる。トラックの上から撮影したものが多いようである。

林寿彦(当時・五〇歳)

私は当時、福屋デパートの商品課長から、南観音町の三菱総合配給会社の総務部長として出向していた。この会社は、三菱造船所の従業員とその家族数万人に、生活物資を配給する会社で、実に多忙な勤務であった。この会社の寮で被爆したのである。

私は山が好きで、広島山岳会設立のメンバーの一人でもあり、若き日にたびたび北アルプスへ遠征した。山男の伴侶といえどカメラというわけで、ローライフレックス、ライカなど数台を愛用していた。

被爆後は、家族の疎開先である賀茂郡志和堀で生活していたが、同胞避難会(立町)のお世話をすることになり、毎日、広島へ通った。そして、山へ向けて切っていたカメラ(スーパーセミ)のシャッターを、瓦礫の町へ向けて切ることになった。

被爆から一か月後の広島には、まだバラックらしいものは一軒も建っていなかった。しばらくして、いまの天満屋の横に、胡神社の粗末なやしろができた。

そして、どこで手に入れたのか、破れたいこが置かれた。見渡すかぎり焼土の中に、ポツンと建ったので鮮かな印象を受けた(写真・第二巻二九二ページ参照説明の二十二年は二十年の誤り)。

私の写真には、高所から眺めたものが多いのは、福屋デパート、中国新聞社、市役所などの焼け残ったビルの屋上から、たびたび撮影したからである。

岸本吉太(当時三三歳)

目に入れても痛くない娘、澄江(当時・八歳、済美学校二年生)を原子爆弾失った私たち夫婦は、その年いっぱい、何をする気力もたく無為に過した。しかし、無残な原子砂漠にたたずんでいるうちに、この広島悲劇を記録にとどめておこう、それが生き残った一人の市民としての義務であろう、一そう思った私は、二十一年の春ごろから、爆心地を中心に市内の各所をカメラに収めてまわった。幸い写真館を経営していたので、写真材料は豊富であった。また、広島の復興ぶりを記録に残しておくため、同じ位置の被写体を一年おきに十年間写し続けた。

深田敏夫

崇徳中学校(旧制)在学中、学徒動員令により、陸軍兵器廠に出勤し、繰上げて卒業後も、そのまま同廠で勤務にはづんでいた。一七歳の若い血潮は、日本の必勝を強く信じ切っていた。

八月六日の朝、六時四十五分ごろ、張り切って大芝町の自宅を出て、白島の電車終点近くの自転車店に向った。この朝、物資欠乏の折りながら、ようやく手に入れた新車に乗りかえる日であったからである。

自転車店に行くと、もう二、三時間かかるとのことで、待っていても出勤時間に遅れてしまう。やむなく諦めて兵器廠に向った。途中で、古い愛車ラージがパンクし、それを押して出勤したが、朝とはいえ、汗でビショリ、暑い日であった。朝礼にぎりぎり間にあった。

朝礼を終えて、二号館の西口に着き、今日の作業の指示を待っていたときである。もの凄く激しい、今までにない閃光がきらめいた。明るいダイダイ色のように感じた。「何かが起きたぞ。」と直感し、兵器庫の奥の方へ走りこんだ。その直後、爆風に吹きとばされた。兵器庫の中は、砂と埃で一瞬のうちに暗やみとなり、私はずっと更に奥の方へ転がされていた。幸いにも負傷はしなかった。左側を見ると、兵器庫の鉄の扉がひん曲り、その隙間から差しこむ光線が目に入った。それを目当てに駆け寄り、体をななめにして外に出た。まだ屋外は砂埃でかすんでおり、遠方までは視野がきかない。西方の上空を仰ぐと、もの凄い煙が立ち昇っている。「何かがあったな。」と思い、兵器庫の二階に駆け上り、北側の窓から首を出してびっくりした。かつて見たこともない大爆煙である。

さて、この頃、学友のなかでカメラに熱中している者がかなりいて、私もその一人であった。私は、ベビーパール(小西六製)というベスト半截判のカメラを、いつもズボンの後ポケットにしにばせていた。フィルムも入手困難な時代であったが、わけのわからぬフィルムながら、ちょうど愛機に装填していた。

思わずポケットに手がかかる。だが、ここは兵器廠内である。見つかるは銃殺ものである。市中においてさえ、カメラを持つことは許されない時代で、その嚴重な取締りは、現在では想像もできないであろう。広島市は軍事基地であったから、特に防諜にきびしかったとも言える。

しかし、手はカメラを取り出して、級友の江田君が誰かに付近の見張りをたのみ、数分間のうちに四枚のシャッターを切った(第四巻グラビア写真)。

それが、世界最初の原子爆弾の爆煙であるとは、夢にも思わなかった。兵器廠内の将校も兵士も、また工員の誰もが、火薬庫が爆弾の爆発としか、思い至らなかつたであろう。

そのあと、廠内を見ると、たくさんの負傷者が右往左往している。二階にいた女子挺身隊員は、ガラスの破片で一〇数人負傷、中には重傷の人もある。鉄筋コンクリート建の油の倉庫では、油を積んだ鉄骨の棚が吹きとばされ、若い工員の一人は、それに頭をぶつけ、油の中に顔を突っこんだ。それを引っ張り出して助けたが、数日後に死んだ。

午前十時ごろであったか、動員学徒に対して、家に帰れる者は帰れとの指示がでた。

電信隊(現在、進徳高校)の南側を通り、タバコ屋の所(現在、皆実町二丁目)を左に曲り、被服廠正門前に抜ける道の途中で、初めて倒れている婦人を見て身ぶるいをした。御幸橋、電鉄会社前の方は火災で通行できないと、すれ違う人から聞いたので、やむなく兵器廠に引返した。もうこの頃、無残な姿の負傷者が溢れていた。再び、家に帰って来るように言われて、今度は宇品線鉄道沿いに北へ道をとった。大洲鉄橋の中央まで来たとき、向うから来た人に状況を聞くと、大洲から広島駅、二葉山付近へは通り抜けできないという。私は、鉄橋の中央部の線路待避所に坐りこんだ。

的場町の方を見ると、電車停留所付近から南に向って、もの凄い火災である。何分たったか、大正橋近くまで燃えあがったのを見て、まとも兵器廠に引返した。時間は、昼をまわり午後一時頃か。空腹にはなるし、家のことも心配だし、頭の中はゴチャゴチャである。どうしたものかと、廠内の職場にもどると、顔見知りの人が昼食を食堂でとるように教えてくれた。食堂は、いつも満員なのに、今日はまばらである。ほとんどの人が、負傷者の救護や収容作業についていたからであろう。

二時が過ぎた頃、また家に帰ってみようにとのことで、三たび帰途についた。江田君と一緒にである。こんどは比治山の南側の電信隊横を通り、鶴見橋を渡り、竹屋町か田中町の土手に出た。一面ただ焼野が原である。熱気にやられてはいけなそうと思い、江田君と防火用水槽で作業衣をビショリにぬらし、頭からかぶって、建物疎開跡の道を右し左ししながら西へ向った。

ようやく大手町の川土手(現在の平和大橋の所)に出たときには、作業衣は熱さでパリパリに乾いていた。ここまで来る途中の惨状は、もう口では説明しきれない。川下の水主町辺の元安川の砂浜を見ると、何十人か何百人かの負傷者や火傷者が、悲鳴とも何ともつかぬ声をあげて、苦しんでいる。

中島町の方へ渡りかけたとき、将校と二人の兵士に出会った。土橋方面の様子を聞くと「お前たちは何処に帰るのか。」という。大芝町の自宅へ帰ると答えると、今から基町の師団司令部の様子を見に行くから、その方から帰ったほうが良い、一緒に行こうとさそわれ、そこから土手下の川べりを歩いて元安橋へ向って歩いた。元安橋の土手の上でみると、電報配達の人が、自転車にまたがったまま、黒焦げになって倒れている。また、母親が乳飲み児を負い、もう一人の子を胸の内に抱いたままで死んでいた。

ここから、産業奨励館の残骸の立つ土手下を通して相生橋東詰に出た。何十人か、それ以上の人が倒れている。馬も焼けて火ぶくれになっている。

相生橋の上も惨憺たる有様である。ここで将校たちと別れて左官町に出た。電車通り沿いに歩いて十日市町の所から横川線の方へ曲った。横川の終点から国鉄横川駅の東側に出て、第二踏切(現在・国道五十四号線)の所から、大芝の自宅の方を見ると、やはり焼野が原である。大芝公園の記念碑の所に大きなドングリの木があったが、よく見ると、その木の葉がちらついているように見えた。ひょっとすると家は焼けなかったかも知れんぞと、一目散に走って行くと、大芝国民学校裏門近くから、煙にかすんだわが家が見えた。一っ気に走った。

家屋は、爆風のためにひどくやられ、ただ在るというだけの有様であった。家には骨折で寝ていた父と姉が二人、そして近所に嫁いでいる姉がいたが、いずれも無事であった。三番目の姉は、日興證券に勤めていたから死んだらうと思っていたが、前日に建物疎開作業に出て気分が悪くなり、出勤していなかったため、命拾いをした。

わが家も、二度か三度火がついたが、近所の人や大芝公園の防空壕にいた兵隊、鉄道部隊の兵隊、あるいは自動車学校の人などが消火につとめられて、火災を免れたと聞いた。

六日の夜は、ほとんどの人が公園で野宿したが、私は壊れたわが家の中で、蚊帳をかむり、日本刀を抱いて一人で寝た。近所の人々は夜遅くまで、焼跡に放水して延焼防止につとめていたが、そのため、わが家の所から大芝町のほとんどが火災をまぬがれたのであった。

終戦後、母の実家(現在・安芸町福田)に行き、疎開していた写真の現像液や現像タンクで、フィルムを現像し、小川で水洗いした。その中に、兵器廠の窓から撮影した「原子雲」四枚があったのである。

放射能の最も強烈な爆心地を通過したにもかかわらず、フィルムがやられなかったことは、今もって不思議でならない。

空博行(当時・二八歳)

現在、広島大学医学部(霞町)になっているが、そこは私たちが終戦まで勤務していた陸軍兵器廠であった。今も赤煉瓦の建物が残っており、つわものどもが夢の跡をとどめているが、この赤煉瓦建には、小銃から野砲にいたるまでの大小の兵器、無線機などがぎっしり保管してあった。第一線からの要請にこたえて、これらの兵器を軍用船に乗せて運んだ。

あの朝、私たちは三号兵器庫の二階で朝食をしたためていた。閃光に続いて爆発音がとどろき、爆風が襲った。私は北側の窓から南側の窓まで吹き飛ばされた。

ガラスの破片で顔は血まみれとなったが、附近にいた女子挺身隊たちも、みんな顔を真赤に染めていた。

私たちは、この傷ついた女子挺身隊員を励まして、ひとまず比治山の防空壕に避難した。

暫くすると、罹災者がどんどん比治山へ逃れてきた。しかし、ここには救護施設がないため、山を降りて兵器廠へなだれを打って逃げこんできた。兵器廠では、車輛庫三棟を解放して、これらの人々を収容した。廠内には小さな診療所があったが、軍医も看護婦もおらず、衛生曹長が所長格で、作業員の小さな傷や風邪の手当をほどこすのが精いっぱいという貧弱な施設であった。

そこで、兵器廠の無傷の作業員が総動員で救護にあたった。タネ油は兵器の手入れに使用していたので多量にあり、火傷の手当に使った。私も救護作業にあたっていたが、ガラスの破片で負傷した顔の痛みが激しくなってきたので、ひとまず安佐郡深川の自宅へ帰った。

二日後に兵器廠へ出勤したが、地獄図さながらであった。死体は空地に運んで火葬こふしたが、死亡者続出で、白煙は夜も昼ものぼっていた。

こんなわけで、カメラはいつも携帯していたし、兵器廠の倉庫には、南方で押収した戦利品のゴダックのカメラやフィルムがたくさんあったが、惨禍の衝撃で撮る気が起らなかった。

原爆廃墟(ツアイスの大名刺判)に収めておこうと思ったのは、翌二十一年の春であったと記憶している。ある朝、深川を自転車で出発。まず流川町から八丁堀、大手町、中島町、水主町、千田町のコースをめぐる。バックフィルで二十四枚を撮影したが、県病院(水主町)あたりには建物がなく、異様なまでに高い煙突が焼跡にボツンと立っていて、ひどく不気味な印象を受けた。

北勲

あの朝、私は气象台に勤務中であった。爆心から相当距離があるのだが、江波山の高台にあるので、さえぎるものがなく、強い爆風に飛ばされた。官舎が江波山の下にあったから家族は無事で、市中から続々とのがれてくる被災者の救護に立ち働くことができた。

カメラを瓦礫の町へ向けるようになったのは、その年の九月末頃から十月中頃までであった。広島もいつの日にか復興するであろうが、この悲惨な姿を写真に残して、戦争がふたたび起きないようにしなければ――原爆から免れた市民の犠牲者に対する義務であると思ったからである。

広島城跡、大手町、紙屋町、八丁堀などの都心部をはじめ、比治山、段原町方面にかけて、精力的に撮り歩いた。四十枚以上も撮影したであろう。

黒石勝(当時・広島赤十字病院レントゲン技手)

原子爆弾の炸裂直後、広島赤十字病院(当時は日本赤十字広島支部病院と称し陸軍病院赤十字分院となっていた。)の北側にあった山中高等女学校から出火し、隣接の看護婦の寄宿舎に延焼、病院も危険に陥ったが、医師・看護婦をはじめ、入院中の軽症患者たちの必死の消火作業によって食い止めることができた。火災の心配が去って、ほっと一息つくひまもなく、こんどは被災者が市中からどっと押し寄せて来た。そのほとんどは熱閃光によって、顔や身体を焼かれた人々であった。

私が撮影した写真は、主として赤十字病院へ逃がれて来た人々のうち、手術前と手術後の医学的資料である。五〇枚近く撮影したであろうが、このうちの多くは、その後、亡くなっている。

病室に収容し切れず、廊下や庭先に横たわり、苦悶にあえぎながら医師の手当を待つ、あの日の被災者を思うかべると、今でも思わず合掌するのである。

斉藤誠二(当時・広島赤十字病院病理検査技手)

戦時中の広島赤十字病院は、外来患者は一般市民の治療をほどこしていたが、入院患者は全部陸軍の将兵であり(数名の海軍軍人がいたが)、病院長も竹内鉦陸軍軍医少将であった。

被爆時には、医師二十七人、看護婦・看護婦生徒四四二人、薬剤師・職員八五人、及び入院患者二五〇人がいた。

強烈な爆風によって、診療室も手術室も病室もことごとく破壊され、大手町九丁目方面から襲って来た火の手が、看護婦の寄宿舎を焼き払い、本院に迫った。このとき、院内にいた者は軽症患者も含めて、すべて立ち上って消火にあたったが、急ぎ来援した海軍(睦部隊)の特攻隊員かもしれない。)の救援隊のめざましい活躍によって延焼をまぬがれたのである。

竹内院長が重傷で動けなくなったのをはじめ、医師や看護婦たちも出勤の途中で被爆したり、病院内や寄宿舎で重傷を負い、無傷の者は数えるほどしか居なかった。私は幸い無傷であったから、被災者の救護にあたっていたが、救急材料も底をつき、食糧もなくなった。そこで、私と林庶務課主任は、入院患者たちの協力で、水道管が破裂して噴出している構内の空地で、夜、おかゆの炊出しをしたが、皆にゆきわたることができず、ほとんど飲まず食わずの救急活動が続いた。そうこうしているうちに、周囲が明るくなり、七日の朝を迎えた。昨日からの死者は、病院前に並べたが、訪れた親類縁者たちが、泣きながら捜しまわる姿に、胸の詰まる思いがした。

私が仕事をしていた地下の病理検査室に保管してあったレントゲンの乾板一二枚は、放射能を浴びていた。地下室に厳重に保管されているものがカブるとは!原子爆弾の恐怖を知って慄然とした(第一巻・八六ページ参照)。

私が、その年の夏から秋にかけて撮影したものは、主として広島赤十字病院内部のものであって、負傷者ばかりではなく、病院の破壊状況も含まれている。

佐々木雄一郎(当時・二九歳)

新型爆弾によって広島が壊滅したという情報を東京で聴いた。当時、私は日本写真公社に勤務し、内閣情報局の「写真局報」のカメラマンでもあった。

八月九日、公社から派遣されて、被爆の惨禍も生々しい広島駅に降り立ったが、一望の焼野が原と化した市街地を見てただ茫然、言葉や文字では表現できない異様な感に打たれた。

広島は、私のなつかしい古里でもあったが、憲兵や特高警察の監視が厳重で、撮影まかりならぬと取材活動を禁じられた。ついに一枚も撮影せず、また家族の安否も確められず、焦燥感にかられながら、やむなく帰京した。

八月十五日、終戦となり、同時に公社も解散し、退職金代りにもらった三五ミリフィルム一〇本と、私物のハンザキヤーンを持って、十八日に広島に帰って来た。まず西十日市町(爆心地から西方七〇〇メートル)の自宅附近に向って、約三キロメートル焼跡の中を歩いた。母と長兄家族、妹たちが住んでいた所は跡形もなく、勿論誰の姿も見当らない、軌道からはみ出て焼けた電車が近くにあり、カメラに収めようと近づいてみると、その電卓に長兄(利男)の行先が書いてあった。「あッ、生きている。」と思うと、もう目がしらが熱く、その足ですぐ田舎の叔母の家すなわち避難先をたずねて行っった。ここで長兄から家族の様子を知らされた。長兄の話では、兄は倒壊物の下から母(トク)と兄嫁(道子)を救出しようとしたが、猛火が襲って来て、わが身が危険に陥ったため、やむなく火焰をくぐり、辛うじて天満川に逃げた。夕方まで川の中につかって火災の熱気をしのいでいる固に、黒い雨が降り、泥水と化した川には、木ぎれや死体がたくさん流れて来たという。無傷であったこの長兄が、八月三十日に原爆症状を発して死亡、また、長兄の幼い三男(道孝)は、そのとき近所の婦人に抱かれていたまま行方不明となり、現在なお消息が判っていない。

千田町の広島貯金局(爆心地から一・八キロメートル)に勤めていた次兄(末爾)は、爆風によるビルの窓ガラスの破片で頸動脈を切り、赤十字病院に収容されたが、二日後の八日に死亡。兄嫁(喜久子)と次女(潤子)は鉄砲町の家で即死。七歳の長女(由子)は、白鳥九軒町(爆心地から一、五〇〇メートル)の祖母の家でいたが、直接熱閃光を浴びて衣服に着火、半身を火傷し、その夜ついに息を引取った。

姉(八重子)は、わずか一歳の次女(智美)と共に、塚本町(爆心地から四五〇メートル)で被爆即死。社用で町に出ていた兄(勘六)は、被爆直後、似ノ島へ避難してから八月二十三日に死亡。一二歳の長男(稔)は、動員学徒(広島市立中学校)として小網町の建物疎開作業に出動中、道路上で被爆し、佐伯郡五日市町まで逃げたようである。昭和三十年に、新聞紙上で五日市町のお寺に遺骨が保管されていることが判った。妹(富美江)は、天満町の楠原製罐会社で被爆死亡した。

このように肉親一三人が死亡した九か所を歩いてまわり、一つ一つその現場を確認してフィルムに収め、冥福を祈った。これが私の撮影活動の動機である。この

時から廃墟と化した死の町のあちこちを歩きまわり、あとに遺された家族のことを思いながら、シャッターを切った。

焼野が原を写し歩いているうちに、ただ一発の爆弾の惨禍が如何に激甚であるかということを改めて知った。その非情非道性を赤裸々に撮影しておくことは、いつの日か何かに役立つであろうと、カメラに追い続けているうちに、気がついてみると二〇数年も経っていたというわけである、

昭和四十六年(一九七一)十一月二日、本誌編集担当者の小堀氏と似ノ鳥に渡った。二六年間、埋められたままになっていた当時の被爆死亡者の遺体が、次々に発掘され、作業員の判断ではついに六一七体(法医学的には、二二〇体という)に達したのであるが、まことに沈痛のきわみで、合掌しながら、その発掘状況をカメラに収めた。残船無類の原子爆弾の傷あとは、このようにまだまだたくさん広島には残っているのである。

(註賀茂郡西条の傷疾軍人療養所から原子雲を撮影した鶴田藤太郎氏は、第一巻の五〇三ページに、また、原子雲その他被爆状況を撮影した尾木正己氏については、第二巻の二二四ページに記載されているから略す)

編集後記

戦後すでに二六年を経たが、原子爆弾による惨禍は、なお消え去ってはいない。徹底的に破壊された家庭の悲劇、被爆者の放射能障害など、一般の戦災都市とは違う多くの社会問題が、経済大国と謳われるその陰に、悪魔のごとく伏在しているのである。

被爆者は、あの日の凄惨な体験を、今、眼前に見るようにありありと語り、戦争を憎み、原子爆弾の没人間性を訴える。そして、この事実を後世にはっきりと伝えることは、広島の実任であると説く。

広島市が、広島原爆戦災誌の編集をおこなうことについて、被爆者はいうまでもなく、多くの人々から、多年の願望がとげられるという思いでもって、予期しないほど多大のご協力を得、担当者は深い感動を受けた。

全国各地から、次々に送られて来る新しい資料や体験記は、戦災誌の記述に貴重な肉づけとなり、全五巻としてここに公刊の運びとなったが、一日も早くという人々の声が、編集作業を遂行する上で、常に大きな励ましとなり、推進力となったのである。

第一編総説は、序章を含めて五つの章から成る。広島という軍都の歴史的な背景の上に、突如、原子爆弾第一号が投下され、一瞬に壊滅。死の世界と化した広島が、終戦後、世界の平和祈念の聖都として、多くの苦難の中に新しくよみがえっていく模様を記述した。

第二編各説も、五つの章から成る。まず広島市内を三六地区(戦後合併した井口・中山・戸坂を含む)に分け、それぞれの地区での被災状況を項目別に記述した。各地区はきわめて密接な相関関係を保ちつつ、終局的には、広島市全域の状況が把握できるように企画した。記述するにあたって、市域全般にわたる普遍的な事象であっても、必ずしも各地区ごとにそれを記入していない面もある。それは、他に重要な課題がある場合とか、重複のわずらわしさを避けるために割愛したのであって、他の地区に記述されていないことであっても、その地区独自の事象とは限らない。すなわち、程度の差はあるとしても、各地区ごとに類型的な事象がたくさん存在しているということである。

各章の記述は、主として「広島市原爆戦災誌資料表」(以下、資料表と呼ぶ)を基礎資料とし、これに被爆者や関係者の手記・談話、あるいはこれまでに出版された原子爆弾被災に関する多くの図書なども、適宜に使用して、実状の把握につとめた。

前記の資料表は、市内各地区用・教育機関用・官公庁用・事業所用・宗教団体用・市町村用の六種に分けられており、これは広島市が調製した。「各地区」の資料表は、広島市が委嘱した地区委員八二人(主として被爆者)によって、それぞれ項目別に調査記入された書冊である。内容は、主要項目を一二項目に分ち、そのうち七項目は、さらに延二九項目の細目に分けてあり、時間的な微妙な推移・変化の追求につとめた。

資料表に記入した地区委員は、被爆以前から永くその地区内に居住し、地域社会における種々の役職などで活躍し、その当日、わが身も被爆しておりながら、救出活動に献身した市民、あるいは危くも被爆から免れた人を、市内の各地区社会福祉協議会長からの推薦によって、広島市が選定委嘱した。

資料表記入のための調査は、当時の状況調査に数般的調査をも併せておこなったが、非常に困難をきわめ、基本的な数字の判明しないものもかなり多くあった。爆心地に近い地区ほど生存者も少なく、関係記録も焼失しており、被爆直後、肉親や縁故者を探しに入市した人々の記憶や推察によるばかりは、記述の手がかりのないこともあった。尚、基町地区は、中国軍管区司令部を中心にした陸軍諸部隊の所在地であり、爆心地にも近く、一挙に壊滅したうえに、被爆につぐ敗戦で、軍の徹底的な解体により、その記録が残らなかったから、他の一般地区と同じような形式の記述ができなかった。従って、被爆中に、その営内にいて助かった人、あるいは直後に乗りこんだ市民の体験記、あるいは既刊の関係図書を軸として取りまとめた。

「各官公庁・事業所・学校・宗教団体・関連市町村」の各資料表は、地区用資料表よりは簡単で、内容を八項目とし、個々の機関に記入を依頼した。中には、中国新聞社・広島中央放送局・広島通信局・広島鉄道局などのように、その機関が発刊した社史や各種の出版物によって、その他の関係資料を渉猟しつつ記述したものもある。なお、東洋工業株式会社及び日本製鋼所広島製作所の二社は、市外であるが重要な役割を果たした工場であるから特に加えた。中国地方総監府・広島県庁(警察部を含む)及び広島市役所は、被爆当時、その職員として活躍した多くの人々の記録や証言、その他関係図書などによって記述した。また、関連市町村は、主として学童疎開先、あるいは医療班・国民義勇隊・警防団など救援隊の出動した地区を選んだ。以上のような方法で作成した原稿は、それぞれの資料表記入者(地区委員及び事業主体)に送付して、校閲を受け、補足訂正のうえ、ご返送を願い、さらに書きあらためて充実を期した。この作業を三度や四度にとどまらず繰り返したが、そのつど、被爆者その他の方々が、わが事のようにして繁雑をいとわずご協力下さり、ようやくここまで漕ぎつけることができたのである。しかし、なお、「広島師範学校」のように、国立(昭和十八年)になったものを、「県立広島師範学校」と誤記しているごとき個所が幾つかあり、深くおわび申しあげる次第である。

原子爆弾の惨禍は、社会の各分野にわたって、あまりにも底深く、幅広く、かつ複雑をきわめているので、この戦災誌のみでは、すべてを書きおこせるものではなく、不明確な個所も多い。今後、さらに調査活動を続け、あたらしい資料を発掘して、不備不明の個所を次々と埋めていく必要があろう。(小堀記)

刊行の経過

年月日*経過説明

昭和三五年二月二日*新修広島市史編集委員会(昭和二十五年設置)において、同市史全七巻の刊行終了後、なるべく速やかに「広島原爆戦災誌」を編集刊行する必要性が話しあわれる。

昭和三七三年三月三〇日*最終の新修広島市史編集委員会において、戦災誌編集事業の大綱が審議される。

同年四月一日*新修広島市史編集委員会の解散後、企画調査室(室長向井一貫)が戦災誌編集を受持つことになり、同室次長森弘助治が基礎資料の収集方法につい

て検討をはじめ。

同年五月＊企画調査室主事平砂唯嗣が編集事務を補助することになり、被爆前後の精密な状況を記入する「広島原爆戦災誌資料表」の作成に着手すると共に、市内を広島市福祉協議会の区割による三六地区(ほぼ学区別と同じ)に分け、各地区に調査担当の地区委員八〇人(主として被爆者)が選定される。後に二人追加する。

同年七月以降＊市内各地区のほか、主要官公庁・事業所・各学校・関連市町村に対して、各部門別の「広

九月まで＊島原爆戦災誌資料表」を送付する。この間、各地区委員に対して説明会を開催、調査協力を依頼する。

同年九月一日＊広島平和記念資料館館長岡省吾の退職こともない、森弘助治が同館長兼務となり、企画調査室と資料館の双方において、編集業務を続行する。

同年一二月七日＊企画調査室主事平砂唯嗣が、広島平和記念資料館主査となり、戦災誌編集に関する一切の業務を、同資料館においておこなうこととなる。主事川本義隆(昭和三八年三月末まで)が、編集業務を補助する。

昭和三八年八月＊各部門別に依頼した前記資料表による回答が思わしくなく、編集作業が渋滞しはじめ、広島市公報、及び報道機関を通じて、一般への協力を呼びかける。

同年一二月九日＊加藤助役・広島大学教授その他一般の有識者の参集を求め、編集方針を検討する。三か年計画で約八〇〇ページ内外のもの一冊にとりまとめることとする。

昭和三九年四月一日＊主事網井正義が資料館勤務、編集業務を補助する。

昭和四〇年四月一日＊編集担当主査平砂唯嗣が、同資料館の庶務担当主任となる。

同年一一月一日＊福利課同和係長小堺古光が、広島平和記念資料館主査となり、戦災誌編集業務を担当する。ただちに資料の収集状況を点検し、編集作業の積極的推進をはかる。

同年一一月一八日＊主事網井正義が転出、主事竹永豊日子が後任にきまり、編集作業を補助する。

昭和四一年二月一日＊島原爆戦災誌の編集目的・編集内容・編集方法などについて、市長(浜井信三)の決裁を得る。

同年二月以降

七月末まで＊各種資料表を精査する。すなわち、既集資料表において、無記入、あるいは不明確で再調査の必要なもの、未回収資料表の記入督促、新規に資料を必要とするものなど、各部門別に分類整備するというそれぞれの作業を進め、執筆準備をおこなう。

同年八月以降＊第二編各説の市内各地区一幡町地区から執筆に入る。主事竹永豊日子が退き、小松清興が後任に決る。四三年七月末までに、一応全原稿を書きおろす。

昭和四三年八月一日＊戦災誌の監修委員として、広島大学教授後藤陽一・同今堀誠二・日本基督教団広島教会牧師四竜一郎を委嘱し、順次に原稿を送付して閲読を受ける。

同年九月以降＊随時、監修委員会を開催し、執筆事項の疑問・不備・追加・削除その他についての指摘により諸事項の再吟味、再調査を行ない、出版予定の巻数・ページ数にこだわることなくひたすら内容の充実につとめる。

これらの作業遂行中に、広島市内は勿論、全国から各種の貴重な資料の提供や情報があり、監修委員の指摘事項以外にも、実に多くの事がらを書きあらため、書き加える。

昭和四四年四月一日＊編集作業の増大こともない、新しく主事笹山昭子が加わり、原稿の浄書、諸資料の整備を進める。小松清興は主として、現地調査の補助、及び、各種の図表・一覧表の作成補助にあたる。

同年八月一日＊第二編各説に、新たに「主要神社・寺院・教会」の一章を加えることにする。また、資料編一卷を加えることにする。

昭和四五年四月一日＊広島平和記念資料館館長森弘助治が退職、後任に広島平和文化センター主幹小倉馨が発令される。

同年九月初め＊各巻の体裁を整え、印刷準備に入る。すなわち当初の編集計画を大きく変え、本論四巻・資料編一卷、計五巻とする。

同年一〇月七日＊最後の監修委員会を開催し、全巻の原稿完成を確認する。掲載写真など細部点検を重ねる。

昭和四六年六月初旬＊印刷所を中本総合印刷株式会社に決定する。発行部数二、七〇〇部。

同年八月六日＊第一巻を刊行

同年九月六日＊第二巻を刊行

同年一〇月六日＊第三巻を刊行

同年一一月六日＊第四巻を刊行

同年一二月八日＊第五巻を刊行

昭和四七年二月下旬＊全五巻を配布

広島原爆戦災誌第五巻資料編

昭和四十六年十二月一日印刷

昭和四十六年十二月八日発行

編集兼発行者広島市役所

広島市国泰寺町一丁目六番三十四号

印刷者中本総合印刷株式会社

広島市大州五丁目一番一号